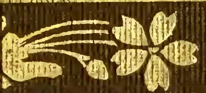
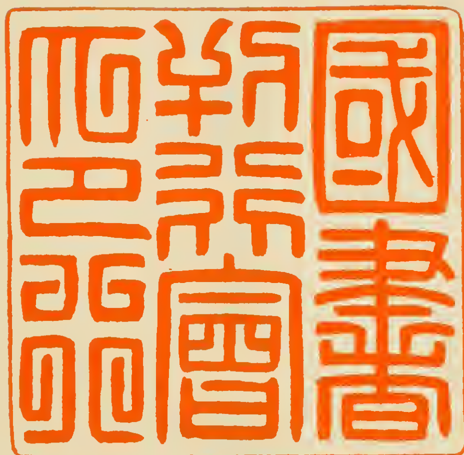


小説上巻



近世文藝叢書　第三



近世文藝叢書第三 小說一

緒言

一、本編には元祿以前の刊行に係る小說十三種四十七卷を收む。後成恩寺殿の烏鷺合戰物語より烏丸光廣卿の仁勢物語田夫物語あるひは竹齋物語等擬古文の作はあれど、あらはに理を說き事を述べては物議を釀す虞れあるより、大かたは戯文戯作にとゞまり、一方繪卷物繪詞等より出たる三浦爲春のあだ物語より七人比丘尼二人びくに四人比丘尼などの類は、無常の有樣をしめして遁世出離佛道の敎に導くのみ。されど此の二つの間より、俗文の小說(浮世草紙の類)生れ、滑稽のうちに諷誡をふくむ小話もあらはれたり。本編一册やゝ其の徑路をたどるべく、小說小話の變遷を察する上に於ても興味少なからざるを信ず。

一、伽婢子十三卷　淺井了意著、寛文六年刊。剪燈新話を我邦の事柄に翻案したると、それに擬して俗間傳ふるところの怪談奇事等を綴りたるもの。惠林寺にて亡魂諸將を評する件および了仙法師貧窮の條など、ことに著者の學と識とを窺ふべきものなり。淺井了意は京都の人、字は子石、靜齋、瓢水子、松雲處士等の號あり。著すところ東海道名所記、武藏鐙、江戸名所記、本朝女鑑、北條九代記、狗張子等世に行はる。

一、恨之介二卷　葛の恨之介といふ者、清水へ詣でて雪の前を見初ることを書きて、關白秀次の愛妾三十餘人の最期のさまなどつまびらかなり。雪の前は木村常陸之助の娘なりといふ。此作當時に行はれて數本ありといふこと、柳亭種彦の考案あり。今は寛永四年板によりてこゝに收む。本文中に慶長九年の年號あり。また北野へ行きて國の歌舞妓を見むといふことあれば慶長年中の

作なるべし。

一、七人比丘尼三卷　寛永十二年の板は文章に多く假名を用ひ、殆んど繪卷物の體裁を具へ、挿畫丹綠を以て彩色せり。天和二年板は懺悔物語と改題し、多く漢字を交へたり。今讀易きを主として天和板を取りて、寛永板を以て對校したり。

一、二人比丘尼二卷　石平道人鈴木正三の作。筋はほとんど九相の詩を其まゝ和譯したるにて、須田彌兵衛妻出家繪詞とも略ぼ相同じ。此書終りに佛道修行の要を說きたり。

一、四人比丘尼三卷　此の書一名花の情ともあり。開板の年代詳かならざれども、其の結構其の文致、ともに元祿以後の作とは思はれざるがゆゑに、比丘尼物の一種として、寶永板に據りてこゝに收む。

一、角田川物語三卷　明曆二年板。謠曲の角田川に趣向を同じうし

て其前後を付けたるもの。近松が雙生隅田川はこれに基づく。

一、一本菊三卷　萬治板。西村開板の一本には、少將くらま物語と題簽したれど、くらまの事は一本菊を得たることだけにて、むしろ清水利生物語ともいふべきものなり。

一、貧人太平記三卷　著者未詳、貞享五年の序あり。大阪饑饉の時、非人乞食の騷動の事を記したる戲文なり。

一、水鳥記三卷　地黃坊樽次著、寛文二年刊。池上にて酒戰ありしことを戲作せしもの。地黃坊樽次は本名を茨木春朔といひて酒井雅樂頭の抱醫師なり。小石川戸崎町祥雲寺に石碑あり。辭世二首を刻す。其の一首、

南無さん寶數多の樽を飮ほして、身はあき樽にかへる古里。

一、あだ物語二卷　三浦爲春著、寛永十七年刊。諸鳥ども鸞姫に戀ひて多くの文をたてまつることの中に、內典外典の古事古語をふ

くみて教化をなし、特に鸞姫最期の樣などは鳥類といふことを忘れて哀れ深し。此書烏丸光廣卿序を添へて仙洞御所の御覽に供へ御賞美を蒙りしものといふ。著者三浦長門守平の爲春は循庵と號し、三浦道寸の後にして、文に武に且つ和歌に秀で、內外の學に通じたる者なりと。

一、薄雪物語二卷　寬永九年板。園部の衞門、淸水にて薄雪を見そめ文を通はすといふ趣は、やゝ恨之介に似たれど、これはたゞ艷書の贈答を旨としたるもの。此書類板多きを以て、其の當時にもてはやされしを知るべし。

一、薄雲物語二卷　作者および開板年月未詳。薄雪物語におもかげ似たれど、これは賀茂明神の利生にて末目出度ことを作れり。

一、他我身の上六卷　山岡元隣著、明曆三年刊。此書隨筆體にて、小說とは云ひがたけれど、元祿以前和らかき物の作者を代表せしめ

んとて、元隣の此作を收めたるなり。

明治四十三年九月

饗庭篁村識

近世文藝叢書第三 小説一

目次

目次終

近世文藝叢書第三

小說 一

伽婢子序

夫聖人は常を說て道を敎へ、德を施して身を整へ、理を明かにして心を修む、天下國家其風に移り、其俗を易る事を宗とし、總て怪力亂神を語らずといへ共、若止ことを得ざるときは、亦述べ著はして則をなせり、爰を以て易には龍の野に戰ふと云ひ、書には鼎の中に雉の鳴くことを誌るし、春秋には亂賊の事を示し、詩には國風鄭風の篇を載て、後世に傳へて明らけき鑑とし給へり、況や佛經には三世因果の理を敎へて、四生流轉の業をいましめ、或は神通或は變化の品々を說給へり、又神道の幽微なる、草木土石に至るまで、皆その神靈あることを誌して、不識の妙理を現はせり、三敎各靈理奇特怪異感應の空しからざる事を敎へて、其道に入らしむる媒とす、聖經賢傳諸史百家の書、已に牛に汗し棟に充といふ、是本朝記述の編、古今筆作の文、何ぞ只五車に積のみならんや、中にも花山法皇の大和物語、宇治大納言の拾遺物語、其外竹取、うつぼの俊景の卷を初めて、怪く奇特の事共を記せる處、手を折て數るに遑あらず、然るに此伽婢子は、遠く古へを取るにあらず、近く聞傳へし事を載せ集めて記しあらはすもの也、學智ある人の目を喜ばしめ、耳をすゝぐ爲にせず、只兒女の聞を驚かし、自ら心を改め、正道に赴く一つの補とせんと也、其目を貴びて耳を信ぜざるは、古人のいやしむ所也、陰陽五行天地の造化は廣大にして測りがたく、幽遠にして知りがたし、時面り見ざるを以て、今聞所を疑ふことなかれと、云爾、

于時寛文六年丙午正月日

瓢水子松雲處士自序

伽婢子序

伽婢子、松雲處士之所レ著也、凡若干卷、槪言二神怪奇異之事一、言辭之藻麗也、吟咏之繁華也、膾二炙人口一者不レ可二勝言一焉、論語說曰、子不レ語二怪神一矣、玆書之作不レ免二懷レ詐欺レ人之謗一乎、云不レ然、厥士之志二于道一者、搜二載籍之崇阿一、涵二禮法之淵源一、擇レ言擇レ行積レ善累レ德、而施二不滅之名一、若夫庸人孺子之不レ知レ讀二詩書一、耳無二博聞之明一、身無二貞直之厚一、虛浮之俗日々以長、偶聞二精微之言一、疾レ首蹙レ額啾々焉退、經典之沈深、載籍之浩瀚、譬如二會レ聾而鼓一レ之、何益之有、伽婢子之爲レ書、言摭二新奇一、義極二淺近一、怪異之驚レ耳、滑稽之說レ人、寐得レ之醒焉、倦得レ之舒焉、是庸人孺子之所二好讀易解一也、如レ言二男女淫奔一則會二深誡一、幽明神怪則欲レ覈レ理、雖レ非二君子達道之事一、願欲レ使二庸孺之鑑戒一而已、

寬文六年龍集丙午正月下澣　雲樵

伽婢子總目錄

第十二卷

第十三卷

總目錄終

伽婢子巻之一

○龍宮の上棟

江州勢多の橋は、東國第一の大橋にして、西東にかゝれり、橋より西の方、北には滋賀辛崎もまのあたりにて、山田矢橋の渡し舟、鹽津海津の、上り舟に帆かけて走るも得ならず見ゆ、南の方は石山寺、夕暮つぐる鐘の音に、山づたひ行く岩間寺も、程近く續きたり、橋より東のかた、北には任那の里、こゝは名におふ蓮の名所にて、六月の中比より咲きみだるゝ、蓮花匂ひは四方に薫じて、見に來る人の心さへ、自ら濁りに浸まぬ樂しみあり、橋の南には田上山の夕日影、鳴送る蟬の聲に、夏は涼しさ勝りけり、後ろは伊勢路に續き、前には湖水の流れながく、鹿飛の瀧より宇治の川瀨に出るといふ、其の北には螢谷とて洞あり、四月の初つかたより、五月の半に至るまで、數百萬斛の螢湧出て、湖水の面に集り、或は鞠の大さ、或は車の輪のごとくかたまり圓がりて、雲路遙かに舞ひあがり、俄に水の上にはたと落、はら〳〵と碎けて水に流る有さま、點々たる柘榴花の五月雨に咲が如くにて、光りさやかに亂たるは、又捨がたき眺め也、されば世の好事の輩、僧俗ともに遊び來て、歌よみ詩つくる、其言葉多く、口につたへ書に記せり、橋の東南のかた湖水の渚にそふて小社あり、むかし俵藤太秀郷、此あたりより龍宮に行て、三上の嶽のむかでを退治し、絹と俵と鍋と鐘とを得て歸る、中にも鐘は三井寺に寄附して、今も其名高く世にのこれり、後柏原院の朝、永正年中に、滋賀郡松本といふ所に、眞上阿祇奈君と云る人あり、もとは禁中に伺公して、文章生の官職にあづかりし人なれども、世の匆劇をいとひて冠を掛て引こもり、此所に跡をとゞめ、心靜かに月日をぞ過されける、或日の夕暮に、布衣に烏帽子着たる者二人來り、庭の前に跪きて、是は水海底の龍宮城より、迎へ奉るべき事ありて參り侍べりといふ、眞上おどろき色を替て、龍宮と人間と道へだたり、境ひ異なり、如何でか行いたるべき、往古は其道ありしと聞つたへしかども、今は絶えて其跡を知らずといふ、使者のいふやう、よき馬に鞍置て門外に繫ぎ置たり、是れにめして赴き給はんには、水漫々として波高くとも、少

しも苦しき事あらじといふ、眞上怪しみながら座を立て、門に出たれば、その長七寸ばかり、太く逞ましき驪の馬に、金覆輪の鞍置、螺鈿の鐙をかけ、白銀の轡をかませて引たて、白丁十餘人はら〳〵と立て、眞上を馬にかきのせ、二人の使者は前にはしり、馬は虛空にあがり飛がごとし、眞上直下と見おろせば、足の下はたゞ雲の浪、煙の波苒々として、其外には何も見へず、暫しの間に宮門に至る、馬より下りて立たり、門をまもる者共は、蝦魚のかしら、螃蟹の甲、辛螺、貝蛤の殼に似たる、甲の緖をしめ、鑓長刀を立ならべ、きびしく番をつとむる、眞上を見て皆跪まづき、頭を地に付けて敬ひつゝしめり、二人の使者内に入て後、しばらく有て、綠衣の官人と思しきもの二人出て、門より內に引てあゆむ、門の上には、含仁門といふ額をかけたり、門に入て半町ばかり行ければ、水精の宮殿あり、階を登りて入ければ、龍王すなはち綵雲の冠をいたゞき、飛雪の劔を帶、笏を正しくして立出つゝ、眞上を延て白玉の床に座をしめたり、眞上大に敬ひ、禮拜して我はこれ大日本國の小臣なり、草木と共に腐はつべき身なり、いかでか神王の威を冐して、上客の禮をうけ奉らんやといふ、龍王のいはく、久しく名を聞て、今尊顏を迎へ侍へり、辭退し給ふに及ばずとて、强て床の上にのぼせ、自ら又七寳の床に上り南にさし向ふて座したり、かゝる所に賓客入來り給ふといふ、龍王又座をくだり、階に出て迎入たりければ、三人の客あり、いづれも氣高きよそほひ、此世の人とも覺えず、玉の冠をいたゞき、錦の袂をかひつくろふて、威儀正しく、七寳の手ぐるまより下りて、靜に殿上にのぼり、床に座したり、眞上は床を退きて、金障の下に隱れうづくまる、已に座定りて、龍王語りけるは、人間世界の文章生を迎へ奉れり、君たちこれを疑ひ給ふなとて、眞上を呼てすゝめしかば、眞上出て禮拜するに、三人の客また拜をいたす、前の玉座に上り給へと云に、眞上辭して曰く、我はこれ一个の小臣也、いやしきが貴族に對して床にのぼらん事恐れありと、三人の客おなじく曰く、誠に人界と龍城と其境隔ちて、通路絕えたれども、神王已に人間をかんが見る事明らけし、君これたゞ人ならんや、こゝに請じ奉れり、何ぞ辭するに及ばん、早く床に座し給へと、眞上すなはち床に座す、龍王かたりけるは、朕此程新に

一つの宮殿をかまへ造る、木工頭番匠の司あつまり、玉のいしずゑを据へ、虹の梁り、雲のむなぎ、文の柱、皆具はりもとめしかども、只乏しきものは、上梁の文祝拜のことば也、ほのかに聞き傳ふ、眞上の阿祇奈君は、學智道德の名かくれなし、此故に遠く招きて請じ奉る、幸に朕が爲に一篇を書て給といふに、二人の童子十二三許りなるが、髮からわにあげて、一人は碧玉の硯に、湘竹の管に文犀の毛さしたる筆取そへ、神藜の灰に、紅藍麝臍を和したる墨すり湛えてさゝげ、一人は鮫人の絹一丈を持て、眞上にすゝむ、阿祇奈君辭するに言葉なく、筆をそめて書たり、

天地の間に蒼海を最大なりとし、生物のなかには龍神を殊に靈とす、已に世を潤すの功あり、いかでか、福をのぶるの惠なからんや、この故に、香をたき燈をかゝげて、依いのる、飛龍は大なる人をみるに利ことあり、又もちひて不測の迹に象れり、維歲次今月今日新に玉の殿をかまへ昭けく精しき華を營めり、水晶珊瑚のはしらを立、琥珀琅玕の梁を掛、珠の簾を捲ぬれば、山の雲靑くうつり、玉の戸を開けば、洞の霞白くめぐる、天高く地厚ふして、南溟八千里をしづめ、雨順風調て北の渚五百淵をおさむ、空にあがり泉に下りては、蒼生の望を協へ、形を現はし身を隱しては、上帝の仁を祐く、其の威ひ古今にわたり、其の德磧礫に曁ぼす、玄龜赤鯉をどりて祝ひ、木魅山魈あつまりて賀ぶ、こゝに歌一曲を作りて、雕ばめたる梁のうへに揭す、

扶桑海淵落二瑤宮一　水族駢蹎承二德化一
萬籟唱和慶贊歌　若神河伯朝宗駕

世はひさかたのつきじとをしる
おさまれるみちぞしるけき龍の宮の

伏てねがはくは、上棟の後、百の福ひ共に臻り、千の喜ひ偏く來り、瑤の宮安くをだやかにして、滇海平けく治り、天つ空の月日に齊しく其の限有べからず、

と書て奉る、龍王大に悅び、三人の客に見せしむるに、皆感じて褒たり、則ち上梁の宴を開きて曰、阿祇奈君は人間にありて、未だ終に知り給はじ、一人は江の神、一人は河の神、一人は淵の神なり、君と友となり、今日の遊びには更に心をとけ給へ、何か憚ること

あらんとて、杯をめぐらし酒を勸む、二十ばかりの女房十餘人を出し、雪の袖を飜し歌ひ舞ふ、其の面かたち世に未だ見ず、艶麗く窈窕にして、玉の釵に花を飾り、白き羅に袖つけて歌ふ聲、雲に響きつゝ、少時舞て退きければ、又びんづら結ひたる童子十餘人、其うつくしさ雛の如くなるが、ぬひのひたゝれに錦の袴を着て、花をかざし立ちめぐりて袂を翻す、歌の聲すみのぼり、梁の塵や飛ぬらん、糸竹の音に和して面白さ限りなし、舞已に終ければ、主の龍王よろこびに餘り、爵を洗ひ銚子を更め、阿祇奈君が前に置、みづから玉の笛を吹鳴らし、嶰谷吟を歌ひて後、其座に有ける者共まかり出て、客の爲に戯れの藝を盡せとあり、畏りて出たる人、みづから郭介子と名のる、これ蟹の精也、其うたひける詞に

我は谷かげ岩まに隱れ、桂の實のる秋になれば、月清く風涼しきに催され、河に轉ろび海に泳ぐ、腹には黃を含み、外はまどかにいと堅く、二の眼空に望み、八つの足またがり、其形は乙女の笑を求め、其味は兵の顏せを喜ばし、甲をまとひ戈を取り、沫を噴き瞳を廻らし、無腸公子の名を施し、つな手の舞を舞けらし、

とて、前に進み後に退き、右に馳り左に走りければ、其の類の者拍子をとる、座中笑壺に入りて笑ひにぎはふ、其次に玄先生と名のりて馳出つゝ、袖を飜し拍子をとり、尾をのべ頸を動かす、是龜の精也、其歌ひける詞に

我はこれ蓍の草村に隱れ、蓮の葉に遊び、書を負て水に浮び、網をかうぶりて夢をしめす、殼は人の兆を現はし、胸に士の氣を含む、世の寶となり道の敎へをなす、六の藏して伏し千年の壽を保つ、氣を吐けば糸筋のごとく、尾を曳て樂を極む、青海の舞を舞ふべし、

と頭を動かし頸を縮め、目をまじろき足をあげ、暫しかなでゝ引入りければ、滿座の聾聲をあげ腹をさゝげ、おき伏て笑ひどよみ、興を催す、其外蝦蜊木玉山びこ、よろづの魚、をのれ／＼が能をあらはし藝を盡くす、已に酒酣はにして醉に和しつゝ、三神の客座を立、拜謝して歸しかば、主の龍王階のもと迄送られたり、眞上袖かきおさめて、樂しみは玆に極めぬ、願はくは龍宮城の有樣あまねく見せたまへと望みしに、

いと易き事とて、階を下り庭に出て歩せらるゝに、雲閉て何も見えず、龍王則ち吹雲の官人を召されたり、其姿、首に七曲の甲を着し、鼻高く口大なるもの、これ蜃の精なるべし、口をしゞめて天に向ひ吹ければ、世界ひろく平かに山もなく岩もなし、霧雲數十里晴れ開け、玉の樹庭に列ねうへ、金のいさごを敷渡し、梢に五色の花開け、池には四色の蓮咲て、匂ひ又細かなり、廻れば金の廊あり、庭には瑠璃の礫をしきたり、官人を差副へ見せしめらる、一つの樓閣あり、玻璃水晶にて造り立、珠を彫ばめて飾りたり、是に登れば虚空を凌ぐ心地して、一の重には上り得ず、こゝは下輩凡人の登る事協はず、神通のものこそ行至れと、それより又一の樓臺に登れば、側に圓き鏡の如くなる者あり、きら〳〵と光りかゞやき、睛をくるめかして立向ひ難し、官人云樣、これは電母の鏡とて、少し動せば大なる電出て、世の人の目を奪ふといふ、又かたはらに太鼓あり、大小數多し、眞上これを打てみんとす、官人とゞめて云やう、若强くうち鳴らせば、人間界の山川谷平地震鳴はためき、人みな膽を失ひ命を亡し、死なずとも耳を失はん、これは雷公のつづみ也と云、又傍らに槖籥の如くなるものあり、眞上これを動かさんとす、官人又とゞめて云やう、是は哨風の革嚢なり、これを強く動さば、山くづれ岩石飛て空にあがり、人の家は皆吹破られて、四方に散亂れんといふ、その傍に水瓶あり、箒のごとくなる物を上にのせたり、眞上是をとり、水に差入て打ふらんとす、官人をし留めて、是は洪雨の瓶なり、此箒に浸して强く打ふらば、人間世界は大雨洪水押し流れ、山もひたり、陸は海に成ならんと云、阿祇奈君問けるやう、扨これらを司る、官人はいづくにあるやと、答て云やう、雷公電母風伯雨師は、極めて物あらき輩なれば、常には獄に押籠められ、心の儘に振舞ふ事かなはず、若し出して其役を勤むる時は、此所に集り、雨風いかづち電みな分量ある事にて、それより過ぬれば、科に行はれ侍べる、凡そあらゆる宮殿樓閣は、見盡す事協はず、それより立歸れば、龍王さま〴〵もてなし、瑠璃の盆に眞珠二顆、氷の絹二疋を歸るさの餞とし、禮儀あつく龍王階に送り出て、官人に仰せて送り返さる、あきな君目をふさげば、空をかける心地して、勢多の橋の東なる龍王の祉の前にいでたり、珠と絹を

持て歸り寳とす、其後名を隱し、道を行ひ其終る所を知らず、

○黄金百兩

河内國平野と云所に、文(あやの)兵次とて有德人あり、しかも心ざし情ある者也、同じ里に由利源內とて、生才覺(なまさいかく)の男、兵次と親しき友だち也、松永長慶に召抱へられ代官になり、老母妻子共に、大和國に引越けり、其まかなひに詰り、兵次に黄金百兩を借る、固より親き友なれば、借狀質物にも及ばず、玆に此比、細川三好の兩家不和にして、河內津の國わたり騷動す、兵次は一跡殘らず亂妨せられ、一日を送る力もなし、弘治年中、暫らく物靜に成ければ、三好は京都にあり、其家老松永は和州に城を構へ、大に民百姓を貪る、去ほどに兵次は妻子をつれて和州に行き、源內を尋ぬるに、松永が家にして權威高く、家の內賑々し、兵次は衰へて形ちかじけ、面變りしたり、其の近きあたりに宿かりて妻子を置き、我身ばかり源內に逢ひてかう〳〵といふ、源內初めは忘れたりけるが、故鄕名字こま〴〵と聞て誠にと驚き、酒進めて飮ませながら、借金の事は一言もいはず、兵次も云ふべき序なく立歸る、妻云やう是まで流浪して來るも、源內が惠あるべきかと思ふに、僅の酒飮たるとて、百兩の金に替て一言をも云はずして歸る事やある、斯の如くならば、我々は頓て道の傍に飢て死すべしといふ、兵次これを聞に、理りに過て覺へしかば、夜明るを待かね、又源內がもとに行たれば、源內出て對面して、誠に其かみ金子を借たる事今も忘れず、其の恩をおろそかに思はんや、其時の手形あらば持來り給へ、數の限り返し參らせむといふ、兵次答て云やうは、同じ里に親しき友と、互に住たる契り淺からねば、手形質物にも及ばず借し奉りし金子なり、今我劫盜の爲に一跡を奪ひ取られ、身のたゝずみなき故に、如何にも此金子を給はらば、然るべき商買をもいたして、妻子を養ひ侍らばやと思ふなり、只今我を取り立るよとおぼして、右の金子を惠み返し給へといふ、源內打笑ひ、手形なくしては算用なり難し、されども思ひ出さば、數の如く返し侍らんとて兵次を歸らせたり、かくて半年ばかりを經て極月になりぬ、古年をば送りげれ共、新しき春を迎ゆべき手だてなし、食乏しく衣うすければ、妻子は飢凍えて、只泣より外の事なし、兵次これを見るに堪がた

くて、源内が許に行至り、泪を流して云やう、年已に推つまり、新春は近きにあれ共、妻子は飢凍えて又一錢の貯へなく、炊て食すべき米もなし、假令借し奉りし金子皆返し給はらずとも、年を迎ゆるほどの妻子のたすけをなし給はゞ、是に過たる惠みはあらじといふ、源内うち聞て、誠に痛はしく思ふといへども、我さへ僅の知行なれば、今皆返し參らせむ事は叶ふべからず、明日まづ米二石錢二貫文を奉らん、是にて兎も角も年とり給へといふ、兵次大に悦び我家に歸り、明日必ず惠つかはされん、待まうけて此程のわびしさを慰まんと云に、妻子限りなく嬉しと思ひ、夜の明るを遲しと、其子を門に出して、錢米を持て來る人あらば、こゝぞと敎よとて待せ置、須臾ありて内に走り入て云やう、米を負たる人こそ來れと、急ぎ出て見れば、其家の門は見向きもせずして打過る、もし家を忘れて打通るかと思ひ、其米は文兵次の家に給はるにてはなきかと問へば、いや是は城の内より肴の代に遣はさるゝ米也といふ、又しばし有て、其子走り入て、只今錢をかたげたる人こそ來れと、兵次かけ出て見るに、その門口をば空知らずして打通る、是も家を知らざるかとて引留めて、此錢は由利源内殿より、兵次が許へ遣はさるゝにやと問ば、是は弓削三郎殿より矢括(やはぎ)の代物に送らるゝとて過行けば、兵次耻しき事云ばかりなし、正月まかなひの用意とて、錢米持運ぶ事急がはしきを、引留め〳〵尋問に、いづれも源内がもとより出る錢米ならで、一日のうち待暮し、漸々人影も見えざりければ内に入ぬ、油もなければ燈火たつべき樣もなく、いとゞ闇き一間の内に、妻子打向ひ、今は賴もしき事もなし、米薪を求むべき便りもなければ、夜もすがら寢もせず泣きあかす、兵次いよいよ堪かね、口惜しき事かな、さしも堅く契約しながら、我を欺けることよ、唯源内を指殺して此の鬱忿を晴らさんと思ひ、夜もすがら刀を研ぎ、源内が門に忍び居たりしが、又思ひ返すやう、源内こそ我に不義を致しけれ、また源内が老母妻子には何の咎もなし、今源内を殺さば、家忽ちに滅して、科もなき老母妻子は路頭に立べし、人こそ我に不義ありとも、我は人をば倒さじものを、天道まこと有らば、我に惠もあるべきものをと、思ひ直して家に立歸り、兎角して小袖刀賣しろなして、正月元三のいとなみはいたしぬ、かく

て兵次或朝、家を出て泊瀨の觀音に詣うで、行末ふかく禱り申て、山の奥に分け入しが、覺へずひとつの池の邊りに到り、誤ちて池の中に落ちたりしに、其水兩方に別れて道あり、道をつたふて二町許行きければ、城の總門にいたる、樓門の上に淸性舘と云ふ額をかけたり、內に入て見れば、人氣もなく物靜かにて、幾年經たりとも知られぬ、古木の松枝を交はして、生並べり、廊下をめぐりて奥の方にいたり、御殿の階にのぞめども人も見えず、とがむる者もなし、只鐘の聲遙に、振鈴の響に和して聞えたる斗り也、兵次餘りに飢つかれて、石礎を枕として臥て休み居たり、かゝる所に眉鬚長く生のび、頭には帽子かづき、足には靴をはき、手に白木の杖をつきたる老翁來りて、兵次を見て打笑ひ、如何に久しく對面せざりしや、昔の事ども覺えたるかといふ、兵次起あがり跪きて、我更に此所に來れる事は今ぞ初めなる、如何でか昔の事とて知べき道侍らんといふ、老翁聞て、げにも汝は飢渴の火に焼かれて、昔を忘れたるも理也とて、懷より梨と棗とを取出して食はしめたるに、兵次胸凉しく心さはやかに、雲霧の霽れ行空に、月の出るがごとく、迷ひの暗みな除りて過去の事共、猶きのふの如く覺えたり、老翁の曰、汝昔過去の時、初瀨の近鄕を領せし人なり、觀音を信じて花香燈明をそなへ、常に歩みを運びしかども、只百姓を貪り、賦歛を重く課役を茂くして、人の愁を知らず、此の故に死して惡趣に落つべかりし處に、觀音の大悲を以て、惡を轉じて二度此の人間に返し給へり、暫く富貴を極めしかども、昔の業感に因りて、今かく貧しくなれり、然るを汝源內が不義を恣りて、一念の惡心を起せしかば、惡鬼たちまちに汝が後に隨ひ、妻子一家跡なく滅ぶべかりしを、又忽ちに心を改めしかば、神明已に是を知ろし召、福神これに立添ひて、惡鬼は遠く逃去ぬ、すべて惡業善事其報ひ有事は形に影のしたがひ、聲の響に應ずるが如し、今より後も苟且の事といふとも、惡を愼しみ善を求むべし、然らば必らず、安樂の地に一生を送らんと敎へられたり、兵次さては此所は人界にあらず、神聖の住所なりと思ひつけて、事の因みに當世の事をさして問ひけるやう、今世の中絲の亂れのごとくにして、諸方に側ち起る者蜂の如し、何れか榮え何れか衰へん、願くは其の行先を示し給へといふ、老翁

答へられけるは、人の心更に豺狼の如く、彼を殺して我立ち、餘所を打て己に合はせんとす、此の故に王法ひすろぎ朝威衰へ、三綱五常の道斷えて、五畿七道互に爭ひ、國々亂れざる所なし、臣としては君を謀り、君としては臣を叛け、或は父子の間と雖も快からず、兄弟忽ちに敵となり、運つよく利に乘る時は、卑きが高くあがり、小身なるが大にはびこり、運衰へ勢盡ては、大家高位もをし倒され、聟を殺し子を殺せば、一家一族のわりなきも、只危きにのみ心を碎きて、安き暇更になしとて、當時諸國の名ある輩、其れ彼れと指を折り、其身の善惡と行末の盛衰を、鏡に懸て語られたり、兵次重ねて云やう、由利源内今すでに人の債を返さず、己威を保ち勢に誇る、此の者とても行末久しかるべしやと、老翁の曰、源内が主君まづ大なる不義を行ひ、權威よこしまに振ふて、民を虐げ世を貪る、冥衆是を疎み、神靈これを惡み、福壽の籍を削られて、其身桎械にかゝり、其首に縲紲の縄をかけて肉を腐し、骨を散されん事何ぞ遠からん、源内又是に隨ひ、惡逆無道なる事譬ふるに言葉なし、人の債を返さゞる、彼が財物は皆これ他の寶也、己いたづらに守護するのみ、今見よ三年を出ずして家運盡きて、災來るべし、汝必ず其の災を恐るべし、源内が家近く住せば惡かりなむ、京都も靜なるべからず、早く歸りて山科の奥、笠取の谷に移り行けとて、黄金十兩を與へ、道筋を敎へて出し返す、一里餘りを行かとおぼへて、山の後なる、岩穴より出づることを得たれば、家を出でゝより三十日に及ぶといふ、妻子待受けて喜ぶ事かぎりなし、やがて縁を求め、山科の奥笠取の谷に引こもり、商人となり薪を出し賣て、世を渡る業とす、家やう〳〵心安く、妻子も緩やかなる心地す、其の後永祿庚午の年、松永反逆の事ありて、織田家のために家門滅却せらる、由利源内此時に生捕られて殺され、日比非道に貪り貯へし財寶、みな敵軍の得物となれり、是を聞傳へて年月を數ふれば、僅に三年に及べり、兵次は今も其末殘りて住みけりといふ、

伽婢子巻之一 終

伽婢子卷之二

○十津川の仙境

和泉の堺に藥種を商ふ者あり、其の名を長次といふ、久しく瘡毒を憂へて紀州十津川に湯治しけり、病に相當せしにや、十四五日の間に平復し侍り、長次或日思ふやう、年ごろ聞傳へし、十津川の温泉の奥には、人參黃精と云もの生出て、尋ねあたれば多く有りと云、此慰みに近き所を捜し見ばやと思ひ、僕をば宿に留め、唯一人山深く入しかば、道に踏迷へり、一つの谷に下りて見れば、美くしき籠の流れ出ければ、此水上に人里ありと思ひ、水に隨ふてのぼるに、日は已に暮かゝり、鳥の音かすかに塒を爭ふ、斯て十町ばかり行かと覺えし、岩を切拔たる門に到り、內に入りて見れば、茅葺の家五六十許り軒を並べて立たり、家々のありさま、石垣苔生いて壁碧をなし、竹の折戶物淋しく、蔦かづら冠木をかざる、犬ほえて砌をめぐり、鷄鳴て屋にのぼる、桑の枝茂り、麻の葉おほひ、誠に住ならしたる村里也、樵りつみける椎柴、舂つきてほす粟粳、さすがに寂しからずぞ見えたる、人の形勢古風ありて、素襖袴に烏帽子着て、行還しづかに威儀みだりならず、長次が立やすらひたる姿を見て、大に怪み驚きて問ひけるやう、如何なる人なれば、此里にさまよひ來れる、世の常にして知るべき所にあらずと云、長次有の儘に語る、こゝに一人の老人衣冠正しきが、蓬の沓をはき藜の杖をつきて、みづから三位中將と名のり、長次に向ひて曰、こゝは山深く岩ほ峙ち、熊猨むらがり走り、狐木玉の遊所にして、日は暮たり、此儘打捨なば、是ぞ水に溺れたるを見ながら、援はざるにおなじかるべし、此方へおはせよ宿かし侍らんとて、家に連れて歸りぬ、內の體きたなからず、めし使はるゝ男女更にみだりならず、旣に一間の所に呼びすへ、燈をかゝげ座定りて後に、長次問けるやう、此所は有とも知らぬ村里也、如何に住そめ給ひしやらんと云、あるじ眉をひそめて、是は浮世の難を逃れし人の隱れて住所なり、若し强て其かみの事を語らば、徒らに愁を催す媒ならんといふ、長次强ちに其住初し故を問に、あるじ語りけるは、我は平家沒落して西海の浪に沈みける比より、此所に住初たり、我

は是小松の內府重盛公の嫡子三位中將維盛と云ひし者也、祖父大相國淸盛入道は、惡行重疊して人望に反き、父內府は世を早うし給ひ、伯父宗盛公世を取て、非道不義なる事法に過ぎたり、一門の輩多くは皆奢りを極め榮花にほこり、家運忽に傾き、東國には兵衞の佐賴朝、譜代の家人を催して義兵をあげ、北國には木曾の冠者義仲、一族郞等を勸めて謀反す、其の外諸國の源氏、蜂の如く起り蟻の如くに集りけるを、玆に走向ひかしこに責寄するに、更に軍の利なく、味方の軍兵たび〳〵に打れて、終に木曾がために都を追落され、攝津國一の谷に籠り、暫く心も安かりしに、九郞義經の爲に爰をも破られ、一門の中に、通盛敦盛以下多く亡び給ひ、目の當り魂を消し胸をひやし、憂目を見聞くかなしさ、生をかゆる共忘るべき事かや、とかくする程に、讃岐國八島の洲崎に城郭を構へ、一門の人々栖籠りしかば、故鄕は雲井の餘所に隔り、思は妻子の名殘に止まり、身は八島に在りながら、心は都に通ひければ、萬につけてあぢきなく、行末とても賴みなしと、浮れ果たる心より思ひ立て、譜代の侍與三兵衞重景石童丸といふ童、武里といふ舍人は、舟に心得たる者なれば、此三人を召具して忍びて八島の內裏を出て、阿波の由木の浦につきて、

おり〳〵はしらぬうらぢのもしほ草
かきをく跡をかたみともみよ

重景返しとおぼしくて、

我おもひ空ふく風にたぐふらし
かたぶく月にうつる夕ぐれ

石童丸淚ををさへて、

玉ぼこの道ゆきかねてのる舟に
心はいとゞあこがれにけり

それより紀伊國和歌吹上の浦を打過て、由良の湊より舟を下りて、戀しき都をながめやり、高野山に詣で、瀧口時賴入道に逢て案內せさせ、院々谷々おがみめぐり、是より熊野に參詣すべしとて三藤のわたり、藤代より和歌の浦吹上の濱、古木の杜蕪坂千里の濱のあたり近く、岩代の王子を打越え岩田川にて垢離をとりて、

岩田川ちかひの舟にさほさして
しづむ我身もうかびぬるかな

それより本宮にまうでつゝ、新宮那智殘りなく巡り

て、濱の宮より舟に乗り、磯の松の木を削りて、

權亮三位中將平維盛戰場を出て、那智の浦に入水す、元暦元年三月廿八日、維盛廿七歲、重景同年、石童丸十八歲、

生れてはつゐに死てふ言のみぞ

定なき世にさだめありける

と書て世には入水と知らせけれども、今此山中に隱れしかば、肥後守貞能跡をもとめて尋ね來れり、平氏の一門沒落して、皆ことごとく壇の浦にて水中に入給ふ、都に隱れし平氏の一類も、根を斷ち葉を枯らしけりと、貞能語り侍るにぞ、よくこそ逃れけれと、哀しき中に心を慰め、田を植へ薪採り、みづから淸風朗月に心を澄まし、物靜かにして魂をやしなふ、人里絕えて音づれもなし、花の咲くを春と思ひ、木の葉の散るを秋と知り、月の出るを數へ盡して、月なき時を晦とあかし暮らす身となり侍べり、貞能重景石童丸が子孫ひろがりて、家居を並べて住ける也、定て賴朝世を取ぬらん、今はこれ誰の世ぞ、願くは物語せよとあり、長次大に驚き恐れ、只苟且の山住、世の常の事にこそ思ひ奉りしに、かゝる止事なき御身とは、露も思ひよらざりけりとて、首を地につけ、禮義をいたす、三位中將いやとよ、今は然るべからず、それそれとの給ふに、貞能重景石童丸立出たり、何れも其年六十許に見えたるが、貞能云ふやう迚も打とけ給ひたる御事也、其世の移り變りし事共、語りて聞せ給へと也、長次居直りて、さらばあらあら聞傳へし事語り侍らむ、扨も平氏の一門西海の波に沈み給ひ、兵衞佐賴朝天下を治め、幾許もなく病死し給ふ、蒲冠者範賴九郎判官義經みな賴朝に打れ、賴朝の子息賴家世をとり子なくして病死あり、賴朝の二男賴家の舍弟跡を治め給ふ、賴家の妾の腹に子あるよし聞傳へて、尋出して鶴岡の別當になさる、禪師公曉と號す、和田畠山梶原等が一族此君の時打亡さる、實朝卿鶴岡社參の夜、彼の禪師の公實朝を殺す、北條義時其の跡を奪ひて天下の權をとる、是より九代にいたり、相摸守高時入道宗鑑、大に奢りて國亂れ、新田義貞鎌倉を亡す、足利尊氏と新田と戰あり、足利つゐに義貞を亡し、其子息義詮を京の公方と定め、二男左馬頭基氏を鎌倉の公方と定め、天下暫く靜なりしか共、王道は地に落て有か無かの有さま也、武家世をとりて權威た

かし、後に京都鎌倉の公方不會になりて、鎌倉の執權上杉の一族、公方を追おとす、此時に當りて京都の公方も權威を失なひ、諸國の武士互にそばだち、天下大に亂れて合戰止む時なし、三好修理大夫其家人松永彈正は畿内南海に逆威を震ひ、今川義元は駿河遠州を順へ、國司源具敎は勢州にあり、武田晴信甲信兩國にはびこり、北條氏康は關八州に跨り、佐竹義重は常陸にあり、蘆名盛高は會津を領し、長尾景虎は越後より押出る、朝倉義景越前を守り、畠山が一族は河内にあり、陶尾張守は周防長門を押領し、毛利元就安藝に起り、尼子義久は出雲隱岐石見伯耆にひろごり、豐後に大友肥前に龍造寺、其外江州に淺井佐々木、尾州に織田、濃州に齋藤、大和に筒井、其外諸國郡邑の間に黨を立て兵を集め、互に村里を爭ふて、攻戰ひ奪ひとる、古へ安德天皇西海に赴き給ひし、壽永二年癸卯より、今弘治二年丙辰の歲まで、星霜三百七十四年、天子已に二十六代、鎌倉は賴朝より三代、北條家九代、足利家十二代、京都の足利今已に十三代、新將軍源義輝公と申す也と語りしかば、三位中將是を聞き給ひて、不覺の淚を流し給ふ、夜已に更けゆけば、山の中物寂かに、梢を傳ふ風の音軒近く聞えて、長次が魂清みわたり、凉しく覺えたり、主さま〴〵酒を進めらる、夜已に明て、山の端明かく橫雲たな引て、鳥の聲定かになれば、長次今は是までなりとて拜禮つゝしみて立出れば、あるじの給はく、我ら更に仙人にもあらず、幽靈にもあらず、多の年を重ねし事思はざる外の幸ひなり、汝歸りて世に語る事なかれとて、

みやまべの月は昔の月ながら　はるかにかはる人の世の中

とよみて、別をとり內に入給へば、長次は切通しの門を出て、一町ばかりに一所づゝ、竹の杖をさして記(しるし)とし、十津川の宿に歸る事を得て、來年の春酒肴とゝのへつゝ、又かの山路に分入て尋ぬるに、唯古松老槐に橫たはり、岩ほ峙ち茅薄しげり、樵の通ふ處鳥の聲幽かに、草刈の行く處谷の水流れ、記の竹も見えねば、尋わびつゝ歸る、そも〳〵是は仙境の道人なりけん、其たぐひ知りがたし、

○眞紅擊帶(しんくのうちおび)

越前敦賀の津に、濱田長八とて有德の人ありて、二人の娘を持ちたり、其隣に若林長門守が一族、檜垣平太

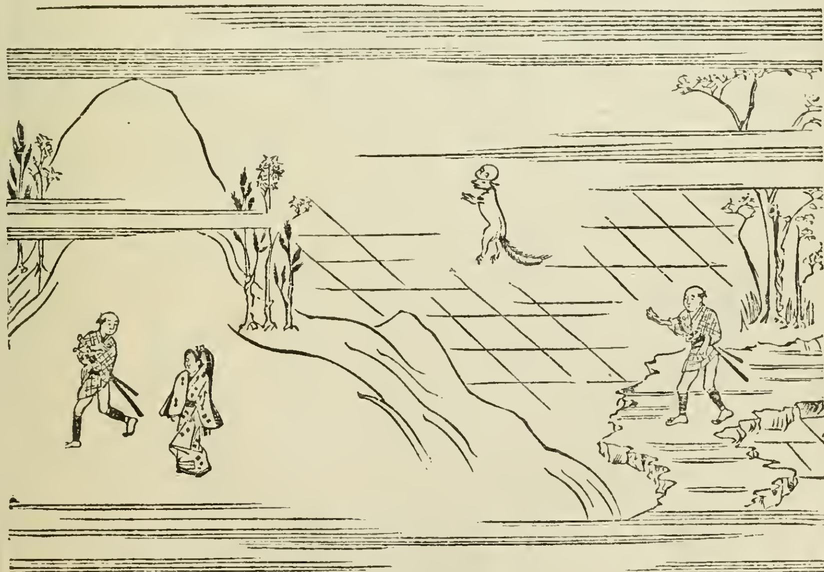
と云者、武門を離れ商人となり、金銀ゆたかに持て住侍べり、是に一人の子あり、平次と名付く、長八が娘と同じ年比にて、幼けなき時は常に出合ひて遊びけり、平太則ち長八が姉娘を我子の妻とすべきよし、媒を以ていはせければ、やがて受けごひけり、さらば其印にとて、酒肴とゝのへ、眞紅の鞶帶一つ娘にとらせたり、天正三年の秋朝倉が餘黨起り出て、虎杖、木芽峠、鉢伏、火燧、吸津、龍門寺、諸方の要害に栖籠る、其中に若林長門守は河野の新城に籠りしかば、信長信忠父子八萬餘騎を率して、敦賀に着陣あり、木下藤吉郎に仰せて、河野の城を取圍せらる、檜垣平太は若林が一門なれば、敦賀に在りて尤められむ事をおそれ、一家を開きて、所縁につきて京都にのぼり、五年まで留りつゝ、其間に敦賀の方へは風の便りもなし、長八が娘は年已に十九になり、容顏うつくしかりければ、人皆これを求むれ共、娘更に聞入れず、自ら幼き時より一度平次に約束して、今假令ひ捨てられたり共、又こと夫を設くべきや、その上平次若し生て歸來らば、誠に耻かしき事なるべしとて、朝夕深く引籠り居たりけるが、平次が行方の戀しさ、露忘るゝ隙なく、唯假初の手すさみにも、其人の事のみあらまされて、人しれぬ物思ひに涙を流す斗也、遂に思ひくづをれて病の床に臥し、半年餘りの後終に空しく成りければ、二人の親大に歎き悲しみつゝ、小鹽といふ所の寺に埋みけり、母その娘の額をなで、平次がつかはしける眞紅の帶を取出し、是は汝の夫のとらせたる帶ぞや、跡に留めて何にかせむ、黃泉までも見よかしとて、空しき娘が腰に結びて送り埋みけり、三十日あまりの後、平次則ち來りぬ、長八是を呼入れて、如何にと問へば、答へていふやう若林長門守が河野の新城に栖籠りしかば、信長公八萬餘騎にて此敦賀に着陣あり、もし若林が一族なりとて尋ねいましめられん事を恐れて、取物も取り敢ず京都に上り、所縁につきて暫く住居せし所に、打續きて二人の親空しくなりければ、往昔の契約忘れ難くて、玆に歸り來れりといふ、濱田夫婦涙を流して云ふやう、姉娘は其比よりそこの御事を思ひ憧れ、病を受けて去ぬる月の初めつかた、終に空しくなり侍べり、久しく便りのなかりつる事を、さこそ恨み思ひけむ、これ見給へ硯の蓋に書置たりとて、泣々取出して平次に見せたり、その

歌に、

せめてやは香をだににほへ梅の花
　しらぬ山路のおくにさくとも

平次是を見るに、我身のつらさ今更に思ひ知られて、悲しき事かぎりなし、佛持堂に詣り、位牌の前に花香たむけ、念佛唱ふれば、二人の親後ろに來りつゝ、是こそ汝が戀ける平次の手向なれ、よく〳〵受よとて、伏し轉び悲しみ歎ぎければ、平次を初めて家にゐる人、皆一同に聲をそろへてなきけるも哀れなり、濱田夫婦云やう、今は父母も在せねば、獨身と成て心細かるらむ、今姉娘の死したればとて、餘所にやは見るべき、同じくは此の家おはして、兎もかうも身の業をいとなみ給へとて、家の後に住所しつらひて留め置たり、かくて四十九日の中陰取行ひ、家擧りて小鹽の墓に詣うでつゝ、平次をば留主せさす、下向のとき、日已にたそがれに及びて、平次は門に出むかふ、皆各内に入たりけるに、妹娘今年十六歲なるが、乘物の内より何やらむおとしけり、平次竊かに拾ふて見れば、眞紅の帶也、ふかく納めて内に入つゝ、我住かたに歸り、燈火のもとに物思ひつゞけて獨坐し居たり、夜更け人靜まりて後ち、妻戸を音づるゝもの有、戸を開きて見れば妹娘なり、其儘内に入て囁きいふやう、みづから姉に後れて歎きに沈めり、向に眞紅の帶を投しを、君拾ひ給ふや、深き宿世忘れ難くして、是まで忍びて參り侍べり、契りを結びて偕老の語ひを成さんと云、平次聞て驚きいふやう、ゆめ〳〵有べき事共覺えず、御父母のなさけ有て我を養ひ給ふだに有を、許されもなくして正なき事を行ひ、もし洩れなん後をば如何せむ、疾々歸りたまへといふ、妹大に怨み怒りて云やう、我父已に聟の思ひをなし、此家に養へり、みづから爰に來れる心ざしを空しくなし給はば、身を投て死なんに、必ず後の悔みをなし、生を代へても怨み參らせむといふ、平次力なく其心に隨ひけり、曉になりて妹は起て去にけり、それよりは只管に暮に來りて朝に歸る、よひ〳〵ごとの關守を恨むる斗り、打解けて別なく契りけり、三十日ばかりの後、或夜又來りて平次に語るやう、今迄は人更に知らず、されども事は洩れ易ければ、もし顯れて憂き目をや見ん、君我をつれて、垣を越えて跡をくらましたまへ、心安く階老を契らんといふ、平次も此上はわりな

き情の捨難くして、打連て忍び出つゝ、三國の湊に被官の者ありける、それが許に行て、かう〳〵と名のり頼む由いひければ、かひ〴〵しく受け入れて一年許り隱れ住み侍り、女或時いふやう、父母のいましめの恐ろしさに君とつれて、こゝに逃げ來りけれ、已に一年の月日を過したれば、二人の親さこそ自らを思ひ給ふらめ、今は如何にも罪兗るし給はん、いざや古鄕に歸らんといふ、平次此上はとて、連て敦賀に歸り、まづ女をば舟に置きて、我身ばかり濱田が家に至り、案內して對面を遂げて云やう、さても我さしも撫恤おぼしけるを、御ゆるされもなく、まさなきわざして不義の名を蒙りし事、其の罪輕からずと雖も、すでに年を重ねぬれば、今は怒りも緩くなり給はん、此の故に是迄つれて歸り侍べり、罪ゆるし給はんやといふ、濱田聞てそれは如何なる御事ぞ、更に心得がたしといふ、平次有の儘に語りて、眞紅の帶を取出してみせたり、其時濱田大に驚き、此帶は其かみ姉に約束せし時に給はりし物也、姉空しくなりければ、棺に納めて埋み侍べり、又妹は病おもく床に臥てあり、君とつれて他國へ行べき事なしとて、舟にとゞめ置たりと云



を聞て、人を遣して見するに、舟には舟かたの外は更に人なし、是はそも如何なる事ぞとて、濱田夫婦は驚き疑ふ處に、妹の娘其儘床より立あがりて、さまざま口走りて、我已に平次に約束ありながら、世を早うせしかば、をくり捨られて塚の主と成されしかども、平次に深き宿世の縁あり、此故に今又こゝに來れり、願くは我妹を以て平次が妻となしてたべ、然らば日比の病も愈ゆべし、是れみづからが心に望む處なり、若し此事を協へ給はずは、妹が命をも同じ道に引取りて、我が黄泉の友とせむと云ふ、家内の人皆驚き怪しみて、其身を見れば妹の娘にして、其身の扱ひ物いふ聲言葉は、皆姉の娘に少しも違はず、父の濱田云やう、汝は已に死したり、如何でか其跡までも執心深くは思ふぞやと、物の氣答へて云やう、自ら先世に深き縁ある故に命こそ短かけれ共、閻魔大王に暇を給はり、此一年餘りの契りをなし侍べり、今は冥途に歸り侍る、必ずみづからが云ふ事違へ給ふなとて、平次が手をとり涙を流し暇乞して、又手を合せ父母を拜みつゝ、扨云やうは、かまへて平次の妻と成るとも、女の道よく守り父母に孝行せよや、今は是迄ぞとてわな〳〵と震ひて、地に倒れて死入たり、人々驚き容に水灑ぎければ、妹甦り病は忽ちに癒へたり、先の事共を問ひたるに、一つも覺えたる事なし、是によりて終に妹娘を以て、平次と夫婦になしつゝ、さま〴〵佛事を營み、姉娘が跡を弔ひ侍べり、是を聞く人奇特の例しに思ひけり、

○狐の妖怪

江州武佐の宿に、割竹小彌太と云ものあり、元は甲賀に住みて、相撲を好み力量ありて、心も不敵なりけるが、中比こゝに來り旅人に宿かし、旅籠を以て營みとす、或時所用の事ありて、篠原堤を行きけるに、日すでに暮かゝり前後に人跡もなし、唯我獨り道を急ぐ、其間、道の傍らに一つの狐駈出でゝ、人の髑髏を戴き立上りて、北に向ひ禮拜するに、彼の髑髏地に落たり、又取りて戴きて禮拜するに又落たり、落れば又戴く程に、七八度に及びて落ざりければ、狐則ち立居心の儘にして、百度許り北を拜む、小彌太不思議に思ひて、立とまりて見れば、忽に十七八の女になる、其美しさ國中には並びもなく覺えたり、日は暮果てゝ昏らかりしに、小彌太が前に立て聲打揚げ、物哀れに啼

きつゝ行く、元より小彌太は不敵者なれば、少しも怖れず女の側に立寄り、如何に是れは誰人なれば、何故に日暮て、唯獨り物悲しく啼叫び、何處を指ておはするやらんと云、彼の女啼々答へるは、自らは是より北の郡余五といふ所の者にて侍べり、此程山本山の城を責取んとて、木下藤吉郎とかや聞えし大將馳向ひ、其引足に、余五木下のあたり皆燒拂ひ給へば、自が親兄弟は山本山にして打死せられ、母は懼れて病出たり、かゝる所へ軍兵打入て、家に有ける財寶は一つも殘さず奪ひ取りたり、母聲を揚げて恨みしかば、切殺しぬ、自怖ろしさに草村の中に隱れて、やう〳〵に命を繼ぎけれ共親もなく兄弟もなし、賴む陰なき孤子となり、何處に身を置べき便りもなければ、今は唯身を投げて死なばやと思ひ侍るに、悲しさは堪難くて人目をも知らず啼侍るぞやと云、小彌太聞てまさしく狐の化けて、我を誑かさんとす、我は又此狐を誑かして德つかばやと思ひ、げに〳〵哀れなる御事かな、親兄弟も皆になりて、立よる陰もおはしまさずは、幸に某の家誠に貧しけれ共、一人を養ふほどの事は、ともかうもし侍べらん、我家の事心に占めて賄ひ使はれ侍べらば、賴もしく見屆け侍べらんといふ、女大に悅びて、憐み思召し養ふて給らば、自らがため、父母の生れ代りと思ひ奉らんとて、打連れて武佐の宿に到り、小彌太が妻に對面して、向のごとくに掻口說き啼ければ、妻も憐に思ひ、殊更形の美くしきを見て、勞はり愛くしむ、小彌太露許りも妻に狐の事を語らず、天正の初江州漸く靜になり、北の郡は木下藤吉郎是を領知し給ふに、石田市令助京より下りける次に、武佐の宿小彌太が家に留り、彼の女を見て限りなく愛惑ひ、如何にもして此女を我に與へよと、言はれしかば、小彌太云やう、歷々の諸大名皆望み給へども、今に何方へも參らせず、某身過ぎの便よろしく宛行ひ給はゞ奉らんと云ふ、石田聞きて、金子百兩を出し與へ、女を買取り打連れて岐阜に歸られたり、女いと才覺あり、よろづに付てさか〴〵しう利根にして、人の心に先きだち、物を賄ふこと石田が思ふ如くなれば、本妻をも傍になし唯此の女を寵愛す、されども女は少も高ぶる氣色もなく、本妻の心を取りて、みづからは妾なり、如何でか本妻の心を背き奉らんやとて、夜る晝まめやかに仕へ侍べりしかば、本妻もさすが

に悋からず、慇にいとおしみけり、出入輩にも、ほどほどに付て物なんど取らせけり、或は絹小袖ふくさ物、針白粉やうの類、いつ求置とも見えね共、取出して賦遣す、しかも其身麻績つむぎ、物縫ひ畫がき花結び迄くらからず侍べり、石田が家にこそ賢女を求めけれと取沙汰あり、半年許の後石田又京都に上る、女云やう、必ず忠義を専らとして、私を忘れ、千金より重き御身を、小細の事に替給ふな、御内の事はみづからに任せ給へとて出し立て、京に上せたり、京にして高雄の僧、祐覺僧都に對面す、祐覺つく／＼と見て、石田殿は妖怪に犯されて、精氣を吸れ給ふ、速く療治し給はずは、命を失ひ給ふべし、此相某見損ずまじと云に、石田更に信せず、我を誑く賣僧の妄語、今に始めずとて打笑ひしが、程なく心地煩ひ付き、面の色黄に瘦て、身の肉枯れて膏なし、たゞ浮か／＼として物事正しからず、家人等驚き、さま／＼醫療すれ共驗しなし、此時に高雄の僧の云ひし事を思ひ出して、祐覺を請じて見せしむ、僧の曰此事我更に見損ずまじ、初め我云ふ事を信せずして、今此病現れたり、佛法の道は慈悲をさきとす、祈禱を以て是を治せむ、早く國に歸りて待べし、我も下りて驗しを現はさんと云はれしかば、家人等驚き、祐覺と諸共に夜を日に續ぎて岐阜に歸り、壇を飾り廿四行の供物、二十四の燈明、十二本の幣を立、四種の名香を焚て、一紙の祭文を讀て禳して曰、

維年天正歲次甲戌今月今日、石田氏某妖狐の爲に惱さる、夫二氣始て別れ、三才已に萠し、物と人と各其類に隨ふて、性分其形を受しより以來、品位皆齊しからず、玆に狐魅の妖ありて恣に怪をなし、木の葉を綴りて衣とし、髑髏を頂きて鬘とし、貌を更め媚を生ず、渠常に氷を聽て水を渡り、疑を致す事時として忘れず、尾を擊て火を出し、祟を作こと更に止ず、此故に大安は羅漢の地に奔り、百丈は因果の禪を詰る、千年の怪を兩脚の譏に顯はし、一夫の腹を雙手の賜に破らしむ、粤に石田氏某は軍戸の將帥、武門の命士也、何ぞ妄りに汝が腥穢を施して其精氣を奪ふや、身を武佐の旅館に寄て愛を良家の寢席に興さしむ、汝が狀は綏々、汝が名は紫々、式て其醜をいひ、唱て其咫を示す者也、首丘は其本を忘れざる事を云と雖も、虎威を假るの奸きこ

とは隱すべからず、汝今速かに去れ速かに去れ、汝知らずや、九尾誅せられて千載にも赦なき事を、誰か汝が妖媚を厭ひ惡まざらん、若し速に退き去らずば、州郡大小の神社を驚かし、四殺の劔を以て殺し、六害の水に沈めん、

と讀終りしかば、俄に黑雲棚引き大雨降り、雷電彩しく鳴渡りければ、女甚恐れ惑ひ、其儘倒れて死けり、家人等驚き立寄りて見れば、大なる古狐なり、首に人のしやれかうべを戴きて落ずしてあり、此の手より人に遣はし與へたる物共取寄て見れば、絹小袖と見えしは皆芭蕉の葉、白粉と云ひしは糠埃也、針かと思しは松の葉也けり、石田氏が心地快然と涼やかになり、忽に平復して、此物どもを見るに怪しき事限りなし、狐の尸をば遠き山の奥に埋み、符を押て跡を禳ひ、丹砂雄黃なんど調合の藥を服せしめて、其の根本を補ひ、扨武佐の小彌太を尋ねさするに、女を賣て德つき、家を移して何地行けるとも知らず、まさに狐魅よく人を惑はし、祐覺僧都の法驗を感歎しけるとぞ、

伽婢子卷之二終

伽婢子卷之三

○妻の夢を夫面に見る

周防山口の城主大內義隆の家人、濱田與兵衞が妻は、室の泊の遊女なりしが、濱田是れを見初めしより、わりなく思ひて契り深く語らひ、終に迎へて本妻とす、形うつくしく風流ありて、心ざま情深く、歌の道に心ざしあり、手も美くしう書きけるが、然るべき前世の契りにや、濱田が妻となり、互に妹脊の語らひ此世ならずと思ひける、主君義隆京都將軍の召によりて上洛し、正三位の侍從兼太宰大貳に補任せられ、久しく都に逗留あり、濱田も召連れられ京にありけり、妻これを戀うて、間なく時なく待侘侍べり、比は八月十五夜空曇りて月の見えざりければ、

おもひやる都の空の月かげを
いくえの雲かたちへだつらむ

と打詠め、寐られぬ枕を獨り傾けて、明し兼たる夜を恨み臥したり、其日義隆國に下り給ひて、濱田も夜更るまで城中にありて漸く家に歸る、其の家は總門

の外にあり、雲おほひ月くらくして、定か成らざりける道の傍ら、半町許りの草むらに、幕打まはし燈明くかゝげて、男女十人ばかり、今宵の月にあこがれ酒宴すると見ゆ、濱田思ふやうは、國主歸りたまひ家々喜びをなす、誰人かこよひ爰に出でゝ遊ぶらんと怪しみて、密に立寄り、白楊（やなぎ）の一樹繁げりたる間に、隠れて窺ひ見れば、我妻の女房も其座にありて、物云ひ笑ひける、是はそも如何なることぞ、まさなき業かなと怨み深く、猶其有様をつくづくと見居たり、座上に在ける男云やう、如何に今宵の月こそ殘り多けれ、心なの雲や、是になど一詞のふしもおはせぬかと云ふ、濱田が妻辭しけれ共、人々強て歌詠めと勸むれば、

きりぎりす聲もかれ野の草むらに
　月さへくらしこと更になけ

とよみければ、柳陰にかくれて聞ける、濱田も憐れに思ひつゝ涙をながす、座中の人はさしも興じて杯を廻らす、かくて十七八と見ゆる少年の前に、杯あれども酒を受けざりしを、座中強ゐければ、此の女房の歌あらば飲侍べらんといふ、女房一首こそ思ふ事によそへても詠みけれ、免し給へと云にきかず、さてかくなむ、

ゆく水のかへらぬけふを惜めたゞ
　わかきも年はとまらぬものを

杯あるかたに廻りて、濱田が妻に又歌うたひ給へと云に、今様一節を唄ふ、

さびしき閨の獨寐は、風ぞ身にしむ荻原や、そよぐにつけて音づれの、絶ても君に恨はなしに、戀しき空に飛ぶ雁に、せめて便りをつけてやらまし、

その座に儒學せしとみえし男、如何思ひけん打涙ぐみて、

螢火穿白楊　悲風入荒草
疑是夢中遊　愁斟一盃酒

と吟詠するに、いかで今宵斗り夢なるべき、すべて人の世は皆夢なる者をとて、濱田が妻そゞろに涙を流す、座上の人大に怒りて、此座にありて涙を流すいまいましさよとて、濱田が妻に盃を投げかけしかば、額に當る、妻怒りて座の下より、石を取出し投たりければ、座上の人の頭にあたり、血走りて流るゝ事瀧のごとし、座中驚き立騒ぐかと見えし、燈び消えて人もなく、唯草むらに蟲の聲のみぞ殘りたる、濱田大に怪し

み、さては我妻空しくなりて幽靈の顯れ見えけるかと、いとゞ悲しくて家に歸りければ、妻は臥してあり如何にと驚かせば、妻起あがり喜びて語るやう、餘りに待侘びてまどろみしかば、夢の中に十人許り、草むらに酒飮み遊びて歌を望まれ、其中にも君のみ戀しさをよそへて唄ひ侍り、座上の人みづからが泪を流す事を忌みて盃を投げ掛しを、みづから石を取て打返すに、座中さはぎ立と覺えて夢さめたり、盃の額に當りしと覺えしが夢さめて、今も頭の痛くおぼゆとて、歌も詩もかう〳〵と語る、白楊の陰にして見聞たるに少しも違はず、濱田つら〳〵思ふに白楊陰に隱れて見たりし事は、我妻の夢のうちの事にて有けるとなむ、

○鬼谷に落て鬼となる

若州遠敷郡熊川といふ所に、蜂谷孫太郎と云者あり、家富み榮えて乏き事なし、此故に耕作商賣の事は心にも掛けず、只儒學を好みて僅に其片端を讀み、是に過たる事あるべからずと、一文不通の人を見ては物の數ともせず、文字學道ある人を見ても、我には優らじと輕慢し、剩へ佛法を誹り、善惡因果の理り、三世流轉の敎を破り、地獄天堂娑婆淨土の說を笑ひ、鬼神幽靈の事を聞きては更に信ぜす、人死すれば魂は陽に歸り、魄は陰に歸る、形は土となり、何か殘る物なし、美食に飽き小袖着て、妻子豐かに樂をきはむるは佛よ、麁食をだに腹に飽ず、麻衣一重だに肩を裙に、妻子を沽却し、辛苦するは餓鬼道よ、人の門に立ち聲をはかりに物を乞て、わけを食ひて穢しとも思はず、石を枕にし草に臥て、雪降れども赤裸なる者は畜生よ、科を犯し牢獄に入られ、繩をかゝり頸を刎られ、身を試めされ、骨を碎かれ、或は水責火刑磔付なんどは地獄道也、是を取扱ふ者は獄卒よ、此外には總て何もなし、目にも見えぬ來世の事、まことにもあらぬ幽靈の事、僧法師巫神子の云ふ處を信ずることそ愚なれと云ひ罵り、偶々諫むる人あれば、四書六經の文を引出し、邪まに義理をつけて、辯舌に任せて云かすめ、放逸無慚なる事云はかりなし、時の人鬼孫太郎と名付て、ひとつ者にして取合ず、或時所用の事に付て敦賀に赴くとて、唯一人行きけるが、日たけて家を出たりければにや、今津川原にして日は暮れたり、江州北の庄、兵亂の後なりければ人の往來も稀なり、容

易く宿かす家もなし、河原おもてに出でゝ見渡せば、人の白骨こゝかしこに亂れ、水の流物淋しく、日は暮はてゝ四方の山々雲閉こめ、立寄るべき宿もなし、如何すべきと思侘びつゝ、北の山陰に少し茂りたる松の林あり、こゝに分け入りて、樹の根を便りとし少し休み居たれば、鵂鶹の聲すさまじく、狐火の光り物凄く、梢に渡る夕嵐いとゞ身に染みて、何となく心細く思ふ所に、左右を見れば、人の死骸七つ八つ、西枕南頭に臥倒れてあり、蕭々たる風のまぎれに、小雨一とをり音づれ、電ひらめき雷なり出たり、かゝる所に臥倒れたる尸、一同にむくと起上り、孫太郎を目掛けてよろめき集る、恐ろしさ限りなく、松の木に登りければ、尸共木の本に立寄り、今宵の內には此の者は取るべき也と訇る間に、雨ふり止み空晴れて、秋の月さやかに輝き出たり、忽に一つの夜叉走り來れり、身の色青く角生て口廣く髮亂れて、雨の手にて尸を握み、首を引抜き手足をもぎ、是を食ふ事瓜を嚙が如くにして、飽まで食ひて後、我登り隱れたる松の根を、枕として臥たれば、鼾睡の音地に響く、孫太郎思ふやう、此夜叉睡り覺めなば、一定我を引下ろして殺し食はん、唯能く寢入たる間に逃げばやと思ひ、靜かに樹を下り、逸足を出して走り逃げければ、夜叉は目を覺し、隙間もなく追かくる、山の麓に古寺あり、軒破れ壇頽れて住僧もなし、中に大體の古佛あり、爰に走入て助け給へと佛に祈り、後に廻りたれば、佛像の脊なかに穴あり、孫太郎此穴の中に入て、腹の中に忍び隱れたり、夜叉はあとより駈入て、堂の內を搜しけれども、佛像の腹迄は思ひ寄らざりけむ出て去ぬ、今や心安しと思ふ所に、此の佛像足拍子踏み腹を敲きて、夜叉は是を求めて取逃がし、我は求めずして自ら得たり、今夜の點心まうけたりと歌ふて、から〳〵と打笑ひ、堂を出て步み行、かしこなる石に躓きてはたと倒れ、手も足も打碎たり、孫太郎穴より出て佛像に向ひ、我を食はんとして禍ひ其身にあたれり、人を助くる佛の結構と罵りながら、堂より東に行けば、野中に燈火かゞやきて、人多く坐して見ゆ、是に力を得て走り赴きければ、首なきもの、手なき者、足なき者、皆赤裸にて並び坐したり、孫太郎肝をけし、走りぬけんとす、怪物大に怒りて、我等酒宴する半に座をさますことこそ安からね、捕へて肴にせむとて、一同に立て追

かくる、孫太郎山際に添ふて走りければ川あり、流るるともなく渡るともなく向に駈上れば、妖は立戻りぬ、孫太郎足に任せて行く、耳もとに猶どよみ罵る聲聞えて身の毛よだち、人心ちもなく半里許り行ければ、月已に西に傾き雲暗く、草茂りたる山間に行きかかり、石に躓て一つの穴に落入りたり、其深き事百丈許也、やう〳〵落つきければ、腥き風吹きすさまじき事骨に徹る、光り明らかになりて見廻らせば、鬼の集り住む所なり、或は髮赤く兩の角火の如く、或は青き毛生て翼ある者、又は鳥の嘴ありて牙くひ違ひ、又は牛の頭獸の面にして、身の色赤きは紅の如く靑きは藍に似たり、目の光は電の如く口より火焔を吐く、孫太郎が來るを見て、互に曰く、是れ此國の障りとなる者ぞ、取逃すな唯繫げよやとて、鐵の杻をいれ銅の手械さして、鬼の大王の庭の前に引すゆる、鬼の王大きに怒りて曰、汝人間に在て、漫りに三寸を動かし唇を翻へし、鬼神幽靈なしと云ひてさま〴〵我等を蔑にし、辱を與ふるいたづら者也、汝書典に眼を曝す、中庸に曰、鬼神の德それ盛なるかなと、論語に曰、鬼神を敬して之を遠くと、易の睽卦に曰、鬼を一車にのすと、詩の小雅に曰、鬼をなし蜮をなすと、其外左傳には晉の景公の夢、鄭の大夫伯有が事、皆鬼神をいへり、唯怪力亂神を言はずと云へる一語を、邪まに心得て、漫りに鬼神を侮る事は何の爲ぞとて、則ち下部の鬼に仰せて散々に打擲せしむ、鬼の王の曰く、その者の長高く成せと、鬼共集りて頸より手足まで引延ばすに、俄に身の長三丈許になり、竹の竿の如し、鬼ども笑ひ哄めき、押立て步ますするに、ゆらめきて打倒れたり、鬼の王又云けるは、其者を身の長短かくせよと、鬼共又捕らへて團子の如くつくね平めしかば、俄に橫はだかりに短くなる、突立て步ますするに、むくむくとして蟹の如し、鬼共手を打て大に笑ふ、茲に年老たる鬼の云やう、汝常に鬼神なき者と云破る、今此の形を長く短くさま〴〵嬲りもて遊ばれ、大なる辱を見たり、誠に不愍の事なれば宥與んとて、手にて提げなげしかば、孫太郎元の姿になる、さらば是より人間に返すべしといふ、鬼共皆曰、此者を只返しては詮なし、餞すべしとて、或鬼、我は雲路を分る角を取らせんとて、兩の角を孫太郎が額に置、或鬼は我風に嘯く嘴を與へんとて、鐵の嘴を孫太郎が唇にくはへたり、

或鬼、我は朱に亂れし髮を讓らんとて、紅藍の水にて髮を染めたり、或鬼、我は碧に光る睛を與んとて、靑き珠二つを目の中に押入たり、已に送られて穴を出つゝ、家に歸らんと思ひ、今津川原より道にさしかゝれば、雲路を分る雨の角差し向ひ、風に嘯く嘴尖り、朱に亂れし髮さかしまに立て火の如く、碧の光りをふくむ睛輝き、さしも恐ろしき鬼の姿となり、熊川に歸り家に入りたれば、妻も下人も怖れ驚く、孫太郎淚を流し、かく〳〵の事ありて、此姿に成りしかども、心はゆめ〳〵替らずと云に、妻は中々此有樣、目の前に直に見るも情けなく悲しとて、孫太郎の頭にかたびら打掛けて、唯泣悲しむより外はなし、幼なき子共は怖れ泣て逃げ、あたりの人集りて、手を打て怪み見る、孫太郎も物憂く覺え、戶を閉ぢて人にも逢はず、物をも食ず打籠り、思に亂れて煩ひ付き、遂に空しく成ぬ、其後とき〴〵は元の孫太郎の姿にて、幻の如く家のめぐりを步きけるを、佛事營みければ二たび見えずとぞ、

○牡丹燈籠

年每の七月十五日より廿四日までは、聖靈の棚をかざり、家々是を祭る、又いろ〳〵の燈籠を作りて、或は祭の棚にともし、或は町家の軒にともし、又聖靈の塚に送りて石塔の前にともす、其燈籠の飾物、或は花鳥或は草木、さま〴〵殊勝らしく作成して、其中に燈火ともして夜もすがら置、是を見る人道も去りあへず、又其間に踊子共の集り、聲よき音頭に頌歌出させ、振よく踊る事、都の町々上下皆かくの如し、天文戊申の歲、五條京極に荻原新之丞と云者あり、近き比妻に後れて愛執の淚袖に餘り、戀慕の焰胸を焦し、獨淋しき窓の下に、ありし世の事を思ひ續くるに、いと ど悲しさかぎりもなし、聖靈祭りの營みも、今年は取わき、此妻さへ無き名の數に入ける事よと、經讀み回向して、終に出ても遊はず、友だちの誘ひ來れども、心唯浮立たず、門に彳立て浮れおるより外はなし、

いかなれば立もはなれず面影の
　身にそひながらかなしかるらむ

と打詠め淚を押拭ふ、十五日の夜いたく更けて、遊び步く人も稀になり、物音も靜かなりけるに、一人の美人其年二十許と見ゆるが、十四五許の女の童に、美しき牡丹花の燈籠持たせ、さしも徐やかに打過ぐる、芙

蓉の皆あざやかに、楊柳の姿たをやかなり、桂の黛、碧の髮いふ計りなくあてやか也、荻原月の下に是を見て、是はそも天津乙女の天降りて、人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姬の渡津海より出て慰むにや、誠に人の種ならずと覺えて、魂飛び心浮かれ、自をさへ留むる思ひなく愛で惑ひつゝ、後に隨ひて行く、前になり後になりなまめきけるに、一町許り西の方にて、彼の女後ろに顧みて、すこし笑ひて云やう、自ら人に契りて待侘たる身にも待べらず、唯今宵の月に憧れ出て、そゞろに夜更け方、歸る道だに凄まじや、送りて給かしと云へば、荻原やをら進みて云やう、君歸るさの道も遠きには、夜深くして便なう侍べり、某の住所は塵塚たかく積りて、見苦しげなる茅屋なれど、便りにつけて明かし給はゞ、宿かし參らせむと戲ぶるれば、女打笑みて、窓もる月を獨り詠めて明る侘しさを、嬉しくもの給ふ物かな、情によはるは人の心ぞかしとて立戻りければ、荻原喜びて女と手を取組つゝ家に歸り、酒とり出し、女の童に酌とらせ少し打飲み、傾く月に別なき言の葉を聞くにぞ、今日を限りの命ともがなと兼ての後ぞ思るゝ、荻原

また後のちぎりまでやは新枕
　　たゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ひければ女とりあへず、

ゆふな／＼まつとしいはゞこざらめや
　　かこちがほなるかねごとはなぞ

と返しすれば、荻原いよ／＼嬉しくて、互に解る下紐の結ぶ契や新枕、交す心も隔なき、睦言はまだ盡きなくに、早や明方にぞ成にける、荻原、其住給ふ所はいづくぞ、木の丸殿にはあらねど名のらせ給へと云、女聞て、自は藤氏の末二階堂政行の後也、其比は時めきし世もありて家榮え侍べりしに、時世移りて有か無きかの風情にて、微かに住侍べり、父は政宣京都の亂れに打死し、兄弟皆絕て家をとろへ、我が身獨り女のわらはと萬壽寺の邊に住み侍べり、名のるにつけては、耻かしくも悲しくも侍べる也と、語りける言の葉優しく、物ごしさやかに愛敬あり、已に橫雲棚引て、月山の端に傾き、燈火白う幽かに殘りければ、名ごり盡せず起き別れて歸りぬ、それよりして日暮るれば來り、明がたには歸り、夜每に通ひ來ること更に約束を違へず、荻原は心惑ひてなにはの事も思ひ分けず、

唯此女のわりなく思ひかはして、契りは千世も變らじと通ひ來る嬉しさに、晝と雖又こと人に逢ふ事なし、斯て廿日餘りに及びたり、隣の家によく物に心得たる翁の住けるが、荻原が家に怪しからず若き女の聲して、夜毎に歌うたひ笑ひ遊ぶ事の怪しさよと思ひ、壁の隙間より覗きて見れば、一具の白骨と荻原と燈火の下に差向ひて坐したり、荻原物云へば、彼の白骨手あし動き髑髏うなづきて、口とおぼしき所より、聲響き出て物語りす、翁大に驚きて、夜の明るを待かねて荻原を呼よせ、此の程夜毎に客人ありと聞ゆ、誰人ぞと云に、更に隱して語らず、翁云やう、荻原は必ず禍あるべし、何をか包むべき、今夜壁より覗き見ければかう／＼侍べり、凡そ人として命生きたる間は、陽分至りて盛に清く、死して幽靈となれば、陰氣烈しく邪に穢るゝ也、此故に死すれば忌深し、今汝は幽陰氣の靈と同じく坐して是を知らず、穢れて邪まなる妖魅と共に寢て悟らず、忽に眞精の元氣を耗し盡して精分を奪はれ、災來り病出侍べらば、藥石鍼灸の及ぶ所にあらず、傳尸癆瘵の惡症を受け、まだ萠出る若草の年を、老先長く待たずして、俄に黄泉の客となり、苔の下に埋もれなん、諒に悲しき事ならずやと云に、荻原始めて驚き、恐ろしく思ふ心づきて有りの儘に語る、翁聞て、萬壽寺の邊に住むと云はゞ、そこに行て尋ね見よと敎ゆ、荻原夫より五條を西へ、萬里小路より此處彼處を尋ね、堤の上柳の林に行廻り、人に問へども知れるかたなし、日も暮がたに萬壽寺に入て暫く休みつゝ、浴室の後ろを北にゆきて見れば、物古りたる魂屋あり、差寄りて見れば棺の表に、二階堂左衞門尉政宣が息女彌子吟松院冷月禪定尼とあり、側らに古き伽婢子あり、後ろに淺茅といふ名を書たり、棺の前に牡丹花の燈籠の古きを懸けたり、疑ひもなく是ぞとおもふに、身の毛よ立ちて恐ろしく、跡を見返らず、寺を走り出て歸り、此日比愛で惑ひける戀もさめ果て、我が家も恐ろしく、暮るを待かね明るを恨みし心もいつしか忘れ、今夜もし來らば如何せんと、隣の翁が家にゆきて宿を借りて明しけり、さて如何すべきと愁ひ歎く、翁敎へけるは、東寺の卿公は行學兼備て、しかも驗者の名あり、急ぎゆきて賴み參らせよといふ、荻原彼處に詣でゝ、對面を遂げしに、卿公仰せけるやう、汝は妖魅の氣に精血を耗散し、神魂を

昏惑せり、今十日を過なば命は有まじき也との給ふに、荻原有の儘に語る、卿公則ち符を書て與へ、門にをさせらる、それより女二たび來らず、五十日許りの後に、或日荻原東寺に行て、卿公に禮拜して酒に酔て歸る、流石に女の面影戀しくや有けん、萬壽寺の門前近く立寄て、内を見入侍べりしに、女忽ちに前に顯はれ、甚恨みて云ふやう、此の日比契りし言の葉の、早くも謟りになり、薄き情けの色見えたり、初は君が心ざし淺からざる故にこそ我身を任せて、暮に行き晨に歸り、何時まで草のいつ迄も、絶せじとこそ契りけるを、卿公とかや、情けなき隔の禍ひして、君が心を餘所にせし事よ、今幸ひに逢ひ參せしこそ嬉しけれ、此方へ入給へとて、荻原が手を取り門より奥に連れて行、召連れたる荻原が男は、肝を消し恐れて逃げたり、家に歸りて人々に告ければ、人皆驚き行て見るに、荻原已に女の墓に引込れ、白骨と打重りて死してあり、寺僧たち大に怪しみ思ひ、やがて鳥部山に墓を移す、其の後雨降り空曇る夜は、荻原と女と手を取組み、女の童に牡丹花の燈籠ともさせ出て歩く、是に行逢ふ者は重く煩ふとて、あたり近き人は怖れ侍べりし、荻原が一族是を歎きて、一千部の法華經を讀み、一日頓寫の經を墓に納めて弔ひしかば、重ねて現はれ出ずと也、

○梅花屛風

天文のすゑ京都の兵亂打續き、三好と細川家年を重ねて合戰に及び、其の時の公方は光源院源義輝公、しばしば是を鎭めんと謀給へども、威輕く權薄くして、更に是を用ひ奉る人なし、玆に周防の國山口の城主太宰大貳大内義隆は、其比從二位の侍從に補任せられ、兵部卿を兼官して權威高く、西海に輝きしかば、公卿殿上人多く義隆を賴みて、周防の國に下り、山口の城に身を隱し、世の亂を逃れ京の騷ぎを免がれ給ふ、然るに義隆久しく武道を忘れ、詩歌風詠の遊びを事とし、佞人を近づけ國政を蔑ろにし、物の上手と云へば、諸藝者多く集めて、晝夜榮耀を恣にせられしかば、其の家老陶尾張守晴賢謀反して、義隆を追ひ出し長門の大亭寺に押詰め、義隆終に自害せらる、尾張守は、豐後の國主大友入道宗麟が舍弟三郎義長を、山口の城に迎へて主君とし、政道執行ふ、此時に當つて、前關白藤原尹房公、前左大臣藤原公賴公は、山口

の城を逊出るに度を失ふて、流矢に中りて薨じ給ふ、従二位藤原親世は髮を剃りて逃れ出で給ふ、其中にも中納言藤原基頼卿は謀ごと逞しく、然も諸藝に渡り、繪よく書給ひ、手跡歌の道に賢きのみならず、武道を心に掛け、馬に乘て手綱の曲を究め、水練に其術を傳へ、半日許りは水底にありても物とも思はず、叉よく水を泳ぎ潜る事魚の如し、是は殊更に義隆都に上りける時は、官加階の事萬づ執し申給ひて、禁中の事、とかく懇ろに取まかなひ給ふ故に、此度京都の兵亂にも、別義を以て山口に呼下し參らせ、かしづきもてなし、城の外に家造りして置き奉らる、此上はとて妻妾奴婢まで呼下し、暫くは心安くおはしけるに、俄に陶が謀反起りしかば、中納言殿は北の方家人等、重寳の道具ども船に取積み、夜もすがら山口の城を逊げ逃れて、京都を心ざして上られたり、安藝の國に入て、高砂たゞの海まで漕付て、風惡ければ鹽がゝりし給ふ、北の方泣々斯ぞ聞えし、

たゞの海いかにうきたる舟のうへ
　さのみにあらきなみまくらかな

夜ふけがた月傾きけるに、中納言殿酒取り出させ、北の方諸共に少しづゝ打飲み、破子(わりご)やうの物取開らき、舟人にも食はせなむどし給ふ、舟人は爰より一里許り東のかた、能地(のうち)と云所の者なるが、船に積みたる諸道具財寳皆金銀をちりばめ、絹小袖多く見えしかば、舟人忽ちに惡心を發し、今宵此輩を殺し、財寳を奪ひとり德つかばや、今の世は所々亂立ちて、さして咎むる人も有まじと思ひ、夜いたく更て月も入果て暗き紛れに、家人等男女三人は海へ投げ入たり、中納言殿聞付けて起立ち給ふ所を、後に廻りて刎揚げ、海に投入たり、北の方是は如何との給ふを、舟人捕へて云ふやう、心安く思ひ給へ君をば殺すまじきぞ、我子二人あり、太郎には新婦迎へて次郎にはまだ妻もなし、我が新婦にすべしとて、舟を出し能地の家に歸り、財寳小袖やうの物出し賣りけり、北の方心地少し惡しければ、よく成らんまで待給へ、次郎殿と夫婦になり侍べらんと有しに、舟人嬉しげ也、九月十三夜、舟人共新婦姑打つれて、舟に乘りつゝ出て遊び、夜更け方皆酒に醉て、前後も知らず臥たりけるを、中納言殿の北の方竊かに岸に上り、足に任せて夜もすがら走り逊げつゝ、夜の明方に狐崎のかれいの山本にかゝぐり

着給ふ、歩みも慣はぬ濱路山道を凌ぎ越ゆるに、跡より追手やかゝるらんと悲しく怖ろしく、足は千しほの紅ゐの如く、茨に搔破り石に損ぜられ、兎角して明はなれたる霧のまぎれより見れば、林の中に家あり、門の内に走り入ければ、經讀み念佛する聲聞え、尼一人立出て、是は爰許には見馴れぬ人なり、如何なれば朝まだきにかちはだしにて、是へはおはしけると問に、北の方自らは和布苅(めかり)のとまりに住む者にて侍り、我夫は去年都に上りて打れ、孀(やもめ)となりて姑に仕へ參らするに、姑の心はしたなく、又小姑つらく當り、剰へ有ざる濡衣着せて浮き立ち、よる晝物憂き事云計りなし、今夜十三夜の月見にとて、家內舟に乘りて酒飲みつゝ、自に酌取らせ侍べり、過ちて盃を海に落しぬ、定て恐ろしき責に逢ひ侍べらん事の悲しさに、夜に紛れて逃げ走り、是までさまよひ參りて侍べりと云ひて淚を流す、尼云やう、同じくは是より家に歸り給へ、我等送りて姑に詫言すべし、若し又爰許にして夫持ち給はんには、然るべき媒を賴みて參らせむ、とにかくに世の常ならぬ御有さまの痛はしさに申すぞやと云に、北の方更に受こはず、唯尼になして給べと斗仰せけり、尼の云やう、此所は昔淳和天皇の后、出家して武庫の山に籠り、如意比丘尼と申き、此人修法の暇爰に來り、浦島子が箱を納め、空海和尙を以て供養したまへる寺なれども、時世移りしかば幽かなる跡となり、其の時作り給へる、櫻木の如意輪觀音の胸の內に、彼の箱を納められ、靈佛にておはしけるに、國の守掠め取り、其家共に燒亡び給へり、然るに此寺は濱近くして、波の音騷がしく、人影稀れに蓬葎茂りつゝ、偶〻友とするものは、後ろの山に叫ぶ猿の聲、前なる潮に千鳥のなく音、松吹く風、岸打つ波、是より外には言問ひ交す者なし、同行の尼三人何れも五十許りの年にて、召使はるゝ侍者の尼も、齡ひは若けれども行ひは愼めり、今君美しき花の姿を墨染にやつし、柳の髮を剃り落して、尼となり給はんは、いと惜しき事ながらも、愛着執心を去り離れて、誠の道に入ぬれば、身は幻の如く命は露に似たり、今出家し給はゝ、坐禪の床に妄念の雲を拂ひ、燈明の光に無明の闇を照し、香の煙は自ら心法の穢を拂ひ、花を摘めば只管煩惱の焰涼くなり、朝には粥を食し午の刻に齋を行ひ、緣に隨ひ有るに任せて年月を送る、恨もな

く嫉みもなし、心靜かに身穩か也、徒に世にかゝはりて、苦しき物思ひに來世の愁ひを求めむよりは、世を厭ふて出離の道を行はんには勝るべからずと述べられたり、北の方やがて佛前に詣ふで、髮切りて剃らせ、法名梨春とぞ云ける、本より此女房は幼き時より、歌草紙讀み手習ふ事をこのみ、書典を讀ては文字悉く覺えし人なりければ、出家して幾程もなきに、内典經論の深き理を悟れり、院主の尼公も、後には皆此梨春に尋ねてこそ、佛法の理經論の文義をも會得せられけれ、梨春かくぞ口ずさびける、

中々にうきにしづまぬ身なりせば
　みのりの海のそこをしらめや

まことに佛種は縁より起るとは、是等ぞためし也ける、常には奥深く引籠り聖敎に眼をさらし、容易く人にも逢ふ事なし、或日一人の俗來りて、院主の尼公に心ざす事侍べり、經讀みて給べとて布施物參らせ、一幅の梅の繪を、供養の爲とて佛前に打置たり、尼公是を取りて屏風にをされたり、梨春是を見るに、まさしく我箱に入たる繪也、尼公に如何なる者の奉りしと問に、是は能地の舟人、此寺の檀那にて來る、世に云ふ、此者は人を殺し剝掠て世を渡ると云ふ、誠か知らずと語る、梨春さては疑ひなく、彼の舟人よと思ひながら色にも出さず、筆を取りて繪の上に書けるは、

我やどの梅の立枝を見るからに
　思ひの外に君や來まさむ

尼公更に其下心を知らず、唯美しき筆の跡を譽めたる斗也、古歌の言葉を少し引直しける、いと思ひ入たる心ありけむ、備後の國鞆の住人品治九兵衛といふ者、子細ありて此の寺に來り、屏風の繪と歌と何れも不思儀の筆跡なりと見咎め、尼公に請受けて歸り、我住む所に立て弄ぶ、茲に中納言基頼卿は、敢なく水中に突落され給ひしか共、元より水練の達者なれば、波を潜り潮を淩ぎて、十町許りの末にて岸に上り、それより足に任せて備後の國鞆の浦まで落來り、山名玄蕃頭が家に來り、奉公せんとの給ふを、人々世の常ならぬ有樣を見咎め、山名にかう〳〵と云ければ、出て對面し、奥に呼入てこま〴〵と問聞きけるに、有の儘に語り給ふ、扨は痛はしき御事かな、京都も未だ靜かならねば、上り給ふとも住所有べからず、暫く是に在して、世の變をも見給へとて留め置く、品治九兵衛は

玄蕃頭が家人なりければ、斯樣の物求めたりと物語するに、中納言殿心元なく取寄せて見給ふに、覺えず涙ぞ流されける、山名怪みて問ければ、中納言殿是は某の書たる繪也、此歌は正敷我妻の手跡也、たゞの海にて、妻子家人皆水中に沈められし、財寶は殘らず舟人の爲に取られぬらん、妻は如何にして命生けん、此繪は何の故に此歌を書て出しぬらんとの給ふ、山名則ち品治を召て具さに尋ねければ、院主の尼公初よりの事を語りけり、梨春に對面して有の儘に語り給へと云に、今は何をか包み侍べらんとて、舟人の有樣語り給ふにぞ、疑ひもなく中納言殿の北の方とは知られければ、扨はとて鞆の浦へ呼び迎へ參らせ、中納言殿と對面しては、唯夢のやうにぞ覺え給ひける、替る姿とて互ひに衰へ給ふ有さま、今更哀れぞ勝りける、暫く鞆におはしける間に、京都の世の中移り替り、三好松永滅びて、義昭將軍武運開けしかば、都に上らむとし給ふ處に、中納言殿俄に疾付て空しく成給ふ、梨春は直に尼になり給ひ、廿日許りの後ち、打續きて夢に中納言殿さそひ來り給ふと見て、程なく北の方も空敷なり給ふ、山名是を同じ所に埋み奉りけり、中陰のはての日、二つの塚より白き雲立昇り、西を指て行くかと見えし、異香已に山谷にみち〳〵たり、時の人奇特の思ひをなしけり、

伽婢子卷之三終

伽婢子卷之四

○地獄を見て蘇(よみがへる)

淺原新之丞は、相州鎌倉の三浦道寸が一族の末なり、才智ありて辯舌人に勝れ、儒學を專らとして佛法を信せず、迷途(めいど)流轉の事因果變化の理を聞きては、さまざま言かすめて誹り侮り、僧法師と雖も敬まはず、口に任せて誹謗し、理を非に曲げて難じ破る、其隣に孫平とて有德なる者あり、若かりし時より慾心深く、慳貪放逸にして更に後世を願はず、川狩を好みて常の慰みとす、或時心地煩ひて俄に空しく成りたり、妻子一門驚き歎きて、願たて祈禱しけり、胸の邊り未だ溫かなりければ、まづ葬禮をばせず、まづ僧を請じ佛前を飾り經讀みけるに、三日といふ暮方に蘇りて語りけるやう、我死して迷途に赴きしに、其道甚暗し、又言問ふべき人もなし、かくて一里許行かと覺えし、一つの門に至り內に立入しかば、一つの廳場あり、冥官段階に出て我を招きて、汝死して爰に來る、妻子歎きて金銀を散らし、祈禱佛事とりどりに營む故に、此の功力に依りて二度(たび)娑婆に歸し遣す也との給ふ、我嬉しくて門を出て歸ると覺えて蘇りたりと云ふ、眞に祈禱佛事の功力は空しからざりけりとて、喜ぶ事限りなし、淺原是を聞て大に嘲り笑ひて曰、世の貪り深き邪欲奸曲の地頭代官共は、賄を得ては非道をも正理になし、物を與へざれば科なきをも罪に落す、此故に富る者は非公事にも勝、貧者は道理にも負を取る、是此世斗の事かと思ふに迷途の冥官も私あり、金銀だに多く散じて佛事をだに能く營めば、或は死しても蘇り、或は地獄も浮ぶとかや、貧きものは力なし、善惡の報ひは、多く錢金を散す人こそ來世も心安けれ、昔し漢の韋賢が言葉に、子に黃金萬籝をのこさむより、如(し)じ子に一經を敎へんにはと云へり、地獄の沙汰も錢に因るべし、閻魔王も金だに有ば罪は赦す、韋賢が言葉は全なしと云て、手を打て笑ひ嘲る、扨かくぞ讀みける、

　念佛の代に欲をふかゝれ
おそろしき地獄の沙汰も錢ぞかし

家に歸り、燈火のもとに唯獨り坐し居たりけるに、忽ちに二の鬼來れり、其有様凄まじく、身の毛よ立ける

に、是れは閻魔王よりの使也急ぎ參るべしとて、淺原が兩の手を引立門を出て走る、歩む共なく飛共なく、須臾の程に一つの廳場に至りぬ、世間の評諚場の如し、御殿の奥には大王と覺しき人、玉の冠を戴き袍の上に坐し、冥官は其の左右に位に依りて坐せり、二の鬼淺原を其前の庭に引すゆる、大王怒る聲を出して、汝は儒學を綷として佛法を異端と貶め、深き道理をしらずして漫に誹り嘲る、いでや迷途の事はなしと云、此科口より出たり、速く拔舌奈梨に遣し其の舌を拔出し、犂を以て鋤返せとの給ふ、淺原首を地に付けて、我更に非道の罪なし、儒の敎を守りて、君臣父子夫妻兄弟朋友の五倫の道、邪まならじとたしなみ、天理性分の本然を說て其德を仰ぐ、更に佛道を修せずといふとも、地獄に落べき謂れなしと云、大王の給はく、冥官も私あり、善惡の報ひは貧富に因るとて、念佛の代に欲を深かれといふ歌は、誰詠みしぞと怒り給ふ、淺原答へて云やう、古しへ三皇五帝の世には、天堂鬼神の事を述べず、三代の時に至りて、山川の神を祀る事初めて是あり、後漢の世に佛法傳り、夫より天堂地獄因果の理を示す、玆に於て山川にも靈あり、社頭にも主あり、木佛繪像皆奇特を現ず、世の人是に溺れて性理を失ひ、惡を成して改めず、科を犯して恣也、强きは弱きを凌ぎ、富めるは貧しきを侮り、親に孝なく君に忠なく、一家睦しからず、財寶を貪り邪欲を構へ、義を知らず節を守らず、利に走りて恩を忘れ、唯金銀だに散じて佛事供養を營めば、罪深きも科重きも、地獄を逃れて天堂に生ずと云、もし能く斯の如くならば、惡人と云ふとも富貴なれば天上に生れ、貧者は善人も地獄に落べし、閻魔の廳と雖も、富貴なる惡人大佛事をなせば、淨土に遣すと云はゞ、貧者の恨みなきにあらず、是廉直の批判にあらず、私と云べし我此事を思ふが故に、一首の狂歌を詠みて此責に遇ふ、大王深く察し給へと云ふ、大王聞て宣はく、此理邪まならず陳る所實也、漫りに罪を加へ難し、此誹りある事は、孫平が佛事祈禱に金銀多く散じたる故に、二たび娑婆に歸されたりと沙汰せし故也、急ぎ孫平を召來れとの給ふ、須臾の間に孫平を召し來る、手枷首械を入れて直に地獄に遣はし、淺原をば娑婆に送り歸せとあり、二人の冥官座を立て、淺原を連れて庭に出る、淺原云やう、我れ人間にありて儒學を

勸め、佛經に說ところ、地獄の事を聞ながら信を起さず、今已に爰に來る、願くは地獄の有樣を見せて、我にいよ〳〵信を起さしめ給へかしといふ、冥官聞てさらば司錄神に問べしとて西の方廊下を過ぎて一つの殿に行く、善惡二道の記錄山の如くに積たり、冥官しか〴〵と云ふに、司錄神簿を出したり、冥官を是れ取持、淺原を連れて北の方半里許り行けるに、銅の築墻高く、鐵の門嚴しき城に至る、黑煙天に蔽ひ、叫ぶ聲地を響かす、牛頭馬頭の鬼數多、鐵棒鐵及を横たへ、門の左右に立たり、二人の冥官向の簿を渡し、淺原を連れて內に入て見せしむ、罪人數知らず、獄卒捕へて地に伏せ、皮を剝ぎ血を絞り、腹をさき目を剜り、耳を殺ぎ鼻を切り、手足をもぎて肉を殺ぐ、罪人泣き叫び、苦を悲しむ聲地に滿ちたり、是は昔し人間に在し時、山海に獵漁り殺生を營みし者也、又或所には銅の柱を二本立並べ、男と女と二人を磔にして、獄卒劔を持て腹を斷ち裂き、銅の湯を銚子に盛りて流し掛くるに、五臟六腑爛れ燃て沸き流るゝ、男も女も只首斗り柱に殘りて泣叫ぶ、淺原其故を問ふに、冥官答て曰、是は婆婆にありし時、此男は醫師也、此女の夫病深きを療治せしむるに、醫と女と正なき密事して、夫に惡しき藥を與へ、女荒けなく當りて殺しつゝ夫婦と成りき、二人ながら死して今此の苦みを受ると云、又或所には尼法師多く裸にて、熱鐵の地に蹲まり居たるを、獄卒來りて牛馬の皮を着せ覆ふに、尼も法師も其儘牛馬になる、是に盤石を負せ鐵の鞭を以て是を打つに、皮破れ肉そげて血の流るゝ事瀧の如し、淺原又問ふ、曰是は人間にありし時、尼となり法師となりて、田作らずして飽まで食ひ、機をらずして暖に着て、形は出家ながら戒律を守らず、心に慈悲なく學道なくして、徒らに施物もらひける者共也、此故に畜生となりて信施を償ふと云、又或所を見れば俗人多く牛馬と成りて苦を受く、是は昔代官として百姓を取倒し、妻子を沽却せしめたり、百姓辛苦の肪をはかり取る、是も施物に同じからずやと云、最後にある地獄に至る、猛火殊更に燃揚り、數百人鐵の地に坐し手枷首械をさゝれ、五體さながら燃焦れ、焰みろみちたり、毒蛇來りて其身を纏ひ血を吸、又鐵の嘴ある鷹飛來り、罪人の肩を踏へて眼を啄ばみ、肉を引裂き食ふ、泣き叫ばんとすれば、猛火の烟咽に迫り、苦

み云ばかりなし、肉盡きて骨現れ死すれば、涼しき風吹來り、又元の如くにして蘇る、淺原其故を問に、曰是は往昔鎌倉の上杉憲政の子息龍若殿の乳母妻鹿田新介、其弟長三郎同三郎助其外親類都合廿八、已に憲政沒落の時、主君龍若殿をつれて、敵北條氏康に渡して降人に出たり、主君を殺したる天罰あたり、此廿八皆氏康に殺され、死して此地獄に落て億萬劫を經ると云とも、浮ぶ時有べからず、其外の輩も皆主君を殺し不忠を抱き、國家を亡ぼしける者共也と、こまごまと語る、其より淺原冥官につれて門を出づると覺えしかば、忽ちに蘇り、隣の孫平は如何にと問ひければ、其夜又空敷なれり、是によりて、淺原儒學を捨て建長寺にいたり、參學して醒悟發明の道人となりけり、

○夢のちぎり

大永の比ほひ舟田左近と云者あり、武門を出て凡下となり、山城の淀と云所に住みけり、心ざま優にして情け深く、然も無雙の美男也、家富て豐かなりければ、人皆惡しくも云はず、年廿二に成まで妻をも迎へず、只色好みの名を取たり、橋本と云所に田地を持ければ、秋の末つかた田を刈らせむとて、舟にのりつつ、行く〳〵橋本の北に酒賣る家ありて、住居賑々しう內の體奇麗に見ゆ、舟田は舟を家の後ろの岸に着けて、酒を買て飮んとす、主出て此方へとて呼入しに、かけ造りにしたる亭に上る、亭の西の方には古りたる柳枝たれて紅葉に交はり、嵐に散り落ち、下葉うつろふ萩が露、枝もとをゝに重げなり、秋を哀しむ蟲のこゑ、尾花が本に弱り行き、籬の菊は唉匂ひ、袖の香りを誰ぞとも、仇に床しき心地ぞする、北の方を見渡せば、淀の川波浮沈む、鷗の聲は遠近に、遊ぶ心ぞ知らまほし、楊枝が島も程近く、渚の院も爰なれや、水野を過て山崎や、うど野につゞく三島江まで、只一目にぞ見わたさるゝ、あるじ盃出し酒勸めて、是は松江の鱸にはあらねども、彼の玄惠法印が庭の訓に、名を譽たる、淀鯉の鱠とて取り供へて出したり、又これは吳中の蓴菜には侍べらねど、貫之が詠めにつみたる、水野の澤の根芹にて侍べるなど、心ありげにもてなしければ、舟田あるじの心を感じて數盃を傾たり、この家に娘あり、年十八許り、未だ何方にも緣を結ばず、亭に續きたる一間の部屋に住みけり、親元より豐

成ければ、歌雙紙なんど多く求て讀せ、手は勝れねども物かく事流るゝが如し、心ざま優しく情けあり、舟田が亭にありけるを見て心惑ひしつゝ、帳の隙よりさし覗き、或は顔を皆ながら差現はし、或は帳の外に立、又内に引籠り、又帳より外に出つゝ恥かしさも忘れて焦るゝ許りなまめきたり、舟田是を見るに、女の顔容ち世に類ひなく美くしく輝く許りに覺えて、知らず我魂も女の袂に入ぬらん、互に心を通はせて、目と目を見合せ侍べりしか共、更に一言葉を云べき由もなく、日已に傾きしかば、舟田は暇乞して座を立て舟に乘り、我宿に歸りしかども、只其人の面影のみ、身に染む秋の風さへて、獨まろ寢の床の上、知らぬ涙ぞ落にける、其夜の夢に、橋本の酒賣家に行て、後の川岸より門に入、直に女の部屋に至りぬれば、部屋の前には小さき造り庭ありて、さま〴〵に疊たる岩組、峯よりくだる谷の裝ひ、麓より傳ふ道の續き、風情面白く、山より山の口口なれるに、洲濱の池は水清く、さゝやかなる魚おほくあそび、汀に生る忍草、窓に飛交ふ螢火の、消え殘りたる秋の暮、鈴虫の聲幽かなり、軒には小鳥の籠ひとつ懸けて、焚しめらかしたる香の匂ひ、心もつよく焦がるらむ、机には美くしき菊の花少しさして硯箱あり、床には源氏伊勢物語、其外おもしろく書たる雙紙を積重ね、壁に寄せたる東琴は思ひをのぶる慰かと、目留る心地して立たりければ、女は是を見て嬉しげに近付き、打笑みて舟田が手を取り閨に入て、心に積る言の葉百夜も盡じと打侘び、互に契りを交しまの、水の流れて終に又、末は逢瀨をならしばや、しばし人目を忍ぶ草、其關守こそつらからめ抔、さま〴〵語らひける程に、人の別れを思ひ知らぬ、八聲の鳥もけうとげに、早や明方と打しきれば、燈火の色いと白く、窓の本に夢は覺めたり、是より毎夜夢の中に行通ひて、契をなさぬ夜はなし、或夜の夢には、女琴を彈きて想夫戀の曲をなす、其爪音たへにして、響は雲路に至るらむと、いとゞ情ぞ色まさりける、或夜の夢に又かの家に行たりければ、女白き小袖を縫たりしに、舟田燈火を掻あぐるとて小袖のうへに、燈花をおとして痕つきたり、又或夜の夢には、女白金の香合を送る、舟田水精の玉を與へたり、夢覺めぬれば香合は舟田が枕もとにあり、我水精の玉はなし、大きに怪み思ひ、

君にかく逢夜あまたのかたらひを

夢としりつゝさめずあらなむ

と打詠めては、餘りに堪がたかりければ、舟に棹さして橋本にゆきつゝ、彼の家に立入り酒を求めしに、あるじ出でゝ舟田を見て甚だ喜び、内に呼びいれて殊更に持はやす、斯て物語しけるやう、某只一人の娘を持つ、年未だ廿に足らず、去年秋の暮に君こゝに酒飲み給ふ時、娘見まいらせしより、思ひ初めて終に病となり、只欝々として眠れるが如く、獨言する有さま酒に醉たるに似たり、醫師を頼みて治すれ共、露ばかりの驗もなし、陰陽師に禳ひせさするに、猶重く煩ひて心地正しからず、折々は舟田左近と名を呼ぶ事あり、しかも昨日云やうは、明日は君必ずこゝにおはしまさんと云けれ共、例の狂氣より云ふ事ならんと思ひ侍べりしが、君けふ來り給へり、是ひとへに神の告給ふ所ならん、願くは君是を妻とし給へ、侘てすむ某の跡殘りなく參らせむと云、互に名字をあらはし、やがて領掌して娘の部屋に入ければ、部屋の體庭の面、皆夢に見たるに違はす、女其まゝ枕をあげ心地正しくなりぬ、其顏容物言ひ聲つき聊も夢に替らず、かくて女語るやう、去ぬる秋の比君を見初まいらせしより、其物思ひ胸に塞がり、面影すでに身を離れず、夜毎に君に契るといふ夢を見る事、如何ともいひしらずと云に、舟田が夢も其如く、小袖に燈花の落たる痕あり、琴を彈たる曲の名、香合の事皆夢に同じ夢也、是を聞に、驚き怪しまずといふ事なし、まことに神の行通ふて契り淺からず、わりなきなからひとぞ聞えし、

○一睡三十年の夢

享祿四年六月に、細川高國と同名晴元と、攝州天王寺にして合戰す、高國敗北して尼崎まで落行きつゝ道狹くして自害したり、家人遊佐七郎は、牢浪して芥川の村に隱れ居たりしが、京都に上りて如何なる主君にも仕へ奉らんと思ひ、中間一人めし連れて都に赴く、山崎の寶寺に詣うでゝ休居たるに、頻に睡きざしければ、東の廊下に暫く臥侍べりし、夢に見るやう、寺の門前に出ければ、一人の夫男一つの籃に楊梅子を入れて休み居たり、遊佐立寄りて誰家の者ぞと問ば、山崎の住人交野次左衞門が家に召使るゝ者也、交野殿は將軍家に屬して打死し給ひ、一人の娘おわし

ます、西の郊の石尾源五殿の妻となり、源五殿は三好に打れ給ひ、今は孀にて歸り住給ふ、年いまだ二十一也、母は六十有餘にて才覺すぐれ給へり、一門の末ならば重ねて聟に取り、家督を讓り參らせむと仰ありと語る、遊佐これを聞て、屹と思めぐらせば、交野が妻は我姨也久しく便りうしなひ、何方にあり共聞ざりける、扨は山崎に住給ふか、尋行て名のらばやと思ひ、男に具して尋行たりければ、姨にまがひもなく、互に名乘合ひけるに、姨嬉しさのあまり涙を流し、内に呼入れて一族の行衞を尋ね問に、それ彼多くは皆打死して、七郎斗わづかに存生らへたり、姨の云ふやう、我賴りとては娘只一人あり、和殿は又自が甥也、睦く戀しきぞや、京に登らずともあれかし、聟になして心安く見ばやと云、遊佐嬉しく思ひやがて約束し、明日こそ吉日なれとて親しき輩を呼び集めて、さまざま調へて緣を結ぶ、妻の女房を見れば顏容みやびやかに美くしかりければ、いとゞ嬉しさ限りなし、婚禮の用意甚だ花麗なり、日ごとに客を集めて酒宴におよぶ、遊佐も樂しみにほこりて思ふ事もなし、或日京都より兩使あり、將軍より召給ふ、急ぎ上洛しけるに、公方の御氣色こゝろよく、則一萬貫の所知を下され河內守に任ぜらる、かくて京都に伺公する事二年、其の間に公方の相伴衆になされ、威勢高く肩を並ぶる人なし、已に御暇給はりて山崎に歸り、要害の地を點じて、家造り夥しう取立てたり、召使ふ上下の侍、出入輩數しらず、門外には繫ぎ馬の斷る隙もなく、諸方より集ひ來る使者日ごとに多し、早や三十年の星霜を經て、男子七人女子三人を持たり、男子四人をば京都に上せて、將軍家に奉公せしむ、女子二人は津の國河內の間に遣して、武家の名高き細川某の新婦となし、兄弟を聟とす、內外にかけて八人の孫をまうけ、一家の繁昌この時にあたれり、かゝる所に思ひがけず、敵三千餘騎にて押寄せ、四方より要害に火をかけ、鬨をつくりて責入たり、妻子驚て泣き叫び、家人は恐れて落失ければ、防ぐべき力なく、腹を切らんとする所に、敵はや打入りて引組生捕ほどに、是れに組合て押返し刎返すと覺えて、汗水になりて夢はさめたり、遊佐起上りて、中間に今は何時ぞと問に、日は未だ未の刻と答ふ、只一時の間に三十年を經たり、思へば是邯鄲一炊の夢、善きも惡しきも此世は夢也と

悟りて、中間には暇取らせ、我身は直に發心して、高野山に籠りて道心堅固の修行者となりぬ、

○入棺之戸甦怪(よみがへるあやしみ)

古へより今に傳へて世に云、凡そ人死して棺に納め、野邊に送りて後に、或は埋むべき塚の前に甦り、或は火葬する火の中より甦るものあり、皆家に歸さず打殺す事、若は病重くして絶死する者、若は氣のはづみて息のふさがりし者、或は故ありて迷塗を見る者あり、是等は定業天年未だ盡ず、命籍未だ削らざる者なれ共、本朝の風俗は死すると齊しく、尸を納め棺に入て、葬禮を急ぐ故に、假令甦るとても、葬場にて生たるをば戻さずして打殺す、誠に殘りおほし、されば異國にしては、人死すればまづ殯(かりもがり)と云事をして、直に葬送はせず、此故に書典の中に、死して三日七日十日許りの後に甦り、迷塗の事共語りける例を多く記せり、それも十日以後はまた甦るべき子細もなし、頓死魘死(おびへじに)などは心すべし、されば又葬禮の場にて甦りしをば家に戻さず、打殺者也と云ひ傳ふる事も故ありと云、京房が易傳に、至陰爲レ陽、下人爲レ上、厥妖人死後生といへり、死人久しく有て後に甦る事はこれ下尅上の先兆なりといふ、此故に甦りても打殺す事なりと聞ゆ、大内義隆の家の女房死けるを、野に送り出し埋まんとせしに、俄に甦りぬ、打殺さんは無下にかはゆしとて連れて歸りしに、髪は剃り落しぬ、是非なく尼になり、衣を着て半年ばかり有りて、又死たり、其年果して家臣陶尾張守が爲めに、義隆は國を追出されたり、永祿年中に、光源院殿の家の下部俄に死けるを、二日まで置けれども生出ざりければ、若き下部共尸を千本に送りて埋まんとするに、忽に甦る、打殺して埋まんと云に、此者手を合せ泣き叫びて助けよといふ、さすがに不愍の事とて、つれて部屋に置ければ、四五日の内に日比の如くなりたり、其の年五月に三好松永反逆を起しぬ、尸は陰氣にして、甦れば陽に成たる也、是下として上を犯す先兆也と云が故に、葬所にて甦りし者は、二たび家に戻さず打殺すとなり、此理は有事歟無き事歟、さもあれ、死人の一族は殘り多く侍べらんものを、

○幽靈逢レ夫話

野路の忠太は江州の者也、妻は同じ國野洲の郡地下人の娘也、一人の娘を生みけれども、半年の後死して

又子なし、永祿のすゑの年、商買の事によりて鎌倉に下りしに、自國他國亂れ立ちて道中の通路塞り、三年あまり歸り上らず、或夜の夢に我が妻櫻の陰に居て、花の散り落るを見て悲しみ泣く、又俄に井の本を覗きて笑ひけりと、夢さめて怪しみ、易者に問ければ、花は風に依て散り、井は泉路をかたどる、此夢よろしからずといふ、三日の後便りにつけて聞ば、妻風氣をいたはりて死せりと云、忠太悲しさ限なし、とかくして江州に歸り、其跡を慕ひ妻が手馴れし調度を見るに、今更のやうに思はれ涙の落る事隙なし、日比の心ざしわりなき中の其期に及びては、さこそ思ひぬらんと思ひやるにも、なにはにつげて歎きの色こそ深く成けれ、寐ても覺めても面影をだに戀しくて、

思ひ寢の夢のうき橋とだえして
さむる枕にきゆるおもかげ

と打詠じ、若し我戀悲しむ心を感せば、せめて夢の中にだにも見え來りてよかしと、獨言して日をくらす、比は秋も半ば月朗かに風清し、壁に吟ずるきり〳〵す、草村にすだく虫の聲、折にふれ事によそへて、露も涙も置き爭ひ、枕を傾れどもいも寢られず、はや更かたに及びて、女の泣聲かすかに聞えて、漸々に近くなれり、よく〳〵聞ば我妻が聲に似たり、忠太心に誓ひけるは、我妻の幽靈ならば、何ぞ一たび我にまみえざる、娑婆と迷途と隔ありとは云へ共、其かみのわりなき契り死すとも忘れめやと、其の時妻は窓近く來り、我はこれ君が妻なり、君が悲しみ歎く心ざし、黄泉にあれども堪がたくて、今夜こゝに來り侍べりと、忠太涙を流して云やう、心の內に思ふ事筆にもなどか書盡さん、歌につらね詩に作るとても、言の葉の末には殘りおほし、願くは一たび姿を現はして、まみえ給はゞ恨はあらじと搔口說しかば、妻泣々答へけるは、人間と黃泉と其道別にして、逢まみゆる事難し、又現はれて見え參らせんには、君もし疑ひ怪み給はんと、忠太いよ〳〵悲しく思ふに、余志子と云女の童を召つれて、妻の形ほのかに現れ出たり、忠太問けるは、余志子は三とせの先き故郷に歸りて、空しくなりけりと風の便りに聞侍りしに、今如何にして爰に來りしやと、余志子答へけるやう、君の御事如何にぞやと起き臥し案じ參らせしかば、思ひの外なる病を受け、故鄕に歸りて心地やましさ彌や增さりて、終に墓

なく成參らせたりけれ共、黄泉にして又此君打續きて來り給へば、それに參りて仕へ奉り、今も隨ひ參りたりと云、忠太燈火とり内に呼入しに一人の姥あり、あれは誰ぞといへば、妻の云樣、是こそ自が乳母にて侍れ、みづから空しく成りしを悲しみて、今は賴むかげなしとて、身を投げ空しくなり、今宵も隨ひ來り侍り、生て在るは陽の人なり、死すれば陰に歸り、道隔り、住か替れども思ひし心は替る事なし、冥官已に君が誠の心ざしを感じ、今少しの暇を給たり、千年に一たび逢見奉る嬉しさ、やがて別れん事を思ふに又悲しくこそとて、涙は雨と降りにけり、忠太云やう、さて死し行て後は、何をか珍味の食とするやと、妻云やう、黄泉は臭腥さきを嫌ふ、只殊更に用ひる物は粥なりと云、忠太是を調へてすへ渡す、妻余志姥三人ながら口に迎へて食せしと見えし、夜明けて後見れば、只其儘に殘りたり、妻の云やう六とせ其かみ襁褓の中にして、空く成ける子を見まく思ぼすや、今はおとなしく成り侍べりといふ、忠太云やう、其死ける時僅に二歳來世にして年月を重ねて身にうけ侍るかと問ふ、妻答へけるやうは、更に年月を身にうけて積る事人間に替はらず、さればこそ死して四十九日の中陰、一周忌より初めて五十年忌を弔ふ事、此世の年月にて數ふるなりと云に、死したる子現れ來り、父が前に跪き、おとなしやかに見えたり、忠太淚を流し髮搔き撫で、是れだに此世にあらば妻が忘れ記念（かたみ）とも見るべきを、汝死して後ふたゝび子なし、汝こゝに在らばさこそおとなしく、我も嬉しう侍らんに、今夜を限りにまたも見まじきや、あな恨めしと床しき者かなとて搔抱かんとすれば、雲煙のごとくにて手にも溜らず、消失せて形ちもなし、忠太問けるは黄泉にてはいづくに住給ふと、婦云やう、君の先祖野路の姓のはじめ、第一代は一の座におはします、其容ち鬼王の如し、其次々は天地に滿歸りて座に在らず、君の祖父祖母父母姉弟おなじ所におはします、自は姑の右の方に座し侍べりといふ、また問けるは、斯く住所定まりて、神靈物知る事侍べらば、如何で本の容ちの中に立返りて生給はざるや、妻答へけるやう、人死して魂は陽に歸り魄は陰にかへる、司命司錄の官ありて皆記し留め、容ちは土となる、更に鬼錄に載せられて心のまゝに歸さず、譬へば夢の中には我身の在る所を覺

へず、魂魄斗りさま〴〵の事を見るが如し、みづから死して後は死せし所を覺えず、葬禮の場をも知らず、容ちの在る所をも知らずと云ふ、歎愁へて物語するほどに、夜もはや深過たり、又問けるやう、死して黄泉に集る男女互にに夫婦となる事ありやといふ、答へて曰有る事はあれ共、道を知る男は二たび妻を求めず、妻死して後に又行逢て語らひ、貞節の女は重ねて夫を持たず、婆婆の夫死して後に又集りて夫婦となる、それも心だて邪に、漫りに惡を作る者は、死して後、男も女も地獄に落され、夫婦となる事協はず、譬へば世の人科をゝかせば牢舍に入られて、夫婦一ところに住む事協はざるが如し、自をも西の國なる高家の人の妻にせむと計らはれしを、貞潔の心ざし有ゆへに、逃れて獨住侍べりと云、忠太いとゞわりなく悲しくて、千夜を一夜に今宵は殊更夜も長かれと侘ける中より、鳥の聲鐘の音、はや明方の横雲より、遠近人の袖見ゆる比に成しかば、妻泣々小袖の衣裏をとき、形見に殘して、

わかれてのかたみ成けりふぢ衣
ゑりにつゝみしたまの泪は

忠太涙と共に形見の物受取、黄泉の中にも忘れ給はずば、是を見て慰めとせよとて、白銀の香爐を取出し、妻に與へつゝ、

なき魂よことなる道にかへるとも
おもひわするな袖のうつり香

さて重ねてはいつか逢瀬の時成べきと問ひければ、今より四十の年を經て、長き契を待べき也とて、聲も惜まず泣き叫び、出で行く姿はをのづから、朝明けの霧間に隱れて失せにけり、忠太今の世の中あぢきなく、髮そり落し衣を墨に染め、諸國行脚して住所を定めず、後ち終には高野の山に登り、經讀み念佛して、妻の菩提を弔ひ、一座花臺の往生を願ひけり、

伽婢子卷之四終

伽婢子卷之五

○和銅錢

京都四條の北大宮の西に、いにしへ淳和天皇の離宮ありける、爰を西院と名づく、後に橘の大后の宮仕給へりと云、時世移りて宮殿は皆絶えて僅に名のみ殘り、今は農民の住家となれり、文明年中に長柄の僧都昌快とて學行すぐれたる僧あり、世を厭ふて西院の里に引籠り、草庵を結びて靜かに行はれしに、或日怪しき人尋ねて入來る、年五十許り、其姿甚だ世の常ならず、頂圓くして下に角ある帽子をかづき、直衣の色淺黃にて其織りたる糸細く、輕らかに薄き事蟬のつばさに似たり、自ら秩父和通と名乘りて、僧都とさし向ひ坐してさま〴〵物語りす、我は元是武州秩父郡の者、中比都に上り、それより本朝諸國の內、行かざる所もなく見ざる所もなしと云、僧都心に思はれけるは、是眞の人にあらじと推量りながら、しば〳〵問答して時を移す、眞言三部の秘經、兩界の曼荼羅、印明陀羅尼、灌頂の事までも、其深き理を陳ぶるに、僧都未だ知らざる事多し、それより世の移り行く有さま、昔今の事親あたり見たるが如くに語りけり、僧都問けるは、君の帽子は本朝の制法に似ず、外圓くして內方なるは何故ぞやと、和通答へけるは、凡そ天地萬物の形品々ありと雖、つゞまる所は圓き方なる二つの外なし、我外を圓かに心を方にす、天の形ちは圓く地の形ちは方也、圓きは物にかたよらざる所、方なるは物の正しき所也、されば我が道は萬物に偏らずして、しかも萬物にはづれず、正くして曲り歪まず、是を現はして頭に戴けりと云、僧都の曰、君の直衣は甚輕く細して薄し、是何れの國より織出せると、和通答へけるは、是五銖の衣と名付く、天上の衣は三銖といへども、下天の衣は皆重き五銖六銖なりといふ、僧都、さてはいよ〳〵人間にあらずと思ひて、重ねて問けるは、君まことは如何成る人ぞ名乘り給へと云に、此人打笑ひ、僧都の道心深きによりてこそ來りて物語はすれ、我名を名乘るには及ばず、やがて名乘らず共知ろしめされむものを、今は日も暮方也いとま申さむとて座を立て出る、其行く跡を認て見れば、庵の東の方二十間許りにして、竹藪の前にて姿は見失へり、

明日里人を賴みて、其所を掘らせらるゝに、三尺許りの下に一つの箱あり、其中に錢百文を得たり、其外には何もなし、僧都是を取りて見るに和銅通寶の古錢なり、つら〳〵思ふに、秩父和通は此錢の精なる事疑ひなしとて、地を掘りける里人を呼て、僧都物語せられけるやう、此人の形ち初めより怪しみ思へり、今是を案ずるに、昔本朝人王四十三代元明天皇の御宇、七月に武州秩父の郡より初めて銅を貢る、其時の都は津の國難波の宮に在しませり、是によりて慶雲五年を改めて、和銅元年と改元あり、此年始めて貢りし銅を以て錢を鑄させらる、されば今此和銅通寶の古錢は、其時の錢成べし、帽子の外圓く內方なるも、是れ錢の狀也、靑き色のひたゝれは、是れ銅の衣ならん、五銖の重さは、錢の重さを顯らはし、和通と名のりしは、和銅通寶の略せる名也、秩父の者と云ひしは、もと銅の出初めし所也、それより都に上り、諸國周ねく巡り見たると云けるも、錢となり諸國に遣ひ渡されし事なるべし、それ錢の形ち外の圓きは、天に形どり、穴の方なるは地にかたどり、表裏は陰陽なり、文字の數四つは四方にかたどり、其年號を現はして天下に賑はす寶とす、錢は是れ足なくして遠く走り、翅なくして高く揚る、容曲わろきも錢に向へば笑ひを含み、詞少なき人も、錢を見ては口を開く、杜預に左傳の癖あり、樂天に詩の癖あり、樊光は錢の癖ありといへ共、錢の曲癖は人每にあり、欲深き者錢を見ては飢て食を求るが如く、貪り多き人錢を得ては病人の醫師に逢に似たり、誠に寶なりとて打笑ひ、彼の百文の錢を分ち里人に與へ、自ら眞言陀羅尼となへて供養を遂げらる、里人それより家々賑はひ豐かになりて、僧都を敬ひかしづきしが、後に山名が亂に逢ふて里人皆散々になり、僧都も行方なく、古錢も皆とり失なへりといふ、

○幽靈評₂諸將₁

甲州の郡內に鶴瀨安左衞門と云者あり、そのかみは惠林寺の行者にて、後に安藏主と名付しが、武田信玄に取り入て、心ばせ才覺ありければ、俗人になされ小知給はり、鶴瀨安左衞門とぞ云ける、永祿丙寅七月十五日、盂蘭盆供の營みしつゝ、甲府に出て家中拜禮の事相つとめ、日已に暮がたになりて、惠林寺の快川和尙に對面せんとて、西郡に赴き侍べりしに、如何した

りけむ、召連たる中間小者跡を見失ふて、一人も來らず、鶴瀨只一人ゆく〳〵惠林寺に至りしかば、門外にて多田淡路守に行逢ひたり、鶴瀨思ふやう、是は信玄公秘藏の足輕大將にて、武勇力量已に家中にゆるされ、名を近國の諸大將に知られ、信州戸隱山に於て鬼を切りたる程の者なるが、去ぬる癸酉極月廿二日に、正しく病死せられたり、それに只今行逢たるは、若し夢にてやあるらんと怪みながら立よりければ、いざ惠林寺の庭に五三人集り、聖靈祭りの送りを營むに能き序でなり、立入て遊び給へとて打つれて、門の内に入たりければ、寺の庭に莚しき渡し中間小者ばらりて越後の長尾謙信の家臣直江山城守、北條氏康の家臣北條左衞門佐、武田信玄軍法の師範山本勘介入道道鬼出來れり、山本は上座にあがり、直江其次にあり、北條左衞門其下に坐して、さま〴〵軍法の事共互に物語りす、北條左衞門云やうは、そも〳〵武田信玄は、智謀武勇を兼備へて思慮深く、軍立いつも堅固にして、兵氣撓まず勢ひを失なはず、敵に向ふて戰ふ時は流水の如く、勝軍にいたりては晴天に星の粲然たるに似たり、氣象の潔き事水精輪に例ふべしと雖も、自ら武勇に誇りて、諸將に和を求めず、獨り戰國の間に挿められて、一生更に敵の爲に苦めらる、其の軍さの備へ虚實の勢分を守るといへ共、更に奇正の術を兼ざる故に、小利を得て大に勝事なく、戰ひ危からずして又大なる失もなし、其の威は高く輝きながら草創の功を遂げず、只我領國の境を犯されざる斗にして、終に其大業を立て給はずと云、山本勘介入道云やうは、何れの諸將も皆一德なきはなし、たゞ一術を守りて偏におぼれ、變化無方の理を忘れて、大功を遂げたまはず、されば長尾謙信は北越無雙の猛將なり、其性强毅にして健なる事肩を並ぶる人なし、其身は越後に在ながら威勢を東海北陸に輝やかし、敵と戰ふては破らずと云事なく、軍立尖にして變化奇正の術更に我物として、大軍を使ふ事又我手足を働すが如し、大敵前にあれども昆蟲かとも思はず、急に打て散らす事砂を捲くが如くにし給ふ、誰か其鋒に向はんや、されども只武勇を逞ましくし給ふのみにして、さしもなき小軍に兵を費やし、後を顧みて内に備ふる固なきを以て、其身勇義を專とし、軍兵忠信ありと雖も

つゐに大業成がたしと云、直江山城守つく〴〵と聞て、されば何れの諸大將にも、譽る所には其德現はれて靑天にも揚るべく、誹る所には瑕出て深淵にも沈むべし、譽るも誹るも共に一定しがたし、彼も一時也是も一時也、只天命に依らずしては大業は遂ぐべからず、其中に北條氏康は其生れ付、尤も溫和にして能く人をなづけ、篤實にして又道を修め、軍立徐かにして本を固くし、敵に勝に及を借らず、我勢を量りて兵を費さず、天の福いを待つて危き事をせず、此の故に取事遲しと雖も得て之を失はず、常に權威を內に隱して謙讓を外に施すと雖も、時に望みては亂將にしかず、氏康は只和を好みて兵を惜しみ給ひし故に、武勇は更に信玄謙信に後れたるに似たり、されども守文の德のみ勝れて草創の功業を勵む事の怠りあり、玆を以て遂に大業を立給ふ事協はずして、其威名聊か低(うなだれ)たるに似たりといふ、其時多田淡路守進み出て、諸將の評議一端其理ありといへ共、我等如何で名將の奥義を量らひ知らんや、定めて深き心あるべし、それ千丈の堤も螻蟻の穴より崩るといへり、信玄謙信氏康は、今戰國の中諸國諸將の間に尤も秀で、良將の名ありと雖、亦諸國の間に黨を結び權を立つる輩甚多し、若其中に謀不意に起りて、小身の大將に倒さるゝ事あるまじき時節にあらず、玆を以て信玄謙信氏康の三將は、鼎の足の如く峙ち、互に威を振ふといへ共、傍らに小身仕出の大將を懼れざるにあらず、近頃尾州織田信長、已に草創大業の志ありて近國を順がへ、漸々大軍に及べり、弘治丙辰の年駿河の今川義元、さしも猛將のほまれ有りて、しかも大軍なりしを一朝に亡したり、信長深く謀り遠く慮り、剛强武勇智謀兼備の信玄に對して、親しみ深く緣を求め、伯母を秋山伯耆守が妻となし、其姪を武田勝賴の室に納れ、使節隙なく甲府に遣はし、さま〴〵音信を盡して只管君臣の禮の如く、信玄の機を取り追從せらるゝとは、是れ暫く信玄の武勇を宥め、後ろを心安くして前を打從へんとす、一には光源院義輝公の御舍弟義昭公をとりたてゝ、義兵を擧ると號して、軍兵を集めて敵を打ち、二には軍の法に本末前後あり、まづ五畿內の弱兵を責伏て勢ひを增し、東海北陸の强敵を宥めて後に討たんとす、三には中國西海の弱敵には武威を鳴らして大に威(おど)し、東北の剛敵をば謙下りて宥め、

已に家中漫こり軍兵多く、人に先立て京都を鎭め給へり、今の世には大業定めて信長に立べし、信玄謙信氏康は、徒らに我領國に勞れ死給はん者をと云ふに、座中此事を感じける處に、上州蓑輪の城主長野信濃守入來れり、是は關東の上杉憲政の家臣、譜代の侍として智謀無雙の者なるが、武田信玄と挑戰ふ事七年にして、終に病死せしかば、其の子息右京之進いく程なく、蓑輪の城を信玄に打取られて沒落したり、然るに信濃守今又此座に來り、左右を見廻しけるに、山本勘介入道は一の上座に居て、最無禮なり、長野は會釋もなく勘介入道が座の上にあがり、刀の柄に手を掛て云やう、山本が傍若無人の有樣こそ心得られね、汝は如何なる大功を成して今かく高上の擧動を致すぞやとて、則ち山本を責ていふやう、そも〳〵汝に三の大罪あり、世の人更に知らず、此の故に千年の咎の下まで、恣に軍道鍛煉の名を盜めり、今我これを顯はして、汝が罪過を隱さすべからず、山本勘介更に色をも失なはずして、さらば疾々の給へ、つぶさに聞侍べらんといふ、長野云やう往昔信玄若かりし時、色に溺れて國家を忘給ひし時、板垣信形よく諫めて、心さし漸く改まり、敵を打ち國を併する謀より外に他念なかりし所に、信州諏訪の祝部賴重降參して旗下に屬し、甲府に來りし處に、是を打ちて城を奪はずば馬の足を立べき地なし、然らば信州終に手に入るべからず、賴重をたばかり殺して、信州手づかひの地を求め給へと、汝之を勸め參らせ、あえなく降參の人を殺させたり、窮鳥懷に入れば獵者も殺さずとこそ云に、從來る賴重を打事は無道不仁の心ならずや、若是は軍道の習ひ智略の一つとも云べき歟、情なき所爲是更に武道の本意にあらず、虎狼の心に齊しと云べし、それに賴重が娘容顏美麗なるを以て、信玄已に色に惑ひ、召入れて妾にせむ事を思ひて、勘介に密談せられしかば、なにか苦しかるべきと云ひたりければ、迎ひ取りて妾とせらる、汝が佞奸甚だ惡むべし、人の眞性を破り正道を失なへり、眼前に首を白刄の下に刎られたる敵の娘を取りて我妾とし、他の憂を忘れて己が愛に供ふる事は、是れ仁者のする所にあらず、されば汝、其時何ぞ正理を以て諫めざる、彼妾の腹に勝賴誕生あり、太郎義信のため繼母として、しかも辯佞利根の女なれば、繼子義信を惡みてさま〴〵讒言す、信玄

は智慮淺からぬ人と雖も、色に陷りて心を蕩され、讒を信じて義信を殺し、其外譜代忠義の家臣飯富兵部を初めて八十餘人の士、多年舊功の輩科なくして殺されし事、ひとへに其源は、汝が奸曲を以て諫むべきを諫めず、非道に隨て口を閉ぢたる所也、是一、信玄の父信虎は强毅不敵の人にして、偏屈無顧の性あり、信玄いまだ晴信と云し時これを追放して、次郎信繁に家督を讓らんとせられしを、今川義元は信玄の舅なれば是に心を合せ、信虎を栖出し、信玄家督を奪ひ取られたり、信虎は駿河に浪牢して氏康の養を受、幽かなる有樣にて月日を送られたり、後に信玄我身の不孝を思ひ知りて、信虎を甲府に呼返し、孝を盡さんと思はれしを、汝之を諫めて、信虎歸り給はゞ又惡心を以て家を亂さるべし、只其儘に捨置給へとて今に駿府に流浪せさせ、後代までも不孝の名を信玄に殘す事、是汝が奸曲不義の所也、是二、川中島の合戰の時、今日の軍の支配、勘介よく謀るべしとて軍謀を任せられしに、徒らに謙信の陣を西條山に見やりて、川端に備を立てず、夜の間に川を謙信に渡され、露許も之を知らず、俄に驚きて備を立てしに、武田方の右は謙信の爲め左に受けて、打易き所なるを、義信望月なんど云尫弱の大將を右の方に備へさせ、一時の間に破られたり、謙信は急に取挫がんとて、自ら眞先に進みて信玄の本陣を切崩されたり、西條山に向けられし軍兵引返してこそ、信玄已に危きを逃れ、萬死を出て一生を全くせられ侍れ、典廐信繁諸角豐後初鹿源五郎を初て大勢打れたり、軍は勝に似て人數多く失ひ、汝も耻て打死せしは、是もと備へを誤る故也、何をか軍法鍛煉の師範とすべき、是三、然れば汝は三州の牛窪より出て、武道修行とて諸國を廻り、四國の尾形に逢ひて軍法を傳授し、城取の繩張に大事を得たりと云、抑汝が繩張の城今に至りて何國にありや、今川家に嫌はれて甲府に吟よひ、信玄に抱られて所知につき、之を花光して駿河に行たるは若輩の所行、世の笑種となれり、幸に武田の家に用ひられ、軍法師範の名を盜みて星霜は重なれども、信玄更に大業の功なし、然らば汝に於て又何の勳功ありと云はん、汝は我が敵族也、目前に見ながら相宥む、是地府の大帝許されざるが故に、如何ともすべき道なしと云に、山本入道一言の返答にも及ばず、座を退きて長野に讓る、

長野重ねて云やう、諸家の名臣歴々在すれ共、中にも我は一城の預り也、此故に一の座を占侍べり、尾籠の舉動は曲げて免るし給へと云、多田淡路守、今はゆめゆめ遺恨あるべからず、萬事休し去れば一夢の如し、只酒のみて遊び給へとて酒肴取出せば、互に數盃を傾けたり、長野歌ふて曰、

義重命輕如二鴻毛一　肌骨今銷沒二艾蒿一
山宜レ平重淵宜レ塞　殘魂尙誓節操高

北條左衞門佐うたふて曰、

泉路茫々隔二死生一　落魂何奈貽二武名一
古往今來凡是夢　黃泉時レ耳聞二風聲一

直江山城守歌ふて曰、

物換星移幾度秋　鳥啼花落水空流
人間何事堪二惆悵一　貴賤同歸土一丘

山本勘介入道は一文不通の者、只軍道に鍛錬して餘事を知らざりしが、今此席に連りぬれば、僅に思ふ處云はずして止なんやとて、

平生智略滿二胸中一　劔拂二秋霜一氣吐レ虹
身後何讒論二興廢一　可レ憐怨魂嘯二深叢一

多田淡路守うたふて曰、

魂歸二冥漠一魄歸レ泉　却恨人世名聞權
三尺孤墳苔累々　暫會二幽客一惠林邊

鶴瀬是を見聞くに怪しさ限なし、そも夢か夢にあらざるか、庭は惠林寺の庭にして、其事は故人の事也、然らずは我死してこゝは又迷途か、子細を尋ねばやと思ふ處に、貝太鼓の音聞えしかば、座中の輩心得たりとて、傍なる太刀かたなをつとりつとり、走出るとぞ見えし、一人殘らず跡方なく消失せて、鶴瀨只一人惠林寺の庭に坐して、夜はほのぼのと明けたり、あまりの不思議さに急ぎ甲府に立戻りて、信玄公に對面して密かに此事を語るに、信玄あざ笑ひて、汝は狐にばかされて、かゝる化事を見たりけるかと無興し給ひしかば、鶴瀨大きに恐れて郡内に歸り、自ら筆にしるして箱の中に留めしとかや、

○燒亡有二定限一

西の京に富田久內と云者あり、若き時より情深く、慈悲あつき心ざしあり、或日家を出て北野の天神にまうでたり、下向の時、茶店の床に踞て茶飮みける所へ、十二三許と見ゆる小法師來りぬ、容の色靑ざめて瘦勞れたり、久內問けるは、小僧はいづくの人ぞと云

ふ、答て云けるやう、某は東山邊にある者也、今朝より此處彼處使となりて行巡り、まだ何をも食はず、師匠坊主の命に從ふ許り身も心も苦しき事は、又も有べからずといふ、久内聞てかはゆく覺え、餅買て食はせなんどしけり、彼の小法師も久内も打つれて茶店を出て、內野の方に出る、右近の馬場にして、かの小法師云やう、實は我は人にあらず、火の神の使者として、燒亡火事の役にあづかる、君は情深き慈悲者なれば語り侍べる、明日は北野內野西の京皆悉く燒亡ぶへし、君が家は燒くまじけれども、私に是を諜ふ事かなはず、早や繩張分量の數に入たり、君早く家に歸りて、財寶家の具取のけて他所に移り給へとて、我は又跡より遲く行かんとて失せにけり、久内不思議の事に思ひ、急ぎ家に歸り、財寶家の具共持運び他所に移しければ、人皆怪みて子細を問ふに、更に語らず、强て問ければ、かう〳〵の事と語る、之を聞く人嘲わらひて、何條狐にたぶらかされて、有べくもなき事を聞いて歸り、あはてふためきて家の具を打外づし、資財雜具を取り運ぶ、定めて普請の料を費やさん爲かなんど訇り笑ひたり、今年三月のころ、西の京の住人等、東の京の住人等と酒麴賣買の事につき、座を組みて賣りけるを、座を破りける故に公方へ訴へたり、其時の管領畠山入道德本此訴へを聞くに、東の方に理ありければ、對決及びて、西の京の方法度を反く科に落て負けたり、西の京の酒麴賣る奴原恨み憤り、其外のあぶれ者共多く語らひ、北野の社に集りて入籠る、管領さま〴〵申さるゝ旨ありと云へ共更に聞きいれず、是非に東の京の酒かうぢの者共を打果たさんとす、是に依て侍所京極某に仰ふくめ、武士を遣はして、彼輩を搦め捕りて牢獄に入れんとするに、とられじと防ぎ戰ひて、文安元年四月十二日、社に火をかけ自害しけり、折節魔風吹出て、社頭僧坊寶塔廻廊一時に灰燼となり、餘煙民屋に燃付て、西の京こと〴〵く野原となりぬ、

○原隼人佐鬼胎

甲州武田信玄の家臣原隼人佐昌勝は、加賀守昌俊が子なり、父當國高畠といふ所より出て、信玄にめし使はれ度々の勳功を顯しける、子息隼人佐に敎へけるは、鳥獸這ふ虫の類まで己々一つの得手あり、一藝なき者はこれなし、況や人と生れ、殊更侍たらむ者は、

弓矢の事につけては一つの得手をよく鍛錬して、是を以て主君の所用に立て、御恩を報じ奉るべし、徒らに俸祿を給はり、飽まで食ひ暖に着て、邪欲をかまへ義理を知らず、一藝一能もなき者は畜生にも劣りて、是は天地の間の大盜賊なり、日月雲霧草木まで各皆其の益あり、無藝無能にして、人の爲益なく却て害になる者あり、かまへて能く心得よと遺言せしとかや、されば父が後に信玄に仕へて、忠節私なく軍功の譽れあり、其中に隼人はいつも諸軍に先立ち、敵國に深く働き入時には、陣どりの場を見立て合戰の場を考へ、山川谷峯知らぬ所を、案内者もなくて是を悟り、道筋小道までも皆踏分て、先登を致すに終に過ちなく、諸侍皆疑ひを殘さずとなり、他國と雖も陣所戰場よく見立て、閑道水の手を考ふるに更に過ちなき事、神に通せしかと人皆怪み思ひけり、そのかみ原加賀守が妻は邊見某が娘也、加賀守は諸方に馳向ひ、陣中に日を渡り月を重ね、家にある事稀也、其家は上條の地藏堂の邊りにあり、或時妻産に臨みしが、甚苦み惱みて終に墓なくなりしを、加賀守大に歎きながらすべき樣なく、法成寺の後ろに埋みて、塚の主となしけり、妻其死する時、法成寺の地藏堂に向ひ手を合せ、年月日比念願し奉る、かまへて本願誤り給ふなとて、地藏の寶號を唱へて終りぬ、加賀守も同じく此菩薩に歸依して、妻が後世みちびき給へと祈りしに、死して百日と云ふ夜半許りに、八旬許りの老僧眉に八字の霜をたれ、鳩の杖にすがり水精の數珠つまぐり、加賀守が家の戶を敲き給ふ、開きて見れば、死したる妻蘇へり、老僧に連れられて來れり、大に怪しみながら內に入て、扨老僧は如何なる人にて在しませば、かく有難き御事ぞと問ければ、我は法成寺の內に住者也、今宵あからさまに堂より出しかば、塚俄に崩れて內より女房の出たり、何者ぞと問へば加賀守が妻と云、此故につれて來る、よく供養せよとて搔消す如くにうせ給ふ、不思議の事に思ひ人を遣はして見れば、塚は崩れてあり、扨はとて粥なんど食はせけるに、初めはうと〳〵として物の覺えなきがごとし、漸く七日の內に日比の如く成りしかども、只明らかなる所を嫌へり、次の年男子を生めり、此子三歲の時、妻或日の暮方淚を流して云ふやう、我は實は人間にあらず、君と未だ緣深かりし故に、上條の地藏菩薩、冥官に仰

せて、魂を免るし放ちて、三年此かたの契を結ばせ給へり、今は緣已に盡侍べり、暇たびて歸るべし、宍賢我塚を捨給ふな、跡よく弔ひてたべとて、子をば置ながら行方なく失にけり、塚を見れば崩れたりと覺えしは幻にて、草茫々として生茂れり、地藏菩薩の御方便申すも愚なり、信玄此由聞及び給ひて、法成寺の地藏堂を作り改め供養を遂げたまふ、それより加賀守ふたゝび妻を迎へず、彼の男子は原隼人佐なり、十八歳にて初陣せしより、萬づ神に通ぜし如く、奇特の事多かりしも、子細ある事なり、

伽婢子卷之五終

伽婢子卷之六

○伊勢兵庫仙境に到る

伊豆の國北條氏康は、關八州を手に入れ威勢大にふるひて、しかも武勇の譽れ世に高し、ある時浦に出て遠く南海にのぞみ、澳(おき)の方を遙に眺めやりて仰せけるやう、昔鎭西八郎爲朝伊豆の浦にながされ、夕暮かたに鳥の翔けりて、澳をさして行くを見て、定めて海中に島ぞあるらん、しからずば鳥のかけりて、夕暮がた沖に赴き飛べきやとて、舟を出して鳥の飛行方に漕ぎ行きしかば、鬼のすむと云ふ島に到りぬ、これ今云ふ八丈が島なるべし、それよりこのかたは、誰人の渡りしとも聞えず、願くば誰か八丈が島に行きて、その有樣見て歸る人あるべきやと仰せければ、坂見(さかみ)岡江雪(をかこうせつ)伊勢兵庫頭兩人すゝみ出て、我等かしこに赴き、島の體よく見てかへり侍べらんと、いと易くうけごひ、大船二艘こしらへ、江雪兵庫兩大將として同心二十騎づゝさし添へ、吉日を擇びて海にうかび、南をさして押し出す、心のうちこそ遙かなれ、伊豆の沖に

は七島ありと云へり、何れとは知らず島近く押寄せし處に、俄に風變り浪高く揚りて雪の山の如し、江雪は兎角して一の島に着きて上りしかば、年比聞傳へし八丈が島に着き、島の有樣人の粧ひよく見巡りて歸りぬ、兵庫頭は吹放されて南を指して行、夜晝の境もなく十日許行きければ、風少し吹弱り一つの島に流れ寄たり、岸に上りて見れば、岩石峙て靑きは碧瑠璃の如く、白きは珂雪の如く、黃なるは蒸栗に似て、赤きは紅藍花に似たり、其外種々の奇石、日本の地にしては未見ざる所也、草木の有樣又目馴ざる花咲き木の實結べり、怪き人磯近く出たる見れば、頭に羅の帽子を被き、身には諸の草木をり付たる直垂に、花形付たる履を穿きたり、年比二十許なるが、色甚だ白く、眉毛高く鐵漿黑う付けて、形はもろこし人に似て、物言は日本の言葉に通ず、兵庫頭を見て大に怪み、如何なる者ぞと問ければ、兵庫有の儘に語る、此人云やう、こゝをば滄浪の國と名づく、日本の地よりは南の方三千里に及べり、是より觀音の淨土、補陀落世界も程近し、いにしへ淳和天皇の御時に、橘の皇后の仰せに依て、惠蕚僧都と云法師ばかりこそ、彼の補陀落世界には渡りけれ、そのつゐでに此島に船をよせて物語せられしと聞傳へたり、さしも遙かなる海上を凌ぎてこれまで來れる、さぞや疲れ侍べらん、こなたへわたりて心を休められよとて、家につれて歸り、九節の菖蒲酒、碧桃の花蘂酒を出し、玉の巵をもつてこれをすゝむ、兵庫頭數盃を傾けしに、神氣爽やかに覺えたり、あるじ物語する事、保元平治の間の有樣、今見るやうに述べきこゆ、その家の有樣金をちりばめ玉を飾り、家材雜具に到るまで、みな此世の物とも思はれず、床の上に方二尺餘りの石あり、松風石と名づく、內外透通りて玉の如く、色は靑く黃なり、七寶の盆にのせて又七寶の砂を敷きたり、その石谷峯の道分れ、瀧の白玉とび散るかと怪しまれ、たゞ水音の落たぎらぬぞ石の紋とはおぼえけれ、まことに絕世の盆山也、石の腰より一本の松生出て、高一尺七八寸もありなむ、年經りたるかたち、さこそ千とせの春秋をいくかへり知ぬらんと、昔の事も問はまほしきに、枝の間より涼しき風吹き出でゝ座中に滿ち、枝かたぶき葉動き颯々たるよそほひ、九夏三伏の氣も自らさめぬべし、玳瑁の帳臺には馬腦の唐櫃あり、大さ

三尺ばかり、その色茜の如くにして、鳥けだ物草木の圖いろ〳〵に彫りつけたるは、更に人間の所爲にあらず、又傍に一つの瓶あり、大さ一石あまりを入るべし、其の色紫にして光かゞやき、内外透とをりて水精の如く、厚は一寸ばかり、輕きこと鴻の毛をあぐるに似たり、内には名酒をたゝへて、上清珍歡醴と云ふ簡を付たり、その傍に大き二斗をうくべき壺あり、その色白く、光り輝けり、内に名香をいれて、龍火降眞香と云ふ簡あり、又百寶の屑を擣篩て壁にぬり、瑤の柱黄金のとばり、銀の檻高く見上ぐる樓あり、降眞臺と云ふ額をかけたり、庭のおもてには見なれもせぬ草木の花咲亂れて、二三月の頃の如し、孔雀鸚鵡の類ひ、其の外色音面白く名も知らぬ鳥多く、木々の梢草花の間に鳴さえづる、十五間の廐に立ならべたる馬共、或は毛の色碧なる或は紺青色なる、その中に又連錢なる白き黒き樣々の名馬、いづれも五寸六寸、みな龍馬のたぐひなり、その飼ところの秣は、茅に似て白き花あり、更に餘の草を混へず、碧瑠璃の色をあざむく菓、秦珊瑚の光りをうつす栗、みなその大さ梨の如くなる、枝の間なく生こだれたり、垣の外を見れば金闕銀臺玉樓紫閣、鳳の甍、虹の梁、雲を侵して立並べり、音樂雲にひゞき異香砌に薰ず、山際に行きて見れば、峯より落つる瀧つぼに湛へたる水緑にて、流れて出る川瀬の傍に池あり、二町四方も有りなん、其水甚強くして金銀といへ共沈まず、石を投れ共猶水の上に浮上る、此故に鐵を以て舟を造り、國人是に乘りて心を慰む、水底のいさごは皆金の色也、井出の山吹水に移り自ら金花咲く粧ひ、今ぞ思ひ合せらる、水中に魚あり、其色赤くして金の如く、皆各〻四の足あり、其あたりは廣き野邊なり、金色の莖に紺青色の葉有る草多し、葉の形は菊に似て牡丹の如くなる花あり、花の色黄にして内赤し白き糸の如くなる蘂ありて糸房の如し、風少し吹ば、其花動き廻りて蝶の飛ぶに似たり、國中の女は是を採りて首の餝りとす、十日を經れども萎まずといふ、凡國中の男女何れも齡廿許にて老人は一人も見えず、其顏容の美はしき事日本の地にはいと稀也、兵庫同じくは此所に住ばやと思ひしかども、主君の仰せによりて舟を出し、風に放されて爰に來り、世に類ひなき事を見つゝ、此の儘歸らずは不忠不義の名を呼れ、身の後までも耻を殘す事も口

惜し、如何にもして古郷に歸らむと思ひ、あるじに斯斯と云ければ、主大に感じて、さらば凌波の風を起して送り參らせん、是まで來り給ふしるしには、馬一疋鸚鵡一羽を舟に入れたり、其より暇乞して舟に乘ければ、栗棗やうの物多く青磁の鉢に盛り與へ、纜ときて押出せば、順風徐々として吹起る、已に帆を引上れば、一日の程に伊豆の浦に着きたり、舟より上りて先城中に參りしかば、氏康ははや病死あり、氏政世をとりて國家を治めらる、兵庫大に歎き悲しみ、涙と共に彼の島の物語りして、昔垂仁天皇は田道の間守に仰せて、常世の國に遣し香菓を求給ひし、是今の橘也、已に探りて歸りしかば、帝は早や崩御まします、間守大に歎き悲しみ、我心ざしの至らぬ故也とて、泣死侍べりといふ、氏康已に病死ありて只今歸來る事、是れ心ざしを失ふ也とて腹切て死たり、兵庫頭が物語を書留め置れて後に世に廣まれり、

○長生の道士

安房國里見義廣は、武勇を以て國家を治め、其威漸く盛りならむとす、其比朝夷郡より老翁一人めし連て城中に來る、其年を尋ぬれば、さらに數百年に及ぶといふて年の數をば覺えず、髮鬚は白きを變じて黃金絲の如く、眼の色碧く耳長し、顏色は未だ五十許りの男にして、髮は垂れて坐すれば地に溜り、名を問へば岩田刀自と號す、後鳥羽院の御時に信州奈須野の狩に、三浦大輔に具せられて狩場に赴く、九尾の狐を殺せし事、砒霜の殺生石を碎きて人數多く毒に中てられ、大熱狂亂して死せし事、今見るやうに語る、其時年十八歲、狩場の跡に父母兄弟皆死せしかば、是を物憂き事に思ひ山に籠りて道を修す、何方共なく仙人とおぼしき人來りて藥を授けたり、一粒の青丸を服せしより、身も輕く心も爽かになりし所を、彼仙人我を召連れて空を翔り、太山の峯に行、其所は何くとも知らず、七寶の床の上に坐せしめ、丹栗の赤き栗、霞漿の霞の漿を與ふ、我之に醉て死せしかば、玄天の甘露半合許を飲ませしに、醉醒て心いさぎよし、其時仙人語りけるやうは、汝鶴龜を見ずや、氣を伏し息を靜にす、此故に神氣耗散せず命至りて長し、又病ある事なし、今より九十年の後、兩眼の色青くなりて光りあり、よく闇の中にも物を見るべし、一千年にして骨を易へ、二千年にして皮を脫け毛を易ゆべし、是れよ

り二たび形を衰へず齢傾かず、命更に限りあるべからず、凡世の人、内には七情の氣欝滯し、外には風寒暑濕に陷溺し、色を恣にし食を濫りにす、心火亢ぶり君火亂れ、内に五臟六府をこがし、九百分の宍を爛かし、外には四十九重の皮、八萬の毛の孔空しくひすろぎ、十四の經十五の絡皆もぢれゆるまり、三百六十の骨つがひ悉く離れ、諸病是より生じ、壽命此故に縮まり、終に百年を保つ人世に稀也、其外諸々の憂へ萬の悲み、かはる〴〵心を纏ひ縛る事、夏の蟲の燈火に入るが如し、名の爲利の爲に物思ひ絶ゆる事なし、流れの魚の毒餌をはむに似たり、徒らに魂勞れ精くづをれ、僅に方寸の胸の間に妄念の波高く揚り、互に妬み害ふ事猛き獸よりも烈し、此故に佛經には世界を以て火宅と名づけ、道教には此身を以て大なる愁の元とす、已に是を免かれ人の世の中を見れば、沸湯の如く凄じく覺ゆ、何ぞ身を捨てゝ其間に置くべきや、已に三尺の形を練りて一寸の心を磨く時は、天に登り地に入り雲に乘り水を走り、千變萬化更に無方にして飛行自在なる事、縱令萬乘の君も及ばず、況して世の常の人誰か之に勝らむとて、其方を敎へられしに、我それより當國の山中に歸り、深く籠りて習ひ侍べり、食は松の葉を採り茯苓を食ひ、藥は又兎絲子茅根を求め、石を煉りて膏を取り、霜を煮て飴となし、百花の露を凝して是を煉り、しば〳〵服するに、長く五穀を斷ち更に飢る事を覺えず、心を松風朗月に嘯き瀧水に慰むれば、欲もなく怒もなしといふ、義廣問はれけるやう、我も亦此の仙術を勤めば習得べきやと、答へて曰、心を沈めて我物とし、色を遠ざかり欲を離れ、味ひ美き食を退け、樂みも悲みも只是一つにして心に留めず、德を施して偏頗なくば、自然に天地の惠みに協ひ、日月と齊しく壽長く侍べらん、目に濫りに見ず耳濫りに聞かず、聲濫りに出さず身濫りに使はず、行くも止るも立も臥すも、只濫りにせず常によく守るべしと云ふ、義廣聞て、扨は是人間の交りは此道のさはり也、さはりを除て勤めんとすれば鹿猿の如くなり、然ば長生して詮なしとて、さまざま食を進むるに刀自更に食はず、只酒よく飮といへ共醉ひたる色なし、其形をかしげに見苦しき事を、若き女房達大に笑ひしかば、刀自打笑ひて、女房達悔み給ふなとて指ざしけるに、十七八廿四五許の女房

達十五六人、俄に變じて姥となり、膚は鷄の皮の如く、脊は鮫の鱗に似たり、髮白く色黑ふ腰かゞまりしかば、女房達大に驚き歎き悲しみて、涙は雨の如し、是赦し給へと手を合せ託言す、刀自、さては懲り給へとて又指ざしければ、本の姿となりたり、義廣大に怒りて、刀自を殺さむ事を謀られたり、刀自先立ちて是を知りつゝ、君此心ざしあり國運久しかるまじ、今より五百月の後、必横さまに禍あらむと書置て、坐を立かと見えし、二度其行方を知らず、追て國中の山々くまなく求むるに是れなし、義廣曰五百月は四十餘年也、我なんぞそれまでの命あらんやと、然るをよくよく見れば、百の字にはあらで箇の字也、果して五箇月の後、北條氏康の爲に鵠野臺にして敗潰しけり、抑、岩田刀自は生國如何なる所とも知らず、誰某の子とも聞えず、又其の終る所も後に知る人なしといふ、

○遊女宮木野

宮木野は、駿河の國府中の旅屋に隱れなき遊女也、眉目かたち美しく、手能く書きて歌の道に心をかけ、情の色深かりければ、近きあたりの人これを慕ひ、風流の輩悉く是に馴れざるを恨とし、好事の者皆是に契らざるを耻とす、此故に中古此方には類ひなき遊女なりとて、古の虎御前に準へ力壽に比べて、たかき賤しき同じ心に持はやしけり、八月十五日若き人々此家に入來て、月を弄び歌詠みけるに、宮木野かくぞ言ひける、

眺ればそれとはなしに戀しきを くもらばくもれ秋の夜の月

いく夜われをしあけ方の月影に それと定めぬ人にわかるゝ

此歌實に我身にとりてさも有らめと、一座の輩或は笑ひ或は感じけり、其座にありける人の中に、藤井清六といふ者あり、先祖は國司の家人にて京家の者なりしが、此所に住つきて地下にくだり、田地あまた持て富榮え、今其末に及ぶまで、府の間には富裕の人と云はれ、殊更清六は風流を好み情深き者也、父は空しくなり母一人あり、みづから妻もなく獨住みて、いとど物かなしき秋の月に嘯き、今宵しも此座に連なり宮木野が此歌を聞くに、見め容ちといひ才智かしこきに愛でゝ、價多く出し宮木野を請受て妻とせり、

藤井が母是を聞て、府中には人にも下らぬ家督なれば、如何ならん名もある人の娘をも迎へて、我新婦とも見ばやとこそ思つるに、遊女を妻とせむは是本意なけれども、よしや我子の見るべき面倒を、今は如何に云ふとも詮なし、早く呼入れよとて家に迎取りて見るに、眉目かたち美くしきのみならず、心ざま優にやさしかりければ、母限りなく喜び、假令大名高家の娘なりとも、生れつき人がましからずは何にかせむ、此女は如何なる人の末にも侍べれ、類ひなき女の道知れる人ぞや、我子の惑ひ愛でけるこそ理なれとて、世にいとおしみかしづきけり、宮木野も今はひたすら姑につかふること我實の母の如く、孝行の道更に類ひ少なふぞ行ひ勤めける、京都に叔父あり、清六が母の爲め弟也、頻りに心地煩ひしかば、死べく覺えて人を下して云けるやう、清六をのぼせ給へ、云置べき事侍べりと云に、母限なく悲しく思ひ、急ぎ上りて見よ、自ら女の身なれば飛立ばかりに思へ共そも叶はず、和殿は男なれば何か苦しかるべき、其の有様見屆けて給といふ、清六如何すべきと案じわづらふ、宮木野云やう、老母の思ひ給ふところ、此たび京に上らずば、一つには自らに心留りて叔父の事を忘れたりと云はん、二つには母の心にそむく不孝の名を受け給はん、只上り給へ、さりながら老母已に年高く病多し、君はるばるの都に行給はゞ、昔の人の言葷し、事をつとむる日は多く、親につかふるの日は少なしとかや、西の山の端に入かゝる月の如く弱り給ふ母なれば、必ず一足も早く歸給へとて、已に門出の盃取かはして、又逢べき道ながら、わりなき中は暫しの別れも悲しく覺えて、宮木野泪を浮べて、

うたてなどしばしばかりの旅の道
わかるといへば悲しかるらむ

と詠じければ、清六もかくぞ口すさびける、

つねよりは人も別れを慕ふかな
これやかぎりの契りなるらむ

とて涙にむせびければ、母聞て、あないまいましやがて歸るべき道を、是まで名殘をしみける事よとて、出したてゝ京にぞ上せける、已に都に上りしかば、叔父殊の外にいたはり、終に墓なく成ぬ、子ありけれ共幼なく侍べりしかば、妻の一族に財寶悉く預け、此子よく育て給へとて跡の事取まかなひ、それよりやが

て國に歸り下らんとせし處に、諸國の內亂れ立ちて所々に關を据へ、往來の人を通路せさせず、或は國並び鄕續き、互に出合て軍する事每日に及べり、淸六も心の儘に道をも過得ず、旅やより旅やに移り、こゝかしこせし程に一年餘に成けり、元より通路たやすからねば、互に便りを絕て生死の事も聞えず、さる程に府中の母は我子の久しく歸らざるを心元なく、朝夕に戀悲しみ、かゝるべしとだに知るならば、上すまじき事にて侍べりしを、悔しくも遣はして、生たりとも死たりとも聞ざる事こそ悲しけれとて、只泣きになきつゝ、重き物思ひの病となり、床に臥して日を重さぬ、宮木野これに事へて夜る晝の別ちもなく、藥といへ共自らまづ飮て後に參らせ、粥といへども自ら煮て進め、神佛に祈り、我身を替りにして姑の病を癒し給へと祈りけれども、更に驗なし、半年許の後今は早や此世の賴みもなく成りければ、姑則ち宮木野を呼びて、我子巳に都に赴き、世の亂に道狹くして久しく便りなし、我又重き病に苦むを、新婦として我に仕へ給ふ事、誠の子と云共如何で斯あらん、孝行なる事世に類ひなし、今は心に殘る事もなし、此恩を報せずして命空しくなる也、和君必ず子を產み給はん、我は孫をも見ずして死なむ、其子和君に孝行なる事、又今和君の我に仕へて、こまやか成る如くなるべし、あなかしこ天道物知る事あらば、此言葉違ふべからずとて、其儘絕入りて蘇らず、宮木野悲み深く、淚の落る事雨の如し、葬禮の事取まかなふて、七日々々の弔ひ其分限に過たる此物思ひに、髮かしけ肌瘦せて、餘所の見るめも憐れに覺えし、永祿十一年武田信玄駿州に發向して、府の城にとりかけ、民屋に火を放ちて燒立ければ、今川氏眞は落失らる、武田方の軍兵家々に亂れ入て、亂妨分捕して狼藉云計りなし、宮木野が眉目容貌美しかりければ、軍兵共捕ものにして犯し汚さんとす、宮木野奧深く逃籠り自縊れて死侍べり、兵共其貞節を憐み、家の後の柹の木の本に埋みけり、幾程もなく、駿府は武田の手に入て靜になり、道開けて通路容易く、海道の諸大將も和睦せし比なれば、藤井淸六やう〳〵にして國に歸りければ、駿府のありさま替はりて我家には人もなし、柱傾き軒崩れ草のみ茂く荒れまさり、老母宮木野は何地行けむとも知る人なし、門に出でゝ見れば、年比召使ひける男出來れ

り、是を呼て尋ぬるに、老母いたく煩ひ給ひけるを、宮木野我身に替らんと神佛に祈り、晝夜付添ふて看病せしに、其甲斐なく果給ふ、其後武田信玄の爲に府中を追落され、今川氏眞公は行方なし、宮木野は敵軍の手に身を汚されじとて縊れ死給ふを、兵共其貞節を感じて、後の栯の木の本に埋みしと語るに、藤井悲しさ限りなく血の涙を流し、泣々尸を掘起して見れは、宮木野が顔容さながら生て在るが如く、肌の色をとろへず、藤井は悶え焦れ、絶入々々歎け共甲斐なし、それより母の墓と一つ所に葬りつゝ、墳に向ひて花香手向て口説けるやう、君は平生才智かしこく心の色深し、人に替りて身の行ひよく道を守れり、假令死すとも世の常の人には同じからず、されば久しく音づれの絶しも我咎ならず、心に任せぬ浮世の業也、黄泉の底までも物知る事あらば、一たび我にまみえ給へとて、明れば墓に行き暮れば家に歎きて、二十日許りに及ぶ、月くらく星あらはなる夜、藤井ひとり燈火かゝげて坐しければ、宮木野が姿は影の如くにして出來り、君が心に念願する所を感じて、司錄神に暇を乞ふて現れ來るとて、始終の事ども泣々物語して、すご〳〵と立居たり、藤井是を見るに悲み今更にて、我老母に孝行ありし事、其身を殺して貞節をまもりし事まで感じて泣きければ、宮木野云やう、自ら元來官家高門の娘にあらず、あだに墓なき流の身となり、人に契りて心を留めず、明けがたに別れて名ごりも知らず、色を繕ひ花を飾りて旅人に眩ひ衒ぎ、身はさながら路の上の柳、垣の本の花、往來の人に手折られむ事を思ふ、姿をなまめき言葉を巧みにして、きのふ人を送りては今日の客を迎へ、西より下れば西なる人の婦となり、東より上れば東の人の妻となり、浮たる舟の寄邊定めぬ契を交はし、すみつき難き戀にのみ月日を送りしを、君に逢ひて誠の妻となり、昔の習はしを捨てゝ正しき道を行はんとす、思ひかけずかゝる禍に逢ふ事も前世の報也、去ながら貞節孝行の德により、天帝地府我を變じて男子となし、今鎌倉の切通しに富裕の家あり、高座の某と名づく、君愛に來り給へ、明日生れ侍べる也、君に逢はゞ笑ひ侍べらん、是を印とし給へとて霧の如く消失たり、藤井いよ〳〵歎きながら、七日の後鎌倉に行て高座の某が家に尋入て、此間生れし子やある、子細侍べり見せて

給と云に、先胎内に廿月あり、生れてより今に至り晝夜なきて聲絶ずとて出し見せしかば、此子莞爾と笑て、夫よりなき止みて又聲たのしめり、藤井有の儘に物語しつゝ、一族契約して、往來の音信絶えずと云、

○蛛の鏡

永正年中の事にや、越中の國礪並山の邊りに住む者あり、常に柴をこり山畑を作り、春は蠶を養ふて世を渡る業とす、蠶する比は猶山深く入て、桑の葉を買求め、夏に至れば又山中の村里を尋ね巡り、糸帛を買集め、諸方に出し商ふて利分を求む、山より山を傳ひて深く分入る處、谷深く水漲て渡り難き所多し、或は藤葛の大綱を引渡し、峇の兩岸の岩根大木に繫置く、道行く人此綱に取付水を渡る所もあり、然らざれば漲る水矢より速くして押流され、岩角に當りて碎死す、或は東の岸より西の岸迄葡萄蔓の大綱を引張り、竹の籠を懸け、道行人を是に乘せ、向ひより籠を引寄する、其乘人も自ら繩をたぐりて傳ひ渡る、もし籠の緒切れ落れば、谷の逆卷く水に流れ岩に當りて死する所もあり、五月の中比礪並の商人、糸帛を買ふために山中深く赴きしに、さしも險しき谷に向ひ、岸は屛風を立てたるが如く、水は藍を採むに似て、大木生茂り日影も定かならぬに、谷の傍に徑三尺許の鏡一面あり、其光輝きて水に移りて見えたり、彼唐土に聞えし、楊貴妃帳中の明王鏡、汴州張琦が神怪鏡と云とも是には勝らじ、百練の鏡こゝに現れしや、天上の鏡の落降れるや、いかさまにも靈鏡なるべし、岩間を傳ひて取りて歸り德付かばやと思ひ、其有所をよく見おほせて家に歸り、妻に物語りければ、妻の云ふやう、いかでか其谷陰にさやうの鏡あるべき、縱令ありとても身に替へて寶を求め、跡に殘して何にかせむ、もし足を誤ち水に落入らば、悔む共甲斐なからん、只思ひ止り給へと云、商人云やう更に誤ちすべからず、未だ人の見ざる間に早く取り收めて德つかばやと思ひ、夜の明るを遲しと刀を橫たへ出て行、妻心元なくて、召使ふ男一人我子と共に三人、鐵垢鑓鉞ながりて、跡より追て行、山深く入りて谷に向へば、白き光り輝き圓き明らかなる大鏡あり、商人谷の岩角を傳ひ、其光の邊近く行くかと見れば、大音上て叫呼ぶ事只一聲にて音もせず、妻と子と驚きて谷に下りければ、商人は蠶の繭の如く糸に纒ひ包まれて、大な

る蜘蛛の黒色なるが取り付きてあり、三人の者立掛りて一と鑓にて突落し、鉞にて切倒し刀を以て糸を割破りしかば、商人は頭の腦落入り血流れて死す、其の蜘蛛の大さ、足を伸べたる形ち車の輪の如し、妻子泣々柴を積み火を鑽て蜘蛛を焼きければ、臭き事山谷に滿ちたり、夫の尸をば取て歸り葬りけり、其かみより鏡に化して、折々人を誑ろかし取りけるとぞ、

〇白骨の妖怪

長間の佐太は濃州の者也、文龜丙寅の年、公方の軍役に驅れて京都に上り、役果てゝ後も國に歸らず、

わすれてもまた手にとらじあづさ弓
もとの家路を引はなれては

と詠じて道心起し、都の北柏野の片ほとりに、草の庵りを結び、さすがに乞食せんもあまりなれば、北山に行て柴と云ものを買受けて、都に出て賣代なし少しの利を求め、餅食ひ酒買ふて打飲みつゝ、庵に歸る時に尻打たゝき歌うたひ、或時は房に行きて庭の塵を掃除し、佛前の塵をはらひ、日暮れて道遠ければ堂の軒に夜をあかし、明れば又柴を荷ひ賣りけり、澁染の帷子一重だに、肩裾破れ侍れ共、心に懸くるすべもなし、土岐成頼が家人石津の某と云ものは、同國のよしみを以て、小袖一つ錢三百文を與へて、時々はこゝへおはして食事をも受け給へといふ、佐太是を取りて庵りに歸りしが、四五日ありて錢も小袖も皆返して云やう、物を貯ゆると云は、妻子の有る人に取りての事ぞや、我は思ひ離れて妻子もなし、身ひとつは行先を泊りと定め、食事は有るに任せ、物事に心を留めねば、樂しさ云ふばかりなし、然るを此小袖錢を庵に置ぬれば、外に出ては早く歸らんと思ひ、出る時には戶をたて、盜人に取れじと用心に隙なく、此程の樂み悉く失せ果たり、只是れ程の物に心を使はれむは、誠に淺間しからずやとて返し侍べり、或日北山に赴き歸るさ遲く、蓮臺野にさしかゝりては夜半ばかりと覺ゆ、道の傍に一つの古塚ありて、俄に兩方に壞れ開けたり、佐太は心元より不敵にして、力も強かりければ、少しも驚かず立止りて見れば、內より光出て、あたり迄輝く事松明の如し、一具の白骨ありて、頭より足まで全く續きながら、肉もなく筋も見えず、只白骨のみ頭手足連なりて臥してあり、其外には何もなし、此白骨俄にむくと起上り、佐太にひしと抱き付たり、

佐太はしたゝか者なれば、力に任せて突きければ、のけさまに倒れて、頭手足ばら〱と壞れ散り、重ねて動かず、火の光も消えてくらやみに成たり、如何なる人の塚共知れず、次の日行て見れば、白骨碎け塚崩れてあり、後に佐太は其終る所を知らず、

○死レ難先兆

享德年中に、細川右京大夫勝元が家人、磯谷甚七と云者晝寢を致しけり、其妻面に出たれば、誰共知れざる人右の手に太刀を引そばめ、左の手に磯谷が首を引提て走り出て去けり、妻大に驚き恐れて内に入て見れば、磯谷は前後も知らず臥てあり、妻は胸つぶれ手足なえて、只夢の如くに覺えたり、かくて驚かしければ、磯谷睡を覺まし起上り、我夢に或人某の首を打切りて持去ると見たり、怪しくも心に掛る也とて、やがて山臥を雇ひ夢違への法を行はしむ、其月の末に主君勝元が、將軍家に御いきどをりを蒙る事ありて、是を陳じ申さんが爲に科を家人に負せて、是非なく磯谷が首を切らせ、是を以て我身の科を逃れたり、

伽婢子卷之六終

伽婢子卷之七

○繪馬之妬

伏見の里御香の宮は、神功皇后の御廟なり、元より大社の御神なれば、諸人歩みを運びあがめまつる、常に宿願有る輩は、繪馬を掛け湯を參らせて祈り奉るに、願ふ事空しからず、此の故に神前に掛奉る繪の數多く、繫馬挽馬帆懸舟花鳥草木、又其中に美女の遊ぶ所なんど、樣々の繪あり、文龜年中に都七條邊の商人、奈良に行通ふて商買する者あり、九月の末つかた、奈良を出でゝ京に歸りける、秋の日のならひ程なく日暮て、小椋堤を打こえて伏見の里に付たれば、はや人影もまれになり、狐火は山際に輝き、狼の聲さく叢に聞えしかば、商人物凄く覺えて、御香の宮に立入り夜を明さむとす、拜殿に臥て肱を枕とし、冷かなる松風の音を今夜の友と定め、幽かなる御燈の光を便りとして暫くまどろみければ、人あり、枕元に立寄りて驚ろかす、商人起上りて見れば、靑き直衣に烏帽子着たる男ありて云やう、只今止事なき御方爰に遊

び給ふ、少し傍へ立のきて休み給へと云ふ、商人心得ぬ事と思ひながら、傍に退きて見居たれば、美女一人女の童を召つれ拜殿に昇る、筵の上に錦の裍を敷き、燈火かゝげ酒肴取出し、彼女傍らを見廻らし、商人の蹲り居たるを見て少し打笑ひ、如何にそこに在するは旅人なりや、道に行暮て、それならぬ所に夜を明すは、侘しき物とこそ聞くに、何か苦しかるべき、爰に出て遊び給へと云に、商人嬉しくて、恐れながら這出つゝ畏こまる、只近く寄て打解け酒飲み給へとて、裍の上に呼びて打向ひたる氣はひ、誠に太液の芙蓉未央の柳、芙蓉は面の如く、柳は眉に似たりと云けむ楊貴妃は、昔語りに聞き傳ふ、一度び顧れば國を傾け、二たび顧れば城を傾くと云ひし李夫人は、目に見ねばそも知らず、是れは如何なる人の玆におはしけむ、如何なる縁ありて此座には列るらん、夢か夢にあらざるか知らず、我ながら魂浮かれて、更にうつゝ共思はれず、女の童も十七八其顏容なべてならず、眉墨の色は遠山の茂き匂ひを施し、白き齒は雪にもたとふべし、腰は絲を束ねたるが如く、指は筍の生出たるに似たり、物言ふ聲いさぎよく、言葉さすがに不束ならず、主君の女房盃取りて商人にさしければ、覺えず三獻を受けて飮みければ、女の童箜篌を取出して彈く、女房は東琴取出させ、柱たてならべ調子取りて、さゝやかに歌ふて彈けるに、商人魂飛び心消えて數盃を傾け、其比世に流行し波枕と云ふ歌をうたふ、聲よく調り曲節おもしろきに、琴こきうの調を合せければ、雲井に響き社頭に滿ちて、梁の塵も飛ぶばかり也、商人大に醉て懷を探るに、白銀花形の手箱あり、之を女房に奉る、又瑇瑁の琴爪一具を包みて女の童に與へ、手を取りて握りければ、女の童莞爾と笑ひて手をしめ返しけるを、主君の女房見つけて、妬む色外に現れつゝ、

あやにくにさのみな吹ぞ松の風
　　我しめゆひし菊のまがきを

とて傍にありける盃の臺を取りて、女の童が容に投付しかば、破れて血流れ、袂も衣裏も紅ゐに成りければ、商人驚きて立上ると覺えし夢は覺めたり、夜明けて後、懸並べたる神前の繪を見るに、錦の裍の上に美しき女房琴を彈き、其前に女の童こきうを彈きける、其傍に靑き直衣に烏帽子着たる男坐して有、女の

童のかほ、大に破れたる痕あり、夢の中に見たりける容かたちに少しも違はず、疑もなく此繪に書きたる女の、夢に戯れ遊びけるが、繪にも情のつきては、女は物妬ある事茲に知られたり、抑〻此繪は誰人の筆と云事を知らず、

○廉直頭人死司二官職一

蘆沼次郎右衞門重辰は、鎌倉の管領上杉憲政公の時に、相州藤澤の代官として病によりて死す、蘆沼が甥三保庄八と云者其跡に替りぬ、蘆沼は一生の中、妻を持たず妾もなく、只其身を潔白に無欲を表とし、さして學問せるにもあらず、又後世を願ふにもあらず、天性正直正道にして百姓を憐み、少しも物を貪る思ひなし、其れに引替へ、庄八大に百姓を虐げ、欲深く貪りければ、此人久しく續くべからずと、爪彈きして惡み嫌ひけり、庄八或夜の夢に、怪き人來りて其面に怒れる色あり、付從ふ者十餘人手毎に弓鑓長刀持たり、大將顧みて云やう、三保庄八が惡行積もれり、高手小手に縛めて首を刎ねよと云、其時に伯父蘆沼來りて、庄八が所行誠に人望に背けり、其科輕からずと雖もまげて許し給はらん、然らば髮を剃り侍べらんと云ふ、大將少し打笑ひ、汝が甥なれば憐み思ふところ理りなきにあらず、但し今より後日比の惡行を改めて、善道に赴くべき歟とありしに、庄八恐れて怠狀しければ、大將則ち我が見る前にして髮をそれとて、剃刀を取出し押へて剃落しぬ、斯くて夢さめしかば、頭を探りて見るに、髮は皆落ちて枕もとに有、是非なき法師になされたり、妻子これを見て泣悲みけれども甲斐なし、庄八は暇乞ふて、心も起らぬ道心者となり、光明寺に籠りて念佛唱へ居たり、或夜蘆沼入來れり、庄八入道夢の如くに覺えて、扨如何にして來り給ふと云へば、蘆沼云やう汝入道して佛法に歸依しながら、つゐに我墓所に詣でたる事なし、明日必參りて卒塔婆を立よと云、さていかに書きて立べきと問に、硯を請ふて書たり、其文字皆梵形にして讀事協はず、されば人間と迷途と文字同じからず、是は光明眞言也、後ろに書くべきは我戒名也、我死して地府の官人となれり、汝日比惡行を以て私を構へ、百姓を責はたり、定の外に賦斂を重くし、糠藁木竹に至るまで貪り取て己が所分となし、恣に非道を行ふ、此故に疎まれ人望に背き、天帝是を惡みて福分の符を破り、

地府是を怒て命の籍を削る、惡鬼便りを得て禍をなす、汝必ず縲紲の縄に縛られ、白刄の鋒に掛り、身を失ひ命を亡ぼし、其あまり猶妻子に及ばんとす、我是を憐み出家になして禍に替へたり、然るを我恩を思ひ知らず、終に墓所にも詣でずと責ければ、庄八一言の陳ずべき道なし、酒を出して勸めければ、飲たりと見えて却て故の如し、庄八問けるやう、君已に地府の官人となり、又何事をか職とし給ふ、蘆沼答へけるは、此人間にして一德一藝ある者、心立正直慈悲深く私の邪なきは、皆死して地府の官職にあづかる、假令勝れて藝能あるも邪欲奸曲にして私あり、君に忠なく親に孝なく、誠を行はざる者は、死して地獄に落つ、後世を願ふといへども、我宗に着(ちやく)して他の法を貶しむる者は、是やがて謗法罪なれば、假令強く修行すれども、死して地獄に落る也、然れば我常に慈悲深く百姓を憐れみ、君に忠を思ひ邪欲奸曲を恐れ、私を顧ず正直正道を行ひし故に、今地府の修文郎と云官にあづかり、天地四海八極の人間の善惡を記し侍べり、靑砥左衛門藤綱、長尾左衛門昌賢以下我その數に加られ、修文郎の官八人あり、楠正成細川頼之は武官の司となり、相摸守泰時最明寺時頼入道は文官の司なり、其以前文武官職の輩は、皆辭退して佛になり侍べり、今は文武の兩職に成べき人なし、されば毎日地府の廳に來る者、日本の諸國より市の如く見ゆれ共、皆不忠不義不孝奸曲なる輩、我が知れる人ながら、私には最負も協はず地獄に送り遣す、其ふだを出すも痛はしながら是非なきなりといふ、庄八問けるは、生たる時と死して後とは如何ならんと、答へて曰、別に替る事なし、され共死する者は虚にして生たる時は實するのみ也、又問けるやう、然らば魂二たび尸の中に心の儘に還り入ざるは、如何なる故ぞや、答へて曰、例へば人の肘を切落すに、落たるかいなに痛なきが如し、死して容ちを離るれば、其體は土の如く覺え知る所なし、又問ひけるやう、此春世間に疫癘はやり人多く死す、是如何成故ぞといふ、蘆沼が曰、三浦道寸其子荒次郎は、正直武勇の者とて暫し地府に留め、武官の職に補せらるべき所に、謀反を企て人を取て我軍兵にせん爲に、恣に疫神を語らひ疫癘を行ひし所に、其事顯れて、北帝これを捕へて地獄に送り遣はし給へりといふ、又問けるは、生たる時にくき怨(あた)を死

して後に害すべきや、答へて曰、迷途の廳には生るを守り死するを憐み、殺す事を嫌ふ故に、此の世にして敵なれども、死して後には心の儘に殺す事かなはず、其中に若しは我敵の亡靈を見て、是にをびえて死する者は、元是惡人也、地府より是を戒められ、其敵を遣はして命を奪ひ給ふ者なり、今は夜も明けなむ、かまへて道心堅固なるべし、邪なる道に入て地獄に落る事なかれとて、立出るとぞ見えし姿は消失せぬ、庄八今は浮世を思ひ離れ、念佛怠たらず來迎往生を遂げにけるとぞ、

○飛加藤

越後の國長尾謙信は、春日山の城にありて、武威を遠近に耀かし給ひける所に、常陸國秋津郡より名譽の竊盜の者來れり、しかも術品玉に妙を得て人の目を驚す、或時さま〴〵の幻術を致しける中に、一つの牛を場中に曳出し、彼の術師是を呑み侍べり、一座の見物肝をけし、奇特の事に云けるを、其場の傍なる松の木に登て見たる者ありて、只今牛を呑みたりと見えしは、牛の脊中に乘り侍べりと呼ばゝるに、術師腹を立、其場にて夕顏を作る、二葉より漸々に蔓はびこり、扇にてあふぎければ花咲出つゝ、忽に實なりけり、諸人重なり集り足を爪立て見る内に、彼の夕顏二尺許になりけるを、術師小刀を以て夕顏の蔕を切りければ、松の木に登りて見たる者の首切落され死けり、諸人奇特の中に怪みをなし、眉を顰めたり、謙信聞給ひ、御前に召して子細を序ねられしに、幻術の事は底を究めて得たり、手に一尺餘りの刀を持てば、いかなる塀墻をも飛越し城中に忍入るに、人更に知らず、此故に飛加藤と名を呼び侍べりといふ、さらば試しに奇特を現はし見せよとの給ふ、今夜直江山城守が家に行て、帳臺に立置たる長刀取て來れとて、山城守が家の四方に隙間もなく番を置、蠟燭を間ごとにともし、番の者男女ともに、おくはし皆眠たゝきもせずして居たりけるに、内には村雨とて逸物の名犬あり、怪き者を見ては頻りに吠怒り、然も賢き犬にて夜ゐは少しも寢ず、屋敷のめぐりを打廻り〳〵、猪のしゝと雖物のかず共思はぬ程の犬也、これを放ちて門中の番に添へたり、飛加藤已に夜半許にかしこに赴き、燒飯一つ二つ持て行かと見えし、犬俄に斃れ死す、かくて壁をのり垣を越えて入けるに、番の者半睡

りて知らず、曉方に立歸る、帳臺に有し長刀、並に直江が妻の召使ふ女の童の、十一に成けるを後にかき負ふて、本城に歸り來るに、女の童深く睡りて是れを覺えず、番の輩睡るとはなしに少も知らず、謙信是れを見給ひ、敵を亡すには重寶の者ながら、もし敵に内通せばゆゝしき大事也、此の者には心許して召抱へ置く者にあらず、只猨を飼て禍を貯ふると云もの也、急ぎ打殺せとの給ふ、直江則ち我許に呼て、召捕て殺さんと謀りけるを、加藤これを悟り、出ていなんとするに、諸人是を守り居たれば協はず、加藤云やう、慰みのため面白き事して見せ奉らんとて、錫子一對を取寄せ前に置きければ、錫子の口より三寸許の人形廿許出て並びつゝ、面白く踊りけるを、座にありける人々目を澄し見けるほどに、いつの間にやらむ、加藤行先知らず失せにけり、後に聞えしは甲府の武田信玄の家に行きて、跡部大炊助に付て奉公を望みしに、古今集を盜みたる竊盜に手ごりして、密かに打殺されしといへり、

○中有魂形化契

尾州清洲と云所に、小山記内と云者あり、或夕暮に門に立て外を見居たりければ、年の程十七八と見ゆる女、顏かたち世の常ならず、美くして凡ての人とも覺えざるに、只獨り西の方より東に行く、明る日の暮方門に出しかば、又彼の女西より東に打過る、記内も又近きあたりにては美男の聞えあり、女つら〳〵記内を顧みて、心ありげながら打通る、斯て四五度に至りて、又夕暮に門に立たりしかば、女則來る、記内立寄りて女の手をとり戲れて、君はいづくの人なれば、日暮毎に爰を打通り、何方に行給ふと問ば、女さしも驚く色なく打笑ひ、自らが家は是より西の方にあり、所用の事ありて東の村に行也といふ、記内試みに手を取り内に引入んとすれば、更に否とも云はず、やがて親しみつゝ、其の夜はそこに泊りてわりなく契りつつ、夜の明方に暇乞しつゝ立歸る、又いつか來まさんと云へば、女は人目を忍ぶ身の、其日をさして必ずとは契り難しとて、

なをざりに契りをきてや中々に
人の心のまことをも見む

と云ひしかば、記内は歌までやはと思ふに、かく聞ゆるにぞ、いとゞわりなく覺えて、返し

いひそめて心かはらば中々に
契らぬさきぞ戀しかるべき

かくてきぬ〴〵の別れの袖、又朝露に濡そめて、なごりぞいとゞ殘りける、四五日の後夕暮に又來りぬ、今は互に打とくる、其下紐のわりなくも、結ぶ契りの色深く、よひ〳〵ごとの關守も、恨めしき心地して、後には夜ごとに來りけり、記内云やう、斯程にわりなく契る中に、なにか苦しき事のあらん、君が家こゝ許に近くば、我又君が許に行通ひ侍べらんものをと云、女答へけるは、自らが家は甚狹くしていと見苦し、如何にして人を待うけ、一夜を明すべき用意もなし、其上みづからが兄は今はなき人となり、其妻孀にて内にあり、此嫂の目を忍べば、中々心苦しく侍べりといふ、記内聞てげにもと思ひ、いよ〳〵人にも語らず、深く忍て契りぬ、此女は又比ひなき縫張に手きゝ也、夕暮毎に來て、夜もすがら記内が小袖やうの物洗ひすゝぎ、縫たてゝ着せ、或は麻績つむぎて、美しく細き布織立てゝ着せければ、見る人是は世の常の布にあらず、筑紫の波の花越後の雪曝と云ふとも、是程にはよもあらじと譽ぬ人はなし、後には見目よき女の童一人を召つれて通ひ來り、是も又手きゝ也、かくて半年許の後は晝も留まりて、女の童と同じく絹を織り縫立てゝ記内に着せ、家の中萬づ甲斐々々しく取まかなひけり、記内云ふやう、夜るさへ忍ぶ身の晝だに歸り給はずは、もし嫂の思ひ咎むる事有べしといふ、女の云やう、いつまで強いて人の家の事さのみに忍びはたさむ、君の心も又如何ならん、末頼み難けれ共、ひたすら我身を君に捨てゝ、かく爰には通ひ來る也と云に、記内いとゞ嬉しさ限りなく、愛で惑ひけるも理り也、或夜女來りていつに替り、愁ひ歎きたる色みえて、そゞろに涙を流して泣けり、記内問ければ、されば今迄は君に思はれ參らせて、自らもわりなく頼みし中なれ共、別れ離るべき事出來て、其悲しさに涙の落ると云、記内驚き、君と我れ千歲を過るとも、心ざしは露替らじとこそ契りけれ、如何成故に別れ離るべきと云へば、女は今は何をか包み參らすべき、自は飯尾新七が娘也、年十七にして病によりて空しくなり、明日は已に第三年に當れり、死して中有に留る事三年を限りとす、三年過ぐぬれば其業因に任せて、何方になりとも生を引いて赴く、今宵限りの別れ

と思へば、悲しくこそ侍べれとて、頻に泣き悲しみければ、記内は幽靈と聞きながらも、此程の情を思ふに怖ろし氣はなく、只悲しき事限りなし、夜もすがら寢もせず、女房は白銀の盃一つ玉を鏤めたる花瓶の小さきに取添て、君もし忘れ給はずは、是を形見に見給へとて、

面影のかはらぬ月に思ひ出よ
契りは雲のよそになるとも

とて泣々渡しければ、記内も色よき小袖に白き帶取り添へて、女に與へつゝ、

待いづる月の夜な〳〵其まゝに
ちぎり絶すな我のちの世に

とかきくどき泣明し、鐘の聲遠く響き、鳥の音はや打しきれば、起き別れ行く袂をひかへて、さるにても無き影の埋もれ給ひし所はいづくと尋ねしかば、甚目寺のわたり也と答へて、立出ると見えし、跡方なく失にけり、記内あまりに堪かね、甚目寺のほとりに至りけれども、そこと知るべき塚もなし、今すこし其の所よく問べきものをと思へど、悔むに甲斐なくて、

たのめこしその塚野邊は夏ふかし
いづこなるらむもずのくさぐき

と打詠じ、泣々日暮がた家に立歸り、其面影を思ふに戀しさ限りなく、終に病となり、日を重ねて藥をも飲まず、只とく死して此人に廻り逢はんとのみ云ひて、程なく身まかりぬ、

○死亦契（しゝてまたちぎる）

大和の奈良に櫻田源五と云者あり、年廿五になり、父母を失ひ、いまだ妻も無くて只獨り住みけり、源五が舅（をぢ）津田長兵衞と云者一人の子あり、年廿四五也、彦八と名づく、源五彦八は從兄弟なりければ、親しく侍べり、或時源五東大寺に詣うでゝ歸るとて、猿澤の邊にて、奇麗なる乘物に女のりて、男一人女二人を召つれ、池の邊に乘物をたてさせ、煎餅を碎きて池に入れ、魚に食はせて慰みける、其差出せる手の白く美くしき、指は笋（たかんな）の如く爪の色は赤銅色にて、肘（かひな）のかゝり不束ならず、源五立止りければ、內より乘物の戸を開き、暫く源五が顏を守り、已に立て歸る、源五これに隨ふて行きければ、三條通と云すゑに、筒井某と云者の家に入りたり、源五是を見初て心惑ひ、さま〴〵便りを求めて聞ければ、父は筒井順昭に屬して河內の

軍に打死す、母孀にて只此娘一人を養て住みけり、娘の乳母は、源五本より知たる者也ければ、是に近付ていろ〳〵たのみけり、乳母も源五が美男にして然も有德なるを以て、是に逢せばやと思ふ、まづ一筆の便りを傳へんとて、紅葉がさねの薄やうに、中々言葉はなくて、

いさり火のほのみてしより衣手に
磯邊のなみのよせぬ日ぞなき

と書きて遣はしたり、乳母是を姫君に見せしかば、顏打あかめ袂に入れて立退きぬ、然るに如何なる者か知らせけん、源五が舅津田此娘の事を聞て、我子彥八が妻にせむと思ひ、媒を入て娘の母に云はせたり、津田も武門の末也世もよかりければ、背ひて賴みをとりたり、娘はこゝち煩ひて、つや〳〵湯水をだに聞入れず、母云やう、津田彥八と云人に緣を定めたり、心を引立よ、近き比に彼の方に遣しなんといふ、娘更に恨みたる色あり、乳母に語りけるやう、源五が許にこそ行かまほしけれ、其彥八とかや何せんに、只死したることこそ善からめとて、猶藥をだに飮まず、母悲しさの餘り乳母に心を合はせ、源五にかくと云て、娘を盜み取らせたり、源五大に喜び、乳母と妻をつれて奈良を立のき、郡山と云所に隱れ住みけり、津田又行て娘を迎取らんといふ、母なく〳〵云やう、此間誰人か勾引しけむ、乳母と共に行方なしといへば、我甥の源五が心を懸けしと聞たり、盜みて隱れぬらんと大に怒り腹立、其間に娘の母死したり、跡の事は母の弟是をまかなふ、源五夫婦餘所ながら野邊の送りに出つゝ、いと忍びたりけるを、津田彥八見付て跡をしたひ、郡山に行て家能く見屆け、立歸りて父長兵衞に語る、長兵衞則ち奈良の所司代松永に訴へて對決に及ぶ、源五云やう、某前に契約して賴みを遣はして呼たりと云、津田は媒を證據として賴みを遣はせしといふ、娘の母は死たり、何れ共知りがたし、され共津田が賴みを遣はしける事は、なかだちたしか也、源五にも理有りと雖、此娘を留る事法に背けり、只津田が許に返し遣はせとあり、力なく女房は彥八に取られぬ、娘も乳母も此事を病として、打續き二人ながら空しくなれり、源五が事をや思ひけむ、

さりともと思ひしまでの命さへ
今はたのみもなき身とぞなる

彦八いと悲しく、妻と乳母が墓所を一つ寺の地に作りて跡を弔ひけり、去ほどに源五は妻を取られて後は、萬あぢきなく其面影を忘れ兼つゝ、せめては風の便りの音づれだに聞えぬは、此女も彦八にわりなく成て、我をば忘れぬらんと恨めしく思ひて、

なびくかと見えしもしほの煙だに
今はあとなき浦かぜぞふく

と打詠めおる、其暮がた門をたゝく、開きて見れば妻の女房の乳母也、櫛鏡入たる袋を前に抱へて、只今我君こゝに走り來り給ふと云、源五うれしくて門を開き内に呼入しに、女の容其のかみにも替らず、餘りの事に夫婦手を取て嬉し泣になきけり、斯て其故を語る、君の事つゆ忘るゝ事なく、彦八の家に在にもあられず忍出て逃げ來れり、日比の願ひ今已に協ひ侍べりと云ふに、源五堪がたく喜びつゝ、偕老のかたらひ今更也、彦八が家人或時郡山に行て、源五が門を見いれたりければ、乳母何心なく立出たるを見つけ、走り歸りて彦八に告げたり、彦八が父は去ぬる月死たり、彦八聞て怪み、それは正しく死して埋み侍べりし、如何に世に似たる者こそあれ、人違へにてぞ有らんと云に、正しく見損ぜずとあらがひけり、彦八行て垣の隙より覗きければ、女は鏡を立て假粧し、乳母は其前にあり、彦八内に突入て、源五に對面し女も乳母も、此春打續て空しく成しを、寺に送り同じ所に埋みしに、今爰に來り住む事の怪しさよと云、源五も奇特の事に思ひ部屋に行て見れば、女も乳母も行方なく成て跡も見えず、二人ながら云やう、さては幽靈の來りけるにこそ、此上は互に日比の恨みもなしとて、源五彦八打つれて寺に行き、塚を掘て見れば、女も乳母も形ち少しも損ぜず、只生たる時のごとし、やがて元の如くに埋みて、源五彦八共に高野山に籠り、道心おこして二たび山を出でず、

○菅谷九右衞門

天正年中に、伊勢の國司具教公をば武井(たけゐ)の御所とぞ云ける、民部少輔具時は國司の甥にて、南伊勢の木作(こつくり)と云所に住侍べり、此郎等に柘植三郎左衞門、瀧川三郎兵衞とて二人の侍あり、武勇智謀ある者なりければ、時に取りて名を施しけり、然るに國司具教其甥民部少輔、おなじく奢を極め國民を貪り、佞奸の者に親しみ國政正しからざる故に、行末賴もしからずと思

ひ、柘植と瀧川二人心を合はせ信長公に內通して、終に伊勢の國を信長公に屬せしめ、國司を亡ぼし則ち勸賞を被り、立身して權を取り威を震ひけり、其比伊賀國に一揆起り、近鄕のあふれもの、武井の城の餘黨ども多く集り、要害を構へて楯籠り、士民百姓を惱まし國郡村里を掠めしかば、信長公早く之を責亡ぼさずば大なる難義に及び、諸方の手づかひ障とならんとて、軍兵を差向けられし所に、城中强くして人數多く損じける中に、柘植瀧川二人ながら打れたり、是によりて扱ひを入られ、終に信長公に隨ひけり、其後一年許を經て、信長公の家臣菅谷九右衞門、所用ありて山田郡に行ける道にて、柘植瀧川に行合たり、菅谷思ひけるは、此二人は正しく打死したりと聞しに、是は夢にぞやあるらんと怪しみながら、立向ひ物語するに、柘植云やう久しくて對面す、いざ爰にて酒一つ飮給へとて、召連たる中間に仰付けて、小袖一つ持せ酒屋に遣はし、質物として酒取よせ、筵を借て道端の草叢に敷かせ、柘植瀧川菅谷三人打向ひて、數盃を傾けたり、瀧川云やう、昔唐土の諸葛長民と云ふ人は、劉毅が殺されし時是が爲めに軍兵を催し、亂を作さんとして未だ思定めず、かくて曰く、貧賤なれば富貴を願ふ、富貴になれば必危き事に逢ふ、其時又元の貧賤にならばやと思ふとも、是も又叶ぶべからず、腰に十萬貫の錢を纏ひて、鶴に乘りて楊州に登るといふ、思ふ儘なる事はなし、武士と生れ、其名を後代に傳ゆる程の手柄なき者は、必ず耻を萬事に殘す事古今ためし多し、遠く他家に求むべからず、織田掃部はさしも勳功は致せしか共、終に日置大膳に仰せて誅せられ、佐久間右衞門は、信長公草業の御時より忠節ありけれ共、忽ち追放たれて耻に逢ひたり、歷々の功臣猶かくの如し、まして其外の人更に行末知り難しと云、瀧川が云やう、下間筑後守は越前の朝倉に方人して、木目峠の城に籠りしを、朝倉打れて後、平泉寺に隱れて跡をくらまし、醒悟發明の道人となりて、

　梓弓ひくとはなしにのがれずは
　　　今宵の月をいかでまちみむ

と詠せしは、名を埋みて道に替たり、荒木攝津守が家人小寺官兵衞は、主君の逆心を諫めかねて、髻切りて僧になりつゝ、

　四十年來謀＝戰功－　鐵冑着盡折＝良弓－

緇衣褊衫靡二人識一　獨誦二妙經一詢二梵風一

と云詩を題して、世を逃れたるも尊うとしや、此二人は其身逆心の君に仕へながら、終によく禍を免かれたり、是智慮の深きに侍べらずやといふ、拓植打笑ひて云やう、此輩は我等のため耻しからずや、いで其伊賀の一揆原、謀は拙かりし者をと云ふ、瀧川、いや其事は只今又云べきにあらず、思へば口惜きに、只酒飲たまへ萱谷殿とて、互に盃の數重りて後、萱谷二人に向ひて、如何にかたぐ\、日來は數奇の道とてもて遊ばるゝに、今日の遊びに一首なきかといふ、さればとて打案じつゝ柘植三郎左衞門、

露霜と消えての後はそれかとも

くさ葉より外しる人もなし

瀧川三郎兵衞、

うづもれぬ名は有明の月影に

身はくちながらとふ人もなし

とよみて、二人ながらそゞろに涙を押拭ひけり、萱谷歌の言葉いとゝ怪しく、又この有樣心得がたく驚き思ひて、いかに日比は武勇智謀を心に掛て、少しも物事に弱氣なき氣象の輩、只今の歌のさま哀傷ふかく、涙を流しけるこそ怪しけれと云ふに、二人ながら更に言葉はなく大息つきて嘯きつゝ、酒已になくなれば、今は是まで成とて座をたち、暇乞して半町許行かと見えしが、召つれたる中間原もろともに跡なく消失せたり、萱谷大に驚き、伊賀にて打死せし事を漸々思ひ出したり、日は山の端に傾き鳥は梢に宿りを爭ふ、人を遣はして酒賣家に質物とせし小袖を取寄せて見れば、手に取やひとしくぼろ〳〵と碎けて土ほこりの如くになれり、萱谷いそぎ歸りて密かに僧を請じ、二人の菩提を弔ひけると也、

○雪白明神

長亨元年九月將軍源義凞公、みづから軍兵を率して江州に發向し、坂本に陣を取りて、佐々木六角判官高頼を攻めさせらるゝに、高頼ふせぎ兼て城を落て、甲賀郡の山中に隱入りたり、高頼が郎等堅田又五郎といふものは、武勇ありて力量人に勝れ、然も常に佛神を敬ひ、後世を願ふ心ざし淺からず、觀音普門品一遍彌陀經一卷念佛百遍を以て每日の所作とす、已に大將高頼城を落ければ、又五郎も力なく、むかふ寄手に切かゝり、終に大軍の中を切拔て、安養寺の山の奥に

落行たり、斯て日暮たりければ、何方に出づべき道も知らず、傍に一つの藁屋あり、谷陰に立ながら内には人なし、まづ此家に隱れ居たれば、軍兵廿騎許の音して、正く後ろ影は見えしぞ、定て伊賀路にかゝりて落行けむと云を聞けば、我を討留んとする追手の兵也、されども隱れ居たる家には口も懸ず、やう〳〵遠ざかり行く、今は心安しと思ふ處に、又人の打過る音の聞えしかば、密に窓より覗見れば、一人の女房其の齡四十許なるが、勢細く高し、褐色の中なれたる小袖着て、手に美くしき袋持て、堅田又五郎殿はこゝに在するやと云ふに、又五郎物をも云はず忍び居たり、女房打笑ひて何をか怖れて忍び給ふぞ、少しも苦しき事なし、我は是當國栗太郡におはします、雪白の宮の御使として、君が心安くせんとて遣はされたり、ゆめゆめ疑ひ給ふな、君常に慈悲深く神佛を敬ひ、後世を求めて怠りなき故に、其心ざしを感じて雪白の明神守り給ふなりとて、則ち持たる袋の緒を解き、燒餅取出して食せ、小き瓶に酒を入れて取出して飮せけるに、又五郎大に飽きみちて、忝く有難き事譬へん方なし、女房云やう、此窓の前庭の面に、横筋一つ書付けて、今宵夜半許りに怪しき物來りおびやかさん、君構へて恐れ動き給ふな、是をのがれて後は、行末更に惡しき事あるべからずとて、歸るかとみえし、銷が如くに失せたり、案の如く夜半ばかりに怪しき光ひらめき耀きて來る者あり、さればこそと思へる窓より覗きければ、身の長け一丈あまりの鬼、赤き髮亂れ白き牙喰ひ違ふて、雨の角は火のごとし、口は耳元まで裂けて、眼の光鏡の面に朱をさしたるがごとし、爪は鵰の如く、豹の皮を腰當とし、直ちに内に駈入らんとするに、彼の女房庭の土に書きたる筋を見て、大に怒れる眼の光り電の如くひらめき、口より火を吐て立やすらひ、力足踏みて響みける、其有樣身の毛よだち、魂きえて恐しと云ふも愚也、鬼已に筋を越ゆる事叶はず、怒りを抑へて傍に立寄りし所に、軍兵又十騎許追來りて、又五郎は此家に隱れしと聞ゆ、出よ〳〵と責めけるに、彼鬼かけ出て馬上の兵を摑み、馬を踏殺して食ふに、其外の郎等共は蛛の子を散らす如くに、足に任せて迯失たり、夜已に明方に成たれば、鬼も消失て物靜か也、立出て見れば馬の頭人の手足、血交りに散り亂れ、よろひ甲太刀皆ひき散らして

あり、又五郎終に逃るゝ事を得て、それより伊勢にくだり、白子と云所より舟に乘り、駿州に行て今川氏親を頼みて身を隱し、後に其終はる所を知らず、

伽婢子卷之七終

伽婢子卷之八

○長鬚國

越前の國北の庄に商人あり、毎年松前に渡りて蝦夷と販賣に、多く木綿麻布を遣して昆布干鮑に替て、國に歸り出し賣るを業とす、或年舟に乘て松前に渡るに、俄に風變り浪高く、檣折れ梶碎けて吹放されつゝ、漸にして一つの島に寄せられたり、人心地少し付て舟をあがりければ、五町許りにして人里あり、其所の人は髮短かく鬚長し、物云ふ聲は日本の言葉に通ず、或家に立入て國の名を問へば、長鬚扶桑州といふ、國主を問へば、是より一里ばかりの東に城郭ありと敎ゆ、かしこに赴き總門を過て見れば、國主の本城とおぼしくて門の構へ築墻高く、石垣は削り立たる如し、門の邊りに立寄ければ、門を守るもの一同に出て大に敬ひ、奥の方に言入たりしに、衣冠の體世に見馴ざる出立したる者走出て、殿中に請じ入れたり、宮殿甚花麗にして、綺羅美やかなる事いふ計なし、紫檀くわりん白檀なんど入違へ、沈香金銀を鏤め交へて

立たり、錦の裀を敷き、國主立出て對面す、大日本國の珍客只今此所に來れり、我等邊國の戎として目のあたり請じ參らす事、是幸ひにあらずやとて、一族に布令めぐらすに、皆各來り集る、何れも出立花やかなれ共、勢短く髪かれて、鬚斗りは長く生延び、腰少しかゞまりて見ゆ、座定まりて後に、綠の蔕ある色よき柹一つ、はらめる黄なる膚の栗、紫の菱、紅ゐの茨、青乳の梨、赤壺の橘を、瑠璃の盆水精の鉢に堆かく積て出したり、膳には野邊の初雁、澤沼の鳧、鳴鶉、雲雀紫蔞、青蓴、溪山の筍、靈澤の芹、數を盡して出し備ふ、葡萄珠崖の名酒に茱萸黄菊を盃に浮べ、誠に妙へなる主じ設け、其味ひ更に人間の飲食にあらず、されども海川のうろくづ蛤の類は、一種の肴もこれなし、商人いぶかしくぞ覺えたる、國主の曰く、我に一人の娘あり、願くは君是に留まり給へ、配偶の緣をむすび奉らん、榮耀如何で極まり有らんと云に、商人大に喜び、ともかうも仰せに隨ひ奉んとて、數盃を傾け侍べりしに、今宵は月已に滿ちて、光四方に輝きて明らかなる事白日の如し、是れぞ我等の酒宴遊興を催す時なりとて、滿座の輩舞かなで歌ひどよめく、かゝる所に姫君出給ふ、附隨ふ女房達廿餘人、何れも花を飾り裳を引てねり出たれば、沈麝の薰座中に充ちたり、商人これを見るに、容貌はたをやかに美はしけれ共、女にも鬚あり、商人甚怪しみて悦びず、古風の體一首を詠みける、

さくとても蘂なき花はあしからめ
妹がひげあるかほのうるはし

國主聞て笑壺に入て笑ひしかば、滿座かたぶきて腹をさゝげたり、娘と女房達は世に耻かしげ也、此夜より商人に一官を進めて、司風の長とぞかしづきける、身の榮花に樂みを極め、國中敬ひ持てはやす故に、鬚ある妻に馴初て三年を過れば、男子一人女子二人をぞ設けたる、ある日家擧りて泣き悲しみ、妻甚だ愁へ歎く、城中打ひそまりて色を失へり、商人驚きて妻に問ければ、泣々答へけるやう、きのふ海龍王の召によりて、我父已に龍宮城に赴き給へり、命生て二たび歸り給ふべからず、此故に歎き悲しむ也と云、商人大に仰天して、其は如何にも謀あらば逃るゝ道侍べらむや、然らば我假令命を捨るとも何か顧るべきといふ、妻の云やう、此の事君にあらずしては、禍を逃れて安

穩の地に歸り給ふ事叶ふべからず、願くは龍宮城に赴き、東海の第三の迫戸第七の島長鬚國、已に大禍難に依て今より衰微に及ぶべき也、憐みを以て首長を放ち返し給はゞ、宜しく太平安穩の政道なるべしとよく〳〵の給はゞ、龍神よこしまなし、必此歎を引かへて喜びの眉を開かん、然らば一足も早く赴きて給へとて、聲もおしまず泣ければ、商人も情の色に心引かれて急ぎ出立、花やかに裝束して、十人の侍五人の中間二人の道引を召連れ、龍宮城に赴き、舟に乘りて暫しの間に岸に着きて、濱表を見れば皆金銀の砂にて、國人は衣冠正しく、貌大にして天竺の人に似たり、樓門にさし入て見れば、七寶莊嚴の宮殿、其さまは堂寺の如し、玉の階に進めば、龍神出迎ふ、商人大に恐れ愼しめば、司風の長とは汝の事か、今何故に來れると問ふ、商人こま〴〵と云ければ、龍神則ち海府錄事を召して勘へさせけるに、龍王城の境內に左樣の國はこれなしといふ、商人重ねて云やう長鬚國は東海第三の迫戸第七の島にあたれりと、龍神又勘辨せさするに、暫く有て錄事則ち本帳を考へて曰く、其島は蝦魚の住所也、龍宮大王の此月の食料に當てゝ昨日召捕たりと申す、龍神笑て曰、司風の長は實に人間ながら、蝦のために魅されたり、我は海中の王なりといへ共、食する所の魚鳥生類、皆天帝より布き授けられて、日每に其數あり、假令人と云とも天帝の定め給ふ數の外に、奢りて生類を食する時は、必ず天の責を受けて禍ひあり、況や我等數の外に、漫りに食する事協はず、さりながら今遙々茲に來れる人の心を破るべからず、數の定めを耗して參らせむとて、內に入て司膳掌に仰せて、商人をつれて料理臺盤所を見せしむるに、麞の胎ごもり、熊の掌、猿のことり、兎の水鏡、五種の削物、七種の菓、軌則花形飾立て、鳳髓、獅子膏、靑肪、白蜜、其外海產の內あらゆる珍味、心も言葉も及ばれず、黃金の釜、白銀の鍋、銅の鼎を並べ、傍なる籃の中に蝦五六頭あり、大さ三尺あまり、色はさながら濃紫にして鬚甚だ長し、此商人を見て淚を流す事雨の如く、頻りに躍りて、其ありさま助け給へと云はぬ斗り也、司膳の司の云やう、是こそ蝦の中の王なれと、商人聞て不覺の淚を落す、龍王重て使を立、蝦の王を赦し放ち、商人をば送りて日本に歸らしむ、其夜の曙に能登の國鈴の御崎に付たり、岸に揚り

て後ろを顧れば、送りける使は大龍となり、波を分て海底に隱れ、商人は本國に歸りて、筆に記して人に語り傳へしと也、

○邪神を責殺

常州笠間郡の野中に小社あり、後ろは筑波山の嶺茂りて日影くらく、前には澤水底深くして藻はびこれり、常に雲覆ひ小雨ふりて凄まじければ、人皆此神の靈甚だ猛しとて恐れ仕へて、此社の前を通る者は散米御供神酒なんどを、此村里にして求め携へて、神前に供へて打通る、若さもなければ忽に雨風荒く、雲霧蔽ひて神則ち祟りをなす、明德年中に濃州谷汲寺の僧、性海とて學行を勤るに心ざし深く、兼ては北陸を修行し、相摸の國足利の學校に行ばやと思ひ立て、寺を出つゝ越路に赴き、已に常州の地に至り此社の前に休む、本より諸國行脚の僧なれば、袋に一物の貯へもなし、只禮拜誦經して法施奉り、十町許り過行ける所に道に踏迷ひ、彼方此方せし間に俄かに大風吹起り、砂を揚げ飛ばし黑雲覆ひ霧立こめ、後ろより物の追かくる心地しければ、怖ろしく覺えて見かへりけるに、異類異形の者二百許頻りに追掛くる、此僧、扨は妖物の爲に只今死すべし、力及ばぬ事と思ひ一心に觀音普門品を誦し、足に任せて走り迯げゝれば、風止み雲收まり空晴て、追かけし者も見えず、辛うじて鹿島明神の社へかゝぐり付きたり、神前に跪き、般若心經七遍普門品三遍を誦して神に祈るやう、先の社に法施奉りしをば受ずして、却て怨を成んとせしは邪神の社か、如何なる子細なるべき、又是我身に誤りありて神の咎め給ふや、願くは明神此事を示し給へと念願して、日暮て身も勞れければ傍に臥したり、其の夜の夢に神殿の內陣開け、錦の斗帳をあげ玉の簾を中ば捲きて、內に明神座し給ふ、左右には末社の神、位に隨ひて其の所々に座す、大燈明內外に輝きて白晝の如し、性海恐れて庭に下り、頭を地に付て禮拜す、俄に一人朱き裝束して烏帽子引こみ、きざはしに出でゝ曰、汝神前に法施奉る、神威高く神慮快く受け給ふ處也、然るに汝今神前に訴へ奉る處、速く裁斷あるべしとて內に入たり、暫らくありて數十人空を翔りて行くと見えし、白髮の翁一人を召して來る、黑き帽子被り靑き袴着たるを、庭の面に引すへたり、奥より仰ありけるやう、汝も一方の神なり、何ぞ國家人民

を守護せざる、剩へ敬ひをなす道行き人をなやまし、濫りに禍を現はし、然も此道人法施を以て神に回向す、是又何の供物と云とも過る物あらんや、却て迫をびやかし殺さむとす、惡行のくはだて甚だ法に過たり、其科逃るべからずとあり、官人出て斷誡しむるに、老人頭を地に付けて言上しけるやう、某實に野社の神なりと雖も、大蟒蛇の爲に押領せられ、久しく社壇を奪はれ、僅に傍なる樹の根をすみかとす、我力至て弱く彼大虵を制する事協はず、世を護り人を護るべき職を忘れ、只我身の置所だになし、されば此年ごろ雲を起し雨を降らし、霧蔽ひ風荒く災をなして、人の供物を求むる事は皆此大虵の所業也、某の科にあらずといふ、官人責めて曰く、さやうの事あらば何ぞ速く此所に訴訟せざるやと、翁答へて云、此大虵世にある事年久し、或時は化て形を現はし人を惱まし、或時は居ながら災をなす、其通力自在なる事云許りなし、山中に捿む鬼神野邊に留まる惡靈、みな是に力を合せ、毒蛇魍魅皆是に隨ふ、某玆に參りて訴へせむとすれば捕へて押し入れ、更に住かの外に頭をも出させず、只今めしければこそ是までは參り侍べれと、

其時神殿より勅有、官人速く彼處に至りて、其大虵を召捕て來れと也、翁申すやう、妖怪通力已に備り、是に力を合する者多し、官人赴くとも物の數とすべからず、只神兵大軍を差向けられ、攻伏せ給はずしては、容易く從ひ奉べからずと云、さらばとて大將の神に軍兵五千を差副へて、野社に向けられたり、三時許の後數十の軍鬼ども、大木を以て白虵の首を舁て庭に來る、其の大さ五石許りを入る丶甕の如し、兩の角尖りて二つの耳は箕の如し、鬣亂れて糸の如く、口は後まで裂て、怒れる眼は鏡の面に朱を指したるに似て、閉がずして死したり、官人則ち性海に向ひ、忝くも當社明神は當國第一の神司として、汝の訴よく裁許し給へり、とく〳〵とて座を立しむ、性海禮拜して座を立と覺てえ夢さめたり、身の毛竦立ち汗水になり、奇特の事に思へり、夜明けてまた彼道に赴きて其所を見れば、社も鳥井も燒倒れて塵灰となり、傍りの木草皆碎け折れて荒れ果たり、あたり近き村に立寄りて問に、村人皆云やう、今宵夜半許りに雷電をびたゞしく、風吹迷ひ雨落ちて、其中に軍さする聲聞こゆ、怖ろしさ限りなし、黑雲の內に火もえ出て、社鳥

井一同に燒崩れ塵灰となり、一つの白き大蚰其長卄丈許りなる、死して頭なし、其外五丈三丈の蚰共、數を知らず重り死して、臭き事限りなしといふ、是を考れば今宵夜半に、夢に見たる時分なり、性海それより相州足利に行て物語せしとぞ、

○歌を媒として契る

永谷兵部少輔といふ人あり、一條戻橋のほとりに居住す、年卄一歲極めて美男のほまれ有、色好みの名を取り、才智人に超え常に學文を嗜み、三條坊門の南萬里小路の東に、北畠昌雪法印とかや儒學に長せし人の許に行通ふて、學業を勤め講筵につらなる、神祇官の邊りに富裕の家あり、其かみは山名が一族なりしに、武門を出て都に居を占め、名を隱して密かに身を修め、總て大名高家に通路を致さず、娘只一人持たり、牧子と名づく、年十六七ばかり、顏容世に類ひなく、繪書き花結び裁縫ふことに手利きて、しかもよろしからねども歌の道に心を懸け、情の色深く、花にめで月にあくがれ、紅葉の秋雪の夕、折にふれ事によそへて、歌よみ嘯きて心を痛ましむ、ある時兵部書を懷ろにして、萬里小路に詣うでける、道のつゐで牧子が家のつゐ地のもとに休みて、少し壞れたる所より內を覗きければ、時しも春の比、柳の糸枝垂れて櫻の花綻び、ひわ、こがら、爭ひ囀づり、其の傍に座敷しつらひ、簾掛けたるを半捲揚げ、ひとりの女端し近く居て小袖縫ひけるが、針を止め打傾きて、

ほころびて咲花ちらば青柳の
　糸よりかけてつなぎとゞめよ

兵部其姿を見て此歌を聞くに、限りなく愛で惑ひ、心も空になり足元たどしく、思ひの色深く染みて堪かねたるあまり、暫し立休らひて覗き居たりければ、牧子は是をも知らず庭に下り立ちて、つゐ地のもとに廻り來て兵部と目を見合せしかば、又なくあてやかなる美男なり、牧子是を見るに心移りて、此人にあらずは誰にか枕を並びの岡、時雨に染る紅葉ばの、色に出つゝかくぞ云ける、

我門のそともに咲る卯の花を
　かざしのために折るよしもがな

兵部いよ〳〵堪かね、聞書のため持ちたる矢立取出し、歌一首を雜紙に書つけ、小石につなぎ添へて投入れ侍べり、

いのちさへ身の終にや成ぬらむ
けふくらすべき心地こそせね

入初る戀路はすゑやとをからむ
かねてくるしき我こゝろかな

牧子これを取あげ、二返し三返し讀みて、いつしか心あこがれ、短冊取出し歌を書き、石につなぎて投出し侍べり、

あぢきなし誰もはかなき命もて
たのめばけふの暮をたのめよ

兵部これを取て家に歸り、其夕ぐれを待けるぞ久しけれ、夜に入て彼の方に赴き、つゐ地をめぐりて見れば、櫻の枝一つ築墻より外にさし出でゝ、花田の打帶一筋、繩のやうなるを懸け置きたり、兵部心得てこれを手ぐり、築地を越えて下り立ければ、春の物とやをぼろの月、東の山の端に出て、花かげ庭にうつり、そら薰の匂ひにあはせていとゞしめやかなり、是は抑人間世の外、三の島、十の州に來にけるかと怪しみながら、忍ぶ夜の習、身の毛よだちて凄まじくも覺ゆ、女は宵より木のもとに待侘び、兵部を見て、

うつゝともおもひ定めぬあふ事を
夢にまがへて人にかたるな

兵部とりあへず、

また後の契りはしらず新まくら
たゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ければ、牧子打恨みて、君と契り初め侍べらんには、千歳のゝちこん世も、同じ契り絶まじとこそ思ひ侍べれ、如何にかく賴みなくはおぼす、みづから命かけて、心を餘所に移すことは夢あるまじきを、親のいさめて自らを責め給ふとも、君ゆへ死なば恨みはあらじ、

たのまずばしかまのかちの色を見よ
あひそめてこそふかくなるなれ

と俊成卿の詠み給ひけん歌の心を思ひ給へと云、宮仕への女わらはに仰せて、酒取よせて兵部に勸めたり、已に夜更け人靜まりて物音も聞えず、兵部密かに、爰の家は誰人にて在すると問ふ、女物語しけるは、二人の親は山名の支族にて侍べり、久しく武門を離れて財寶ゆたか也、一族の中大名多く侍べれ共、交りちなむ事もなし、只身を修め名を隱して世を打過し給ふ、自らたゞ一人娘にて又兄弟なし、甚だいと

おしみ深く、別に此の花園をこしらへ部屋をしつらひ、春の花秋の月に心を慰め給ふ、親のおはする所は、少し隔りて侍べりなど云に、兵部少し心寛やかに覺ゆ、

世にもれむ後の浮名を歎くこそ
　　逢夜も絶えぬおもひなりけり

女返し、

ながれては人のためうき名取川
　　よしや我身はしづみはつとも

かやうに語らひつゝ、かたしく袖の新枕、交すほどだに有明の、つきぬ言の葉とり〴〵に、はや告げ渡る鐘の聲、うちしきる鳥の音に、起き別れ行く露涙、雲となり雨となる陽臺のもとぞ思はるゝ、兵部、

ちぎりをく後ちを待べき命かは
　　つらき限りの今朝のわかれぢ

女返し、

くらべては我身の方や勝るべき
　　おなじわかれの袖のなみだは

兵部は櫻の枝を傳ふて、朝まだきに家路に歸りても、心そゞろに學道も身に染まず、暮るゝを遲しと出て夜毎に通ふ、或日兵部が父問けるやう、汝は學文に物憂き心の付き侍べるかや、朝に家を出て暮に歸り來る事は、是學文を勤めて其道を行はむ爲なり、然るを汝此頃は、日暮になれば家を出て、曉方に立歸る、是何事ぞや、必ず輕薄濫行のたぐひ求めて、人の壁を毀ち墻を踰えて、正なき擧動するかと覺ゆ、其の事顯れ侍べらば、身は生ながら泥淤に沈み、名はそれながら塵芥に汚され、世になし者となり果つべし、若又語らふ女、定めて高家の娘ならば、必ず汝が爲に門戸を汚され、其身淺間しくすたれ給はんのみならず、罪科は定めて我門族に及ばむ、其事極めて大事也、今日よりして門より外に出べからずとて、一間の所に押籠めて、殊の外に戒めたり、女は夕べ〳〵花園に出てゝ待けれ共、廿日餘り更に音づれなし、女思ふやう、飛鳥川の淵せさだめず、變り易きは人の心なれば、又行き通ふかた有りて、我をば思ひ捨たるにや、又は病に臥して、いたはりつゝ侍べるやらむと、童を遣はして密かに聞かせしかば、かう〳〵押籠められ侍べりて、出入輩も言問交す事叶はずといふ、女聞て歎きに沈み、重き病になりつゝ、思ひの床に起き臥し、湯水を

だに聞入れず、時々は思ひ亂れし言葉の末、物狂はしきこともあり、肌かしけ色衰へて物悲しく、只涙をのみ流す、さまぐ\藥を求め神佛に祈れども、露ばかりも驗しなし、今は此の世の賴みもなく見えしかば、兩人の親歎きて、思ふ事ありけるやと問へども、定かに答へもせず、箱の底に兵部が歌ありけるを見出して大に驚き、童を近づけて問けれぱ、有のまゝに語る、親聞て、假令如何なる人にもあれかし、いとおしき娘の思懸けたらむには、何か苦しかるべきとて、頓て媒を以てかうぐ\と云はせければ、兵部が父の云やうは、我子已に器用あり、學を勤めて官につかへ、親の跡を續すべき者也、妻求めて身をくづをらすべきや、其事は未だ遲からずといふ、牧子が親重ねて云遣はすやう、日比に聞及ぶ、兵部少輔は今僅に潛み隱るゝ共、終にこれ池にあるべき類ひならず、されば我一人娘に緣を結ばれんには、我が家又誰か其跡を望まん、殘りなく讓りて兵部を子とせむとて、はや吉日を選びて兵部を呼て聟とす、娘心地を取立ちて惱み已に怠りぬ、兵部、

命あれば又も逢瀨にめぐりきて

ふたゝびかはす君が手まくら

女限りなく嬉しくて、

初月（みかづき）のわれて見し夜の面かげを

有明までになりにけるかな

かくて比翼のかたらひ、今は忍ぶる關守の恨もなかりし所に、細川山名の兩家權を爭ひて、應仁の兵亂起り、京都の大家小家皆燒亡び、諸國の武士都に集り、亂妨捕物狼藉いふ計りなし、女をば藥師寺の與一が手に捕物にして、其の顏かたちの美くしきを以て、犯し汚さんとす、牧子大に呼ばゝりけるは、自ら死すとも、田舍人の穢き者には靡くまじ、たゞ殺せよと云ふに、軍兵等怒りて女をば刺し殺しぬ、兵部は兎角して逃れ隱れ、其年の冬暫く京都靜まりければ、都に歸り來れば家は燒て跡なし、妻が家に行きて見れば人もなし、父は山名が手に屬して討死し、母は盜賊にはがれて殺さる、兵部只一人牧子が部屋にたゝずみ、淚にくれて居たりしに、其の夜夢の如く牧子歸り來る、是は如何にとて手を取組み淚を流す、女云ふやう、自ら君と別れちりぐ\になり、武士の手にかゝりあへなく殺され、尸を道の邊りに曝し、憐れと見る人もな

し、みづから貞節の義に死せし事を、天帝憐み給ひ、君が心ざしに引れて、今現れ參りたりといふに、兵部悲しき中に、なき人に逢事の嬉しさを取加へて、涙は雨の降るが如し、夜もすがら語らふ、曉方になりければ、兵部泣々、

思はずよまためぐりあふ月かげに

かはるちぎりをなげくべしとは

女返しとおぼしくて、

行末をちぎりしよりぞ恨みまし

かゝるべしともかねて知りせば

そゞろに泣焦れて別をとり、影の如くに成て失にけり、兵部は是より發心して東山の寺に籠り、幾程なく病に取結びて終に墓なく成ぬ、人みな聞傳へて、憐れにも奇特の事に思へり、

○幽靈出て僧にまみゆ

隅屋藤九郎は楠が一族として、畠山右衞門佐義就が手に屬し、嶽山の合戰に比類なき手がらを顯はし、終に打死して名を殘しけり、其の子藤四郎同じく義就に屬して、應仁元年御靈の馬場の軍に、畠山左衞門督政長が陣中より放ちける矢に中りて討れたり、父子二代已に義就に忠を盡しければ、其よしみ深く、河内國門間の庄を、藤四郎が舍弟藤次、生年五歲になりけるに知行せさせ、父藤九郎が妻と同じく住侍べり、其比諸國順禮の聖(ひじり)、只一人此のわたりに來り、日已に暮れければ、宿借るべき村里を求めて、門間の鄕近く田の畔に立休らふ處に、笛の音かすかに聞え、漸々に近付を見れば、年の程十四五と見ゆる少年、云ばかりなく美くしきが、髮からわに上げ、薄化粧に鐵漿黑く色白く、眉細く作りたるが、白き淨衣に袴着て、只一人畔を傳ふて來りつゝ、ひじりを見て云やう、和僧は何故に爰には佇み給ふと問に、ひじりは、是は諸國順禮の修行者にて侍べる、道に行暮て宿を求んため佇み侍べるといふ、少年すこし打笑ひて、世の中靜ならず、如何でか容易く宿かす人あるべき、假令出家也といへ共、若は敵の謀事かと、互に疑ひを致す時節也、惡く立めぐりて人に咎められ、あえなき命を失ひ給ふな、今は早や夜も更がた也、某が部屋に來りて一夜を明し給へとて、聖と打連れて一つの家に行至り、表の門は番の者も臥ぬらん、こなたへ入らせ給へとて、裏の小門より密に內に入て見るに、爰ぞ某の常に住

所とて、一間の部屋に入たり、内には持佛堂ありて阿彌陀の三尊を立て、前なる机には淨土の三部經あり、十二行の供物燈明かすかに花香を供へ、位牌の前には靈供そなへて、いと貴き有さま也、聖なにとなく殊勝に覺えて、暫く經讀み念佛す、少年の云やう、まだ宵の事ならば御内の者に仰せて、非時の料よくしためて參らすべきに、夜更け人靜まりてすべき樣なし、旅の勞れを休め飢をたすくる御爲に、此の靈供を參らせむといふ、聖は何か苦しかるべきとて、靈供の飯を二つに分て、少年と聖と食ひ侍べり、聖問ひけるは、爰は如何なる人の御家ぞ、和君は御名を何とか云ふと尋ねしに、少年答へけるは、某の父は隅屋藤九郎とて、武勇の譽れありしが、去ぬる嶽山の軍に討死せり、某兄弟二人其跡を繼ぐといへ共、弟にて侍べるものは未だ幼少也、某だに年にも足らねば、唯まづ母に育てられて月日を送る事にて、名をば藤四郎と云ひ侍べり、今宵貴きひじりに宿かし參らするも、他生の緣淺からぬ故なれば、某假令ひ空しくなるとも、後世を弔ふて給たまへとて、そゞろに涙を流しければ、聖聞て、如何に斯は仰せありける、君は誠に咨む花のまだ咲出ぬころをひ、さしも末久しく榮え給はん、老先ある御身ぞかし、ひじりは年傾きたる者なれば、しらずけふもや、浮世の限なるべきといへば、少年は、いやとよ、武士の家に生れて、名を惜み功を顯さむとするには、命は草の露、夕を待たでも消やすく、賴がたく侍べればかく申すぞ、其處に持ち給へる過去帳に、某の名を書のせ給へとて硯を出す、聖は、あら心得ずや、年にもたり給はねば、何の別ちもなく斯樣に望み給ふか、過去帳には死去たる人の名をこそ記せ、さらば御望みを背くも無下なり、逆修に書載せて武運の長久を祈り奉らんと云ければ、兒打笑ひて、それは兎も角も御心に任させたまへと云ふ程に、此兒眼ざし俄に變り、くるしげに息つき出し、何ぞ只今ぞや心得たりとて、傍にたてかけたる太刀をつとり、障子を開き立出るとぞみえし、跡もなく失にけり、ひじりは肝をけし、立出で丶見れどかげもなく物音も聞えず、不思儀の事に思ひながら、暮て歸るべき道も知らず、持佛堂の前に坐して夜を明かす、已に明方になりければ、藤九郎が後家其外家にありける一族、皆起出で丶持佛堂に參りて見れば、色黑く瘦がれたる法師一人

佛前にあり、こはそも如何なる古盜人の忍び入たるか、古狸の化けて居たる歟、からめ捕て子細を問へと犇めきたり、ひじりは少しも懼るゝ色なく、まづ靜まりて子細を聞給へとて、初め終りの事ども語りければ、さては藤四郎殿の亡魂現れ出給けむと、今宵位牌の前なる靈供を二つに分て、半はひじりに參らせ半は我が食けるに、ひじりの食せしは皆になりつゝ、半はさながら位牌の前に殘りてあり、母は餘りの悲しさに位牌の前にひれ伏し、聲を限りに泣き叫び、さても去ぬる正月十九日、京都御靈の馬場にして、流矢にあたりて打れしが、今日已に百箇日に及べり、此世に殘りて憂き物思する、自らにはなどや見えこざるとて引かづきて歎きしが、あまりの事に堪兼、聖をたのみて髮を剃り、尼になりつゝ、菩提を深く弔ひけると也、

○屛風の繪の人形躍歌

細川右京大夫政元は、源の義高公を取立、征夷將軍に拜任せしめ奉り、自ら權を執り其威を逞くす、或日大に酒に醉て、家に歸り臥したりしに、物音をかしげに聞えて睡りを覺まし、頭を擡げて見れは、枕本に立てたる屛風に古き繪あり、誰人の筆とも知れず、美しき女房少年多く遊ぶ所を極彩色にしたるなり、其女房も少年も屛風を離れて立並び、身の丈五寸許りなるが、足を踏み手を拍ちて歌うたひ、おもしろく躍りをいたす、政元つくづく其歌を聞けば、さゝやかなる聲にて、

世の中に、恨みは殘る有明の、月にむら雲春の暮、花に嵐は物うきに、あらひばしすな玉水に、うつる影さへ消えて行、

とくり返しくく歌ふて躍りけるを、政元聲高く叱りて、曲者共の所爲かなと云はれて、はらくくと屛風に登りて元の繪となれり、怪しきこと限りなし、陰陽師康方を喚びて卜なはせければ、屛風の繪にある女の風流の躍に、花に風と歌ふ、總べて風の字愼みあり、かたぐ以て重き愼みなりと云、永正四年六月の事也、其次の日政元、精進潔齋して愛宕山に參籠し、偏へに武運の長久を、勝軍地藏に祈申れたり、廿三日の下向道に乘たる馬、巳に坂口にして斃れたり、明れば廿四日我家に於て風呂に入けるに、其の家人右筆せし者敵に内通して、俄に突入つゝ政元を刺殺したり、

康方が風の字つゝしみ有と云ひしが、果して風呂に入りて殺されしも、兆(うらかた)の取どころ其故あるにや、

伽婢子巻之八終

伽婢子巻之九

○狐僞て人に契る

安達喜平次は江州坂本に住みけり、たま〳〵公方に參候して歸る、僕二人に馬の口取らせ、中間を召しつれ、白河より山中越にさしかゝる、日已に暮れ方になる、道より南の方神樂岡の西にして、年の比十七八と見ゆる女性顏容美くしきが、櫻花に小鳥の色々縫ひたる紅梅裏の小袖の裙かひ取り、草むらをあなたこなたして荊の上を打越え、道に踏み迷ひたるが如し、安達是れを見て、如何なる高家の娘なるらんと怪しみつゝ、近く歩ませ寄りたれば、此の女性袖を以て顏を覆ひ、足元は石に蹉きしば〳〵倒び轉ばんとす、安達人を遣はして、是れは如何なる御方なれば、此日の暮方召つるゝ者もなく、かゝる所に立廻り給ふと言はせけれ共物云はず、又重ねて人を遣はし、我が乘たる馬を引かせ道行なづみ給ふも見奉るに痛はしく覺え侍べれ、此馬に召されて、何づく迄も御住家に歸り給へ、送りて奉らむと云はせければ、女性嬉しげに顧

みて馬にのる、安達抱きのせしに、其の輕き事羅(うすもの)の如し、近く見れば世に類ひなく、光り出づるばかり麗はしきが、眉氣高く容(かたち)たをやかに袖に、薫りの香ばしさ、なにはにつけてもなべてならず、白玉か何ぞと怪しまれ、此の人の爲ならば露と消ゆるとも、恨はあらじとぞ覺えける、安達は馬の尻に付き靜かに歩ませ、元との道を京の方に歸りしに、一町許にして、忽ちに女の童五六人田中の方より走り出て、あな淺まし、此暮方取失ひ參らせしかと肝つぶれ胸とゞろき、彼方此方尋ね參らせしぞやとて、馬に添ふて南を指て行事二町許にして、年の比六十許の男、息もつきあへず、先より尋ね奉りし、まづ御心安く侍べり、扨此御馬貸給ふは思ひ寄らざる御情かなといふ、安達云やう、此御方道に踏迷ひ給ふ故に、御いたはしく思ひ奉り、某乘りたる馬奉り是迄送り參らせたり、是より又坂本に下り侍る也と云へば、彼の男云やう、姫君今日は田中と云所に遊び給ふを、座中酒もり久しくて、輿に乘じて獨り立出道に迷ひ給へり、はや日も暮たり、坂本までは中々に歸着き給はじ、よき便りなれば此方に入て一夜を明し給へといふ、安達それは誠に御芳志たるべしとて、南の方三町許り行きければ、茂りたる一構あり、其内には家居つぎ〱しく奇麗に立て、梅櫻桃李の花咲つゞき、藤の棚山吹の垣、池には菖蒲燕子花もえ出で、庭の面泉水のかゝり、世にある人の住みかと見えたり、襖障子幾間も立切たる書院廊下を傳ふて小座敷に行至る、其の奥には、唐の日本の花鳥盡くして書きたる繪の間あり、安達已に玄關より上りければ、あるじの女房其年四十許、世にけだかく見ゆ、召使ふ女の七八人を隨へ立出て、思ひも寄らずまれ人の客を受侍べり、姫たま〱出て遊びし侍べり、酒に醉たる事を痛み座を逃げて道に迷ひ、君に逢奉らずば、若は狼狐のたぶろかし、若は盜人に脅かされなん、よくこそ送りて給(たび)たまへ、それ如何にもてなし奉れとて、親しくもてかしづく、少時ありて酒肴取したゝめて出す、主の女房盃を取り安達にまいらせ、とても今宵は遊びあかして浮世の思ひ出とせむ、姫が姨も是におはす出でゝ酒すゝめたまへと云ふに、廿四五許の女房はなやかに出立ちて、打笑ひ立出しを見るに又世に稀なる美人也、安達、是はそも仙境に來れるか天上に升れるか、如何なる雲の上

と云とも今宵に勝る時はあらじと、嬉しくも不思議なり、酒已に酣にして安達は數盃を傾けたり、主の女房云ふやう、姨と雙六うち賭定めて遊び給へとて、黒檀に紫檀、檳榔交へちりばめたる盤のめぐりには、源氏の繪書き、水牛象牙黑白の石、蒔繪の筒に賽取添へて出したり、安達と姨とさし向ふて打けるに、賽の目を爭ひ、時々姨の手をとらへ、無理を云ふも心ありや、遊仙窟に張文潜と十郎娘が、雙六打て賭せし事を書きける筆の跡もなつかしくて、安達勝ければ沈香五兩を出し與ふ、姨又勝ければ安達出すべき物なく、笄を拔きて出したり、已に夜明方になり、東の山の端白み明けて人の音なふ聲聞ゆる比、家の内俄に驚きあはてふためき、盜人の入來るぞやと云ふに、主の女房、安達を後ろの門より推出せば、姨も行方なく立隱れたりと覺ゆるに、安達一人かた崩れなる山際の穴の内より這ひ出たり、茅つばな亂れ菫咲きて松の風高く吹、谷の水遠く聞えたり、賭に渡したる笄はなく、取りたる沈香はさしもなき木の片きれなり、初め女性の道を踏み迷ひしを、安達馬より下りて、後につきて行かと見えて影もなく失せにしかば、中間小者ばら尋廻り、只こゝもとにて見失ひぬとて、あまりに尋侘て、大なる穴のあるを見つけて、鋤鍬をかりよせ掘崩しけるを、盜人入來ると驚きける也、爰は何處ぞと人に問へば、神樂岡の後ろ也といふ、狐の誑ろかしけるにこそ、

○下界の仙境

昔太田道灌、武州江戸の城を築きて居住せらる、此地に水乏き事を苦しみけり、其比舟木甚七とて富裕の町人あり、掘拔の井戸を作らんとて金掘を雇ひ、人夫を入れて掘らするに、凡半町四方、深さ百丈許に及べ共水なし、金掘底に坐し休みつゝ、靜に聞けば、地の中に犬の吼る聲、庭鳥の啼音、かすかに響きて聞ゆ、怪しく思ひて又四五尺掘りければ、傍に切通しの石の門あり、門の内に入りて見れば兩方壁の如く、甚だ闇くして見え分かず、猶道を認め探りて一町許行きければ、俄に明かになり、切通の奥の出口より空を見上ぐれば、靑天白日輝き、下を見下ろせば大なる山の峯に續きたり、金掘其峯に下り立て四方を見廻らせば、別に天地日月明らけき一世界なり、其山に續きて谷に下り峯に登り、一里許行きて見れば、石の色は

皆瑠璃の如く、山間には宮殿樓閣あり、玉を飾り金を鏤め、瑠璃の瓦瑪瑙の柱、心も言葉も及ばれず、大木多く生い並びて、木の形は竹の如く、色青くして節あり、葉は芭蕉に似て紫の花あり、大さ車の輪の如し、五色の蝶其翼大さ團扇の如くなるが、花に戲れ、又五色の鳥其大さ鴈の如く、梢に飛翔り、其の外もろ〳〵の草木、何れも見なれぬ花咲き實のり、岩の間（はざま）より二道の瀧流出る、一つの水は、色清き事磨立たる鏡の如く、一つの水は色白き事乳の如し、金掘やう〳〵山を下り、麓より一町許にして一つの樓門に至る、上に天桂山宮と云ふ額を懸けたり、門の兩脇に番の者二人あり、金掘を見て驚き出たり、身の長五尺餘り、容の美はしき事玉の如く、唇赤く齒白く、髮は紺青の絲の如し、碧の色なる布衣（ほい）、黑き烏帽子着たるが、走り出て咎めけるは、汝何者なれば爰に來れると、金堀ありの儘に語る、其の間に門の內より、裝束綺羅美やかに容うつしく、艶やかなる事酸漿子（ほうづき）のやうなる者二十人許出て、けしからず臭く穢らはしき匂ひあり、如何なる事ぞとて番の者を責るに、番の者恐れたる氣色にて、人間世界の金掘、思ひの外なる事に依りて迷ひ來れりと云て、子細を具さに語る、其時奥より照り輝くばかり緋き裝束に、金の冠を着たる人出て云やう、大仙玉眞君の勅定には、其金掘をつれて遊覽せしめよとあり、先の廿人の輩敬ふて承り、番の者に仰付たり、まづ金掘をつれて、清き水の瀧に行きて身を洗はせ、色白き水の瀧に行て口を嗽がせたるに、其水甘き事蜜の如し、思ふさまに飮ければ、酒に醉たるが如くにして、暫くありて心すゞやかに覺ゆ、番の者引つれて山間を廻るに、宮殿樓閣皆谷間に立ちつらなれり、只門外より見入れて內に入る事協はず、斯て半日許りにして、山の麓に又一つの城に至る、樓門の上には黃金を以て、梯仙皇眞宮といふ額を懸けたり、水精輪の所成金銀の壁、瑇瑁の垣琥珀の欄干、白玉の鐺瑋璭の簾眞珠の瓔珞、五色の玉を庭の砂とし、いろ〳〵の草木名も知らぬ鳥、實に奇麗嚴淨なること云ふ許なし、され共門の內には入られず、さこそ內には善盡くし美盡くして、言語たえたる事の有らんと思ひ、扨爰は何處ぞと問ふ、番の者の云ふやう、是皆もろもろの仙人、初めて仙術を得ては、まづ此所に來りて七十萬日の間修行を勤め、其の後天上に升り、或は蓬

萊宮、或は藐姑射山、或は玉景崑閬なんどに行きて、仙人の職にあづかり官位を進み、符籙印咒藥術を究め、飛行自在を悟り侍べる事也といふ、金掘問やう、已に是仙人の國ならば、人間世界の上にはなくて、下にあるは如何なる故ぞや、番の者答へけるは、爰は下界仙人の國也、人間世界の上には、猶上界仙人の國ありとて見廻らせ、汝早く人間世界に歸れとて、白き水の瀧につれて來り、又其水を飽くまで飲ませ、元の山の頂に登りて、初めの大門の前にして、奥に奏し入れければ、玉の簡金の印を出されたり、是を取りて金掘を打つれ、もとの岩穴の口に出るに、門々皆開けたり、送りける番の者云やう、汝爰に來りては暫し半日の程を覺ゆる共、人間にては數十年を經たりとて、元の穴に入ければ、又闇くして道も見えず、只風の音のみ聞えて、駿河國富士の麓の洞より出て、大に驚き怪しみ江戸に歸りて、太田道灌の事を尋ぬれば、夫ははや百年以前也、井を掘らせられし事は聞傳へたる人もなく、又其跡もなし、人改まり家立かはりて、本城は大に榮えたり、我家を尋るに何處とも知れず、一族の末も聞えず、つら〳〵思ふに、長祿元年江戸の城始りて、今弘治二年丙辰まで一百年に及べり、金掘更に人間を願はず、五穀を斷ちて食せず、木の實を食ひ水を飲み、足に任せて修行す、數年の後富士の嶽にて或人行逢ひたり、後に其住所を知らず、

○金閣寺の幽靈に契る

中原主水正は、美男の譽ありて色好みの名をとり、生年廿六に及びて定まれる妻もなし、春の花に憧れては風を恨み、秋の月に嘯きては雲をかこち、官に仕へながら浮れ歩行て、心を物毎に痛ましむ、大永乙酉彌生ばかりに、思立て霞を分けつゝ、北東の山路にさすらひ、暮行春の名殘を慕ふ、北白川檜垣の森、櫻井の里氷室山、岩倉谷狐坂、八鹽岡比叡横川片岡の森、鬼が城大原音無の瀧、志津原朧淸水市原野邊、暗部山を打巡り鹿苑院に行至る、世に金閣寺と號す、征夷大將軍源義滿公、此の地に家作して移り住み給ひしを、薨去の後直に寺となし給へり、庭の築山泉水の立石、實に古今絶景の勝地として、類ひなき所なり、中原爰まで浮かれ來て、日已に暮れて朧月東の方に出づれば、春宵の一刻其價を誰か千金とは限りぬらんと、花に移ろふ月の光に、木の本も立去り難く覺えし、里の

家に宿は借りけれ共いも寢られず、砌を廻り苔路を踏て金閣の本に至りぬ、さんぬる應永十五年、義滿公の薨じ給ひしより既に百十八年、其かみさしも賑々しかりけるも、君おはしまさず成りけるより、住人も漸々稀になり、礎傾き柱朽ちて、僅に金閣のみ昔しの色を殘したり、圭水は軒に立寄り欄干に憑りかゝりて、昔を思ひ今を感じて更行く月に打嘯きつゝ、古木の櫻花少し咲たるを見やりて、

櫻花いざ言問はん春の夜の
月はむかしも朧なりきや

かゝる處に一人の女、其齡十七八と見ゆるが、半者一人召具して閣のもとに來れり、桂の眉墨雲のびんつら、窈窕なる姿かたち、美しさ心も詞も及ばれず、云ふ計なくあてやかなるが、如何なる事ぞと忍びて見ければ、此女房云やう、金閣ばかりは故の如くにして、庭の面は風景變らず、但時移り世變はりそゞろに昔の戀しきのみ、思ひつゞくるこそ悲しけれとて、泉水の邊りに休らひて、津守國基花山に行きて、僧正遍照が古跡のさくら散りけるを見て詠みける古歌を吟詠す、

あるじなき住かに殘る櫻ばな
あはれむかしの春や戀しき

圭水正此吟を聞くに、胸とゞろき魂きえて、心もそゞろに惑ひつゝ、現なき中より、

咲花にむかしを思ふ君はたぞ
今宵は我ぞあるじなるもの

とよみて立向へば、女房更に驚く氣色なく、いとさゝやかなる聲にて、初より和君此所に在する事を知り侍べりて、自ら爰に來りて見え參らする也といふ、大に怪しみて其名を問へば、女答へて云ふやう、自らは人間に捨られて已に年久し、此事を語り侍らば、和君定て驚き怖れ給はんといふに、圭水正此言葉を聞きて、扨は是人間にあらず、山近く木玉の現れしか、狐のなれる姿か、然らずば幽靈ならんと思ふに、形の美くしさに心解けて、露おそろしき事なし、如何でか驚き怖れ侍べらむ、只有の儘に語り給へと云ふ、女房云やう、自ら畠山氏の家に生れ、古義滿公此所に引籠り給ひし時宮仕へせし者なり、年二十にして空しくなり、君の御憐み深くて此の院の傍に埋み給ふ、今宵は追福の御事によりて、從一位良子禪尼の御許に參り

ぬ、是れは義滿公の御母にて在します、其の座久しくて、今漸く爰に出來り侍べりとて、牛者に仰せて筵裀を取敷かせ、酒菓をめし寄せ閣の庇に向ひ坐して、今夜の花に今夜の月、如何で空しく送り明さむとて、酒のみ語り遊ぶ、牛者歌うたひ、盃の數重なれり、女房打かたぶきて、

明行かば戀しかるべき名殘かな　花のかげもるあたら夜の月

と詠みて打涙ぐみけるを、主水正心ありげに思ひて、

いづれをか花は嬉しと思ふらむ　さそふあらしとをしむ心と

女房袖かき收めて、君は自が心を引み給ふと覺ゆる歌ぞかし、世を去て久しく埋れし身の、又立返り君に契らば、死すとても朽果てはせじと、睦まじく語らひける程に、月は西の嶺にかくれ、星は北の空に集まる頃西の庇に移りて、女房わりなく思ふ色顯れ、暫し諸友に枕を傾けしに、春の夜の習ひ程なく時の移りて、鳥の聲三たび啼つゝ、花より白む横雲の嶺に棚引く比になれば、互に涙を拭ひて起き別れたり、晝に成てそこら見廻せば、院の傍に古たる卒都婆ありて、苔むしたる塚に朽殘り、塚の左に小さき塚並べり、これ牛者其比悲みて打續き焦れ死せしを、人々憐れがりて、同じ所の塚の主になしたると也、主水正憐れにも悲しくて、家に歸らん事を忘れ、又其夕暮に閣の邊りに立廻れば、女房も顯れ出て、手を取り組み涙を流して語るやう、自ら君が心の情を感じて、只其夜るの契をなし、葛城の神かけて、晝を厭ふぞ心憂きなど云ひければ、男も何かをば厭ふとて、只烏羽玉の夜るならで、契を交す道なしとや、宵々每を待つも苦しきに、誰を人目の關守になし、忍ぶ歎きをこりつむべきなど語らひ、是より夜每に爰に出逢ふ、廿日許の後は晝も出てゝ語り遊ぶ、主水も官に仕ふる身なれば、都に歸りて日每に行通ふ、終に或日雨少し降りけるに、晝行きて出あひ、女房を連れて京の家に歸りて、只管常に仕侍べり、其身持よろづ愼みて、物云ひ言葉の品才智有り、主水一族に交りを親しく、內外に召使ふ女童まで、恩を與へ惠みを厚くし、隣家の嫗までも隨ひいつくしみ、此女房に心をとけずと云ふ事なし、衣縫ふ業物書きうとからず、かろ〴〵しく他人にまみえず、まことに主水は淑女のよきたぐひを求めたりと人皆

羨みけり、かくて三年の後七月十五日、女房云やう、牛者は、我住ける方の宿守せさせて殘し置ぬ、さこそ待侘らめ、今日は金閣に行て言問ひ侍べらんとて、酒ととのへて圭水女房打つれて行く、日已に暮れて、月さやかにして東の山に出れば、池の蓮は南の池に開け、柳は枝垂れて露を含み、竹は風にそよぎけるに、牛者出迎ふて云やう、君已に人間に返り遊ぶ事已に三年にして、樂を極めながら、御住かをば忘れ給ふかと、恨めし氣に云ひければ、三人つれて閣の西の庇に行て、女房泣々圭水に語るやう、君が情の深きに引れて、三年の月日は、隙ゆく駒の影より疾く打過て、猶飽くことなき契の中らひ、今宵を限に永く別れ參らせむ、自ら黄泉の者ながら此の世の人に馴るゝ事、過世の緣淺からぬ故ぞかし、今は緣つき侍べれは別れをとり參らする也、若又是を悲しみて强ひて爰に留りなば、冥府の咎めも如何ならん、君をさへ惱まし侍べらん、禍必ず遠かるまじとて、互に淚を流しつゝ袂も袖も絞りけり、已に曉の八聲の鳥も打頻り、鐘の音響き渡りしかば女房立上り、蒔畫の箱に香爐を入れて、是れは此程の形見共見給へとて、なく〳〵別れて古塚の方に行く、猶も名ごりを惜みて立戻り見かへりて、烟の如く消失せたり、圭水胸焦れ身悶えて悲しき事限りなく、血の淚を流して慕へ共かなはず、家に歸りて僧を請じ、法華經を讀みて弔ひ、一紙の願文を書て供養を遂げ侍べり、其詞に、

維靈は、生れてよきたぐひ群にこえ、妍すがた仙に似り、花の鮮なる玉のうるはしき、皆此の靈の形に寫せり、往昔は金の扃に宮仕へ、如今は荒れたる墳に埋もれり、篠薄の下に住み狐兎のゆくに忍ぶ、花落ちて枝に返らず、水流れて源に來らず、日かげ傾き月めぐれ共、精靈はひたゝけず、性もの識ること長へに在す、魂を返す術はなしに姿をあらはす功あり、玉のさし櫛紅の襠は、色うるはしくにほひ殘れり、松の千歳常盤かはらず、喜びを同じく偕に老いなんことを思ひしに、如何に逢て又別れたる、雲となり雨となりし朝な夕なの恨、歎くに其の跡を失へり、しるしの墳に向へども、聲をだにまだ聞かず、後の逢瀨いつか繼がん、鴈の聲僅に悲しみを助け、螢の光り只愁へを弔ふ、姿隱れ情け絕えて、空しき空に霧ふさがり星くらし、心の底は糸のみだ

れ、涙の色紅ゐを染て、悲しみの中に經讀み花を手向く、靈よくうけ給へ、嗚呼悲しきかな痛ましき哉、冀くはよくうけ給へ、

ともす火やたむくる水や香花を

魂のありかにうけて知れ君

主水是より官職を辭退して、獨淋しき床に起き臥し、只此人の面影のみ立離れず、歎きに沈み侍べりしが、二たび妻をも求めず、小原の奥に引籠り、終に其終る所をしらず、

○人面瘡

山城の國小椋と云所の農人、久しく心地惱みけり、或時は惡寒發熱して瘧の如く、或時は遍身痛み疼きて通風の如く、さま〴〵療治すれ共驗なく、半年許の後に、左の股の上に瘡出來て、其形人の貌の如く、目口ありて鼻耳はなし、是より餘の惱みはなくなりて、只其瘡の痛む事云ふばかりなし、まづ試に瘡の口に酒を入るれば、其まゝ瘡の面赤くなれり、餅飯を口に入るれば、人の食ふ如く口を動かし呑み納る、食を與れば、其間は痛止まりて心安く、食せさせざれば又甚痛む、病人此故に痩せ勞れてしゝむらいたみ、力落ちて骨と皮とになり、死すべき事近きにあり、諸方の醫師聞傳へ、集りて療治を加へ、本道外科皆その術を盡くせども驗なし、玆に諸國行脚の道人此所に來りて云やう、此瘡實に世に稀なり、是を患ふる人は必ず死せずと云事なし、され共一つの手立を以て癒る事有べしと云、農夫云やう、此病だに癒へば、たとひ田地を沽却すとも何か惜かるべきとて、則ち田地をば賣代なし、其價を道人に渡す、道人もろ〳〵の藥種を買集め、金石土を初めて草木に至りて、一種づゝ瘡の口に入るれば、皆受けて是を呑みけり、貝母と云ふものを差よせしに、其の瘡則ち眉をしゞめ口を閉ぎて食はず、やがて貝母を粉にして瘡の口を押開き、葦の筒を以て吹入るゝに、一七日の内に其瘡則ち痂づくりて癒えたり、世にいふ人面瘡とは此事なり、

○人鬼

丹波の國野々口と云所に、與次といふ者の祖母百六十餘歳になり、髮甚だ白かりければ、僧を賴みて尼になしけり、若き時より放逸無慚なる事ならびなし、與次已に八十餘にして子共あまた有り、孫も多かりしを、彼の祖母は與次を我が孫なりとて、常に心に協は

ぬ事あれば、責いましむる事小兒を威し叱るが如くす、され共與次がため祖母の事なれば、孝行に養ひけり、此の嫗年已に極りながら、目も明かにして針の孔を通し、耳さやかにして私語くことをも聞付け侍べり、年九十許の時齒は皆脱落ちたりしに、百歳の上になりて元の如く生ひ出たり、世の人ふしぎの事に思ひ、幼なき子持てば、此の祖母にあやかれとて名をつけさせ、持てなしかしづき侍べり、晝の內は家に在りて麻をうみ紡ぎ、夜に入れば行先知れず家を出る、初めの程こそ有けれ、後には孫も子も怪しみて、出て行跡をしたへば、此祖母立歸り大に叱りどよみ、杖は突きながら、足はやく飛が如くに步む、更に其行所定かならず、身の肉は消え落ちて骨太く顯れ、兩の目は白き所色變じて碧し、朝夕の食事は至りて少なけれ共、氣象は若き者も及ばれず、或時より晝も出て行くに、孫曾孫新婦なんどに向ひて、我が留守に部屋の戶開くな、必ず窓の內をさし覗くな、若戶を開かば大に怨むべしと云ふに、家にある者共怪みおもふ、また或日晝出でゝ、夜更くるまで歸らざりけるに、與次が末子酒に醉ひて、何條祖母の部屋の戶を開くなと云はれしこそ怪しけれ、留守の紛れに見ばやと思ひ、密に戶を明けて見ければ、狗の頭、庭鳥の羽、幼子の手首、又は人の髑髏手足の骨、數も知らず簀の下に積重ねてあり、是を見て大に驚き、走出て父に斯と告げたり一族集りて如何すべきと評議する所へ、祖母立歸り、部屋の戶の明きたるを見て大に恨み怒り、兩眼圓く見開き光り輝き、口廣く聲わなゝき、走り出て行方なく失せにけり、恐ろしさ云許なし、後に大江山の邊に薪こる者行逢ひたり、其さま地白のかたびらを壺折り、杖を突きて山の頂に登る、其速き事飛がごとく、ゐのしゝを捕へて押伏せたるを見て、おそろしく身の毛悚立て逃げかへりぬと語りし、彼の姥なるべし、生ながら鬼になりける事疑ひなし、

伽婢子卷之九終

伽婢子卷十

○守宮の妖

越前の國湯尾と云ふ所のおくに、城郭の跡あり、荊棘のいばら生茂り、古松の根よこたはり、鳥の聲かすかに谷の水音物凄きに、曹洞家褊衫の僧麈外首座とかや、この所に草庵を結びて、坐禪學解の風儀を味ひ、春は萠え出る蕨を折りて飢をたすけ、秋は嵐に木の葉をまちて薪とす、近きあたりの村里より、檀越まうで來りては、その日を送る程の糧をつゝみて惠む事、折々はこれありと雖も、多くは人影も稀々也、されども書典を開きて向ふ時は、古人に對して語るが如く、坐禪の床にのぼれば、空裡三昧に入て、をのづから淋しくもなし、或る夜燈火をかゝげ机に凭掛り、傳燈錄を讀み居たりければ、身の丈け僅に四五寸許りなる人、黑き帽子をかぶり細き杖をつき、蜗のなくが如く小さき聲にて、我れ今こゝに來たれども、主人なきやらん、物云ふ人もなく、靜かに淋しきことかなと云ふに、麈首座もとより心法おさまりて、物のために動せざるが故に、これを見聞くに驚恐れず、かの化物怒りて、我今客人として來りたるを、無禮にして物だに云はぬ事こそやすからねとて、机の上に飛び上る、麈首座扇をとりて打ちければ、下に落ちて、狠藉の所爲よく心得よとて、大に叫びつゝ門に出でゝ跡かたなし、暫くありて女房五人出來れり、その中に若きもあり姥もあり、何れも身の丈け四五寸許なり、姥が云ふやう、我が君の仰せに、沙門たゞ一人、淋しき燈火の下に學行をつとめらる、早く行向ふて物語りをも致し、又佛法の深き理りをも問答して慰めよとあり、此の故に智辯兼備へたる學士こゝに來りければ、何ぞあらけなく打擲して耻を見せたる、我君たゞ今こゝに來りて、子細を尋ね給ふべき也と云ふに、其丈五六寸許りなる人、腕をまくり臂を張り手ごとに杖を持ちて、一萬餘り馳せ來り、蟻の如くに集り麈首座を打つに首座は夢の如くに覺えて、痛むこと云ふばかりなし、その中にまた一人、あかき裝束して烏帽子着たるもの、大將かと見えて後に控えて下知して、沙門はやくこゝを出て去るべし、出て去らずば汝が目鼻耳を損ずべしと云ふに、七八人首座が肩に飛び昇り、

耳鼻に喰ひ付きければ、塵首座これを拂ひ落して、門の外に逃げ出つゝ、南の方の岡に登りて見れば、一つの門あり、これはそも見馴れざる所かな、先づこゝに立ち寄りて今夜を明さんと思ひ、門外近くさしよりければ、後より一萬餘の人立かへり、塵首座捕へて咄とつき倒し、門の内に引入たり、門の内にも七八千許りの人數、身の丈け五六寸ばかりなるが、隙まもなく立ち並びたり、大將また歸りて云ふやう、我汝を憐みて、伽をつかはし慰めんとすれば、反つて損害をなす、その罪まさに手足を斬りて償ふべしと云ふ、數百人手ごとに刀を拔き持ちて立ちかゝる、首座大いに怖れ惑ふて、それがし愚かなる眼をもつて、その惠みを知らざる事、その誤りまことに少なからず、後悔するにかへらず、たゞ願はくは、罪を赦したまへと云ふに、さては悔む心あり、さのみにせむべからず、なだめて追返せといふ聲聞えて、門の外へ突き出さると思ふに、寺の小門の前なり、堂に立ちかへりたりければ、燈火は消え殘り、東の山の端しらみて明け渡る、あまりの不思議さに、門のあたりを尋るに更に跡なし、東の方に少し高き丘の下に穴ありて、守宮多く出入するを怪しみ思ひて、人多く雇ひてこゝを掘らするに、漸々に底廣し、一丈許り掘ければ、守宮集りて二萬ばかりあり、中にも大なるもの、其の長一尺ばかりにして色赤し、これすなはち守宮の王なるべし、村人の中に、一人の翁すゝみ出て語りける樣、古へ瓜生判官とて武勇の人あり、この所に城を構へて暫く近邊を從へ、新田義治に心を傾けたり、その根源は、判官の舍弟に義鑑房とて出家あり、新田義治を見まいらせ、極めてたぐひなき美童なりければ、これに愛念を起し、兄の判官をもすゝめて義兵を擧げしかども、遂に本意を遂げずして討死したり、義鑑房が亡魂この城に殘りて守宮になり、城の井の中に住みけるが、年經て後、その井のもと頽れたりと云ひ傳へし、さてはうたがひなく井のもとの守宮、今既にこの妖魅をなすと覺えたり、早く取り拂はずば、かさねてまた災ひあるべしといふ、塵首座一紙の文を書きていはく、

云越蟲あり、蛤蚧と名づく、かしらは蝦に似て四つの足あり、鱗細かにして背に重なり、色黑くして尾長し、石龍子をもつて部類とし、蝘蜓をもつて支族

とせり、或は泥土水の底にかくれ、或は頽井の中に群がる、然るに今この土窟に蟄して、ほしいまゝに子孫を育長し、その巨多こと何ぞ數ふるに百千をもつて盡さむや、月をわたり年をつみて、忽に變化妖邪の禍をなし、猥に人の神魂を銷さしむ、これ何の事ぞや、爾而生を蟲等の間に托し、質を虵虬の屬によせて、暫く十二時蟲の名ありといへども、亦三十六禽の員に外れたり、よく蝎蠅を捕て蝎虎の美名あり、よく一日のうちに身の色變りて折易の佳號ありといへども、守宮のしるしを張華が筆に貽し、戀情の媒介を王濟が書にしるす、これ皆嫉妬愛執をもつて爾が性とす、諒とに聞く、爾はそのかみ釋門の緇徒、一朝卒然として男色に眩めき、つゐに行業を捨てゝ武勇をはげまし、鬱悶して死して這ふ蟲となれりと云ふ、嗚呼酥を執せし沙門は酥上の蟲となり、橋を愛せし桑門は橋中の蟲となる、これ上古の聆に傳ふ、爾色に淫してまたこの蟲となれり、其の性既に色を繕ふの能あり、人の惡む所世の戒むる所、何ぞ慚愧の心なく、剩へ斯の如くの怪異をなすや、早く心を改めて正道に赴き、生を轉じて眞元に歸れ、

とよみければ、是にや感じけん、數萬の守宮皆一同に死たをれたり、人皆不思議の思ひをなし、たゞこのまま捨べき事ならずとて、柴を積みて燒たて灰になし、一丘を築てしるしとす、それより後再び怪異なし、

○妬婦水神となる

山城の國の郡は橋より東にあり、宇治橋より西をば久世郡と云ふ、宇治橋の西の詰北の方に、橋姫の社あり、世に傳へて云ふ、橋姫は顔かたちいたりて見惡くし、このゆゑにつゐに配偶なし、橋の南に離宮明神あり、昔夜な〳〵橋姫のもとに通ひ給ふ、その來り給ふ時は、宇治の川水白波たかくあがりて、すさまじき事云ふばかりなし、されば明神の歌に、

夜や寒き衣やうすきかたそぎの　行きあひのまに霜や置くらむ

と詠み給ひしとかや、然かるに宇治と久世と、新婦をとり聟をとるに、橋姫の前を通り、橋を渡りて緣をとれば、久しからずして必ず離別するなり、このゆゑに今に到りて兩郡緣を結ぶには、橋より北の方槇の島より舟にて川を渡る事なり、これは橋姫わが容貌の

惡しくて、ひとりやもめなる事を怨み、ひとの縁邊を嫉み給ふ故なりと云へり、それにはあらず昔宇治郡に、岡谷式部とて富裕の者あり、その妻は小椋の里の領主村瀬兵衛と云ふ人の女なり、物嫉み極めて深く、召し使ふ女童まで、少し人がましきをば追出して、たゞ五體不具の女ばかりを家の內には集め使ひけり、餘所の事をも、男女のわりなき物語を聞きては、そのまゝ腹立ち怒りて食更に口に入れず、まして夫の事は悋氣ふかくせめかこちて、門より外に出さず、岡谷ももてあつかふて、去戾さんとすれば、我にいとまをくれて去りたらんには、鬼になりてとり殺さんなど、すさまじく罵しりけり、年をかさぬれども子もなし、岡谷常には雙紙を讀む事を好みて慰みとす、源氏物語の中に、物嫉み深きためしには、六條の御息所は死して鬼となり、髭黑大臣北の方は物狂はしくなれり、これ皆物ねたみ深きためしとて、後の世迄も名を殘せし、是等は恐ろしながらも眉目かたち美しかりしと云へり、たとひ悋氣深くとも、和御前もみめよくばありなむ、さのみに猛々しう嫉み給ふなと云ふに、女房大に腹立ち、みめ惡ろきを嫌ひて、又こと女に心をうつさんとや、この姿にて見惡くければこそ男も嫌ひ侍れ、生をかへて思ふまゝに身をなし、心定まらぬ男を思ひ知らせんとて、髮はさかさまに立ち、口廣く色あかうなり、眼大に血さし入たるが、淚をはらはらと流し、座を立ちて走り出つゝ、宇治川に飛び入たり、水練を入て求むれ共死骸も見えず、岡谷驚き、平等院にしてさまざま佛事とり行ひけり、七日と云ふ夜の夢に、妻の女房來りて岡谷に云ふやう、我死して此川の神となれり、橋を渡りて緣を結ぶものあらば、行末必ず遂げさすまじとて夢さめたり、これより橋を渡りて緣を結べば、必ず別離すると云へり、舟にて川を渡すにも眉目わろき女には仔細なし、顏貌美しき女の渡れば、必ず風あらく波立ちて舟危しと云ふ、此のゆゑに新婦を迎へて川を渡すに、波風なきときは新婦のみめ惡ろからんと、諸人これを知るとかや、

○祈て幽靈に契る

上野の國平井の城は、上杉憲政の住み給ひし所なるを、北條氏康これを攻め落とし、憲政は越後に落行きて長尾謙信をたのみ、二たび家運を開かん事をはか

り給ふ、平井の城には北條新六郎を入れをかれし處に、城中に一間の所あり、金銀をちりばめ、屏風障子皆花鳥草木いろ〳〵の繪を盡し、奇麗なる事云ふばかりなし、庭には樣々の石を集め、築山泉水其巧をなし、築山に續きたる花岡には、春より冬に到る迄、咲きつゞく草木の色更に絕間なし、是はそのかみ、憲政の息女彌子生年十五歲、みめかたち世に類ひなき美人にて、心のなさけ色ふかく、優にやさしかりければ、見る人聞く人皆思をかけ心をなやます、憲政はいかなる高家權門の輩にも合せて、家門の緣を結ばんとおぼして寵愛深く、別にこの一間をしつらひをかれし所に、家人白石半內と云ふ小姓、たゞ一目見染めまいらせ、心地惑ひて堪へかね、風の便りにつけて文一つまいらせしに、此事あらはれ、半內ひそかに首をはねられたり、その後百日ばかり過てむすめ彌子、日暮がた俄におびえて絕入給ひ、つゐに空しくなり給へり、さだめて半內が亡魂のしわざならんと聞傳へし、新六郎この物語を聞て、たとひ幽靈なりともかゝる美人に逢ひて語らはば、さこそ嬉しからまし、今生の思ひで何事かこれにまさらんと、頻に思ひ染めて、朝夕は香をたき花を手向て、人知れず戀慕の心つきて祈りけり、或る日の暮がたに、何所とも知らず女の童一人來りて、新六郎に向ひて云ふやう、わが君はそのかみ此所に住給ひしが、君の御心ざしにひかれてこれ迄あらはれ、只今參り給はんに君對面し給ふべきやといふて、消え失せしが、暫くありて異香くんじて、先の女の童につれて、一人の美女築山のかげより出來れり、その美しさ、此世の中にはあるべき人ともおぼえず、天上より降れるか神仙のたぐひかと見るに、中々目もあやなり、新六郎、これは聞及びし彌子の幽靈なるべし、日ごろ我念願せし所ひとへに通じけり、鬼を一車にのすと云ふ事はあれど、何かすさまじとも思はん、契をかはして思ひを述べんには、人と幽靈とは同じからずと雖も、なさけの色は死と生とかはる事あらじものをと、女の手をとり引いれて、時うつる迄語らひけり、女すでに立歸らんとするとき、自らこゝに來る事をあなかしこ人に洩し給ふな、又暮を待ち給へと契りて、

底深き池におふてふみくりなは
くるとは人に語りばしすな

とうち詠じ、庭に出て行くかと見れば、そのまゝかたちは消え失せたり、次の日の暮がたに又來れり、曉かへりては夕暮に來ること六十日に及べり、或る日新六郎、家人を集めて樣々物語のつゐでに、女の云ひし事を打ち忘れ、此の事を語り出だしけり、家人等奇特の事に思ひて、壁をほりて覘きけるに、女來りて物語すれどもその姿は見えず、女の童と見えしは伽婢子にて侍りし、女或る夕暮來りて、大に恨み歎きたる有樣にて云やう、何とて洩し給ふなと云ふ言葉をたがへて、人には語らせ給ひしぞや、此の故に契は絕えて、かさねて逢事かなふべからず、これこそこの世の名殘りなれとて、

しばしこそ人め忍ぶの通ひ路は

あらはれそめて絕え果てにけり

となくく詠じければ、新六郎淚の中より、

さしも我がたえず忍びし中にしも

わたしてくやしくめの岩はし

女はなくく金の香合一つとり出して、君が心ざし變らで思し給はゞ、これをかたみとも見給へとて渡しけり、新六郎も珊瑚琥珀金銀を交へてつなぎたる、數珠一連をとり出し、これは見給ふべき物とはなけれども、黃泉の棲家には身のたよりとも御覽ぜよかしとて、女の手に渡しつゝ、さるにても又逢ふべき後の契を、この世の外には何時とか定め侍べらんといへば、今より甲子といふ年を待給へとて、淚とゝもに、雪霜の消るが如く失せにけり、新六郎盡きぬ名殘りの悲しさに思ひむすぼゝれ、心なやみ形ちかじけたり、醫師此事を聞て藥を與へしかば、月をこえて病いえたり、後に或る人語りけるは、憲政の愛子こゝにすみて俄にをびえ死せり、これは此むすめを思ひかけし小姓白石半内が、怨みて殺されし亡魂のしわざなり、憲政こゝにおはせし間は、空曇り雨降るときは、半内が幽靈いつもあらはれ見えしと也、此程はその事絕て、見し人もなしと云ふ、新六郎これを聞に、すさまじく思ふ心つきけり、或日空くもりて雨雲うちおほひたる暮がたに、年のほど廿ばかりの男、痩せつかれたるが髮うち亂し、白きねりぬきの小袖に、袴着て紫竹の杖をつきて、泉水の端にすごくと立たるを見て、新六郎太刀を拔きて向ひければ、きえぎえとなりて失せにけり、これより僧を請じ、一七日

のうち、水陸の齋會をいとなみて弔ひしかば、これにや怨も解けぬらん、重ねてあらはれ出づる事なしとかや、

○竊(しのび)の術

甲陽武田信玄、そのかみ今川義元の聟として、あさからず親しかりけるに、義元すでに信長公に討たれて後、その子息氏眞、少し心のをくれたりければ、信玄あなづりて無禮の事ども多かりし中に、今川家重寶と致されし定家卿の古今和歌集を、信玄無理にかりどりにして返されず、秘藏して寢所の床に置かれけるを、或る時夜のまに失なはれたり、寢所に行くものは譜代忠節の家人の子供五六人、其外は女房達多年召し使はるゝものゝ外は、顏をさし入て覗く人もなきに、たゞこの古今集に限りて失せたるこそ怪しけれ、又その外には、名作の刀脇指金銀等は一つも失せず、信玄大に驚き甲信兩國を探し、近國に人を遣しひそかに聞き求めさせらる、此所他人更に來るべからず、いかさま近習の中に盜みたるらんとて、大に怒り給ふ、古今の事はわづかに惜むに足らず、たゞ以後までもかゝるものゝ忍び入を、怠りて知ざりけるは無用心の故也と、をどり上りて激しく穿鑿に及びければ、近習も外樣も手を握りて怖れあへり、飯富兵部が下人に、熊若と云ふもの生年十九歲、心利てさがしく、不敵にしてしぶとき生れつきなり、そのころ信州割が峠の軍に信玄馬を出され、飯富同じく赴きしに、旗棹を忘れたり、明日卯の刻には飯富二陣と定められしに、日は早や暮れたり如何すべきと案じ煩ひしを、熊若すゝみ出て、それがし取りてまいらんとて其のまゝ走り出たり、諸人さらに實と思はず、かくて二時ばかりの間に、やがて旗棹を取りて歸り來る、さて如何して取來れると問はれしに、熊若云ふやう、早く取りて來らんと思ふばかりにて、手形をも印をもとらずして甲府に走り行ければ、門をさし固め、なかなか人の通路をかたく警しむる故に、壁を傳ひ垣を越え、ひそかに戶を開くに更に知る人なし、やがて亭に忍び入りて取りて來り侍べりと云ふ、飯富聞て、これより甲府までは東路往來百里に近し、是を行きて歸るだにあり、まして用心嚴しき所を、人知れず忍入りける事よ、定めて此間の古今集もこの者ぞ盜みぬらん、後に聞えなば大事成べしと思ひ、熊若を傍に

招き、汝かゝる竊びの上手、道早きものとは今迄露も知らず、此程信玄の定家の古今集を盗みたるは汝かと云ふ、熊若答へて云ふやう、それがしはたゞ道を早く行きて、忍びをする事をのみ得たり、しかれば我幼なき時より君に召し使はれ、故郷の父母如何になりぬらんとも知らず、願はくば我に暇給はり、故郷に返して給はゞ、其盗みたる者をあらはし奉らんと云ふ、それこそいと易けれ暇はとらすべし、かの盗人を捕ゆる迄は沙汰すべからずとて、割が峠歸陣の後、熊若をもつてこれを覘はせしに、西郡にをひてたゞ一人行く者あり、早き事風の如し、熊若立ち向ひ物云ふ間に、後より捕へて押し伏せたり、熊若に欺かれて恥みる事こそやすからね、古今を盗みける事は、信玄公の寢やを見んため也、あはれ今廿日を延びなば、甲府をば亡すべきものを、運の強き信玄公かな、我は上州蓑輪の城主、永野が家に仕へし竊のもの、もとは小田原の風間が弟子也、我が主君の敵なれば、信玄公を殺さんとこそ計りしに、本意なき事かな、此上はとく／＼我を殺し給へとて申しうけて殺されたり、古今集をば、都に出して賣りけると也、熊若は暇給はりて、西國に下りけりと云ふ、

○鎌鼬（かまいたち）附提馬風（だいばかぜ）

關八州の間に、鎌鼬とて怪しき事侍べり、旋風吹おこりて、道行人の身にものあらく當れば、股のあたり竪さまに裂けて、剃刀にて切りたる如く口開け、しかも痛み甚だしくもなし、又血は少しも出ず、女蘘草を採てつけぬれば一夜のうちに癒ゆと云ふ、何者の所爲とも知り難し、たゞ旋風のあらく吹て當るとおぼえて此の憂へあり、それも名字正しき侍には當らず、ただ俗姓卑しき者は、たとひ富貴なるも是にあてらると云ふ、尾濃駿遠三州の間に、提馬風とてこれあり、里人或は馬に乘り或は馬を引きて行くに、旋風起りて砂をまきこめ、まろくなりて馬の前にたち廻り、車の輪の轉ずるがごとし、漸々にその旋風おほきになり、馬の上に廻れば、馬の鬣すく／＼と立つて、そのたてがみの中に、細き絲の如く色赤き光さし込み、馬しきりにさほだち、いばひ嘶きてうち倒れ死す、風その時散り失せてあとなし、何なる者の業とも知人なし、若しつち風馬の上におほふ時に、刀を拔きて馬の上を拂ひ、光明眞言を誦すれば、其の風ちり失せて馬

も恙なし、提馬風と號すといへり、

○了仙貧窮附天狗道

釋の了仙法師は播州賀古郡の人なり、幼くして父母にをくれ、郡の草堂に籠りて出家し、十七歳して關東におもむき、相州足利の學校に三十餘年の功を積み、內外二典に渡り、神歌兩道にたづさはり、博學多聞の名をほどこし所々の談林に遊ぶ、論義辯舌ありて、諸人皆かたぶき伏して、更にこれに敵することかなひがたし、然れば其の天性逸哲佯狂の風あり、命分甚だ薄く、一重の紙衣をだに肩にまつたからず、墨染めの衣は袖破れ、その日を暮すべき糧に乏し、此故に學智の功はかさなり乍ら、長老上人にもならず、綱位の數にもあづからぬ平僧にて、年月を重ぬるまゝ名利の心さらに絕がたし、自ら深く嘆きて曰く、了仙よ汝學問よく勉めて才智あり、心ざし邪なく名は世に聞えながら、いかに身一つを過わび、一寺の主ともならざるやと、又自ら解して曰く、安然は堂の軒に飢ゑて桓舜は神の社に祈りし、これ道義の不足ならんや、役の小角は豆州にながされ覺鑁は根來に苦しみし、これ行德のをろそかなるにあらず、數因は僧戶封祿ありて安海は綱位にいたらざりし、これ智と愚との故ならず、沙彌は溫かに衣て飽くまで喰ひ主恩は飢寒にせまりぬ、これ才能の不敏なるによらんや、これすでに過去世の因緣なり、儒には天命と云ふ、了仙不幸にして此のそしりをうく、何ぞ因果の理に迷ふてみだりに名利を求めんやとて、自ら問答して心を慰みけり、され共學智に慢心あり、人の己れを用ひざる事を憤る思ひ胸にふさがり、天文の末の年鎌倉にして病死しければ、光明寺の傍に埋みたり、所化の伴頭榮俊と云ふものは、學問の友として久しく斷金の契をいたせしが、或る時藤澤邊に出ける道にして、了仙に行合ひたり、漆塗の手輿に乘り白丁八人にかゝせ、曲彔びかう朱傘おなじく白丁に持たせ、同宿七八人うるはしく出立、雜色に先を拂はせ、さゞめき來るよそほひ、往昔に替りて巍々堂々たる事、ひとへに國師僧正の儀式に似たり、了仙は九條の袈裟に、座具取揃へて身に纏ひ、檜扇さし出し、和僧は榮俊ならずやとて輿よりおり下り、手をとり淚を流して昔今の物語す、榮俊云ひけるは、君と別れ隔たる事僅かに半年ばかりの間に、よく自ら綱位たかく青雲の上にの

ぼり、封祿あつく朱門のうちに交り、衣服袈裟の花やかなる出たち、手輿同宿の盛なる有樣、まことに學智秀でたる所、心ざしを遂ぐる時也、僧法師の本意はこゝに極まれり、羨しくこそと云ふ、了仙答へて曰く、吾今一職をうけて勉め行ふ、更に隱すべきにあらず、その形勢見せ奉らん、こなたへおはせよとて、光明寺の堂に行到る、人さらに見咎むる事なし、夜すでに後夜に及ぶ、了仙語りけるは、我つねに慢心あり、然れども更に非道をなさず、平生貧賤なる事を怨み憤りて、因果の理と知りながらこれに惑へるを以て、死して天狗道に落ち學頭の職に選ばれ、文を綴り書を考へてその義理をあきらめ傳ゆ、我が天狗道は魔道なりと雖、鬼神に横道なきが故に、人をえらび器量によりてその職を司らしむ、人間はたゞ賄をもつてひいきをなし、追從輕薄の者をよしと思ひて其才能を云はず、是によりて公家も武家も出家も、同じく追從輕薄奸曲佞邪をもつて官位俸祿に飽滿て、よき人は皆その道の正しきを守る、此故に人を諂はず輕薄なし、こゝをもつて長く埋れて世に出でず、騏驎は徒に糞車をかけられて草水に飢渇え、駑馬は時を得て豆粥に飽たり、鳳凰は橘の中にすみて、鴟梟は蘭菊の間にさえづる、こゝをもつて公家も武家も出家も賢者も、頭やせて髮かれつゝ、溝瀆のほそみぞに轉び死すれども知る人なく、愚人奸曲の輩は世にあらはれて時めくなり、これより風俗惡しくなりて、治れる時は少く亂るゝ日は多し、我が天狗道はたゞよくその器量を選び、その職をあてがふに誤らず、凡そ世の人貴賤を云はず、少も慢心ある者は皆死して魔道に來る、その中に君に不忠あり、親に不孝するものは、必ず大きなる責を受け、善を積み德を施せし者は、皆その幸ひをかうぶる、輪廻因果のことはり皆僞りならず、天子公卿武士出家、世に名を知られたる輩、我が道に入て、或は大將となり或は眷屬となり、世の人の心だてによりて、或は障碍をなし或は守護をなす、それ太上は德をたて、その次は功をたつ、その次は言をたつ、これ死して久しけれども朽ずと云へり、我は德もなく功もなし、こゝに論場に言をたてしも、今すでに無きが如し、その慢心の報ひを見給へとて、堂の庭に飛出たる姿を見れば翼あり鼻高く眼より光り輝き、すさまじき形に變せしところに、虛より鐵の釜ふ

ら〳〵と落ちて、其中に熱鐵の湯湧きかへる、それにつゞきて法師一人下り、銚子に熱鐵の湯を盛り入れ、盃に入れて了仙に渡す、了仙怖れたるけしきにてこれを飲み入るゝに、臓腑もえ出でゝ下に焼けくだり、地に轉びて失せにければ、堂にありし白丁も同宿も皆消え失せて、夜はほの〴〵とあけ渡れば、光明寺中の堂にはあらで、榎の島の濱おもてに榮俊一人坐したり、それより歸りて佛事いとなみ、道心深く後世を怖れ、諸國行脚して菩提心を祈りけり、

伽婢子卷之十終

伽婢子卷之十一

○隱里

播州印南と云ふ所に、内海又五郎とて武藝をたしなみ、弓馬の道に稽古の功を重ね、然も其の心根極めて不敵者也、或時思ふやう、片田舍に世を過さんには、人の爲名を知らるゝ事有るべからず、都に登り赤松を賴みて、公方に宮仕へ奉り、世の變に任せて立身せばやと思ひ立ちて、京都に登りしかば、赤松は身まかりたりと聞ゆ、さては力なし、後藤掃部が宇治にありといふ、こゝに行きて賴まんと思ひ、足に任せて尋ねゆく、日已に暮かゝり、道に踏迷ひて草原小坂を差越え〳〵、栗栖野と云ふ所に出たり、煙闇く雲閉ぢて雨さへ少しづゝ降出たり、遠近人に物申すべき影も見えず、猿の叫ぶ聲かすかに聞え、狐のともす火あたりにひらめく、爰に一つの堂あり、古へ太元帥の法行ひける所とて、今も太元堂と名づく、柱朽ちて垣傾き、木の葉散り積り軒破れ、實に物凄き所なれども、行先も定かならず、立歸るべき道も覺えねば、堂の緣に

上りて夜を明かす、亥の刻ばかりに東の山際より、松明ともして人多く來る、漸々に近付つゝ太元堂に向ひて歩みよる、又五郎思ふやう、かゝる所へ夜更けて來る者は妖怪なるべし、然らずば盗人ならんと怪しみ、密かに天井に登り息を靜めて居たりければ、二十人許さゞめきて、堂に上り火をたてたり、其中の大將と覺しくて、花やかに出立たる者一の座にあり、其の外の者皆各〻座したり、鑓長刀弓なんど、手毎に持たるを立並べ、用心したる體也、其の貌を見れば皆猿の類にして、更に人間にあらず、又五郎是れは疑ひなき妖怪也、一矢射ばやと思ひて、携へ持ちたる弓取直して、尖り矢をつがふて兵と放つに、誤たず上座にありける者の、臂のかゝりにしたゝかに立ちたり、此の者大に驚き聲を揚げて、あら悲し是は抑も何事ぞやと言ふ程こそありけれ、燈火を打消し、許多の者共ふためき立て、散々に迯失せたり、物音靜まり跡も見えざりければ、夜の明るを待てあたりを見るに、血こぼれて引きたり、又五郎行末を見屆けばやと思ひ、跡をとめて南のかた山を巡り、西をさして行きければ、大なる穴の傍にして止る、いよ〱怪み彼方此方せし間に、今宵少し降りたるに土すべりて踏外し、穴の内に落入りたり、底深く岸高うして上るべき便なし、いと暗かりければ、爰にて死するより外はなしと、傍を探り見るに横に穴あり、靜かに歩み行くに一町許にして、明らかなる所に出たれば、月日の光り常のごとし、一つの窟に石の門ありて、數十人其門をかためて番を勤む、其有樣は今夜太元堂に來りける者に違はず、番の者驚き問やう、何人なれば爰には來りけると、又五郎、是は播州より此比都に上り、醫師を以て身の業とす、藥を覓めて山に分入侍べりしが、道に踏迷ひ、思ひ掛けず穴に落て爰に來れり、都に歸るべき道を示し給へと云ふに、番の者共聞て大に喜び、是は誠に天の與る幸ひ也、我君昨日偶〻城を出て遊び給ふ所に、流矢の爲に當りて疵を被り臥給へり、療治してたび給へとて内に呼入れたり、宮殿いらかを磨き、簾掛渡したる奥に誘なふに、彼の主苦しげなる聲にて、我たま〱出でゝ遊ぶ處に、禍忽ち身に迫り運傾きて流矢に當り、毒氣已に骨に透り痛む事云ふ計なし、命又危し、願はくは一つの配劑を出して、此病を治し給へ、然らば我二たび甦りて、重ねて樂しみを受くべ

し、是實の大恩也と云ふを見れば、毛はげて大なる猿也、幾年經たり共知られず、老さらばふたるいとゞ苦し氣にて吟臥したり、兩の傍に二人の美女あり、美くしさ限りなし、又五郎立よりて、脉を取り疵を撫で、少しも苦しからずやがて癒ゆべし、我に名方の藥あり、是を服すれば病を治するのみならず、長生不死の靈藥なれば、命を保ち齡を若やかになし、天地と共に久しからんとて、腰につけたる火打袋より、丸藥を取出して與へ服せしむ、一類皆是を喜ぶ、殊更に不老不死の藥と聞て、我等かゝる神仙の人に逢事稀也、願くは我等にも給れかしと云、袋を傾けて分ち與ふ、多くの猿共爭ひ奪ふて是を飮みけり、元より此藥は、鏃に塗りて獸を射るに、必ず斃ると云大毒なれば、何かはたまるべき、暫らくありて皆一同に倒れ伏して血を吐き、前後を知らず苦しみける所を、枕元に立てかけたる太刀を取り、片端より切殺しけり、起上り立上らんとすれども、毒にあてられてよろめきて、都合一類大小三十六疋の猿、一同に殺し盡されたり、二人の女房も同じ妖怪の類なるべし、諸共に打殺さんと云に、二人ながら啼て云やう、我々は更に妖魅の類にあらず、一人は醍醐と云所の並浦の某が娘、今一人は伏見の里に平田の某と云者の娘にて侍る、思も寄らず恐ろしき者のために誑かされて、深き穴に沈み惑ふ、逃て歸るべき故鄕の道も知らず、其の儘こゝにて死なん事を求れ共協はず、淺間敷畜生の使れ者となり、六十日ばかり此方、夜となく晝となく、悲しき物思ひを致し侍べり、君今是等を殺し給ふ、我等二たび人間に立歸り、戀しき父母に逢參らせなば、是ぞ大恩の主君なるべしといふ、又五郎已に妖怪は打殺しけれ共、人間に立歸るべき道をしらず、如何すべきと案じ煩ふ所に、白き裝束に烏帽子着たる翁十餘人、いづくより來るとも知らず現れ出たり、是は此所に久しく住み侍べりし者共なるを、近き比より猿共に住家を奪はれ、食物財寳殘りなく押領せられ、身のたゝずみもなくなり遙の傍に住居して、妻子孫までも世の憂目を見る事、口惜しとは思ひながら、彼等に敵對すべき力なければ、時節を待て心をなだめし所に、君の是等を退治し給ふ、此故に我等二たび此地の主となり、古への如く歸住むべし、大恩何事か是に勝るべきとて、手に〳〵黃金を包みて又五郎が前にさし置

く、其の形も又人にはあらぬ曲者也、目は丸く口はとがり、鬚と眉毛は至りて長し、又五郎云やう、汝等久しく此地に住て神通ありと見ゆ、いかなれば猿に欺むかれて住居を奪はれたる、扨汝等實は何者ぞ、此處をば何と云ぞと尋ねしに、翁答へけるは、我等は壽五百歲を保ちて一たび變ず、彼等は八百歲を保ちて後に一たび變ず、此故に敵對する事協はず、そも〳〵我等は是虛星の精靈として、大黑天神の使者也、此所は鼠の住所として世に隱里と名づく、更に人間に向ひて害をなさず、功を積み行を滿て丶天上に飛翔り、仙境に出入して、自在神通の樂に誇る、然るを猿ども集りて年を重ねて惡行をなし、人の娘を取りて己が心を慰み、物を害し禍をなす、其の科顯れて一類同じ所に亡びたり、天道已に君が手を借りて殺し給ふ者也、天道の所爲にあらずは、君何として亡し給はん、君暫く目を閉ぢ給へ、我等送りて人間に返し參らせんといふ、又五郎目を閉ぢければ、女二人と又五郎を後ろに舁負ひ道を進めば、雨風荒く聲騷がしく聞えて目を開くに、一つの白き大鼠其の外十四五許の鼠、大さ家の如し、地を掘穴を穿ちて野原に出でたり、道行く人に爰は何處ぞと問へば、木幡山の麓也といふ、二人の娘を親元に送り返せば、親大に喜びて又五郎を兩家の聟とす、又五郎それより武門の望みを離れ、富裕安穩の身となりぬ、後に又木幡山の野外を尋ぬるに、歸り出でたる穴は跡もなく、松芽茂り草むら閉ぢたるばかりなり、又五郎は後終に子もなく、其行方を知らず、

○土佐の國狗神附金蠶

土佐國畑と云所には、其土民數代傳はりて狗神と云者を持ちたり、狗神持ちたる人若他所に行て、他人の小袖財寶道具凡て何にても、狗神の主それを欲しく思ひ望む心あれば、狗神則ち其の財寶道具の主につきてたゝりをなし、大熱懊惱せしめ胸腹を痛む事、錐にて刺すが如く刀にて切るに似たり、此病を受ては、彼の狗神の主を尋求めて、何にても其欲しがる物を與れば、病癒る也、さもなければ久しく病臥て、終には死すとかや、中比の國守此事を聞て、畑一鄉の周りに垣結廻し、男女一人も殘さず、燒ごみにして殺し給ふ、それより狗神絕えたりしが、又此の里の一族殘りて、狗神是に傳りて今も是有りといふ、其狗神持ちた

る主死する時は、家を繼ぐべき者に移るを、傍にある人は見ると也、大さ米粒程の狗也、白黑ある斑の色々あり、死する人の身を離て、家を繼ぐ人の懷に飛入るといへり、狗神持ちたる人も自ら物うき事に思へ共、力なき持病也、異國にも閩廣と云所には、蠱ものの咀おこづる事多く取扱ふと云へり、國人に金蠶と云持病持ちたる人、是を他人に送移す事あり、黄金と錦と釵の類ひ、其外さまぐ重寶の物を道の左に捨置く、是を拾ひて家に歸れば、金蠶の病移り渡るといへり、其形は蠶にして色は黄金の如し、人に取付ぬれば、初は二三ばかり漸々に多くなり、家の內に塞がり身を責る、打殺しても更に盡きず、拾ひたる黄金錦などことごとく盡果てゝ後に、病少しづゝ癒ゆと云へり、

○易レ生契

肥前の國松浦郡松浦の里に、豊田孫吉と云者あり、未だ若くして父母に後れ、妻もなくて獨り住けり、其家貧しからず、幼時より耕作商賣の營みをもせさせず、元より只獨子なりければ、親殊更にいとおしみて、儒學のかたはしに心を傾け、講席にも列るを以て所作とし侍べらしむ、或夕暮に門に出でゝ見たれば、容賤しからぬ女子一人南の方より出來る、年の程十六七と見ゆ、色よき小袖を重ねたるにはあらねど、姿容は人に勝れて見ゆ、豊田走出でゝ、袖をひかへ、兎角語らひければ、女は岩木ならぬ身の、否とは言はじいな舟の、流石にかゝる浪枕、並る袖をかたしきつゝ、夜もすがら語らひわりなく契りて、明方に成りければ、名殘盡せず、女は起き別れて歸りぬ、日暮れければ女又來れり、豊田、其家は何處ぞ親は誰人ぞと問に、更に定かにも答へず、强て尋れば、自ら常に褐色の衣に、蔦の唐草染たる小袖なれば、褐子とも蔦子とも名を呼給へかしとて打笑へば、豊田、扨は是は由ある家に召使るゝ女の、暮なくゝ密に出て來るならん、此事もし顯れ侍べらば、由々しき咎めも如何なるべしやと思ひて、更にも尋ね認ず、いよゝ睦しく、比翼連理の契淺からず、或夜豊田酒に酔て戲れて云やう、有の儘に其住處を語り給はざらんには、心まだ打解けずとぞ思はん、我は斯こそ思ひ侍べれとて、

手枕のうへにみだるゝ朝寢髮
　　下には人のこゝろとけずも

と云ければ、女限りなく恨みたる氣色にて、かくぞ返

しける、

手枕をかはすちぎりに下紐の

とけずと君がむすぼゝれつゝ

今は何をか隱し侍べらん、君と自らは古へよりよく知る事侍べり、然らずば如何に斯く情深く契り侍べらむ、實は我は今の世の人にはあらず、君がため更に誑かし參らする者にも侍べらず、宿世の緣深き故ぞや、昔し此松浦の里に、大友左衞門佐某とて、山々敷武勇の大名おはしき、自らは杵島郡の者にて、よく歌うたひ碁打事を得て、人更に自らに勝つ者なし、此故に十七歲の比召されて、左衞門佐殿に仕へ參らせ、朝な夕な側を離れず寵愛淺からず、其時は君まだ其家の小姓にて、近く召使はれ給ひしに、容貌うるはしかりければ、自ら思ひを懸け心を通はし侍べり、斯くて自ら餘りに堪へ兼つゝ、或日の暮方燈未だ取らざる暗まぎれに、

よそながら目には懸れど雨雲の

へだつる中にふるなみだかな

と書きて君が袂に投入れしかば、其次の日の夕暮に君また、

よそにのみ嶺の白雲きえかへり

たえずこゝろにふるなみだ哉

と書きて自らが袖に投入給ひしより、年も同じ年所も同じ所に、人目を中の關守になして、互に心斗を思ひ通はせ共、家の內外嚴しき掟のつらさのみ恨みられて、契るべき便もなし、後に傍輩の童に此の心ざしを顯はされて、左衞門殿に讒せられしかば、則ち大に怒りて君と我と高手の繩をかけ、松浦川の端に引出し、首を刎られ侍り、君は今已に又人間に生れ給ひ、自はそれより此方、猶今までも冥途にあり、思ひ初たる心の末、百餘年の後も朽ちず、空しき靈の現はれ來りて、割なき契を結ぶなり、昔を思へば今も悲しき憂目見たりける事の、いとゞつらさは勝るぞやとて、淚を流す事雨の如し、豐田此事を聞くに、又悲しさ限りなし、されば今是を聞くに、誠に二世の緣なれば、爺かはり無く語らひて昔の思ひをはらさん、誰をか忍て暮にこし朝に歸らん、只是に住て諸共に夫婦とならんとて、豐田が家に留めて猶睦しきなからひ也、幽靈とは見ながら、宿世の緣わりなくて、露恐ろしとも思ひ侍べらず、豐田は更に碁打事知らざりし

に、女悉く其秘妙を敎へしかば、此比あたりに名を得し者、豊田に對ひて敵する人なし、女つねぐ\は左衞門佐の事を語る、目前今見るやうに覺えたり、左衞門佐或時女房達を召つれて、川の邊に遊びし所に、うるはしき男二人きらびやかに出立、川の向ひを遙に行過る、女房達の中に一人云やう、男ならば是程美はしきをぞ、我思ふ人とも思はまし物をといふ、左衞門佐聞て、此男の妻と成らまほしきかと云ふ、其女房打笑ひ顏赤めて物も云はず、暫ありて新しき桶に蓋覆ひして女房達の中に出す、是先の男の許に遣すべき祝の物見よとあり、開きて見れば男を擧し女房の首打切て見せ侍り、女房達手足顫ひ目眩みて、絶入りけるも多かりし、又或時鹽燒く浦に仰せて私には售せず、我領分の鹽を皆下直に買取り、京方の商人に賣りけるを、何者かしたりけむ左衞門佐の門に落書しける、

　國の鹽やきにがりはてけり
さなきだに辛きをきめを左衞門が

左衞門是を聞て、いかさまにも鹽燒どもの所爲なるべしとて、鹽燒司三人を捕へて濱表に磔に懸けたり、又年毎の春になれば錢米を出し、國中の民百姓に借渡し、身上宜しき者には殊更に多く借して、秋に至りて大分の利を掛けて、元に添へて取返す、若し返すべき力なき者は、其所の有德人にかけて辨へさせ、或は妻子を他所に售り遣はし、資財家屋敷みな沽却せしめ、年々に虐り取りもぎとる故に、國中大に衰微に及べり、何者か詠みたりけむ、

　無理にかす利錢の米の數よりも
こぼす涙はいとゞおほとも

左衞門佐是を聞て、賤しき百姓共は、是程の事もよもつらねまじ、有德人原の所爲にこそとて、城下に住ける有德人十餘人闕所して追出し、其財寶ども皆奪ひとりぬ、或時左衞門佐、父の年忌にあたり、國中の僧を集めて齋を行ひしに、一人の僧遲く來れり、破れたる袈裟かけて衣甚だ古し、諸人あなづりて奥にも請せず、門の傍に居へて齋を食はせたれば、齋過て其鉢を膳の上に覆けて、彼僧は去りけり、跡にて鉢を取上げんとするに少も動かず、諸人奇特の事に思ひて、集りてえいやぐ\と引動かせ共、太山の如くに重くして上らず、左衞門佐にかくと云に、自ら行きて是を上げられしかば、輕くあがりて其下に歌二首あり、

花ちりて梢につけるくだ物の
　今幾かありて落んとすらむ
我人につらき恨みをおほ友の
　家の風こそ吹きよはりけれ

左衛門佐これを見るに驚く心もなく、いよ〳〵國民をむさぼり、人を殺す事草を薙ぐかとも思はず、恣に惡行を致せしかば、それより二年を待たずして禍來り、身を失ひ家を亡ぼしぬ、何事も皆天道より定まる事と云ひながら、法に過ぎたる科を犯せば禍必ず近く來る、然れば自ら昔の心ざしに引かれて、今かく契りをなし侍べり、今より一年にして、迷途の暇すでにきはまるべしと語りしが、月日程なくくれ羽鳥、あやなく過ぐる光陰、はや一年になりにけり、女心地煩ひければ、醫師を賴み藥を與ふれども飮まずして、豐田が手を取りて、昔の語らひ君と緣深く、夫婦の情は爰にして盡き侍べり、自ら幽冥陰氣の形を現はし、君に契り參らせ、いとおしみの恩を受けたり、思へば昔一念の愛執を起して、思はざる外の禍に陷りたり、假令なんぢは干潟となり岩は湯に沸く共、此恨みは更に消しがたし、天傾き地崩るとも此情は忘れじ、今已に宿世のよしみを續けて、後の世の緣を契る、是より我は黃泉に歸るべし、其かみ殺されてより百餘年、此たび重ねて契る事一年、久くして又逢奉れり、思の雲は晴行きたり、更に戀悲しみ給ふなとて打啼きけるを、豐田は淚の中より今暫し留り給へ、飽かぬ別れに後れて、殘る身を如何とか思ひ置給はんと云へば、女なく〳〵、

名ごりをも惜までいそぐ心こそ
　別れにまさるつらさ成けれ

と詠じて壁に向ふてし臥けるを、いかに〳〵と呼べども〳〵、はや絆切れ果てゝ、空しきからのみ床に殘れり、豐田悶え焦れ、泣き悲しめども甲斐なし、床に空しき衣を取りて、

移り香になにしみにけん小夜衣
　忘れぬつまと思ひしものを

さて棺に納め野邊に送らんとするに、棺甚だ輕かりければ開きて見るに、只衣のみ殘りて尸はなし、空しき棺を寺に埋み、佛事いとなみ懇に跡弔ひ、二たび妻を求めず、出家して四國九國を巡り、それより唐土の商人舟に便船して入唐しつゝ、其の終ふる所を知

らず、

○七歩蛇の妖

京の東山の西の麓、岡崎より南の方、いにしへ岡崎中納言の山莊あり、久して荒はて丶住む人もなく、草のみ生茂りて茫々たる地なりけるを、浦井某此地を買求めて家を作る、或人云やう、此地は本より妖蛆の怪ありて、人更に住む事協はずといふ、浦井是を信ぜず家建ち畢りければ、始めて移入りたりければ、蛇の三四尺許なる五つ六つ出て、天井の間に這ひ廻る、則ち下部に仰せて取捨てんとするに、此蛆共鱗立ち頭をそばだて、眼きらめきければ、僕共凄まじく思ひて退く、浦井大に怪しみて杖を取り突き落し、桶に入れて賀茂川に流す、次の日又蛆十四五出たり、又皆取捨てければ、其次の日は三十餘出たり、取捨つるに隨ひて益、多く出で丶、後には二三百に及ぶ、其大さ五七尺餘、白き黑き、或は斑なる雨の耳そばたち、口は紅の如く、ま丶又足ある蛆、其形龍の如くなるもの、日每に倍々して、取れ共捨れども更に絕ゆる事なし、浦井不思議の事に思ひ自ら香を焚き幣を立て丶地祭をいたす、某此地を求め、金若干兩を出して買得たり、是より此地は某が住むべき所なり、蛆何によりて障をなし怪を現はすや、凡地の神には五帝龍王あり、其司る所各、職あり、如何でか其地にありて濫りに地の主を苦しましむる、龍王物知る事あらば、此蛆の怪異を速く禳ひ給へ、然らずば神職の不敏ならん、然らば天帝の戒め免る丶に道あるべからず、と書て讀上げたり、其夜地の底に物の騷ぐ音して、凄まじき事限りなし、夜明けて見れば、草むら悉く一夜の程に枯果てて、大なる石ありて碎け傾きたり、家人等怪しみて青草の枯とまり、石の傾きたる所を掘返し、石を取退けしかば、長四五寸許の蛆走出て行く、其行く所の青草目の前に枯焦る丶、家人等追詰めて打殺しければ、蛆の長僅に四寸、色は紅の如く雨の耳四の足あり、鱗の間は金色にして小龍の形に似たり、人に見するに、更にか丶る蛆は聞及ばずと云に、南禪寺の僧來りて曰、是は七步蛆と名づく、若人是にさ丶るれば其儘死す、毒力烈しくて七足步む、此事は佛經に見えたりとぞ語られける、是より後は蛆再び來らず、案ずるに多く沸出たる蛆共は、是七步蛆の精なるべしと云へり、

○魂蛻吟

河内の國弓削と云所に、友勝とて鍛冶の侍べり、用の事ありて、大和の郡山に行て日暮方に立歸りしに、あまりに草臥れ侍べりしまゝ、山の傍に休み居たり、かかる所へ或人馬に乗りて、又一疋の馬には、鞍置きながら追立て打過る、友勝云やう、是は河内の方へおわするやらん、さもあらば御馬一疋借し給へ、殊の外に道に勞れ侍べり、とても乗る人もなき馬なれば、我を乗せて給てむやと云へば、馬の主、それこそいと易き事なれ、川の向ひの岸にて下りて給はらんには、それ迄は乗り給へと云に、友勝大に喜び打乗りて行く、川を乗り渡して、岸に着き馬より下り、御なさけの程喜び奉ると云て馬を返しければ、馬主鞭打追立て、行方なく歸りぬ、友勝は日已に暮て後に、家に立歸りて見れば、妻の女房も子共其外兄弟一族悉く集り、膳を調へ食を設け、さま〴〵もてなし遊び居たり、友勝歸りしかども人々見向きもせず、友勝我子共の名を呼び、我弟妹の名を呼べども耳にも聞入れず、物語し酒飲み慰むこと故の如し、友勝大きに腹立て、大聲を揚げどよみ廻れ共、更に知る人なし、餘りに腹を立て拳を握りて妻子を打擲すれ共、それかと思ひたる色もなく、友勝内におはしたらば、いよ〳〵賑やかに侍べらんものをなど云ひて酒飲ければ、友勝思ふやう、扨は我忽ちに空くなりて、魂斗り爰に歸り、妻子も一族も我をば見ざるらんと、泪を流して只泣に啼けれ共、いよ〳〵見る人もなかりければ、詮方なく家を出て、村の外に出でつゝ立休らひければ、さしも氣高き人、驪の馬にめされ冠を戴き、紫の直衣大紋の指貫着し給ひ、人許多めし連れ、鞭を以て友勝をさしての給はく、あれは未だ死まじき者の魂なり、思はざる外の事に吟ひ歩く者かなとのたまふ、爰に赤き裝束に烏帽子着たる人來りて、弓削友勝は未だ定業來らざる者なるを、大和川の水神現れ出たるに馬を借りたり、水神戯れて魂を引出し侍べり、只今本の身に返し納むべき爲に、我是れまで參りたりとて、馬の前に跪きけり、貴人少し笑ひ給ひ、水神實に道理もなき事に、人の命を誑かして、己が戯とするこそ安からね、明日必ず刑罰行ふべしとの給ふに、此者恐たる氣色にて、急ぎ立寄て友勝を招きて云やう、馬上の貴人は是聖德太子也、常に科長の陵より出て國中を巡り、惡神を治め惡鬼を戒め人民を護り給へり、我は是れ水神の眷

族として爰に來れり、汝を二たび人間に返すべし、暫らく目を閉げとて、後ろに廻り推すと覺えて、大和川の西の岸に、夢の覺めたる如くにして甦り、起上りて家に歸りければ、妻子は待受けて大きに喜び、今日は一門集りて遊びし侍べり、如何に夜更けては歸り給ふぞといふ、友勝聞て、我はかう〳〵の事ありけりと語るに、皆人聞て驚き怪しみ侍べり、

○魚膾の怪

大島藤五郎盛貞と云者、應仁の比牢浪して、能登の國珠洲の御崎に居住して時を待けり、其性常に生魚の膾を好み、是なき日は食進まず、人に語りける樣、浮世にありて山海の珍味多しといへ共、膾の味に過たる物なし、終に又腹に飽かずと云ひしが、或日若き友達五六人入來り、濱邊に誘出て遊びしに、風もなく浪靜かなりければ、浦人出て網を引くに、種々の魚多く漁り得て岸に漕歸る、大島是を見て、いざ買取て膾作り料理調へ、今日の思出せんとて、五籠六籠買取り、浦人の家に立寄り、料理の具かりよせ、濱おもてに筵しき膾作り、大なる桶と鉢とに堆たかく入れて、其の外魚ども種々にとゝのへ、五六人並居て飯食けるに、大島箸を取り膾を食ふ事一鉢許り、忽に喉に物の障るやうに覺えしかば、喝して吐出して見れば、大さ豆ばかりなる骨也、其色薄色に赤して珠の如し、茶碗の中に入て、皿を以て蓋とし傍に打置き、又箸を取りて膾を食せるに、未だ座中食し終らざるに、彼の茶碗打倒れ、蓋も共に轉びけるを見れば、中に入置きたる骨の珠一尺許りになり、人の形と化して動き立たり、五六人の友達驚き怪み、目を澄して見ゐたれば、目の前に俄に五尺許の男となり、赤裸にして大島藤五郎に取かゝる、大島側なる太刀を拔持ちて切付くれば、電の如く閃き蜻蛉の如く飛廻り、隙間を狙ひ拳を握り、大島が首を礑と撲つ、又しばし戰ふては、背を丁と撲つに、血流れて砂を染たり、大島終に太刀を打入てはたと切付けしかば、腕首切落され、かき消すやうに失せたり、人々助太刀せんと犇めきけれ共、雲霧閉がりて見え分かず、戰ふ音のみ聞えて、霧已に霽れて後、大島は朱になりつゝ、人々是見給へ敵の腕首切落したり、妖怪は行方なく失侍べりと云を見れば、大なる魚の鰭を切落したる也、大島其儘絶入したりけるを、さま〴〵藥を與しかば生出たりしか共、

人心地もなく夢中の如くなりしが、疵癒えてのち漸く元の如く性念つきたり、さて其時の事を問に、露ばかりも覺えずといふ、當座に語りけるにぞ子細は聞えし、是れ魚の精現はれ集りて、此の怪異ありけるにこそ、

伽婢子卷之十一 終

伽婢子卷之十二

○早梅花妖精

信州伊奈郡開善寺の早梅花は、名におふ類ひなき名木にて、未だ冬至の前後より咲初めて、淸香四方に薫ず、近郷隣村の人、心ある輩は日每に集り見る元より信州は陰氣勝にして寒國也、冬は雪深く消ぬが上に又降り積み、嵐烈しく吹きすさびて、なべての草木はいとゞ遲く萠出るに、此寺の早梅花は、實にも花の兄として、淸寒に堪へて綻び出でつゝ、更に其時を違へず、誰か誠に賞せざらん、其の比村上賴平の家人埴科文次と云ふ者、心ざま情深く、武を學ぶ暇には敷島の道を慕ひ、軍陣の砌にも陣所の風景面白きところにては、一首を綴りて思ひをのべ、諸軍の興を催させけり、斯るやさしき男子なりければ、人更に惡しくも思はず、其比甲州の武田信州の村上、兩家爭ひを起し陣を張り戰ひを決す、或時出陣のついで、開善寺の梅今を盛りと聞えしかば、文次夕暮方、中間一人具して陣中を忍び出て、彼の寺にうかれ行つゝ、香を尋ね

て花に嘯き、南枝向レ暖北枝寒、一種春風有二兩般一といふ古詩を吟じける、月已に山の端にのぼり、花に映じて得ならず覺えければ、

ひゞき行鐘の聲さへ匂ふらむ
　梅さく寺の入りあひの空

と打詠じ居る所に、此邊りには思ひかけず見馴もせぬ女姓一人、女の童一人具して出來れり、年のころ廿許と見ゆ、白きこうちぎに紅梅の下がさね、匂ひ世の常ならず月にえいじ、花に向ひて、

ながむればしらぬ昔の香まで
　おもかげ殘る庭の梅がえ

と詠みて少時休らひ居たり、文次是を聞くに、怪しみながら堪かね、近く立寄りて袖を引きつゝ、今宵の月に光を爭ふは庭の梅のみか、君が姿と袖の薫りも、同じ心に覺え侍べりなんど戯るれば、女さしも驚きたる色なく、梅が香に誘はれ月に嘯く此夕暮に、やさしき人に逢奉るこそ嬉しけれとて、しめやかにもてなしける氣はひ、此世の人とも覺えず、文次則ち中間に仰せて、酒賣家を尋ねさせ酒買求め、御堂の軒に坐して數盃を傾け、醉に和して語らひ寄りつゝ、

袖のうへに落て匂へる梅の花
　枕に消ゆるゆめかとぞ思ふ

と云ければ、女返し、

しきたへの手枕の野の梅ならば
　ねての朝けの袖ににほはむ

と詠て、互にわりなく契りけるが、數盃を傾けし醉に臥して、夜已に明方になり、東の空横雲棚引ければ、夢驚き眠さめて起上りしに、文次只獨梅の木の本に臥て、女も女の童も何地行けむとも知らず、明渡る空に群鴉の鳴聲ばかり、月は西に落て名殘は我身に止まれり、昔もろこしの崔護と云人、或所の門の內に、桃の花盛りに咲けるを見たりしに、女二人來りて、諸共に酒のみ歌うたひしを、又來春も爰にて逢んと契りしが、次の年の春其所に行きけるに、女更に見えざりしかば、門の戸の扉に、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不レ知何處去、桃花仍レ舊笑二春風一と云詩を題して書付たりとかや、夫は唐土の例是は此國の事也、又後を如何とか契らむ、人ならば又巡りも逢べきに、是は疑ひもなく、庭の梅花の妖精なるべしと、袂に殘る移り香の、さながら梅花の薫りに違はぬぞ

奇特なる、かくて陣屋に歸りても、猶其面影の忘れ難く、夕暮になれば漫ろに戀しく、涙の絶る隙なし、

　梅の花にほふ袂のいかなれば
　　夕ぐれごとに春さめのふる

物あぢきなく、世に住むかひも有明の、盡せぬ思ひにくづをれて、こりつむ柴の歎きせむよりはとて、其次の日打死しけり、

　　○幽靈書を父母につかはす

江州東坂本に、正木の某が娘龍子（たつこ）は、いとけなくして才智あり、親もとより有德なりければ、いつくしみ育て、歌雙紙の道を敎へたるに、いつしか容貌美しく、心ざま情深し、其隣に芦崎某が子に、數馬と云ふ者は龍子と同じ年にて、幼けなき時は一つ所に遊びけるを、時の人皆戲れて、此同じ年なる子は後必ず夫婦となすべしと云を、幼なき心に互に思ひ占めて、此人ならではと許しけり、年長けゝれば出て遊ぶ事もなし、數馬は山に登せて兒（ちご）となし、龍子は窓の本に隱れ住みけり、數馬或時家に歸りつゝ、歌を書て遣す、

　人しれず結び交せし若草の
　　花は見ながら盛りすぐらむ
　しるらめや宿の梢を吹かはす
　　風にかけつゝかよふこゝろを

龍子是を見るに、限りなく嬉しと思ふ中に、又思ひくづをれつゝ、返しとおぼしくて、

　月日のみ流れゆく〳〵淀川の
　　よどみ果てたる中の逢ふ瀨に
　今はかく絶にしまゝの浦に生る
　　みるめをさへに波ぞたゞよふ

年十七になりしかば、親然るべき人を聟にせんと謀らひけるを、龍子更に肯がはず、湯水をだに斷ちて泣臥たるを、密に問はせたりければ、西隣の數馬に約束しける事あり、是に往かずば死すべし、他所には更に行くべからずといふ、親此上はとて隣に媒を入れ、かう〳〵と云せしか共、正木は有德にて蘆崎は貧しければ、數馬容かたちうるはしく、美男にて才智ありとは雖も、いかで其緣を結ぶの相待（きうたい）ならんとて、親しばしば辭しけれ共、娘の思ひ懸けたる所也、又それ有德なるを以て緣を結ばゝ、金銀財寶を聟にする也、婚姻に財寶を論ずるは、夷虜の戎の道也と云へり、我等更に財寶を聟には取ず、數馬が人柄才智利こんなるを

以て、聟にせんと云事也とて、强ゐて吉日を定め、其いとなみは娘の方より整へ、其日に至りて迎へ遣しければ、心の儘に夫婦となり、忍ぶべき關守もなく、嬉しさ限りなし、龍子、

獨寢のまどにさし入る月かげを
諸ともに見る夜半ぞうれしき

といひければ、數馬、

夜な〳〵はかこちて過し窓のもとに
ともにながむるありあけの月

夫婦の契淺からざる事、比翼の鳥の空に飛び、連理の枝の地に結びたるも、譬へとするにたらず、僅に半年ばかりの後に、織田信長江州に打出、山門比時に栖をつきしを、元龜二年九月十二日、叡山日吉山王に至るまで皆燒亡さる、此故に坂本の民屋まで亂妨騷動して、四角八方に皆散り〳〵に成たり、龍子は信長の家臣佐久間右衛門尉信盛が手に捕り物となりて、初めは行方を知らず、後に淺井朝倉亡びて、江州物靜になり、人民をのれ〳〵が故郷に歸り住て、暫く安堵したり、數馬は妻の龍子が行衞を尋ねんとて、父母に別れを取り、若回り逢はずば二たび家に歸るべからずと誓ひを起し、比叡辻に出たれば、人の云やう、正木が娘龍子は、佐久間に捕れて陣中にありと聞て、河内の國高屋の城に赴きしかば、交野の城おちて江州小谷に行たりと云、又江州に行しかば京都にありと聞ゆ、方々其所定まらず、こゝかしこに馳向ひ、終に天正八年正月に聞けるやう、佐久間は大坂門跡の籠城につき、天王寺の陣に屯し、七个國の軍勢を從へ居たりといふ、是より攝州大坂に下り、天王寺の陣に赴きしかば、年月重なり諸國を尋ね巡りしかば、衣は破れて鶉の甃の如く、かたち面替はりして色黑く痩せ勞れ、野に泊り草に臥し露に宿かす袖の上、淚は更に置爭ふ、已に天王寺の陣に行きければ、軍兵峙ち番手嚴しく、數馬恐ろしながら立休らひ、隙を窺ひて問はんとす、番の足輕其怪しみて、是はいかさま敵の謀を以て、陣中の有樣見せに遣しぬらん、其儀ならば一足も逃すな、搦捕りて首を刎ね、見せしめの爲め札をそへて阿部野に曝せやとて、我も〳〵と走り出て、打伏せ押倒して高手小手にいましめ、大將佐久間に此由いひ入たり、佐久間聞きて、囚人此方へ連れて來れ、子細を尋て後に兎も角も計らふべしとて、本陣に召よ

せ、信盛出向ふて、汝は大坂籠城の者か、如何なる子細によりて此陣に來り窺ひける、有の儘に白狀せずば、水火の責に掛くべしと云はれたり、數馬少しも恐れたる色なく、只今此大事に及びて陳じ申にはあらず、ゆめ〳〵敵方より來りて此の陣中を窺ふ者にはあらず、是は江州東坂本の土民、蘆崎の某が子數馬と云者也、叡山喪亂の砌り、一族悉く八方に別れ散りて行方なく、此程漸く國中靜になり、地下の土民歸住みて安堵せし所に、我妹龍子一人歸り來らず、人に問へば君の陣中にありと云ふ、それより諸方に尋巡り、只今爰に來り侍べり、願くは一目逢せてたび給へかし、然らば死すと云ふとも、何をか恨み侍べらんとて、淚をはら〳〵と流す、さて年はいくつ許と問へば、其時は十七歲、それより九年を經たれば廿六歲になり侍べりといふ、扨はとて陣中の女房共を尋ねしかば、年も名も國も同じく、數馬が云に替らぬ女あり、歌よく詠み手書き、智惠利根なりければ、信盛これを寵愛して置きたり、疑所なくそれなりとて繩を解きゆるし、廳場に呼入て龍子に逢はせしかば、龍子も我兄也と云ひて數馬に對面し、一目見るより、あれはそれかと云も果てず淚を流し、泣より外の事なし、信盛曰、久しく諸方を尋ね巡り、關を越え咎めを凌ぎ、さこそ侘しく心勞れ力衰へぬらん、此の陣中にして暫く休息せよとて、新らしき小袖一重出し、小屋の內に置て旅の勞を休めらる、次の日信盛云けるは、汝が妹よく雙紙を讀み歌をもつゞる、汝も定て手書き物讀むかと、數馬答へて、某幼より山門に登り、佛經外典怠りなく學し、詩文のかたはしよろしからねども作り侍べり、手も亦をかしげながら、凡べての人には劣り侍らじといふ、信盛大に喜び、我れ幼時より武藝に心をよせ、諸方の陣中に日を送り、學文手跡の事は手にも取らず、此故に今諸方の書簡、又は一篇の詩歌を贈られても、更に和韻返歌の事に及ばず、手の郎從の中にも是なし、今幸ひに汝其道を得たり、我が陣中に居て其事の職勤めて得させよと也、數馬嬉しくて、とも角も仰に隨ひ奉らむとて、はや二百貫の知行につけられ、上を受け下につたへ、書簡飛札皆信盛が心の如く調へたり、軍中の諸兵いづれも、重き人に思ひかしづきて、あなづらはしき色なし、されども數馬は是を嬉し共思はず、妻が行衞を尋ね求むる爲にこそ、身をも省

みず命をも惜まず、是までも來りけれ、一たび逢ひ見て後は重て見る事も叶はず、内外隔り互に心斗りを思ひ通はし、忍びの涙を袖に包みながら、月を越ゆるほどに、卯月の衣更になりければ、垢付たる小袖をぬぎて、人を頼みて妹に遣すと云はせ、歌一首書て衣裏に包み入れたり、

色見えぬこれや忍ぶのすり衣
　思ひみだるゝ袖のしら露

龍子是を取て、衣裏の綻びを廣げしかば歌あり、大に悲しくて、聲を忍びの泪をさへ難く、返しとおぼしくて小紙に書きつけ、夏のかたびら遣すと云て、衣裏もとに縫ふくめて遣りける、

いかにして行て亂れむ陸奥の
　思ひしのぶの衣へにけり

數馬此返しを見るに、胸悶え心消えて思ひ歎きしが、其つもりにや重き病に沈み、今を限りと聞えしかば、龍子は佐久間に申して兄の病重くして、今は限りと聞侍べり、願くは此世の名ごりに、今一たび見參らせばやとてなきければ、許し侍べり、急ぎ小屋の中に行たりければ、前後辨へず吟ふしたり、龍子枕もとに立寄り、如何に自らこそ只今爰に參りて侍べれと云ふに、數馬むくと起上り、龍子が手をとり大息つきたるに、泪は兩の目に餘り、容に流かゝりつゝ、物をも得云はで口斗動くやうにて其儘絶入りて空しくなる、佐久間憐がりて、天王寺の後ろの山もとに送り埋み、僧を雇ひて弔はせけり、龍子は泣々我住方に歸り、湯水をだに聞いれず、引かづきて臥しけるが、其夜より心地惱みて藥をも飮まず、只なきに泣つゝ、空に向ひ地に伏して大息のみつきて、次の日の暮方佐久間に云ひけるは、自ら家を離れ君に隨ひ參らせ、年を重ねて他國を巡り、親しき者とては一人もなかりしに、只兄のみ一人尋ね來て、是さへ空しくなり侍べり、此の悲しさは生を替ても忘れ難く侍べれば、今は命も極まれり、自ら死なば兄の側に埋みてたべ、黄泉の下にして、せめて同じ所に回り逢ひ、年月の憂さつらさ語り慰む事もがなと、他國に吟ふ便りを求めむとて、其息絶えむなしく成たり、佐久間は世に痛はしく悪ひて、其心ざし望みたるに違はず、數馬が塚の左に並べて埋みつゝ、龍子が衣裳殘らず寺に送り遣はし、跡よく弔ひけり、同じき六月に大坂門跡の籠城、扱ひにな

りて開け退ぎければ、佐久間も天王寺の陣を拂ひて歸りしかば、今は少し物靜に成行かと覺えしに、龍子が江州の家に久しく召使はれし下人彌五郎、商人と成て世を渡る業とし、大坂より和泉の界に行くとて、天王寺邊を打過ければ、東の山際に新しく立たる家あり、數馬と龍子と門よりつれ立出で丶、如何に彌五郎にてはなきか、道の便りに立寄れかし、故郷の事もゆかしきにとて呼びかけたり、彌五郎立戻り手を拍ちて、故郷には數馬殿の御父母は、疾く空しく成らせ給ひ、其跡は舅にて在する權七殿こそ繼がせ給へ、龍子君の二人の御親は恙なくて、只御人の行衞を聞かまほしく、朝夕は泣萎れて神佛に祈り給ふに、などやとく／＼歸り給はぬと語る、龍子、さればとよ、故郷のゆかしさ云ふ許りなりければ、世に仕ふる身は心の儘ならねば、それも叶はずといふ、彌五郎は急ぐ事のありて早く歸るべきに、文一つ遣はし給へと云へば、まづ今宵は爰に留りてよとて、酒進め物食はせなどして、夜もすがら物語りしつ丶、はや明方になりければ、彌五郎は旅立空に出で丶歸る、龍子文細々と書てき渡しぬ、坂本に歸て正木夫婦に文を參らせ、かうかうと語りしかば、親かぎりなく喜び、急ぎ文を開きて見れば、文の言葉文字のくさり手の書流したる、疑ふ處もなき娘の文なり、其言葉には久しく年へて、たま／＼彌五郎見え來たり、故郷の事聞につけて嬉しきが中に、戀しさやる方もなく侍べり、朝な夕な其方の空に棚引く雲霞も、思を起す媒となり、秋來る鴈金も、便りの文は傳へぬかと佗られ、漫に落る涙の袖今は皆朽果て丶、彌五郎にまみえし嬉しさを、何に包まんとのみ思ほゆ、我が身は父の生みて母の育てける、深き惠みは海も數ならず、高き慈しみは山も物かは、夫いざなひ妻したがふは、女の身の習ひ人の世の定め也、往日は山崩れ麓傾き、日の色は煙に蔽はれ、湖水の波は焔に燃ゆ、身を歎き命を逃がれんとて、親しきがゆき別れ、塵の如く飛び霰の如く別かれて、皆ちり／＼になり、互に行先知り難し、自は佐久間とかや恐ろしき武士に捕られ、或時は交野の陣に肝を消し、或時は中島の軍に胸を冷やし、國の數々從ひ巡り、泪にのみ浮沈みし、恨を心に隱し怖れを身に受けて、春の月朧ろに秋の風凄ましく、寢られぬ枕の上には夜の衣を反せども、夢をだに結はず、時移り事去りて

我を尋ぬる人に逢へり、更に春を尋ぬるの遅き恨み・はなしに、門の前の柳風に折られて二たび枝出つゝ、斷たる絃かさねて繋ぎければ、又君の賜物ありて、つかふる道に立歸るべき私を忘れ、日重り月逝きて今日になりぬ、音づれ絕えたるふけうの咎、恩を忘るゝに似たる事をば、枉げて免し給へなど書て、奥に

田鶴のゐるあしべの潮のいや增に

袖ほすひまもなく〳〵ぞふる

二人の親是を見て、其比別れてより便りの傳手をだに聞がず、今は世になき人の數にや入りぬらんと、心元なく悲しと思暮せしに、生きてありとだに聞けば、實に日比祈申せし神佛の利生ぞやとて、嬉し啼になきけり、父の云ふやう、急ぎ爰に迎へて年比の歎きをも慰め、見えもし見もせむとて彌五郎に案內せさせ、急ぎ天王寺に赴きしに、棟門立たる家ありと覺えし所には、只草茫々と生茂り狐馳せ巡り、道もなき山の麓に塚二つ並びてあり、此處彼處見回らせども、それかとおぼしき家はなし、一町あまりの西に寺あり、爰に行きて僧に尋ねしかば、其の塚は佐久間信盛の陣中より葬禮したる、蘆垣數馬正木氏龍子兄弟の塚なり、又其あたりに、人の住むべき家はなきものをといふ、父驚き娘の文を取出して見れば、文字もなく墨もつかぬ白紙にてぞ有ける、父悲しさの餘り塚の本に打倒れ、人目も耻ず聲をばかりに泣居たり、我遙々と是まで來る事も、一目逢んと思ふにぞ、いかに此塚に埋もれて、跡を隱しけるこそ悲しけれ、老たる父が心を知らば、姿をみゝえて此物思ひを慰めよかしとて、其夜はそこに留りしに、夜半許に夢ともなく、數馬と龍子と現れ出て、涙をながしつゝ、そのかみの事共語り、跡よく弔ひて給へと云、父夢心地に、我爰に來る事は、迎へて故鄕に歸らん爲也、よしさらば空しき尸なりとも、つれて故鄕に歸りなむと云に、いやとよ、此地に埋もるゝも地府の定あり、又物靜にして住むによろし、故鄕に移し歸されんには、苦み重なる事侍べり、埋みし塚をば二たび餘所に移さぬものぞや、地府の定めし御咎め其の亡者に當りて、苦しみを受る也、只此儘置て弔ひ給へとて、父に取りつき泣きけるよと覺えて夢はさめたり、泣々僧を雇ひて塚の前にして、供物を備へ經讀つゝ跡よく弔ひ、涙と諸共に立別れて、坂本の故鄕に立歸りし父が心、見る人聞く人

皆憐れがりて涙をながす、坂本に歸りても思ひの積りにや、夫婦の親幾程なく身まかりぬ、

○厚狹應報

陶尾張守晴賢は、大内義隆の家老として、不義を企て主君義隆を追ひ出し、自ら山口の城に居て分國を押領す、其の威漸く強くして大軍靡き從ひ、今は世の中恐るゝに足らずとぞ思ひける、周防長門の諸將諸侍等弓を伏せ甲を脱ぎて、從ひつく事云ふ計りなし、其中に周防の國には吉城大島、長門の國には美禰見島の諸侍等、初めは從がはざりけるを、今は時世にまかするぞよき、忠義ありとても誰か身を安くしたる、無用の忠義に身を狹められむより、只降參せよとて皆陶に降參す、其中に長門の國の住人厚狹彈正某と云者は、そのかみ義隆に恩を蒙れり、一旦は降參すといへ共、是は當屋形を窺ふ謀なるべしと讒する者あり、陶げにもと思ひ厚狹をかめ捕て、鏁を以て柱に縛りつけ、四方に炭火を起し火あぶりにす、陶出て是を見る、厚狹甚だ苦しみ大きに聲をあげ、我已に降參す、何の罪に依つてかく辛き目見する、死して後も物知る事あらば、此の報ひなからめやとて燒爛れて死す、陶打笑ひ、火責の厚狹さて懲よと云秀句して、其戸を野に棄てたり、半年許の後、常に陶が座の右に厚狹來りて見ゆ、陶大きに惡み嫌ひしが、安藝の國宮島の軍に、毛利家の爲に打破られたり、其の時厚狹甲冑を帶し、鹿毛の馬に乘り眞先に進み、陶を馬より突落せしと、近き軍兵共は目前見たり、是より陶終に合戰に利なくして、敗潰したりとかや、

○邪婬の罪立身せず

白石掃部正は、鎌倉の上杉家に仕へて足輕大將なり、其子右衞門尉は年已に廿三、父に隨ひて同じく奉公を勤めんとす、よりより言上して、已に目見えせん事を定めらる、其借たる家に娘あり、年十七八、みめ甚だうるはしかりければ、右衞門尉心を掛てさまざまくつくろへども、家の主みだりなる事をば嚴しく嫌ひて、夜るとても物音少し聞ゆれば、咎め怪しみて用心せしかば、遂に逢ふ事叶はず、右衞門尉只此女に惑ひて、奉公の心ざし傍になり、兎角透間を伺ひし處に、明日は上杉家の御目見とて、親も嬉しく取まかなふ、其夜しも家のあるじ、一族の中に急用ありとて出行きつゝ、夜一夜歸らず、右衞門尉好き隙ぞと思ひ、密

に娘の部屋に忍びて心ざしを遂げ、喜びに餘りけり、かくて我臥戸に歸り、まどろみければ、靑き狩衣に烏帽子着たる男一人走り來りて、一紙の折紙を捧げ、明日必ず一千石の奉祿に預るべしと云所に、赤き裝束に立烏帽子着たる男一人、跡より走り來り、大に怒りたる氣色にて彼の折紙を奪取り、右衞門尉は正なき邪まの私事せし故に、天帝大に怒り給ひ、奉祿の符を取返し給ふなりとて、夢は覺めたり、次の日、右衞門尉父子麗はしく出立、遠侍に伺公せし所に、管領立出で給へば、なにとかしたりけむ右衞門尉、深く眠りて前後も覺えず、管領の出給ふをも知らず、かゝる不覺人は物の用に立べからずと、諸人かたぶき云しかば、終に召抱へられず、父掃部は是を恨みて、暇乞ふて發心しけり、右衞門尉は、一期の內身上片付かで、流浪逐電の者となりぬ、されば人の身上かたつくべきか片付ざるは、更に世を恨み人をかこつべからず、只我身に省みて、我すまじき事をすれば、天道憎みて、官位奉祿皆心に叶はずと云、

○盲女を憐み報を得

永祿戊辰十二月に、武田信玄軍兵を率して駿州に赴き、今川氏眞を脅かし城下の民屋を燒立て、氏眞を追落して駿府を奪取給へり、城下の諸民慌てふためき資財雜具を取運び、我先にと逃げ惑ふ、其間に大軍押來り、家々に込入り財物を掠め、落人を打伏剝取り、手に持たる物皆奪ひ、切殪し追落し、男女啼叫ぶ音聞の聲に和して、天地も壞るゝ許也、かくて燒け靜まり城落ちて、氏眞は行く方なく、信玄勝利を得て府中の掟をいたされしかば、地下人原家に歸る、かゝる所に町家の燒跡なる溝の中に、年七八歲許なる女子ありて啼叫ぶ、父よ母よ姉よ、我を捨てゝいづくに行き給ふぞ、我れには食も湯もたべぬか、あな悲しあな怖ろし、飢て渴えたるぞやあな苦しとて、聲をばかりに啼叫ぶを見れば、目のしひたる女子也、隣の家に住たるやもめの女房歸り來りて云やうあなかはゆや、此娘は、三歲の時疱瘡を患へて眼に入りつゝ、兩目ながら盲たり、二人の親此娘の智惠かしこきを憐み、常には法華經の藥草喩品、觀音普門品を敎へて誦せしめたり、殊更にいとおしみ育て侍べりしを、此頃父は、三浦右衞門に惡まるゝ事ありて、非分の科を被り、牢舍させられて牢屋にして死す、母是を恨みて、病付て打

續き死す、姊是れを育て侍べりしに、今度の亂に流矢に當りて死す、城落て後は一族散々に成て、此娘の事知る者なし、かゝる者を見捨侍べらば、溝に倒れて飢死ぬべしとて、淚と共に抱起し、元より孀なり、亂に逢ふてあらゆる物皆失ひ、此盲女を養ふべき力はなけれ共、いとかはゆく見捨てがたく、我背に舁負ひ薦張の小屋に置つゝ、粥少しづゝ食せ、いかに和御前が父母は、かう〳〵の事にて疾死せり、姊は此程の亂れに矢に當りて死す、自らかはゆく見捨がたさに、爰につれて歸り育こ侍べるぞやと云に、此盲目是を聞くより、悶焦れて歎き悲しみ粥をも食はず、夜晝啼叫び終に絕入て死けり、孀の女房大に憐み歎きて、薪を拾ひ燒殘りし燼を集めて火葬したりければ、盲女子の帶に金子二兩をつけてあり、孀の女房是を取て、僧を供養し佛事いとなみ、黃金の有限り皆佛道に布施したり、斯て十日許の後に、我が家の內にして黃金十兩を拾ひ得たり、此由信玄聞傳へ給ひ、かゝる心ざしある女房は未だ世に稀也、我身のわびしきに加へて、盲女を養ひ、又黃金を得て我德分とせず、佛道に布施する事類ひなき廉直の女也、奉行頭人に是あらば、昔の青砥左衛門に替るべからず、天道憐みて黃金十兩を與へ給ふなるべし、是を公義に召取らば冥慮も恐ろしとて、信玄より家を建てゝ孀の女房にとらせらる、是故に德付きて、ともかうも緩やかに世を渡りけると也、夫世の人其家富榮えて、金銀豊なる時は、禮法をも知り義理をも勤む、正直にも見ゆる者なり、家衰へ身貧しければ、をのづから無禮になり、義理を棄て德に就き物を貪るは、世の常の人の心ぞかし、されぱかゝる亂に逢て、家は燒壞れ資財は失ひ我身すがらになり、其日だに暮し兼ね實に侘しき中に、かの孀の女房慈悲深く盲女を育ひ、又死したるを棄ず、薪を拾ふて火葬し、黃金を得て佛事を營む、更に我身の爲にせざる事、誠の心ざし誰か感せざらん、此の故に爰に記して敎の端とす、今の人若し利を見て義を忘れ、德によりて邪をなさば、此孀の女房のため、耻かしき罪人ならずやといふ、

○大石相戰

越州春日山の城は、長尾謙信の居住せられし所也、謙信已に死去せらるべき前かど、城の內に大石二つあり、或日の暮方に彼の二つの石、躍り上り〳〵頻に動

きけるに、人皆怪みて見侍べり、忽に一所に轉び寄りてはたと打合、又立退きて躍り動き、又打合たり、大石の事なり、如何なる故とも知がたし、只怪しき事に思ひければ、人々如何ともすべき様なし、夜半過るまで戰ひて、其石缺損じて散り飛ぶ事霰の如し、終に二つの石、諸共に碎けて扨止みにけり、夜明けて見ればば其あたりに血流れたり、是只事にあらずと思ひ怪みける所に、謙信病付給ひ終に空しく成給へば、兄弟跡を爭ひ、本城と二の曲輪と、兩陣立わかりて軍ありける、是其しるし成べしと後に思ひ合せしとぞ、

伽婢子卷之十二終

伽婢子卷之十三

○天狗塔中に棲

寛正五年四月に、都の東北糺の川原にして、勸進の猿樂能あり、觀世音阿彌、同じく其子又三郎を太夫として狂言師役者多し、此比の見物なりとて、京中の上下足を空になし、諸人蟻の如く集り、星の如く湊ひて是を見物す、將軍家も三たびまで、棧敷構へさせて御覽あり、大名小名似合々々に、絹小袖金銀を出し與へらる、其積上ぐる事日毎に山の如し、或日將軍家には出給はず、大名方風流を盡す、若殿原達棧敷を並べて、其前には家々の紋印したる幕打たせ、芝居には上下の諸人堰合揉合ひて座を爭ふ、其間に樂屋の幕打上げ、三番叟の面箱捧げ、しめやかに階がゝりをねり出でたり、諸人靜まりて見居たる所に、棧敷の東の端より火燃出て、折節風烈しく吹きければ、百餘間の棧敷一同に燒上る、内に持運びたる屛風簾、其外破子樽臺の物、俄の事なれば取退くるに及ばず、後には舞臺樂屋までも同時に燃上りしかば、見物の諸人あはてふ

ためき、我先にと出んとする程に、四方嚴しく結廻したる垣なれば、鼠戸一つにて堰合ひ揉み合ひ、踏倒し打轉び、女童は手足首を踏折られ、蹴破られ、傍には首髮小袖に火燃えつき、燒死する者も多かりし、甲斐甲斐しきものありて、四方の垣を切解きしにぞ、漸〻に逃るゝ人多かりし、かくて燒靜まりしかば、將軍家の仰せに依りて、諸大名承り、一夜の內に元のごとく、舞臺棧敷外垣までも作り立らる、實に大名の仕業は計ひがたしと感じながら、女わらべ地下の町人原は、きのふに懲りて行く者なし、されども諸國の大名小名、御內外樣中間小者原まで皆行きければ、棧敷も芝居も猶にぎやかに込合たり、され共喧嘩口論もなく無事に仕舞せし處に、其燒けたりし夜より、都の內に迷ひ子を尋ぬる事、十四五人に及べり、或は東山北山上加茂わたりの子共、彼の騷動に方角を失ひ逃げ迷ふて、足に任せて行迷ひたる者共なれば、皆尋ね出して歸りしに、上京今出川邊に、町人の子に次郎と云ふもの、年十二にして行方なし、親悲しがりて、人多く雇ひ諸方を尋ね、山々寺々を巡り求るに是なし、廿日許の後に、東山吉田の神樂岡に、忙然として立て居たるを見付て連て歸りしに、四五日の程は物をも食はず、只湯水斗を飮て、うかうかとして物をも言はず坐し居たり、其後やうやう人心地つきて語りけるやう、糺川原に出たれば、五十餘とみゆる法師の云ふやう、汝猿樂の能を見たく思はゞ我袖に取りつけとて、左の袂に取付かせ垣を飛越えたり、汝物云ふなとて、或大名の棧敷につれて登られしに、大名も御內の侍も、更に見咎めず物も云はず、斯て何にても喰ふべきかと仰られ、酒肴菓子まで取て給るを打喰ひけれ共、人々見もせず咎もせざりし處に、棧敷の並たる家々の幕打廻し、大に奢りたる體なりければ、此法師、あな惡くやおな見られずや、何の事もなき奴原の鬚くひそらし、我は顏なる風流づくし、鼻の先うそやきたる有樣かなと獨言して、汝は此者共のうろたゆる體見せんとて、我をかき抱き舞臺のやねに上り、なにやらん唱へられしかば、東の棧敷より火燃出て、風吹まとひ、百餘間の棧敷一同に燒揚り、貴賤男女上を下へもて返し、騷ぎ亂れうろたへ惑ふて、過ちをいたし疵を被り、死する者甚だ多し、舞臺も樂屋も燒け

ければ、法師我をつれて川原表に出つゝ、扨見よやとて手をたゝき大に笑ひて、今は心を慰みたり、是より我住みかに來よとて、法勝寺の九重の塔の上に昇り、内に入たりければ何もなし、只獨鈷錫杖鈴を、怖ろしき繪像の佛のやうなる、羽ある者の前に置れたる斗也、或日は我を塔の中に置ながら、我斗り出て地に下り、法師の姿にて人に行逢ては、或は腰をかゞめて禮をなし、或は頭を打はりなどして通り、又は人の容に唾を吐かけ、又は人の脊を突て打倒しなどするに、其人共更に目にも懸けず、咎もせず、或は兩方より來る人の首髮もとゞりを摑て、二人を一所に引寄するに、此二人俄に刀を拔て、打合ひ切合ひ、手を負ふて朱になるもあり、日毎にかゝる事共いくらと云數を知らず、其外江州勢田の橋に行きて螢を見、賀茂の祭松尾の祭禮、此頃見るといふ事あれば、つれて行つゝ見せられたり、我問やう、出で行給ふ道に人に逢て禮をなし給ふは、誰ぞといへば、それは道心高く、慈悲正直に信心あつき人也、此人邪欲名利の思ひなし、善神身を離れず諸天從ふて守り給へば、恐れて禮をいたせし也、又頭をはりて通りしは、或は金銀財寶多く持ちて貧しき人を侮り、生才覺ありて愚なる者を下し見る、少しの藝能あれば、是に過じと自慢する奴原は、面の惡さに頭をはりて通る、又脊中を突倒しけるは、小學文ある出家の内には、道心もなく慈悲もなく、重邪欲に餘り、外には學文だてして人を侮り、徒に信施を喰ひ旦那を貪り、非道濫行なるが憎さに突倒したり、又兩方を引合せて喧嘩せさせし人は、少しの武勇を自慢して、人をある物かとも思はぬ面つきの見られねば、惡さに喧嘩させたり、又つらおもてにかすはきを吐かけしは、是牛を食ひ馬を食ひ、或は家に飼置ながら、其犬庭鳥を殺し食ふ者、己は是を榮耀と思へ共、餘りの穢なさに唾吐かけたり、牛を食ひ飼鳥を食ふものは、疫神便りを得て疫癘起り易しと云へり、總べて何の道何の人といふ共、正直慈悲にして信ある人は恐ろしきぞ、假令高位高官の人も、邪欲非道慢心あるは、皆我等が一族となし、便りを求めて心を奪ふなりとて、今より後々の事まで語られしとて、つぶさに物語りせしか共、其外の事は世を憚りて沙汰する事なし、かくて今は暇とらするとて、塔の上よりつれて下り給ふと覺えて、其後は覺えずとぞ語りける、世

の中の事其後々の有樣、物語せしに違はずと云へり、それより法勝寺の塔には、天狗の住むと云ふ事を云ひはやらかしけるに、應仁の亂に燒壞れたり

○幽鬼嬰兒に乳す

伊豫の國風早郡の百姓、ある時家中大小の人打續て死す、其外村中の一族殘りなく死去りて、只兄弟二人生留まりぬ、傳尸勞瘵の病は實に滅門に至るといふ、定て是等其例なるべし、兄弟愁に沈みし所に、弟の妻又空しくなる、獨のみ明し暮すうちに、此春生れたる子あり、母に後れて乳に飢つゝ、夜る晝る啼ける悲しさ、見るにつけ聞につけて、涙の絕る隙なし、妻死して三十日許の後に、弟の妻其家に來りぬ、初めは恐れしかども、夜每に來りしかば、後にはいとゞ睦じくして、さすがに捨難く、夜もすがら物語りする事常の如し、兄此由を聞に誠しからず、弟を戒て曰、汝が妻死して未だ中陰の日數をだに過さず、はや何方よりか女を呼入、夜每に語り明かす、是世の人のため誹を受け、耻を見るのみならず、兄をだに是程の事諫ざるかと、人の言んも恥かし、今より後は、せめて妻の一周忌過るまで、異女を召入るゝ事あるべからずといふ、弟淚を流して曰、夜每に來る者は死したる妻の幽靈にて侍る、初ぬ俄に門を扣く、我子に乳なくしてさこそ飢ぬらん、此の事の悲しさに歸り來る也といふ、門を開きて內に入れたりしかば、赤子を抱きあげ髮かき撫て、乳を含め侍べり、初の程こそ恐ろしくも覺えけれ、後は睦じくて夜もすがら語りあかし、夜明くれば去失侍べる、更に日比に違ふ事はなしといふ、兄聞て思ふやう、一門悉く死絕て、只我等兄弟二人のみ殘る、然れば此妖物一定我弟を誑ろかし殺すべし、其時に至りては悔むとも甲斐あるまじ、妖物と雖も妻と化して來る上は、弟更に思ひ切るべからず、我是れを殺さばやと思ひて、長刀を橫たへ、弟にも知らせず忍びて門の傍に居たり、案の如く亥の刻許に、門を開きて立入者あり、兄走り寄りて丁となぎ伏たり、彼者聲をあげ、あな悲しやとて逃げ去ぬ、夜明て見れば血流れて地にあり、兄弟其血の跡を認て行に、妻を埋みし墓所に至る、弟の妻が尸、墓の傍に倒れて死す、墓を掘りて見れば、棺の內には何もなし、元の如く妻が尸を納め埋みしが、赤子も死けり、幾程なく兄弟ながら、打續きて死失ければ、一門跡絕えたり、

○蜘瘻の中より出

河内の國錦郡の農民が妻、項に瘻出たり、初は蓮肉の大さなるが、漸く庭鳥のかゐごの如く、後には終に三四升許の壺の大さなり、かくて三升の後に二升を入る瓶の如し、甚だ重くして立て行く事かなはず、もし立時には、彼の瘻を人に抱へさせて行、更に痛む事なし、よりくは瘻の中に、管絃音樂の聲聞えて、是に心を慰むに似たり、其後瘻の外に、針の先ばかりなる細く小さき孔數千あきて、空曇り雨降らんとする時は、穴の中より白き煙の立事絲筋の如くして、空に昇る、家の內の男女皆怖れて、此儘家に留め置かば、禍とならんも知らず、只遠く野山の末にも送り捨よといふ、此妻泣々男に語るやう、我が此病、實に誰か嫌ひ惡まざらん、されば遠く捨られたらんには必ず死すべし、又是を割開きたり共死すべし、同じく死すべくは、割開きて中に何かある見給へと云に、夫げにもと思ひ、大なる剃刀を求め、よく磨て妻が項の瘻の頭を、竪さまに割侍べりしが、血は少しも出ず、疵の色白らけて中より跳破り、飛で出たる物を見れば、長二尺許なる蜘五つまでつき出たり、其色或は黑く或は白く、又は青く又は黄也、鱗立光り有て、庭の面に這行きしかば、家人皆驚き打殺さんとす、夫更に制して許さず、時に當りて庭の面に一つの穴出來て、蜘皆其中に入たり、其穴深くして底を知らず、かくて神子を賴み、梓にかけて此事を尋ねしかば、神子口走りて云やう、其かみ此の妻妬み深く、內に召使ひける女の童を、夫寵愛せし事を腹立惡みつゝ、女の童が首本に嚙つきて、喰切りければ、血の流るゝ事瀧の如し、鐵漿黑くつけたる齒にて嚙ければ、疵深く腐り入て、終に女の童空しくなれり、其の恨み深くして今此蜘となり、妻が項に宿りて怨を報じ侍べり、假令今取出されたり共、終には殺して怨を晴さんものといふ、側に居たる人の云ふやう、其事は返らぬ昔に成侍べり、心をなだめて與へよ、其爲には僧を請じて、跡よく弔ひ侍べらんと云へば、神子又口ばしりけるやう、其時の恨み誠に骨に透り、幾度生を替ると云とも忘るべき事にはあらず、され共跡弔ひて得さすべしと云が嬉しきに、是にぞ心を慰み許し侍べらん、とても の事に望む處あり、叶へて得させんやといふ、側なる人如何なる事也共叶へて得さすべし、疾くく云へと云ふに、

神子打うなづき涙を流し、此世に生て有し時より、尊き物は法花經なりと思ひ侍べりし、今猶尊く覺ゆるに、一日頓寫の經書きて、回向して弔ひて給や、又其疵には胡桐淚を塗り給へとて去にけり、言葉の如く僧を請じて、一日頓寫の經書きて深く弔ひしかば、妻が心地も涼しく成ぬ、さて胡桐淚を尋求めて塗ければ、瘦の疵終に癒えたり、妻それよりして、物妬みの心を止め侍べりとぞ、

○傳尸禳去

寶德年中の事にや、中山中將親通朝臣の娘、尼になりて西山に住す、只かりそめに虛損勞瘵の病に罹り、潮熱咳嗽盜汗して漸々に瘦衰へたり、勞瘵の病は腹中に蟲ありて生ず、其形或は定まらず、總べて鍼藥灸治の及びがたく、十人にして九人は死す、是れを傳尸蟲と名づく、一人此病にて死すれば、其兄弟一族に移り渡りて、門を滅し跡を絕す、已に傳りて三人にうつり渡れば、其蟲手足耳鼻具り、よく立て行く、形人の姿、鬼の形に類すと云へり、さる程に彼の尼公、頻に病重く、今は人心地もなくなり、已に死せんとす、尼公の妹あり、行て看病する處に、尼公の身の中より、白き蠅の如くなる物飛出て、絲を引が如くなる白き氣あり、妹の袖の中に飛入て見えず、立上り拂ひ揮へども更になし、尼公終に其暮方に死す、妹其日より心地煩ひ出て、尼公の病に少しも違はず、姉の尼公より傳はりたる病とて、家中上下愁へ歎き、さま〴〵養生するに露許り驗しなし、如何すべきと愁へなげき、藥の力を以ては癒す事叶ふまじ、佛神の御計らひを賴むべしとて、白檀を以て長一尺二寸の藥師の尊像を作り、又殊更に祇園の午頭天王に祈誓して、此病癒やして給と歎き祈り申されしに、或日の夕暮に、病人少しまどろみける夢に、怪しき人來りて、明日一人の沙門鈍色の衣に、紅の袈裟かけて鉢に來るべし、是に賴みて祈りせさせよと云と見て夢醒たり、次の朝年の比五十許の出家、實に戒律正しく保つと覺えて、道行く事いと靜に、中山殿の門に入來り、錫杖打揮りて頭陀せらる、やがて內に請じ入て、かう〳〵夢想の事侍り、此病禳ひして給べと云出しければ、此僧答へけるは、我は戒律を守り、抖擻行脚を縡とする身也、更に不淨下口の食を求めず、只淸淨頭陀を行じて活命するのみ、かゝる神子々々しき事は、思ひよらずと云れた

り、重ね〴〵申されしやう、僧は大慈悲を以て人を助け、我身を忘れて他を利益するを本とす、今一人の命を救ふて諸人の喜ぶ處、其の功德すくなからむや、其上夢想の告に依てかく望み侍べりと、再三强ゐて歎きしかば、僧も理に折れて此上は力なし、然らば白絹一端を遺し給へ、是を以て病を禳はんといふ、それこそ易き事とて、生絹一端を奉りければ受取、僧はやがて出て歸る、さて御寺は何處と問へば、祇園のあたり也とて定かにもいはず、其夜姬君夢に見けるやう、佛像一體門の內に入來り給へば、十二の善神隨ひ來り、一つの箇を以て、十二の神代る〴〵、娘の頭より手足まで殘りなく撫給へば、身の中より白き糸筋の如くなる物出て、天をさして昇ると見て、夢醒て後心地凉しく、頭輕く食進みて、爽かなる事日來に替れり、次の日彼僧來りて、生絹に物書きたるを與へて、跡をも見せず失せにけり、奇特の思をなし封を開きて見るに、藥師の尊像を墨繪に書たり、枕元に掛て朝夕香を焚き、禮拜して敬ひしが、姬君の病程なく癒えたり、生絹の藥師をば家の寶物とせらる、誠に奇特の事也、彼僧は祇園にして誰とも知らず、是定めて午頭天王なるべし、天王は是れ藥師の垂跡、かた〴〵以て佛力のふしぎ、行者の信心によりて利益空しからずとかや、

○隨轉力量

武州小石川傳通院の所化、釋の隨轉は房州の人也、幼少の時より出家して、後に小石川に來り、學文を勤るに、貧賤にして朝夕に乏しければ、甲信二州の間、野州上下に乞食して步く程に、勤學論義更に精ならず、力甚だ强くして談林に敵する者なし、時の所化達皆異名を付けて明上座といふ、唐土神秀禪師の座下に、明上座とて大力の法師あり、六祖の惠能大師、大庾嶺に赴き給ひしを、明上座追かけて、傳授の袈裟を取返さんとせしに、惠能其袈裟を石の上に打置たり、明上座是を取らんとするに、山の如く重くして揚らず、惠能の曰、此衣は信を以て表す、力を以て爭ふべきや、是明上座本來の面目を見よと云れしに、言下に得道したりといふ、隨轉が力の强き斗にて、論義學文の弱き事を笑ひて、明上座とは異名しけり、或時信州の山中を通りしに、盜人に行逢ひたり、足に任せて逃けれ共、頻りに追かけしかば、隨轉手ごろの松の木を引撓

めて、尻掛けて休み居たり、盗人追來りしかば、逃延んとするに息切れたり、今は平包の錢皆奉らむ命は許し給へ、まづ此木に腰掛けて、息つぎ休み給へと云に、盗人心を許し、同じく松の木に腰を掛けし所を、隨轉立退きたれば、松の木起きあがるに、盗人彈かれて、遙の谷底に投落され、石に當り頭碎けて死にけり、かゝる大力の法師也、越前の朝倉家の旗下に、摩伽羅十郎右衞門は、北國無雙の大力と聞傳へて、隨轉かしこに赴き力を競べたり、隨轉は緣の上にたち、摩伽羅鳴居の際に立て、手を握り上に引揚げんとするに、隨轉更に動がず、緣の板を踏拔き鳴居は半ばより折れたり、兩方對々の力、人皆肝を消して目を醒ます、或時隨轉論義の場に出て、只一問答にて閉口せしかば、相手の僧打笑ひ、此論義は學を以てす、力を以て爭ふべきや、これ隨轉明上座本來の面目を失ふたりと耻しめたりければ、大に赤面して口惜く思ふ處に、其次の日町屋に出て、朝より夕まで所化鉢と呼ばゝれ共、更に與ふる人なし、甚だ怒りてあぢきなき出家して耻見んよりは、俗になりて時を得んには如かじとて、鉢を地に投げて打破り、袈裟衣を引裂て川に流し、越前に行て摩伽羅が手に屬し、終に姉川の軍に打死しけり、還俗の罪は甚深しと云事を恐れて、常は日毎に念佛怠らず、最後の時に至りて、口より白き雲の如くなる物棚引出て、西をさして空に上りぬ、忙しき合戰の最中なりければ、是を見たりし人僅に二三人、後に語り傳へしとかや、

○蝨瘤

日向の國諸縣と云所に商人あり、背に手の掌許り熱ありて燃るが如し、廿日許の後に熱冷めて、又痒き事云許りなし、漸く腫上り盃をうつぶせたるが如し、大に腫るゝに隨がひて、猶痛みは少もなく、只痒き事堪難し、此故に食事日に隨ひて進まず、瘦衰ふるまゝに骨と皮とになれり、遍く諸方の醫師に見せ、本道外科手を盡くして、內藥を與へ、膏藥を塗れ共、少しも驗しなし、其比南蠻の商人舟に、名醫の外科章全子と云者渡りて、此病を見て云やう、是更に世に稀なる病也、此故に人多く知らず、是蝨瘤と名付く、皮肉の間に蝨湧出て此患を致す、我よく是を癒すべしとて、腫物の周りに縛をかけ其上に藥を塗りたり、扨語りけるやう、世の人或は其身に蝨の湧出る事、一夜の內に或は

三升五升に至り、衣裳に滿ち〳〵血肉を吸ひ食ふ、痛み痒き事云許りなし、されども病人の身にのみ有て、他人には取つき移らず、是は又間々有事にて療治の手だて、世の醫師是を知たり、今此しらみは、肉の間に生じて皮より下にあり、人更に知り難し、今夕必ず驗し有るべしと云ける、其夜瘤のいたゞき破れて、蝨の湧出る事一斗許、皆よく足あり、大さ胡麻の如く、色赤くしてよく匍歩く、是より體輕く心地よく覺えしが、蝨の出たる痕に細き穴一つありて、時々其中より蝨出たり、是も其數しり難し、章全子が曰、此病は世に藥なし、百年の梳を燒て灰になし、黃龍水を以て塗るべし、是より外の療治なし、我少し是有、惜しむに足らずとて一匕許を取出し、痕の上に塗り侍べりしかば、一七日の内に癒えたり、

○山中の鬼魅

小石伊兵衛尉は津の國の勇士也、天正五年十月、河内の國片岡の城に籠りしが、城の大將松永、日比の惡行重疊し、寄手の大軍旗色いさみて軍氣盛也ければ、此城更にはか〲しかるべからずと思ひ、夜に紛れて只一人城を落ちて、弓削と云所に隱し置たる妻の女房を引つれ、夫婦只二人夜もすがら立田越にかゝり、大和國に赴きけり、其の妻懷妊して此月產すべきに當りければ、身重く足たゆく、甚だ勞れて峠までかゞり着き、道筋にては、若し軍兵共の見咎る事もや有べきと思ひ、道筋より半町許傍に入て、息つぎ休み居たりければ、跡より女の聲にて泣々來る、步むともなく轉ぶともなく、やう〳〵峠まで登りて呼はるを、よく〳〵聞けば年比召使ひし女の童也、女房につけ置しを、落人の身なれば人多くて叶ひ難く、弓削に打捨召つれずして來りしを、跡より追來りたる者也、心ざしの痛はしく可愛ゆくて、如何に我等は未だ爰に在るぞと聲を掛けしかば、女の童は世に嬉しげにて、君情なくも打捨て落給ふ、自ら假令湯の底水の底までも、離れ參らせじとこそ思ひ奉りしに、只二人のみ落させ給へば、自ら有にもあられず、跡を慕て參り侍べりと云に、心ざしの程憐れに嬉しく覺て、今は又便り求めたる心地しつゝ、三人一所に休み居たる所に、妻俄に產の氣つきて苦しみ、終に平產したり、夜半許りの事にて月は未だ出ず、暗さは暗し、夫の小石、とかくすべき樣をも知らざりけるを、女の童かひ

がひしく、取扱ひしにぞ、此者來らずは如何すべき、よくぞ跡より慕ひ來にける、誠の心ざし有る者なれば、此先途をも見屆くる也、あはれ男をも女をも人を召使ふには、斯程に主君を思ひ奉る者をこそあらまほしけれと、夫婦共に今更感じ思ひけり、扨妻は木の本により掛らせ、生れたる子は女の童懷に抱きて、三人さし向ひつゝ、夜明けなば山中の家を尋ね、心靜に隱れて保養すべしと思ふ、産養(うぶやしな)ひすべき事も叶はねば、腰に付たる燒飯取出し、妻に食はせて氣を助け居たり、女房は木の本に寄かゝりながら、女の童が方をつく〲見居たりければ、懷に抱きたる赤子を、舌を出して舐けり、怪く思ひて、猶よく目を澄まして見れば、女の童が口大きに耳元まで裂けて、赤子の頭を口に含み、舐るやうにて食ひける程に、はや首をば皆食ひ盡くし、肩を限り右の手を食ひければ、妻いと騷がず、夫を驚かしけり、小石は暫し睡り侍べりしが、目を覺まし此有樣を見て、密かに刀を拔きはたと切付けたりしかば、女の童鞠の如くはづみて梢に飛上り、其の儘凄まじき鬼となり、又地に飛下り、十間許り向ひなる岩の上に立て、赤子の足を食ひけり、小石詮方なく走り掛つて切けれ共、只夢の如く影の如くにて、太刀も當らず、しばし追廻りければ、鬼はや其間に赤子は食ひ皆盡して、蝶蜻蜓の如く飛上り、行方なく失せにけり、力なく跡に立歸り、元の木の本に來て見れば、又妻の女房を取られたり、呼共々々答ふる聲も聞えず、何地取られけむ行先も知らず、小石血の涙を流し、知らぬ山中をあなた此方尋ねしに、夜已に明方に成りて、道筋より三町許奥の傍なる岩角に妻が首を載せ置きたり、如何成者の仕業共知りがたし、小石是を見るに悲しさ限りなく、涙と共に其處に埋て、大和の郡山より南の方大谷に所縁有ければ、爰にたどり行て暫く隱れ居たりしが、兎に角にはかなき世を思ひしり、後世を大事と心付て發心しつゝ、高野山の麓新別所と云所に籠り、沙彌戒を保ち、貴き行ひして年月を送りし、後に其行方なし、

○馬人語をなす怪異

延德元年三月、京の公方征夷將軍從一位內大臣源義凞公は、佐々木判官高賴を責られんとて、軍兵を率して江州に下り、栗太郡、鈎(まがり)の里に陣を据へられ、爰にして御病惱重くおはしましつゝ、同じき廿六日に薨

じ給ふ、其前の夜、十五間の馬屋に立並べたる馬の中に、第二間の厩に繫れたる蘆毛の馬、忽に人の如く物云ふて、今は叶はぬぞやと云ふに、又隣の川原毛の馬聲を合せて、あら悲しやとぞ云ける、其前には馬取共並居て、中間小者多く居たりける、皆是を聞に、正しく馬共の物云ひける事疑なし、身の毛悚立ちて怖ろしく覺えしが、次の日果して義照公薨じ給ひし、誠にふしぎの事也、

○怪を話ば怪至

昔より人の云傳へし怖ろしき事、怪しき事を集めて百話(ものがたり)すれば、必ずおそろしき事、怪しき事ありと云へり、百物語には法式あり、月暗き夜行燈の火を點じ、其行燈は青き紙にて張り立、百筋の燈心を點じ、一つの物語に、燈心一筋づゝ引取ぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろひて、何となく物凄くなり行くなり、それに語り續くれば、必ず怪しき事怖ろしき事現はるゝとかや、下京邊の人五人集り、いざや百話せんとて法の如く火をともし、めん〳〵皆靑き小袖着て、並居て語るに六七十に及ぶ、其時分は臘月の初つかた、風烈しく雪降り、寒き事日比に替り、髮の根しむるやうにぞゝとして覺えたり、窓の外に火の光ちら〳〵として、螢の多く飛が如く、幾千萬ともなく終に座中に飛入りて、丸く集りて鏡の如く鞠の如く、又別れて碎け散り、變じて白くなり固りたる形、わたり五尺許にて天井につきて、疊の上にどうと落たる、其音雷の如くにして消え失たり、五人ながら俯伏て死入りけるを、家の内の輩さま〴〵扶け起しければ、甦りて別の事もなかりしと也、諺に曰、白日に人を談ずる事なかれ、人を談ずれば害を生ず、昏夜に鬼を話る事なかれ、鬼を話れば怪至るとは此事なるべしと、此物語百條に滿たずして、筆を玆に止む、

寛文六丙午暦三月吉日

寺町通圓福寺前町
秋田屋平左衛門板本

伽婢子卷之十三終

うらみのすけ上

ころはいつぞの事成に、慶長九年の夏の末、かみの十日の事なれば、清水の萬燈とて、袖をつらねて都人、四條五條の橋の上、老若男女貴賤とひ、色めく花衣、げに面白き有様也、爰に葛のうらみの介、ゆめの浮世の介、松の緑の介、君を思の介、半天の戀の介とて、其比都にかくれなき、色ごのみのおのこあり、なかにも葛の恨の介と申せし人は、一入心ぼそきものなりしが、本より觀世音の御ちかひ、あらたに思ひけることなれば、友とする人もさそはず、只一人清水へ參り、佛の御前にてきせい申し、其後らんかんに腰をかけ、參りの道者をながむるに、其かず更にしらざりき、爰やかしこにあつまりて、思ひ〳〵の物語、是よりすぐに豐國へ、いざや我等は祇園殿、扨は北野へいざ行て、くにがかぶきをみんといふ人も有、東福寺の橋にて踊ばや、五條にてなぐさまんと、我にひとしき友人を、引つれ〳〵伴ひて、何れかよからましかばと、心の慰は、浮世許とうちしげる、何をいはむも語らんも、恨之介は只一人、參りたる事なれば、いづくといふも詞なし、うらみ餘りの事なれば、音羽の瀧に立よりてみるに、落くる水に盃をうかべ、さもいつくしき女房達、又若衆もうち交り、手まづさへぎる盃を、かなたこなたへ取かはし、遊山許と聞えける、夢のうき世をぬめろやれ、あそべや狂へ皆人と、世に有貌はうらやまし、何に付ても數ならぬ、恨之介は我身の程をあんずるに、電光朝露石の火の、光の内を頼む身の、しばし慰事もなし、よしそれとても力なし、過去の因果と思へば、歷然の道理に任せ、我とわがみを慰斗也、かゝりける處に、田村堂の邊にして、花ぞめの袖の色めきて、ほの〴〵と明石の浦にあらね共、みえがくれする人々の、あまたみゆるは何やらんと、立より音を聞ぬれば、酒宴半とみえにけり、とても籠らば清水へ、花の都を見おろして、とゞろ〳〵と鳴神も、爰は桑ばら抔といふ、當世はやる小歌共、しどろもどろに諷ひなし、濱松の音はざゞんざ、今を盛とみえにける、柳櫻をこきませて、錦をかざる座敷の體、散もはじめぬふせいかやと思へば、峯の嵐か松風か、それかあらぬか、尋る人はあらねども、琴の音かすかに聞え

けり、あら不思議や、扨は此内に、ゆへ有雲の上人などの御慰も有やらんと、地主の櫻のこのまより、さあらぬ體にてみてあれば、十五六十七八、二十許の女ばう連、色を飾り、吉野初瀬の花盛、高尾立田の紅葉とてもかくやらん、其中に取ても、琴をしらべておはします、上臈の御姿をみてあれば、年の程十五六と見え玉ふが、紅の千入の袴を踏しだき、はだには何をかめされけん、上には白き綸子に、色々の絲をもつて、ものゝ上手が縫たりけり、御上前のくだりには、戀をするがの富士のねを、うき雲のおびと也、とかんとすれば結びもなく、煙は空によこおれて、かせになびき、高ねの雪も消やらで、すそのは茂る山なれば、紅葉ふみ分啼くしかの、妻とふ聲に哀ます、扨分方より後には、羽衣の松緑にて、よはひは君が例かや、さて又すそのけまはしには、浮島原、田子浦、あまのつり舟ほの見ゆる、磯うつなみのはげしくて、波にたゞよふ濱千鳥、げに有々とぬはれけり、さて帯のけつかうには、呉郡の綾にすりはくし、其おひ〳〵に秋の〻に、草づくしをぞ縫れたる、ひすひのかんざしは、あたとたをやかにして、楊柳の風になびくがごとし、かづら

のまゆはあをふして、せいたいが立板に、水を流すにことならず、宛轉たりし雙蛾は、露をふくめる絲萩の、かごじ、又鶯舌のさえづりは、花よりも猶いつくしや、袖うちはらふと許に咲初る、雪の下、紅顔きんしうのよそほひ、畫工が繪にはうつすども、筆にはいかで及ぶべき、物によく〳〵たとふれば、唐のやうき妃きやぶに入、ぐし君りふじん星のみや、越の西施、あしゆくぶにん、かんのちうたん、ごすいでん、毘沙門の妹に吉祥天女、朧月夜の内侍のかみ、染殿の御后、かの野の宮に住み玉ふ、御息所に葵の上、和泉式部、小式部、紫しきぶに小督の局、紀の有常が息女かや、義經のおもひしは、靜御前や上るり姫、その行平の中納言の、三年をちぎる松かぜや、村雨又は妓王妓女、用明天皇の、心をつくさせたまひける、まの殿の獨り姫、さて在五中將の、思玉ひし二條の后、そがの十郎祐成が、契を籠めし虎御前、しゝどの四郎が思ひける、きによの女、あはの流門にて、かのみちもりに別つゝ、恨に沈し小宰相、無官の大夫敦盛の、お室の御所にて見初しより、しづ心なく戀にせし、あせつしの大納言すけかたの四の御息女、げに

やおもへば深草の、四位の少將の通ひける、小野の小町や玉ものまへ、あやめ眞こもに常はのまへ、佐藤庄司が次男の忠信と、同じよみぢとなりたりしあんじゆのまへ、りきじゆ御前さよひめ立田ひめ、ほとけ御前、たいしよくはんの弟姫、江口の君に千手のまへ、雪姫遊やの長とかや、鬼がむすめの十郎御前、ましほの卿の妹に戀死の女、こんよの姫に中將ひめ、をそよ源氏にみえけるは、桐つぼはゝきゝわか紫、紅葉の賀花の宴、葵さかきば花ちる里、須磨明石澪標、六十よ帖の物とても、是れにはいかでまさるべき、そうじて美人の其數は、十二人とは申せ共、たとへばかぎり有まじや、昔の人はめには見ず、耳にはふれにし事ながら、此上臈の御形に、さぞや増り申さんと、かの恨の介がいく程思ひし、身の程をもうち忘れ、はぬけの鳥のふぜいにて、心もあきれて立にけるは、理とこそ聞えけれ、其後、酒も半のことなるに、あそばせし琴をかべにそむけてをかせられ、いまやうの三尾線を、傳手きりゝとおしまはし、絲を調べてかんをとり、あひのてをひかせらるゝ、扨しやみせんのけつかうには、心詞ものべがたし、ゑびのをの所には、雲ゐの雁の音信れて、翅をならべて古郷へ、歸る處をまきゑにす、さて絲くらの左右に、日月を明かに、白がねにて顯せり、さてさほの下りには、世中は、夢か現かうつつ共、夢共更にあるでなければといふ歌を、かなもじにてかきにけり、扨て又筒のまきゑには、都の內をぞかきにける、祇園淸水かも春日、六原六かく今ぐまの、豐國の大明神、三十三間大佛殿、いなりの山のうす紅葉、長樂寺とうふくじ、東寺西寺四塚、年はゆけども老いもせぬ、むつだの河原や舟岡山、愛宕くらまやをのゝ里、伏見深草成道寺、鳥羽に戀づか秋の山、さて山崎にたから寺、宇治の橋もと扇の芝、槇島にてさらしする、淀の河舟ほのみゆる、これぞやはたの御社、せきどの宮、これたかのみこの御狩せし、きん野の雉は子をおもふ、うどのにしげきませがきの、いとだが原やいかならん、くぼつのわうじ天王寺、石の鳥井に至る迄、かなたこなたを取りわたし、ものゝ上手がまひたりけるが、るりをのべたる御手にて、ばち音け高く引あらし、八ころの鳥は、いつはりをうたふた、まだ夜はよなか、しめておよれよの、思ひ明しねは、まつかせもさびし、情は今の思ひのたねよなふ、

つらきは今のふかき情よ、いつさてはなのゐんとならふずよのと、かれうびんがの御聲にて、さもほのかに、うたはせたまへば、人げんには申に及ばず、誠に御堂のみすもさゝめひて、ほうじやもゆるぐばかり、空とぶ鳥もはをやすめ、ちを走るけだもの迄も、などかはこゝろあらざらん、いよ〳〵恨の介が心も、春のあは雪きえ〴〵と、消入許に覺ゆれば、げに理とぞきこへける、やゝ有て恨之介思ひけるやうは、いかさま此御方樣の、ゆかりを尋ばやとおもひ、まくの邊に立よれば、廿許の女房たち、おすゐの女とみえしが、こはらうぜきなる人や、さる上臈たちのましますす所へ、ちかくよらせ玉ふは、何の御用ましますと、顏に紅葉をちらしける、恨之介申やう、御理はさる事なれども、我等ゐ中のものなれば、何のおもはくをもしり參らせず、あれ程いつくしき花のやう成御方樣たちを、せめてはめにてなり共見參らせ、我等が國へ歸ての、物語になし申さんため、若き時のならひぞ、御免あれとぞ申けるが、めんぼくなげに立されば、下女も流石に都人、あざ笑ひしてこそ立つにけれ、恨之介思ふやう、色を見てこそあくをばさせ、枝を見てこそ花をばおれ、かのあひさつに取付て、なをもとはゞやとおもひ、なふいかに何方よりの御參りの、上らう樣にておはしますと尋申せ共、さる御かたと斗りにて、つゝみて更にあかさず、うらみの介思ひけるは、爰にて月日を過し、御かへるさをしたひなんと思ひ、車宿に馬とどめ、さあらぬていにてみる處に、やう〳〵日も入相の鐘も、今やと思ふ折節に、雲の上人達も立さはぎ、網代のこしをみだうのうちへかき入、うちのり〳〵かへり玉ふ、さればこそと思ひ、其の御跡をしたひければ、何れも近衞殿の御内へいらせ給ひけり、其後うらみのすけは、つるなし弓にあらねども、いるにゐられぬふせいにて、わが宿にかへりつゝ、亂心と成ぬれば、只狂亂のごとく也、つら〳〵物をあんずるに、我等いかなるゐんぐわにや、か樣の姫を見參らせ、何と忘れん方もなし、雲に梯有ならば、渡りても見ん、一筆の風のたよりをも、思はぬ迄もと思ひけれども、跡さきしらぬ事なれば、及ばぬ戀とは是をや申らんと、臥沈む斗り也、ねなんとすれどもうき人の、其俤を思ひねの、夢もむすばず泣あかす、うらみのすけあまりの悲しさに、爰に思ひ合り、昔が今に至るまで、

力に及ばぬ事をば、何事も神佛へ申ならひの候と承り、其うへかの上薦さまを見そめ申せしも、清水にての事なれば、かなはぬ迄も一命をかぎりに、觀世音を頼み申さんと、身を清め申して清水へ參りつゝ、左のかうしにつうや申、じゆずさら〱におしもみて、抑御山は、田村丸の御建立、大同二年に立られし、萬佛の願よりも、千手のちかひは頼もしや、山より瀧が落れば、水上清き御寺とて、扨こそ額にも、清水寺とはうたれたり、みづから幼少より、小弓に小矢の本末をしらざりし比よりも、千手の誓ひは頼もしく、今まで參りの利生には、我思ふ一念をかなはせてたび玉へや、我等過にし十日の比、御前に參りつゝ、その下向の折からに、おもひのほかの花を見て、露と消えなんばかり也、か程に申みづからを、いかなる佛神三寶も、哀とおぼしめされなば、心の內のまうしうを、はらし玉へや觀世音と、三七日籠れども、御利生更になかりけり、重て祈りけるやうは、いかに申さん御佛さま、爰にひとつのたとへあり、源中納言かねたかとて、三河國の國司也、母は矢造の長者とて、かいだう一の遊君也、わく寶を水の泡とて、其數しらでもたれけれども、子共を一人も持たざれば、此事を歎き、其比同國ほうらいじの峯の藥師とて、利生あらたにましませば、ふうふの者共みねの藥師にこもりつゝ、男子にても女子にても、子種をさづけてたび玉へ、此願かなふものならば、今色々の立願ども、いふもおろかと聞えけり、佛もあはれみ玉ふかや、終に利生かうぶりて、玉のやうなる女子をもつと、今の世までも聞えける、上るり御前と申は是也、みづからが祈しも、色こそかはれ其むねの、やるかたなきはひとつ也、此戀かなはぬものならば、此まゝみどうにまろびふし、露ときえんは治定也、しかりとは申せ共、うゐてんぺんの世中に、みらいの事は思はれず、適うけがたき人身をうけたりといへ共、ざいごうふかき身と生れ、惡心斗思ふのみならず、けつく佛のいましめ玉ふ事を、我身のやるかたなきまゝに、申べきにはあらね共、もとよりぐちの凡夫を、すくはんためのぐわん也、をよそ五かいにみえけるは、殺生偷盜邪婬妄語飮酒かいとて、色々の法衣を身にまとひ、彌勒の出世にあはんため、跡の掟になし玉ふ、かれをたもつてだにも、破るはならひ有りときく、その釋尊の古へも、しゆたら

女にあひなれて、らごら尊者をまうけ給ふ、佛にだにも愛染王、神だにも結ぶの神と承る、いはんや我等もとよりも、賤しきしづのうき身なり、さのみにくませ玉ふなよ、此戀かなはぬものならば、佛も我を御こゝろしまし〳〵て、殺生戒を破らせ給はんやと、心をくだき、責にせめてぞ祈りける、誠に御本尊、御納受やまし〳〵けん、四七日の明ぼのに、佛前よりまき物一巻、うらみの介がまどろむ枕に置給ふ心ちして、あつと思ひ夢さめて、七どいたゞきひらいてみる、去程に下京五條松原通をの小路、はつとりの庄司が後家と尋行て、此事を頼ならば、必かなはんと有ければ、有がたくおもひ、かの庄司が宿を、こゝのかしこのと尋もとめ、清水の御夢想により、是まで尋參りたりと申せば、ごけも此由きくより、思ふしさいの我も有、みづから今夜の夢に、あすにもならば男一人、いづくともしらず來りて、清水よりの御むさうとて、我を頼んに、其人頼みたらん事を頼れぬ物ならば、我をうらむなと、翁と現じ、夢かと思へば跡もなし、みづからふしぎに思ひしに、ゆめにもしらぬ人に、とはれ申ふしぎさよと、うらみの介を請じつゝ、酒などをすゝめて申やうは、なふいかに何のしさいに、清水よりの御告と仰られて、是までみづからを御尋にて候ぞ、此上はそもじの御心の通りを、殘さず御物語を候へと、したしげにこそ申けれ、もとより此恨之介、願ふ處の事なれば、かの君を見そめ申せし時より、觀音にきせいの程を、始よりおはりまで、事こまやかに語れば、ごけはきいて、その御事にておはします、げにもさやうの御告を、つゝみ申に及ばず、事のしさいを語りきかせ申さん、いつぞや清水へ御參りの上臈こそ、我等が爲には主君也、其比天下の關白秀義と申奉るは、我朝をば心のまゝにきりしづめたもふに、御ゐせいを申せば、昔源平の御代は今ものゝ數ならず、大唐までと治め給ひけんと聞えし天下の大將、三國をひとつに勢をなし、さてわがてうの諸大名は申に及ず、誠に高麗の珍物を捧げ、唐人共の秀義へ御寶を持參る事、上古も今も末代も、例すくなふ聞えけり、爰に御一門に中納言秀次公と申せしに、御代をゆづり玉ひ、御身は太閤と申奉る處に、此中納言の御運の末のかなしさは、天魔の入替る心や付たりけん、花の都に有とても、我心のまゝならず、秀義にはからはれ申也、所詮太閤を

うち中、天の下を我まゝにふるまはんと思召、御前近き人々を、一間所へまねきよせ、より〳〵御評諚有ければ、御諚さる御事にて候へ共、かうをなせば天の利有、義の道を御背き候はゞ、いかで御利運候べき、御思案あれと諌めけり、御運の末のかなしさは、叶まじとて思召立ければ、誠に灯きえんとて、光猶ますごとく也、人めつせんとては、悪念おこりけるとかや、されば此事、誰申とはなけれども、天知地知、我知人知、壁に耳有、岩の物いふ世中にて、太閤の御耳に立ければ、秀義驚給ひつゝ、其比御前よかりける、石田治部少輔満成を御傍近く召れつゝ、いかに承り候へ、秀次がむほんの由を聞つる也、昔思合するに、源の頼朝は梶原が讒言にて、忠ある弟の義經をほろぼして、其後かうくはいし玉ふと聞、いか成事ぞ秀次が、我に逆心よもあらじ、いかに〳〵と仰ける、満成此由承り、仰の上を申上るは、其おそれおほく候へ共、中なごん様の御謀友を、風の便りに承候へ共、御氣色をはかつて申上る事もなし、御諚にて候へば則只今申也、御謀反におゐては、うたがひは更になしと、事こまやかにぞ申ける、太閤此由聞召、其儀にて有ならば、心にまかせうつべき也、親が子をたばかれば、子は又親にたてをつく、秀義が作る罪によもあらじ、をのがなせるとがなれば、恨むべきにもあらずや、時刻うつしてかなはじと、頓てじゆらくへ使者をたつ、たばかりつゝもすかし出し、伏見の御所迄御出有、被レ仰けるやうは、太閤樣への逆心は、夢にも更に候はず、こかうの讒を聞召し誠ぞと思召す、かやうの御諚のむねんさよ、身に於ての誤は、露程もあらざれば、是迄参て申也、一は天の畏れといひ、一はぶめいのおそれといひ、冥の照覧おそれあり、心にやしんの候はゞ、いかでか是まで参るべきと、色々ちんじ玉へば、さあらば高野山へと有ければ、かの山へ落玉ふ、然りとは申せども、御身にくもりの有けるか、終に御腹を召れけり、扨其後に秀次の、日比近付玉ひける、御手掛の上臈を、車に乗せ奉り、上は一條柳原、下は九條のはて迄も、小路々々を引廻し、十四十五を始として、花のやうなる上臈達を、卅三人つく〳〵と、三條河原へ引すゆる、哀成ける次第かな、かの中納言関白の御しがいを、卅餘人の上らう姫に是を見せ、さいごの名残りと有ければ、上ろう達の仰には、あらうれしや此きはにて、

御しがいの替る姿を見申さで、きえんはよみぢのさはり也、今のさいごに見申事、誠に二世のきえん有とて、御しがいに近付て、何も泪にむせびしが、其中に取ても、物の哀をとゞめしは、出羽の國の住人に、最上殿の御娘おこぼの局と申せしは、今年十六歳にておはせしが、涕をとゞめての玉ふやう、いかに人々聞玉へ、只今のざしきにて、御しがひを見參せ、彌々思ひ出る也、此君のじゆ樂の御所にて、みづから共を召れ、いかに何も聞玉へ、此度爰を出る事、じんきやうの禮をおもんじて、一まづ都をひらきつゝ、あやまりなきよし申ひらき候べし、それにかなはぬものならば、高野のおくの白雲と、きえはてん身なりせば、此程なれしむつごとを引替て、念佛になして手向よ、我身はいかに成ぬるとも、わごせ達はさもあらじ、ねがはくは秀次と、同じ道にと思へども、かの高野山と申は、弘法大師の昔より、女人けつかいの山なれば、いかにおもふとかなふまじ、今が別か悲やと、さしもにいさめる秀次も、泪ながら出玉ふ、此君の御詞、情の末のうれしさを、思ひまはせば小車の、やるかたなきは心也、是をみるきせん上下の人々よ、みづからが最後を、悲しみなくにて更になし、君の情を思ひやり、なく泪にて候と、きよやかなりし御ふぜい、よその袂もぬれやせん、其後御しがひにむかひてかく計、

一ばんおこぼの局 南無阿彌陀道の露とこぼるれば
　　ねがひの岸にいたるうれしさ

二ばんめ むつましく契し君をもろともに
　　彌陀の淨土にいざなはれなん

三ばんめ 有明のひかりをてらす彌陀の國
　　きみやさき立われをまつらん

四ばんめ 彌陀賴む人はいく夜の月ならば
　　いざなへ西へきみとわがみを

五ばんめ たのみつるみだの敎のまゝならば
　　ほとけも君もわれもみほとけ

六ばんめ 二ごゝろなきをたすくる彌陀佛
　　一みちになる我れをたすけよ

七ばんめ 南無阿彌陀〳〵ぶの聲きけば
　　こゝにみほとけ向ひまします

八ばんめ なむといふこゑの光に立めぐり
　　身はつゆの玉たまはみほとけ

九ばんめ 網のめにもるゝを救ふ誓あれば

捨てられし身もみだにかなはん

陀佛々々と申をきける御佛の

みち引きたまふみだのみもとへ

か樣に卅餘人の人々、おもひ〱によみ玉ひければ、秀次の御しがひも、うれしくや思ひけん、おしうなづかせ玉ひけり、其後おこぼの仰には、何れも念佛し玉へといひもあへず、衣の下より守刀をぬき出し、きつさきをくはへつゝ、南無と云ふをさいごにてふし玉ふ、殘の上らう達、是を御覽じて、あら凉しのさいごやとて、我も〱と御じがひをし玉ふに、親めのとしたしきかた、又は年ごろめしつかひし、女子はしたに至るまで、むくろしがいに抱付、是は夢かや現かや、いかなる浮世に生れきて、かゝるうきめをみる事よ、かなしやつらや何事ぞ、我もつれて諸共に、しで三づの大河をも、召ぐし玉へ姬君とて、なきさけぶ其の聲は、大けうくわんのごとく也、此ひめの有樣、たとへんかたもなかりける、心なきゑびす共も、理や道理とて、きせん上下おしなべて、哀といはぬ人もなし、是と申も秀次の、天命のつきし故と、申さぬものはなかりけり、爰に中納言秀次の、御若年の時よりも、片時も離れ申さゞる人々は多き中に、さやうの人は指をき、おうしうの人成しが、木村常陸と申て、我等が爲には先祖の主、此人の二親夫婦ともに、草葉の露ときえ玉ふ、近衞殿におはします、上﨟の御爲には、木村殿は親にて有、此姬二さいの事成に、秀次を始奉り卅餘人の女ぼうたち、御下々に至る迄、天正の春の花、文祿の秋の紅葉とて、ちり〲に成玉ふ、然るにかの姬を、我等ふうふのもの共、かなたこなたとかくし置、此町宿に忍びやか、浮世をいとひかのひめに、ちりをもつけずあけくれに、あらき風にもあてじと、いとをしみ參らせ、月日を送候へば、程なく七の春迄、やうしたて申せしに、我つまの庄司殿、有爲無常の習ひにて、むなしくならせ玉ふ也、其時みづからも自害して、しなばやなんど思ふ時、彼姬君のみ給ひて、いかゞ思召たりけん、みづからにひし〱と抱付、わつと叫び玉ひて、なふいかに情なや、みづからと申は、二親の事は夢にもしらず、庄司二人の中をこそ、おやとは思ひ候ひしに、うき世あだなる習ひにて、庄司にはなれ申さへ、何とならんと便なく、おもふにいとゞ御身又、じがいまし〱候て、十にもたらぬ我身を、

何となれとや思ふらん、うらめしさよとぞわび玉ふ御姿、目もくれ心もきえ〴〵と、きえ入やうにぞ覺えける、流石思ひは切りぬれど、岩木ならねばえがたとて、此姫君のいたはしさに、じがいはつゐでさたもなし、庄司がことも思ひきり、明くれおひめをもり立、思ふに程なく十二の春の比、おとなしやかに此ひめの、形容顔いつくしく、云に詞もたらざれば、人めも忍ぶと思へ共、そのふにうゆる紅の、つゝめど色のますふせい、此の姫都にかくれなし、ある時みづからを近衞殿へめされて、いかにきくか庄司が後家、汝が家に木村ひたちが娘をば、やしなひそだつときいて有、あはれ其姫我にえさせよかし、其上名ある人の子を、いかで賤なさゞらん、我にえさする者ならば、草のかげなる父母も、さこそうれしと思ふらんと色々仰有間、力及ばずかの姫を、近衞殿へ參らせて、みづから共に參りつゝ、一日二日と過行けば、十四の春まで自が御奉公申つゝ、此姫おとなしくましませば、自が妹に紅と申せしを君にそへ奉り、我身はつめての御奉公申には及ばず、時々の御見廻、かの姫君もおり〳〵はなつかしく思召、人を給る時も有、かくてみづからは霜をいたゞき、まゆには四かいの浪をたゝみ、人にまじらはんより、心を墨の衣にそめ、かざりのかみをそりおろし、身を月なみのよりかたに、立ちよりもしなましと、只一筋に思ひ取、花をつみかうをたき、姫の二親の御弔ひ、又は庄司の後世ぼだいを、朝な夕なにおこたらず、念佛申てゑかうをし、なにはの浦のよしあしをも、心にかけずうち捨てゝ、偏にごせのつとめ也、今とても彼姫に、はなれ申事はなし、過にし夏の比、雲の上にて殿上人、女御后の御かた、五節の舞の有し時、彼姫を召されつゝ、琴の役をなし玉ふ、もとより琴は上手也、形はゆうにやさしくて、露重もげなる秋のゝか、女郎花かと疑はる、か程ゆうなる女房は、たぐひあらしの音信れにも、きかば心もきえやせん、所詮此女をば、雪の前となすべしとて、忝くも國王のゑいらよくにて、此姫御名を玉はる事かくれなし、かくのごとくの君なれば、いかなるあらきゑびすまでも、一めみるとひとしく、戀こがれずといふ事なしと、始終の事共を、こま〴〵と語れば、いよ〳〵恨之介殿は、ほれ〴〵となり玉ひ、心も空に浮雲の、飛立やうに胸せきて、聞くにつけてもぎく〳〵と、のど

ぎくめける聲のうち、思ひやあまる涙の袖、しぼるばかりに見えけるは、理とこそ覺えけれ、やゝ有てうらみの介いきつぎかねて申やう、扨も御物語を承候へば、こなたを頼み申べきにて候はず、罷立といひければ、後家此由を聞くよりも、まて暫し客もじさま、よし〳〵との物語は、さる事にては候へ共、觀音の御告と御申の其上に、みづからにふしぎ有り、誠に雲の梯(かけはし)は、渡るに便もなかるべし、たとへたよりの有ぬ共、中や絕なん中々に、成がたしとは思へども、みづからしらぬふせいにて、御文のたよりをも、なさせ申さん客の殿、御心やすく思召せ、いかにやなうといひければ、うらみなのめにおもひつゝ、硯にむかひみつ〳〵の、心の思ひする〳〵と、するすみの江の濱松の、濱の眞砂のかず〳〵に、かきあつめたるもしほ草、みるめなのりそとらんとて、袖もぬれけるかいぞある、あらめでた、あなかしこ〳〵とかきとめて、ごけのにこうにわたしけり、女房文を請取りて、近衞殿へと急ぎける、やかたにも付きしかば、ごけ心に思ふやう、いかにして此文を、君に上ぐべきやうもなし、いかゞすべきと思しが、又思出したり、菊亭殿の御娘、三六の御年に、ならせ玉ひし御かた樣、かくれなき美人にておはしまし候が、御名はあやめのまへと申せしが、雪のまへと此程は、おとゝひのごとく也、よき御中にて有ければ、此御姬さまに近付より、こすのと山の物語二つ三つ申て、其後にいひけるは、よの中にふしぎ有り、語らばきこしめさるべし、それをいかにと申に、我等が主の雪のまへ、いつぞや清水まふでの有し時、いかにしてかはみたりけん、うら見の介と申人、是も清水まふでして、地主のほとりを見てあれば、まくうち廻し遊山ある、御姿をかひま見て、しづこゝろなく戀となり、あさな夕なにあこがれて、かなはぬせんとや思ひけん、清水にこもりつゝ、かんたんくだき祈りしに、七々日の明ぼのに、佛も哀とおぼしけん、枕がみに立よらせ、御じげんあらたにかうぶりて、佛の敎にまかするとて、我等が所へ來りつゝ、しか〴〵とこそ申されけれ、みづからも此人の事共更にしらねども、觀音の告と有ける上、みづからにもふしぎの御むさうあらたにして、きずいの程のおそろしさに、何となう此事を、申て見ばやと領請し、是まで參候へ共、言の葉のつゐでもなし、いかにせましと語りける、あ

やゐのまへは聞召、さてもあらたにおはしける、御靈夢のあらたさよ、只よのつねの事にてなし、佛神の御引合せ、我なす事にあらざれば、文計の音信は、なしてみんとて此文を、あやめ殿取給ひて、雪のまへを近付け、うきよ語を遊ばして、後に此文取出し、始よりの事共しか〴〵と有ければ、雪のまへ聞玉ひ、觀音の御告はさるとにて候へ共、いかでお返し申べきと、貌をあかめおはしける、あやめ重て仰せけるは、理りはさもあれ共、我にひとしきかいあれど、かさねて申させ玉ひけり、雪のまへ聞召し、松原のばゝといひ、そもじさまの使ひといひ、返事申ものならば、やがて上の御耳にたち、そもじ様までるざいにあひ、又草のかげなる父母の、名をながさん口惜さよ、此事思ひとゞまれと、こゝとをきらして仰けり、扨其後にあやめのまへ、此由を聞召し、仰のつまり所をば、かねても誰かしらざるべき、御ことはりにて候へ共、女人と生れ出てより、おつとの思のかゝらぬはなし、山と云山に霞のかゝらぬ山もなし、何れのたとへは申共たとへにつきもあらざれば、こま〴〵と申さず、たとひ此事もれきこえ、ものゝふの手にわたり、しざいるざいの身となるか、又はすいくわのせめをうけ、くつうくげんをみるとても、前世のごうとおもふべし、たゞし千手の御ちかひ、不可稱不可說不可思議の、くどくは行者の身にみてり、かくのごときの御じひの、あまねく世界にふかきときく、ことに御ほとけ引合せましませば、其なんものがるべし、きゝ入れたまへ雪のまへ、いかに岩木をむすぶとも、此事に付てはかなふまでは申べし、なふ〳〵言葉をつくさぬさきに、みづからに身を捨て、なきみと成ると思召し、一筆の御返事をなしてたべと有りければ、あやめ殿にかたらはれ、すこしこゝろもよは〳〵と、こゑのしたよりの玉ふは、さあらばさゝのさゝがにの、糸あきかぜにさそはれて、たよりのはしの文をとり、くわんおんのつげといひ、一つはそさまの仰といひ、そむきがたくやおぼしけん、文をばほゝに入玉ひ、一ま所へたち入りて、とぼそひきたてよみ玉ふに、言の葉をこそつくしけれ、

うらみのすけ上　終

うらみのすけ下

風のたよりを松がねの、松にとゝふ風もなく、嵐凩吹きたえて、空に鳴音の雁金の、かりにも君に我姿、しらせてましと思へ共、誰かは是をしらせまし、唐胡國の田面の雁、そぶが思のとのはを、つく〴〵と聞しより、哀れと思ひ文かゝせ、漢朝の帝王に、萬里をへてぞ捧げゝる、今の我等が玉章を、情も有りて晨明の、月のほのかに此文を、おぼろにそろりと音信れてたべよかしと思ひつゝ、かりに恨みて鳴かねども、昔を思出しつゝ、古歌にも、

秋風に初かりがねぞ聞ゆなる
　たが玉章をかけてきつらん

か樣の事なども候へばこそ、雁金はひたぶるに、思の程の玉章の、使をしけると承る、今の空行鳥々に、口説てみれど其かひも、あら磯浪のうつせ貝、かた思なるあはび貝、我と碎くる我心、いかにせましと思ひ、所詮千手の御前にて、見もし聞もしする人を、御佛を賴みつゝ、祈らばやと觀念し、淸水に參つゝ、七々日の日數をへ、御じげんを仰しに、哀と思召し、あらた也ける御夢想に、むづ〳〵と枕もたげつゝ、すはゝやいじをむ有がたしと、手水うがひをする〳〵と、じゆずおしもみて御佛を、拜むと均しく御むさうに、任せて五條松原の、庄司が許へ尋行き、ごけの尼公を賴みしに、いなといひける最上川、いなとな云ひそいな舟の、おしていくたび申さんと、詞をかへしていひければ、さらば御使申さんと、有るをうれしく思つゝ、硯に向ふ水莖の、水をふくまぬ其さきに、我めにこそはさき立ちて、しもに落ちける涙の雨、降りつもりたる床の海、いか許とか思召、古歌に

つくばねの嶺より落るみなの川
　戀ぞつもりて淵と成りぬる

か樣にも候へば、筆の立どもたど〳〵と、たどるやみちに迷ひつゝ、心も空に〳〵、書きあつめたるもしほ草、見るめなのりそかひ有て、取上げ是を見玉はゞ、心を高ねの月にかけ、思をしがのうら波に、よせたるしるしも有ましや、又は前世の御佛の、誓と是を思ふべし、一樹の陰や一河の水、汲も他生の緣ならずや、ましてか樣の身とならば、哀れ浮世の習ぞと、思召し

て、御返事も候へかし、若もおなびきなきならば、今生にては身をけして、君の手馴し物となり、朝には八重の帯、召さるゝ小玉の帯となり、お腰の程に寄りそひて、くるり〳〵くる〳〵と、お腰にひやたと纏付、結びあはんと願ふ也、夕の床にしづまらば、この魂取分て、こんは褥や枕の下、蛬と身をなして、よな〳〵絶えず鳴きぬべし、はくは御寝のね亂の、枕にかゝるつくもかみ、元結と身をなして、くるりひつしとかみを卷、朝な夕なにはなれまじ、若又むなしく成るならば、六道四生の其内を、淀のよそへが水ぐるま、露ほろ〳〵の泪にて、くるくるざんぶ〳〵と、三づの川をもしたふべし、さあらん時に君はそも、いかでうかびもし玉ふべき、佛もか樣の一念を、かなへぬ人をば事の外、いましめ玉ふと承る、それをいかにと申に、ある經の文に一念五百生、けんねん無量劫、生々世々に至る迄、つきせぬ恨のふかうして、ともに蛇身と成るならば、佛とはならずして、長く蛇道に落つべしと、古事迄も思ひ出で、一方ならぬ思草、葉末の露と諸共に、消なんとは思へ共、古歌に

しなん只生きては人の戀しきに

いやまだしなじ逢ふ事も有

と讀たる歌などを力とし、つながぬ月日に立めぐり、無常の虎の聲にも驚かず、電光朝露石の火の、刹那の程の世中に、いか許成る我が思ひ、積らば芥子刧盤石刧、すみつきのごう成共、是にはいかでまさるべき、筆にもつきじ詞にも、のぶるにはてもあらざれば、古歌に

水莖の岡のみなとのすの上に

数書きすてゝ歸るかりがね

袖に落る瀧の白糸うちはへて

苦きなりにむすぼゝれつゝ

人しれぬ涙の玉のをのれのみ

思ひくだけて年ぞへにける

袖にのみつゝむ習と思ひしに

人めをもるもなみだなり皃

たよりなき人松風の音ながら

さても戀しき雪のまへかな

古歌に

うかりける秋のを鹿の妻戀に

顯れそめてねにやたつらん

背かではさてはつまじき世の中に
　いつを待とてつれなかるらん
心だにかよはゞ苔の下までも
　さぞなあはれと水ぐきのあと

あら筆に名殘惜や〳〵と書て、あらめでた穴賢々々と有ければ、雲の前殿此文をこまやかに御覽じて、やさしの人の言葉の末、か程心を盡し玉ふかや、げにも左樣に思召さば、はづかしながら自も、御返事申さんとて、雪の薄樣に、かうろぎの墨すりながし、あそばしける、もとより此姫、歌の道にはくらからず、古今萬葉源氏狹衣、伊勢物語の言のはを、あら〳〵書き玉へば、文章のたつしやさよ、筆勢のいつくしさ、中々申に及ばれず、さらりとあそばし、あやめ殿にぞ渡されける、其後彼庄司がごけを近付け、かくと宣ひたりければ、よろこぶ事かぎりなし、斯てごけは、此文を持我やにかへり、恨の介にしか〴〵と、物語してわたしければ、是は夢かや現かや、夢ならば覺ての後をいかゞせん、扨も雲の上なる御事を、思かくるもおそれ有、まして御みづからの御筆を、しづの我らになし下さる、一かたならぬ忝なさ、一せならぬくわほうの奴めかなと、三どいたゞきにつこと笑ひ、悅びける事かぎりなし、扨御返事をひらきて是を拜みるに、青柳の糸よりがたき御水ぐき、亂て花はほころびにける御言のは、つねならぬ上によそへてぞ、みるにやさしさますらをが、心の程の捨てがたく、夏きにけりとみゆる卯の花は、てにはの花とおほしめせ、五月やみ覺束なきに時鳥、今一入もきかまし物をと思へ共、ねをなく虫の哀れよの、風の便りを聞くからに、なびかぬ草のあらじと、思へばとこそ思へ共、

僞りと思ひながらやちぎるらん
　しらばや人のしたのこゝろを
たのまじと思ひながらも僞りに
　替らで待つはこゝろ成りけり
先だゝぬ身は同世にながらへて
　替るをみるもうきいのちかな
我さへに替はると人や思ふらん
　餘りになればいはぬつらさを
いかにせんいとふとも猶世中を
　歎くこゝろのもとの身ならば

又はづかしながら一首、雪のまへ

打つけに物ぞ悲しき木のはちる
　風のたよりの初めとおもへば
古歌に
鶉鳴くいはれの野邊のあき萩を
　おもふ人ともみつるけふかな
又は、ね亂髮の枕の下の蛬、今こそ思知られ參せ候、
きり／＼すいたくな鳴そ秋の夜の
　ながき思ひはわれぞまされる
か樣の古歌を見參らせ候へば、御はもじながらいとおかしくて一首、雪のまへ
わがせこに見せんと思ひし水莖を
　それともみえず雪の明けぼの
又同じく
打ち靡く末ばをかけてはし鷹の
　とやのゝあさぢ霜むすぶらん
僞りのことのはしげき玉づさを
　くり返してもながめつるかな
古歌に
みよしのに鳴雁金といざさらば
　ひたぶるにいま君によりこん
おきつ波八十島かけて住千鳥
　こゝろ一つをいかゞたのまん
契りしは末もとをらぬ忘れ水
　賴むやあさきこゝろなるらん
思出るときはの山のいはつゝじ
下の句はあら／＼御はもじやなふ／＼と書とめて、末はなければ恨の介、御文をみても誠の心の程をもおしはかられず、又こがきの方をみれば詩有、
かう君ねがはくはゑんわうをたもて、まなぶことなかれ平砂落雁のつ、
此詩の心いかにといふ事をしらず、又
天山わきまへずなん年の雪ぞ、かうほまよひぬべしきうしつの玉、
又
雪がもうににたりとんでさんらんす、人はくわくしやうをひらひて立てはいくわいす、
か樣の御言葉いかにとしてか存候はねば、庄司がごけの前にては、打頷きたる斗にて、其處を立出でゝ我やに歸り、誰にかはとはましと、思々て明しけるが、爰に細川玄旨の御內に、宗庵と申せし人、恨之介とし

たしくして、常に此やへ行きければ、頓て此宗庵の宿へこそは急ぎけれ、かの人折しも在合て、よもの雜談事過ぎて、歌物語をよそながら二三し出して、此心を聞きければ、宗庵詩歌にくらからず、頓て歌の下の句を、朗詠にて引出し、歌を吟じてきかせける、其歌に

思ひ出るときはの山のいはつゝじ

いはねばこそあれ戀しきものを

と、此下の句にて候と云ければ、又詩の心はと有ければ、宗庵答て云やう、始のかう君ねがはくはと有る詩は、君思召より玉はゞ、をし鳥のふうふの契のふかき事をまなび玉へ、かりそめにもまなばざるは、砂の上にをりける雁金と云ふ心也、此雁金と云ものは、定たる妻なきもの也、いく度も行さき〴〵にて逢ふを妻とする故に、頼もしくなし、如ㇾ此の故を以ての詩也、うらみ又云、末の二の詩の心はいかにと云へば、宗庵のいはれけるは、天山わきまへずの詩は、しろしめされずや、ついくのわかに、

世にふれば物思ふとしもなけれ共

月にいくたびながめしつらん

此歌の心は、今よりは晝は人めもあればにや、よなよなの月にみんとの心も有るか、又ゆきがもうににたりの詩は、

物おもふ袖にぞかゝるしら雪も

ちるにかたはく道やなからん

此心なるべしと有りければ、恨之介は是を聞き、か程の事を知ずして、雲の上人を戀參らせし事の恥しさよと、我身に指ざしをして、ばうじやくぶ人のわうわくもの丶徒らと、獨言してゐたりけり、昔の人と聞えける、とばの院の御内なる、さとう兵衛則淸は、あこぎと云れしとのはしらず、無念に思ふらん、浮世に有もあるかひなく、此ふしんをはれんため、諸國修業に出けるが、國々を廻りはて、いせの國に至る、あま人に近付て、あこぎのいはれを具さに聞き、扨こそふ審をはれにけれ、今の我等は宗庵の、くはしくはらしてたび玉ふ、此宗庵のなかりせば、無明じやうやの闇ならん、偏に佛の光明に、あへる心ちぞしたりける、扨其後はよろしき便の、御言のはの數つもりて、名のみ有月の半に、さゝがにの糸くり返し、一たびの逢ふせも有らんと有りければ、不ㇾ斜恨の介悅ぶ事限なく、幾かの八月十五夜を待ける心の幾くぞや、ひごのあじ

やりの三會の曉、みろくの出世を待つに異らず、つながぬ月日とは申せ共、千年を待にあひにたり、哀れ此光陰の糸にても有ならば、只一時にくりよせて、あひみんものをと思へども、流石に思ふに叶はずして、一日々々と杉のまど、限の日かず重りて、今夜ぞ秋の最中なる、名月に成ければ、恨之介は、庄司がごけの許に行き、いかに申さんごけの公、思召御忘も候はじ、かの樣の御かたよりの御文に、みえ參らせ候ひつる、御ことのはの末がきに、秋の最中の月影に、みえてましと有けるが、いかにせましと申けり、ごけは此由聞くよりも、げにも今夜は名のみある、月の夕の事なれば、月見のくわげんおはします、いざゝらば御供して、かつら男のほのかにも、月にそふたる影にのみ、の橋の鵲の、はづれを女に出たゝせ、薄衣取て引かつかくしもとめて一度の、あふせのよはの七夕の、紅葉がせ、行けば程なく近衞殿、ごけは爰にて秋風に、葛の恨みを招よせ、いかになふ恨殿、爰に暫く待玉へ、みづからは內に入り、すきまを窺ひ此事を、委く語申つゝ、御迎に出べき也、いかに〳〵と有ければ、仰の通さ存ずる、何樣になり其程を、そもじに任せ申上、とかくの事もいひがたし、しかりとはいひながら、しばしのやすらひ此所に、たゝずみがたく存ずる也、若もいかにととがめられ、こうともなるかさなくば又、首綱にて引も出され、さるは山王まさるが參りた、犬はかう〳〵などゝいはれんこと、目のまへにて候まま、頓て〳〵御歸りまし〳〵て、我をいざなひおはしませ、返々と有ければ、ごけ此由聞くよりも、其御事に取ては仰迄も候はず、我々が身の上をば、御身の上より大切也、其上姬の御うへ迄、もれてはいかにと存ずればゝ、御心安く思しめせ、恨殿とて庄司がごけ、御內をさしてぞ入りにける、扨此恨之介と申せば、紅葉の門を打過て、めんらうくわいらう孫廂、爰のつまりかしこを過ぎ、花の局にかくれゐて、今や〳〵の音信を、待つこそほどは久しけれ、斯てうらみは物音をきき耳たて、すはや〳〵と思ひしに、ごとりとなりてちちめけば、うらみはまねくねずなきかと、心うれしう思ひつゝ、そなたの方をみてあれば、とれにてはあらずして、鼠のふうふたはぶれの、ちゝめくにおはしける、恨鼠にばかされて、腹立ぬると思へ共、又引替て我心、てんじかゆればめでたきぞ、それをいかにと申

に、鼠のふうふのたはぶれに、必ちゝめく習有、我等もかれらにあやかりて、ふふせの中とやがて有る、よるの袂の新枕、曉かけてむつごとの、ちゝめきあはんずいさうを、かねてしらするうれしやと、今一人ぞ悦びける、かくてうらみはかのさまの、御前いかにおはすらん、ごけの返事もなどやらんと、おもひける折節に、そなたのかたにこゑ有て、鶯が花の局に音づるはとの玉へば、うらみの介あつと思ひ、風にうらみを待程の身ぞと有ければ、内より扉をきりゝとあけさせ玉ひて、いとうつくしき御手を指出させ玉ひて、うらみの介がきぬのそばを、とうさせまし〱て、月の入るべき山のはは、こなたの方ぞとの玉ひて、は山がくれに入玉ふを、しるべのかたと嬉しくて、是こそ清水の御引合ぞと、上らうの御かたをみれば、地主にて見そめし君にはあらず、いか成御かたにておはすらんとあやしく思ひ、重て姿を見てあれば、嬋娟たるかんざしに、あまるみぐしの御内、何にたとへんかたもなし、古詩に、もうたう光にのぞんで月の出づるがごとし、又一しやうをみれば花のひらくるににたり、か樣の詩にあひにたり、かみの内よりまゆの上の、白くひかり渡れる所は、そも月の出るが如し、又一度笑める御口もとは、花のひらくるに似たりとある所、いま此君にことならず、されば此君の仰けるは、我をばたれとかおぼすらん、そもじが事を取もち、ごけもろともに使をせし、あやめのまへとはわが事也、心をかけ給ふなよ、こなたへませなふ恨殿と宣ひて、所々の灯をこと〲く打しめし、九重のまんの内、八重の几帳を打過て、雪の前の局にぞ、いざなひおはしたりければ、彼の姫は見玉ひていはけなる顔付、さも恥かはしくやおはしけん、時ならぬ秋の立田山、紅葉色づく顔ばせは、かみなび山の木葉迄、紅匂ふ御ふぜい、三室のうちもいつとなく、亂て岸波にごるらん、秋のはそよぐかぜのまに、葛のうらみと云は、何かそもと有ければ、かのまめ男の御返しと思しくて、君はうき身の風によそへてと云ければ、皆人かんじて、誠にさもこそあれ、風の立ぬればこそ、くずのうらみる事もおはしぬれど、風なくばうらみる事もあらじ、君を風によそへ、うらみの介とはほ句とて興じられけり、扨其後に奥のまに、各、伴ひて入らせ玉ふに、あたりのていをみれば、金銀をちりばめ、らんよしよくしやの玉衣

の色を飾り、戸には水晶をつらね、ともにあたりて妙の聲有れど、誠に言葉にものべがたし、極樂せ界又は龍宮城のおとひめの、おはしける所かや、又辨才天女の住かも、是には過じと思ひけり、扨其後に御座敷にはあやめのまへ殿、紅殿、雪のまへ殿、扨うらみの介とは四人にて、御かはらけぞめぐりける、誠に情の色ふかく、千入にそむる紅ゐの、こがれいよ〳〵戀ぞます、是と申も、偏に觀音の和光の御影と、有がたくこそ覺えけれ、かくて御かはらけ、かなたこなたへとび廻り、雪の前殿御盃、うらみの介へあやめ殿の御こうけん有ければ、恨あまりの嬉しきに、かいうつぶきほほ笑たる有さま、たとへん方ぞなかりける、此盃を恨之介ひかへければ、あやめ殿かれうびんがの御聲にて、當世はやりける、りうたつぶしと思しくて、ぎんじ玉ひけるは、

君が代はちよにや千世を重ねつゝ
岩ほと成りて苔のむすまで

と

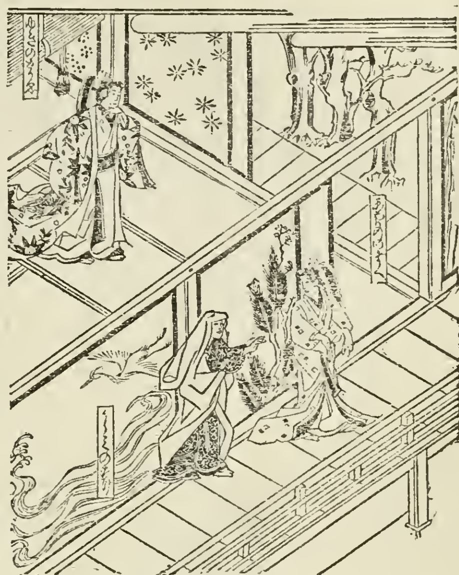
うらみかたじけなしとて、三どほしければ、其盃を雪のまへ殿、おもはゆくかたはらに向て、手ずさみのやうにかきよせて、かはらけ取し言の葉の、露の情に心とけ、ゑいのかほばせはなはだしく、色かにめでければ、紅殿天女のしやうがをあざむく御聲にて、是もりうたつぶしを、

色かをも思ひもいれず梅の花
常ならぬよによそへてぞみる

とうたはれければ、皆人申されけるは、紅殿は、常には小歌をも御口ずさみも候はぬに、妙なる御吟聲やとぞほめられける、扨今の盃あがりて、あやめ殿にさし玉へば、につこと笑ひ、珍しやとてうけてひかへ玉へば、雪のまへ殿さかなとて、

君とわが久しき世々をたとふれば
空行く月のかぎりしられず

と有りけれども、恥かはしくやおはしけん、聲かすかにして、きくにたらずおはしけれども、あつとかんじたる計也、さてあやめ殿盃、紅殿飲みおさめて、盃も取ければ、夜も深更に及びぬ、いざさらばとて何となう、座敷を立玉へば、紅殿もお立有り、局々に入玉ふ、かくてたがひに手水うがひし玉ふまに、御寢所をととのへ置きければ、雪の前殿、褥の上に宿らせ玉へ、斯てうらみの介が、よるの袂もつねならず、一代一世



の間にも、見きかざるしとねの上、はゞからじとは思へ共、天の冥加におされけん、おづ〳〵しとねへはい上り、足をちゞめて胸に手を置き、南無歸命とは思へ共、心にふかぬ風吹て、只じは〳〵としたりけり、さて其後にうらみの介、何とか申懸參らせ、御ざにうつり申さんと、ちくさに物を思へども、よそには更に申されず、しばしやすらふ處に、雪のまへの給ふやう、こよひの月の入さの山にも、露やをくらんと有りければ、是はそもいかなる御言葉やらんと、恨の介は、かの宗庵戀しく思へ共、爰にてはかなはず、いかゞせんと思ひしが、言のはによし有りて、桂男のまふでつつ、そなたの空にて申さんとて、御ざの上にぞうつりける、かく御情のなかりせば、むなしくよはをあかさなんと、あぶなき今夜のたはぶれなり、扨もひめの御心、やさしき事はかぎりなし、夜と共の御むつごと、天にあらばひよくの鳥、ちにあらばれんりのえだ、佛ならば愛染王、神ならば結ぶの神、貴船とがくし、三島いづ箱ね、此の神たちにひとしく、我等も二世をこめ玉へば、たがひにたはぶれ玉ひけり、かくて八聲の鳥もなき、ねうしの數事過ぎて、とらうのかねの仄にも、しのゝめ告ぐる村烏、うかれて床にはなるらん、さるにても鷄の、なけばこそあれ此よはも、鳥によりてや明けぬらん、鳥なかりせばといつまでも、此よも明けまじと、鳥にうらみの介を惜みて、雪のまへ殿、

夜も明ば犬にくはせんには鳥を
　まだきに鳴てせなをやりつる

暫しよの雲のせき守せきとめよ
　つき日のひかり十日ばかりは

とゐいじければ、東雲もほの〴〵と、明渡る空に成ければ、千夜を一夜と重たる、御きぬ〴〵の袖なれば、互の名殘のうつりがし、今一入ふれてまし、あら情なの世中かな、うらめしの別やな、化しても爰に有もせで、歸らん事のかなしさよ、鬼の島に有ときく、かくれみのかくれ笠、今こそ爰にてほしけれども、もとむる事もかたければ、天にあふぎてもかひぞなき、斯て程も有るならば、いかゞと思ひける間、おいとま申と有りければ、雪のまへ宣ふやう、けふを名殘のかぎり也、それをいかにと申に、世中の有爲無常、朝に紅顔有し身も、いつのまにかはもとの雫、末の露ときえ、夕には白骨となれる身、是皆ゐどの習也、釋尊御佛と申せ共、此世盡きぬれば、はつだいのなみと消玉ふ、いはんやわれら何をか定め、何をか期せざらん、未來永々たらん時にこそ、かさねて又もまみえ申さんと、おさふる泪に袖濕れて、よその人めも恥かしき、恨之介も御情の切なき事限なく、哀れながらへも有ならば、今一どもと申度事數々なれ共、さしていはれざれば、姫やがて心也、定し事の定なければとといへ共、後生にては必參あふべしと仰ければ、うらみもおさふる泪をちぎりすて、誠に今の御名殘、いつのよにかは忘るべき、せつなの妄執、九ていこうの善根を、せう滅すると承るに、ましてやいはん君と我、中の執着さぞあらん、いはんやなす善根とてもなし、現在の果を見て、過去みらいをしると云事あれば、らいせいかならん、なまうだと申ける、うらみが心ぞ哀なる、其後うらみは、心づよくも思切、御局を立出て、御所中を忍出で、四條室町にて夜も明けゝれば、人の面も白々とみえたりけり、御かたみと思敷く、びんのかみ玉手箱、ふくさに包めるうつりがは、猶一入ぞ床敷くて、跡をのみ見かへして、みれ共かひぞなかりける、さて松原の庄司が許に行、扨もと云ひ出すとひとしく、物をばいはず、只泣にこそなかれける、ごけもさぞといひながら、聞分たる方なければ、赤面してぞゐたりける、かくてうらみの介云ふやう、そもじ樣の御をんのぎりさき立てば、胸せき物もいはれねば、口說てか樣に申也、萬事はすもじおはしませ、重て參りよろづよの、御物語申べし、暇申てさらばとて、わがやをさしてかへりける、かくてうらみの介が契の程は、誠に

かんがいの床の上には、はるかに契を千年の鶴によばひ、かうれいの莚の上には、遠く萬劫のかめにきすと契りしか共、のがれざる別れぢに、あふとは傳へきくぞとよ、それはいこくの物語、是はうらみが身の上の、やるかたなきとの歎にて、臥沈みてぞゐたりける、扨もかのさまの御かたみ、身にそへ顔にあて、みるに涙ぞ五月雨の、ふりくもりたる心の空、はれまもやらずしほ／＼と、のきばも我れをや弔ふらん、かはくまもなきふせいかや、今はかたみもよしなやな、松かせや村雨が、行平のかたみを見て、かく戀衣しほたれて、心もすまのうら風に、さそはれしいにしへと、今の我等かふせいかや、かゝりける處に、うらみの介と二世の契りを結び、日比したしくおはしける、思ひの介、浮世の介、此人々は集まりて、近き比はうらみ介のみえられぬは、いかにしてかおはすらん、何方にもばかものが、切てもむなしくなるやらん、ふしぎさよとぞ申ける、一人の人が申やう、いやさやうの事も候はじ、かのうらみの介といふ人は、色ふかきおとこにて、常に色ごのみまし／＼て、身に及ばぬ色ごのみか、又は浮世の習とて、遊女遊君白拍子に、心を引かれて有やらん、いざや行かた尋んとて、伴ひ二人出たりけり、さるにても此男、いかなる大事有りとても、しらせぬ事は有るまじき、何ととぼけて有るやらん、戀之介云やう、しさい有らん、さるとこにて聞つる事の候は、過にし比の事なるに、淸水へ參つゝ、地主の櫻の邊にて、靑葉に咲る花を見て、靜心なく戀と成、浮身をやつすと聞つるが、若もさやうの事やらん、ふしぎ也ける事共哉、先々浮世を深草の、宿に尋て行くかたを、とはましものと云ひければ、さらばいざとて行きければ、恨の介は此程の、思にぼうじて草臥か、そばなる被をひつかぶり、前後もしらず臥たりけり、此人々是を見て、なふいかにうらみの介、おきよおきよと云ひければ、うらみかつぱと起あがり、しきだいをしてければ、思ひの介浮世の介、うらみの介をつく／＼見て、扨も御身の姿こそ、古の形もなし、おいおとろへてやせこけて、物にたとへばおく山の、こけざるが雨にそぼぬれ、ついつくばうたにさもにたぞ、いかでか樣に成り玉ふ、しいしゆを殘さずお語りあれ、二世迄とおもふ中、何かはくるしう候べき、とく／＼と有ければ、うらみ此由きくよりも、其事にておはし

ます、過ぎにし夏の比よりも、何とやらん心亂れ、時雨の空のうき雲の、うき身のやるかたなきまゝに、かなたこなたにはいくわいし、一所不住の有樣故、さながらよそをもうと〳〵しく、心に物のいらざれば、をのづからと打絶えたり、御はづかしやと宣へば、皆人是を聞くよりも、頓て恨が心をくみ、詞の末のうき雲の、うき身のやる方なきまゝに、云ひつる詞のあやしさよ、つゝまず語りおはしませ、恨の介は是を聞き、御はづかしやと申せしが、爰にてこそおはしませ、萬すいりやうなし玉へ、此の姿にて候はゞ、浮世に有りても有りがたし、只今御めにかゝる事、今生の暇乞ひ、御名殘惜やとて、さいごの盃取出し、二三返まで廻りけり、戀之介浮世之介、此の事をきくよりも、いかなる事を宣ふぞ、我々斯て有らんには、何かは叶はぬ事あらん、天がをのぞめる事は、それは思ひもよるまじい、其外の事は何にても宣へ、一命をすてきもいらん、・めいにかくる上、何かはつゝみ玉ふべき、はや〳〵と有りければ、うらみの介は承り、こは忝き仰哉、此上はつゝみ申して何かせん、我等過ぎにし夏の比、清水まふでの折節に、思ひの外の花をみて、心をつくし觀音に、きせいをふかく申かけ、七々日こもりて祈りしに、佛哀れと思しけん、逢ふせの道も叶ひしが、其後便りも打たえ、二度あひもしみもせねば、うき俤の身にそひて、戀のやまふとなりにけり、古き歌にも御ざ候ぞや、我ら一人、始めてよに有とな思召すそ、昔人も

逢みての後の心にくらぶれば
　むかしは物を思はざりけり

か樣の歌も候へば、我等斗とも存候はねば、恥かしともいひがたし、されば今の我々が身の程にては、かの雲ゐの花をみん事成がたし、今は身まかりてこそ、來世にて逢見ん事を待參らせめとて、うちかたぶきてぞ泣きにける、戀之介是を聞き、扨もやさしき御心の程や、天地にも背き玉ふべきにもあらず、せかいに陰陽有、天地是又おなじ、月日も是にひす、况や人間に於てをや、此道に身をすて、命すつる事恥ならず、さりながら始終叶はぬ所にてはさも有りなん、今は思ひの念はれ玉ひぬ、此上はさらりと思召御きり候へかし、輪廻のごう、ぐちのなせる所也、あこぎと云は是やらん、いかに何とか思召とまられかし、但又先程

に申つる言葉には、我々かくてあらんには、恐らくは世の中に、叶へぬものは候まじ、命にかへてみんと云ふ、詞をいひ捨候ぞや、まして此道の習にて、思切とまる事、中々ことばになりがたし、たとひ當座はさも有共、返すねんがさしおこらば、執着のきづなは、利劔にてもきられずと申事の候へば、此上は我々が存ずる旨を申べし、せんずる所は命を捨て思切、近衛殿の門外に、爰やかしこに立やすらひ、彼姫のいづかたへも、御出の折節に、中にてうばひ申べし、若もおさふる物有て、いかにばか、やるまじとをつかくる程ならば、我々五人の者共、太刀のめ釘のこらへん程、命をかぎりにふせぐべし、公家上らうのわかたうや、げはいのものが出たり共、何程の事かし出すべき、鼠いたちをおふごとく、ちり〴〵ばつと縁の下、ついぢのこ陰へおつこみて、なんなく姫を取りぬべし、若又のがれぬ者ならば、立並て押肌ぬぎ、腹かき破てしぬべき也、いかに面々御心中、きかまほしやと涼しくも、言葉をはなち申けり、五人の人々承り、誰もかうこそいひたけれ、よくこそ是はいはれたれ、うらみ此由きくよりも、忝き仰哉、生々世々にもつきがたし、但と申に此ことは、あらきにて候ぞや、それをいかにと申に、若もさやうに有るならば、姫に歎をかけ申、其上此事しり玉ふ、御かた〴〵迄いはれなく、ざいくわのせめをうけ玉ひ、うたてき事と成りぬべし、さあらんに於ては、我心一つにて、多くの人をころしぬべし、所詮我々一人が、むなしく成り候共、それは前世の約束、とても我等に御ねん比、御情ましませば、さいごの文をかき申さん、此文を松原の庄司がごけ迄とゞけてたべ、返々近付ぬ、念佛申給へ、此文は慥に屆申べしと有りければ、につこと笑ひしにゝけり、扨恨の介、雪のまへ殿を戀じにゝしてければ、日比むつびし四人の人々、なく〳〵野べに送り、即五條松原の庄司がごけに尋行き、此文をさし出し、しか〴〵の物語して、袖をしぼりければ、ごけも此由きくよりも、哀成次第哉、いとおしの心ねや、嘸こそは有りつらめ、無常の人の秋かせに、吹おとさるゝくずのはの、よをうらめしとなきけるが、しばし泪をおさへつゝ、頓て出立、近衛殿の御所に參り、雪のまへ殿の袖を引き、この由を云ひければ、ひめはおどろき思召、いかに〳〵と有し時、しか〳〵と申て、かたみの文とてさし出せ

ば、文取上げて顔にあて胸にあて、暫しは絶入る許にて、人心ちもなかりしが、少心を取なをし、文のていを見玉へば、あひみての後こそいとゞ物うけれ、昔はものを思はずや、さてうらめしの戀衣、泪のひまもあらざれば、ほしまもなしやよの中に、はかなきものは朝顔の、花の上なる露よりも、消安き身は石の火の、光にみゆるかげろふの、有かなきかの心ちして、よを秋風にうちなげき、むれゐしたづと別つゝ、只一人のみ有りそめて、かひなき流にしほたるゝ、あまの類ひにうち煙、はれやらぬ日はいづくとなく、歎きますだのますみにも、あれかしよはの空の月、ねぬよなく〳〵はしる人も、なき身ぞかなし足引の、山下水のあさましや、ながれ出にし古鄕に、歸らん事も思はれず、泪の川を渡るべき、我身ならねばさゝがにの、くもでにものや思ふらん、あふて思ひのやるかたも、うき世のはてはうれしけれ、君の情は忘るまじ、思ひ出づればさるにても、曉のことの葉の、忘れもやらでなつかしや、只何事もかごとをも、さきの世かけて有しゆへ、うきよを秋の葛の葉の、露と消行く恨のはて、哀れとも見よ無き跡の君、とかきとゞめたり、姬此文を見玉ひて、すゑをもさだかならざれば、くり返してをくをみれば一首の歌有り、

葛のはの露と消行うらわが身

ねみだれてみる雪の明けぼの

とかいて、あら〳〵昔戀しや、さるにても其名月のきぬ〳〵の、御うつりがこそいやましのとかきて、ことばなくて、

人しれぬ泪の玉のをのきれて

思ひくだけて散りはてにけり

必ず來世にては、一つ蓮の上にざし玉へ、南無阿彌陀佛穴賢とかきとめけり、うらめしの此文や、是々見給へあやめ殿と宣へば、あやめ殿は御覽じて、是は夢かや現かや、夢とも更にわきまへず、よそにてきくもかなしからん、ましてや雪の前殿の御事、誰故とかおぼさんと、思へばいよ〳〵そもじより、我こそ悲しくおはしませ、いとおしの人かな、あらいとおしと有りければ、雪のまへ殿聞召、御身さまの御事は、仰はさにて候へ共、みづからさやうに思はずや、一樹の蔭に立よるも、他生の緣と承る、いま始めての緣ならず、むかし量刧より、惡緣を深く結ぶと存ずれば、うらむる事も

更になし、又は我身のいたづらにて、なびくにても候まじ、久遠劫のあなたより、約束のあればこそ、觀音の御引付け、人のなすにて候はねば、來世こそめでたくおはしまさんとの給ひて、心づよくは有けれ共、今の別れの悲しさに、きえ入玉ふとみえけるが、すでにいきたえ玉ひけり、あやめ殿見玉ひて、是は夢かや扨いかに、なふ／＼と宣へ共、更に答もなかりける、庄司がごけ是を見て、あはてふためき取付、庄司に別し其時に、ひとつ道にと思へ共、此姫故にうき命、今迄もながらへしに、御身さへかく成り玉ふ物ならば、跡に殘て何かせん、いきて千年萬年を、たもつべきよはひもなし、夕べもしらぬ事なれば、我をも伴ひましませとて、西に向ひて手を合せ、念佛衆生攝取不捨との玉ひて、守刀を乳の下にかばとたて、うつぶし玉ふと見えけるが、息は則たえにけり、あやめ殿見給ひて、人と契るはさはなきぞ、女とは生る共、道をばいかでしらざるべき、あまつこやねのみことより、くはしよくにそなはりか樣の事、さも身にかけてなさゞれ共、此一まきと申は、そも我なす所のひが事也、いざや三づの伴ひを、我もせめてとの玉ひて、かたなを口にくはへつゝ、うつぶしに成玉へば、其まゝむなしく成玉ふ、かくて紅は、雪のまへ殿あやめ殿、ごけがしがい面々に、絹引かづけ何となく、心しづかにかいしやくじ、扨其後に我も又、守刀を取まはし、絹引かつぎ其したにて、胸にきつさき少しあて、かつぱとふせば限り有る、命は終になくなりて、むなしき形ぞ殘りける、何も未蕾花、嵐の庭にぞ散りにける、あやめ殿は十八さい、雪のまへ殿十六さい、ごけが年は卅三、くれなゐは廿一、朝の露ときえ玉ふ、かゝりける處に、あやめ殿のよはひ成る、同じ月日の年なみも、なれむつび玉ひたる、松の下殿の御局、我宿を立出で、音信かはす言の葉に、雪のまへ殿ましますかと、局に入て見給へば、人音更になかりけり、不思議さよと思召、おくの間を見給へば、薄衣かつぎふし玉ふ、おこさばやと思召、うすぎぬ引のけ見玉へば、あらいたはしや此人々、あけにそみたる御形、みな紅の御ふせい、こは何しにかくやらんと、急ぎ我局の友人々に語らんと、立歸まし／＼て、皆人に此由をかくと申させ玉ひしに、上らう高家の人々は、あはて迷て是はそも、いか成る事ぞとふためいて、局に入て見玉へば、何も替

る姿也、ふしぎといへる折からに、傍を見玉へば、こまやかなりし玉章有、是はいかなる文やらんと、取上てみ給へば、色々の詞をつくしにつくしてかきたりし、ちわ文のてにはもほしやと求めけん、心の程こそやさしけれ、かくて此しがいを見るに、泪もせきあへず、古の事かとよ、柏木の右衞門の、はかなく成し其跡に、女三の宮のあだ夢の、煙くらべと申とも、是にはいかでまさるべき、誠に一げ中道の車は、無二やく無三の門にとゞろき、鳥の林に遊ぶににたり、十二因緣もつて是にひとし、生々世々のおはり、誰かしらざらん、皆緣にふるゝごう有、あやうき事を觀ずれば、あぶなきと思ふさへ有に、黑白の鼠來りて、替る〳〵に此岸の額にねの淺き、草に取付きし我身のごとし、あぶの草のねをくらふ、爰をはひあがらんとするに、上に無常の虎の聲めう〳〵たり、けろん妄想の種つきざる處也、しかしたゞしかるべきと人を請じて、野べの邊に送れとて、黑谷より貴き聖をおろし奉り、のべのけぶりとなしにけり、哀也ける次第かな、爰にさる人申けるは、あまり珍敷情のしにやうかな、近き比は聞き及ばず、か程情のしにやうに、なさけのいかでなからまし、いざや葛のうらみの介、しがいのこつも有るならば、同所に納めよと、人々評定有ければ、尤とて人をやる、恨之助戀之介、何も是を悦て、是よりは申がたし、恨之介がしにかばねも、さこそうれしと思はまし、いざや我らも參らんとて、黑谷に行ける事、都にかくれなかりける、いとゞさへ都の習、少もの事も見物す、況んや此の事珍敷事なれば、我も〳〵と見物に、をとらじまけじと行く程に、黑谷山にじうまんして、雲霞のごとくのも山も、錦の色にかゞやきて、ときはぎ迄も色をまし、花と紅葉と此時に、咲匂ふらんとあやまたる、きせんの袖ぞ珍敷き、さる程に御さうあまた出させまし〳〵て、みめうの御法を說き玉ふ、其詞に云く、阿字本府生、空げ中道げゞ衆生、己身の彌陀、唯心の淨土、三ごうじいきの妄執は、せつな一ぞくにせうめつす、何をもつてかごうとせん、然るときんば成等正覺頓證菩提、うたがひなからざらん者也、とつ、南無阿彌陀佛と宣へば、廿五のぼさつ聖衆も、爰に來迎ましますかと、有りがたく覺えし、斯て見物きせんの人、皆々空をながむれば、三尊影向ましましけん、こくうに音樂聞え、せんだんの香の匂ひ、

いきやう薫じ、けざうかいの風に和し、天にかゝやき地にみちて、ごくらくせかいもかくやらんと、思はれける折節に、五色の雲のそのうちに、人々の俤もくせんにあらはれて、西の空のうき雲に、あがらせ玉ふ御事は、なふ〳〵あれはありがたし〳〵と、うばたゝなどはそでを引きかたをひき、うらやみてなみだをながしけり、みる人きく人おしなべて、上古も今もまつ代も、ためしすくなき事どもと、かんせぬ人はなかりけり、

うらみのすけ下 終

寛文四甲辰年三月吉日　山本九左衛門板

七人びくに上　一名さんげ物語

貞和年中の比、無明の酒にゑひ、ほつしやうの空に、つねならぬ風の狂する、亂氣亂滅の花をながめ侍りしに、ある友となんつれ、信濃國善光寺へまいり侍りしに、宿のあるじのかたりけるは、此所にめづらしき事なんあり、かたりて聞せ申べし、此とし比心ざし人にすぐれたる尼一人有、常は如來の御まへにまいり、きやうしゆ念佛申て、年月を送り侍りけるが、一切の人の愁を聞て、我身のうへとなげき、人の悦をみてはともによろこび、打をくことの葉に付ても、やさしく侍けり、或時この尼つら〳〵思はれけるは、うけがたき人界に、生をうけたりといへ共、まう〳〵ばう〳〵として、きのふも過、けふもはせ過侍る、あらかじめ心をしづめて、來世のくるしみを思ひつらぬるに、歎きてもなげくべきは、生死のちんりん、はげみても又はげむべきは、しゆつりのはかりごとにこそ、いかにもして、菩提のたねをも、うゑんと思ひけれ共、しゆくじうのやぶさかなるにや、まづしき身にて侍れば、せめて薪のあらん所をたづね、湯をわかし、貴賤の人にほどこし、煩惱のあかをすゝがせ、菩提の種にもせんと思ひ、然るべき所をたづねければ、おなじ國のせき川と申所ぞ、水木のたよりあり、しかも旅人の往來の道也とて、湯やをたて、湯擗待をぞはじめける、去程に五畿七道の貴賤萬民、善光寺へあゆみをはこぶ人々に、もらさず湯をほどこして、みづからあかをかき侍りける、しかる所に、年のほど三十ばかりの尼、善光寺へまいりて下向の折ふし、此の湯に入りて、その夜はゆやをかりてぞとまりける、小夜更がたに此あま、あるじの尼公にとひけるは、抑〻此湯の御慈悲は、有がたき御事にこそ侍れ、いつより思ひ立給ふぞや、あはれ〳〵この御りやくを、我々にもはぶき給へかし、もろ共に谷の水を結び、峯のたき〻をもひろひて、あまねくけちゑんをもし侍らんと申ければ、いとうれしくこそさふらへ、いかなる人の、いかなる御慈悲のおこり候やらんと、隨喜の思ひをなし、御わたり侍らば、御心のまゝにてこそ候べけれと申されければ、かの尼なのめならずによろこび、とも〴〵に湯をぞわかしける、しかれば後に來り給ふは、今阿彌陀佛

と申、あるじの尼をば、古阿彌陀佛と申ける、此ふたりの尼、ひとり水をくめば、又ひとりは薪をとり、かくのごとくなんぎやう苦行しけれ共、慈悲ふかゝりしゆえ、露程もうらめしき心ちも侍らざりけり、又長月廿日あまりの事なるに、比丘尼四五人、旅のくたびれに此湯に入りて、又此あまのすみかに宿をかり給ひけるを、秋の夜の事なれば、明かしかねたるはにふのこやのならひにて、さこそものうく侍らめと、あるじのあま、うちしめりたる心ちにて、いたはり思ひけるに、かうたけ、なを、なるしの山の端に月きらめき、いたまより影さし侍りけるも、こゝろすごかりければ、ある比丘尼何となく、

我によも月見よとてはふきさゝじ
こよひかりねのわび人の庵

と口ずさみ給ひければ、又ひとりの比丘尼かく、

板まもる月は見つべしさてもさは
こゝろの闇のいつかはれまし

またあるかたよりも、一首かくなん、

板間もる月のひかりの何とてか
心のやみをてらさゞるらむ

此うちに、六十ばかりの尼、是を聞給ひてのたまひけるは、誠になげきてもあまりあるは、心の闇にてはんべる、心の月明らかなりといへ共、一念の雲あつくして、生死のちやうやにまよへり、みづからあるちしきにとひ侍りしに、一すんの光陰をおしむべき事は、千金にもかへがたしといへり、まことにおしむべきは、一寸の光陰なる、

徒らに月日はすぎずいたづらに
人こそすごすつき日なりけれ

とありしかば、あるじのにこう此よしを聞きて、まことに心ざしふかき人々かな、かやうの人に近付て、一大事のようじんをも、とひ奉らんと、あひのしやうじをおしあけ出あひ、かやうにあさましきいほりに、御やどり侍る事のいとをしさよ、しかれ共、宮もわらやもはてしなければと申す歌も侍る也、たゞ一夜の夢と思しめせ、是は路次の御事なれば、あまたの人々、此ゆに入給ひつれ共、いまだかやうの旅人にあひ奉らず、みな〳〵一大事を歎きおはします、其ふせい、やさしくみえ給ふものかな、いかなる人の北の御かた、誰人の御むすめにて侍るやらん、何ゆへかくなり

給ふぞや、皆々あまりに御さびしく、すさまじき折からにさふらへば、さんげ物語などし、秋の夜の長きをなぐさみ給へかしと申されければ、老いたる比丘尼仰せけるは、いとやさしく侍るものかな、ざいしやうさんげせざれば、罪ますへふかし、みなへさんげをなして、罪をほろぼし給へ、ことに女の身なれば、心にものをねたみ、まんのはたほこはげしく侍れば、一だいの經綸には、あまたゝびきらるし身にて侍る、しかのみならず、あるじの望なり、かれ是もつて、中々とこそとうけし、然るべしと申されければ、次第々々に、さんげ有、皆たゞならぬ人々の、身をなきものになし給へる御事をしるし侍れば、七人比丘尼のさうしとぞ申ける、

〇しら菊の事

此時わかきかたより、御物語侍れと有ければ、卅許の人の申されけるは、いにしへの事申せば、はづかしき御事なれども、みなへ御物語侍らばみづから申べし、わらはは、もとは丹波國、遠山の修理と申なにがしの娘にさふらふが、一たびみやこにて、六波羅殿のいくさにうちもらされ、國々里々浦々をへめぐり、みづからをひさげ侍れ共、なすべき事もさふらはで、終にまづしき身となり、東の洞院の遊女となり、名をしらぎくと申者にて侍りし也、其折ふし名をゑたる歌人にて、そつのあきたゞと申人、四十あまりにわたらせ給ふ人侍り、みづから十九の秋の比よりあひそめ、心ざしあさからず、偕老どうけつのちぎりをこめ侍りしに、或時このおとこ、ゐなかへ下る事の候ひしに、みづからは、ながれをたつる川竹の、うきふしこの身なりしかば、そのゝち、又みのゝ國の守護代の子に、土岐の金五としあきと申人に思はれ、かの國へつれて下り侍りける、此人は今はたちあまりにて、萬心やさしく情ふかく、世にならびなき人なり、此人に思はるゝ身を、人々うら山しく思はずといふ事なし、されども、古しへ人の事、思ひ忘るゝ隙もなく侍りしに、かのそつのあきたゞ、ゐなかより上り、みづからをたづね侍りしに、あたりの人申けるは、其人は常に君の御事をのみ仰られしか共、色ごのみのならひなれば、みのゝ國へと語りければ、此男さては命のうちに今一たび、しらぎくのかたにみゝゑん事有がたしと、明暮此事をのみ、思入りえのよしあしを、なには

に付けても、かたりなぐさむ友もなし、ひとり心をつくば山、しげき涙の袖の露、いつかわくまもなきまゝに、うわの空なる心地して、たゞいつとなくあづまのかたを詠つゝ、忍ぶ心も今はゝや、色に出づる許也、しかる所に、みづから召つかいたるわらはに、介のつぼねと申せしは、是はみやこにとゞまりしが、彼いにしへ人の有さまをつく〴〵と見侍り、哀れに思ひて、かの御事忘れ給はぬか、それほどたへこがれ玉ふならば、文給はれ、此よし申さん事、いと安き御事なりと申せしかば、この男おろかなることをの給ふものかな、流れをたつるならひ、たゞかりそめの契りなれば、などかかくといふべきと、打なみだぐみて、きぬ引かつぎふし給へば、介のつぼね申けるは、かのしら菊の御かた、みのゝ國へ御下りの時、みづからをめして仰侍りしは、女の身といひながら、ことにつたなげなるながれの身にて侍れば、たゞ一すぢの心も心ならず、今一たびはとおもふ心もよしなく、宿のはからひとて、かやうなるぞやと、かきくどき宣ひしぞや、其の御言葉のすゑに、もし君上り給はゞ、我は忘るまじ、ことの便もあるならば、いよ〳〵忘るまじと、かきくどき御かたり候ひし也、それ程の御思ならば、ただ文を給はれと申ければ、さらばとて、文をぞ給はりける、さて助の局は、人の思ひをやめんため、また久しくあひみぬ君にもあひ奉り、つれ〴〵の御物語をも申さん事のうれしさよと、大津のうらにて便船こひ、しなのうらはあがり、急ぎみのへぞ下りける、すこしためらひ、さる人をたのみ、出あひ侍りしかば、みづからあまりのよろこばしさに、嬉しなきに涙をながし、何とて下り給ふとたづね侍れば、是々のしだいとて、即ち文をさし出しゝかば、夢とこそ覺ゆれとて、文を見侍れば、その中に色々のちりつもりぬる言の葉を書給ひて、おくにかく、

東路のみのなる花にちぎる共
　なれし老木のかげな忘れそ

と此文を見しより、涙にくれふたがり、きぬ引かつぎ臥まろびしを、としあきつく〴〵とみ給ひて、いかなる人の事を申來り侍るぞや、但し父母のいかにも成給ふやらん、何とて我につゝみ給ふぞや、御かたりもなければ、いかさま心のおくふかく、思ひのへだても有ぬべしと、あながちに尋ねられしかば、つゝむとす

れどつゝまれず、さては是もみな、たゞさきの世のふかき契りのはてやらで、あさまのたけにたつけぶり、たちわづらへる心ちして、身はいたづらになりぬ共と思ひ定め、顏に紅葉を打ちらし、面目もなき事なれ共、いにしへみやこにて契りし人のかたより、文下りて侍るとて、かの文をとり出しゝかば、男まづ文をみんとて、いかる氣色もなく、つく〴〵とまきかへし卷かへしみ給ひて、案じわづらひ給ひけるが、何とか思ひ給けん、はら〳〵なみだをながし、思ひ切たるさま色にあらはれ、よしや今までの契りなるべし、流れをたて給ふならひ、何かくるしく候べきとて、かくなん

　行きて見よ都の花のちらぬまに
　　あづまの春はとにもかくにも

と讀て乘物をこしらへ、都へいそぎをくりける、あかぬいもせの川水に、身はかしは葉のうきふしに、かくほど迄は有べしと、夢にもさらにおもほえず、ひねも◎そにてうあひせられし身なりしかば、それを賴みに思ひつゝ、いかなるともとは思ひしに、男の心つよければ、二たび悔いてもかひなし、のぼらで叶はぬ身也とて、介のつぼねと打つれて、美濃國をぞ立にける、いくたびなみだをながし、跡にとゞまる便もなければ、程なく五日といふには、都の宿へぞ上りける、さて介の局まいりて、今御上りと申侍りしかば、いかに御悦び有て、我をも嘸心ざしのやさしき者かなと、ほうろくもあるべしと思ひしに、案にさういして、顯忠のたまふやう、いとゞ老木の華の色さへおとろへて、昔にも似ぬ我すがた、見えん事もはづかしゝ、其うへあづまのあた人の、かほどに志まし〳〵て、あかぬ別れのありつるを、思ひしらでもいかならむ、あづまの花を殘して、都への御心ざしは、なか〳〵鳥ならばひよく、木ならばれんりの枝とは思へ共、などか逢奉るべきと、世中のぎりをおもんじ給ひて、かく御かへり事の侍りしかば、はぬけ鳥の立わづらふごとくにてぞありし、此おのこも、しかは宣ひつれ共、かねてよりの御したしみの事なれば、むねのうづみ火消やらで、終に此事をのみ、とやせんかくやあらんと、思ひにあこがれ、やがて又の年、戀のやまふとなり、終に空しく成給ひけり、此人の常の思ひを聞侍りしに、中中我に秋風ふかね共、嘸々わが思のごとく、又吾妻の人もおもふらんと、人のうきめを、我身のうへに思ひ

あて侍るど、常々かく聞侍れば、さては我が身もいかならん、うき世をよそにならさかや、このてがしはの二おもて、みるよしもなし、たゞひたすらにさまをかへ、なき人のぼだいをとぶらはんと思ひ、かやうに成てさふらふと語ければ、年たけたる尼聞給ひて、かやうにやさしき心、三人おなじく侍る事よ、あづまの殿は、世中のならひなりせば、此都よりの文など見給はば、けつくねたましき心出來、邪慳のつるぎをぬき、いよ〳〵あひ念ふかゝるべきに、しかのみなず、都の花のちらぬまと、あわれみ給ふ事、今の世には侍らじと思ふなり、又都の人は、是ぼとに命を失ひ給ふほどのことなるに、うき人にあひもせで、人を恥ぎりを思ひ給ふ事、よもおろか成心には侍らじ、よの常の人ならば、よしなきにたはぶれの言葉のするにも、御身はまだき吾妻の若木の花に心有て、老木の花を見すつるかなどゝ、よしなき事を申共、よもかほどに思ひきらん、又御身も、ながれをたつるならひなれば、又いかなる人になれ、さながらかの都の人には、あだを結びて文を賴て上りしに、いかに御心の誓ひ給ふぞや、それ程に思しめすならば、あづまにもとまるべきにと、女のうたでさは、ほのふをいだき上、明暮うらむるとも、よもかくは思きらじ、百々の代々にもまれなるに、御身のかしこく、是をぼたいの種として、出家し玉ふ事、くり返し〳〵、有がたくこそ侍れ、昔より今にいたる迄、みなうき事をゑんとして、後世のたねとは成候へ、定めて三佛道淨の、さとりをひらき給はん事疑ひは侍らじ、

○左京の御臺

さて年比、三十餘り四十にかたぶきたる尼、みづからも、もとは都一條のものなるが、人界のならひとて、ふうふのむすび、あさからず侍りしに、此の男年月をふるといへ共、一人の子のなき事を歎き侍りし、しかはあれども、みづからはかつて其心もなく、明暮うき世のあだなることを思ひ、後の世いかにと歎き、秋の夜の長きも、夜もすがら無常の心身にしみ、かれ〳〵すだく蟲のこゑ〳〵迄も、我身のうへに思ひやられて侍りしかば、神佛にもうでゝも、あはれ菩提心もおこり、うき世の世わたりを、おもひはなるゝ身となる事をのみ、祈りさふらひしに、世にふるならひとて、いとしもなく覺え侍れども、ふうふのかたらひ成し

ゆへに、ひとりの男子をまふけしが、此子常ならず、容顔びれいなるうへ、心もおとなしく、さかしきまゝに、いたいけなるこゑをし、父母にいだき付、おとなしやかなることのはをのみ申侍りしかば、もし此子年比にもなるならば、いかなるものにもなるべきほどに思ひ侍ひけり、みる人ごとに玉をのべたりといふ共、是には及ばじと申ならはしゝぞかし、父のいとをしみ、中々申に及ばず、てうあひのあまりに、四さいと申冬の暮に、鶴といふ鳥を、父手づから切て、くはせんとし侍りしに、折ふしまないたのさきに此子侍りて、戯れあそびしが、はうちやうのつかぬけ、おさないものゝむねにがばとたち、うしろへとをる、此子いたく驚き、こゑをわつと上げ、父のいましめかと思ひ、今より後は、鳥などにも近づくまじ、あしき事をもすまじ、あひにくをも申まじ、萬仰のまゝになふ父御と、手を合せこゑを上て泣入りつるを、はしりあつまり、色々命のとゞまるよそほい、都にても四方に聞えしほどの、名醫師をあつめ侍れ共、なく聲もほそくなり、次第々々によはり、あぶら火のほそくなるごとく、神佛の祈も叶はず、終にあけの曉、ふたりの手を取り、ねぶれるがごとくしておはりし也、かく有りければ、ふうふもろ共に、きも玉しゐもきゑはてゝ、天にさけび地に歎き、人めもはぢも打すて、まさしく狂人の心にて侍りしに、父は暫くためらい、涙もながさず、みな過去の定まりたることにこそと、みづからにちからをそへなぐさめ、物をも宣はず、かいねぶりたるやうにておはせしが、我らすこし立ちまはり侍るすきまをみて、かのはうちやうにて、自害せしほどに、こはいかにと、みづから手に取付きけれども、かねてより思定めし心なれば、又同じやうに、心もとよりうしろへとをり侍れば、せんかたもなく有しほどに、やゝ日をへて、みづからが行衛などいひをき、三日といふ夜半の比、終にむなしく成りし也、あまりのうさに、其かたなにて我も共に、一かたならぬ思ひに消はてばやと思ひ定めしに、ある人來て宣ふやう、御みの心おろか成ものかな、二人の人をたれかとぶろふべき、それほどに思切り給ふ身ならば、おもひ切るべきやうも有なまし、又かの人々をすくひ給ふべきやうも有りなん、おなじ枕など思しめすならば、くれぐれとまり給へかしといさめられ、それはげにくく

是も道理のさす所也、とうほうの智識など〻申は、是ならんとて、又その力にてもとゞりを切り、賀茂川におしながし、猪のくまの法印をたのみ、出家し侍りし也、しかはあれ共、二人の事のいまだおもかげに立ちそひ、まどろむ隙もなく、かの男かのおさないもの〻姿、まみえしゆへ、さてはさまをこそかへぬれ、心はあいしうふかきと思ひ、色々の修行をなし、殊更女人の身にしあれば、法華經一部よみ覺え、三寶を供養し奉り侍りし也、と申されければ、老いたる尼宣ひけるは、是はまさに、觀音の三十三身に身を顯じて、子となり妻となり、つるとなり、一切の衆生をすくひ給ふらめ、法華經の心をひらき見侍れば、じやけんの父をすくはんため、しやうとくぶにんといふ后となり、じやうざうじやうげんといひし二人の子と成、十八へんを顯し、父のわうをすくひ入て、めでたき佛となし給ふなり、此の心を見侍れば、御身の妻となり子となり、鶴となり給ふも、みな菩薩のけだうのてだてならずや、あらたのもしや、うら山しうこそ侍れとて、皆々ずいきし給ひけり、

○花かづらの事

さて四十あまりに成ける尼、みづからも、もとは都のもの也、父は北面の何がし、のりゆきと申もの〻むすめ、はづかしながらも、花かづらと申せし女にて侍りける、ことのゑんあるによりて、遠江國の住人に、おくの山と申、武勇のものと契り侍けり、此人と契りそめしより、しせきのまをもへだてず、一時もはなる〻事もなし、月をそねみ、花をねたむ心ちのみにて、互に月日のたつをも分まへ侍らず、明しくらし侍ひしに、もの〻ふのならひなれば、契りし君のつくしのたんだいになり給ひて、既に鎮西へ御下り有つるが、彼の奥の山も御供也、此事聞くより、人の物いひはんべるも、さながらよそになり、たがひに涙にくれふたがりて、いかならんと歎き侍れ共、主君をもちたるならひ、又はもの〻ふの妻故と、沙汰せられん事を恥ぢ、せんかたなく、涙ながらも、みやこを立給ひけり、朝なゆふなのきぬ〴〵にも、別れとなればかなしきに、ましてはる〴〵遠きつくしのはての、長たびなれば、いつ歸るべき日もしらず、しかも又いくさにおもむく弓取の、命を露にたとふれば、風のたよりも賴まれず、又我身も明けくれ思ひにしづみなば、戀のやまふ

と成りぬべし、しかあるならば君もろ共に、定めなきうき身、いかゞと思ひつゝ、打ちつれゆかんとしたへ共、さながら人めもいかならんと、とゞまりゐるこそかなしけれ、此人も心はさきへ行きかねて、思の色のますらをが、はとふく風のあきくれならね共、とゞめかねにし旅の空、なみだと共に立出て、その日は山崎までこそ下りけれ、何と思はれけるやらん、道より人をかへし、國靜かになるならば、迎ひの人を上すべしと、みづからをなぐさめ上せ侍りしが、其後は風の便もなきまゝに、明暮心をつくしがた、ながめがちにてくらしけり、さて又のとしの秋の比、常にめしつかひし、豊田の三郎と申ものを上せ侍りし、みづから心も心ならず、まづ西國の有樣をいかにとたづねさふらひしかば何事もなく肥前國ちかくと申所給はりて候しが、いまだ國おさまり侍らね共、御事をのみおもひ、明暮ふかく思し召候へば、御むかひに上りて候とて、文をこそさし出しけり、うれしさ限なく、やがて豊田とつれて、ならはぬたびとは申せ共、なれにし人にあはんため、心のうちのよろこばしさに、心ならずもいそがれて、はやき船をたづねつゝ、急ぎ筑紫へ下りけり、廿日あまりに成しかば、筑前國ぎふといふ所にとゞまりて、まづ事のやうを聞侍りしに、宿のあるじ、いかなる御かたにて候やらん、此程のいくさのやうを御物語申て、旅のつかれをなぐさめ申さん、此比たび〳〵の合戰に、かみがたの大將うちかたせ給ひて、此程は敵の人々、行方しらずなり侍りしゆへ、ちかくに城郭をかまへ、大將はせぶり山に御わたり侍るが、又敵大軍をもよほし、此四五日城郭既にかなひがたく候つるにより、大將軍は五千よきにて、きのふせぶり山の御陣を御たちあつて、けふあすに定めて矢合有べしと申侍りければ、みづからはいかなる事やらんと、胸ひし〳〵と打さはぎけり、まづ豊田をつかはして、是まで下りたる由を申をくりける、扨そののち三日と申す暮ほどに、豊田色をちがい、五ゐんもかはり、此文御らん侍れとばかりにて、涙にむせびて物をもいはず、申べきやうなしとて泣ゐたり、みづから餘りのおぼつかなさに、文をみんとせしに、又かどの外あらけなくさはぎ侍りしかば、いかにと驚きたち出みれば、乘物一つかきゝたり、あまりのふしんさにはしより、すだれを上げ見侍れば、空しきしがいを

入れてぞ來りける、是は夢かうつゝか、かくはる〴〵下りぬるも、一たびは見えん事のうれしさに、うき旅衣よそにして、下りし事のかひもなく、情なき御事かなと、そのまゝ死がいにいだき付、うらみてはなき、泣てはうらみ、人めもはぢも思ひすて、かきくどきて死がいもはなさゞりければ、宿のあるじ、先そのごとく御歎き有てもせんなしとて、我にとり付、死がいをもぎはなして侍りし也、此時豊田なく〳〵申侍りけるは、きのふの暮ほどにまいり付、御文を上侍りければ、御悦び中々なのめならずまし〳〵て、殿の給ふやうは、あすの卯の刻に、いくさばへ出る也、みやこよりの御下り返々嬉しくこそ侍れ、くはしくは此の文にと仰有りしか共、御陣の事をもきかまほしかりつるほどに、暫らく逗留し侍れば、陣中ことのほかさはぎ候ひしゆへ、むね打さはぎ聞耳たて侍りしに、敵御陣へかけ入たり、用意ありやとよばゝりける、けふの矢合は、御敵二萬餘騎、三手につくりてをしよする、味方はわづかに五千よき、是も三手に作りたゝかはれけり、辰の時よりはじまりて、申の時までのたゝかひ也、おやうたるゝを子もしらず、子うたるゝも親しらず、入かへ〳〵たゝかひしに、ちかくはひろしといへども、人馬のしがいに所もなくみえしなり、是迄は給はず、一人かけぬけて、大勢の中へわり入給へば、大將軍仰有けるは、あたらしきものゝふ也、あれうたすなとのたまへば、五百餘騎くつばみをそろへて、大勢の中へかけ入ば、敵むら〳〵ばつとなり、二方へ引しりぞきしに、味方一所に打よりて、軍ひやうぢやう有けるに、さておくの山殿はみえ給はぬが、いかにと沙汰有けり、かたはらよりさぶらひ一人出て、奥山殿こそ松浦がおとゝと、くみ給ふとは見侍れ共、あまたの猛勢にをしへだてられて、行くかたしらずとかたり侍りければ、さて〳〵せんもなき事かな、御最後のせんども、みぬ事の口惜さよと思ひ、其まゝ走出、まつらが陣へぞ急ぎける、然る所に案にもたがはず、奥山殿の母衣とみえて、松浦が陣所にありしかば、大おん上げて、いかに申べき事の候、是は奥の山が內、豊田と申者にて候、奥山殿の御事を承り侍れば、是まで參りて候と案內申ければ、いかなるものぞ、おくの山どのこそ、是に御入候へと、申されければ、さてはい

まだいきていませばこそ、あふべきよし仰せありけめ、あら悦ばしやと思ひ、急ぎあひ奉り侍れば、いたはしや、おもふにかひなく、大事の御手にてましませば、御枕に立より、いかに〳〵と申せ共、さらに物をもの給はず、くるしげに我を見あげ給ふほどに、などか御よはり侍るぞや、豊田にて候、御心をつよく御もち、一たび都のかたにも御見參候へと申ければ、此時くるしき御息つぎにて、人の命はしらぬものかな、かく定めなきうき身とて、はる〴〵都へ御身を上せし事の口をしさよ、うき人にかやうにうきめをみする事、何より口をしけれ、ふかでとはおもへ共、もし二日三日も存へば、いよ〳〵思ひはますかゞみ、みるめもさらにはづかしければ、急ぎ首をば討給へとて、くるしげに宣ひければ、人手にはと思ひしほどに、松浦殿にことうけし、某御首を討侍りし也と、いふよりそのまゝ涙にむせび候ひし也、さて此御文を見侍りしに、いたはしや末しら雪の消えぬべき、ことをもしらぬ身なりしを、四五日の中には、かならず〳〵見參と書とめ、返々とかゝれたる、文のこと葉のむなしくて、書をく文の數計、みるにも涙まくにも涙、是はたゞ夢ならんとのみかこちける、さてしも有べきにあらずとて、煙になしてみづからは、もとゞりを切り、此十七ヶ年があいだ、かやうに諸國をめぐり侍ると語りければ、老たる尼仰けるは、誠に佛のちかひにて、女人は五しやう三しうのきづなとて、おそろしき惡業ふかき身也しかば、眞如の月晴れがたく、無明の闇にまよひ、生死のぢやう夜を家として、二十五有を車の輪のごとく、くるり〳〵とまよひ、佛法僧の三ぼう、みちみてりといへども、ゑにかいても、しうがくするわざもなく、必ずあびのほのをにむせび、しぼむべき身也しを、すくい給はん、佛の御てだてなりけるにこそ、妻となり給ひて、其よそおひをしめし、御身をすくひ給ふらめ、あひかまへて〳〵、出家の人、たうまちくいのごとく多しとは申せ共、道心ふかき人は、まれにて侍るなれば、是を菩提の種として、七世の父母も佛となり、きうぞく天に生ずる事、うたがひなかるべしと、皆隨喜し涙をながし侍りけり、

七人びくに上 終

七人びくに中　一名さんげ物語

○兵部の御かたの事

さて四十にあまり、五十にかたぶきたる尼、打ちわらひて申されけるは、みづからは、もと宇治の里に、しる事ありしものにて侍るなり、みづからは、別してさんげ申さん事もなく、世をうらみ、人をかこつわざもあらず、めん／＼の御物語のごとく、思ひなげきの道もなし、唯つら／＼世間のありさまをみるに、盛なる花も風にはもろくちり、千里のかげもかくやと詠せし月影も、曉の雲にかくれ、いかなる王位、世のほまれとりたる人も、たゞ一時の、夢のたはむれとなり、まづしきもうときも、とゞまる事のなきは、みな世中のならひ、きのふ生れしみどり子、けふはなき身となり、よろこびいはひ侍るその日の暮がた、はや歎きかなしむ事のみまなこにさへぎり、目のまへに侍れ共、おどろかぬ事のむざんさよ、かゝるあだなる身をもつて、われといふべき身ならぬに、我をそしるものをばねたみ、我にしたがふものをばゑみをふくみ、一切の御をしへに、自他のへだてなしと、つね／＼聞侍れ共、善惡のじやうぢうをたち、こと／＼くりんゑのまよひとなれり、此ゆへに來世には、十王のさんだんにあづかり、せうねつ、大せうねつ、けうくわん、大けうくはん等の、地獄をすみかとして、出る期さらになし、うたゝにむけんのおろかなる事は、かいこのまゆを作り、つゐにはをのが身をやくに異らず、はかなかりける人界かな、一たび人身をうくることは、一眼のかめの、うき木の穴にあふよりもかたし、たとひ人界に生れても、佛法にあひ奉る事かたし、たとひ佛法にあふといへども、大乘にあひたてまつる事かたし、身はあだし野の露ふかみ、風吹ぬまの賴なりと、思ひよりて一度出家をとげ、生死のくりんをおどり出で、彼岸につき奉らむと思ひ入、夫婦あひよくのきづなを、はら／＼と切すて、父母諸共に後世菩提を、いのらんとおもひ侍りし也、

流轉三界中　恩愛不能斷
棄恩入無爲　眞實報恩者

といふ文にまかせ、夫にいとまをこひ侍りければ、ゆるす事なかりし也、あまりの心うさに、今はたゞいか

にもして、うとまるゝはかりごとをめぐらしてと、思ひ候ひしまゝに、髮をもけづらず、顏をものごはず、はをもくろめず、手足の爪などをも、切りもあけず、みるもうたてく、かたまゆ、いやしきさまをのみし侍りしかば、神佛にまふでゝも、此事をのみいのりさふらいしなり、あるときにし山東山、京洛中の、あさましき乞食を見侍れば、をしからぬ命をたすけんとて、往來の人に物をこひ、こゑ〴〵によばゝるふぜい、なる神のごとく也、あるひはいざり、或は目見えず、或は顏の三病なるもあり、或はこもといふ物を、むねにあて侍るあり、是れはさて、いかなる過去のむくひにて侍るぞと、ちしきにとひ侍れば、因果經の心をみれば、みなこと〴〵く、ゐんぐわれきせん也、ひんぐう乞食の飢ゑたるものは、さきの世にて人に物をあたへず、財寶に常住の思ひをなし、佛法にゑんをむすばざるむくひ也、盲目啞なんどのやからは、さきの世にて、めをくらませしわうわくの心なり、耳のきこへざるたぐひは、經論說法といへ共、世界のいとなみのみにて、一時片時も隙をおしみ、月見花見のあひのみをば、物うからず、一期くらせしむくひ也、かくのごとき人は、まんごうのしやうにも、うかみがたし、

欲知過去因　見其現在果
欲知未來果　見其現在因

との御法、まことに〳〵、たなごゝろのうちにみるごとくにて侍る、かくのごとく、つく〴〵思ひて、明暮いかにもして、男の心もなをり、いとまたび給へかしと思ひ侍りけれ共、其心なかりけり、或時は、たとひゆるす事なきならば、もとゞりを切すて、枕もとになげをき、いかなる寺へも、はしりいらんと思ひしかども、けつく、思ひもよらぬてらはやしへ、うらめしきさまたげなどゝ、思ひわづらひて有つるが、あまりの心づよき男なりとて、先北野へまふでゝ、後世の道をいのり、男の邪慳をひるがへしたまへときせいし侍り、下向の折ふし、道のそばなる草村の中に、されたるかうべのありつるを、つく〴〵とみるに、始て驚くべきにはあらね共、目もぬけ、はも所々にて、さながら、おとこ女の、かたちもみえず侍りければ、

皮にこそおとこ女のいろもあれ
　骨にはかはる人かたもなし

とは唯是れならん、さていつの日のいつの時、みづか

らもかくならん、東の山の端に日も入り、天は地に落侍るためしもし有共、などかされたるかうべとならざらんと思ひて、此されかうべをたもとに入れ、わがやに歸り、其夜おとこの臥たる、まくらのもとに置侍りし也、暫有てねざめのむつごとに、男の手をとりて、枕のもとに置きたるかうべをさぐらするに、こはいかにと、さはぎおのゝき侍りつる時、あまりに驚き給ひそとて、又手をとりてみづからがかほを、よくよくさぐらせていふやう、いづれかちがひたるぞや、たとへば、きぬはりたると、きぬはらぬとのちがいなり、ゆめ〳〵、我に執心し給ふことなかれ、いかにふうふにそひぬるとて、いくほどもなき契りなり、又二世とはかねたれども、われ人、過去のごうゐんにひかれ、きやくしやうそくはうと申す事侍れば、などか來世のみちひとしく、同じ蓮となりさふらふべき、あひべつりくのことはり、ゑしやぢやうりのならひの御事なれば、君も菩提心をおこし給へ、妙智大師は、しよくしよゐんとんよくいほんと釋し、なんざんは、四百四病は、しゆくじきをもつて根本とし、生死の流轉は、女人をもつて其源とすと宣へり、とかく御身も、此たびうかみ出給はずは、いつうかみ給ふべきや、さあらずば、御みはいかなる人にもなれ給ひ、みづからがごとく、うるはしくあひし、わがためのけごのちしきとなり給はゞ、かみそりこぼし、うき世をすて、こつじきずたの身となり、心をしづめ寺々山々、思ひのまゝにまふでゝ、一大事を思ひ入たらば、何事かおもひはんべらんと、手にとり付き、終夜あながちにかこち、しやくりもあへず、涙ながらに、くどきことはり侍れば、此の時おとこ申されけるは、我も岩木ならねば、などか此年比のふるまひを見侍らなまし、いかに女の身として、一たんの菩提心おこるとも、終にはやがてことの緣によりて、さめ侍るべし、こゝに物語のあるをかたつて聞せ申べし、此の比みやこにて、世にさかへ、御身とわらはがごとく、ふうふめでたかりしを、そのおとこ、何とか思はれけん、浮世のあだなることを明暮歎き、後世のいとなみをのみ、ふかく思ひ入、たび〳〵女にいとまをこひ、終にはもとゞり切り侍りけり、あまり道心ふかゝりしまゝ、一切の五こくをくらはじ、五こくといへるは、すきくわのさきにかかりし、むしけらをつきゝりて、斯ていでくる五こく

也、しからばゆいては、殺生にも成ぬべし、又はゑんばいのあいみとなりなば、くふうのさはり共成ぬべし、しかのみならず、なんざん大師は、一飯のよねは、またあぶら一はいの、身苦によるとのたまへり、かくのごときの、もろ〳〵のわざなる五こくをじきし、いたづらにくらさんよりは、たゞもくじきをと思ひ入り、木のみ、かやのみばかりにて、月日を送られければよにもてなし侍る事、なのめに過たり、後には木食の御房とも、又はもくあみだ佛とも申ける、しか侍るゆへに、此事天下にかくれなくありつるが、何とかしつらん、心もよはり、年老ぬるにしたがひてやらん、木食もけだいがちにぞなり侍りし時、此木阿彌に、もとなれにし妻問て、誠に末世の佛にて侍る物をと思ひ、此御房を折々毎にとぶらひ、こまやかに、次第次第にたびかさなりて、時々ふることのつれ〴〵をもかたり、そでをしぼりしが、あまりのしたしみふかくなるまゝに、過去しゆくじうの、いまだはれやらぬにて、終にはもろ〳〵見にくしなどゝ沙汰せしことあらはれて、こゝにふうふのかたらひ、二たびありしかば、人々あざけり、京洛中の物ざたにて侍り、たゞもとのもくあみとは、是より申ならはせしぞかし、是のみならず、世中の有様をみるに、人々あまた道心おこし、はじめの程は、誠に木食草衣三衣一鉢の姿にて、生身のらかんとも、いふべき人々侍れば、後々には、けさ衣もなげをき、當世のはやり歌、ちご若衆をあつめ、佛經しやうげうをば、ほこりにうづみ、酒さかもりの人あまた侍りつるもあり、又は一向にざいぞくとなり、うき世中の笑草、くやし入道などゝ、沙汰せられし人多く侍れば、御身にはなるゝのみの哀しみにあらず、しかしながら、女の身にて、一たんの人のしめしを聞き、あさ〳〵と思ひ立給ふ共、智恵よりおこらぬ道心なれば、ふつにとつぐまじとおもひ、立かへりては、御身の爲なれば、いかにも思ひ切り侍らぬ也、あるもんに、道心は大石のごとく、おこしにくうして捨やすしといへり、なまじゐなる事をおぼし立て、世のわらひ草となり侍らんより、たとへざいぞくの身なり共、其ほどつよくましまさば、五戒の望をもなし、堂塔のまふでおこたらず、ふうふうちつれ、後世菩提をねがふならば、則現世あんをん、後生善所なるべし、いかでか出家にはおとり候べき、ひしと思ひ

とまり給へ、其うへ菩薩のかいは、みな在家のうへとみえたり、ぼんまう經の心是也、一代のきやう〴〵、あながちに出家にかぎるべしや、御心をひるがへし給へと申されければ、御ことはりを重ねて申は、女の身にしはづかしく侍れ共、年來のなじみの御あはれみに、よの中のわらひ草、もく阿彌の御物語、何よりかたじけなくこそ侍れ、去ながら、たとひ道心さめ侍る共、きやうもうの菩提心、などかくちしさぶらふべき、ある經文とかやに、一日一夜の出家のくどくは、二十萬劫地獄に落ずと、とかせ給ふと承り侍るなり、しかあれば、などかけちゑん空しく侍るべき、たとひ又、もとのまゝのつぎはしなり共、思ひたちたる事なれば、よしゆるし給へ、末のとをらざる迄も、望にてこそ侍れ、其のうへ、年わかしとの御事にてはんべれば、此ごろはつゝみ候へども、今ははやかたりさふらふべし、是みたまへとて、氷のごとくにするどなる、劔をまもり袋より、そろりとぬき出して、もしみづから尼となりて後、よしなきたはぶれをのみ、わかき人の申すならば、是にて心もとをうらみ侍るべきがためにつね〴〵こらへ侍る也、こひ願はくは、みづからも思ひ立たることなれば、よし〳〵御ゆるし侍らへと、又々くどきければ、しばしは物をも宣はず、案じわづらひ給ひしが、げに〳〵ことはりも聞え侍りけるぞや、我は男の身なれども、女の心にはおとり候也、誠に人間の有さま、ばせをの風にやぶれやすく、水のあはのごとく成身を、常の思ひをなし、いつ迄かそひ奉るべき、

おもひきる心のなき人は
　生死のきづなきりぞわづらふ

といふ歌を淚ながらひき玉ひて、手づからもとゞりを切、みづからがひざにをき、財寳にもかまはず、そのまゝ其曉出給ひて、つゐに行衞しらず、京にもやまし〳〵けん、みづからおもひのまゝの嬉しさに、君出にし跡に又髮そりこぼし、諸國をめぐり侍るとかたりければ、とし比の比丘尼、是れを聞給ひて、是こそ誠の出家にこそ侍れ、誰しもうき事にこりはて、のがれがたきには、出家遁世の人あまた侍るが、思ひ歎きの道もなし、うらみかこつべき人もなく、殊更ふうゝのしたしみ、よにことに、さながら偕老のちぎりなるを、思ひはなるゝのみならず、男の心したがはざり

しを、色々の御はかりごとをめぐらし給ひて、御身のうへのみならず、おとこの法心までもすゝめ給ふ事、今の世には有がたくこそ侍れ、てんねんのみろくもなく、じねんのしやかもなしと、五だいゐんはの給へり、誰しもかくこそ、思ひはなるべきものなりとて、みなく\も、有がたかりける御事かなとて、手をあはせ、隨喜し侍りけり、

○きく井殿御臺

さて老たるあま、御物がたり侍りけるは、かたぐ\の古への御事うけ給はりて、みづから申さねば、すゝめたるしるしもなし、恥かしながら、ふしぎのありさまを御物語申べし、わらはゝもとは、阿波國の者にてはんべる也、年比にもなりしかば、きく井の右近と申者と契りをこめ候ひしに、このおとこ、ことの子細有て都へ上り侍りつるが、是を待かね、明暮はたゞ、みやこのかたをうちながめ、みやこのかたはいづこぞと、人にもとひ、めしつかひしものをあつめて、よもすがらのさゝめごとにも、よの物がたりもさふらはず、この事をのみかたり出し、思ひにむせびて、戀こがれ侍りしに、おとこ三とせほどありて下りけり、あまりのうれしさに、人めをもうちすて、かどの外に出て、おそく御下りと申侍りしかば、この男よしとも思はぬ氣色にて、中々とばかりいひ侍りけり、あら思ひよらずの、すがたやとは思ひしか共、京より何とぞ、心にもそまざる事にてやらんと、覺束なく、二三ヶ月も侍りけり、しかるところに、風のふくやうにさたありつるは、きく井殿は京よりいと花やかなる女をつれてましませしが、としもわかく、物いひもさすが都の人なれば、風流やさしく、春のかせに柳のなびくごとくなる女房にて、御はからひのさとにおき給ふと申けり、さては思ひあたりたる事有、みづから門へ出でつる時の色さ、げにぐ\誠にて有けり、此事もし定まり侍りなば、かの女を思ひのまゝにせむべし、はるかの都のものなれば、たれかたうどの者もあるまじ、ましてみづからが一門は多し、定めてよそのみるめも、わらはが事こそいとをしけれなんど申べければ、この女さいなみ、末代の女の、人のおつとをとりたる手本に、引きさき侍るべしと、おもひさだめしが、またあんずるやうは、いやく\おつとの心は、たくみふかきものなり、そのうへみづからも、三十にかたぶき

たる身にてはんべれば、ゆくすゑの頼もいくとしもなし、世の中のあるならひなれば、わが身をべちにうとむ心さへなきならば、よし〳〵ともかくもと思ひて、ひとりねの枕も涙にぬれ、曉のかねもものさびしく、月日をおくり侍りしが、ある時この男、打しほれ申けるは、今は何をかつゝみ候べき、京よりふしぎの者を伴なひ下りけるが、今更はる〴〵とかへすにもあらず、御はら立はむやくにて侍る、御身にはかへ奉るまじ、返々うらみを結び給ふまじと申ければ、みづからも、かれがいひやう、さすがなりと思ひ、世中のならひ、何かくるしう侍るべき、都の人ひとりにもかぎるまじ、あまたもならべ給ふこそ、おのこゞのならひにてさふらへと、ゆゝしげに申ければ、うれしくこそ侍れ、さすが名ある人すぢにて侍るとて、おとこも悦し也、かくて月日を送りければ、此おとこいひし言葉の末もなく、かの女にしたしみ日々にかさなりて、我をそばめ、何事をいひ侍れ共、うらめしき心になりけり、みづからも、はじめのほどは、人めを思ひ、身の行くすゑを思ひつらねて、よし〳〵我だにそれとて、そだつるならばとひ思けるが、あまりの情なき男の心かなと、色にはみえずながら、心のうちのうらみ、なのめならず侍りしゆへ、夜をかさね日をそへて、此事思ひしゆへやらん、うしろにおもしろき物出來侍りけるを、よく〳〵さぐらせて見侍べれば、うろこなんどのやうなるものなり、あらあさましと思ひて、又ある時鏡に向ひ見侍れば、髮もよれあひ、目のうちに光出來、口もひろくしかもひたいには、角ともいふべきやうに、二つふくれあがりければ、今までは人のうへ、むかし物語のやうに聞侍りしに、今はゝや、次第〳〵に身もくるしう、一身はくわゑんの如く成しかば、是をみる人おそろしうおもひて、後々はめしつかひし者、みなさりはんべりければ、さては世の人もはやしりぬるよと思ひて、大息つき、常はながめがちにて、月日を送侍りし也、しかはあれ共、つね〴〵つかひし女房、たゞ一人時々打そひ侍りけるに、ある時あんぎやの僧きたりて、ろさい有けるに、此女房かの僧に申けるは、是の御かたものねたみのゆへにて、かやうの姿にて侍れば、御りやくに、ゑはつをさづけさせ給へかしと申ければ、しさいなしとぞ仰ける、其時みづからに申やう、此僧こそ有がたき人にて侍る、御け

ちゑん有べしと申せしかば、みづから大きにいかり、思ひよらぬ事かな、そうじて今よりは、佛共法共きかじ、たゞわらはが常に願ふ所は、此のすみかを大池となし、くろ雲をたなびかし、ぐれん大ぐれんのほのをを出し、にくき女とおつとを引さき、唯一のみにするならば、何の思ひか殘るべき、かくのごとくなるよりしてこそ、諸共に三惡道をすみかとして、生々世々の間さいなみ、大敵となるべき事をのみ思ふ也とて、大ごゑ上て、いかりいなゝりければ、そのこゑ山々谷々に響き、大地もふるひさけ侍れば、此女房、大に肝をけしあきれはてゝ侍りける、其時みづから申しは、諸國をめぐり給ふ僧ならば、何事も御明らめ候へし、げん參せんと申ければ、この僧何事の侍るぞやと申されしに、みづから申候しは、はづかしき姿にて、はづかしき御事をとひ侍れ共、さてもにくきものゝ、わが思ひのまゝになり侍らぬを、ころしぬるやうやあらん、をしへてたべと云ければ、この僧、それこそ安き事にて侍ると申されければ、なのめならず、うれしく思ひて、みづから申やう、年比ねたましきものなん侍り、よるひるの事は申に及ばず、ぬるまもなく、ほのほをいだき侍れば、よる三度晝三度、一身よりくわゑんを出すかと覺え侍る也、さあるゆへに是み給へ、此だきおけになん、水を入ていだき付侍れば、やがて水湯となり候へば、いよ〳〵心くるしくこそさふらへ、かの女をころして侍らば、此苦もあらかじめやみ候べきなればと申ければ、かの僧申されけるは、いと安き御事也、人をころすには心をむくるやうあり、をしへのごとく、心を御むけ侍らば、遠くは十四五日、さては六日七日には、過候はじとありしかば、何となり共、仰のまゝにと申ければ、かの僧宣ひけるは、一切の事を思はず、一念も生せず、善惡を忘れ、思ふ人をもおもはず、にくき人をもしらず、せんたい既に首きられんとする時のごとく、ねん〳〵を、ばうげし給へ、さすれば是則ち、をのが本性本來の、めんもくあらはれ侍る也、是を佛は、にくきものを、ころすてだての第一と說給へり、もしいまだ念々色々にしやうじて、俄に來る事あらば、其の念をうしなはずして、つく〴〵と、此の念はいづくより來るぞ、いかなるものぞ、みねんよくねん〳〵ねんゐの、四しやうをもつて、心を付見給ふべし、さらに此惡念の源有るべから

ず、たゞ一乘の妙體にて、萬法一如なるべし、此時一時ににくきものを打ころし侍るぞと、御敎有ければ、このことばを信じて、善惡の心をおさめ、時刻のうつるもしらず、ぎやうじうざぐわに、あくかうまうねんのおこる時は、あるひは坐し、或はしゆし、或は人靜なる所をたづねて、をしへのごとく、色々にさぐりもとめつるに、さらに何の道理もなかりし也、其後十四五日經て、此僧みづからをよび、いかに悁き物はと有しに、何共分別せざる事にてと、こたへ侍りければ、此僧、さればこそ、をのれが、本來のめうしやうあらはれて侍れ、よく〳〵おこる所の念々をくふうすれば、くわゐんのうへにふる雪のごとくに、にくき、いとをしきぞうあい、ぜひはら〳〵と消滅し、しやしやうさらにへだてなく、自もなく他もなく、他則ちおのれ、おのれ則ち他なるべし、是こそ眞實のにくきものを打ころす手だての敎、だんば根本しやうじめつ是れ也とありしかば、こと葉のしたに、はたとあたり、手をうち、げに〳〵つらき女もなく、いとをしみのおつともなかりけりと、大息つき、胸ひろ〴〵となり、夢打さめ、蛇體の跡なく、もとの姿となり侍れば、いよ〳〵くふうをとげ、三界はたゞ幻のごとくと思ひ入て、やがて、此僧の弟子になり侍りし也、とかたりければ、宿の尼、聞給ひて、御身の事はさてをきぬ、此僧のしめし給ふ事、しんゐをいましめずして、菩提をしめし給ふ事、誠にしんじちの大せうの御法、有がたくこそ侍れ、善惡不二、じやしやう一によ、へんしやかいちうなどゝ、天台の御しやくにも、出離のげをごするといへども、ことばのみありてきやうなきは、かまくのなくにことならずといへり、

厭ふべき浮世の中はすてはてつ
　いまはまことの道をたづねん

まことの道とは、ぶつそのあんりなり、一大事とは、ほとけにあらず、衆生にあらず、いにしへにあらず、今にあらず、ちやうたんはうゐんをはなれたるところなり、此ところを、ほとけは、いちしちちうだうのめうたいと、ときたまへり、三世の諸佛、十方の佛だ、いろ〳〵、さま〴〵のしつらひ、八萬ほうざう、十二ぶきやうをときたまふも、みなこの一しんのめうしやう、ふしぎのりをあらはしたまはん、御事のみにてはんべれ、いまゝではうちやりの人にて、よをわたる

べきあまごぜんとばかりあなどり、ないがしろに見くだし侍りしが、とりわけ御かたの御こゝろの、そこすみ渡りたる月かげの、曇りもなく明らかに、一しほ立上りたる御事にて、なをたけ有り、有りがたくこそ侍れ、誠に一樹の陰、一河の流れ、皆多生のえんと承はり候へば、未來の御けちゑんもうれしく、又今迄うたがはしき佛法のしめし、いか許の旅人の御やどかし侍れ共、御身のごとく、たけたかき御さとりの人には、あひはんべらぬなりと、宿のあるじなのめならずぞよろこばれける、

七人びくに中終

七人びくに下　一名さんげ物語

○みいけ殿の事

さてあるじの尼御ぜんは、何故かく、大慈大悲をおこし給ふぞやと、みな〳〵とひ給へば、あるじの尼公、申されけるは、われらは是、つくし筑後國の住人、みいけ殿の北の御かたわらはにて侍るが、三池殿そせうの事ありて、都へ上り給ひつるに、そのゝち朧げにも、文のたよりもなかりければ、北の御かた、つねは、あらぬさまにて、さしてものをも宜はず、涙をめのうちにふくませ、打しめりたる御なげきいとおしく、物あはれなる、御ありさまにてましませしなり、あるとき、みるめもあまりの事なれば、みづから申やう、さてもとのゝ御行衛の、聞え給はぬこそふしぎに侍れ、御身の事はとにも角にも成給ふべし、唯わか君の御事を思ひ奉るにつけて、こゝろぐるしうこそさふらへ、つら〳〵と案ずるに、いざゝせ給へみやこへ、わか君ももろともに打ちつれて、みいけどのゝ御ゆくゑをも、たづね申さんとかたりはんべれば、まこと

に、うれしき事をいふものかな、とし月さこそとはおもひつれども、女の身なればちからなし、又御身のこころのうちもはかりがたく、月日を送りしに、よくこそ思ひいれ給ひし、さらばおもひたゝんとて、十二になり給ふ、ふぢ若御ぜんをさきにたてゝ、行衞もしらぬたびごろも、おもひたちしをしるべにて、きさらぎのすゑのころ、安樂寺にもつきしかば、みやこのかたのこひしさに、あら人神の古へを、思ひいだしてわが身をも、まもりたまへと祈誓して、をとのみ聞えし箱崎の、松のしたみち風すごく、そのむかしをもしるしをく、もじの關もり過ぎぬれば、日數はつもるいつくしま、神のちかひをけふたのむ、君にあふやま山ふかく、こゝへゆけばはやをのみちの、うら山かけていつとなく、須磨明石につきにけり、これや源氏の大將の、なみこゝもとゝゑいぜしも、今こそおもひいくたびか、生田の川にとりもいば、あふべきことはかならずと、こゝろうれしくうち過て、はやみやこにもつきしかば、五條室町にやどをとり、さて宿のあるじに、みいけ殿の、ゆくゑいかにとたづね侍れば、あるじ、われらこそよくしり侍れ、みいけどのは、そせうかなひて、又越後のすみよしと申所を給はりて、下り給ふと語侍りしかば、聞くよりそのまゝちからもなく、都々と心がけしに、又行衞もしらぬ、越後とやらんは、此つかれぬるうへにいかゞと思ひ、はぬけ鳥の、立ちわづらふごとくにて侍りし也、又おもひ返して、北の御かたに申やう、是より跡へ歸りても、あふべき人もなし、道のゆきゝも、都とはちがふべきにも侍らねば、長たびの御事なれ共、命を共にとてもの事に、こしぢへ御下り侍らば、御供申べしと申せしかば、御身さへ心をそふるならば、わらはが事は、たとへつがるそとの濱、ゑぞがちしまなり共、たゞ君ゆへの旅なれば、うれしくこそ侍れとて、又都より越後へとぞ心ざす、かくて都を立出て、をとに聞くだにをそろしき、あらちの山も跡にみて、いつかかへるの山風に、さそはれてちる花の雪、消えぬ命をけふも過、あすは野山に夜を明し、踏分出るしのはらや、あたかのみなとにつきしかば、折ふし出る舟侍りしに、便船をこひ、ゑちごの國に聞えし、かしは崎にもつきにける、此所にて、とのゝ御事をたづね侍れば、みいけ殿は、三條と申所にと語りければ、其邊近き所に宿をとり、あるじの男

をたのみ、くはしく文をかき送り給ひし也、しかる所に、みいけ殿は、此ほどすみよしと申所へおはして、三條はるすにて侍けり、此時との丶御あとに、あまり人がましからぬ女房一人有けるが、出あひしに、此おとこ、事のしさいを申侍りしかば、女聞きて思ひけるは、是は我身にては大事のとなり、此文うたがひもなき、みいけどの丶ふる妻の文にて侍れば、あらあさましや、ふつに、わらははや送らるべき事定まりぬ、つね〴〵殿の口ずさみには、つくしにしれるものあり、おさないものと、夜ひる此事をのみ思ふ也と宣へば、何とはなるべきとあんじけるが、いや〳〵世の中のはかりごと、ばうろくにしく事はあらじ、城郭をやぶり國をほろぼすも、みな財寶をもつて、手だてとし侍ると承れば、此使をひそかに招入れて、色々の物を引きとらせ、酒さかなにてもてなし、此女房申やう、深く汝を頼む也、遠國の人にねん比をし侍るとも、さらにゑきなかるべし、もしみづから、此殿にもあるならば、御身の事は申に及ばず、一門を人となすべし、かの旅の人をはかりごとをもつて、をひ失ひて給はれと、命と共に頼みけり、此男、げに〳〵御頼みのうへは、心ゑ侍るとて、やがて宿へ歸りて申やうは、文をみいけ殿へまいらせ候へば、つく〴〵と文を御覧じて、ふしぎや何者の來りて、かくいひつるぞ、しよせん女たらしなるべし、西國にては妻もなし、妻なければ子といふものなし、いかなる者ぞや、さやうのつくり事をいひ侍るものをば、領内に一夜の宿をもかすまじ、もしかしたるものあらば、一門をざいくわにすべしと仰有りしは、我らが參りたるこそ不覺なれ、一時も御身のやうなる、作りごと宣ふ人に宿もむやく、急ぎ〳〵まづ在所をのき給へ、あ丶おそろしき人々、はや〳〵と、ばうちぎり木などにて、追ひ出し侍りけり、下らうのあさましさは、先色々の引出物、さけさかなのためにめがくれ、あへなく宿をば出しけり、此時は何とし侍るべき事もなく、おつる涙ともろ共に、三でうを立出て、すゑたのみなき旅の空、いづくをさしてそこはかと、行きやとまらん方もなし、命の消なん事こそ、うらみなれと思ひつゞけて、なく〳〵ざわう堂まで出にけり、其夜は堂に通夜をして、わが行衞をいかゞと思ひなげ丶共、さらにせんなし、去程に夜のほの〴〵明に、北の御かた仰けるは、男のならひに

て、我こそすさめられし身にて侍れ共、ふぢ若は、まさしく子にて有りければ、いかなり共一め見せなば、などか見すて給ふべき、みづから是迄たづね下り、かかるうきめを見、はぢをかく事も、あの子が行衛を思ふゆゑにて侍れば、はづかしながら今一たび、文をもち、あの子をぐそくし父に見せ給ひ、此のよしかくとかたり、藤若をあづけて、御身は急ぎかへり給へ、又古郷へ立かへらるべき身ならねば、是をぼだいのたねとして、さまをかへて諸共に、るらうの身共成べしとありしかば、げに〳〵誠に仰せのごとくとて、文をこいうけ御いとまごひして、ざわうだうに北の御かたひとりおき奉り、又三條へぞいそぎける、しかる所に、その日の晝ほどに、跡より山伏二三人つれて、ものあはれに物がたりするを、耳をそばたてゝ聞侍れば、さもあれ美くしき女房にて侍るかな、むかし語となるべし、かはれる姿なれとも、おもてはそのまゝ菩薩のごとく、楊貴妃そとおり姫なども、かくこそあらめ、髪の長くうつくしさよ、つねざまの人にてはあらじ、都へんにてもかゝる人をばいまだみず、いたはしや、いかなる思ひのあれば、かやうに身をなげ給ふらんとかたりけり、みづからむね打ちさはぎ、あまりのふしんさに近くよりて、たゞ今の御物語は、何事にて侍るぞと尋ねければ、その事に侍る、大わたりにて、うつくしき女房の、身をなげたりしぞや、人々あつまりて、涙をながし候ほとに、道のほとりにて侍れば、わらはも哀れに思ひて、逆緣ながら頌をじゆして通り侍りしと、かたられけり、さてはうたがふ所もなしと思ひ、又いぞぎもとのざわう堂へかへりけり、しかはあれども、此ほどのたびづかれといひ、又かなしさの身にしみて、一あしあゆめども、たゞ一所をのみふみ、あゆむ心ちも侍らず、願くは是は夢にて、さめよかしと、たどり〳〵かへりけるに、道に行あふ人ごとにとひけれ共、いづれも同じことばにて、みて通るよし人々申ければ、急ぎかへりつゝ、人あまたあつまりたるところへ、はしりつき見たれば、元來御ぐしは、波にゆられて御身にまとひ、袴のくゝりをつよくしめ、ねりぬきのかさねの袂に、石を入れしづまんためのたくみなり、くろ木のじゆずを手にまとひ、なぎさの浪にゆられつゝ、ねむれる如くにみえ給へば、わか君母のかほに手をあて、さめ〳〵と泣きくどき、我を

ば何となれとは思ひ給ふぞや、それほどみすて給ふならば、など是れ迄つれてはましませしぞや、情なき父御の御心のかはるゆへ、うらみても又あまりあり、又思ひ切給ふとは思へども、わらはが心をたばかりて、かくなり給ふもうらみ也と、泣きかなしみ給ひければ、みづからあまりの悲しさに、同じ道にとたくみしを、やがてわか君とり付給ひ、ふかくなる事にてあり、二人のおやなきさへかなしきに、又御身にはなれなば、何と成るべき方もなしと、手をとり臥まろび、袂に取付給へば、さすが心もよはりつゝ、立わづらひて侍りしが、ふしぎや川上より、大舟四五そう、をしならべ、ふなあそびして、さもゆゝしげにみへ給ふ、さぶらひ船と覺しくて、川の中島へ舟をよせ、うたひさかもりしてあそびけるが、此の人々あまた、死がいにあつまるをみて、あれは何事にてと、主人とい給へば、旅人のかやうのしさいにて、身をなげ侍ると、案内者有てかたりければ、主人聞給ひて、さてもふしぎや、いかなる者ぞと船をよせ、つくづくとみて、いたはしや、いかなる人の行末ぞや、我もふるさとに、あの年比の子をひとりもちたれば、よその歎きも、我身のやうにこそ覺ゆれとて、船をよせ、いづくより來り給ふぞと尋給へば、わか君死がいのうへに袖を打おほひ、西國の者との給へば、何とてかやうに成り給ふぞと有りしかば、その事にて侍る、父の行衛を尋ねんため、母もろともに國々をめぐりしに、父の心のかはりしゆへ、そのうらみにてかやうにと、涙をながし、母のしがいに取付給へば、かの殿あやしく思ひ、舟よりとびあがり、かほにおほひし袖をとり給へば、疑もなき我が妻也、あらあさましや、こはいかなる事なれば、かゝるとの有りけるぞや、夢うつゝとも覺えずとて、此殿人めも恥も打ちすて、しがいをひざにかきのせ、涙にむせび給ひしかば、舟のうちになみゐたる人人、是はいかなるきゑんかなど、けうさめがほにて驚き侍りし也、やゝ暫ありて、此殿宣ひしは、今は何をかつゝむべき、皆々み侍れ、是こそ某が子、又このしがいは、わらわがつくしのと、いひもはてず、たもとにかほをおしあて、臥まろび、よその見るめも哀に、さめざめと泣給ひしかば、しるもしらぬも、袖を絞らぬはなかりけり、みづから申けるは、筑紫を出にし日より道すがら、誠に男の身にても、旅路は物うく侍る

に、北の御かたのみならず、若君つれて、はる〴〵都へ上り侍りしに、又越後の國へと、みやこにて聞侍れば、一めもしらぬ越後ぢを、足にまかせてまよひつつ、道すがらのかなしさも、必ずとのにあひ奉らん事のうれしさに、うきもつらきも忘れつゝ、遙々下りしかひもなく、情なくも、殿の御心かはり玉ひて、剩へ一夜の宿のうきふしも、立わづらへる御姿、殿の仰にて侍れば、宿をもかさで追ひ出し候へば、君をふかくうらみ給ひ、ざわうだうにひとりとゞまり給ひて、みづからと藤若殿に、そらだのみ宣ひて、其跡にかく成給ふとかきくどき、殿の袖に取付きて、雨雫とうらみかこち、有りのまゝに申せしかば、殿聞給ひて、げにげに御身がいふやうならば、さこそうらめしく思ひ給ふらめ、我はとくつくしへ下り、あの藤若をも見たく思ひしに、何とておろかに思ふべきと、かきくどきの給ひしかば、さては殿の心もいつはりなし、是こそ朝の御文とて、袂より取出し、參らせしかば、殿文をひらきみたまへば、其文に、かく重て申つる、恥しながら、そのかひとても有明の、つれなくこそ思しめすらめと、思ひながらも忘非の、あさましげなるみの程は、思ひの淵共なりぬへし、かほどに成り行く身のはてと、かねても思ふ身ならねど、たづね越路のしら雪の、消なん我身はさてをきぬ、など藤若は、御身を分け給ふ子ならずや、其さへ子なきと宣へば、いきてかいなき泪川、涙の露の玉くしげ、二おや共になかりせば、誰かかけごと成りやせん、思ひ切りたる吳竹の、よみぢのさはりと成りぬべし、今はくやしき浮節の、明けぬ暮れぬとまつらがた、ひれふす床の露しげき、袖のぬれます身のほどの、なげきもげにとさきの世の、むくひとこそは思ひつれ、たとひにくしと有りぬ共、露の情をゑんとてや、跡とひ給へくれ〴〵と、かきくどきたる玉づさの、言葉のさてもあはれさよ、涙と共に書きたるか、文も涙に色づきぬ、もじの姿も文字しみて、しどろもどろに書きなせし、心の中のいかならん、是を思へば我身をも、同じ道にと思へ共、跡の菩提と心ざし、まづしがいをとりて舟に入れ、なくなくざわう堂へかへり、やがて煙となし侍りし也、さてかの使の男、一門廿よ人いましめ、藤若、母のかたき給り、汝が無念をはらすべしと宣ひければ、わか君大きに悅給ひて、父にの給ひしは、此男一門、後代の

見せしめに、いましめてもあまり有とは申せ共、かれをころし侍る共、母のかへり給ふにも侍らねば、孝養にたすけ給へ、其うへけいぼの御事、情なしとは申せども、またいにしへより申せしも、けい母をうやまふは、かへつて父の孝行と承れば、是もそばむるわざ候まじと、宣ひければ、父も涙をながし、仰有けるは、母もろ共に、此藤若が、さかしきを見侍らば、何か思ひの有るべきぞ、せんだんは二葉よりかうばしく、三涌の跡こそつぐべき者なりとて、一跡をゆづり、母の弔ひとて卒都婆をたて、かやうに詠給ひけり、

思ひきやたづねこしぢのたび人を　あらぬさまやに見なすべしとは

と御いたみ侍りて、その御庭にて御くしおろし、行方しらず成り給ひし也、此のうへはと思ひ、みづからもさまをかへ、善光寺へまいり、かの御あととぶらひ、此廿年が間なん行苦行し、其後此湯をわかし、功德をはこび、かの御ためにと語り給へり、此時老たる比丘尼仰られけるは、是は生身の如來にてましします也、かやうの所に宿をかり、かく有難き御事を聞き、さすが嬉しく侍れとて、五人の比丘尼一同に、けちゑんとぞよろこばれけり、

○花山院姫君の事

みなくさんげ物語を、今阿彌陀佛、かべごしに聞てねのびし、身をこそくとかきゐたり、是を旅の人々聞給ひ、さてくにくぶりなるものかなと、思はれしに、あるじのあま申されけるは、かやうの有がたきさんげ、つれくの物語、三十一字をつらね給ひて、秋の夜の長きをも、かいもね給はで、涙のみにて終夜、ねぶりをしのぎ侍るに、聞入ずして、下れる人といひながら、よく目のあふことの不思議さよ、そのごとく木石の、あさましき人にて侍れば、佛尼共をも引きそこなふべき人なれば、今より後はかなふまし、ぞう一あごんにいはく、もし人もと惡なけれ共、惡人に近付けば、後に必ず惡人になると說き給ふ也、此必との御ことば、おそるべきに侍れば、早々出給へと申されけり、此時こんあみねながら、

ねごとは人の聞かぬものかは　をともせずふせる姿にみるもよき

とながめて、つたなきあるじの、御こと葉にてさふらふ物かな、此かりのやどりを出侍れとの御事、たとひ

御とめさふらふ共、いかでかとゞまり申べき、未だじやうじゆふへんのすみかを、しり給はぬか、殊更、ぞう一あごんを引給ひ、惡人に近付くまじとの給ふ事、何れか惡人にて侍るやらん、善惡不二じやしやう一によとは、いつも耳にふれ給ふべし、たゞし御としのたけ給ふより、おほれさせ侍るらめ、其上ぞう一あごんと申は、せうじやうのうち、四あごん經の、其一部にて侍るぞや、是を佛はゆいせうじやうとて、一往はもちひ給へ共、再往は、こぞのこよみのごとしと宣へりと、いひすて出にければ、又よの比丘尼たち聞給ひて、色々の經文を心得、または三十一字をつゞくる事こそ、かれがためにはふしん也、然れ共、みな〳〵のさんげを、ねごとゝ申は、あさましき、きくわいなる事也と申されければ、あるじかさねて、ねごととはいかに〳〵ととがめ侍りしに、こん阿彌から〳〵と打わらひ、なふめん〳〵の、夜もすがらの御物語は、さながらねごとにて侍る也、妾は沙門ににたれ共、心はまだきざいぞくの人にて侍り、こよひのごとく、泣しみあひ給ふ事は、出家のゐんりとすべきや、さんげをせざれば罪ふかしとの事、皆々御物語にて侍るが、などしんじつのさんげをば、し給はぬぞやと申ければ、此ときよの尼申されけるは、さんげにおいて、僞りのさんげ、眞實のさんげとて、二つ三つ侍るやとて、若き比丘尼、ころ〳〵とわらはれければ、又今阿彌陀ぶ申けるは、面々こそ、さんげに二つ三つは有るまじとなんの給へり、佛はしからず、佛はさんげに品々を分給へり、それはと申に、大に分て二つ、跡一つにはじのさんげ、二つにはりのさんげ也、その〳〵こよひのさんげは、あさ〳〵としたる、在家の茶物がたりのやうなる、あさましきさんげにて侍る也、りのさんげと申は、ふげんくわんぎやうに說給へり、にやくよくさんげしや、たんさしじちさうしゆざいによさうろゑにちのうせうちよといへり、かくのごとく、無常のさんげにて、げんにびぜつしんいの六こんの一切の罪、はら〳〵と消えうせ侍る事、霜露の朝日にあふごとくとみえ侍るぞや、其故いかにと申に、一切の罪のおこる根本の源をたづね候に、たゞ一ほつしやうの妙體とさとりたるちゑの光に、などか煩惱の霜露有るべきやと申されける、此時よの尼、さて此人は、唯人ならじ、心は姿に似ぬ物也、萬ふしんなる事をば、た

づぬべしとて申されけるは、さんげと申は、罪をくゆることにて侍るべし、然れ共じのさんげ、りのさんげと申、二つの御いはれ、いかなるりがいの侍るぞや、その御事にて侍る、をの〳〵のやうに、いともかしこき御かたの、御あきらめなき事を、いやしきわらはなどしり候べきや、さは去ながら、わらは爰かしこ、寺寺天台眞言禪律等の知識にあひ奉りし時、たづね侍りければ、是のみ人の明らめがたしと宣へりしが有しほどに、此ごろ又、ある道者にとひ侍りければ、このじりの二つこそ、むづかしき事なんとて、ちしやいひゆとくけなれば、すいしやうの玉をもつて、たとへにとり給へり、たとへば、すいしやうに火の性あるがごとし、をろかなる人は、さだかにしられざんめれども、日の光に向ひ、ほぐしにつくる時、さては此玉になん、火の性のある事、疑なしとしらるゝ也、じりといへるも、又かくのごとし、火の性の玉にあるは、まんぼうのりしやうにたとへ、ほぐしに火をうつし出しぬるは、じさうのごとし、しかもほぐしに、火を取侍れども、玉にある火性は、そうもなく、げんもなく、まなこにさだかならず、手にもとられず、さながらしゆへんほうかいにして、みちあふれ、ひろからず、せばからずなんめり、たゞほぐしにうつし出したる火にこそ、そうあり、けんあり、きゆる時あり、もゆる時あり、そうけんせひは、時にしたがふずいゑんの物なり、誠なるかな世の中の人々、もえあがりたる、随煙のじそうの火に心を付、じやうじゆふへんのめでたき所には、心を運びくふうし給はぬぞや、かやうの御事は、あるかゝりの御事にては、心得がたし、心を佛道になげ入れ、終日に、終夜くふうし給ふべし、但じり一たいの、御心得のうへにてのさんげにて侍らば、有りがたくこそましませ、しやうみやう經にいはく、若とを清めんともとめば、まづ其しんを清めよ、若しん清ければ、則ときよしといへり、又戒にも、ほつしんひやくゑつほつ、萬きやうとせとのべられたり、各のごとく、戀慕哀傷のため云出し、しみ〴〵と涙をながし給ふは、まさしくねごとにてはあらずや、其上面々の、こよひの御物語の由來は、

こよひかりねのわび人のいほ
我によも月見よとてはふきさゝじ

といふ歌よりおこり侍る也、こよひ一夜のかりねと、

ゑいじ給ひつる人の御心のうち、定めて常住とおぼすすみか、とり分ありとなん、聞えたんめり、いづれか此の界に、常住の所あらんずらん、其の常住と宣ふ事、誠にふしんにこそ侍れ、此三界と申は、俗界の六よく天、しきかいの十八天、無色界に四くうしよ、かくのごときの三界のちやう上は、ひさう、ひゝさう天と申天也、此天の命は、なが〳〵しく、八萬ごう也、此八萬劫も、くわほうつくれば、けんた三づと申て、かへつて後々三津におつると、十しゆしんろんにみえ侍る也、まして此世界は、六十年を一期とせり、其六十年を、指をおり、月をかぞふれば、わづかに七百二十月なり、日をかんがふれは、二萬六千餘日にて侍る、是則ち、すなをにして、やまひしからぬ人の事也、いはんや老少不定なるをや、など一夜計を、今宵かりねのと仰せ侍る事、かたはらいたくさふらへ、まさしく皆の御物語は、ねごとかと聞侍る也、

誰とても同じかりねの宿あれて

もりくる月やあるじなるらん

と讀て、よし〳〵、あるじの法文道心とりをき給へ、三とくはみな、じちさうの妙體にて、しんげにほうなし、何をかすて何をかとり、何をかあいし何をかかなしむべけん、煩惱即菩提なればなりと申ければ、あるじの尼申されけるは、煩惱即菩提とは、まさしく御身のことば、又諸しうのもちゆる大事の法文なり、われわれこそ、ぼんなふそくぼたいの、道理に叶ひ侍れ、其のおもむきいかんと申すに、みづからがごとき、もろ〳〵あへなき、うきめを見、戀慕哀傷をふかくいとひ、後々うき世の惡業煩惱にこりはて、此のぼんなふをひるがへし、菩提におもむきしは、まさしく煩惱即菩提にあらずや、ひたすら慢のはたほこをたをし給へと申されければ、今阿彌申けるは、いとめづらしき煩惱即菩提の、さとりうけ給はるものかな、みづからが心得たる、ぼんなふそくぼだいといへるは、しからず、煩惱と菩提とを、とりもなをさず、其性ふかとくにて、一じちのめうたいなるを、ぼんなふそくぼだいとは申也、たとへをもつて申侍る、ときがたき氷を、とかさゞれ共、まへに對してせんたい水と心得て侍り、たとへをもつて、煩惱即菩提といふ、そくの字の心よく御あきらめ侍れ、みな〳〵のごとくなるは、ぼんなふをひるがへして、さてそのゝちに、ぼだいにお

もむく也、たとへの心もかん來つて、かたき氷となり侍るが、春の陽氣に向ひとくる時、水となるにことならず、しからば即の字たち侍らぬなり、此の義につゐて、達磨の弟子に、三人とくほうの者あり、だるまに對して、にさうぢが曰く、煩惱をだんじて菩提をせうずと、師の曰くわれ皮を得たり、次にたういくが曰く迷へば則ぼんなふ、さとれば則ぼだいといへり、師の曰く我肉を得たり、第三にしかゞいはく、もと煩惱なし、もと是菩提といへり、師の曰くわれずいを得たりといへり、かくの如く、三人のとくほう、ひにくずいの三と申せしなり、その〳〵の思しめす、ぶんざいまだきにさうじがゐたる、ひのぶんざい也、にくの所へも行きたゝぬ御事也、いかにいはんや、ずいにいたらんや、これらの御心得をば、にもつさうかう共、はいめんさうぼう共、そしごとにきらい侍る也、此のうへに、しやうあくしやうせんとて、煩惱即菩提のあらはるゝ事侍れ共、いまだ手なれ給はぬ御事のみを申候ては、御心得がたければ、あさ〳〵と申侍る也、

目にも色耳にもこゑを難波がた
芦のかれ葉に風ぞそよめく

月よ〳〵花よ〳〵と見るひとの
心なきこそみちのみちなれ

と一心の念佛は、一心ふらんにして、佛を思はず、惡所を恐れず、みだるゝ事なく、六字の念佛、あたか、心のほかにもとむべけんや、とにもかくにも、もろ〳〵につけて才覺を入れず、眞如平等の月しろに、ほうかいを家として、おどりありき、月にあふても月をたし、花にあふても花をたし、しんとうてつをけづり、ろこうにくをさき、しきに萬里の關をとをり、せいせうのうちにもとゞまらず、びるしやなほつしんを御あるじと頼み奉り、心安き身となり、心せばき人々にそひ奉り、せは〳〵しき家に宿り侍らんよりは、しかじたゞ、ふるみのふる笠、こつじき袋にとりそへ、いづるとて、かく、

ふけば行ふかねばゆかぬうき雲の
うきにまかする身こそ安けれ

と詠じ、いとま申て人々とて、しばのいほりを立出て侍りければ、人々とり付き、御名を名乗りいかなる人の御行衛とて袖に取付、さま〴〵にとゞめ侍れ共、名もなく我もなく、まぼろしのごとくなる身とて、つ



ゐにかへらず出にけり、

人々あまりのふしきさに、そのゝち或人に、かくのごときの人はいかにと聞き侍れば、かたじけなくも、花山の院の姫君にておはしけるが、ようがん人に勝れ給ひて、既に天子へまいり給ふべきに、御定まり有りければ后の姫君とぞ申ける、十六の春のころ、御室の御所、花山院へならせ給ひて、花を御覧有けるに、花若殿とて、天下に聞えたるちご一人おはしけり、御さかもり過ぎぬれば、花のもとに帰らんことを忘るゝは、美景によつて也、折ふし落花の比なるに、夕風いたく吹き、木陰庭のおも迄、さながら雪なりければ、いとどけうをもよほし給ふ折から、御さかづき、花山院の御まへに有しかば、御室の仰に、花若それ〳〵、御盃申せと仰られしかば、元來まひの上手の事なれば、扇を少ひらき、落花らうせき也、風狂じて後といふ朗詠のしまひのひやうし、いづれか花と打ながめ、たゞ天人のやうがうも、是にてこそと許也、然る所に、みすの隙より、かぜの便に此ひめ君〻花若殿、めとめをほのかに見合給ひけるに、其後は又みるよしもなく、夏の虫のこがるゝ思に侍り、此姫君も舞の面影忘れがたくて、只いつとなく、御物思ひの御有さまにてまし〳〵ける、花わか殿も思ひにしづみ、わかむらさきのゆかりの人を頼みて、玉づさを結びをくられける、ひめ君御覧ずるにことのはもなく、

玉すだれかゝる思ひにきえぬべき
　人にしらるゝいのちならばや

とばかり侍る、是はいかなる事ぞと有ければ、いつぞや、舞のちごの御かたより、御姿一めみ給ひしより、しづ心なくこがれ給ふゆへに侍るぞかし、人を助く

るは皆是菩薩の御利益にてさふらへば、御返事あれと申ければ、ひめ君おぼすやう、我も此の人ゆへに心のおくはみだれがみの、打とけたくは思へ共、思ひならはぬ御事なれば、人しれぬまに思召とまり給へ、世中にもれ聞えなば、いかゞなるべきとて、いつとても御返事もなかりしか共、心の内のうち氷、終にはとくるならひなれば、御文たび〳〵になりしかば、忍び忍びの御かよひぢ、つゝみ給ひし事なれ共、たびかさなれば伊勢の海、あこぎか浦に引くあみの、人めも既にもれにけり、あさましや世中に、さたもしけるは此姫君は、天子の后となり給ふべき御身なれ共、かゝる大事のさた、わたらせ給はゞ、行末何とならせ給ふべき、此道とては、高きも賤しきも、教訓にも及びがたき御事なれば、たゞ石をいだきて淵に入り給ふと、人人ひそめきければ、御身の置所こそなかるめり、誠に都ひろしと申せ共、御身の置所もましまさぬほどに沙汰侍れば、めのとひとり御供にて、花若殿とたゞ三人、足に任せて出給ひけり、契の末のかはらずは、たとひ虎ふす野べ、鬼界かうらい迄も、うからじと契りを結び、なにはのうら迄出で給ひけるが、めのとの女房のゆかり、四國に有とて、それを頼に下り給ふべきよしにて侍りけり、しかる所に、宿の女ばう、此のひめ君をつく〳〵とみ、をのが男にかたりけるは、何共めづらかなる、いまだはたちにもたり給はぬほどにみえ侍るが、尋常の人にあらずとみえ候也、同じ女の身なれ共、心も空になれ衣の、打ほれ〳〵となるまゝに、手のものも打をとす程にはべる、御身も一期の思ひでに、一めそとのぞき給へかしと申ければ、げにげにとおもひ、障子のすきまより見ければ、かたりつるよりは、一入色まさりて、あまりの美しきまゝに、萬を打すて、心も空のうき雲の、月をながむる心ちして、つく〳〵見いたりしが、いや〳〵此君御立有て後は、露の命も消えぬべし、只一筋に思ひかけばやと、案じわづらひしが、よく〳〵みれば、わかき人只一人付たりければ、うばひとらんに、何のたゝりか有るべきとて、小夜更がたにめのとをよび申けるは、此の姫君みづからにたび給へ、若それ叶ふまじきならば、たとい此世にては、あらぬさまとなり、後の世はならくの底にしづむ共、此事とては思ひとまるまじ、其うへ御身、心をあはせ給はぬことならば、今宵のうちにみ

なく〳〵失ひ申べしと、遁れがたく申ければ、めのとの女房はつと思ひしが、心をしづめ誠に御身の仰も遁れがたく侍れ共、是は都より四國へ、御下りの御かた也、其上ひとりはちごにて有つるが、かねてよりの御ちぎりあさからず、偕老どうけつの御中也、ひらにおもひとまり給へと申けれ共、此おとこ、今は思ひとまるべきやうもなし、とにかくに、此ちごをしづみにかけ、姫君をうばひとらんと思ひけり、去程に小船をこしらへ、前後もしらず旅草臥れに、二人ながら臥給ひけるを、ちご斗を引分け、是へ〳〵とて、かどの外に出し奉りしかば、御ね覺の事なればまよひ出で、ころし奉る共思しめさず、出舟などにこそと思せし所に、さはなくちごばかりのせ奉り、腰をいだき、つきはめ奉らんとせしとき、こはいかに、ひめ君は心ちがいか、など來り給はぬぞと、頻りに聲を上げ、こがれ給ひけれとも、男何といふ共たすくまじ、急ぎゆけやとて、こし帶取て海の底にぞ沈めける、さて此男もさながら涙にくれて、歸り見侍れば、二人こはいかにと、あきれはてゝおはせしを、そのまゝいだきとらんとせし時、ひめぎみ、ちごの枕もとに置きたる笛とかたなをかくし給ふをしらず、くらきよすがら、何事か有るべき、わがもの也と思ひし所を、情なのあるじの有さまやとて、心もとを一かたなうらみ給へば、やさしき御手にてのわざなれ共、氷のごとくめでたき御刀なれば、此男やがてなくなるべきにぞみへにける、されᅟ共刀をうばいとりしが、いまだおはりもやらで申けるは、いたはしやあかぬ人のかたきとて、わらはを御あやまり候か、げにもさこそうらみに侍らめ、御ことはりにて候、我も御身ゆへに、かく成行く露の命、消てもさらにをしからず、後の世とひてたび給へ、姫君は人のしらぬまに、急ぎ此里を落、此にしの山うらに、心ざしある比丘尼あり、それへはしり入給はゞ、大事は候まじと、涙と共にいつとなく、いひしこと葉もよは〳〵と、成行くまゝに姫君の、行末までも案じつゝ、とら卯の刻の間にぞ、終にむなしく成にけり、かくのごとく、いかばかりの人、あへなく侍るも、是たゞ事にあらず、かたじけなくも、天子の女御と成給ふべき御事成しを、下輩として、おかし奉りしゆへにこそ侍れ、王城の鎮守の御はからひとみへて、二人共に失けるこそふしぎなれ、さて姫君はをしへのごと

く比丘尼しよへたち入り、御ぐしをおろし、花の姿も引かへて、あさのころもにづだ袋、うすかねはげて色くろく、たゞ打やりの乞食にて、諸國をるらうし給ひて、我ゆへかくはかなくなりぬる人の、菩提のためとて、寺々の貴きちしきをたづね、法文を聽聞し給ひしが、都を立て其後、加賀の國にやすらひ、こつじきひにんに打まじり、年久しくもおはせしが、又善光寺へと心ざしけるに、かたはらに寺あり、此僧さとりの人也とて、人あまたもてなしければ、これこそのぞむ所と思ひて、二年是にぞまし〳〵ける、ある時は山谷にとぢこもり、或時はこつじきに打まじり、大ゐん小ゐんのよそほひおこたらず、萬法一如のさとりを、ひらきたる人と申ふれし也、さありし時、じゝやに筆をこひてかく、

しらま弓あてどもしらずいつる矢の
　空には終にはづれざりけり

此歌を長老御らんじて、たゞ人には侍らじとて、

さればこそもとのをのれかしらま弓
　いるより外にまた道もなし

とあそばしけるを、實(げに)有がたき御事かなと思ひて、其後は一生を風にまかせ、諸國をめぐり、此ゆやにも年を送給へり、うゑきたればはんをきつし、こん來ればためんす、あゝまことなるかな此のことば、一切のきやうぎやうは、みな一しんのめうたいをあらはさん爲なり、よく〳〵くふうをし給ふべし、斯る一大事をば、いかでかゑんをふるべきと、佛菩薩の御あはれみにて、みな〳〵あらき風のをとまでも、人あしなどとあやしく思ひ給ふ人々を、かくうきめをみせ、菩提心をおこさせ給ひし事、いよ〳〵有がたくぞ侍れ、此ことはりもなきならば、いつしか身をなき物になしはてゝ、身をやつし給ふべき、たゞさきの世に、たくはへ置きぬる善しゆのみ、ゑんを待ちて侍るべし、たゞし國々里々、あなたこなた、かゝるうきめをみる人、耳に聞きめにあふれ共、是ゆへこりはて、浮世をすてたる人もまれ也、たとひうき事にあひ、さまをかへ侍れ共、やがて心のかはりぬる、人のみあまた有けるに、いとも賢きわか上らうの、かくなり、老いぬる迄末かけて、道心けんごなるこそ、めづらしけれ、かく筆を染めぬるも、貴き人々に、御けちゑんもあらまほしく、また心あらん人のみるよしも侍らば、けたの

功徳共なるべき也、

七人びくに下 終

(寛永板)

寛永十二年正月吉日
杉田勘兵衛開板之

(天和板)

天和二年壬戌五月吉祥日　萬屋庄兵衛板

二人びくに上

來りてしばらくも留まらざるは、うゐてんぺんのすみか、しやうめつを此所にさだめがたし、去つてふたたびかへらざるは、めいどきやくしやうのわかれ、こうくわいをたれが家にかとはん、みるも聞くもみなあだなり、しきりにあみだを北芒のつゆにそふ、したしきもうときもおほくかくれぬ、むなしき恨みを東岱のけぶりにむすぶ、などされば、をしむにかいなき幻化の身をすて、しゆしてゐきあるぼだいの身をもとめざる、爰にしもつけの國のぢうにんに、須田彌兵衞といふもの、二十五さいにしてうちじにし、ほまれを高代にのこす、さい女十七さいにして、しうたんのなみだにむせび、おもひの火にむねをこがす、一七日、二七日、五七日もすぎゆけば、うつるつき日のほどもなく、一しうきにもなりぬ、たつときそしをくやう申し、ぼだいをとふぞあはれなる、さいぢよ去年のけふの心ちして、一首かくなん、

うらめしく又なつかしき月日かな

わかれし人のけふとおもへば

いやましのおもひぐさやるかたなく、かなしみのなみだまなこにさへぎり、すいてうかうけいにまくらをならぶるゆかのうへ、なれしふすまのよすがらも、だうけつのあとゆめもなし、せめてわがつまのむなしくなりし、そのあとをたづねまほしく、思ひねのゆめぢにたどるこゝちして、そなたのそらのなつかしさに、夜半にまぎれてしのび出、あしにまかせてたどりゆく、心のうちこそかなしけれ、人めもわかぬわがすがた、いつまでぐさの露の身を、ひよくれんりとちかひにし、心の程のはかなさよ、あいべつりくのことわり、まぬかれがたきみちのべを、こゝやかしことまよひゆく、そこともしもなくたゞよふ所に、のでらの入あひのかねは、けふも暮ぬとつげわたりければ、とあるこいへにたちより、一夜のやどをかりにけり、あるじの女ぼう見まゐらせ、いかなる人にてましませば、いふにやさしき女せうの、年にもならせ給はぬが、いとうれへたる有さまにて、かゝるいやしきさとにきて、ふせやにたち入給ふらんと、ことにあはれみたるけしきにて、すゞろに袖をしぼりけり、其時此女性、

つゝむにはゞかる所なく、此よしかくとの給へば、にようぼううけたまはり、さてはさにこそおはすらん、其いくさのちまたは、是より程ちかく候なり、其時の有樣、人の物がたりをのみ承りてこそ候へ、敵味方たがいにぢんを取、ときのこゑやさけびのおと、天地もひゞく折ふし、須田彌兵衛どのとやらん、一ぢんにすみ出、おほくのかたきをほろぼし、ついにうたれさせ給ふと、よそにのみ聞參らせしに、さては其のかた樣のゆかりの人にてましく〳〵けるぞや、あらいたわしやといひもあへず、たもとをかほにおしあて、しばしは物もいはざりけり、女せう、此物がたりを聞き給ひ、たゞ其時のこゝちして、ふししづみ給ふ有さま、あはれといふもおろかなり、やゝ有て宿の女ぼう申すやう、さのみなげき給ひそとよ、ゑしやぢやうりのならひなれば、たれかわかれのなかるべき、我も人もとゞまるべきにあらず、まことやふるきうたにも、

さきだつもしばしのこるもおなじみち
つれぬばかりやわかれなるらん

とよみおくことのはを、おぼしめしやらせ給はぬや、御身とてものがれ給ふべきにあらず、何しにいたうなげかせ給ふぞといさめ申せば、女せう聞給ひ、心有ける女房のいさめかな、げにことわりとはおもへども、ぼんのふのくもあつふして、もうしうのやみにまよひ、むねの月はれやらず、るてん三がいのきづなおもくして、心のさむる事もなし、たまく〳〵うけがたき人身をうけながら、かゝるつたなき女の身となること、さきの世のむくひ、是ひとへに我がとがなりと、おもひつゞけてかくなん、

わかれぢのうらみはさらになかりけり
くゆるおもひのわがとがなれば

とゑいじ給ひ、打ふすよひのさむしろに、おぎのうは風おとづれて、むしのなくねもかれぐ〳〵に、しかのとをごゑかすかにて、おもひをそふるなかだちとなり、ゆめもむすばぬをりからに、いとゞさびしきかねのこゑ、心をくだくよもすがら、のきもる月のかげだにも、しばしまくらにのこらずして、更行く空ぞかなしき、しばなく鳥のかずそひて、夜もしらく〳〵とあけわたりければ、あるじの女ぼうにいとまこひ、かの野べさして出給ふ、女ぼうもはるぐ〳〵とおくりいで、、きゝつたへ侍りしあらましおしへまゐらせて、なく

なく宿にたちかへりぬ、此女しやうは、よるべもしらぬみちのべを、こゝやかしことすぎゆきて、すそはつゆ、そではなみだにしほれつゝ、其かたとばかりつたへ聞く、心をみちのしるべにて、ふみわけがたきみちしばの、ゆくへもしらぬ野ぢのすゑに、そこともなくまよひゆく、心のうちぞかなしき、さてもつまのさいごのところは、此へんにてやあるらん、かしこにてやあるらんと、ひろき野はらにたゝずみはんべれば、あきかぜひやゝかにおとづれて、まはぎがつゆもちり〴〵に、ちぐさのいろもうらがれて、をちのさとざときりこめて、ものさびしきのべのけしき、かなしびそふるおりふし、一むらさめのふりすぎて、みちのおざゝもなびきあひ、かへらんかたもおもほへず、こころもたへはてゝ、ひとりたゝずむくさむらに、まねくをばなもうらめしければ、

はなすゝきまねかばこゝにとまりなん
いづれの野べもついのすみかぞ

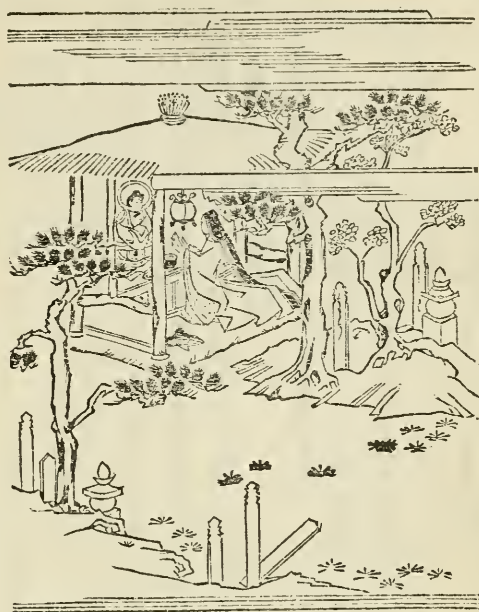
とふるごとまでもおもひいで、われもかくなん、

はなすゝきまねかばまねけさらずとも
のべのちぎりはたがはじものを

とうちながめ、しばしやすらひはんべりけり、にしの山のはをみれば、日もはやかたぶきぬ、かくあるべきにあらざれば、この野べをも打すぎて、たどり〳〵とゆくほどに、げにあきの日のならひなれば、ほどなうくれかゝり、たそがれ時にもなりぬ、山もとちかき所に、まつの一むらあり、そのうちにわづかなるさうだうあり、やどりもとめんたよりなければ、こよひは此だうにあかさばやとおもひ、立よりてあたりのていを見はんべるに、こけむしたるせきたうに、つたかづらはひまとひ、くちたるそとばもんじも見えず、物ふりたるさんまいに、きのふけふのはかとおぼしきも、其かずおほし、いにしへのしるしのまつ、みどりのいろはかはらねども、所々のえだもくちたり、いづれの人のしるしにかはんべりけんと、ゆめの世をくわんじ、あはれをもよほしてかくなん、

うゑおきししるしのまつもえだくちて
たれともしらぬあとぞかなしき

とえいじはんべり、よもすがら、なむゆうれいじやうとうしやうがくと、ゑかうして、あかつきがたに、すこしまどろみけるゆめに、だうのうしろへたちまは



りみるに、こゝかしこより、ふるきがいこつあつまりて、そのしなとり〴〵なり、あなふしぎのことかなとおもひ、おそろしきこゝちしければ、ひとりのがいこつ、ちかくあゆみより、ことばをかはすぞ、ふしぎなる、

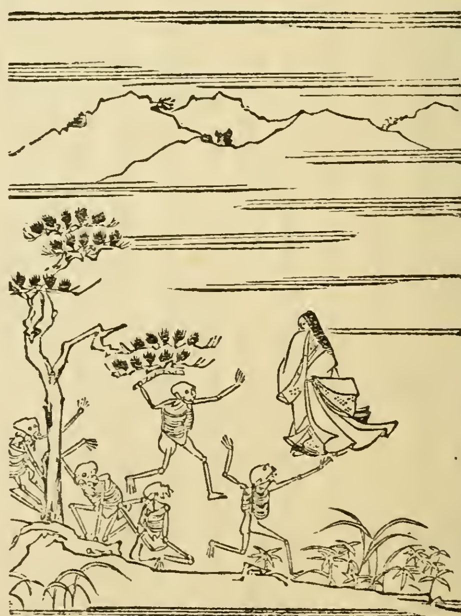
たれとてもその身のはてのいかならん
　よそがましげの人のこゝろや

此女せう、がいこつのうたをかんじ、有がたきことばかなと、かんるいをながし、返歌とおぼしくてかくなん、

しばしげにいきの一すじかよふほど
　のべのかばねをよそにこそ見れ

とうちながめ、がいこつにちかづきよりて、なれあそぶ、此がいこつども、一度に手拍子を打て、どうおんにゝたふ、そも〳〵われらと申すは、ちすゐくわふうふのかりのものを、とくにへん〳〵仕り、六賊ぼんのうのたねをたち、十あくのさとをいで、もとのこきやうにたちかへり、にんげんのはつくを、よそにみるぞうれしきと、たからかにこそうたひけれ、いよ〳〵ふしぎの思ひをなす所に、又がいこつ一人、きやうぎをかざしてまひあそぶ、其ことのはぞありがたき、いかに女しやうきこしめせ、おん身とわれとべつならず、へだて給ふはあやまりなり、御身のかたちうるわしきは、何なれば、此ほねのうへにのみ、にくとかはとのかゝりて、いろどりたるゆゑなり、それは御身のみにてなし、にくとなるはつちなり、うるほひはみづなり、いきのかよふは風なり、あたゝかなるは火なり、此四つの物どもに、何のとがはなけれども、此かり物

をわが身とおもひ、まよひ給ふゆゑにより、火はしんゐのほむらと成りてむねをやき、水はゐんよくのたねとなりて、あいじやくにおぼれて、くがいにしづむなり、かぜは心をひるがへし、りんゑのたねとなるなり、つちはぐちのたねとなりて、むめうのぢごくに入るなり、それ〳〵にうけ取て、かしやくする事ひまもなし、此ことわりをしり給はぬ、女しやうの身こそつたなけれ、ゆめの世を、ゆめぞといふもゆめなれや、なにをうつゝとさだむべき、たゞなにごともなきものを、ゆめとは何をいふべきぞ、ゆめといふべきこともなし、よしなし〳〵とうたふこゑは、松かせのおととなりて、ゆめはすなはちさめければ、ごやのかねなり、しのゝめのそらも、ほの〴〵のとあけわたる、此によせう、つら〳〵あんじ給ひて、さても〳〵ふしぎなるけちゑんかな、いかさま是は、佛ぼさつの御つげなるべし、つたへきくかんたんのまくらのゆめに、五十ねんのゑいぐわをきはめ、たゞゆめの世のたのしみの、あだなることをさとりえて、のぞみをかなへはんべるとかや、われはまた、あれたるさうだうのゆめに、ほだいの心ひらけつゝ、うき世のゆめのさめたる



心ちしければ、かんるいきもにめいじ、だうのほんぞんをふしをがみ、あたりのさとにたち出、じんかのていを見わたせば、ことにいやしげなるすみかの内に、すこしひきこもりたる所有り、立よりて見侍れば、木たち物ふり、にはのかたへはこけむし、木のはちりしき、のきばかたぶきたるが、心ありげにみえたるすまひなれば、この所にたち入はんべりけれ、あるじの女ぼうとおぼしき、いというなるかたちにて、年のよは

ひは、はたちあまりとうち見えたるが、此女しやうを見まゐらせ、いづくよりいづちへ御とほり候かたさまにて候ぞや、よのつねならぬよそほひにて、物思はしき御有さま、いとふしんにこそ候へと、なさけありげに申ければ、女性聞き給ひ、何をつゝみ申すべきとて、こしかた行くすゑの事まで、こまぐ\とかたり給ふ、あるじの女ばう承り、さてはありがたき御心ざしにて侍るなり、此所へ立入らせ給ふ事、たしやうのゑんなるべし、あまりうれしく候へば、みづからの物がたりをも申すべし、われは都のものにて候が、おさなき時、人あきびとにかどひとられ、かゝるあづまのはての、しるべなき所にうられきて、是より又、むつのおくとやらんへ、うりわたすべきよしありしに、此所ににかうのおはしけるが、我なげく有樣を、わりなくあはれみ給ひ、是にとゞめおかれて侍りしなり、さる程ににかう一人子候ひつるに、ふうふとなづけ給ひ、都のふぼよりも、あはれみふかく候ひつるに、程なうにかうにおくれ、たつきなき身となり、世にかなしき事のみおもひ、あさましき心にて、あかしくらし候所に、思ひの外に又、こぞのふゆおつとにをくれ、今は

はやきえもやらばやと、のこれるゆきの日かげ待まの心ちして、せいやうのあしたにも、いにしへを思ひ出、うぐひすのはつねにも、なみだをもよほし、散花のなごりを思ひ、暮行くはるをおしみ、花の衣をぬぎかへす事もはかなく、うの花のかきねにしげるよそほひ、山ほとゝぎすのおとづれ、花たちばなのかを聞きても、むかし戀しく、そらかきくもるさみだれごろは、いとゞ心もはれやらず、しげるわかばのこのまの風、とぼそにふき入れ共、心もすゞしからず、三ふくの夏も過行けば、何とやらん風の音も、身にしみて物がなしく、たまゝつる頃にも成ぬれば、なき人のくるやらんと、夢のおもかげをしたい、初かりのこゑは聞け共、其方よりのおとづれなし、鹿のこゑ虫のね、思ひをそふるはしとなり、月の夜はねやにも入らず、ちぢのかなしみ我身ひとりとながめやり、木のはの雨、しぐれの空、のきばにつもる白雪にも、むねのうづみ火はれやらず、朝のくも、夕の雨に心をなやまし、たましゐをいたましむること、一方ならず侍るなり、つたなきかなや、ひくわらくようの風の前には、無常のことはりをこそさとるべきに、さはなくて、何事も思

ひのたねとのみ成はてゝ、世を秋風の心ちにてこそさふらへ、一じゆのかげ一河のながれ、思召やらせ給ひ、是にしばらくとゞまりおはしませ、ことしも打すぎて、はるもなかばに成りさむらはゞ、みづからも御とも申し、何方へも立こへて、たつとき御僧にたよりまゐらせて、もろともに出家と成りはんべりて、ぼだいのみちにおもむき、ながき世のやみをはらし候はん、つとめをもなし侍らんと、さまぐ\にいたはりとどめける程に、あるじのなさけにほだされて、其年も過行き、きさらぎのそらになりにけり、やがて思立べしとしたゝめけるに、あるじの女ぼう、かせの心ちとなやみける、

二人びくに上 終

二人びくに下

かくて、けふよあすよとすぎゆけども、しだいく\におとろへ、よのつねのかんばせはかはり、花のかたちもやつれはて、あはれなりける有様なり、なげくにかなはぬいのちなれば、いまをかぎりとなりはて、ねぶれるがごとくにしてうせ給ひぬ、うゐてんぺんの世のならひ、きのふ見し人もけふはなく、なき人はかさなり、あしたにかうがんあれども、ゆふべにはつこつとなり、あだしうきよのことわり、のがるべきにあらねども、かゝるうきめを見る事、そもなにのゐんぐわぞや、時しもころはやよひのすゑ、花もちり、春もくれゆくそらなるに、日も入あひのかねなりて、ことゝふ人もあらざれば、いとゞあはれはまさりつゝ、天にあふぎ、地にふし、歎き給へどかひぞなき、かく有るべきにあらざれば、さと人をかたらひて、むなしきのべにぞおくりける、心なきさと人なれば、けうときのべにおくりすて、みな我やどへぞかへりける、彼女しやうは、あるじなきあばらやに、物すごげなる有様に

て、涙にくれて、ひとりたゝずみ給ふ心のうち、何にたとへんかたもなし、あさましや此人と、おなじしゆつけの身と成て、一つはちすのえんとのみちかひしこと、たゞいつはりのかねごとゝ成はてぬるぞかなしき、せめてなごりのあまりに、此所にしばしとゞまり、五七日のかうげをとり、ぼだいをとひてまゐらせんと、ふだんのねん佛おこたらず、七日と申すに、のべに行て見侍れば、けぶりともなしまゐらせず、たゞそのまゝにてすておきたり、なつかしさのあまりに立より見れば、花のおもかげあともなく、いにしへの人ともおぼえず、かみはおどろのごとくみだれて、五たいははれたゞれ、おそろしげなるありさま、見るに涙もとゞまらず、一首かくなん、

はなとみし人のおもかげいつのまに
野べのかばねとなるぞかなしき

せめてつちをもかけまゐらせぬ、心なき身のつたなさよと、なく〳〵かへり侍りて、こしかた行すゑの事をくわんずるに、只何事も夢なり、かほどあだなる夢の世に、人をうらみ身をかこち、ねたましき心をはなれずして、もゝとせのはかりごとをなし、物のあはれをもわきまへず、あさ夕めしつかふ者共の、ねにふし寅におき、たちゐくるしき物ごとに、心をわづらはして、しばしが程もやすき心なからんに、なさけをしらざりけることよ、かへす〴〵も口をしき事、今更くゆるにかいぞなきと、いよ〳〵念佛し侍りて、二七日に行きて見れば、空ふく風はよもにしうきをおくり、かたちははれにはれて、所々のにくもきれ、はらわたはやぶれてあたりにみだれ、犬はあらそふて、とうざいにむらがる、あまりのかなしさに、

みな人のかざるすがたのほどもなく
かゝるべしとはしるやしらずや

と打ながめ、もとの宿にたちかへり、じやうとうしやうがくのみ、思入てぞとぶらひける、三七日に行きてみれば、かたちもつゞかず、にくもやぶれちりて、しろきうぢとなり、あをばいはあつまりて、あたりにみち〳〵、らんじやのにほひは、しうきとなりて人をけがし、いにしへのおもかげは、いづちへかゆきけん、あさましきけしきなり、是をみる人、たれかふるきよしみを思はんや、されば人は皮をのみあいするにや、たゞいつはりのすがたなる事をしらずや、何れの人

か是にあらざらん、くわんじて一しゆかくなん、
とにかくに身はうきものとしられたり
なにのなさけのこゝにあるべき
と打ながめ、とんせうぼだいと、ゑこうしてこそかへりけれ、四七日にもなりぬ、行きて見るに、はやしうきもうすく成りて、ほねにのこるにくもかはき、白きうぢも、こゝかしこにはひちりて、あをばいも今はなし、みだれがみは風にちりて、所々の草のねにまとはり、何れの人のはてとも見えわかず、あはれをもよほして、かくなん、
草むらにのこるかたちはつゞかねど
わすれもやらぬいにしへのひと
とうちながめ、たゞ夢のよをくわんじてかへりけり、五七日にもなりぬ、けふをなごりと思ひ、一しほあはれはまさりつゝ、のべに行きてみるに、あたりの草もしげりあひ、よもぎがもとにのこれる骨も、つゞきたる所はなし、なん女のさかひもなく、雨にそゝぎ日にさらして、しうきもさらになし、しろきこつは、つがひはなれて、こゝかしこの草のねにあり、其しるしをなすべきにもあらず、あととふ人もあらざれば、何れの人のはて共しらず、たゞ月のみてらして、むなしくくちはてなん事のかなしさよ、かく思ふ我身、又是にかはらんや、さてもあだなる夢の世に、心をとゞめていたづらに、なんによの思ひやむときなく、あいねんしうしんふかくして、ごせぼだいをよそに見て、日夜ざいがうひまもなく、あかしくらしける事よ、さきの世のむくひまで、思ひ出るもあさましく、けふをなごりの事なれば、やるかたもなき心の中、たれにかたりてなぐさまんと、みだれ心にまかせて、
なきあとの野べにこゝろをとゞめおきて
たちわかれゆく身をいかゞせん
たゞ何事も夢なり、むじやうのことわりをしらずして、目に物を見、耳にこゑを聞き、いたづらに心をなやまし、身をくるしめける事、かへすぐ\も口惜くおぼえて、それよりすぐにたどりゆき、ある山でらにたづね入り、たつとき御僧に歸依申し、髪をそりかいをたもち、花の衣をすみにそめ、けさはちぶくろをくびにかけ、しゆつりの道に入給ふ、心ざしこそ有がたけれ、此僧の給ふやう、むかしはどう心有る人は、てらに入てちしきのをしへをうけ給ひしが、今は昔にか

はり、少しもどう心有る人は、てらをいでらるゝなり、其ゆゑは、ちしきに道心なく、あつまる僧も心ざしなくして、おそろしき心なるゆゑなり、心ざし有る人の、まじわるべきやうあらざれば、寺を出るはことはりなり、かた〴〵のごとく、世をすつる人も、しゆつりの道を思ひ給はず、さるほどにざせんくふうといふ事を夢にもしらず、少しなりとも物をしる人にまさらん心をはげます、しかるあひだ、ついにめうりのきづなをだにはなれず候、あいかまへて〳〵、いたづらに月日をおくり給はゞ、かみをそりたるしるしあるまじ、たゞとりかへたるざいけなるべし、あるうたに、

たづねいるみやまのおくもなかりけり
　もとのこゝろをつれてすむ身は

と御入候、たゞもとの心をすて給ふべし、もしも心ざし有る人と御聞き候はゞ、みちのとをきもかへりみず、いづくまでもたづね行き給へ、とかく此の身を有る物と思ひ給ふべからず、されば女なりとて、誰にはぢ、たれにおとり思はんや、もとより男女のさうもなしと、こまやかに、をしへていだし給ひけり、びくに、ちしきのをしへにしたがひて、諸國しゆ行に身をやつし、ぶつじんにまふで、一大事のいんえんをいのり給ふぞ有りがたき、ある時山中を過行き侍れば、年のよはひ、八じゆんあまりとおぼしき、こしかゞまりたる、うば一人行きあひ侍りぬ、びくにの給ふやう、御身は此あたりの人なるべし、もしも心ざしのある、きにんやましますととひ給へば、うば申やう、其御事にて候、是よりはるかに引入りて、人のかよひまれなる所に、わづかなるあんしつをむすび、たつときびくにまし〳〵候、よのつねの人にあらずと承り候とぞかたりける、さてはおしへ給へとて、道すがらの有さまをくわしく聞き侍りて、たちわかれぬ、おしへにまかせて、みねに上りたにゝ下り、わけ行くすゑのはるばると、みちは木のはにうづまれて、岩にこけむし、それともしらぬみ山べを、たづね入りて見侍るに、岩のはざまに、かすかなるしば引むすぶ草のいほ、わづかに事とふものとては、しづがつま木のをのゝおと、木づたふさるのさけぶこゑ、みねのあらしや谷川の、いはまおちくる水のおと、ことたふよすがとやなりぬらん、さてあんしつにちか付て、是はあんぎやのび

くににて候が、まみへ申したき心ざし候て、是まで參り候といふ、あんしつのうちより、ひたいには四かいのなみをたゝみ、まゆにはゑん山のしもをたれ、こしかゞまりたるびくにの、すみぞめの衣にけさかけ、つゑにすがり立出て、是へ入らせ給へと仰ける、さし入て見侍るに、一まなるあんしつに、少し佛壇のかたちをなし、かなわにほうろくといふ物をすへ、ゑんざ一つより外はなし、きやく比丘尼申すやう、かやうにかみをそり、衣をすみにそめて候へども、未だ一大事のいんえんをしらず、びくにゝ成りたるかひさらになし、御じひにしめし給へといふ、老びくにこたへて云、みづからも未徹の者に候へども、佛祖此かた、をしへのおもむきおきし事ども、おろ〳〵申すべし、それしやうしりんゑのこんぽんは、かりの此身なる事をわすれて、うさうにしうじやくするまよひの心よりとんじんちの三どくの心はできて、日夜我をせむるなり、とんじんちわかれて、八萬四千のぼんのふのやまひとなる、是をむしりんゑのがうといふなり、此心にはなるゝ事かたし、佛道しゆぎやうと云は、心を以て心をせむるをほんいとするなり、心をほしいままにして、心にしたがふ時は、三あく四趣に引て入、心をいましめて、心をしたがゆるは、佛かいに入るの道なり、心は第一のあたなりといへり、心の鬼われをせむる事をしるべし、されば心の鬼におそれ、心の佛をうやまふを、ごせをねがふといふ、六道りんゑと云は、しんゐをもつてぢごくに入、よくしんをもつてがきに入、ぐちをもつてちくしやうに入、にんかをもつてしゆらに入、五かいをたもちて人げんとなる、十かいをたもちて天上にしやうず、かくの如く六だうりんゑ、たゞ是一しんのなす所なり、此上に、しやうもん、ゑんがく、ぼさつ、佛の四じやうちを加へて、十かいとなづけ、みな是一心の中に有る十かいなり、經にいはく、三がいゆゐ一心、げむべつぽう、心佛及衆生、ぜさんむしやべつと說き給へり、然るあひだ、心に心を付けて、心のあるをきよむるの外はなし、佛はむしんむ念なり、凡夫は有心有念なり、心あれば三がいなり、三がいはみな苦なり、經にいはく、三がいむねん、ゆによくわたくと說き給へり、佛は此のせかいを、ひのいへとゝき給へ共、ぼんぷは此心をしらずして、くわたくをたのしみて、せいりやうのすみかとなし、あ

いねんしうじやくふかうして、みらいえいごう、あくしゆのくいんをぞうちやうして、しゆつりする事叶はず、さればぼんぷの心に、四つのてんとう有り、じやうらくがじやうの四つなり、一つにはげんげむじやうの身をもちい、今をもしらぬ命にて、此せかいに心をとゞめて、じやうぢうの思ひをなす心なり、二つにらくと云は、此身は苦體なる事をしらずして、らくなりと思ふ心なり、佛は八苦をときたまへり、しやうろうびやうしの四つの苦有り、をんぞうゑく、あいべつりく、ぐふとつく、五しやうをんく、此四つをそへて八苦と云、斯の如くの苦有る事をしらずして、らくなる身と思ふ心なり、三つにわれと云は、元來此身、ちすゐくわふうのかり物にして、我と思ふべき物なし、此ことわりをしらずして、かりの此身をわがみと愛し、とんぢやくをなす心なり、四つにじやうと云ふは、ふじやうゑあくの身を持ちながら、此ことわりをわきまへず、せうじやうなりと思ふ心なり、もし此身のふじやうをしらば、なんぞ此身にあいぢやくせんや、めしる鼻しる大小べん、五ざうはらわたに至るまで、一としてきよき事なし、此にくやぶれてうぢとなる、かへりみずんば有べからず、かるが故に、不じやうくわんをたて給へり、不じやうくわんをなさん人は、かばねのおほき塚のほとりに、ぢうせよとなり、かやうのことわりにまなこつけて、けんごのこゝろにぢうして、日夜かんだんなく身心をきよめ、この心にはなれ給ふべし、とふていはく、御しめし有りがたしといへ共、此の心にはなるゝ事かたし、いよ／＼方便をたれ、此心にはなるゝぎやうりきをさづけ給へ、こたへていはく、ぎやうは萬行なりといへども、今どきつよき行なりがたし、ことに女人なれば、身に相おうの念佛の行を用ひ給ふべし、しかりといへども、しんじんなくしては叶ふべからず、人のこんきまち／＼なれば、心ざす所には、しやべつ有るべし、一つにはつねさまの人、他力本ぐわんをたのみて、ごくらくじやうどに往生すべき心にて、一すじにねんぶつするも有り、二つにはむしごうらい、りんゑする事は、とんじんちのねんをたねとして、生々世々苦をうくる事をなげきて、三どくの心を滅すべき願力をもつて、しやしんの心をもちいて、しん／＼をせめて、ざいがうをざんげして、一すじに念佛するも有り、三つにはねん

ぶつは、みだのりけんと觀念して、一さいのねんをせつだんする心をもちひて、ぜんあくの念ともに、切拂ひ〳〵、ゆふみやうの心にて、念佛するも有り、四つには、生死をはなるべき心を本いとして、たゞ今をりんじうと思ひさだめて、一念〻〻に命をすつる心にて、今生の事をすて、せつにきうに、念佛するも有り、是はひとへに、りんじう正念の念佛なり、故にこじんのいはく、へいぜいりんじうなれば、りんじうも又へいぜいといへり、五つには、ばんじにかゝはらず、しん〴〵けんごにして、一さいをはなるゝ心をもつて、念佛するも有り、是則ちりさうりねんのねんぶつ也、人々の根氣にしたがつて、其しなしやべつ有りといへども、しん〴〵ゆうめうの一ねん、心にしやべつなし、經にいはく、一ねんみだぶつそくめつむりやうざいと說き給へり、此のもんうたがふべからず、きやくびくにうけ給はり、御しめしにまかせ念佛すべしとて、日夜ふだんの念佛おこたる事なく、ゆうめうしやうじんのしん〴〵をもちひて、年月を送るといへども、いまだ夢のさめざる事をなげき、とふていはく、ずゐぶん念佛のこうつもるといへども、あるひはしゆせうの心となり、あるひはしやうじ〳〵の心となり、あるひは物にぢやくせぬ心とはなれども、ついに此心にはなるゝ事をしらず、とにもかくにも、むめうの心とおぼえ候はいかん、らうびくにこたへていはく、偖はくわんねんをもちひて、一さいうゐほう、によむげんほうやう、によろやくによでんと觀をなすべし、是則ち佛のしめし給ふほんいなり、客びくに、此のをしへをうけて、觀念をなすこと年ひさし、しかりといへども、じつうの念やまざることをしつて、又とふて云、御しめしにまかせ、によろやくによでんの觀をなす事、年久しといへども、いまだ、によろやくによでんの心、むねにとゞまつて、此心にはなるゝ事なしとおぼえ候、ねがはくは方便をたれ給へ、此の時老びくに、きやくのむねを取て、なんぢは何ものぞ、何ものぞとせむるなり、客びくに、心得ず、いよ〳〵せめてむないたをきづきて、みち〳〵といひてつきたをす、客びくに、おきあがらんとす、又つきたをして、打ていはく、なし〳〵なしといへり、客びくに、をき上りて、てをうつてわらひていはく、なし〳〵〳〵といひて禮をなす、やゝありて、きやくびくに、有りがたし

有りがたし、いつぞや草堂のかりねの夢に、なし〳〵なしとうたひ給ひしがいこつは、まさしく佛にてまし〳〵けるぞや、此の心をしらずして、むなしくすごしける事よ、夢さめてこそ是はしれとて、ずゐきのなみだ袖にあまり、此のびくにを師とたのみ、つまぎをとり水をくみ、あさ夕つかへたてまつり、ついにくふうじゆんじゆくして、うゑんむゑんをさいどして、大わうじやうをとげ給ふ、其あとにだうをたて、すゑの世にいたるまで、きせんくんじゆの參けい有り、めでたしといふもをろかなり、

二人びくに下　終

（寛文版）
寛文五乙巳暦正月吉日　松會開板

四人比丘尼上　一名花の情

ぼんなふそくぼだい、生死そくねはんとは、これ佛の金言にあらずや、されば佛種はえんよりおこりて、ながく生死のくがいをはなれて、こがねのきしにいたり侍る、何をもつていふとなれば、後花ぞのゝゐんの御宇に、都さがのゝほとり、をぐらといふところに、清月妙海とて、たつとき僧尼たち侍り、此のとんせいのゆらいを尋るに、ひんがしの京に、ある大福長者有り、其子息に、猪名野篠之丞とて、世にならびなきびなんあり、そのころ又にしの京に、はつ花といへる女のとしのほど、二八あまりなるが、容顔まことにいつくしく、ふようのまなじり、たんくわのくちびる、せんけんたるりやうびんは、あきのせみのはによそへ、えんてむたるさうがは、遠山の色をふくむけしき、いかなる笙の岩屋のひじりなりとも、心まよはではあらじと、おもふばかりの女房あり、たゞ容色の世にすぐれたるのみにあらず、をのゝこまちがもてあそびしみちをまなび、うばそくのみやのすさみ給ひし跡ををひしかば、月の前にびわをたんじては、かたぶく影をまねぎ、花のもとに歌をゑいじては、うつろふ色をかなしめり、さればそのなさけをきゝ、其かたちを見る人ごとに、心をなやまさずといふ事なし、父はなを人にて、母なん藤原なりける、家とみ類ひひろくして、人のおもんずる事おろそかならず、明くれ遊宴にのみ日ををくり、月をかさねてすむ宿の、庭の草木のいろ〳〵に、數をつくしてうへられたり、春はまづさく梅のはな、たが袖ふれしにほひぞと、とへどこたへぬおぼろ夜の、月も影さすあさみどり、糸よりかけてしら露を、玉にもぬけるとゑいぜしは、西のおほ寺の柳かげ、みどりもたつや高砂の、おのへの松も春くれば、いまひとしほの色をのみ、ましらなくなるあしびきの、山は都のふじのねの、雪とや見まし大ひえの、をびえにたてるはつざくら、ひらや横川の遲櫻、よしのはつせやあたごのだけ、ぎをん清水地主のはな、おりたつ田子のうら風の、匂ひをさそふ藤の花、なみも色ある吉野川、きしの山ぶき花のひもを、ときはの山のいわつゝじも、ゆかずしてみる庭もせに、えだをまじへてうへられたり、さて又夏は玉川の、さとのしる

べにあらねども、かきねをうづむ卯の花の、雪はづかしき月影の、空にかたらふほとゝぎす、花たちばなの香をとめて、なくはむかしやこひぐさと、いふべきはなのびじんさう、さゆり ひめゆり はかたゆり、ぼたん しやくやく かざぐるま、在原のなりひらの、あづまのたびに露わけし、うつの山べのつたかえで、かものまつりにかけまくも、かしこき御代にあふひ草、ひかる源氏の大將の、しろくさけるはと名をとひし、たそがれどきの夕がほのはな、池にははちすをうへて、かもめおし鳥のなくねをあひし、秋の草には おぎすゝき、きゝやう かるかや われもかう、あるひは僭正へんぜうの、我おちにきと人にかたるなとたはぶれし、さがのゝ原のをみなへし、えだもたはゝに露しげき、みやぎがはらの萩の花、そのぬししらぬ秋の野に、たがぬぎかけしふぢばかま、慈童がよはひをのべたりと、きくもめでたき花の露、ふりみふらずみさだめなき、しぐれの雲のたつた山、たかををぐらのみねにしも、にはのつき山もみぢして、さながらにしき燦爛たり、冬は枯木のえだ／＼も、ふりつむ雪のしろたへに、又はなやかなるそのけしき、四きをり／＼はめのまへに、げにたぐひなき家ゐかな、そも／＼ころはやよひなかば、千本の念佛とて、きせん上下のかずかずに、袖をつらねてまふでけり、はつ花御前もこしにめして、念佛にこそ參られけれ、こゝにゐなのさゝの丞は、わかたうあまたひきつれて、ふなおかやれんだい野に出て、小鳥がりしてあそびけるが、かへさに千本の寺に入て、狂言を見ゐたるところに、わかざぶらひわかき女房だち、かぶろはしたやうのもの廿人ばかり、こしの前後をうちかこみてぞをりける、さゝのぜうこれをみて、いかなるかたにやと、心もとなくおもふところに、春風さつとふきおちて、こしのすだれをふきあげたり、內のていを見入ければ、としのほど二八ばかりの女の、いふばかりなくうつくしきが、妖桃の春をいためるよそほひ、垂柳の風をふくめる御かたち、こはそも天人のやうがうかと、身の毛もよだつておもひけるが、あなあぢきなや、たま／＼人間と生れきて、心にあはぬをちぎらんより、かやうの人と秋の田の、かりそめぶしの夜なりとも、露のたまくらならべてこそ、今生のおもひでとなるべけれと、おもふ心も戀となり、あさからぬ身にあこがれけれども、

かくといひよるべきたよりもなければ、たゞばうせんとあきれつゝ、心空になりて、露の命もきゆるやうにおぼえけれども、せんかたなみだにむせびながら、えんまだうを立出でゝ、宿に向つてあゆみけれども、さらに前後もわきまへず、たゞ跡へのみひきかへすこゝちしければ、行てはかへり、歸りてはゆきしけるほどに、春の日ながしといへども、やう〳〵西の山のはに、いりあひのかねを、月の夜かげにわが宿にかへり、とやせましかくやせましと、おもひめぐらしけれども、いづくいかなる人ともしらねば、ましてかくといひしらすべき、たよりなみぢの舟人の、かぢをたえたるふぜいにて、ゆくゑもしらぬ戀の道に、まよふ心をとりなをし、きつとあんじ出しけるは、しよせん此事、我ちからにてはかなひがたし、いかなるをんやうじにもあひて、たづねて見ばやとおもひける、そのころ都にかくれなき、うらなひの上手あり、過去げんざいみらひの事を、鏡にうつすごとくに、くもりなくみとをすゆへに、世の人是を、さすの神子とぞ申ける、かれがもとへ尋行、をりふし宿にあり、あひてたいめんして申やうは、御身は人をこひ給ふが、其人のありかを、このはかせにとはんために、たゞ今これへきたられたり、其方のおもひ人は、西の京の住人に、あはづ左京の息女にはつ花と申て、生年十六さいになり給ふ人なりと、さも明らかにぞうらなひける、さゝの丞これをきゝ、あまりの事のうれしさに、とかうの言葉にもおよばず、はかせのかほをつく〴〵とまぼり、さても明白なるいひ事かな、かねてよりやしりぬらんと、あやしきほどにおもひつゝ、さらばといひてぞ歸りける、かくて日數はふりゆけども、とかういひよるべき中立もなければ、めくらのつえをうしなへるごとくにて、いとゞこひしき事いやまさり、心もしほれたましゐうかれて、かのおも影の身に添ひて、おきもせず、ねもせでなげきくらしつゝ、うつら〳〵と煩ひけるが、日々におもくなり行きければ、父母大におどろき給ひ、醫療さま〴〵つくせども、戀の病のくせとして、さらにしるしもみえざりければ、めのとの有馬といへる女房、かたときもそばをさらずゐたりけるが、さよふけわたる鐘の音の、ひゞくまくらをうごかして、いかに申さんさゝのせう、御身さまの御わづらひ、なにともさらにわきまへがたし、もしも人をや

こひ草の、葉ずゑにむすぶ露程も、御心にかゝる事あらば、つゝまずかたりおはしませと、忍びやかにぞ申ける、さゝのせうは聞き給ひ、よにくるしげなる息をつき、あらはづかしやうすものゝ、つゝむにたらぬ花の香の、もれてもさとり給ふかや、今はなにをかかくすべき、いつぞや千本の御寺にて、西の京に住給ふ、左京殿の御息女、はつはなの御すがたを、ゐされしこしに音づるゝ、風のゐげたる玉だれの、ひまもとめつつ見そめしより、おもひは空にみちしばの、露ときえなんわが跡を、あはれととひてたびたまへと、なみだをながしのたまへば、めのと此のよしうけ給り、扨殿ははつ花の、火に御むねをこがされて、さやうに煩給ふかや、その御事にてさふらはゞ、いかにもたよりのさふらふぞや、かのきみの御内に、若葉と申す女房あり、かれとわらはゝとしひさしく、はらからのごとくむつぶなれば、たのみ申して見候はんに、御文あそばし候へと、心やすげにいひければ、さゝのせううれしげにて、重きまくらをかろくあげ、硯料紙をとりよせて、すみすりながし筆をそめ、つもるおもひのことの葉を、さもあはれげにかき付る、すみの匂ひも高まきゑに、千鳥をかきし文箱に入れてぞわたされける、ありま御文うけとりて、いそぎにしの京にしも、ゆきまのわかなにたいめんし、何となき物語りなどして、かの玉章をとり出し、はじめおはりの有りさまを、くはしくかたりて、ひたすらに御身を頼み奉る、御返事をとりてたび給へといひければ、こはむづかしの仰事や、さりながら有馬どのと、わかなが中の事なれば、いかでいなとは申べき、御返事の義は、おぼつかなくはさふらへ共、御きげんをうかゞひて、御けんに入れ候はん、それにしばらく待給へとて、御文箱を袖に入れ、つまどをきりゝとおしひらく、みすのをひかせにほひくる、初はな御前にまいり、御けしきをうかゞひみれば、みづし棚の文どもを、あれかこれかと引ひろげ、みぬよの人を友として、こよなうのどかなる御ありさまなり、わかなたよりあしからずとおもひ、かの玉づさをとり出し、小聲になりて申やう、いかにはつはな聞しめせ、過ぎにし春の比とかよ、千本念佛へ御まいりのとき、郭の内にかくれもなき、朝日ちやうじやの御子息に、さゝのせうとかや申人、きみさまのおすがたを、ひとめ御覽じそめしより、しづ心なきこひ

やみに、いのちもあやうくましますよし、めのとの有馬と申人、わらはあげまきのときよりも、たがひに心をうちとけて、むつまじくする中なれば、まどひきたりて此ふみを、御めにかけて一言の、御返事もあるならば、いかゞはうれしかるべきと、たのむの雁の音になきて、なげきしづめるなみだ川、ながるゝ水のうたかたの、あはれなるかたに心ひかれて、きみのこゝろはしら露の、玉づさうけとり參りたり、そと御覽ぜられて、たゞ一筆の御返事を、あそばし給はるものならば、わらはがためには此とし月、御みやづかへつかまつる、その御なさけとおもふべし、ことには戀をするがなる、富士よりまさるさゝのせうの、むねのけぶりもきえぬべき、つゆの命をたすけ給はゞ、これぞまことに極樂の、ぼさつのぎやうとや申べきと、言葉をつくし申ければ、はつはな御前は、おもひよらぬ御事なれば、あきれはてゝおはしけるが、しばし有て仰せけるは、いかにわかな聞給へ、わごぜの人にたばかられて、とやかくやてふみづからが、心をまよはし給ふとも、水上たえし瀧のいと、じゆくせぬえだのこのみなれば、いかにいふともかなふまじ、その上もしも此事を、二人の親の聞給はゞ、はつはなともに春の野の、雪のしたなるわかなまで、つみにしづまんそのときは、くゐのやちたびもゝちどり、鳴きかなしむともかひあらじと、涕ぐみての給へば、わかなこの由承り、しばしは物をも申さずして、うちうつぶひてゐたりしが、やゝありて申すやう、仰はさにてさふらへ共、かたらばものを聞こしめせ、我も人もをんなの身には、よろづ心にまかせぬこと、高きいやしきにかぎらず、五障三従と申て、ふかきさはりのありそうみ、はまの眞砂はよみつくし、つくすともつきじ此つみに、しづみはてたる身にしあれば、諸佛もこれをすて給ひて、うかぶ事なきと承る、さればある經にいはく、三千世界男子しよぼんなふがうしゆしや、女人のごうしやうととけり、君さまにむかひ參らせて、かやうの事を申さんは、釋迦に經とかやにてさふらへども、おもふ事をいはぬは、はらふくるゝこゝちすれば、口にまかせて申すなり、まづ五障と申すは、法華經の說をちやうもん申すに、ひとつにはぼんでんわうとならず、ふたつには帝釋ともならず、三つにはまわうにもなりがたし、四にはてんりん聖王にもならず、五に

は佛にならずととき給ふ、又三從と云ふは、いとけなき時は親にしたがひ、さかんなるときは夫にしたがひ、老ては子にしたがふ、されば女に家なしとて、おつとの室にいたらずは、身をいづくにおきつなみ、立ちよる方もあらしふく、草の葉ずゑにをく露の、きえやすき身を觀ずれば、こゝろぼそくぞおもほゆる、人は廿になりぬれば、さかり過行く朝がほの、色も匂ひも日にそへて、おとろへゆけばなに事も、おもふにかひはなきものを、あらあさましや人の身の、ふたゝびわかき事はなし、みめもかたちもはなやかに、こひしと人の忍ぶとき、なさけをかけさせ給ふべし、いまにとしよりこしかゞみ、みゝもきこえずめもかすみ、はなうちたれて齒もおちつ、見にくゝならばたれ人か、こひしゆかしと忍ぶべき、さればある歌に、

をりにふれことにふれてもなさけあれ
なさけはひとのためにあらねば

かやうの歌もさふらふぞや、一樹のかげにあひやどり、一河のながれをくむことも、他生のえんときくものを、ましてやきみに心をかけ、かゝるおもひの玉づさを、かきをくり給ふ事、此世ならぬきえんなり、前世のちぎり有る故に、たよりの風やふきつらん、其上人の文をえて、かへり事せぬその人は、死してかならず手口なき、蛇身を得るときくときは、きみの身の上おそろしやと申すければ、君もさすが岩木ならねば、あはれとやおぼしけん、うちしほれたるふぜいにて、さてもわごぜはよしなきことに、わらはをうらみかこつものかな、力なし此うへは、もしもちゝごや母うへの、きこしめされはみづからは、あらしにむかふはつ花の、ちりなん事こそかなしけれと、おつる泪の玉づさの、箱をひらけば空燒の、匂ひは四方にみち〳〵て、とる手もくゆるばかりなる、紅葉重ねのうすやうに、筆をつくしてかき給ふ、其文のことのはに、さきそめし、千本のはなのかほばせを、見そめしよりも我こゝろ、空ゆく雲のきえ〴〵と、きゆるばかりにおもひねの、とこの山風夢たえて、まくらにのこる月みれば、ちゞにものこそかなしけれ、わが身ひとつの戀ゆへに、身はをとろへてかげろふの、あるかなきかの世の中に、こひしき人と朝がほの、花のうへなる露のまも、まくらならべてかずつもる、思ひをかたりなぐさまば、身をしる雨にくちはつる、袖かはくまもあ

るべきに、かなしきかなやわがこひは、いはぬばかりぞなにはなる、蘆のしのやのしたにたく、煙はものかむねの火の、きゆるまもなきくるしさを、つゝむとすれどうすもの丶、ほたるもいまは我身より、あこがれ出る玉かとぞ、おもふに付けていにしへも、和泉式部と聞えし人、おもひにしづむみたらしの、河邊にすだく螢を見て、

ものおもへば澤のほたるもわが身より
　あこがれいづるたまかとぞ見る

と、よみをく歌のこゝろまで、わが身のうへとあはれにて、そゞろにぬる丶袖の雨、ふりにし世にもわがごとく、ものおもふ人もさま〴〵有りけれども、山鳥のおのが〳〵しく侍れば、まづ〳〵筆をとゞめてかくばかり、

くちはつる袖のなみだの雨露に
　ひもうちとけよこふるはつ花

とにかくに〳〵、柳の風にけぶりのごとき御返事を、まつが浦島のあまの袖も、かはくときにしあふみの海の、志賀のうらみもあるまじや、かしくと書き止めたりければ、はつ花よく〳〵見給ひて、さても妙なる御ふみや、御筆の跡のうつくしさよ、げにも御心のみだれたるにや、御手のふるひたるすみ色は、唐土日本にかくれなき、その丶道風と申とも、これにはいかでまさるべき、かゝるやさしき御ことなどの、わらはに心をつくし舟の、こがれさせたまふことは、まことに前世のちぎりにやあらん、このうへは御返事申さではかなふまじ、さりながらかくのごとき御ふみに、わらはが山の井のごとくなる、心の水ぐきは、君のみるめもはづかしの、もりの木の葉をかきあつめてもよしなし、たゞ御歌の返しばかりをとて、硯をならし筆をそめ、こゝろは空にうき雲の、つらなる雁を繪に書きたる、たんざくをとりいだし、しばし案じてかくばかり、

色ふかき言葉の玉をなす露に
　ひもとけつゝもなびくはつ花

と書きて、わかなにこそは給はりけれ、若菜めんぼくほどこして、我住家へたち歸り、すは御返事よ參らせんと、有馬にこそはわたされけれ、ありま大きに笑をふくみ、いそぎやかたに歸りけり、いとおしやさゝのせうは、めのとをつかはされしより、文の返しを待ち

こがれ、つまどをならす風の音も、すはやありまが歸るやらんと、むね打さはぎおもひねの、床にもつかず立うかれて、おはしけるところに、めのと御前にまいり、御返事を參らする、篠之丞うけとりて、いそぎひらきて見給ひて、愁ふる色を引かへて、ほうかうが笑をふくみ、いかに有馬聞給へ、そなたのなさけなかりせば、いかで此戀かなひつゝ、かやうの返事をみるべきぞや、ひとへにおことをそれがしが、むすぶの神とぞんずるなりと、よろこび給ふはかぎりなし、此ほど迄は草の葉の、色にまがひし顏色も、桃李の色のほがらかに、違例もたちまち平癒して、もとの姿をみるよりも、かなたこなたの神々を、ふかく祈りし其のしるし、今ぞ有馬もよろこびける、かくて其日もくれければ、人め忍ぶのすりごろも、じんじやうに出立でゝ、めのとのありさまを案内者にて、にしの京へぞいそがれける、時しもころははつ秋の、なかばもすぐる夕闇の、たど〳〵しげなるみちしばの、露わけゆけば西の京、あはづどのゝ住みたまふ、屋形もちかくなりにけり、有馬と若菜はかねてより、相圖をいたせしことなれば、おもての門は人目しげしと、うらの門よりぞ忍ばせける、かの在五中將の、をんなのもとへいきけるに、人めをしのぶところなれば、門よりもえいらで、垣のくづれよりかよはれし、其いにしへの事までも、今身のうへにしらま弓、ひきいれの人はもとよりも、案內をよくぞんじければ、爰のつまどかしこのしやうじを、さらり〳〵とおしあけて、初花御前のおはします、亭の廊下にたゝせ申、きみにかくと申ければ、はつ花御前は聞きもあへず、みすおしのけてゆるぎ出、あらめづらしの客人や、こなたへ御入りさふらへとて、ほゝえみ給ふ御けはひ、まとにはつ花の露をふくみ、まがきのうちにふん〳〵と、匂ひをはなつにことならず、やがて座敷にうつり給へば、十八日の月もほの〴〵と出て、庭の池水に影さすけしき、おもしろや、心あらん人に見せばやとぞおもふ、興にぜうじて笛とり出てふきならす、をんな和琴をかきあはせたりければ、おとこむかし物語の歌なりけるが、ふとおもひ出て、

琴のねも月もえならぬ宿ながら
つれなき人を引やとめける

をんなもくちずさみに、

こがらしにふきあはすめるふえのねを
ひきとゞむべきことのはもなし

さて御かはらけいだしけるに、いはひのこん〳〵過きければ、じゆんのさかづきぎやくにまはし、ぎやくのさかづきじゆんにめぐる、車座にゐながれたる、女房たちはこゑ〳〵、にうたふつ舞ふつ住みよしの、濱松のをとはざゞんざつと、酒宴の興もつき影の、夜もしんかうになりければ、いざやまどろまんさらばとて、すいちやうこうけいのうちにして、沈のまくらをかたぶけつゝ、かのりさんきうのいにしへの、さゝめごとにはあらねども、ひよくれんりのかたらひ、露あさからぬちぎりにて、千夜を一夜とおもへども、はつ秋の短夜なれば、かたりなぐさむひまもなく、はや明方のかねを、月落ち鳥鳴き、人々もおきさはげば、わかな參りてかくと申けり、おとこかなしくおもひて、

むつごとをかたりもはてぬしのゝめに
とりあへぬまでおどろかすらん

女は此のありさま、父母の夢にやみゆらんと、空おそろしくて、

身のうさをなげくにあかで明る夜は
とりかさねてぞねもなかれぬる

おとこあまりのかなしさに、ひとりごとに、

あかつきのなからましかばしら露の
をきてわびしき別れせましや

と吟じて、なく〳〵たち出づるに、女もひさしのもとまでをくりて出つゝ、たがひに手にてをとりかはし、さらばといはんとすれば、泪にむせびてものもいはれず、やゝ有てはつ花、おつるなみだのひまよりも、野のすゑ山のおく、鯨よるうらまでも、かいらうどうけつのちぎりは、たゆまじくさふらへど、人めをふかくつゝませ給ひて、かよひ給ふべしとやくそくして、たがひに跡をかへり見がちにて、別をおしむ心の內、おもひやられてあはれなり、篠之丞は、わがやかたへ歸りたれども、夢うつゝもわかざりつるおも影の、ひしと身にそふこゝちして、さらに前後もわきまへず、たゞばう〳〵として、西の空をのみながめて立ちたるところに、をんなのもとより文おこせたり、いそぎひらきてみれば、何とも言葉はなくして、

はかなくもあけにけるかな朝つゆの
をきての後ぞきえまさりける

男すみすりながし筆をそめて、返歌をかくばかり、
あさ露のおきつる空もおもほえず
きえかへりつるこゝろまどひに

四人比丘尼上 終

四人比丘尼中　一名花の情

そののちよりはたがひにし、人めしのぶの浦なみの、よる〳〵かよふをりもあり、又は花見月見、あるひはこゝかしこの寺社まふでにことよせて、宇治のわたりにあらねども、中宿をもとめをきて、出あふたびもかさなれば、あこぎがうらにひくあみの、人めに餘るほどにみえければ、をんなの親この事を聞きつけて、大きにいかりせつかんして、其通ひぢに番をすへて、きびしくこそは守らせけれ、おとここれをばしら雲の、たえまもりくる月更けて、人もしづまるほどなれば、をんなのもとへゆかんとて、うすぎぬとつて打かづき、かたちを女に出立ちて、中間一人めしつれて、西の京へぞ忍びける、やかたにもつきしかば、うらの門にたちよりて、ほと〳〵とおとづれければ、番のものどもおりあひて、あやしやたぞとこたふる、いやくるしうも候はず、わかなどのゝゆかりの者にて候が、少ものまふし候はんと、忍びやかにぞ申ける、さてはくるしからずとて、門をひらきて見てあれば、うすぎ

ぬきたる其けしきは、女ともみえずおとこなりけり、番のものどもあやしめて、こは何ものぞさよふけて、おのこのをんなにさまをかへ、たばかりきたるはふしぎなり、いかさまこれは盗人の、引入をせん其ためか、さらずは此ごろこのやかたへ、忍び〳〵にかよひくる、らうぜきもの丶あるときく、もしそれにてや有らん、よし何にてもあらばあれ、あますなもらすなうちとれとて、太刀なぎなたのさやはづし、まんなかにこそとりこめけれ、さ丶のせうこれを見て、少もさはぐけしきもなく、なふいかにかた〴〵、何ゆへにかくばかり、我をあやしめ給ふぞや、山賊夜盗の引入を、いたす身にても候はず、まづしづまりてことはりを、聞給へといひけれども、はやりすぎたる若ものども、何ちんずともかなふまじ、物ないはせそうちとめよと、すでにあやうくみえければ、さ丶のせうも心えたり、そのぎにてあるならば、てなみのほどを見せんとて、かづいだうすぎぬとつてすて、ふところにさしたりし、二尺三寸の大わきざし、ぬけば玉ちるばかりなるを、まつかうにさしかざし、大勢にわつて入火花をちらしてきりあひける、さ丶のせうがうち物は、おも影となづけて、來太郎國行が百日精進けつさいして、百貫にてうちたるかたななれば、此きつさきにまはるもの、あるひはまつかう立わりにわられ、あるひはむないたをけさぎりに、きつておとされけるほどに、はやりすぎたる番のもの、かれ一人にきりたてられて、風に木の葉のちるごとく、四方へばつとぞにげにける、供に候ひし小源太、のがすまじといふま丶に、にぐるを追ふて出んとす、さ丶のせうおしとゞめ、こはいかにきやつばらが、にぐるこそさいはひよ、さのみ人をほろぼしても、つみつくりになにかせん、今はこれまでぞ小源太とて、かたなをさやにおさめつ丶、ひがしの京にぞかへらる丶、あやうかりける事どもなり、さるあひだあはづさきやう、このことをきくよりも、いよ〳〵いかり腹だちて、息女にむかつて申されけるは、いかにはつはなうけたまはれ、父がいふ事をもちゐず、をのが心にまかせつ丶、身をいたづらになすだにも、返々も口おしくおもふに、あまつさへ、わごぜがむすびしあくたうもの、ゆうべ此屋にきたり、わかたうちうげん殺害し、らうぜきしごくいふにたらず、みなわぬしがなすわざにあらずや、しよせん

なんぢがやうなる、親に不孝のむすめをば、持ては何の益あらん、見ればいよ〱はらもたつ、とくいづちへも迷ひゆけ、今より後は、おやとも子ともおもふまじ、はや出よとぞいかられける、いたはしやはつ花、かほに紅葉をちらし、おつるなみだを袖にかけ、一間所に入り給ひ、くどき事こそあはれなれ、されば世間の人をみるに、あるひは五十六十、又は七十八十にをよび、かしらに雪をいたゞくまでも、夫婦のちぎりあさからず、むつべる人のあるなるに、いかなるむくひにみづからは、まだきのふけふなれそめて、あかぬなかをしさけられて、いづこへとてか迷ふべき、しよせん命のあればこそ、かゝるおもひをする事よ、じがいをせんとおぼしめし、守りがたなをするりとぬき、すでにじがいとみえしとき、わかな大きにきもをけし、なふこれは何事ぞと、あはてゝかたなをうばひとり、いさめ申けるやうは、御歎はことはりなれども、かゝるためしはいにしへより、あるによりてや萬葉集に、

上野やさのゝふなばしとりはなし
おやはさくれどわれはさへかへる

とよみける歌のふるごとを、かたらば聞しめさるべし、むかし上野國、さのといふ所に住みけるおとこ、ある人のむすめにあこがれけるに、ところは河をへだてゝあれば、其ふなばしを道として、よな〱かよひけるに、二親このことをふかくいとひ、橋の板をとりはなす、これをばゆめにもしらずして、月もいり江の波くらき、はしをわたりてゆきかよふところに、とりはなしたる板間より、かつぱと落ちてむなしくなる、さるによりてこの事を、古人歌によみをきて、あはれなることに、今の世まで申つたへはべる、さればふうふいもせのわりなき事は、上らうも下﨟も、いかでか替り申すべき、御じがいの事は、かたくおもひとまりたまへ、命をまたふもつかめば、ほうらいさんにあふとかや、申たとへのさふらふぞや、わらはもきみともろともに、主の御かんきかうぶりて、此御やかたに有りがたし、幸ひわらはがゆかりの者、さがのゝおく小倉と申所にさふらへば、まづ〱それへ御忍び有りて、時節を御まち候はゞ、などか父御もそのうちに、御はらいさせ給はざるべきと、とかくいさめ申所に、はつ花わかなもろともに、をつたてのつかひたびたび也、いたはしやはつはなは、ひとへに夢のこゝち

して、なみだにむせび給ひしが、おつるなみだのひまよりも、かくなることもたれゆへぞ、たゞつまゆへの事なれば、たとひいのちをうしなふとても、歎くべきにはあらね共、さすがとし月住みなれし、すいちやうこうけいのとぼそをし、けふ立出でゝいつかまた、歸らん事をしら浪の、よるべいづくとさだめなき、身はうき舟のかぢをたえ、ゆくゑもしらぬこの道に、まよひ出れば世の人め、はづかしげなるふぜいにて、いちめがさにてかほかくし、やかたのうちを立出づる、心のうちこそあはれなれ、そも〳〵此はいつならん、くれゆく秋のうすぐもり、ふりみふらずみさだめなき、時雨の露にすそぬらす、野邊の千種をしわけて、さがのゝはらはいづくぞと、とへどこたへぬゆふづくひ、ならびの岡を過行けば、道ゆく人も立どまり、此人々のありさまを、みとがめざるはなかりけり、いたはしやはつはなは、生れてしよりけふはつに、泥土をふめる事なれば、足なへ身つかれ給ひつゝ、あゆみかねてぞみえ給ふ、わかなあまりの御いたはしさに、御手を引き、おこしをして、ゆきみゆかずみせしほどに、やうやうその日のくれほどに、さがのゝほとりをぐらのさと、しづがふせやにつきたまふ、あるじのぢいうばかひ〳〵しく、なさけふかきものなれば、ふかく人めを忍ばせ申、いつきかしづき奉る、あるじの情にうきを忘れて、かくてこゝにぞ住み給ふ、をりしも秋のすゑなれば、夜さむをいとふしづのめが、衣うつ音の聞えければ、初花かくなん、

雄倉山すそのゝさとのゆふ霧に
　やどこそみえね衣うつなり

とある古事を思ひつらね給ひければ、おうぢやうばはうけ給り、やさしの人の言の葉や、われらがつたなき心にも、あはれとおもふ歌の道、ちからをもいれずして、あめつちをうごかすと、いにしへ人のかゝれしも、げにことはりとかんじ入し、おうぢやうばが心の内、おくゆかしくぞおもはれける、おうぢは一間所に入りて、古きからびつの中よりも、琴を一ちやうとりいだし、姫君の前に置て、此琴と申は、このぢいが先祖より、家に傳る重寶にて、都にありし其時は、此道にすきの人、春のはなのあした、秋の月の夜ごとに、わが宿にきたり、かきならし給ひしを、われらふうふはちやうもんして、むしのまうねんをはらし、愁を忘

れさふらひし、まつかぜとなづけし琴なれども、世にすてらるゝ身のうさは、いく春秋をいたづらに、むなしく月日ををぐら山、ふもとのさとに住みなれて、しらべに似たる松風の、音はきけどもまことをば、かきなづ人のあらざれば、ちりのみつもるばかりなり、こと更今夜は月すみて、をぐらの山の鹿の音も、物あはれなる折からなれば、一手ひかせ給ひて、きかさせ給ふものならば、おうぢやうばが今生のおもひで、何事か是れにすぎ候べきと、そゝのかし申ければ、はつはな御前はきこしめし、やさしの人のいひごとや、京に田舎あり、ゐなかに京ありと、うき世のならひにいふなるも、こゝの事にてありけるぞや、いでく調てぢいうばの、心をなぐさめ申さんとて、引よせたんじ給ひけり、むかし清見原のてんわう、吉野の瀧の宮におはしましけるとき、日のくれがたに琴をたんじて、御心をすまさせ給ひけるに、むかひの山のみねよりも、あやしき雲立のぼりけるを御らんじければ、その雲の中に、神女のすがたあらはれて、御琴のしらべに合て、かなてまひけるとかや、爰は又さがのゝおくをぐらの山の山姫も、はつ花御前の琴の音に、あはせて袖やかへすらんと、あやしきほどのつま音也、おうぢやうばはうけ給り、あらおもしろやたえがたや、姫君さまの琴をきけば、いくとし月の憂へを忘れ、老のすがたもたちまちに、わかやぐ心ちしさふらふぞやと、かんるいをぞながしける、まことにこゝろなきちくゐまでも、此琴の音にめでけるにや、をぐらの山の男鹿ども、おうぢが屋かげにむれ來りて、角をかたぶけ聞きゐたり、ものゝひまよりはつ花は、此ありさまを見たまひて、一首とりあへずかくばかり、

むれてくるをじかのつのゝつかのまも
わすれずおもふ人ぞこひしき

とおもひつゞけ給ひて、琴をひきすさび給へば、有明の月いたく更て、曉をつぐる野寺の鐘、まつのあらしにさそはれて、くずやの軒ちかくひゞきければ、おうぢもさすがに都そだち、わかざかりのいにしへは、しきしまのみちにこゝろをよせけるにや、ある古歌をおもひ出て、

有明の月のゆくゑをながめてぞ
のでらのかねはきくべかりける

とくちずさみければ、姥ごぜもひなびたるこはねに

て、

あかつきとつげの枕をそばだてゝ

きくもさびしきかねの聲かな

若菜もいくとし月、かの姫君にそひ奉りて、なまこざかしきものなりけるが、あくびをする〳〵かくばかり、

山ざとの秋の夜ぶかきあはれをも

ものおもふ人は思ひこそしれ

かくてはつ花御前は、おうぢやうばを友として、歌をよみ琴をひき、心をなぐさみ給ひつゝ、けふよあすよと日かずをのみ、をぐらの里に住給ふ、扨もゐなのさきの丞は、はつ花御前親の不孝をかゝぶりて、いづくともなく迷出で、行方しらずなり給ふと、風のたよりに聞きしより、はつと思ひ心みだれて、更に前後もわきまへず、こはいかになりぬる事どもぞと、おもひしづみてゐたりしが、つく〴〵ものをあんずるに、皆何事も定まれる、ゐんぐわの報ひといひながら、これはひとへにそれがしが、なすわざなりとおぼえたり、いたはしやはつ花姫、かゝるべしとは白雲の、立わかれつゝ歸るさの、袖をひかへていひけるは、生ては偕老のちぎりふかく、死してはおなじ苔の下に、うづもれなんと云出でし、言葉も今はあだことゝ、なりぬる事のかなしさよ、やかたを出づるその時に、さぞそれがしをうらむらん、よしそれとても力なし、夢にも我はしらいとの、みだれそめにしわが心、いかにせんとかおもひねの、夢のうきはしとだえして、峯にわかるゝよこ雲の、空につらなる雁がねも、我をとふかとあはれにて、いとゞなみだぞまさりける、あまりおもふもくるしさに、氏神牛頭天王に參り、此事をなげき申、神力をもつてわがおもふ、人のゆくゑをしらばやと、賴みをかけてゆふだすき、祇園の社に參りつゝ、南無武塔天神ねがはくは、あかでわかれしはつ花の、ゆくゑをしらせてたび給へと、一心しやう〴〵のまことをいたし、一七日ぞこもりける、すでに七日にをよびける、曉がたの事なるに、ありがたや天王は、二十許の童子とげんじ、さゝのせうの枕上に立給ひ、めうもんたへしき御聲にて、なんぢが妻にあはんとおもはば、都のにしさがのほとり、をぐらのさとをたづぬべし、かならずめぐりあふべしと、あらたに神勅ましまして、夢はそのまゝさめにけり、こは有りがたの御つ

げやと、御帳を三度禮拜し、あけの玉がき立出でゝ、すぐにさがへぞおもむきける、頃は九月の末なれば、木々のこずゑも紅葉して、錦をさらすひがし山、しゆみせんの西原も、かくやとおもひしられたり、みなみは八坂のさとつゞき、葛屋のけぶり一なびき、立わたりたる霧間より、淸水寺のかねの聲、ぎをんしやうじやをあらはして、諸行無常とひゞきゝて、まよひの夢やさますらん、にしに出ればぎをん町、民の家居のかずく＼に、往還のらうにやくなんによ、袖をつらねもすそをそめて、引きもちぎらぬありさまは、まことに花の都なり、こゝはめやみのぢざうだう、ぎやくえんながらふし拜み、四條の河橋うち渡る、はるかにゆけば千聲の、さえづりをなすむら鳥の、雀のもりをうち過ぎて、さいの里にも着にけり、なをゆく道は野をわけて、色づく草の露霜に、ころものすそやぬらすらん、向ひをはるかにながむれば、むさうこくしの建立なる、天龍寺のこなたかなた、りんせんじ法輪寺、なをそのすゑを見わたせば、あたご高尾のもみぢばを、さそふあらしに霧はれて、影もさやけき月のわの、光をやどす淸瀧や、ぜゞのしらいとくりためて、山わけ衣をりにふれ、ことにわたるや雁がねの、さほのさすても大井川、くだすいかだの行く方を、みなみは梅津むめの宮、我をばたれか松の尾の、松かげとをくさびしきは、ときはのさとの夕まぐれ、あらしこがらしふきおつる、木の葉は道をうづまさや、ふみわけゆけばこれぞ此の、うきよのさがにつきにけり、まづ淸凉寺にまいりて、南無大をんけうしゆしやかむに、無上大覺せそん、めつざい生善臨終しやうねん、往生ごくらくとふしおがみ、しばらく御だうのえんにやすらひ侍るに、鹿の音物あはれに聞えければ、

山もとふかきつゆぞこぼるゝ
ゆふぐれは秋のさがのゝしかのねに

とある古事をおもひいづるにも、かの君の事のみむねにみちて、更に忘るゝひまもなく、神の告をし頼みにて、いづくのほどにかおはすらんと、足を空にまどひありきて、たづねかねたるありさまは、かの高倉院の御侍に、仲國といひし人、君の仰をかうぶりて、この駒にうちのりて、かなたこなたと此ところを、まよがうのつぼねを尋んと、秋の最中の名にしおふ、月げひありきしいにしへの、其仲國が心の內、今身の上に

しら露の、ふかき思ひはひろ澤の、池のぬなわのくるくると、めぐる車にのりの聲、さもたつとくもきこゆるは、いかなるかたぞと尋ぬれば、往生院とをしへければ、

きみとわれしなばさいはうごくらくに
わうじやうねんのほとけみちびけ

かたはらをみれば、垣には蔦かづらはひかゝり、軒には苔むして、露しんくとふるき庵室あり、かれはいにしへ瀧口入道が、住みける所よとて立よれば、きよめぬ庭にちりつもる、木の葉に渡る松風の、音よりほかはことゝふものも、なくくかくぞ思ひつゞけゝる、

なにとなくきけばなみだぞこぼれぬる
ぬしなきいほののきのまつかせ

往生院を立出でゝ、かなたこなたとたづぬるほどに、野の宮に到りぬ、秋の花みなおとろへて、あさぢが原もかれぐなるむしの音に、まつかせさつくと物すごく、ものはかなげなるこしばがき、くろ木の鳥井かうぐしく、禰宜神主ども、こゝかしこにしばぶけり、火たきやかすかにひかくと、ひかる源氏の大將の、この所にまふでたまふ、其いにしへの事までも、おもひやられて物さびしき、遠寺のかねの聲、初夜の時にや有らん、松ふく風にさそはれて、ほのかにひゞく半空に、雁が音寒き野をわけて、尋ねめぐれどわがおもふ、人のゆくゑはしらいとの、となせの瀧に身をなげて、死なばやなんどおもへども、わが氏神の御つげの、いかでむなしくあるべきと、思ふこゝろをたのみにて、かなたこなたと行きなやむ、足引の山のすそ野なる、をぐらの里をきてみれば、木々の紅葉のくれなゐを、おろすあらしにさそはれて、琴こそかすかに聞えけれ、瀧のひゞきか松風か、あやしやさてもいかならんと、聞きみゝたてゝ音をしたふ、こゝに片折戸したる賤が屋の、軒の松風おとそへて、琴をしらぶる人有りけり、さゝのせうふしぎに思ひ、かく物ふかき山ざとの、みるもかなしき賤が屋に、いかなる人の住居して、琴をひくやらんやさしさよとおもひ、やゝしばらく立きゝたるに、尋ねかねつゝあこがるゝ、はつ花御前のつま音に、すこしもまがふ所なし、樂は何ぞと聞きたれば、おつとをおもひてこふるとよむ、想夫戀なるぞうれしき、さゝのせうこれをきくよりも、なにとやらんむねうちさはぎければ、小源太をめして

仰けるは、只今の琴の音は、まぎるべくもなきはつ花のつまをと也、氏神の御告も、爰の事にてやあるらんに、なんぢ罷むかつて、もしもさやうの人なるか、尋ねきけと宣へば、小源太うけ給はり、柴のあみ戸にちよりて、ほと〳〵と音づれて、もの申さんとぞ申ける、はつ花御前は此日ごろ、をぐらのさとにかくれゐて、あかしくらし給へども、親の不孝もゆるされず、又こひ忍ぶわが夫の、さゝのをざゝを吹く風の、そよとの傳もあらざれば、かれこれとりあつめたる物おもひに、なみだのかはくひまもなし、よしやうき世にながらへて、かゝるおもひをせんよりも、いかなる淵にも身をなげて、むなしくならんと心のうちに、おもひさだめたまふといへども、人更にしることとなし、おうぢやうばを見む事も、こよひばかりをかぎりぞと、おもへばいとゞあぢきなく、忍びのなみだはせきあへず、はつ花むなしくなるならば、なき跡までもぢいうばが、おもひ出さんかたみにし、しらべてかれにきかせばやとおぼしめし、いつよりも手をつくし、夜すがら琴を彈たまふところに、柴のとぼそをほと〳〵とをとづるものぞ出で來ける、おうぢやうばが申やう、晝だにも人めまれなる山ざとに、しかも小夜更けてとふは、こらうやかんのものどもが、琴の調に聞きとれて、ばけてきたるかさらずは又、山ぞく夜盜のやつばらが、姬ぎみの衣裳にめをかけて、うばはむためにてあるやらんに、とぼそあけてはかなふまじと、かたづをのふで音もせず、小源太ふしんにおもひ、又柴の戸をあらゝかにたゝき、これは都がたの者なるが、此屋のうちへものとはんと、しきりにこそは音づれけれ、おうぢ此由聞きかねて、こは〳〵戸ぼそのかげにより、ふるひ〳〵聲をあげ、何人なればさよ更て、さやうにはの給ふぞ、ふしんなりとこたへたり、さゝのせう聞給ひ、いやくるしくもなきもの也、これは都の者なるが、人を尋ねに罷出で、かなたこなたとせし程に、秋の日やすく暮過ぎて、斯樣に夜の更け申也、もし此屋の内に、はつ花御前と申ひめぎみやおはしますと、さも高聲にとひ給ふ、若菜このよしきくよりも、むねうちさはぎ、あらふしぎや只今の聲つきは、まさしくさゝのせうにてましますがと、物のひまより月影に、みればまぎるゝところもなく、篠の丞にてましませば、わかな夢ともわきまへず、いそぎはつ花

にかくと申ければ、とる物もとりあへず、たそれふためき出給ひ、みづから柴の戸ぼそをひらき、めとめをきつと見あはせて、これはゆめかやうつゝかや、夢ならばさめての後をいかゞせんと、たがひに手にてをとりかはし、よろこびの泪はせきあへず、おうぢ夫婦も立出でゝ、さてもめでたき御事やと、奥の亭へしやうじ申、さま〴〵もてなし奉る、はつ花もさゝのせうも、此ほどのうき事の、つもるおもひのかず〳〵を、たがひにかたり給ひつゝ、なみだにこそはむせばれけれ、さるほどに、夜もはや明がたの鐘もなり、秋の霜地にみちて、あたりの軒端もしろたへに、見ゆる比にもなりしかば、さゝのせう小源太を近付給ひ、なんぢはいそぎ都にかへり、ありさまかくと告げしらせ、乗物なんど用意して、御むかひに参るべし、はやとくとくと仰ければ、うけたまはりて候とて、をぐらのさとを立出でゝ、いそぎやかたに立かへり、めのとにかくと申ければ、有馬大きによろこびて、すなはち小源太を案内者にて、御むかひにぞまいりける、をぐらのさとにもつきしかば、はつ花御前にたいめん申、よろこぶ事はかぎりなし、さてあるべきにあらざれば、いそぎ御歸京あるべしと、御ともの人々聲々に申す、はつはな御前は、かりそめながらこゝにきて、住むも物うきしづが屋の、しばのとぼその明暮に、過ぎゆく月日ををぐら山、みねの紅葉の色ふかき、なさけのほどもあさからぬ、うばやおうぢもなれぬれば、今更わかれをかなしみて、はなれがたくぞおぼしける、あるじ夫婦も此ひめの、御こゝろざしのやさしき事、世にありがたくおもひ申、御名殘おしみて、今しばしととゞめ申せども、又こそやがてきたらめと、すでにこしに乗じ給へば、おうぢやうばもうづまさまで、御供してぞ出でにける、はつ花御前は御らんじて、いかにやいかにうばおうぢ、御身ふうふのなさけのほど、いつの世にかはわするべき、老足なれば京までの、行歩はさぞやくるしからん、もはやこれより歸られよ、やがてあひみんさらばとて、そこよりいとま給りて、おうぢふうふのものどもは、をぐらのさとへぞかへりける、

四人びくに中 終

四人びくに下　一名花の情（三）

さるほどに、さゝのせう夫婦の人々は、ほどなくやかたに着き給へば、朝日長じやは立出でゝ、山海の珍菓をとゝのへ、姫ぎみをまちうけ給ひて、御よろこびはかぎりなし、御内とざまの人々も、われも〳〵としこうして、喜悦のおもひをなしにけり、今朝まではは つ花御前、いぶせきふせやのうちにしも、をきふす露のとことはに、古郷を忍ぶなみだの露、言の葉ごとにしげゝれば、かはくまもなきこころも手も、ゆふべの日影にひるゐなき、ゐせいのほどこそゆゝしけれ、これひとへにかのおうぢ夫婦の情ふかきゆへと、さゝのせうふかくかんじ給ひ、其翌日小源太を御つかひにて、黄金百兩、こそで十重ねあいそへて、をぐらのさとへ贈られける、こゝろざしこそやさしけれ、かくてさゝのせう、初花御前にあひなれて、えんわうのふすまのしたに、ひよくれんりの御ちぎり、あさからぬなかのしるしにや、その明の春よりも、はつ花たゞならずなやみたまへば、名醫數十人招請せられて、みやくをとらせられければ、をの〳〵みやくをかんがへて、これは御くわいにんの御みやくにて候、しかも男子にて候べしとぞ申ける、あさ日長者もさゝのせうも、此よしを聞給ひ、上からしもにいたるまで、みなめでたしとぞよろこびける、かくて月日をふるほどに、そのとしの霜月なかばに、生産たやすくして、しかも男子にてぞおはしける、蓬の矢の慶賀一門にかくれなければ、そのるゐえうの人々、綾羅金銀われ人におとらじと、ひきでものをさき立でゝ、よろこばざるはなかりけり、すなはち御名をば、竹若丸とぞ申ける、あつぱれ大くわほうの少人やと、うらやまざらぬ人もなし、かくて春過ぎ夏たけて、くわういんは矢のごとし、はやくもうつるとしなみの、たちゐにつけて生長して、竹わか十歳になりたまふ、まことにようがんうつくしく、あまねく萬藝にたつし給へば、父母のてうあいかぎりなし、こゝに江州せたの邊に、あさひちやうじやのゆかりあり、五月ほたるさかりなるころ、見物のためにとて、さゝのせうのもとへ、むかひの人をのぼせらるゝ、さゝのせうよろこび給ひ、げに〳〵これは興あるべしとて、朝日一家の人々は、すなはちせたへ

ぞこされける、そのよそほひまことにはなやか也、三條の橋うちわたり、ゆきかふ人にあはだ口、せきのみやゐをふしおがみ、よせてはかへるさゞなみの、打出のはまぢこえゆけば、せたのさとにかくれなき、右近の亭へ入給ふ、あるじ立出たいめんし、種々のちんぶつとゝのへて、さま〳〵もてなし給ひけり、すでにその日もくれかゝり、石山寺の晩鐘の、かねつく比にもなりしかば、かねて用意のやかたぶねに、みな〳〵とり入り給ひければ、湖水はるかにおしいだす、あたりのうみづら見わたせば、かたゝのうらにひく網の、めづらかなりしありさまを、みづのゐはづのもりみえて、うみごしのかすかにむかふ鏡山、やまだやばせのうら千鳥、友よぶ聲のしば〳〵に、しばつみぶねのきをひくる、さほの音にやさはぐらん、むかひの高根はいづこぞや、あれこそ千載集の歌に、さゞなみやしがの都はあれにしをとよみたりし、むかしながらの山櫻は青葉にて、花は一えもなつ木立、うつろふやあをうみの、なみまにみゆる竹生島、しがからさきの一つ松、七社のしんよのみゆきも、もはやすぎまふく風にみだれてとぶほたる、いまをさかりにみえければ、舟のまんまくあげさせて、をの〳〵見物したまふに、おもしろき事かぎりなし、上なるはしたになり、したなるは空にとび、入りちがへもみ合せ、まん〳〵たる海上を飛行したるありさまは、龍田の山のもみぢ葉を、かぜのさそふにことならず、かゝる美景はいづくにも、たぐひあらじとゆふ波の、みなれざほこがれゆくところに、何とかし給ひけん、竹わかふなばたをどりはづして、海へづぶりとおち入給ふ、船中の人々おどろきさはぎ、あれよ〳〵とよばゝりけれども、其かひ更になみのそこの、みくづとなるこそものうけれ、父母ゆめのこゝちして、うつゝとさらにわきまへず、天にあふぎ地にふして、こはそもなにのむくひぞと、落涙は申ばかりなし、はつ花なみだを袖にかけ、あなかはゆや竹若丸、かく成るべき故やらん、やかたをいづる其ときに、名殘おしげに跡を見て、ものかなしげなる顔ばせを、みづからあやしく思ひ、何か心にかゝる事あらば、とくかなへてとらすべし、いかに〳〵といひければ、おとなしき心ねにて、さあらぬ體にもてなして、いさみすゝみて出たりし、そのおも影はめのまへに、ありとはみえてとれば手に、きえゆく水のあ

はれさを、いかにせん人々とて、ふなばたをうちたゝき、やあ竹わかよ〱と、よばはらせ給へども、こたふる人もなみのうへに、むれゐる千鳥浦かせの、音のみ殘るばかりなり、いたはしやさゝのせう、あまりおもひにたえかねて、舟ばたにのぞみつゝ、さるにてもあの浪のそこにこそ、わが子の死がいはあるらんに、海神もあはれみて、今一度われに見せてたべ、なふはかなのうき世かな、南無阿彌陀佛と宣ひて、そのまゝ海にいらんとしたまふ、人々おどろきさはぎつゝ、こはいかなる御事ぞと、袖やもすそにすがりつき、引とどめたてまつり、御なげきはしごくせり、さりながら御身まで、御命をすてさせ給はゞ、わかぎみの御ぼだいをたれあつてとひ申べき、老少不定のさかひなれば、をくれさきだつ御わかれの、つゐにはなくてあるべきか、つたへきく、ひさう天の壽命は、八萬劫をたもつといへども、これもおはりなきにしもあらず、末世一代教主のによらいも、生死のおきてをばのがれ給はず、いはんや人間におゐてをや、世はさだめなきこそいみじけれと、古人のかゝれし筆の跡、おぼしめし知らせ給はずやと、いろ〱いさめ申ければ、至極の道理にさゝの丞は、入水をとゞまり給ひつゝ、ふねのへいたにひれぶして、泣涕こがれ給ひけるは、ことはりとこそおぼえけれ、かくてじこくもうつりければ、五月廿日の月も出で、うみのおもてもくもりなきに、あたりのうら人をめしあつめて、わかぎみの御しがいを、こゝやかしこともとむれども、身をいづくにかおきつなみ、よるべはさらになかりけり、かくてあるべき事ならねば、せんかたなみのうきふねを、みぎはのかたにこぎよすれば、さゝのせうもはつ花も、あしよはぐるまのよは〱と、人々にかいしやくせられて、くがにあがり給ひ、其の夜は石山の觀音堂にこもり、いのり申されけるやうは、なむや大慈大悲のくわんぜおん、ねがはくは竹わかゞ、しがいをなりとも今一度、見せてたば(ママ)せたまへやと、夜すがらなげきおはします、すでに其の夜も深更になり、有明の月くまもなきに、むざんやなふうふの人、ふかきおもひにふししづみ、少まどろみ給ふところに、ありがたや觀世音は、枕上(かみ)に立給ひて、一首の御詠歌をぞ告給ふ、

さゞなみのあはれはかなき世をしれと
　　をしへてかへる子はちしきなり

みな人のしりがほにしてしらぬかな
かならずしぬるならひありとは

かくのごとく御詠吟ありて、かきけすやうにうせたまふ、夫婦の人は夢さめて、さてもあらたの御つげやと、御戸の錦をふしおがみ、夢のお告をあんずるに、げにも此世はかりのやど、人のいのちをたとふれば、いなづまの光の朝露の、月影まつまのごとくなり、さればわれ〳〵愚痴のやみにまよひ、ゐんぐわの道理をしらずして、今更おどろき歎くをば、佛は不便におぼしめし、あはれはかなき世をしれと、夫婦の者につげさせ給ふ、此尊詠をきくときは、あらなげくまじやかなしむまじ、これを出離の種として、後の生れをねがひつゝ、又竹若がなきあとを、とぶらふべしとの給へば、初はな御ぜん聞給ひ、こは有がたき仰かな、みづからも御とも申、夢のなさけをひるがへし、まことの道のともとなり、御身花をつみ給はゞ、わらはゝ水をむすびあげ、ともにぼだいをねがはんと、おもひたたれし人々の、心のうちこそ有がたけれ、さてあたりを見給へば、御供の人々は、浪のさはぎに草臥て、せんごも知ずふして有り、よきひまなりとの給ひて、石山寺を忍出、ある寺にはしり入り、あるじの僧にたいめんし、かの有さまをかたりつゝ、出家の望との給へば、ひじりもあはれにおぼしめし、そゞろに袖をぞぬらされける、さてかみそりをとりいだし、ゐてん三界などとなへて、いたはしや夫婦の人の、みどりのかみをそりおとし、さゝのせう改名、釋の清月、はつ花改名、釋尼妙海とぞつけ給ふ、きのふまでは、れうらきんしゆうを身にまとひ、はなやかなりし装ひも、けふはいつしか引きかへて、すみの衣にさまをかへ、諸國修行に出でられける、心のうちこそ殊勝なれ、さるあひだ朝日ちやうじや、此事を聞給ひ、こはそもいかなる事どもぞや、花のやうなる孫や子に、生きてのわかれしてのわかれ、あとにとゞまる老が身は、何とかならんならしばの、露の命もいかでかは、ながらふべきこゝちもなしと、ふかくなげき給ひしが、その思ひのつもりにや、そのとしの冬のころ、長者ふうふの人々は、つゐにはかなくなり給ふ、めしつかはれし御内のもの、梶をたえたる舟のごとく、をのがさま〳〵なりにけり、その中にとりても、さゝのせうの御めのと有馬と申す女房、はつ花のめしつかはれしわか菜、か

れら二人の者共は、若代のきみの御事を、おもひにしづむ涙川、たもとのかはくひまもなきに、又このなげきうちそひてければ、夢のうき世をおどろきて、やがてびくにの姿となり、すみの衣を身にまとひ、偏に主の後世ぼだいを、とぶらひけるこそ有がたけれ、さるほどにせいげつめうかいは、かなたこなたの國々、靈佛靈社のこりなく、おがみめぐり給ふほどに、きのふけふとはおもへども、はや三とせにぞなりにける、あまり古郷のこひしさに、又都へと心ざし東路にかゝりて、たどる〳〵のぼらるゝほどに、草津の宿につきたまふ、とあるところにこしをかけ、旅のつかれをやすめたまふ、さても二人のびくにどもは、ひがし山吉田の邊に柴の庵を引むすび、おこなひすましてゐたりしが、さるにても篠之丞夫婦の人の御ゆくゑ、何とかならせ給ふらんと、稱名觀念のみぎりにも、忘るゝひまもあらざれば、生死のさかひをしらせてたべと、清水寺に參りつゝ、七日こもりて祈りける、すでに七日にまんじける、あかつきがたのことなるに、觀音告てのたまはく、なんぢら主にあはんと思はゞ、あづまのかたにおもむくべし、かならずめぐりあふべしと、あらたに佛勅かうぶりて、夢はすなはちさめにけり、びくにらたつとくおもひて、くわんきのなみだおさへがたく、やがて御告にまかせて、すぐにあづまへおもむきける、あはだ口うちこえ、日野岡峠にさしかゝる、ころは卯月のはじめつかた、あたりの山々ながむれば、青葉にのこるをそざくら、はつ花よりもめづらしや、尋ぬる人にあふさかの、せきの清水にかげみれば、やつれはてたるわがすかたを、たれかあはれとゆふなみの、うちでのはまをうちながめ、せたのから橋野路をすぎ、露こそすそはぬらす成、草つのしゆくをゆくところに、主從のえんやふかゝりけむ、又はほとけの御ひきあはせにや、主君法師を見付け申、あまりのことのうれしさに、すか〳〵とはしりより、なふ御身さまたちはさゝのせう、はつ花にてはましまさぬか、是れはありまとわかなが、かはれるすがたにてさぶらふとて、衣の袖にとりつけば、清月妙海きこしめし、ひとへに夢のこゝちして、これこそそれよといひもあへず、たがひにたもとにすがりつき、なみだにこそはむせばれけれ、やゝありて清月涙をおさへて宣ふやう、さてなんぢらは、何とてかやうのすがたとは

なりたるぞ、父御前母御前は、まめやかにわたらせたまふか、いかに〳〵と仰せければ、二人はなみだをおさへ、さん候大殿さまもみだいさまも、御みたちの御事と、又わか君の御事を、あけくれなげかせ給ひしが、其の御おもひのつもりにや、こぞの冬のはじめかた、むなしくならせ給ふ也、そのときわらは二人のもの、おもひのうへにおもひをかさね、こはいかなる事どもぞやと、ふち川にも身をなげて、ともにめいどの御ともを、仕らむとおもひしが、又こゝろをとりなをし、われ〳〵命をすてたりとて、きみの忠にはよもならじ、跡にのこりて御ぼだいを、とぶらはんにはしかじとおもひ、かやうのすがたとまかりなり、二たびきみを見る事は、なげきのなかのよろこびなりと、又さめ〴〵となきにけり、清月妙海きこしめし、あつとの給ふ聲とゝもに、そのまゝ大地にたをれふし、きえ入る樣に泣たまふは、ことはりなりと思はれて、よそのたもとをもぬれぬべし、すでにその日もくれければ、しうじう四人の人々は、夏野の原をわけすぎて、人ざとにちかづき、宿をもとめんとおぼすところに、法師一人出きたり、いかに修行者、御やどの望みならば、參らせんと申、人々うれしく思ひ、僧の跡につきしたがひ、はるかなる野をわけ行て見れば、ひとつの庵室あり、とぼそをひらきうちに入てみるに、きれいにして美をつくせる佛だん有、そのまへには、つくえに八軸の妙典をならべをきたり、客人の尼法師を座敷に請じをきて、あるじの僧はうちへ入りぬ、しばらくありて、さきの法師立出て、いかに人々、只今これにふしぎの事あるべきにて候、いかにおそろしくおぼしめし候とも、息をもあらくせず、三ごうをしづめて、佛の御名をとなへ給へといひて、我が身はつくえのうへなる、法華經のひもをときて、普門品をぞよみゐたる、尼ども何事にやとあやしくおもひながら、僧のいふにまかせて、こは〴〵念佛をとなへてしづまりゐたるところに、子の刻もすぎ、はやうしのこくにもやなりぬらんとおもふほどに、天にはかにかきくもり、雨あらくいなびかり、しんどうらいでんして、牛頭馬頭の鬼どもそのかずをしらず、庵室の庭をぐんじゆせり、せつながあひだに、鐵城たかくそばだちて、くろがねの網四方にはりまはし、猛火もえ出て一由旬が間にさかんなるに、どくじや舌をのべてほのほを

はき、くろがねのいぬきばをといでほえいかゝる、修行者どもこれを見て、あなおそろし、これはむけんぢごくにてぞあるらんと、身の毛よだつておぼえけれども、わなゝゝとふるひゝゝ見ゐたるところに、火のくるまに罪人を二人のせて、鬼どもながえをひきてこくうよりきたれり、そのざいにん一人は男一人は女也、待ていかれる惡鬼ども、くろがねのまないたのばんじやくのごとくなるを庭にをきて、そのうへに此ざいにんをとつてあふのけにふせ、其うへに又くろがねのまないたをかさねて、えいや聲をいだして、えいやゝゝとおすほどに、まな板のはづれより、血のながるゝ事油をしぼるがごとし、そのゝちふたつのまな板をとりのけて、紙のごとくにをしひらめたるざいにんを、くろがねの串にさしつらぬき、焔の上にこれを立て、打返しゝゝあぶる事、只庖人の肉味を調ずるにことならず、あくまであぶりかはかして後、又まないたのうへにおしひらめて、氷のごとくなる庖丁まなばしをとりそへて、ずたゝゝにこれを切さき、あかゞねのみのなかへ入たるを、鬼どもみをもつて、活活ととなへてこれをひけるに、ざいにんたちまちによみがへりて、又もとのかたちになるときに、鬼どもくろがねのしもとを取て、ざいにんにむかひ、いかれる言葉をいだして、ざいにんをせめていはく、ぢごく地ごくにあらず、なんぢがつくるつみ、今なんぢをせむるぞとて、さんゞゝにさいなみけり、ざいにん此苦にせめられて、なかんとすれどもなみだおちず、猛火まなこをこがすゆへに、さけばんとすれども聲出ず、すきまをあらせずかしやくする、四人のしゆぎやうじやこれをみて、きも玉しゐも身にそはず、こつずいもくだけぬるこゝちして、おそろしくおぼえければ、あるじの僧にむかつて、これはいかなるざいにんを、かやうにかしやくし候やらむとゝひければ、僧のいはく、これこそ山城國の住人朝日長者夫婦の者なるが、榮花ゑいようにのみほだされて、後生ぼだいの事は、つめのうへの土ほどもおもはず、故に佛法僧をくやうする心もなし、七珍萬寶はくらにみつるといへども、慈悲せんこんをもなさずして、惡心をのみ重ねしゆへに、しゝて加樣のぢごくに落て、かしやくせらるゝにて候へ、もしそのかたさまの御ゑんにて候はば、よくゝゝ經念佛して、此苦をすくひ給へ、我は、か

の長者が庭の手水鉢に、かたちをきりあらはしたる、石のぢざうさつたにて候也と、くはしくをしへける に、その言葉いまだおはらず、あかつきをつぐる野寺のかね、松ふく風にひゞきて、一聲ほのかに聞えければ、ぢごくのみやうくわてつ城も、たちまちにかきけすやうにうせ、かの僧もみえずなりて、庵室に坐したる四人の修行者斗、野原の草の露の上に、ばうぜんしてゐたりけり、夢うつゝのさかひいまだおぼえねども、夜既に明けゝれば、人々現化のふしぎにおどろきて、いとゞかなしびのなみだおさへがたし、これつまびらかにぢざうぼさつの、ぜんげうはうべんにして、かの有さまをみせしめて、追善をいたさしめんがためなり、結緣の多少によりて、利生の淺深ありとも、佛前佛後の導師、大慈大悲のさつたにちぐし奉らば、善願の望みをたつし、今世後世能引導の御ちかひ、たのもしかるべき御事也、それよりいそぎ都にのぼり、父長者の住給ひし、やかたはこれよと見給へば、むぐらしげりて門をとぢ、松のはつもりて道もなし、をとづれかよふ物とては、ふるきこずゑのゆふあらし、軒もる月の影ならでは、とふ人もなくあれはてたり、さかんなるものはおとろふることはりの、まことなりける事よとおもふに、せきとめがたき涕のうちより、清月かくなん、

八重むぐらしげれるやどは人もなし
まばらに月のかげぞすみける

その夜はそこにとまり給ひて、よすがら經よみ念佛したまふ、あかつきがたに、めうかいかくぞつらね給ひける、

ぬしなくてあれたるやどの板間より
月のもるにも袖はぬれけり

かくて卯月の短夜、ほどなく明方になりにければ、名殘おしくもやかたを出、くろだにゝ參り、父母の御墓所にして、さま〴〵の追善をなし給ふ、其後さがのおく二尊院のかたはらに、柴の庵を引むすび、一心不亂によねんなく、念佛申經をよみ、二親のぼだい、竹わかの跡とひ給ふぞあはれなる、これや彼のけんれいもんゐんの、安德天皇にをくれさせ給ひて、御出家ならせ給ひ、とぢこもらせおはしませし、大原の閑居の御すまひも、かくやとおもひしられたり、はつ花の父母このよしを聞給ひ、大きにかんじおぼしめし、かゝ

る殊勝なる事はよもあらじと、御むすめの不幸をゆるし給ふのみならず、さま〴〵の佛具法具に、黄金一はこあひそへて、寄進せられけるとかや、さるほどにさゝのせう法師はつ花びくには、花がたみをひぢにかけ、春は落花の雪をふみわけ、夏は青葉のこかげをたどり、秋はもみぢの露にそぼち、みねにのぼりてはなをつみ、このみつま木をひろひ給ふとて、めうかいびくに斯くぞ詠じ給ふ、

しきみつむ山路の露にぬれにけり
あかつきおきのすみぞめのそで

さてまたありまわかなのあませは、となせの瀧の水をくみ、佛に供じ奉るありさま、かのしちだ太子の、わうぐうを出給ひ、だんどく山にのぼつて、仙人につかへ給ひて、なつみ水くみ薪とり、さま〴〵なんぎやうし給ひしも、かくやとおぼえて殊勝なり、かくてはるすぎなつたけて、秋くる風の音づるゝ、庭のおぎはらそよぐ聲に、はつはなびく尼わかなの尼をめして、かく物ふかき山住を、たれやの人かとひくるらん、あれきゝ給へとあれば、うけ給はると申て、柴のあみどををしひらき、やがてはたと立てかくなん、

野山わけたれかはとはん荻の葉の
そよぐはかぜのわたるなりけり

と申ければ、めうかい此歌を、あまりにあはれにおぼしめして、まどのこしやうじにかきつけとゞめ給ふ、かゝるものさびしきなかにも、おぼしめしなぞらう事どもは、つらき中にもあまたあり、軒にならべる松がえをば、七重寶樹とかたどれり、岩間につもる水をば、八くどくすいとたとへたまふ、無常ははるの花、かせにしたがつてちりやすく、うかいは秋の月、雲にともなつてかくれやすし、むかしはすいちやうこうけいにまくらをならべ、たのしみをきはめ給ふ身なれども、今はしばひきむすぶ草の庵、軒にはつた朝がほはひかゝり、しのぶまじりのわすれぐさ、へうたんしば〳〵しばの戸を、ならすあらしも物すごく、時雨も霜もをくつゆも、もる月かげにあらそひて、たまるべしともみえざりけり、うしろは山まへは野べ、いささをざさに風さはぎ、世にたゝぬ身のならひとて、うきふししげき竹ばしら、都のかたのをとづれは、まどをにゆへるませがきや、わづかに事とふものとては、みねにこづたふさるの聲、しづがつま木のをのゝ音、

これらのをとづれならでは、まさきのかつら青つゞら、くる人まれなる山ざとの、さやけき月をながめおりて、さゝのせう法師かくなん、

やまざとに月はみるやと人はこず

そらゆくかぜぞ木のはをもとふ

かくて四人の人々は、ぼだいのつとめおこたらず、あかしくらしたまふほどに、清月れいならぬ御こゝちいできたまふて、うちふさせ給ひしが、次第によはらせ給ひて、いまをかぎりとみえたまふ、ひごろよりおもひまふけたまふ事なれば、ほとけの御手にかけられたりける、五色のいとをひかへつゝ、なむさいはうごくらくせかいの主彌陀によらい、本願あやまりたまはずば、かならずいんぜうし給へとて、御念佛ありしかば、めうかいびくに、ありまわかな二人のあませ、ひだりみぎりにさぶらひて、いまをかぎりの御なごりおしさに、聲々におめきさけびたまひけり、御ねん佛のこゑ、やう〳〵よはらせ給へば、西に紫雲たなびき、異香庵室にみち〳〵て、音がくそらに聞ゆ、かぎりあることなれば、寶德元年やよひなかばに、一期つゐにおはり給ひけり、はつはなびくにの御なげき、なか〳〵申もおろかなり、千本のはなのえんを結びてより、かいらうどうけつのちぎりあさからず、あけくれそひなれ給ひしかば、いまはのきはの御わかれ、やるかたなくぞおもはれける、しかりとはいへども會者定離、愛別りくのことはり、いまさらおどろくべきにあらずとて、をり〳〵の御佛事、いとなみたまふぞあはれなる、この人々も遲速こそ有りけれ、つゐには龍女がじやうぶつの跡をおひ、ちうじやうひめのごとくに、みな往生のそくわいをとげられけるこそありがたけれ、

四人びくに下 終

角田川物語上

こゝにほんてう七十三世、ほり川のゐんの御宇かとよ、みやこ北白川には、よしだの少將これさだとて、かうけ一人おはしますが、しかるにこれさだ、うちには五かいをたもち、ほかにはじんぎをもとゝして、しいかくわんげんに、七げい六のう、ひとつとしてくらからず、そのなのほまれよにたかし、御子二人おはします、ちやくなんをばむめわか丸、つぎは松わか丸とて、七つ五つになりたまふ、いづれも、かたちははなにて、ことのはごとにおくつゆの、いたいけしたる御ありさま、ぶものてうあひかぎりなし、あるときこれさだ、きたのかたにちかづき、いかに申さんきゝ給へ、つくゞゝものをあんずるに、それ一せうはかぜのまへのくも、なをしいのちはせきくわのごとし、しよせん子ども二人がうちに、一人はしゆつけになし、なからんあとをも、とわれんとおもふは、いかにとありければ、きたのかたはきこしめし、げにありがたき御こゝろへや、さりながらむめわかは、そうりやうなればいへをつぐべし、まつわかいまだおさなけれども、しゆつけになしてわがあとを、とわれんことのうれしやと、ふうふもろともに思ひたち、ぼだいの心をおこさるゝ、心のうちこそしゆしやうなれ、さてわか君をちかづけて、いかにまつわか、なんぢいまだにやくなれ共、がくもんをさせんため、山でらにのぼすぞかし、せんだんは二ばよりかんばしといへば、よきにがくもん仕つれと、すなはち御めのとに山田の三郎やすちかを、御かいしやくにつけ給ふ、やすちか、松若の御ともして、ゑいざんさしてそのぼりける、やまにもなればひがしだにの、めうほうゐんに入りたまひ、にちぎやうあじやりの、御でしごとなり、にちやてうぼおこたらず、よきにがくもんしたまひける、もとよりりこんそうめいにて、一をきいてばんじをさとり、七歳のくれほどには、内外のさたとゞこほりなし、これぞたいしのけしんやと、うらやまざるはなかりけり、さればにやまつわかどの、おさなくはましませども、しよがくはるかにこへたまへば、がまん心やおこりけん、又はいかなるぶつじんの、御とがめにてやありけん、いづくともなく、やまぶし

一人きたり、いかにこれなる御ちご、さぞやちうやのがくもんに、こゝろつかれたまふらめ、われらがすみかへおんとも申さん、こなたへいらせたまへやと、いふかとおもへば、そのまゝつかんで、こくうにうせけり、その〳〵おどろき、とり〴〵せんぎしけれ共、もとよりぐひんのわざなれば、そのゆきかたはなかりけり、にちぎやう大きにおどろきたまひて、さていかゞせんとあれば、やすちかきいて、まづそれがしは御さとにかへり、此のよしをつげ申さんと、にちぎやうぼうにいとまをこひ、きたしらかはへとかへりける、御所にもなれば、かやう〳〵と申上ぐる、こはいかになにごとぞと、あきれはてさせ給ひける、いたはしや、ふうふの人々くどき事こそだうりなれ、さだまるごうとはいひながら、かねてゆめほどしるならば、なにしに山へのぼすべきぞ、さてもむざんのことやとくどき、まづさめ〴〵となきたまふ、あはれなるかなこれさだどの、おりふしこのごろは、かせのこゝちとのたまひしが、此のことをきこしめさるゝより、しよくじをもまいらずして、しだいにおもらせたまひける、みだい所やむめわかどの、しばらくなげきをやめたまひて、これさだのあとやさきにたちよりて、いろ〳〵かんびやうしたまへども、ぢやうごうかぎりのいれいかや、おもりこそすれけんはなし、今をかぎりのその御とき、御しやてい、松井の源五さだかげ、らうどうに、あはづの六郎としかぬ、やま田三郎やすちかと、御まくらちかくめしよせたまひ、いかにかた〴〵、それがしはしやばのゑんつきはて、たゞいまめいどにおもむき候、うめわかいまだやうち也、十五にならばさんだいさせ、よしだのあとをつがせてたべ、それまではさだかげにあづけおくぞ、いかに二人のらうどう共、ばんじさだかげにこゝろをあはせわかをもりたてえさせよや、いかに梅若丸、ちゝうきよになきとても、はゝかう〳〵におとなしく、いゑのなをあげよかし、いとま申て、北のかた、なごりをしの梅わかと、御ねんぶつともろともに、あしたのつゆときへ給ふ、かみから下にいたるまで、みな一どにわつとさけびたまひける、いたはしや、みだいどころくどき事こそあはれなれ、はかなやなこのとのご、みのの國のがみにて、なれそめしより此かた、つかのまもはなれぬ身の、ながきたびにおもむきたまひ、さぞ

やさびしくおぼすらん、われもつれてゆき給へとて、いだきつきなきたまふ、されどもかなはぬみちなれば、なみだながら御しがいを、のべにをくらせたまひつゝ、かずの御そうくやうして、御とぶらいのかぎりなし、わが君の御わかれに、つまのなげきなれば、いよ〳〵うれひにしづみ給ふ、みだい所や梅わかの、御心のうちあはれなり、きのふけふとは申せども、月日にせきもりすゑざれば、みとせになるはほどもなく、むめわか殿も今ははや、十二さいになり給ふ、され共ちゝの御事を、へんじもわすれ給はずして、あけくれなげかせ給ひける、さるほどに松井の源五さだかげは、つく〳〵ものをあんずるに、梅わかの十五になるならば、つぎめのさんだいさすべきか、さあらばかれにしたがひて、くちはてんこそくちをしけれ、さてまつわかのめのとなる、山田の三郎をちかづけて、なふやすちか殿、なれ〳〵しき申事にて候へども、御身をたのみ申あわせんしさいあり、たのまれたまはゞ申さんといふ、やすちかきいて、いまめかしきおほせかな、それがし御やうにたつ事あらば、何事にても候へかし、うけたまはらんと申す、さだかげきいてよろこび、いやべちのぎにても候はず、むめわか十五になるならば、つぎめのさんだいさすべき、しからばわれ〳〵此のまゝにて、くちはてんこそむねんなり、いざやかれをうつてすて、よしだのいゑも、それがしつがば、かた〴〵にも、くわぶんのをんしやうまいらせんと、おもひたつはいかにとかたる、やすちかきいて、おとたかし〳〵、それがしいちみつかまつり候はゞ、たれにかおそれ申べし、さりながらとしかぬは、わか君のめのとなれば、しゆをすゝめうちとけたのませ給ふべし、もしもせうゐんいたさずは、じこくもうつさずもろともに、うつてすてんはやすかるべし、はやおもひたちたまへと、てにとるやうにぞ申ける、さだかげきいて、げに〳〵これは、いわれたり、さらば御へんはかへられよ、それがしはからひ申さんと、しゆ〴〵のさかなをとゝのひ、としかぬをまねきよせ、さま〴〵しゆをしいたりける、しゆもやう〳〵すぎければ、ちかふより、こゞゑにたてて、かやう〳〵のくわだてなるが、おん身ももろともに、おもひたゝれ候らへかしと、ありのまゝをかたれば、としかぬはつとおもひしが、さらぬていにてい

ふやうは、あらはづかしや、われらがこゝろをひき御らんぜんため、かくのたまふとおぼへ候、もし御いつはりにてもや候はんと、なをもこゝろをひきければ、さだかげきいて、おろかなりとしかぬ殿、なにしにいつはり申べき、さればやすちかだうしんにて、たゞいまかへられ候が、ひきあはせんかといへば、いやそれまでも候はぬが、なふさだかげどの、まづあんじても御らん候へ、あのむめわかどのは、御身のためにはおいなり、をいはこにてはなきか、なさけなくもおぢの身としておいをうち、そのあとをおうりやうせんなどゝは、をとなげなし、わかぎみをうたんとおもはゞ、それがしがくびをきり、そのゝちのぞみをかなへさふらへ、かやうにいふがむねんならば、としかぬにおふてしねと、たちひんぬきとんでかゝる、さだかげざしきにたまらず、こゝをさいごと、にげたりけり、としかぬおつかけうたんとおもふが、まてしばし、それがしこゝにてむなしくならば、わか君うたれ給ふべし、まづ此のよしつげしらせんと、たちをさやにおさめ、やかたをさしてかへりしを、ほめぬ人こそなかりけり、やかたになれば、みだいどころやわか君にちかづきて、さだかげやすちか、こゝろがはりをつかまつり、かやう〳〵のしだいとかたれば、みだいわかぎみきこしめし、こはそもいかにせんと、あきれはてさせ給ひける、としかぬ見まいらせ、いや〳〵御よわくてかなふまじ、さだめてゆふさり、夜うちにかけむかふべし、ひとまづおちさせたまへといへば、わかぎみきこしめし、いや〳〵おちまじきぞ、かたきよせくるものならば、ずいぶんたゝかい、しやうぶをみて、かなわずばおちゆくか、はらきるまでこそあるべけれ、やの一つもはなさずして、おちたりなどゝいはれんは、ごにちのためもはづかしけれ、たゞ〳〵いくさのやういをせよ、としかぬげにもと思ひ、さ候はゞみだい所を、ひとまづおとし申さん、こなたへ御入り候へとて、にしさかもとにしる人あれば、此所に御とも申し、よきにしのばせたてまつり、それよりもとつてかへし、あひしたがふつはものどもを、五十餘人かたらひ、をの〳〵こゝろをひとつにして、よするかたきをまちゐたり、さたかげは、としかぬにおひつめられ、いまだふるひもやまざれば、かくてはかなふまじとて、またやすちかをまねきよせ、此のよしをかたれ

ば、やすちかきいて、さあらばじこくをめぐらさず、ゆふさりようちによせんとて、かちうのこらず、つがうそのせい三百よき、北しらかはの御所にをしよせ、ときのこゑをぞあげにけり、御所のうちにも、まちもうけたることなれば、すこしもさわがず、としかぬやぐらにかけあがり、たゞいまよせきたるは、さだかげとおぼへたり、むやうのいくさをせんよりも、すみやかにひきしりぞけ、かくいふそれがしは、むめわか君のめのと、あわづの六郎としかぬなり、かけよ、てなみのほどを見せんとて、やたばねとつてをしみだし、さしとり引きつめいたりけり、そののちまた、よせてのかたより、むしや一きかけいで、大をんあげていふやうは、たゞいますゝみいでたるは、山田の三郎やすちかなり、ひごろはうばいといへども、ついにしやうぶをけつせず、あはれとしかぬとくまんに、てにはためじものをとて、かうげんしてぞひかへけり、としかぬきいて、あつぱれくわぶんのいひやうかな、あわづの六郎これにあり、よれくまんものどもとて、をしならべむづとくみ、りやうばがあいにどうとおち、やすちかをとつておさへ、ちつともはたらかせず、いかにやすちか、をのれめは、ぶしのほうをしるやしらずや、ことに三代そうをんのしうにむかつて、ゆみをひき、やをはなさんとおもふこゝろざしのほどは、いぬやかんにおとりたり、うけてみよといふまゝに、くびをふつつとかきおとし、これをいくさのはじめとして、ひばなをちらしてたゝかひける、よするよせては大ぜい、みかたはぶせいのことなれば、みなこと〴〵くうたれける、としかぬちからおよばず、わか君にむかつて、いまははやこれまでなり、一まづ西さかもとへたづねおちさせたまふべし、それがしこれにとゞまり、ふせぎ申べきといへば、ちからおよばず、わか君うまものゝぐをぬぎすて、にしさかもとまでおちたまふ、としかぬ今はかふよとおもひ、やかたに火をかけ、大をんあげていふやうは、いかによせてのやつばら、わか君御はらめさるれば、としかぬ御とも申すなり、かうなるものゝじがいのやう、見ならひてほんにせよとて、よろいのおひうはおびきりてすて、ゑいやつといふてそらばらきり、ほのほのに入るふせひして、うへの山につつたちあがり、しばらくいきをつきたり、よせてはいくさにうち

かちぬと、ときの聲どつとつくりて、ひいたりけり、かのさだかげがしよぞんのほど、あつぱれぶだうのさぶらいやと、みなにくまぬものはなし、

角田川物語上終

角田川物語中

さて、いたはしやむめわか丸、きたしら川をおちたまふが、ころは二月のすへつかた、くらさはくらしみち見へず、こゝろぼそくもたゞ一人、にしさかもとはいづくぞと、まよひたまふぞあはれなる、かゝりける所に、あふしうにしよのせき、しら川の人あきびと、喜藤次といつしもの、このごろみやこにありけるが、をくしら川へとくだりける、いたはしや、わか君御うんのつきたるかなしさは、かのあきひどにちかづき、なふみちゆき人にものをとふ、これよりにしさかもとへの、みちをおしへてたべとあり、あき人きいて、天のあたへとよろこび、なにがしこそ、にしさか本のものにてさふらう、いざいらせたまへ御とも申さんと、わか君をともない、さかもとへはゆかずして、あづまのかたにとくだりける、おほつはまでをうちすぎて、せたのはしをうちわたり、よこた川にぞつきにける、わか君御らんじて、なふいかにつれ人、われは都北しら川のものなるが、此の川はかもしらかはにもかわ

りて、むかひをみれば山ちなり、又たび人のいひけるは、あづまへいつかくだりつき、都のことをかたらんなど丶物がたりしてとをりしが、さてそれがしをも、あづまへつれてゆきたまふか、ふしぎさよとをほせける、あきびときいてこざかしきわつぱかな、なんじを、大つのうらにて、人かいがもとよりかいとつて、あふしうのしら川へ、つれてくだるはいかにといふ、わかぎみきこしめして、さては人にかどわかされ、これまできたるはむねんやな、やあいかに人かい、われをかどはかしてうらんとや、なか〳〵をくへはくだるまじと、こしのかたなにてをかけたまへば、あきびとやがてとつてふせ、御かたなをうばひとり、さんざんにちやうちやくす、いたはしやわかぎみ、大のおとこにうちふせられ、きもたましゐもあらばこそ、たゞきへいりておはしける、なみだのしたよりもこへをあげ、やあいかにひとあき人、われはみやこのものなるが、よしあるもの丶子にてあり、あづまへつれてうらんより、みやこへをくりとゞけよかし、あたひはのぞみにとらすべし、ひらさらゆるせあき人と、てをあはせてぞなげかる丶、あきびと此のよしみるよりも、しよせんくちをあけておけば、そゞろにものをいふぞかし、くちをたゝくは、くつはほこうこそはいましむれと、さるぐつはをはませて、あゆめ〳〵とおつたつるは、あほうらせつがざいにんを、しもとをもつてさいなみしも、これにはいかでまさるべき、をつたて〳〵ゆくほどに、むさしとしもおさのさかいなる、すみだがはにぞつきにける、いたわしやわかぎみ、いまだならはぬたびといひ、つゐにはつよくあてられ、御あしもきれそんじ、そめぬくさ木もなかりけり、いまははや、一あしもひかれねば、よわりはてつゝかはぎしに、たおれふしてぞおわしけり、あきびとこれを見て、やあなにとてあゆまぬぞ、あゆめとてひきたつれば、うつぶしにかつぱとふす、またひきおこせばどうとはふし、さけぶにこゑのいでばこそ、いきもはやたえ〳〵に、めもくらむばかりなり、あきびといよ〳〵はらをたて、いのちもうせよとうちふせ、そのまゝそこにすておき、このほどのながたびに、はませしもの丶をしさよと、つぶやきてあきびとは、あづまをさしてくだりける、にくまぬものこそなかりけれ、その丶ちまた、ざい

しよのものどもあつまり、御すがたをみたてまつるに、よしあるさまとみ申たり、おん身は、いづくいかなる人の御子なるぞ、御みやうじなのりおはしませ、こきやうへおくりまいらせんと、みづなどをそゝぎ、さま〳〵いたはりたてまつる、いまをかぎりのむめわかまる、よにくるしげなるいきをつき、御なさけのほどありがたくさふらう、まつごにおよび、いまはなにをかつゝみ申べき、はづかしながらそれがしは、みやこきたしらかわに、よしだのせう〳〵これさだのちやくし、むめわかといふものなるが、十さいにてちゝにおくれ、はゝばかりにそいまいらせしが、ひとあき人にかどわかされ、かやうになりはてゝ候ぞや、ふるさとなるはゝ上の、かくなりゆくとはしろしめされず、なげかせたまわんかなしさよ、よし〳〵、それとても、われむなしくなるならば、ふるさととて、みやこ人のあしてかげもなつかしければ、このみちのほとりにて、どちうにつきこめ、しるしに、やなぎをうへてたまわれと、御てをあわせをとなしやかに、ねん佛申させたまひしが、ねむれるはなのごとく、ついにはかなくなりたまふ、あはれととわぬ人ぞなき、されどもかなはぬことなれば、ざい所のものどもあはれみて、御のぞみのごとく、どちうにつきこめやなぎをうへ、いざとぶらひてまいらせんと、大ねんぶつをはじめ、にちやてうほうおこたらず、ねんぶつ申しとぶらいける、むめわかまるのさいごのてい、もののあはれはこれなりとて、かんせぬものはなし、是れはさておき、あわづの六郎としかぬは、やまづたひうらづたいし、にしさかもとにしのびおち、あるじの、やすふさをちかづけて、としかぬまいりてさふらふそれ〳〵申してたべといふ、うけたまわるとて、みだい所にまいり、此よしを申あげれば、はゝうへたちいで、なに、としかぬがきたりたるぞや、むめわかはいかにとあれば、としかぬ大きにげうてんし、いやわかぎみは、いくさみだれしゆゑ、にしさかもとへとをしへ、おとしまいらせ候が、ふしぎさよと申ければ、はゝは此よしきこしめし、なにといふぞむめわかは、おちてきたるとかや、いまだおさなきものなれば、みちにばしふみまよひ、しらぬくにへもゆきたるかや、もしも此こがゆきかたなくば、わが身はなにとなるべきと、なみだにくれさせ給ひける、としかぬうけた

まはり、いや〳〵とをくはしのばせたまふまじ、ちかきざい所に御ざあるらん、それがしたづねまいらすべし、御こゝろやすくおぼしめせと、御前をまかりたち、かりそめながらたちいでゝ、ちかきやまがやさと〳〵を、たづねめぐれどもゆきかたなし、むざんやとしかぬは、このよしかへりて申さんとおもひしが、いのちあらんかぎりはとおもひ、すご〳〵と、たづねかねてぞまわりける、ことにあわれをとゞめしは、むめわかのはゝうへにて、ものゝあはれをとゞめたり、はやそのとしもくれすぎて、あくるはるになりけれども、とかくのそうもあらざれば、さてははやとしかぬも、たづねかねてあるらんと、たのむ木のもとにあめもたまらぬふせいにて、いねもいられずたゝ一人、にしさかもとをしのひいで、みやこのうちはのこりなく、だいご たかを やせ おはら、さが にんわじまで たづぬれども、そのゆきかたはなかりけり、さがのをくにて、みちゆき人にといたまへば、それはいつのことぞといふ、こぞの春のころにて候、たび人きいて、さればよくにたる事の候、こぞの二月のすへつかたに、大つ三井寺のへんにて、さやうのちごを、とうごくのひとかいかとおぼしきものが、あづまへつれてくだりしに、ゆくまじきとてなきしを、さるぐつはをはませ、ひつたてつれてくだりし、もしもさやうのひとに、おもひあたりたまひなば、あづまをたづねたまへ、われもひとも子をうしない、おやのみとし、けうらんするはことはりなり、いたはしの御ことやと、とぶらひてこそとをりける、はゝは此よしきこしめし、なふそれこそは、わが子なるべし、たづねあはぬはことはりやとて、たをれふしてぞ、なきたまふ、おつるなみだのしたよりも、あさましのことどもや、かやうにこゝろありがをなれども、われはものにくるうよのう、いやわれながらことはりなり、あのてうるいやちくるいだにも、おやこのあはれはしるぞかし、ましてやひとのおやとして、いとしうかなしくそだてつる、わがこのゆくへをたづねかね、けうらんするはことはりなり、あらむざんや、むめわか、ゆくゑをきけばあふさかの、せきのひがしのくにとをき、あづまとかやにゆきぬるとかや、こゝろわづらひつゝ、はやけうらんと身をかへて、ささのはにしできりかけ、あづまのかたはそなたと、き

きおよびしをたよりにて、まよひおもふぞあはれなり、たづぬるわが子にあふみぢや、よをうねの丶になくつるも、子をおもふかとあはれなり、しぐれもいたくもり山の、木のしたつゆにそでぬれて、風にたまちるしのはらや、かゞみのやまはありとても、なみだにくれてみもわかず、ものをおもへばよのまにも、おいそのもりはこれとかや、ばんば さめがい、かしはばら、かゞみのしゆくにつきたまふ、いたはしやは丶上は、ふるさとへはにしきをきてかへるとこそき丶しに、これはいにしへを、おもひいだすればものうやな、此のしゆくにて、せう〳〵どのになれそめしゆへにこそ、かやうにものはおもふぞ、なをこ丶ろのわづらいぬる、のがみのしゆくをくるひすぎ、わが身もいまはおはりなる、あつたのみやだちふしかがみ、三かはにかけし八はし、しまみざか、わがなをたれかとをとをみの、はまなのはしをかけてだに、おもひもよらぬたびのそら、をしからぬ身をながらへて、いけだのしゆくにかりまくら、ゆめをみつけのごうとかや、さよの中山これかとよ、わが子のゆくへをきく川や、神にいのりはかなやのしゆく、するがの國についたよな、おもひするがのふじのねに、けぶりはそらによこおれて、くゆるおもひはわれひとり、みなみはそうかい、まん〳〵としてきわもなし、北はまつ山こう〳〵たり、すその丶あらしはげしくて、たゞなにごとも、ゆいかんばらこれとかや、いづのみしまやうらしまや、あけてくやしきはこね山、はづかしながらすがたをなみ、さがみのくにに入りぬれば、こ丶にた丶ずみ、かしこにたつてくるひける、いまははや、むさしの國につき給ひける、

角田川物語中終

角田川物語下

さるほどに、いたはしや、むめわか丸のはゝ上は、御ゆくゑをたづねかねつゝ、いまははや、むさしとしもおさのさかいなる、すみだ川にぞつきたまふ、をりふしいでふねありければ、なふいかにせんどう、人なみに、みづからをも、ふねにのせてたべとある、せんだう聞きて、こゑをきけば都人、すがたはけうじんと見えてあり、おもしろうくるはれよ、さなくばのせぬといふ、きやう女聞て、なふいかにわたしもり、たとへひなゑなりとも、めいしよにするはこゝろあれ、もはや、あの水にうつふろ月を見たまへ、風こそなみをたへきたれ、しんによの月はくもらぬものを、くるへといへる人ぞうき、むまにものらぬこのきやう女、つかれはてゝさぶらふぞや、こゝはめいしよのわたしもり、わらはこそ、心なくてさわぐとも、日のくるゝに、ふねにのれとはいわずして、くるゑといふは、いなか人こそつらき、さりとてはふねこそせばしとも、のせさせたまへわたしもり、さりとては、のせ



てたまわれや、ふな人きいて、あふ、あやまりたるは、きやうぢよ、なにしをいたる やさしさよ、なにかをしまん のりたまへと、さをさしよせて、のりたまへ、きやうぢよふねにのりうつり、むかひのかたをみわたせば、かわぎしの木のもとに、ひとおほくなみいたり、なふいかにわたしもり、あのひとのおほくあつまりてあそぶは、われをまちかけ、くるわせんためかや、せんどうきいて、いやと、よあれは大ねんぶつ、まことに此のなかに、しらぬ人のみをほかるべし、此のふねのむかいへつき候はんまに、あの大ねんぶつのいわれを、かたつてきかせ申さん、こぞの三月十五日、しかもけふにあたつて候、年のころ十二三のおさなき人、ことのほかにいれひし、此の川ぎしにひれぶし候を、此の邊の人々たちより見るに、よしありげにみへて候程に、さま〴〵いたわり候へども、ぜんせのことにてもや候ひけん、たんだよわりによはり、すでにさいごとみへしとき、おことはいづくいかなる人ぞと、くわしくたづねてさふらへば、その時おさない、われは都北しら川にて、よしだのなにがしと申せしもの丶子にてあり、ち丶にをくれ、は丶ばかりにそひまいらせしを、人あき人にかどわかされて、かやうになりゆき候、都の人のあしてかげもなつかしければ、此のみちのほとりに、どちうにつきこめしるしには、やなぎをうへてくれよとて、をとなしやかにねんぶつ申、ついにはかなくならせて候、なんぼうあはれなるものがたりにて候ぞ、見申せばせんちうにも、せう〳〵都の人も御ざありげに候へば、ぎやくゑんながら、御ねんぶつをも申させ給へや、よしなき物がたりにふねがついて候、とう〳〵御あがりあれといへば、せんちうの人々、さてもふびんのしだいかな、いざやわれらも、ぎやくゑんながら、御ねんぶつを申さんとて、その〳〵ふねよりあがりける、されどもきやう女は、ふねよりもあがらず、た丶ふなばたにひれぶして、なくよりほかのことはなき、せんどうこれを見て、あら、やさしのきやうぢよや、いまのものがたりをき丶、さやうになみだをながすかや、いそぎふねよりあがられよといへば、そのときようぢよ、おもてをふりあげ、なふふな人どの、たゞいまの御ものがたりは、いつのことにて候ぞ、そのちごの年ごろ、なをばきこしめされざるか、せんどうきいて、なふ、こ丶

ろありげにといたまふかや、きよねん三月今日の事、ちごのとしは十二三、ちゝのなをばよし田の少將、そのこのなをば、梅若丸と申されしぞ、このかたはおやとも、しんるいとてもたづねこず、きやう女もみやこのひとにてましまさば、いそぎふねよりあがり、ともに念佛申されよ、あらふしぎや、此のきやう女いまの物がたりをきくよりも、身にしむていに見へけるは、いかなることぞといへば、きやう女なみだのしたよりも、なふ、しんるいとても、たづねこぬこそだうりなり、そのおさなきものこそ、わらわがたづぬる子にて侍らふぞや、これはゆめかやうつゝかと、そのまゝそこにたをれふし、もだへこがれてなきたまふ、ゆききのひともももろともに、げにだうりなりことはりなりとて、そでをぬらさぬ人はなし、せんどうなみだおさへ、いかになふ、御はゝうへさま、いまゝではよそのこととおもひしに、さては御身のうへにて候よなふ、さりながら、いまはかへらぬことなれば、御なげきをとめ給ひ、なき人の御あとを、とぶらひ給へとすゝむれば、はゝはなく〳〵ふねよりあがりつゝ、つかのもとにひれふして、くどきごとこそあはれなり、うらめしや、これまではさりとても、あはんとおもひしをたよりにこそ、しらぬくにへもくだりしに、いまは此のよになきあとの、しるしばかりを見ることよ、あらむざんや、しのゐんとて、しやうしよをさつてあづまぢの、みちのほとりのつちとなり、はるのくさのみしげりたる、此のつかのしたにこそ、むめわか丸はあるらめ、なふさりとては人々、此のつちかへしつつ、此のよのすがたを今いちど、はゝにみせてたび給へ、あゝたのみなのうきよやと、こゑをあげてなき給ふ、ざいしよのものどもたちより、げにだうりなり、さりながらよのひとおほくさふらへども、はゝのとぶらいたまはんをこそ、もうじやもよろこびたまわめ、しやうごをはゝにまいらせん、御ねんぶつをすゝむれば、はゝはやう〳〵おきなをり、ぎやくゑんながら、さりとては、わがこのためときくからに、しやうごをならしこゑをあげ、なむあみだぶつと申されければ、みなどうをんにねんぶつをあげ、はゝはしやうごをとめたまひて、なふ人々、たゞいまおさなきものゝこゑとして、御ねんぶつのきこへ候は、わがこのこゑときこへけるが、まさしく、此つかのうちにお

ぼへたり、みな〳〵ねんぶつ申させ給へ、ざい所のものこれをきゝ、さればわれ〳〵も、さやうにきゝなしさふらふ、しよせん此のほうのねんぶつをやめ、はゝごばかり申させたまへ、はゝはげにもとおぼしめし、かさねてしやうごをうちならし、なむあみだぶつと申さるれば、つかのしたよりおさなき人、さもしゆしやうなるこゑとして、なむあみだぶつともろともに、しるしのやなぎのかげよりも、うつゝのごとくあらわるゝ、はゝあまりのうれしさに、いだきつきたまへば、そのまゝきへてあともなし、またまぼろしに見へけるを、あれはわが子か、はゝ上にてましますかと、たがひにこゑをかわすれども、きへうする、おもひはなをもますかゞみ、かげろう、いなづま、月、とらんとすればかげもなし、みへつかくれつするほどに、はやしのゝめもあけゆけば、わがことみへしはあとたへて、やなぎばかりぞのこりける、はゝ、あまりのものうさに、しるしのやなぎにいだきつき、このよのなごりにいま一ど、かいなきすがたをあらわさぬか、むめわかよ〳〵と、つかのうへをうちたゝき、おめきさけばせたまひける、あはれといはぬ人ぞなき、そのなかに、そう一人すゝみいで、御なげきはことわりなれども、さりながら、しやうじやひつすいのをきてなれば、ついにはそいはつべき身にてもあらず、なげきをやめたまひ、なき人の御ぼだひ、御とぶらいたまへとけうくんすれば、はゝはきこしめし、あらおそうのけうげありがたや、いまはなげくとかなふまじ、ごせとぶらいてゑさせんと、すがたをかへてたべとある、やすきこと、こなたへいらせたまへとて、やがて御ぐしそりこぼし、あわれなるかなはゝうへは、みづから御なを、めうきびくとあらためて、あさぢがはらに、くさのいをりをひきむすび、御すがたを、すみぞめにあらわして、はなをつみかうをもり、ねんぶつ申おはせしが、あさぢがはらのいけみづに、みづからかげのうつりしを、つく〳〵と御らんじて、これこそ、めうきやうゐんとんのさとりぞと、一すじにおもひきり、にしにかたぶく月を見て、いざやわれもつれんと、いけみづに身をなげ、そこのみくづとなりにけり、さるによつてかのいけを、かゞみのいけと申なり、こゝにわかぎみの御めのとに、あわづの六郎としかぬは、むめわか丸をたづねかね、しやもんのすがたとさまをか

へ、そのなをひきかへてれんしんとあらため、とうなんさいなんのこりなく、たづねゆけどもかいぞなき、いまは又あづまぢや、さがみの國にありけるが、つくづくものをあんずるに、かほどまでたづねけるが、御ゆきかたのしれざれば、いまはうきよにましまさぬか、さあらばせめて御さいご所を、ゆめばかりしるならば、御はなむけにはらきつて、めいどの御とも申べきが、しやうじのほどのしれざれば、とやせんかくやあらましと、あんじかねてぞいたりけるが、げにやまことにわすれたり、それしよぶつの御ぐわんには、しゆ〴〵のほうべんたてたもふも、みなこれしゆじやうのためときく、わがちからになりがたし、かなはぬ事をいのらばこそ、むめわかの御ゆくへ、しやうじの二つをしらんため、いのちをなげうちいのらんに、しるしのなき事よもあらじ、とかくきせいをかけんとて、七日こりをとりにける、さるほどに、とうごくさがみにたちたまふ、大山ふどうにまいりつゝ、なむや大しやうふどうみやうわう、それがしいのりたてまつる事、べちのぎにて候はず、さてもわが君むめわかどの、こんじやうにましまさば、あり所をしらせてたびたまへ、もしもうきよにましまさずば、それがしがいちめいを、はやくめされ候へ、ありがたや、みやうわうは、ぶつちのふしぎおん身にあまり、くわゑんとあらわれたまふとなれば、一つのずいそう見せしめたまへと、水とうのみちをとめ、三七日のだんぢきにて、一めいをかけ、一心ふらんによねんなく、いのりけるこそしゆしやうなり、三七日のあけがたに、いづくともなくどうじ二人、こつぜんとうちむかい、いかにれんしんにうどう、さても、なんじはやさしくも、まことの心をおこし、しうにかうあるしゆしやうさよ、さりながら、なんぢがたづぬるむめわかは、むさしとしもおさのさかいなる、すみだ川といふ所にて、むなしくなりてありけるぞ、そのはゝもあこがれて、おなじくにのかたはら、あさぢがはらのいけみづに、みをなげむなしくなりければ、こんじやうのたいめん、おもひもよらぬ事にてあり、されどもおとゝのまつわかゞ、いまだうきよにあるあいだ、これをそだてよにたてよ、ひきあわせんさらばとて、こくうにむかいてまねかせたまへば、ふしぎやな、山のさうもくしんどうして、しよ山のぐひんしかうしける、まづつく

しには、ひごのくんせんぼう、四つしうには、はくふう、さがみぼう、大せんのほうきぼう、いづなの三郎、ふし太郎、大みねのぜんきがいつたう、かづらき、ひら、よつめきがだけの大てんぐ、小てんぐ、松わか殿をかいしやくして、せつなのあいだにひききたる、どうじ御らんじて、いかにれんしん、なんぢすがたを、よく見るに、このごろのあらぎやうにて、にくちくさつてかれきのごとし、これをふくせよへいゆうすべし、これこそ天のこんすいとて、いつもおいせぬくすりぞとて、れんしんにあたへ給ふ、れんしん、かたじけなしとてふくすれば、たちまちにくちきしゆつたいし、もとのごとくになりにけり、そのときかのどうじ、松わかどのをひきわたし、われをばたれとかおもふらん、われはこれ、みやうわうにつかへ申、こんがらせいたか、二人のどうじなるが、大しやうふだうみやうわうよりの、ぶつちよくによりきたつてあり、此わかをよにたてよ、なをもゆくすへまぼらんとて、どうじのぼらせたまへば、しよ天ぐももろともに、さまぐ〱のきずいをなし、こくうをかけりうせにけり、さてわか君もれんしんも、たがいにひしといだきつき、うれしきいまのなみだなり、されどもちゝはゝむめわかの、さきだちたまふときこしめし、いまひとしをの御なみだは、げにことわりとてきこへける、れんしんなみだをおさへて、さきだちたまふ人々はちからなし、御身にあふ事、おもへばめでたき事なり、いざや是よりみはかにまいり、いそぎみやこにのぼらんとて、まつわか丸の御ともし、あさぢがはらにまいらるゝ、御まへになれば、はなをつみかうをもり、なむゆうれいとんしやうぼだいとゑかうあり、さて御まへをげかうして、いざやむめわかのみはかにまいり、御ねんぶつを申さんとて、しるしのつかにたちより、あかのみづをたむけつゝ、なみだをともにねんぶつし、いざやみやこへのぼり、ゑいざんのししやうをたのみ申、だいりへそうもん申さん、もつともしかるべしとて、ゑいざんさしてぞいそがるゝ、ひがしだににもなりぬれば、にちぎやうぼうにたいめんあり、はじめおわりをかたりければ、にちぎやうなみだをながさせたまひて、いざやだいりへそうもんせんとて、松わかどのを、ぢんじやうにいでたゝせ、だいりへさんだいなされける、ていとになれば、はしめおわりの

ことどもを、いち〳〵ふでにつくし、そうもん有、かだじけなくも、君もあはれとおぼしめし、りやうがんに御なみだを、うかめたまふありがたき、そのゝち、うちよりのせんじには、いそぎおぢさだかげを、ちうばつ仕れとて、ぐんぜいを三百よき下さるゝ、そのうへ松わかを、四ゐの大しやうこれさだににんぜられ、下おさのくにを下さるゝとの、りんげん下るぞありがたき、かたじけなしと、三どてうだい仕、御いまと申て御まへをまかりたち、れんしんをめされ、まづさだかげをめしとれとある、かしこまつたりとて、やがて、さだかけをからめてまいりける、これさだたちいでたいめんあり、いかにさだかげどの、いにしへの松わかなり、ふしぎによにいで候が、ひさしくておんめにかゝり、いんぐわはくるまのわのごとくなり、たすけたくは候へども、おやきやうだいのかたきなれば、はやくいとまをまいらせよ、うけたまわるとて、やがてくびをぞきりにける、にくまぬものこそなかりける、さあらばしよち入あらんとて、上下ゆゝしくはなめいて、しもおささしてぞくだらるゝ、國にもなればはゝ上の御ためとて、がゞみがいけのかたはらに、めうきさんを御こんりうあり、さて又むめわか丸のつかのほとりに、いちうのみどうをこんりうし、もくぼじとごうし、二六じちうたへもなし、そのほかにも、きやうだいの御ために、御そうくやうあり、御とぶらいはかぎりなし、むねにむねをたてならべ、ふつきのいゑとさかへたまふ、じやうこもいまもまつだいも、ためしすくなきしだいとて、きせん上下をしなべて、かんぜぬ人はなかりけり、

明暦二丙申歳十一月日　山田市郎兵衛板

角田川物語下終

一もとぎく上

むかし天りやくのみかどの御時、三條たかくらに、右大臣殿と聞えし人おはしき、院中の御覺えかしこく、ときめき給ふ、その北のかたも、なべてならぬ人にておはします、ふるき御門の御むすめ、しきぶ卿の宮とぞ申ける、いかなりけるちぎりにや、右大臣どのへ參り給ひ、わか君一人ひめ君一人おはします、わか君をば七歳よりてん上をさせ、かぶりし給ひて兵衞のすけとぞ申ける、ひめ君、かたちよりはじめて、此の世の人ともおぼえす、まことにいつくしくおはしければ、いかにもとかしづき、きさきにも奉らんと思召ける、かゝりけるほどに、しやうじむじやうのならひ、らうせうふぢやうの世の中にて、はゝみやにをもきやまふつきける、しんめいぶつだにいのれ共、そのしるしなくて、日々に大事になり給ひければ、今をかぎりと見え給ふ、北のかた、右大臣殿に仰らるゝやう、うゐむじやうのならひは、かぎりある道なり、きえなん命はおしからず、たゞ思ひをく事とては、きんだちの事ばかり也、いか成有さまにておはします共、御らんじはなすなよ、是ばかりよみぢのさはりとなるべきとの給へば、右大臣殿、その事は御身一人の子ならず、心やすく思しめせ、たゞわかれこそかなしけれとの給へば、さてはうれしく候とて、なむしやかぶつととなへて、ねむるごとくにてはやをはり給ふ、右大臣殿、同きんだち、人めもつゝみ給はず、いかにせんとこがれふし給へ共、そのかひさらになかりけり、なくなくれんだいの野べにをくり、のちの御きやうやう、さるべきやうにいとなみ給ひけり、かくて月日かさなる程に、世のつねのならひなれば、さてしもいかでかとて、一家の人々すゝめ給ひければ、とき御門の御めのとに、はりまのんさみと申を、きたのかたにとり給ふ、そのはらに、若君ひめ君おはしましける、若君はいとけなくより、てんじやうに參り、七歳よりかぶり給ひて、四ゐの少將と申けり、ひめ君もおさなくより、てんじやうにつぼね給ひて、そつのつぼねとぞ申けり、さきの宮ばらのきんだちは、たうぶくにをされて、よのきそくもおはせず、され共、ちゝ右大臣どののおはすれば、さてしもはてじと、たのもしくおぼす

に、ぜんせのほうやうすかりけん、ちゝ大臣殿、れいならぬ御心ち、日をへてなやみまさり給ひて、つゐにはかなく成り給ふ、かゝりければ、兵衞の佐殿こそ、ちやく〳〵にて、右大臣殿のあとをつぎ給ふべきに、たうぶく四位の少將にをしとられて、さきの宮ばらのきんだちは、數にもあらず成り給ふ、され共なまじゐに、てん上にまいり給ふ、兵衞のすけ、あはれ出家をして、さんりんにまじはり、ちゝはゝのごせぼだいをとぶらはゞやと思へども、たゞいもうとのひめ君の事心ぐるしく、今は父母もなし、われより外は又賴む人もおはせず、たれに心やすくあづけ置くべき人もおはせずして、心ならずてんじやうにみやづかひ、あけぬくれぬとするほどに、あるとしのなが月の十日あまりの比、ひやうぶ卿の宮の御門に、菊のゑん有ければ、人の申けるやうは、兵衞のすけのさとにこそ、まことにいつくしき、一もとぎくは候へ、かれをめして、御らんじ候へよと申ければ、此菊をめしければ、おしみ申さず、かのきくを參らせけり、まことに色にほひ、えだのさしやう、おもしろく思召、御まへのたてじとみのきはに、ませをうつさせ給ひて、兵衞のすけかたを、御らんじやらせ給ひて、いでや有がたきたからをまうけたる心ちする、そもかれはいづくより尋たりけるぞやと、仰られければ、兵衞のすけ申けるは、あれは父右大臣殿、くらまへ參り給ひしに、くらまのばうのせんざいに、しんくはんもんの菊とて、うつしうへて候しを、大臣わりなくこひとりて、家につたへんとてうへ置しを、父はかなく成て後、いもうとごにて候もの、ちゝがかたみに見んとて、おしみ置て候を、めしにしたがひて參らせ候と申せば、いもうととは、はりまのさんみのはら、そつのつぼねかとはせ給へば、さは候はず、我と同じきしきぶ卿の宮ばらなりと申ければ、みや思召けるは、いざや今のもてなしにて、覺えこそなけれども、ゐんにも此の兵衞のすけにならぶ、うんかくもなきものを、ましてをんなにて、かれがいもうとならば、いかにいつくしからん、あはれ見ばやと、ふかく御心うつりて、此兵部卿の宮は、たうていの御はらことの御おとゝ、よろづに御情ふかく、此兵衞のすけをも、兵部卿の宮つねは御めをもかけさせ給ひて、あはれみ給ひける、此君のこと、よもすがら思ひあかし給ひて、宮の御ずいじん、

ときはと申て、かみかたちたらいて十四五ばかりにて、よろづ物なれなるわらはを召て、あの菊の枝折て参れと仰有ければ、朝ぼらけの露しげきに、さしぬきのすそをとりて、菊を手折て参りけり、宮同じ色なる菊がさねのうすやうに、かくなん、

わが心君がまがきにうつろふは
なをやのこせるしらぎくの花

菊のしら露は、をきそふるよりくるしき物をと、あそばし、菊の枝にむすびて、兵衞のすけいもうとの、すむらんかたの、かうしにさしてかへれと、仰有ければ、ときはもとより、此うちのしさいよくしりたる物にて、三條たかくらに行、此ひめ君のおはします、たいの中がうしにさしてかへりぬ、女ばうたち、御かうしあげんとて立いで、此花を取り、是御らん候へ、花にそへて、なべてならぬにほひのうすやうに、歌かゝれて候、御らんぜよとて、兵衞のすけ殿に、見せ参らせたりければ、見給ひて、兵部卿の宮の御手也、こはいかに、宮の御手にてわたらせ給ふ、いかにして思召よりけるぞ、もとより是こそ、あらまほしき事にてあれ、父母いきておはせば、今までかくてやおはすべき、今は女御后の御位にも渡らせ給ふべきぞかし、又御文あらば、御返事すゝめ給へ女ばうたちとその給ひけり、又ひるほどに、宮、ときはを御つかひにて、御文有り、

行かよふあとはしらねどあふ坂の
關はいとこそこえまほしけれ

此たびは、あらはれての御返事をこへと、仰有ければ、ときは給はりて、三條へ行、にしのたいにて、是は兵部卿の宮の御文よといへば、女房たちは、いかに思ひよらず、人たがへか、とく〳〵かへり給へととりいれず、むなしくかへりぬ、をしかへしかくなん、

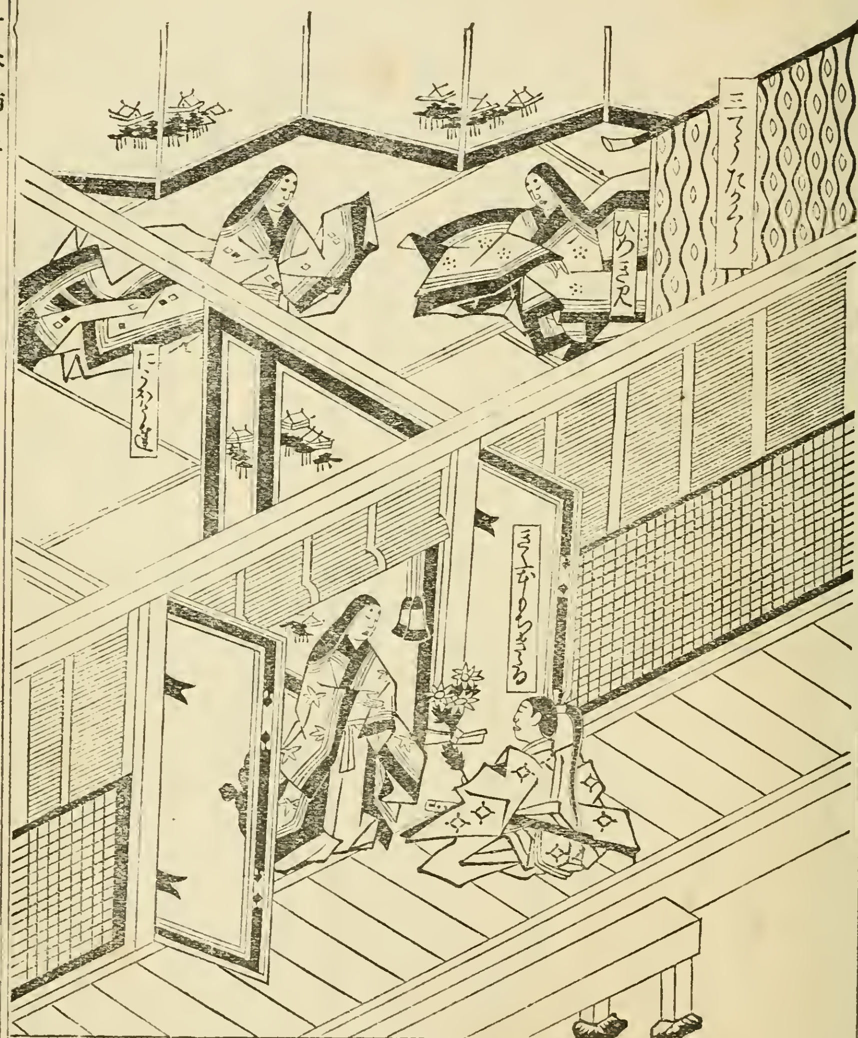
くれなゐのすゑつむ花や我ならん
ふみかへさるゝ身こそつらけれ

とあそばしてつかはさるゝ、ときは取て行、やう〳〵にいへ共出ず、いらへもせず、ときは、おさなき心ちに、ねたく覺えて申やう、たうじわが君の御文なんどを、めざましくして、もてなし給ふびんなさよ、取だに入れさせ給はんとて、みす打あげてなげ入れぬ、され共御返事はなかりけり、其後いろ〳〵のうすやうに、さま〴〵の御心をくだきて、をしかへし〳〵、御

文ひまなかりけれ共、ゆく水にかずかく心ちして、一度も返事なかりけり、宮は、ねたくもいひける物かな、よし〳〵さらばさてこそあらめ、とかくゆはんほどに、母女御殿の御かたへも、聞えんこそはづかしく思へなんどおぼせ共、わすられず、御心よはきにつけても、情の程あらはれて、たゞ一すぢに思ふ也、かくて日數もふるほどに、宮のうちしづかに、よろづ物あはれなるひるつかた、ときは、おさなき心に、みやの思召しづみ給へるをあはれに思ひ參らせ、まぢかく參りて申やう、さて此御事は、しらけてやませ給ふべきか、つねは行て見るに、かひ〴〵しくとがむべきさぶらひなんども、さぶらはず、中々御ふみなど候はんよりも、たゞをしていらせ給へかし、しかも今夜は兵衞のすけ、院中の御とのゐ、てん上に侍る也、たれがくるまともなく、あまた出いり候へば、打まぎれさせ給ひて、くるまをば中門に、しのびたてさせ給ひて、女ばうたち、御とのあぶらなどひしめき候はんまぎれに、にしのつまどのかたより、まぎれいらせ給ひて、ともし火のしろ〳〵となりて、よく〳〵御らんじ候て、御心につかせ給ひ候はゞ、まぎれもいらせ給へかし、宮はさも有べしと思召て、御めのと、さぬきの少將車をめして、てん上人のまねびをして、みやす所を出させ給ふ、時しも神な月ついたちの事なれば、いつしかしぐれうちして、風あらゝかに身にしみ、物あはれなる夕ぐれに、時雨の雲はれければ、夕月夜にちかやかに見えければ、

おぼつかなたそがれ時の夕月夜
　うはの空にも出にけるかな

さてしも三條へおはしましつきにけり、たれが車ともなく、あまたいりけるにうちまぎれて、御車をばちうもんに立られ、ちう門を入給ひぬ、女ばうたち、御かうしおろし、御とのあぶらなどゝ、ひしめくまぎれに、つまどよりいらせ給ひて、御かうしのもとにしのびてたゝずみ給へば、ときはは御車のうちに候ひけり、ともしびしろ〳〵、とうろう共あまたあきらか也、宮かうしのもとに立かくれさせ給ひて、くはしく御らん有ければ、まことにきよげに、きちやうびやうぶたてならべ、御まへに女ばう三人候ひけり、一人はくちばのみゐに、くれなゐのはかまきたるは、ひめ君の御めのとのごんの少將也、ふたあひの一ゐに、しろき



はかまをきたりけるは、さゑもんといふ女ばう也、一人はきくがさねのあこね色に、かうじの物をぞきたりける、みやと申はしたもの也、扨は人も見ず、又おくを御らんじ有ければ、ちいさききちやうさしよせて、ちやうだいのひき物うちあけ、としのほど十六七とおぼしきひめ君、菊のにほひ色に、もみぢがさねこうちぎ、くれなゐのはかまふみながし、ちやうだいによりかゝり、ことうちひきておはしけり、かたち有さま、かみのうへよりはじめて、ひすいをしながしたるこゝちして、まゆひたい、うち物ごとに、みがきたてたるけしき、あくまでけだかくあひなりて、ゑにかくとも有がたし、あたりもかゞやくほどなり、宮は是を御らんじて、うつくしのありさまや、いでやだいりにて、にようごきさきの、かつうはみやなどをはじめて、おほくの人は見つらんに、いまにかゝる人は見ざりき、此のとしごろ、よろづの女をすさまじく思ひしは、かゝるゑんにあはんとての心なりと、うれしく、わが身のうけられん事はしらず、うれしき事はかぎりなし、いつをいつとまつべき、今はまぎれもいらばやと思しめすに、かみな月一日の事なれば、あらしはげしくふき、つまどをさへにふきあけて、御とのあぶらきえにけり、こはいかに、あへなくきえぬる、今又ひんがしのたいへ、火なんどゝ申さんも、れいのことごとしくも有、さらばこよひは御よりならせたまへとて、さへもんのすけは、びやうぶのきはによりふしぬ、ごんの少將は、きちやうおろし、ひめ君の御あとにふしにけり、宮は御とのあぶらきえぬる事、うれしき事に思召して、かねてより御らんじをきたる事なれば、たどらずいらせ給ひぬ、人のけしきしければ、思ひよらぬ事にて、ごんのせうしやう、是はたぞ、さゑもんのすけ殿おはするかとゝへ共、こたふることなし、ひめ君の御かたはらによりふさせ給ふ、なをしのかげかぶりのしければ、ひめ君をどろきさはがせ給ふに、ごんのせうしやうはあはてをきて、これはたぞやと、しきりにあやめとがむれば、宮うちわらはせ給ひて、いたくなあやめとがめ給ひそ、あまりに心づよく、つれなくもてなし給ふうらめしさに、かくたばかり參りたり、こうくわいなしとておはすれば、ごんのせうしやう、たとひたれにてましますとも、いまだならはせ給はで、あまりにさはがせ給ふに、今夜ばか

りはゆるし參らせて、とく〳〵かへらせ給へと申す、宮はつれなげなる御けしきにて、いざしらず、此ほどこゝろまよひの、道もわすれておぼえねば、いかでかへるべきとて、そひふしおはしませば、力をよばずさて候はんもびんなければ、少將はきちやう打あげ立出ぬ、今夜はいか成る人の、つまどをかけたりけるぞ、あないひがひなやと、さへもんのすけにいひけるを、宮はおかしと思しめす、扨ひめ君、思ひよらぬ事にて、いかにせんと忍びかね、なきしづみ給ふ、思ひそめし日より、御心のつきし事、かきくどきかたり給へ共、一こと葉の御いらへもなし、若くろふたくに思ひ、かゝるけしき、ちかまさりする心ちして、今はかたときたちさはるべきやうも覺えず、千夜をもゝ夜にかさねたくおぼすに、しのゝめやう〳〵あけゝれば、鳥のこゑぞしきりなれ、宮、たゞかくなん、

あかぬ夜をあけぬとつぐる曉の

八こゑの鳥のうらめしきかな

あけがたき夜半のけしきにをきわかれ、御なをしひきつくろひ、あかつきをきの袖のうへ、露けきならひなれば、くれなばとくとちぎれ共、さら〳〵返事もし給はず、あかぬおもかげにそひて、御かへり有て、やがて御文あり、

とけがたき夜半のけしきをみかへりて

けさしも人は戀ひしかりけり

この御文を、ときは給はりて三條へ參る、御文參らせんと申せば、ごんの少將とり入れぬ、ひめ君に參らせけれども、かほうちあかめて御らんぜねば、御返事もなし、宮は、くるゝをおそしと仰けるに、日すでにくれければ、又ときは御供にていらせ給ふ、今は一夜のへだて有べしとも覺えず、ふる夜もふらぬ夜も、かよはせ給ひけり、しのびおぼし召けれども、まゝはゝはりまのさんみきゝつけて、よひあかつきに、人をたて見せければ、まことにかよはせ給ひけり、はりまのさんみ、あさましくねたくおもひて、むすめのそつをよび、いかゞすべき、このにしのたいのひめ君の御かたへ兵部卿の宮、夜ごとにかよはせ給ひけり、日比にも成にけるを、しらざりける心うさよといひければ、むすめのそつ、あさましく、いか成けるたよりぞや、わが君いまだまうけの君もましまさず、いかなる御事共有ならば、此君こそ御位にもつかせ給ふべきに、

まして此ひめ君うつくしくおはすれば、御らんじつけねば定めてきさきに立なん、かずならずしなして、つかはしめにせんとこそ思ひつれ、いかゞしてさらぬさきに、此ひめ君をうしなふべきといひければ、三位申けるは、ひめ君をうしなはん事はやすけれ、あに兵衛のすけをうしなひてのち、ひめ君をうしなはん事やすき事也とて、うしなはんずる事をのみ、心にかけて思ふに、五せつの比にも成にけり、此四位の少將は、右大臣の御子なれども、あにの兵衛のすけにもにず、みめかたちおとりて、のふもなくげいもなく、心さへひが〳〵しく、我より官たかき人をも、御門の御めのとごのきそくをして、我心のまゝに思ひて、みなおこなひければ、くぎやうてん上人、にくき事に思ひて、みな同じ心にて、五せつの夜やみうちにせんと、いざなひ給ひけれども、兵衛のすけ殿は、ちゝ大臣、草のかげにておぼさん事もあはれに、又せうとなれば名もおしく、此事にいろはじと思しけるに、五せつの夜にも成にけり、くぎやうてん上人、我も〳〵と參り給ふ、四位の少將はてんじやうの位にたち、またれいのごとくわがまゝにおこなひければ、日ごろこしらへたる事にて、はやてんじやうにやみうちはじめて、四位の少將かぶり打おとし、さん〴〵に引きちらして、いきがひなくなしにけり、四位のせうしやうは、母はりまのさんみのつぼねに行て、われやみうちにせられ、かぶりおとされぬ、いきがひなしとぞいひければ、はりまのさんみ、よきついでにと思ひて、そつのつぼね、四ゐのせうしやう、はりまの三位二人、御門のよるのおとゞに參りて、なく〳〵申けるは、四ゐのせうしやうこそ、やみうちにせられて候へ、かぶりなをし、さん〴〵に引ちらされ、いきがひなく成て候へ、是しかしながら、兵衛のすけのしはざなり、ことくぎやうてん上人は何のいはれに仕るべき、兵衛のすけ、右大臣殿のあとをも我こそと思ひて候へ、しゐのせうしやうつぐとて、ない〳〵うしなはんとし候につゐて、今夜くぎやうてん上人をかたらひて、やみ打をして候、兵衛のすけをいかなるおもきつみにもあておこなひ給はずは、われらはおやこ三人、てんじやうにかみきりすてゝさまかへ、いかなる山はやしにもとりこもり候はんと、なきこがれ申せば、御門おどろき思召て、てんじやうにしゆへ有べしとて、し

ゆへとなさせ給ふ、みかどせんじあるやうは、兵衞のすけ一かたならぬづみふかし、まづとがなきせうとをうしなはんとする事、又さし物ごぜんをやむるてんじやうにやみうちをする事、とりかさねてふしぎなり、いかならんふかきつみにもあておこなふべしと申されければ、かぶりをばひ、くわんをとゞめて、てんじやうをはらはんもあさくおぼゆれば、とくとくあすのたつの時に、さつまがたいわうが島へ、ながすべしとせんじくださるゝ、そのときくはんぱくどのをはじめて、かたへのくぎやうてん上人、たがひに目を見あはせ、こはいかに、やみうちのゆへならば、むねとしたる事なれば、われ〳〵こそいわうが島へもながされ參らせめ、兵衞のすけは、いろはずしてこそ有つるに、とがなきものをながさせ給ふべきか、是を申させ給へかしと、その〳〵申されけれ共、りんげんあせのごとくにて、いでゝ二たびかへらねば、ちからをよばず、くはんぱくどのしばらく有て、兵衞のすけ殿は、いかなるつみのむくひぞ、ながされ給ふべきせんじすでに下されぬ、あすのたつの時都をいで、さつまがたきかいが島にとさだまりぬ、かゝるにごれる御代こそとの給ひてたち出給ふ、かたへの公卿てん上人、われも〳〵とざをたち、こゝかしこにたゝずみよりあひ、あなあはれや、しんやうのえのほとりに月日をおくり給ふためしとぞ思ひしらるゝ、兵衞のすけのとがなきを、きかいが島へながされん事のかなしさよ、はりまのさんみのもてなしと覺ゆる、しいかくはんげんのみちにも、この人をこそしとたのみつれ、花のもと月のまへ、いかばかりさびしからんとて、その〳〵袖をぞしぼりける、中つかさの御子、三位の中將と申人、ことになごりをおしみ、しゝんでんのがくのまへにて、たがひになごりの袖を引ちがへ、なくより外の事ぞなき、三位の中將の給はく、兵衞のすけ殿も七歲のとしより、同じ日てん上して、其後たがひに淺からず思ひかよはして、春は花のもと、秋は月のまへ、一夜もひとりながむる事なく、てんじやうに參る時も、兵衞のすけ參り給はずときけば、さびしく思ひてたちかへり、おはしますと聞ときは車をとばせ、なんでんの櫻しやくひやくたうりのあそびにも、いつかははなれ參らせし、思ひもよらぬわかれかな、たゞ夢かやとてなき給ふ、兵衞のすけの給はく、

ちゝはゝにわかれ參らせしかば、やがてしゆつけしてさんりんにまじはり、父母のごせをもとぶらはゞやと、ふかく思ひ侍りしに、たゞいもうとのひとり候が、今こゝにちゝはゝもおはせず、われよりほかは、たのむかたも侍らず、うちすてたれにあづけんと思ふにきづなとなりて、よふなき御みやづかひ申て、今はすごさぬものゆへ、かゝるうきめをみつるかな、かくて今夜ばかりは、御ものがたり申たく候へ共、三でうにかへりて、いもうとにさいごのいとま申さんとて、たち給へば、ちうじやうたもとをひかへて、

思ひきやかげならべつる冬の夜の
雲ゐの月にわかるべしとは

との給へば、兵衞のすけかくなん、

しらざりつげにもろ共に見し月の
雲井にかげのたへんものかは

かやうにうちながめて、しゝんでんをおり、なく〳〵三でうへおはし給ひけり、

一もとぎく上終

一もとぎく中

ころは霜月十五夜、大うちのには雪しろたえにふりつもり、雪げの雲はれければ、月はくまなく、ふく風ひやゝかに身にしみける、是をさいごと覺ゆれば、こゝかしこにめとまりて、さすが七さいより參りて、雲のうへのすまひ、もゝしきやおほ宮人のまじろひ、かぶりをならべひざをくみ、なれしなごりも身をさらず、又いつかはとおぼすに、めもくれ心もきえければ、なく〳〵出させ給ひけり、さてもきやうごくの大などんのひめ、じゞうのないしと申は、かみかたちうつくしう、みかどをはじめ參らせて、かたへのくぎやうてん上人、めん〳〵心をつくして、いろ〳〵さまざまいはれけれども、なびく事なかりしが、いかなりけるちぎりにや、此兵衞のすけにあひそめて、たがひにあさからず、しのび〳〵にかよひ給ひけり、兵衞のすけは、今はさいご也、じゞうのないしに今一ど、いとまこはんと思召、たちかへりないしのつぼねへおはしまし、つま戸をうちたゝき、しきぶのつぼねやおは

します、ないしや是におはします、さいごのいとま申さんとぞいはれける、ないしは、今うちよりおりて、ふしたりけれ共、れいの色々しき心にて、とびにも出ず、兵衞のすけまちかねて、さりともてん上にて聞給ひたるらん物を、じんせきたえたるなみの上にたゞよひ、又都へかへるまじければ、さいごのなごりに見参らせんと思ひて参りて候、よし〳〵さらばかへりなんと、いふこゑを聞、こはいかにと思ひて、たゞ今うちよりおりてから衣きて給ひたりけるが、いそぎしやうじを引あけて出たり、もみぢがさねの色にはしのもみぢのこうちぎ、しどろに引きかけて、いそぎいそぎをきたれば、ひたひに髮かゝり、月にあたりて見給へば、月のひかりにひかりそへたる心ちして、らうたくくまなき有さま、これや思ふに心もきえまどひ、ひざのうへにかきのせ、ひすいのかみをかきなで、うらめしや、さりともてんしやうにても聞給ひつらんものを、今まで出させ給はぬうらめしさよ、よく〳〵とひ給ふに、雲の上におとたへて、今夜をかぎりに参る事、我身はゐん〳〵たるくがいの海にしづむ共、いかならん世までもわするべし共覺えず、君はめづらしく雲の上にふるまひ付給ひし、いはざりしとだに思召出て、心にかゝり給はず共、後の世かならずとぶらひえさせ給へとの給へば、ないしはかくの給へ共、何共しらず、くかいのなみの上とは、何事によりていかなる事ぞと聞給へば、さりとも是ほどひろふなりたる事なれば、きゝ給ひつらんと思へば、しりも給はざりけるか、申さんも中々心うければ申まじ、のちにきかせ給へよ、今夜はしばらく候て、さいごの物がたり申たく候へども、三でうにかへり、いもうとにこゝろえさせ参らせ、心しづかにいとまこはんとてまかり侍る、かた見になにをか参らすべき、是こそけふまで身をはなさずもちつるものとて、しきしのうすやうにつゝみたる、つげのくしをとりいだし、ないしにたてまつるとて、

今はとてさしてわかれぬ君が門
　つげのをぐしにつげよ折々

ないしの御返事、

わかれなばつげのをぐしもなにかせん
　あらばぞ後のことづけをせめ

いかなるむかしのちぎりぞや、いかならん所までも、

ぐし給へと、なきこがれ給ふ、さるほどに人のをとしければ、兵衛の佐、これほどにひろふなりつる事なれば、わが身の事はとにもかくにもなりなん、御身のためこそいたはしければ、しめて人にしらせじと思ふ也、いとまごひぞとたちたまへば、ないしたもとをひかへて、ともかくもいひあへず、兵衛の佐さて有べきならねば、なく〳〵出給ふ、ころは霜月十五夜の事なれば、大うちの庭、みなしろたえに雪つもり、かんじたる月かげくまなきに、なく〳〵見をくれば、なをしすがたのあくまでなまめきたる有さま、是こそさいごのなごりなるらんと思ふに、いとゞ目もくれて、うちふしこゑもたちつべし、是を見すてゝ、うき道にあゆみいづるくるまにのり、三條へおはしまし、にしのつま戸をうちたゝき、ごんの少將をめしよせて、宮はいらせ給ひたるか、たゞ今いらせ給ひつると申せば、さらば申せよ、思はざる外のせんじをかうぶりて、明日都をまかりいで、さつまがたきかいが島へながされ參らせ候へば、御心しづかに御いとま申候はんとて、參りて候と申給へば、權のせうしやう、なんのゆへぞとて、まづ〳〵なく〳〵參り、しか〴〵と申ければ、宮さはがせ給ひて、さき〴〵はよひあかつきにいでいり給ふを、兵衛のすけにふかくはぢさせ給へ共、おりにしたがふ事にや、ともし火しろくかきたて、きちやうひきものあげさせ給ひて、これへ〳〵と仰られければ、兵衛のすけなをしの袖をかほにあて、なくなくいそぎ參り給ふ、ひめ君はきゝもあへず、やがてうちふししのぶけしきもおはせず、宮、いかにとよ思ひもよらぬ事を聞つるは夢かや、いかなることぞと御たづね有ければ、兵衛のすけ、なく〳〵申されけるは、わが身にすこしあやまり侍らず、何のとが共覺えず、四位のせうしやうこそ、やみうちにせられて候つれ共、故大臣の草のかげにて御らんじ候はん事もあはれに、又おとゞにて候へば名もおしく候て、それにもいろひ候はで、さしのきてこそ候つれ、はりまのさんみのぎにてぞあるらん、かなはざらんまでも、參りて申べけれ共、それにしり給へるごとく、はゝことのおとゝにて候へば、うちとけ給へども、した心よからず、はりまのさんみ、たうていの御ゝのとたるうへ、申共かなふまじければ、ちからなし、いかにいひがひなく思ふらん、たゞしながされ人も又めしかへさる

る事あるぞかし、心づよく思召候へと有しかば、兵衞のすけ申されけるは、大かたはちゝはゝにわかれしより、やがてしゆつけ仕り、ふかき山ぢにいり、一すぢにちゝはゝのごせをもとぶらはんと思ひしに、ただあのひめ君のちゝはゝもなく、とにかくにほだしとなり給ふ、よしなきてんじやうにみやづかひまつりて、はてにはかゝるうきめを見候、我身をばおのこの身にて候へば、じんせきたへたるなみのうへ、くがいの海にうかぶ共、わが身のことはとてもかくても、たゞあのひめ君、やうりう二つのかげつきて、たゞ一人侍るわが身さへ、ながされまいらせて、うぐひすのはねもあれたる心ちして、ひとりふるよにとゞまりて、なげき候はんのみこそ、みちのさはりとも覺へ候へ、をそれにて候へ共、しかるべきより御めもかゝり候か、又頼むかたなき人にて候へば、ふびんにせさせ給ひ候はゞ、それこそのちの世までもうれしく思ひ參らせんと申せば、宮、御泪をぎよいの袖にて、然るべくてやらん、見そめしよりをろかにも思はねば、ひめ君の事は心やすく思はれよ、さり共命あらば、などかさてしもはつべき、われ世の中にあらんかぎりは、しめじがはらとたのめよ、たゞいまのわかれこそかなしけれと、仰有ければ、兵衞のすけの給ふやう、さてもあけ候はゝ、けんびいし二ちやうの者共參り候はんずらん、ゆひしく侍り候へ、御かへり候べしと申給へば、げにわかれまでもそひたてまつるべき、さいごのすがたを見ばやと思へ共、はゝにようご殿のきこしめさん事もをそれなり、申のぶる事あらばいそぎ申給ふべし、ひめ君いたくなげき給ひぞよ、ながされ人も、かならずめしかへしといふ事侍り、をの〳〵御いのりし給へ、女ばうたち、ひめ君なぐさめ參らせよ、くれなばとく〳〵參らんとて、なく〳〵出させ給へば、兵衞の佐、七さいよりてんじやうして生年二十三になるまで、大かたはてんじやうに候へ共、ないないは、此の宮の御情にひかされ參らせて、御みやづかひ申つるに、我こそさいごの御みやづかひのしはてなれとて、はだしにてちうもんのくちまで御をくりに參り給ふ、宮御車にめして、にしのかたを御らんずる、有明の月、山のはにちかくなり行を御らんじて、

あけはなれ山のはちかく入ぬ共
めぐりてあはん有明の月

ひやうゑのすけ、これをうけ給はりて、
月かげは今こそかぎれ山のはに
入なばいつかめぐりあふべき
みやす所まで、御とも申たく候へ共、あけなばむかへのもの共來り候はんずれ、まかりとゞまり候と申て、たのむかげなき人をあはれみて給はらん事、のちの世までもそれこそ御うれしく候へとて、かしこまり候、宮はかへすぐ\ひめ君の事は心やすく思ひ、わが命あらんほどはいかでをろかなるべき、おさなきより召されて、いかばかりこひしかるらんと、おもふのみこそくるしけれ、さらばまかりとゞまれとて、なくなくいでさせ給ふ、すけ殿は御くるまのあともかすかにとをざかれば、ひめ君の御かたにいらせ給ふ、これやさいごの事に思召て、きちやうひきものあけて、ひめぎみの御かたを、つくぐ\と見給へば、らうたくくまなき御かほ、なきあかみたるにほひ、なでしこの露おもげなるよりもうつくしく、もみぢづくしのてに、はしのもみぢのこうちぎ、袖はむらごになきのこし、ひすいのかんざしうちなびき、なきかなしむすがたこそ、見るに中々かなしけれ、兵衛のすけ、なくなくの給ひけるは、たうじ宮の御けしきは、をろかならず見えさせ給へども、たかきもいやしきも、おとこの心は頼みなし、もしいかなる御心がはりあらば、やがてさまかへ、かた山かげに引こもり、ちゝはゝならびにわが後世をもたすけ給へ、いまださいしももたざれば、君よりほかにたのむかたなし、われなければとて女ばうたち、をろかにあたりたてまつるべからず、よくよく\みやづかへ申べし、われをだにかくしなしたるはりまのさんみなれば、ましてひめ君をも、さだめてうしなはんとせんずるに、心ゆるし給ひて、御かたはらさらで、目はなち參らすな、何事も思ふまじき身の、ひめ君ゆへにかやうに心をくだくと、なげき給ふところに、むかへのものども參り、くはりせんみやうとかやよみあぐる、まづ兵衛のすけ一かたならずつみふかし、そのゆへはとがなきおとゝをうしなはんとする事、又てんじやうにてやみうちをもてさしもの五せつをやむる事、かたぐ\もつてあさからぬゆへに、さつまがたきかいが島へながすと、よみあぐる、ひとつもあとなき事也、されどもりんげんあせのごとく、出て二たびかへる事なければ、ちからをよば

ず、いろなる衣まゐらせて、くるまのなかへすだれのさほさまにかけたる御なをしぬがせ給ひて、色のころもめすとて、

かた〴〵にぬぎてし物をふぢ衣
又たちかへる事ぞかなしき

かやうになく〳〵うちながめて、かぶりさかさまにはさみ、けんびいし共たちせめければ、すでに出させ給ひけり、今一たびとやおぼしめしけん、いもうとの御かたへわたる、ひめぎみの御まへにて、いとま申てまかりいでなん、これを御らんぜよ、しやうをかへずしてかはりぬるすがた、御らんじてのちの世かならずたすけ給へ、國へつかんまでは、命ながらふべくも覺え侍らねば、かく申候とて、なく〳〵出給ふ、ひめ君これを御らんじて、おぼろげなる時こそ、人めもはぢもしのばるれ、きちやうみすをもれ出て、くるまにのらんとし給ふ兵衛のすけどのゝたもとにとりつき、われをばたれにあづけて、すてゝいづくへおはするぞとて、今はちゝはゝもなく、君よりほかにたのむかたなきを、いかにせよとてすてゝいらせ給ふぞと、よしなき命ながらへてとて、御こゝろもおしまず、たへこがれ給へば、むかへのしちやうのものども、さすがいは木ならねば、みなそでをぞしぼりける、兵衛のすけ、是はいかに見ぐるしく、女ぼうたち入たてまつれとて、御くるまにめし、ひき出る、ひめ君したひなき給ふ御こゑ、かどのほとりまで聞ゆる、御くるまもすすめやり給はず、たつのときとかや申せ共、たがひにわかれをおしみ給ふほどに、じこくうつりてひつじのこくばかりにみやこを出、とりの時ばかりに山ざきせきどのゐんにぞつき給ふ、それよりして、御ふねにのらせ給ふべしとて、よもすがらかた〴〵への御文かゝせ給ふ、ひやうぶきやうの宮の御かた、いもうとのひめ君、じじうのないし、なかつさかさの三位の中將、かた〴〵の御ふみあそばして、ずゐじんにつきみねと申をめして、をのれはとく〳〵京へ參りて、此御ふみどもたしかに參らせて、御返事とりて參れとて、つきみね京へかへされぬ、あかつきは川ぶねにのりうつる、くがいの海にぞうかみける、さても宮は、三でうへいらせ給ひて、御らんずれば、こゝかしこになくこゑのみして、いつしかさびしげ也、ひめ君はあるかなきかのけしきにて、しづみふさせ給へり、宮あ

さましやこはいかに、いまをの〳〵いのりをして、あんをんに今一たび見たてまつり、見えたてまつらんとはねんじたまはで、いまはしくひとへに、なき人をとり出したるやうにおはするぞ、女ばうたちも御まへちかく候て、なぐさめ參らせよ、これにてはあしかりなん、いづちのかたへもぐし參らせんと思ふ也、さりともなどか兵衞のすけ、今一度みやこへいりてあるべき時、たのもしく仰なんと、なぐさめ參らさせ給ふ所へ、月みね御ふみと申せば、又むねうちさはぎて御らんじけるに、たゞなくよりほかのことなし、くどきかき給へる筆のあと、いへば中々をろか也、返事いそぎ給はらんと申ければ、なく〳〵かきてたびにけり、じゞうのないしのつぼねに參りたり、折ふし中將のみやうぶ、じゞうのつぼねへいり給ひて、兵衞のすけどのゝながされ給へる事、よそに思ふたるもかなしきに、いかばかりおぼすらんといふに、ないし、くがいのなみのうへにてと、いとまをこひしより、なにのとがとはしらず、見ん事かたく思ひてと、いひもあへずふしたるに、つきみねふみ參らせんといひければ、いそぎとりて見給へば、うはがきに、せきどのゐんよりとかきたり、さればいづくへ行たるぞやと思ふに、めもくれ心もきえければ、此の文なみだのうちより見給へば、すでにまん〳〵たるなみのうへにたゞよひ、身はうき物となりはて候ひぬ、君は九のへの雲のうへにふるまひ、つきには數ならぬ身は御心にかゝらじ、去ながら後の世をかならず、たすけ給へとてかくなん、

君を思ふなみだの海にしづみなば
　　こんよのあまとなりて出なん

かやうにかける文を、かほにをしあて、うらめしの御文のやうや、おぼつかなげに雲の上にとかきたれば、心やすくやあらん、これをかたみにし給へとて、たけにあまりたる御ぐしを、かききらんとしければ、みやうぶのつぼねとりつき、かく有てはのちのちぎりをばいかゞし給はんとて、返事をいそぎ參らせ給へとて、すゞりかみ取出し、はや〳〵といへば、なく〳〵筆をとり、いでや雲のうへのふるまひと仰らるゝ事、はづかしさよ、よし〳〵のちにおぼしあはせよ、世にあらばこそ、とかく申さめとて、
もろ共にそこのみくづとなるやとて

涙のふちに我もしづみぬ

とばかりかきてうちふしぬ、みやうぶのつぼね是を取りをしまき、御つかひにとらせぬ、月みねかた〳〵の御返事とり、よるひるきらはずくだるほどに、はりまのあかしの浦にて參りあひ、御返事とて參らする、兵衞のすけ殿、これを御らんじ、いよ〳〵御なみだせきあへず、此の文はいきてのかたみとおぼしめす、ふねのうちなみのうへ、心ぼそくあはれに、あけぬくれぬ行程に、いなのみなとにつき給ふ、すさきのかたを御らんずれば、しろき鳥のはしあかきがとびちりて行ければ、あれをば何とかいふととひ給へば、かんどり申けるやう、あれは都どりと、申ければ、あなおもしろの名や、なりひらの中將も、なにはのつみのむくひにか、みちのくへながされて、すみだがはらをすぐるとて、いざことゝはんみやこ鳥とながめけりと、おぼしめして、

都どりこひしきかたの名はあれど
わがふるさとのことづてもなし

なみにうかび、風にしたがひ行ほどに、さつまがたにぞ付にける、國のかみのあはれみて、きかいが島へはやらずして、九國のいそべに御しよをつくりかけ、よしあるさまにこしらへてをきたてまつり、いその松風すごくふき、きゝもならはぬなみのをと、かもめむら〳〵とびまがひ、すさきに千鳥とびわたりけるを、都人に見せばやとおぼしける、さても都には、いもうとのひめ君、思しづみてましますを、兵部卿のみや、なぐさめすごさせ給ふに、はりまのさんみ、思ふさまにしなして、今はひめ君うしなはんと思ひて、むすめのそつうちつれて、にしのたいへ行たり、あなおそろし何事ぞと、むねうちさはぎ、やをらをきあがりて、もえぎの色かさねにをしのをり物のこうちぎ引かけて、おきあがり給ひけるうつくしさよ、三位思ひけるは、宮思ひつかせ給ひなば、さだめてみやす所にたちなんとおもひ、はりまのさんみの給はく、まことやらん兵衞のすけのながされ給へるは、わらはどものとがのやうにきこしめしたる、はづかしさに、今まで參り候はね、此の御かたこそあれて候へ、宮なんどのいらせ給ふなるに、なめげにもてなし參らせんと思召候はんも、びんなかるべし、しばらく出させたまへ、見ぐるしからぬ所にいらせ給へ、こゝしゆりして

のたいにゆきて、しそく申さんと申せば、はりまのさんみ申さるゝは、宮のいらせ給へるか申せよ、此ひるほどにあさましき事こそ候つれ、さへもんのすけごんの少將、にしのたいに參り申つるは、宮のかよはせ給へ共、しゞうの事にては候まじ、今是ほどにならせ給へる御身にて候へば、とてもかくても候なん、いなかぶしの萬事たゝひて候が、ねんごろに申に、ぐせさせ給ひ候て、われらをもはごくみ給へ、一ごは夢にて候と申けれ共、ひめ君は聞もいれさせ給ひつれ共、やがて車に引のせ參らせて出候つれば、あさましさに、宮にはいかゞ申べきと申つれ共、すさまじげにていらへもせで、跡もなく出させ給ひつる、あさましく候し申ければ、宮はさる事はよもあらじ、はりまの三位がしはざよ、あはれ兵衞の佐がながされしとき、いか成る所へもぐしてと思ひつるに、心をくれして、うきめをみるわが身かな、いか成るありさまにてか、うしなひつらん、いまだいけてやをきたるらん、又は命をやたちぬらんと、さまぐ〳〵御身のくだくるよりもかなしく、さり共わがためしをきたる、かたみやあるら

まゐらせんと有、けふは日のよく候なるに、今と申せば、折ふしさへもんのすけ、みやぎなんどもさとへ出てなし、ごんのせうしやうばかり候けるが、みやに申てしづかにこそと申せば、宮にはあれより申させたまへ、ちかきほどのたち候へば、やがてくるまやりよせ、なやましげにおはしますを、おやこしてくるまにのせ參らする、ごんのせうしやう、あはたゞしき心ちしながら、御ともに參りぬ、鬼神にとらるゝ心にて、四でうあたりなる所の、かたおりどにざしきしつらひたる所也、是れはわたらせ給ふべき所かと心うく、人はあらばこそ、宮の御かたへも、かく共申べき、をしこめられてかどには人をつけてまぼらせけり、さてもその夜は、宮わたらせたまひて、ごんのせうしやうをめさるれど、人あらばやこたふべき、さへもんや候、みやぎやあると、仰らるれ共人もなし、こはいかにとおぼし召、かうしをあらゝかにひかせ給へば、あきにけり、たちいり御らん有ければ、くらくして人のをともせず、などやくらき、人や〳〵とめせ共こたへず、おそろしくならせ給ひて、ときはや候、あやしき事侍り、火とぼして參れと、仰られければ、ひんがし

んと思召、しそくしろくとぼさせて、こゝかしこ御らんじけるに、御ものゝぐとりおさめ、けさまでなれ◎たウさせ給ひつる所にて、御なつかしく思しめし、しとねのひきなをし、うちふさせ給ひぬ、あはれはりまの三位を、いかゞすべきとおぼせ共、今のみかどの御めのとにて、かたをならぶる人もなし、申共かなふまじ、せんせのわがもの思ひのほしなりとて、きちやうをつく〴〵と御らんじければ、きちやうのひぼに、しろきうすやうむすばれてあり、御らんじければ、ひめ君の御手にて、

うきに又猶さしそへてかなしきは

たへずつれなき命なりけり

御身は、うきせかいのよるかたも候はぬ、ごせかならずとかゝれたり、宮は是を御かほにをしあて、たへいりなげき給ふ、なれしなごりのおしければ、今夜はここにてあかさばやとおぼせ共、はりまのさんみ、おこがましく、院中にていひわらひなんもはづかし、さらばかへりなんと思召、夢の心ちし給ひて、かへらせ給ふ御心のうち、申も中々をろか也、みやす所にいらせ給ひて、よるの御しとねにふさせ給ひて、其後はをきもあがり給はず、ぐごもとゞまりたまひぬ、有がたかりし御おもかげ、御身をはなれ給はず、あけくれしのび〳〵おつる御なみだ、をとなしのたきと見え給ふ、しかもたゞならずと聞つれば、めでたくうれしとこそ思ひつる、やみの夜のにしきとなりつる事の、くちおしさよと、なげかせ給ふぞあはれなり、はかなくもそのとしもくれにけり、

一もとぎく中 終

一もとぎく下

あくるとしのやよひばかりになりにけり、みやのははにようごどの丶、いかにやらんみやのなやましげにおはするに、なぐさめ參らせよ、何事か春のあそびに、おもしろき事は、まりに過たる物あらじ、まりあそびせよとて、大うちより、しかるべき人々めしあつめ、宮のうちにて、御まりあそび有けるに、人々申けるは、あはれ兵衞のすけ、かゝりのもとのしらぎく、宮のうちのしやくひやうし、花のもと、月のまへ、しいかくはんげんにくらからず、いかなる所におはすらん、あたら人をこそとて、をの〳〵なみだをながす、中つかさの中將、さればこそじやうのないしは、御門にだにもなびき參らせざりしか共、かの兵衞のすけにあひそめ、たがひにあさからず忍び〳〵にかよひけるに、あかぬわかれをかなしみて、御みやづかへもすさまじく、ひとへにつぼねになきふして、世にあはれにぞとの給ふを、げにやじやうのないしは、わりなく有しと聞しが、一度は見てんと思ひしに、さては兵衞のすけを、さやうに思ひつらんこと、かた〳〵なつかし、行てとぶらはんと思召、大うちへまゐり給ひて、まづじやうのないしのつぼね御らんずれば、じうのないし、やなぎの七かさね、櫻づくしのこうちぎ、すはまのからぎぬ、かたはらにぬぎかけ、きんごとによりそひて、うちふしたるに、なみだに色やかへりけん、うら衣の袖所々はむらご也、引かつぎふしたるに、まくらにゐさせ給ひて、いかにや〳〵、おなじあらしのゆかりとおぼすべき、われもをとらぬ思ひにや、とぶらはんとてと仰られければ、ないしたぞとおもひて、衣をしやり、見あげければ、兵部卿の宮にておはします、かくれ參らすべきならねば、やはらをきあがり、なやましく候てふして候に、びんなくと申、うちそばみたるかみのかゝり、たはやかに、ひすいのながしたる心ちして、わけめのうへはじめて、ふようのまなじりけだかく、りうはつ風にたはやかに、をみなへし露をもげなるすがた也、宮是を御らんじて、げにうつくしかりける、され共うしなひて思ひなげく、三條のひめには、一くちにはいふべからず、けだかくあひありて、見れ共〳〵あくよなく、三とせ

さくなるうどんげとは、此ことかと覺えし物をと、いまだいきてあらば、我をやこひしと思ふらん、又なき身にて有ならば、いづれの道にをもむき、いか成るくを見るらん、人を御らんずるにも、此の人のみぞこひしかりける、ないしのかたはらを御らんずれば、げんそうくわうていの、やうきひとうちつれ、りんそうきうに御ゆきなり、なでんのうちしづかに、宮のうち物すごく、げいしやううゐの袖、風にひるがへり、玉のかざりに、いかにおちつもるなるにことならず、時しも七月七日、七夕のたえぬちぎりをうらやみて、ちやうせいでんに出給ふ、御門やうきひの手をとり、天にあらばひよくの鳥、地にすまばれんりのえだとならんと、ちぎりたる所を、あふぎのゑにかゝれたり、宮是を御らんずれば、ないし申けるは、むかしもためしなければこそ、ゑにもかきてとゞむらめ、いまは人ごとに、くるしきこひをするとて、

やうきひのをくれてしけん昔より

いきてわかるゝ我ぞかなしき

今よりは、かくてうちなぐさむべかりける、ゆかりの草と仰有て、出させ給ふを、人しもこそあれ、はりまの三位見てけり、やがて御門の御まへに參り申けるは、兵部卿の宮こそ、じゞうのないしのもとへかよはせ給ふ也、ないしみめかたちきよげに候へば、これを申うけて四位の少將に、あはせばやと申けるを、中將のみやうぶ是を聞、ないしのつぼねに行て、はりまの三位こそ、しかと四位の少將にあはせばやとの給ひつれといへば、ないし、心うやたれゆへに、あかぬ別れをして、物を思ふ身とは成つるぞ、是にかくて候はば、思はざるほかに、少將にをしこめられなば、いかに思ふ共かなふまじ、さらぬやうにだいりのうちをいでんと思ひて、うれしくもきかせ給へり、此世にてはいかでかわすれ參らすべき、しらで候はゞ、いひがひなきことありなまし、今夜まかりいでんとおもふなりといへば、ちうじやうのみやうぶ、なごりおしくかなしくて、なく〳〵ゐたり、ないしはめのとのもとへ、風の心ち大事に候也、はやく出ていたはらんと思ふ也、のり物いそぎてといひやる、めのといそぎくるまを參らせける、ないしこゝかしこにめとゞまり、十三よりまゐりて、ことし七年みやづかひつかまつり、何としなしつるみやづかひはてぞと、あはれに、みぐ

るしきてい共とりひそめ、みすまきあげさせ、此は三月の十日あまりの事なれば、おぼろ月夜、花の梢にまよひ、ことに哀に見えしかば、中將みやうぶ、

我あらば猶立かへれはるがすみ
うらみんと思ふ雲井なりとも

といへばじやうのないしかくなん、

春がすみ立はなれなば雲にゐる
月にいつかはめぐりあふべき

かやうにうちながめて、なく／＼車にうちのりていづ、みやうぶ、是やかぎりなるらんと思へば、こゑも聞えべし、めのとのもとへ行て車よりおり、夜の所にうちふし、なくよりほかの事はなし、さるほどに此としの春のぢもくに、人々つかさなり、しよりやう給はる、ないしのめのと、ふし給へるまくらに參りて申やう、ちゝぶんごのかみこそ、よろこびして候へ、さつまの國を給はり侍る也、たゞならばかくばかりよろこぶべくはなけれ共、ゆへなくながされ給ひし、兵衞の佐殿のおはする所と思へば、世にうれしく候、さやうに御みやづかひもすさまじくおぼさば、とらふす野、ぐじらのよる島と申ためし候へば、いざさせたまへ、さつまの國へぐし參らせんと申せば、ないしよろこび、是は神佛の御りしやう也とうれしく、父母にはかくれて、めのとばかりをたのみて、三月十日あまりに都を出て、川舟にのり、いつしかならはぬなみのうへ、舟のうちのすまゐ、たれゆへかゝるたびをして、いづくへ行くらん心ぼそく、あけぬくれぬと行くほどに、さつまがたへぞ付にける、國の神ぱいまつりごと、さるべきやうにして、めのと人にとひけるは、ながされ人兵衞の佐殿の、おはする所はいづくぞと尋ねけるに、ほどちかく候、是より廿ちやうばかりと申ければ、めのと、兵衞の佐殿のおはする所、程ちかく候なるに、文參らせ給へと申ければ、うれしさかぎりなくて、いそぎ御ふみかき給ふ、

身をすてゝみるめかりにとあだ波の
浦まで舟をいそぎつるかな

おぼろげならぬ事にやなんと、かゝれたり、ないしのめのとは、かくてかみかたちらうたくにて、むらさきむらごのかりしやうぞくにて、かの所へ行、兵衞の佐殿に物申さんといふこゑ、都人かやと思召けり、こはいかに夢かや、いかに／＼と有しかば、わが父此の

國のかみにて、くだらせ給ひて候、御文とて奉る、よろこび見給へば、身をすてゝみるめかりにと、かゝれたり、兵衛のすけ殿とりあへず、

あだ波の浦にいか成らぎりして

身をすてゝのみみるめかるらん

とかく申せば、事なが〳〵し、たゞいそぎいらせ給へと、かゝれたり、めのとよろこび、あじろのこしにうちのせ、わが身も御供申、かの所におはしぬ、行つき御らんずるに、いそべにつくりかけたる家、さすがによしありてすみなし給へり、いその松風すごく、しほぢはるかになくかもめ、風のけしき、いかに身にしみ給ふらん、かゝる所にもおはしけるよと、心うく、見るに涙もとゞまらず、御こしさしよせたれば、兵衛のすけ、いそぎみづからこしをよせ、すだれうちあげ、いだきおろし、たがひにやつれはてたるこひのすがた、見るよりはじめて、とかくのことの葉出ず、ふししづみ給ふ、しばらく有てをきあがり、心をしづめて物語あり、わかれし時はじめより、今までの物思ひ、たがひにかたり給へば、よそのたもとまでも所せく、昔も今も有がたくぞ覺えし、さて都にはいかにと問ひ給ふ、ないし、都には三條のひめ君ぞうせ給ひて、宮はたゞ一すぢに、御物思ひにて、ぐごもとゞまらせ給ふと、承はつて候とかたりけり、すけ殿、ないしにあひたるうれしさに、すこしはるゝ心ちし給ふに、いもうとのひめ君、うせ給ひたるときゝ給ふに、またかきくらす心ちして、あはれ、さ思ひつることよ、はりまの三位がしはざなり、命をやたちつらん、又おそろしきものにやとらせつらん、今は此世にてあはん事かたし、さらばしゆつけして、たゞ一すぢに、此人の後世をもとはゞやとおほせども、みやづかへをもすさみ、父母にもかくれ、我身を頼みきたるないしをふりすてんこと、思ふ心もいたはしく、今しばらくほどへて、いかにもならんと思召、今まではあんをんといのり給ひけるが、其後は御きやうよみては、なむ一せうめうほうれんげきやう、いもうとのごせ、たすけてたばせ給へと、あさゆふいのらせ給ひけり、さるほどに京には、四條にをしこめられてましませば、さへもんのすけみやぎのなんどは、なげきたづね參らすれ共、たてこめられおはします、家のあるじのしたしき者、はりまの國のもくだいにて有けるが、京にのぼり

て、かの家に來り入けるに、すき間より此ざしきのうちを見て、物ごしに此ひめぎみを、あなうつくしと思ひて、うちにいりぬ、まづいふべきことをばさしをきて、うつくしきすきかげの見えつるは、たれ人ぞととひければ、あれはやんごとなき人の、世をしのびておはしますと申ければ、あはれとがむる人おはせずは、われにあはせ給へかし、あるじ思ふよう、はりまの三位は、うしなひてえさせよとの給へ共、見るめのいたはしさに、さてこそをきたれ、さらば此人にあはせんと思ひて、むすめの十二三ばかりなるを、けふはざしきへ參りて、御みやづかへ申て、夕さりは御しやうじのかきがねはづして、此人いれ參らせよと、よく／＼をしへてざしきへ參らする、れいならずみやづかへ申こそ心えね、すかしてとはんと思ひ、此おさなきものをなづけかたらひて、さま／＼の物とらせ、うれしくも參りたり、などや日ごろも參らざる、今よりはわれをおやと思ひて、何事にても人にかたるなよ、われも人にかたるまじ、さてさき／＼はさもなきに、何ゆへきたりたるぞ、へだてなくかたれ、ゆめ／＼人にしらすまじと、さま／＼にかたらへば、おさな心のはかなさは、有のまゝにかたりける、ひめ君聞もあへ給はず、あな心うやとてなき給ふ、ごんの少將は、あはれ心うき物かな、兵衞のすけ殿のながされ給ひしとき、露霜ともきえ給ふべき人の、なまじゐに御命いきさせ給ひて、かゝるうきめを御らんずるかなしさよ、ねがはくはわうじやうのかすみの神たち、わが君の御命、夜の間にめしとらせ給へ、それかなはずば、たすけ參らせ給へと、もだへこがれけるこそあはれなれ、けふの日くれずしてやめかしと、ねんずるこそせめての事と覺えたれ、され共日くれぬ、夜半にいれば、ごんの少將、おさなき者をわがあとにふさせ、ひめ君おはしつる所にふして、夜ふくれば、火をばしやうじよりあなたにとぼし、かけがねしとゝかけ、今はきよ水のかたへむかひてふしおがみ、なむきみやうちやうらい、千じゆくはんをん、わらは十三より、月まうで仕りて、三十三ぐはんの御きやうをこたらず、ひぐわんむなしからずして、わが君の今夜のなんをたすけ參らさせ給へ、それかなはずは、ときのまに、われわれしう／＼の、命をめして給はり候へと、申けるこそあはれなれ、されども夜ふけたれば、あしをとたか

らかにふみならし、しきぶのたゆふきたり、こゝあけよや、おさなきものとて、しやうじをひきけれ共、うちよりつよくしたゝめたり、ひけ共〳〵あかず、おさなきものはねいりぬ、しきぶの大夫、おそろしきこゝろにて、あなおこがまし、こよひこそかくし給ふ共、あすはとく參りて、けざんに入なん、今夜ゆるし參らせんとて、のどかにかへりけるこそ、くわんをんの御りしやうと覺えたれ、うれしき事はかぎりなし、今夜こそはたすかり給ふ共、あけなばをして入なん、あはれ夜のうちに、露霜ともきえなばや、ざしきたかくて、四方たてこめて、もれて出べきかたぞなき、せめてのことには、四條おもてなる、ざしきのしとみたかくあげ、おほぢのかたを見給へば、卯月の月のくまなく、夜ふけ人しづまり、ことに物あはれなるに、うへのかたより、おもしろきふえのねかすかに聞えたり、是きかせ給へや、ふえもはるかにとをざかりて、兵衛のすけ殿の、おもしろくふき給ひしものを、いか成る所にて、いかになれ給ひにけん、とにかくに心うやとて、二人なきてぞおはしけるに、うへのかたより車のをとのどかに聞え、ふえのねちかく成ぬれば、さも兵部卿の宮の御ふえのねに、にさせ給へる物かなと、心をしづめてきゝゐれば、ふえうちすさみ、らうたき御こゑにて、月はくまなくてらせども、ともにながむる人はなし、あはぬものゆへよもすがら、わりなきこひにほだされて、たいあんどうをたづねんとて、舟にのりてぞゆきかへると、ゑいじ給ふをきけば、みやの御こゑときゝなして、むねうちさはぎけり、宮はおぼしめし、しづませ給ひて、はせに參らせ給ひて、此ひめ君の事、七日いのらせ給ひける御げかうなり、四條のかたをぞみゆきなる、ときはも馬のうへにて、御ともに候へば、あまりのうれしさに、ごんのせうしやうしのぶ事なく、持たるあふぎをうちたゝき、あれはときは殿にておはするか、ごんのせうしやう是に有、こゝへより給へ、もの申さんといひければ、なにとは聞わかず、ときはといふこゑ聞て、ざしきのきはへうちよせたり、ごんのせうしやう申やう、はりまのさんみにをしこめられ、うきめ御らんじおはします、たばかり出し參らせ給へといひければ、ときは聞もあへず、みやの御車にうちより、車給はらんと申ければ、何とは聞わけさせ給はねども、ときはが申にしたがひて、おり

させ給ひぬ、此くるまやりよせ、こゝあけよはりまのさんみのもとよりぞと、今夜たれか候ともいそぎあけよといひければ、はりまの三位のもとよりといへば、門あけたり、やがてくるまやりよせて、はや〳〵めせといふとき、ひめ君ごんのせうしやう、うれしと夢の心ちして、とる物もとりあへず、いそぎ車にめしてにげ出る、宮は御車にのりうつり給ひて、ひめ君ひざのうへにかきのせ、御かみをかきなでゝ、あなゆひがひなし、などやいかなる所におはすとも、風のたよりにもしらせ給はざらんと、うらみさせ給へば、

　　たよりにもいはまほしさを山風の
　　　いはまの水にせかれけるかな

宮これをきこしめして、

　　せかれける岩まの水をしらずして
　　　もらさずとのみいのりけるかな

御車にて、わかれしときのはじめより、今あふまでのくるしさかたらせ給ひて、御めのとごのさぬきの少將のさとへ入給ひぬ、御よろこびかぎりなし、八月は御さんの月なれば、やう〳〵の御いのり有、そのしるしにや、御さんへいあんに、わかみやいでき給ふ、宮の御はゝにようごきこしめし、いでやあやしのもの也とも、宮のわりなくおぼさば、ちからなし、いはんや右大じんどのゝみやばら、わざともの事也、しかもわか宮、いでき給ひたる事の有がたさよ、あやしの所にをき參らせんはいかにとて、御むかひの車七りやう、御そばにはくれなゐの十二はきのたちやうの七かさねに、くれなゐのちしほの御はかま、とりそへて參りたり、をくりの車やりつゞけ、かぎりあるきさきたちなり共、いかでか是にすぐべき、みやす所へいらせ給ふ、はゝにようご御らんじて、有がたや世のすゑにも、かゝる人おはしけるよとおぼし召、御まごのわか君、いだき取り參らせて、父宮のおさなくおはせしには、はるかにまさり給へり、是をばわが子にしたて參らせんとて、ことなき御めのとつけ參らせて、いつきかしづき參らする、あけぬくれぬとするほどに、かみな月のはじめ、時の御門なやませ給ひけるが、春の比、つゐにかくれさせ給ひぬ、いまだもうけの君もおはしまさず、くぎやうてんじやう人せんぎ有、兵部卿のみや御位につかせ給ふ、四條にをしこめられて、うきめ御らんぜし三條のひめ君、きさにたゝせたまふ、

わかみやとうぐうにたゝせ給ふ、御門まづ、さつまの國にながされ給ひし兵衞のすけ、めしかへしの御むかひとあり、いそぎくだりて此よし申す、兵衞のすけうれしなんどはよのつねならず、たゞ召かへさるゝだにもうれしかるべきに、いはんやゆへなくうせさせ給ひつるとて、よるひるなげきし、いもうとのひめ君、きさきにたつと、兵部卿のみや御くらゐにつかせ給ふ、ないしもろ共、うちつれて都へかへりたまふ、兵衞のすけどのゝ心のうち、いかばかりにうれしくおぼしけん、ぶつじん三ぼうのかごおはしましければ、なみ風のなんもなく、よるひるきらはずいそぎたまへば、はやく鳥羽へぞつき給ふ、むかへのくるまかずしらず、せつそなればとてまづ三條殿にいらせたまふ、はりまの三位そつのきみ四ゐのせうしやう、あはてさはぎて出給ふ、兵衞のすけどのの給ふやう、いかにものさはがしく候、しばらくおはせよ、うれしき事物がたり申さんと有しかど、うしろみだにし給はず、にげ出らる、まづこひしければあけゝんと思召、きさきの宮の御かたへ參り給ふ、ながされ人兵衞のすけどのゝ參らせ給へると申せば、きさきのみや、七へのたまのやうらく、八へのにしきのきちやうよりこぼれ出させ給ひて、兵衞のすけどのゝたもとにすがり、わかれ參らせし時のかなしさ、今のうれしさ、いづれもをとらざりけると、うれしなきにぞなき給ふ、兵衞のすけ殿これをきゝ、かくなん、

　ふえ竹のなきしうきねも忘られず
　　うれしきふしをみるに付ても

まづわれよりも、御門あまりに心もとなくおぼしめし給ふに、とく／＼參らせ給へとて、あけもはなれぬに、うちへ參り給ふ、みかど、せいりやうでんより、ひろびさしへいでさせ給ひて、いかに／＼、しめじがはらとちぎりしは、此ゆくすゑを思ひしぞ、今の御よろこびに、さんみのちうじやうになし給ふ、八日の日、二位の大なごんになり給ふ、さてもはりまのさんみそつのつぼね四ゐのせうしやうをば、いかゞすべき、さつまがたいわうが島へ、ながすべきとのせんじ有ければ、兵衞のすけ承り、思ひもよらず、父右大じんどのゝ、草のかげにておぼさんもあはれに覺候、こんどの御よろこびには、流ざいをなだめさせ給ふべうと申ければ、さるにても、われにたゞの物を思はせ、

こゝろをつくさせたれば、かぶりをばひ、ひくわんをとゞめむもなをあさし、はりまのさんみそつのすけ四ゐのせうしやう三人を、都のうちを出し、やどさだめぬ身となすべしとて、九のへの都をはらはれ候、らうしやのせんじをかうぶりて、都のうちをいだされぬ、さるほどに、きさきのみや、又二の宮まうけ給ひぬ、その御よろこびに、兵衞のすけくわんぱくでんかになり給ふ、じゞうのないしめのとばかりをたのみて、なく〳〵くだり給ひしが、くわんぱく殿の北のまん所とぞなり給ひける、御門も若宮二人ひめ宮二人出きさせ給ひぬ、ひめ宮一人はいせのさいぐう、一人はかものさいゐんにたゝせたまふ、かた〴〵めでたくさかえさせ給ひけり、くわんぱくどのも、わか君三人ひめ君一人おはします、太郎はこうの中將、次郎は三位のちうじやう、三郎は四位のせうしやうと聞えけり、ひめ君は一の宮の御くらゐにつかせ給ひしかば、十せんのきさきにたゝせ給ふ、梅つぼのきさきと申ける、ごんのせうしやう、ないしになる、ちうじやうのみやうぶは、きゐんのにようばうにて、なさけおほく、覺えいみじかりけり、中つかさの中將、右大臣殿になり給ふ、ゆくすゑはる〴〵とさかえ給ふ、めでたきためしに申ける、むかしも今も、ぶつじん三ぼうの御ちかひをろかならねども、はせのくわんをん、清水の千じゆくわんをんの、御りやうはうべんにすぎたる事ぞなき、なさけあらん人は行するまで、かやうにさかえ給ふべきなり、しやうぢきしやはうべんだんせつむじやうだう、これなり、

いとふべきうき世のほかはすてはてつ
いまはまことのみちをいのらん

萬治三庚子皐月吉辰　野田庄右衞門

一もときく下終

貧人太平記

實や一笑もよほせば百欝解する心ぞする、しかあれど世の中、實のみは常なるがゆえめづらしからす、土佐將監は放屁合戰を畫て笑を起さしむ、是にたよりて今乞丐の合戰をしるし、貧人太平記となづく、もとより生れ月毛の、丸裸百貫の馬に打のり、さびたれ共此打鍵、ちぎれたれども薦垂鎧、見む人わらひの種にもとするものならし、

貞享五年戊辰九月日

貧人太平記目錄

貧人太平記

上卷

○笑ひはじめは貧人の群

唐の伯夷叔齊は、餓死すといへども世をむさぼらず、賢のたつとき名を未聞にとゞむ、和朝の貧人は糧を論じて亂を起す、そも〳〵延寶九年の夏、貧人乞食の騷動來由いかんとなれば、去る卯の飢饉に、貧人萬死を出で丶、一命安堵する事、暦數わづかなる間に、天下大風車軸瀧鳴て、でんぱくをうがち、洪水山を隱してや丶久し、三災壞空も此時にや來り、二十增減も終にやなりぬと、泣きかなしむところに、果して翌年の春、大飢饉峯をあらはし、食物種をたつといへども、攝州大坂の津は、日本第一の湊、米穀十方にみち、俵の山北斗をさそひ、白雲腰によこたはつて、旅鴈つらをみだす、しかる間、國々の貧人、飢渴をたすけんと欲し、當地に參着し、町々小路々々に充滿して、往來自由ならず、右や左の家々に、とうまちくいのごとく立囀ぎ、くだされ聲天にひゞきて地を動す、あな哀や、きのふまでは門戸に彳とも見へざりしものども、おとろへ身に迫りて、出宅に迷ひ、親を捨、子をすて、未捨かねたるは、てに手を引合、憐みの懷に赤子をほやし、老たる母なんど云立にして、お餘りを乞、或日はまた、ともかせぎに離別して、所々遠近にたゝずみ、次第におとろへ行、五劫思惟のみだのごとく、靑く腫て面影かはれば、たがひに見わすれ、行逢てもしらずして、むつましき中をさく、袖ひろぐるを口惜思ふものは、入水して失しもおほし、盛者必衰の理ながら、嗚呼いかなる年にやと、今更哀れを催しける、此外長途をのぼりかねし餓人は、山野道路にふし、草露にいくづくもの、死するもの、東國西國にいく千萬といふ數をしらざるなり、

○川島今橋の守下住放逸の事

高きに司あり、下つて賤敷にも頭あり、爰に乞食の大將、とび田の家無、道頓堀の竹垣、天王寺の片箸、天滿葭原には種無、是等四人は大坂開闢のこのかた、數代打續、五器の將軍とあふがれ、當國は申に及ばず、遠國近國、末下の乞共、敬ふに長じ、身の揣きをわすれ、囉飯飽滿して、乏しからざるに奢をなし、出仕參勤非



番當番、晝夜を論せず、又はしく所々へは探題をすへ、然るべき町々へは番乞食を付、其外振舞齋非時に至る迄、おのれが儘に、囉飯奪取るあいだ、國々よりのぼりたる貧人は、たのむ木の下に雨のたまらぬこゝち、朝三暮四の袂も盡て、栗の葉たづぬるかなしきに、剩へ長吏集會していはく、當地充滿の貧人、私領外へ追拂ふべきと、評定一圖の上、川島今橋の守下住、大食猛威の若ものをすぐつて三百人、方角にしたがつて傍若無人に追立る、群集の貧人、こはいかにとあはてふためき倒迷ひて、五器打落され、四方八方へ迯行、脚腰よはきものは、いやがうへに合重つて立んとすれど、腹のしぼみて叶ず、働くものは兩眼ばかり、息絶々にして、をめきさけぶありさま、あび大城の罪人、獄卒のしもとにかられ、鐵湯のそこに落入らんも、かくやと思ひしられて、かたるに言葉もなかりけり、

○裸三郎土肌謀叛之事

雲のごとくに集りし貧人、風のごとくにちらされ、三江靜謐たりといへども、拾子は未だ町々に殘つて、盛夏の夕、蚊のむらがる聲して、たゞ耳の根を破るがごとし、退出の貧人は山野を埋み、尺地を諍ひ、泥水かすり、うへを凌ぐにこらへねば、素湯(さゆ)なりともと云けるを、いかなるものか狂歌によみて、

豐年のときさへかする水無月の
　　飢饉にいかで素湯のあるべき

無疵無病にして倒死するもの、あしたゆふべに日を追て算へがたし、死骸るいくとして、踏ところ更に明たるはなし、然りといへども、日本を集たる貧人なれば、生殘るもの又夥し、爰に裸三郎(はだか)土肌(つちはだ)と云もの有、生國は關東そだち、二合半のお殘りなんどけがせしかども、零落其身を責て、飢饉凌がんがため、仲春の比、當國に登り貧人となれど、元來國の風俗あらはれ、長高く色くろく、髮はもとゆひをしらず、ひげは左右にむぐら茂らせ、眼のひかりそこに落こみ、背骨ははらに付たれど、心剛にして力拔群に勝れ、ひとへに鍾馗大臣の飢饉にあひたまふごとくなり、打鑰(うちかぎ)とつては樊噲がいかりを誑き、張良が軍書も紙屑にひろふ勇士なれども、世にしたがへば虎も鼠にくだり、町はづれにありけるが、ひそかに貧人を集めて云けるは、最早湯の子の便もきれ、露命既におはらん事、

生前の無念、再生に報じがたし、迚も死なんずる命、かたぐ\同心におゐては、高津を城郭に取て、謀叛起さば、與力するもの多かるべし、此儀いかにと語りければ、其時米嚙彌藏跟のこけ助、兩人すゝみ出て云けるは、仰せ尤も、貧人の息通りは、天にのぼり黃泉に入てなりとも、恨を達せんとこそ存候へ、一人として違背仕るもの候まじ、暫時も急に思召立たまへと、すすめければ、當座に有りける八百餘人一身合體して、足のよはきは杖をとらせ、腰の拔たるは、强きが肩にもたれて、六月廿日の晚景、高津へこそは籠りけれ、

〇高津の宮城郭の事附中村久安願書の事

きのふ迄は、雷蹄をいたゞき、及を踏むこゝちして、座の者に恐れし投首の貧人ども、けふは龍の勢を得て、高津の城をぞ堅めける、所本より究竟の山城、大木茂り合て、雨を防ぐ寢所を求め、谷のそこにはふせ樋をこしらへ、かうの池より袋の洗汁、兵粮用水に取り、方二三里の野邊より、雜菜杉菜夏草の類まで、一葉ものこさず、根を斷てかりこみ、すいれんの達者は、こつま長井の沖に至て、海草數千荷、時の間に運び來る、粉ぬかの山高く、茶糟のみね巍々たり、五穀一粒なきといへど、酒食すくふ比までは、何の子細のあるべきと、遙なるすへぐ\まで了簡しける、裸三郎が工みの程こそいみじけれ、東西は、切ぎし高うして、莚屛風を立たるがごとし、北は社壇、うしろけんそにして、かはらの煙まなこにいぶせく、のぼらんとするに便なし、南一方大手と定め、寺々のそとば垣、夜に入てぬすみ取、木戶逆茂木に引、破菰の旗、松の嵐に吹なびかせ、森の透間に立ならべたれば、其勢幾萬騎ともしれざりけり、裸三郎、中村久安を召て云けるは、貧人宮居を穢して其恐多し、且は祈誓のため願書を書て、納奉れとあれば、久安畏まつて、毛ぎれの筆を改め、其願文に曰、抑〻當社仁德天皇は、昔時帝位の御時、萬民の歎きを救はせたまひて、御憐みの深き事は、神武天曆延喜の聖主にもこえさせたまふ、かるがゆへに、國土豐にして貧人壹人もなかりけるに、末世の今に至て、度々の飢饉に、非人おほく困窮して、露命絕々なる處に、剩へ四箇の長吏囉飯を妨げ、いよいよ粮を失ふ、是正に夷戎蠻狄の責に有て、半死半生の餓人十方に倒れて、阡陌いづれの處を踏まん、其恨を達せんと欲し、今此義兵を起す處に、味方小食にし

て、大食の者に闘はん事、譬ば、箸を以て鐵壁をこぼたんとし、五器を提て大海をほさんとするに似たり、我賤敷も貧人にくだるなれば、天性請たる處、人倫の外にもあらず、伏て願はくは、神力憐みをたれ給ひ、勝事を一時に決し、豊年の世となさしめ給へ、よつて願文くだんのごとしと書て、手の内の初尾を添、御寶殿に納めける、神は正直の眞を照し給へば、裸がこゝろざし、照覧やしたまひけん、不思議なるかな、神前の松の梢より、短冊一枚風に誘れて、裸が前に落る、取揚て是を見るに、一首の狂歌あり、

高津の宮のぼりてみれば旗をたて
　貧人の勢はにぎはひにけり

忝も此歌は、御在位の御時、高きやにのぼりて見れば煙たつ、民のかまどは賑ひにけり、と安全の御代をよみて、叡慮に掛奉りし目出度歌也、是れを狂歌に翻して、ちからを付させ給ふぞと、並居たるものども、頬かぶりをぬぎて、九拜をなし、其夜は通夜をぞしたりけり、

○所々の貧人蜂起せしむる事

明れば廿二日の早旦、生玉の森の黒みより、五百騎許り、身振ひして來る勢あり、すは敵こそ寄すると見る處に、其勢の中より、五器の甲にこせがさ威の筒丸、草摺ながに、かきしらけたる武者一騎、大手の木戸口につゝ立、嗄聲上ていふ様、是は度々の彼岸に頬をさらし、お參り下向の旦那様にも御存じなされし、下寺町の住人、足腫が一族、其外木津今宮安部野の非人、同心して味方に參り候と名乘る、木戸開かせて入にけり、是のみならず、榎並八个平野京橋あみ島の貧人は、大長寺の前にて勢を揃へ、皆味方にくはゝりければ、其勢城中に滿々て、五器の置所もなかりけり、又天滿の方には、北野堂島野田ふくしまの貧人、一所になつて、相盗の久藏を大將として、今朝未明に、長者町水邊がたちへ押寄せ、土壇土釜打碎き、勢ひ夥敷、よしはらへ寄するの由、風聞ありければ、大坂の長吏幷に末下の乞ども寄合、いかゞせんと評定しける處へ、とび田の家無、遲參していはく、唐土天竺よりも寄するといはゞいざしらず、當地拂ひしやつばらの、山野に迷ひ糧につかれ、何程の事か仕出すべき、ともし火消んとしてひかりを増す、貧人ども自滅遠きにあるべからず、然りと云て、打捨置んも囉飯の妨げな

るべし、殊に今日は座摩の祓、廿五日は天滿と申し、彼是御はんじやう樣のお門に立る日を餘所になして、貧人にさへらるゝ事やあるべき、其翌日にならば、猶も千里が外へ追拂ひ、鶴は千年龜は萬年の世となさん事、何の子細の有べきと、事もなげに云ければ、皆此義に同じて退散し、餘日延引しけるは、運の究めとしられける、貧人は日々に多勢に成て、敵を誑く事、窮鼠却て猫を嚙むとは、斯る事に知られたり、

中卷

○長吏勢揃同責寄る事

六月廿六日、長吏竹林寺の前におゐて、末下の勢を集め、着當を見るに、船場長堀內町長町、都合六萬八千餘騎、打鑰を橫たへ、へだかつたる有樣、施行萬部の場のごとし、三長吏は何れも同じ出立、五つ重ねのめんつの甲、綴威の大鎧、草摺ちぎれにはらりと着、ゆつて荒繩しつかとしめ、ほしか俵の腹卷、瓜の皮の小手脛當、染齒の雜箸筈高に負ひなし、びんぼ鍛冶の三藏が、百日精進して打たる八寸釘の打鑰、岩國と名付て、厚紙通しの五尺三寸有けるを、左の脇にかい込んで、軍の勢を分ちたり、先づ片箸は天王寺の勢一萬七千餘騎、上寺町へ廻り、竹垣は二萬五千餘騎、生玉の坂を下に、大手口へ寄せたり、家無は後陣を堅め、高原比丘尼坂の邊に寄せ、三方よりお齋の聲を合せければ、天地震動して虱のくづるゝ許り也、されども城中には、箸の片しも射出さず、噪ぐけしきもなかりけり、元來裸は、事に臨んで驚かず、志慮深く案高く、そんしんが茄の秘術を學び、さむきを防ぐ方便第一得たる者なれば、わざと人有とも見せず、しづまりかへつて居たりけり、大將竹垣、味方に向て云けるは、此城の體、敵さまで籠りたりとも見へず、かり集めたる貧人ばら、寄すると聞きて落うせたらん、たとへ殘りとゞまつて防ぐとも、曬飯に絕たるやつばら、脚腰立べしとも思はれず、木戸逆茂木引破つて、入やいれと下知しければ、大手からめて一つに成て、打鑰の先を揃へ、引崩さんとする處に、城中より雨の降るごとく、魚の骨をまきかけゝれば、寄手の大勢足に踏立、たるむ所に、城中の貧人、一度にどつと切て出、爰をせんどゝ鬪ひけり、先陣の勢は足踏みそんじて、鬪は

んとすれども叶はず、そくばく打れて、後陣の勢は、めんつ打鑰を捨、我さきにと引たり、非人は透腹なれば、勝に乘ても追ず、一戰に大利を得て、本の城にぞ籠ける、長吏敗軍の勢を集めて云ひけるは、敵思の外の謀に、味方おほく打れし事、是ひとへに、はだしにて掛りしゆへなり、あすの軍には履(はきもの)の用意して、只一つぶしに責落さんとぞ、ぎしめきける、東黛引わたれば、雲霞のごとく押寄せたり、きのふの魚の骨に驚き、雪踏(せつた)の皮にてうら打ちしたるわらぢ、一面にはかせ、たとへいか成る鯛の骨成とも、踏折〳〵、かゝれやかゝれやと、聲々に下知しければ、きのふの耻をすすがんと、多勢きほひかゝつて、城中すでにあやうくみへける所に、いづくにかためたりけん、へいのうへより瓜のなかご數百荷、所々へ落しける間、のぼり詰たる大勢、雪踏の皮にすべり、何かはもつてたまるべき、一度に倒れて、あしのふみどもなくすだりける、後陣に詰たる、掃除番の乞食ども、得たりかしこしと竹箒を出し、先陣に入かわり、てん手にはき捨、其勢かさなつて、今はかうよと見へし所に、城中木戸をひらき、神前の石燈籠、其數あまた左右せり合て、坂落しにおとしかけ、石火電光をとばせ、百千のいかづちのごとく、ひゞきわたつて數萬の者ども、谷ぞこへおしおとされ、石のおもしにひしげて、たゞ乞食のすしとやいはむ、八島ときけばなか〳〵や、まことにいにしへ源平の、となみ山の合戰に、倶利からが谷へおとされしも、かくやと思ひしられたり、其時のかつせんには、平泉寺の長吏も打れけれど、今度の長吏はいきのこつて、大蓮社迄引にける、

○極樂橋一騎討幷打込合戰之事

既に長吏打まけぬときこへければ、しよまん、かうしん堂、小町塚、三所にひかへたる勢、三千五百騎、遠里(をり)小野、住吉新家兩所の勢二千餘騎、時をうつさず大蓮寺へかけ付け、源正寺坂まで並居つれども、長吏兩度のたゝかひに、大軍をうたせ、すゝむけしきなかりければ、新手のものもともによはりて、しばらく時をぞうつしける、貧人は勝にのつて、大勢かさなり、新屋敷まで切て出で、極らく橋を中にへだてゝ、後陣は本町橋の辻に噪ぎたり、兩陣にらみ合たる處に、長吏方より、一騎當千のものと見へて、照りにてつたる西瓜の皮の五枚甲に、千枚つぎのはらあて、膝頭をいだし

て、陣頭にすゝみ、只今こゝもとへ出たるつはもの、いか成ものとおもふらん、もろこし劉伯倫が跡を踏で、酒のかすをたのしみ、八荒を家とし、行に轍跡なく、居に室廬なく、心のゆく所ほしいまゝに、とゞまるときんば、金胎寺の前の六藏よと人も見るらめ、我とおもはんものあらば、寄りて手なみを見よと、ゆうゆうとしてひかへたり、又貧人の方より、是も大剛の者と見へて、つくも髮の甲に、ほこりの鍬形うつて、ひぜんがさの小手かきみだし、腫物のすねあて、びやくだんいろのふともゝして、眞先に立て名乘り、先祖をあらはすは、一門の頬よごしなれど、今此期に至つて何をか耻ん、其の水上を申せば、許由が手してのみし、水腹の朝臣、十死一生の末葉たり、久敷五穀にすてられ、いやしくくだつて、飢饉に二代の男、よれくまん尤と、おしならべてひよろつきけるが、二人共に泥土に倒れて、つゐにむなしく成りにける、敵も味方も、ともにあはれと見る所に、相もすかさず、又長吏方より、山草の甲、しころ長に着くだし、ゆづり葉の鍬がた打て、赤手拭の頬當したる武者、年のすへにはあらねども、こおどりしてすゝみ出ていはく、先死をおそれずつゞきたる武者、なのらずともしるべし、春待空の廿日比より、世上に其名を觸し、せきぞろの介といふもの也、ふくくたいく、さあく御座れやくと、敵をまねきてひかへたり、時に貧人の方より、赤熊かきみだし、泥脚日數をしらざる武者、かき竹にすがりてあゆみ出で、我身數ならねば、名乘るともよも御存じは候まじ、一生ところをさだめず、こゝにあるかとすれば、かしこにさまよひ、或時はまんぢうやき餅のつかみにげ、とびの介といはれ、又ある時は、毒魚のはらわたをしよくするに、一度もたゝらず、餘命のほまれありといへども、絶體今日にきはまりたりと云ふかとおもへば、たちまち最後をとげにける、扨も甲斐なき死やうかなと、後陣につめたる貧人是をのりこゑ、大音あげて云ふ樣、遠からんものは音にもきけ、ちかからんものは目にも見よ、度々のぬすみに、より棒どうばねに覺えたる、大剛のものゝはたらき、手本にせよと、せきぞろに打てかゝる、心得たりと米袋をふりまはし、請つながしつたゝかひしが、敵もみかたもそれうたすな、是うたすなと、をりかさなつて、入亂てぞたゝかひける、裸四方にかけま

つて、かまへて同士うちすべからず、腰に木札あらば敵とこゝろへ、打取べしと下知をなす、貧人は本より食をおもくし、命をかるくするもの共なれば、ふゆを越ゆべきけしきなく、一足もしりぞかず、のりこえはねこえ、しのぎをけづりめんつを割、うちかぎよりもくわゑんを出し、爰を最期と追詰々々戰ひける間、長吏わづかに打なされ、南をさしておちてゆけば、貧人は勝関作つて、本の城にぞ籠りける、積惡はほろぶるならひ、邪見放逸に囉飯ばい取し者共、大半うたれ、貧人いさみをなしける、度々のたゝかひに、大敵をしりぞけし事、ひとへに裸がはかり事、いみじきゆへなり、むかしもろこしの大王、餘多の臣家を愛し、大國を治給ふ、其比四夷八蠻蜂起せしめ、大軍打れ王一人のがるべきにあらずと、じがいせんとし給ふを、長子と云し賢人、のこりとゞまつて、さま〴〵いさめ申、隣國へうつし奉り、暫く時節を窺ふ所に、其國の貧人の中に、恩謀と云武勇の達者、此王の爲に城郭をこしらへ、大軍を催し、二度運をひらき、本國に歸りたまふこと、今の裸がはたらき、おもひ合せてかんじけるなり、

○齋之助討死五器の前愁歎の事

打取りし首ども、裸實見して軍門にさらさせける、中にも齋の介は、長吏方にかくれもなき、器量の若ものにて、文にもすぐれ武にも達し、情の道も深かゝりしに、あへなくうたれて、是も同じくさらされける、爰に哀成る事侍り、いづくともなく女一人來り、お齋が首を一目みて、其まゝそこに倒れふし、箇程うすきゑんならばと、聲を揚てなげくあり樣、目もあてられぬ次第なり、やゝありて綴の袖にてなみだをおさへ、首をぬすみて袋に入、足にまかせて行く程に、秋の初風身にしみて、無常をしらすかねの聲、是ぞ我身の上寺町、此世は假の竹柱、菰をさる事遠からず、火宅の煙かはらやく、末の願ひをまつ屋町、いつか弘誓の船越町、纔かの娑婆に身口意の、さはりかなしき十丁目、和光の影のいや高き、宮の前とは申せども、あかいもくらいも得しらいで、お門にまよふめくらこそ、こちの中間の人なれや、いつの因果のむくひぞと、いふにおもひをくらべ見ん、我が歎きはつまきへて、二世とたのみし甲斐もなく、けふより後のかなしみに、何もお慈悲は御ざらぬか、おたすけくだされほとけがほ、

大きやうじをもよそながら、拜み申して行く袖の、妻夫町ときくからに、いとゞ思ひのいやまさり、なみだをみちのしるべにて、天滿のすへに着きければ、不食山空腹寺の和尙と申て、出山の釋迦かげぼしの再來、世に又ありがたき御僧を、導師にたのみ申し、なしの皮かきの皮、靈供餘多にそなへをなす、和尙立出たまひ、引導の文にいはく、

夫おもんみれば、乞食の一生は、星霜をいたゞき、風雨雪中に膚を責られ、居宅三界にして、火災盜人の恐なきといへども、是又却てなきがくるしみなり、飢渴あしたに聲をあげ、粮を求むるに得ざれば、ゆふべに夢を破つてむく起に起、東西にはしり南北にいそぎ、息づく事、たゝ少水の魚のごとし、斯に居て何のたのしみあらん、正に今穢土を去處の乞は、年つもつて二十三、嗚呼短命仕合なり、頓に閻魔の丁にいたつて、鬼一口のあがり膳、喰ふべき者なりとうん〳〵、な無あみだ佛〳〵と手を合せ給へば、妻女もともに回向して、桶の輪あつめ、一片の煙もろともに、行方しらずなりにけり、此女房と申すは、橋詰殿の息女、五器の前と申て、寵愛かぎりなく、成仁の後、いかなる惣家高位にもなり給ふべきを、會者定離のならひ、此姫幼少の時、ちゝ母かつゐ死に給ひ、拾子にておはせしを、賄樣のいたはりにて、かすかなる御住ひ、おひやものにて過させ給ひしが、當年は二八ばかり、誠にやむ事なき御有樣、たけに餘りし赤頭は、踉の胼にみだれ、楊柳の風に靡しつゝれの粧ひ、又あるべしとも思はれず、過にし春花見虱の其とき、日南北向に出たまひし御すがたを、齋の助見そめ奉り、戀のやまふに胸ふさがり、思ひに絕かね、ひそかに文をまいらせ、一首の歌に、

我戀は唐櫛の齒にとめられて　きみを思ふは虫の子のかず

となんよみてつかはしければ、さすが岩木ならずして、つちのふすまに枕をならべ、偕老のちぎり、行すへかけてたのむらんに、いく程なくて戰場におもむき打れければ、歎くもことはりにぞきこへける、終には此女房も、長柄川へ身を投しと、後にぞ人の語りける、隔生即忘とは云ひながら、又一念五百生、繋念無量劫の業なれば、泥梨八萬のそこ迄も、おなじ思ひのくだされませいに成給ふらんと、哀れなりしことど

もなり、

下卷

○種無城郭を出て高津へ責寄る事幷くるまの前の事

かくて、北野、堂島、野田、ふくしまの貧人は、葭原におしよせ、責るといへども、やうがい強ければ、たゞいたづらに、城をながめてぞ居たりける、そも〳〵葭原が城郭と申は、左右に妻夫池を抱へ、東西の水の行通ひ、石がけにたゝみあげて、大道纔に二間餘りなり、打込の軍は、道せまくしてなか〳〵かなひがたし、汀はぬまにて、葭のかりかぶ、劍を植たるがごとし、水の眞中は波高く、靑みだちて年ふる鯰、いけの主と成て、人を取事すさまじ、是又渡るにも叶はず、一騎打なる大道よりかゝらんとすれば、仙檀の陰より南北に廻り、左右の池へ追落す、たゞ二河白道のこゝちして、非人は堀詰へ引にける、城の大將種無、門口六郎をよびて云けるは、高津の敵つよく、大坂の長吏汀負しうへは、我一人に責來らめ、尤も城郭つよしといへども、小勢にては防ぎがたし、山田、佐井寺、吹田、片山、原田、垂水、三寶寺の野臥は、今度高津へもくはゝらず、又長吏をもねたまず、只明けくれに、人もゆるさぬ瓜なすびをくらひ、大根をあらし、砲碌うとき豆嚙て罷有よし、是等を招きて札をとらせ、味方の勢となさむ間、此旨はからへと云ひける、門口承つて、在々へ觸れける、案のごとく雲霞をなし、我先にと來りて、皆々末下にぞぐしける、種無悅喜限なく、此勢にて城に籠り益なし、打て出て高津を責めんと、猶も勢を集ける、長柄、國分寺、本庄、三番、三つ屋、十三今在家、此勢又夥し、其外物よし、やくばらひ、都合五萬八千餘騎、七月十日に施餓鬼の場を立て、ながれくわんじやうの旗をさしあげ、氣違ばゝを先として、天滿橋をわたらんとする折節、あきしのや外山のみねに雲かゝり、伊駒がみなり雨をさそひければ、つゞれ水吸ふうたてさに、しばらく軍兵どもを片よせ、種無橋の下に立寄りける所に、年の比廿ばかりにして、つまさきこけに耻ざる女房の、かほもたげずなき居たり、種無ふしぎにおもひ、子細をたづねければ、はづかしながらみづからは、いざりの君にそひ奉り、さよ

のまくらをかはしまの、くるまの前と申にてさぶらふが、片輪ぐるまのやるせなき、浮世をうらみたまひて、いざりどのは唯今身をなげさせ給ふにより、あまりにかなしく、片時の別れをなげきさぶらふ、一村雨の雨やどり、一河のながれに身を投ぐるも、皆是他生の因果にて候へば、なき跡とはせたびたまへと、かたりもあへず共に身をぞなげにける、種無はつとおどろき、引あげんとしけれども、逆卷水のそこに入て、こものかたちもなかりけり、日比爰に住みたまふと覺えて、橋柱ににじり書きの筆の跡、吟じて見れば、

すねこしのかなはねばこそいざりなれ

かなはゞなどかうき住ひせん

と一首の歌をぞのこしける、種無なみだにくれて、哀を催しける所に、晴天萬里の空となり、日影かゞやきければ、軍の門出よしなき事に、氣をうつしけるよと橋の下より立あがり、軍兵どもを引ぐし、大江の坂をのぼりに、高原にぞ着きにける、然る處に、先死をのがれたる三長吏も、重ねて大軍を催し、やれあみ笠に鍬形打て、蜜柑籠のほろかけ、かますの楯を一面にもたせ、同じ所に陣を取り、種無に對面していはく、度度の闘ひに、味方一度の利を得ずして、剰へ貧人ばらに追立られし事、乞食冥加につき果たると存候處に、只今大軍を催し、御目にかゝる事、長吏中間の縁つきずとかたりければ、種無もともに、天滿の難義をぞかたりける、扨いくさのしゆう、いかゞすべきと、評定とりどりなる處に、祭太郎家次すゝみ出て申けるは、軍のならひ、負るも時の運にて候へども、兩三度の闘ひに、みかた大きなるまけいたし候事、ひとへに貧人をあなどつて、いくさだちのあしきゆへとぞんし候、高津は日本第一の名城、殊に大將は大剛不雙の裸三郎、謀のいみじき事は、黄石公が虎をばくする手、張子房が鬼をとりひしぐ術、大敵を見ておそれざるものなれば、又いか成たくみか候らん、此城ちから責にはかなひ候まじ、せんずる處は、四方取卷、ほしごろしに被成、しかるべしと申ければ、長吏いづれも、此義尤と同心して、東西南北をかため、夜日を明せど、城にはこぬか、茶がす、雜な杉菜、兵粮いまだつきざれば、落つる氣色はなかりけり、よせ手長陣に退屈して、後には帶菰とき、ゐのこるだきてふすもあり、魚の頭を跡先にはつて、勝負をこのむ者も有、鼻紙もら

い、はなをに組つけ、草履のひげをむしるもあり、或は法界の食を奪あひ、又はとぶろくにくらひ酔て、中間喧嘩をするもあり、軒の下には、あだやかましき聲あげて、やんれたまぼこの、みちのみちたる御代なれやと、つれはなだつてうたふもあり、さま〴〵に月日をくらして、びんぼ神も出雲たち、十月に至て天和元年とぞ成りにける、

○道願より棒に驚き名歌よむ事并龍がしらにたましゐを失ふ事

其比修行の沙門に、道願と云ふ僧あり、一衣の破れたるに、たゝきがね首にかけ、五器なぐるまゝの世の中と無常を觀じ、人の軒を庵とし、起きふしこゝろやすく住みたまふ、誠に大隱は市中に隱るゝ理に覺え、ありがたかりける、或時一體の空敷事をうれゐて、上町の愛宕へ詣で、一七日既に下向の折、俄に東西かきくれ、黒雲足をはやめ、時雨なりわたりける、暫らく晴間を待て出けるに、夕日に替る月もなく、次第に闇くなりて、行先歩みをうしなへり、道願心におもひけるは、行も旅、かへるもたびの我にして、何國とまりと定めねば、本より草むすびたるいほりもなし、今宵は爰に明さばやと、軒の下に立寄れば、とがむる犬のけはしく吠て、飛付ばかりなれど、丸寢の夢をむすびける、此家のあるじ、犬のしきるに目を覺し、棒引さげ表に出、道願を見付、きびしく追立てける、是非なくそこを立さまに、一首哀れにきこへける、

夜もすがらとがむる犬はさもなくて
　あるじの棒におそれけるかな

夫より所をかへて、舍りを求めけるに、こゝかしこ追立られ、道願ね所にまよひ、遙ともしびのかすかなるにたよりて見れば、おだれなしのすぬりだて、不破の關屋にあらね共、月には馴て雨をばにくむ、取ふきの風待やねのまばらなるに、くれとゞめ落かゝり、軒のしのぶも、賣けんにやのりぬらんとおもふ小借屋なり、是に明さばやと立寄りしが、又追立る事もやと、うす壁の破れより、內の樣子を見るとひとしく、氣も魂も消果て、道願生るこゝちもなかりけり、やゝ有て心をしづめ、よく〳〵見れば、はじめおそろしと思ひしものは、龍頭をいたゞきたり、弓手の方には大黑舞、め手の方には總髮の男、紙子の折目高く破れたるを着し、扇しやくに取て、さしからも謠ふべき氣色に

ひかへたり、其次々には、ほのない茶筅、かけ天目など見へたり、時に宿老の龍頭がいはく、我毎日病人の耳を噪がせ、子供の晝寢を魘やかし、數年の大鼓に世をやすくおもひし處に、今此飢饉たへがたく、うでに味のなきゆへ、大鼓のぶちあがらずとなげきければ、大黒舞のいはく、龍頭殿は、春夏秋冬の隔なければ、さも有まじ、我は七福神の中にも、一に俵をふまへ、諸人愛敬おほしといへど、正月過れば人用ひなくして、猶たへがたしと云、扨又紙子男の曰く、我觀世のながれを汲て、大道をせばめ、音曲ひゞかす處に、近年此類おほく、人皆うとみ果たり、然るに今改元あつて、天和に成こそ安樂の左右なり、其子細は、天和の文字二人やはらぐと云へり、上君臣の德高く、天地の二つ和らぐ時は、五日十日の風雨枝をならさず、萬物實のりて、いよ〳〵五穀つきず、下にては貧人乞食の意趣もなかるべしと、いふかとおもへば、俄に風も吹かぬに、摺粉木なり出、味噌こし動き、三熱の火の尾、なべの下にもへて、皆ちり〳〵にうせければ、夜もしらしらと明けて、道願軒の下より出にけり、

〇つんぼ同心頓死蘇生之事并非人乞食萬歳らくの事

同じ比又ふしぎの事あり、つんぼ道心求不得とて、たつとからざる僧のゐまして、身は五濁のちりにまじはり、心は三毒の霧にもけがされ、行業不退の念佛やかましく、扣きがねのひゞき、へきらくにこたへて、かみなりも面を耻、朝寢の邪魔となりたまふ、此の僧頓死して、俄にゑんま王宮にいたりたまふ、第一の冥官、一人の倶生神を添て、此僧に餓鬼道を見せたまふ、爰にやくれいでんと書きたる額あり、つんぼ是はいか成所にて候ぞとたづねければ、倶生神の曰く、是こそ倒れ死の貧人集る所也、魂は冥途に來れど、魄は娑婆にのこつて、來年疫癘となり、不善のもの病死する事夥し、汝は急ぎ娑婆に歸つて、善根をすゝむべしとのたまふを、耳傾けて聞くと思へば、忽ち蘇生して十方に觸れける間、町々小路々々に至るまで、粥を燒く事すさまじ、杓より落る白かゆは、那知や箕面の瀧のごとし、大道にこぼれわたりてきらめく事、月をあらへる波のごとく、衣食住の三つにはなれしもの、是に寄る事あげてかぞへがたし、然る間、高津の軍もたちまちやぶれて、貧人乞食中をやはらげし事、是ひと

へに、天和のとくにぞ有ける、五穀成就して、一寸八分の米此時に見そめ、大根ふとくかぶら一つをさし荷ひ、若菜の春を冬に見る、非人のゑよう、めんつにまき繪をかゝせ、乞食の打かぎ、金ごしらへの銘のもの、美服御法度の綴を着し、のべより外の紙をひろはず、あがり膳のすて所、丁々の迷惑、番の乞食は引幕して、碁將棊にて勤めけり、天王寺の片箸は、料理ごのみに日を暮し、道頓堀の竹垣は、すゞみの亭にぬり團、無常の煙よそにおほたせ、とび田の仙檀萬歳樂を謠へば、妻夫池の波は鼓の聲を出し、乞非の世にこそなりにけれ、

貧人太平記終

水鳥記序

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらしさかづきに向ひて、心のうつるまゝに、よくなし酒をそこはかとなくのみつくせば、あやしうこそ物くるおしけれ、いでや此の世に生れては、下戸ならぬこそおのこはよけれと、よしだの兼好がいひをきし、とかくのむほどに、上戸の名はたつた川、もみぢ葉をたきて酒をあたゝめけんも、いづれわれらが先祖とかや、その子孫として今樽次と示現し、酒の縁起を尋るに、異國にて杜康と云ふ人の妻、癸酉の年はじめて作りそめければ、三ずいに酉をかきてさけとよむ、是を水鳥の二字に通用して、かく名付たるべし、今此の品々をあらはすも、酒の一字をひろめんが爲也、是かや釋尊法華八軸をとき給ふも妙の一字をのべん爲め、それは一切衆生墮獄せん事をかなしみて、成佛なすべきための佛法、是は遍の下戸共の呑ざる事をなげきて、上戸へ引いれん爲の酒法、かれは天竺にて釋尊のじひ、是は吾が朝にて樽次の情、國こそちがへ、世こそかはれ、人を教化して民をすくひ給ふ方便は、瓜を二つに割りたるごとくなれば、何れなら漬の類共思はるゝ、其上佛法には、飲酒戒とて酒呑む事をいましめけれ共、天竺の末利と云ふ女人には、釋尊みづから酌とつてしゐ給ふ、我はして人のぼらけやきらふらんと、世俗の諺ににたる教化なれば、用てせんなしとて、貴僧高僧よりあひ、終に此戒をのみやぶり給ふはだうり、かく五戒のうち一かいやぶりぬれば、あとは四海なみしづかにて、國もおさまる時津風と、うたひたのしめるも、是れみな水鳥のわざなれば、かく名付侍るとぞ、

水鳥記目錄

目錄終

水鳥記卷之上

一、大塚地黃坊由來幷酒の威德の事

をよそおろかなる心にも、十八公のいとくをかんがふるに、とこしなへにいろをへんせず、君子のとくをあらはす名木なれば、しもばんみんにいたるまで、めでたき事のみ松の御世とかや、さればたみのかまどにぎはひけるにより、家々にしゆえんのこゑ、是ぞまことに天長地久のためしなるべし、かく御代もめでたきゆへにや、こゝにぜんだいみもんの大じやうご一人出來す、武州江戶大塚にきよぢうして、六位の大酒官ぢわう坊樽次とぞ名のりける、ゆらいをくわしくたづぬれば、忝も晉のりうはくりんがこんぱく、今わがてうにとびきたり、たるつぐとげんじて、一さいしゆじやうをことぐゝくじやうごにひきいれんためのはうべんに、かりにあらはれ給ふとかや、そも地黃といふやくしゆは、さけにひたりて、てつきをいむくすりなれば、われもそのごとく、朝暮さけにひたれ共、てつきにあたるはきらひとて、ぢわうばうとはつかれたり、さてつねにかしこまらぬ人なれば、ろくにばかりおるぞとて、ろくゐの大しゆくわんとぞ申ける、いにしへの大しよくわん、それはかまたり氏、今の大しゆくわん、これはかんなべうぢにて重代の大盞有、させのまふといふ心にや、蜂に龍を繪がいたれば、すなはち蜂龍の大盞とぞ申ける、しかるに此のおきな、あまたの男子をもたる、二郞は太郞にもすぐれてよくのめば、そしながらそうりやうをつぎ、家のながれをも子孫までくみつたゆべききりやう有とて、忝も此の大盞を二郞にゆづり給ふ、此のさかづきのならひにて、そしそうりやうのわかちなく、たゞつよからんものに、ゆづりきたつたる例なれば、太郞もうらみはあるまじいとぞの給ひける、されば此の道をたのしむ事、樽次のみにもあらず、いこくにも孔子といへる聖人は、たゞさけははかりなしとの給ふ、又白氏文集には、たとへ死後にこがねをもて北斗をさゝふとも、生前一樽のさけにはしかじといひ、林和靖は胸中のあくまをかうぶくせよと詩につくり、越王勾踐は簞醪を河になげていくさにかち、そのうへ酒は百藥の長とてよろづの藥にもすぐれりと前漢にあら

ずやむべなるかな、玄冬そせつのさむき日に、これをあたゝめて用れば、たちまちに身もあたゝまり、しら雪のふるを見ても春の花ちるかとうたがはる、又九夏三伏のあつき日に、かれをひやしてもてあそべば、そのまゝはだへもすゞしく、木々のこずゑもみぢする、秋になるかとなぐさまる、かほどめでたき御酒なれど、えんなき衆生は下戸と生れ、此のたのしみにも、はづれぬるこそむざんなれ、

二、大塚地黄坊樽次そこふかゞ一門に吐血させ給ふ事附底深ふくりうの事

さるほどに樽次の酒法、をんごくはたうにいたるまで、こと〳〵くるふせしかば、をよぶもをよばざりけるも、みな此のみちにきふくして、なびかぬ上戸はなかりけり、されどもこゝに、樽次をあざむくほどのくせものこそ出きたれ、たとへば武州橋の郡川崎のしゆくより二十町ばかりわきに、弘法大師の自作の御ゑいたち給ふにより、大師がはらといひつたふとかや、この村に池上太郎右衛門尉底深とて無二無三の上戸有、我は唯我獨酒と披露して、きんがうの水鳥等をこと〳〵くしゐふせ、くがの猩々とおごりし所に、



山下作内とてそこふかがいとこありしが、ある時江戸あか坂にて、ぢわうばうにさんくはいして、其座より血をはきながら、戸板にのりてかへりけり、又そこふかがおいに、いけがみ三郎兵衛といふもの、りうぐはんのしさいありて、めぐろに參り、そのかへさに、かの地黄坊に寄あはせ、是れもおなじやうにとけつして、そんめいふぢやうのていなれば、そこふか大きにはらをたて、こゝにてはぢわうばう、かしこにてはたるつぐとなのり、それがし一門らに、血をはかせぬることそきつくわいなれ、いかさまその御坊にも、血をはかせてくれんとて、蟷螂がをのをいからかし、はやうつたちける處に、にはかにふうとくしゆといふもの、もゝにいでぬれば、れうぢのためとて、その日のかどではやみにけり、

三、齋藤傳左衛門忠呑かへり忠して大塚へ飛札をさゝぐる事附同返簡の事

こゝに齋藤傳左衛門尉たゞのみとて、底深がたにて、みなみかはらといふ所にきよぢうす、川さきより十町ばかりわきにてぞ有ける、日比そこふかにふた心なかりしか共、今度心がはりし、大塚へちうしんの飛札をさゝげける、それをいかにといふに、菅村のぢう人佐保田のそれがし醉久がつまは、忠呑がめいにて侍りしが、ひとゝせもつての外なやみ、すでに玉のをもたえなんと見えにける時、樽次不老不死のめうやくをあたへ給ふゆへ、からき瀨をものがれつゝ、松壽の千とせをもあらそふけはひなれば、かのかた樽次ならではと、もてはやしけるにより、忠呑も此のしよえんにひかれて、樽次にきふくし、底深くはだてを有のまゝに、はや馬にてちうしんするとぞ聞えし、かの飛札大つかにつきしかば、樽次とつて披見し給ふに、其文にいはく、

潛に愚札をさゝげ奉り候于玆池上太郎右衛門尉底深といふ者大師河原に住居し唯我獨酒と法を立夏は庭前に池をほつて酒をたゝへかうべをかたぶけてこれをのむたゞ夏の桀が酒池牛飮ともいつつべし冬は酒をあたゝめて桶に入舌をたれてこれをすふたとへば大蛇がみづうみをほすにことならずしかのみならず大盞をひつさげてきんがうをはせめぐる間そくばくの水鳥等みなかれに歸服して樽次にそむく者多しあまつさへかの一門等がちじよく

をすゝがんため近日大塚へ參入いたすべき風聞ありはゞかりながら御思案をめぐらさるべく候注進の狀如ㇾ件

慶安元年八月三日

大塚地黃坊樽次公　御館にをいて飯嫌殿御披露

南河原住人齋藤傳左衞門忠吞とぞかいたりける、

樽次御らんじて、是は一向氣もさんせぬ事かな、さりながら、此の事ゆるがせにしてはあしかりなん、あすはとらの一點にうつたち、さかよせにしてこそ、せうぶにはかつべけれ、まづへんさつ有るべしとて、うすずみにぞかゝれける、

珍札到來再三披見せしめ候よつて大師河原のぢう人池上太郎右衞門尉底深かたじけなくも唯我獨酒とはきかへすのみならず夏の桀が酒池牛飮をまなび近鄕をはせめぐるによつてそくばくの水鳥等我にそむいてかれにしたがふよし歷刧不思議の珍事なり、あまつさへかの一門らがちじよくをすゝがんがため當地へ入來せんとほつするの條是非なしさて底深一門わが宿所へとりこみなば當座のつい え後日の內損かたぐ〵もつてめいわくに及ぶべし これによつて愚案をめぐらすに大師がはらへさかよせにをしかけ勝負をけつすより外は他事これなし是れ人にさきんずるのはかりごとにあらずや猶その節あんないせらるべきものなり

同月日　齋藤傳左衞門尉忠吞殿への返簡

大塚地黃坊樽次とぞかき給ふ、

四、樽次道行の事

さるほどに樽次は、つまの女房にちかづきて、我此のあかつき大しがはらへ參りさふらふべし、それがし何事も候はずは、來月はじめの比、たよりの文を參らすべし、もし其比しも過ゆかば、うき世は上戶のならひにて、さかづきの露しもときえうせぬるよとおぼしめし、古酒をばたむけてたび給へ、いとま申してさらばとて、じたいが樽つぐは、こせうそだちの人なれば、からきたぐひをあつめつゝ、すいづゝの重にこめをきて、まだ夜くらきに大つかを、立出でゆけばほどもなく、いつもさかてをおひわけの、宿をもはやくうちすぎて、こりせでさけをもり川じゆく、それよりもほんがうどをりにさしかゝり、ゆしまになれば、しんしんたる森のうちに、いらかをならべたるしやだん

有り、たるつぐ馬かたを招きつゝ、是れはいか成る神ぞといふ、是れこそむかしは平親王將門、今はかんだの明神とあらはれ、一さい衆生をさいどし給ふとこたふれば、樽次なゝめならずよろこび、ひやにてもみきならばいたゞかんに、かんだときけばうれしやと、馬よりはやくとんでおり、しやだんにかしこまり、そもみづからをばいかなるものとかおぼすらん、大つかのぢわうばう樽次とはわが事也、いづれの神のぐわんよりも、かんだときけばたのもしや、今度大しがはらのせりあひに、御はうべんあれと、ふかくきせいをかけ給ふ、まづしよぐわんじやうじゆのけいやくに、御酒をいたゞき申さんと、內陣へつゝと入り、神前を見給へば、げにも錫ありすゞならば、ふれといふ事にやと、さい三ふれ共酒はなし、樽次あきれて物ものも給はず、たゞうたばかりぞよまれける、

當世は神もいつはる世なりけり
かんだといへどひや酒もなし

かやうにつぶやきつゝ、駒引きよせうちのりて、すぐに行くとは思へ共、いつのまにかはすぢかへばしをも打わたり、また夜ぶかくもとをり町、さかなやはさまん二ほんばし、つまれる人のさかづきを、すぐるは是れぞなかばしと、ゆけばほどなく、はや新ばしになりぬれば、增上寺も見えにけり、あの御寺のそのうちに、いかほどつよき上戶たちの、そもたくさんにあるらんと、心にしみてしゆせう也、しばしはこゝにしばざかな、かずをつくしてめすほどに、すいづゝの內もみなに成るこそかなしけれ、さらば是れよりいそげとて、駒をはやめてうつほどに、をとにのみ聞ししな川にもつきにけり、まづ弓手のかたには、まん〱たる海上に、のぼればくだるれうし舟、あなたこなたとこがれゆくは、なみまにものやおもふらん、沖にはかもめむらがりて、たつ波に身をまかせ、ねぶりをもよほす有さまを、しづかなることとわれにたりと、山谷が筆のすさび、今こそ思ひしられたれ、馬手には大山つゞきたり、あらおもしろのかいだうや、浦山かけたる名所なれば、わがてうはさてをき、唐土天竺とても、かほどの見所はよもあらじと、一しゆはかくぞゑいじ給ふ、

ゆんでは海めてには山がそびへたり
うら山しとは是れをいふらん

山に山がかさなりて、大木は數しらず、えだをならべ葉をたゝみ、しげりあひたる其の中に、見てさへもうれしきは、まづわれに酒をしゐの木や、こよひのとまりに上戶ばかりありのみの、下戶はひとりも梨の木の、名をきくもいやのもちつゝじ、いつさて酒もりにあふちの木、あくじをばみな下戶共にぬるでの木、われをば酒やのかたへひいらぎの、下戶のまへをばもはや杉のかど、上戶は我を松原の、しそんまで酒のむ事をゆづりはや、ならはゞ下戶も上戶にならの木の、さかてをやすくうるしの木も有、下戶ははぢをかきの木の、我らがよはひはながくくしくもひさゝぎの、思ふ事はおつつけあすならふの木も有り、女三の宮に心をかけし、そのゆかりにあらね共、人にかねをかしは木の、金銀たくさんに黐の木なれば、物を杏ずる人もなくて、いつも心はさはら木や、われはこゝまでもはるぐくときわだの木かなと、にがくくしくも思ひしに、やがていつきをたいぢして、大つかへ楓の木こそうれしけれ、およそ江戶より川さきへ四里半ときゝつるに、くりの木あるはふしぎかな、げに行きてかへりたる名なるべし、あゝおもしろの道すがらと、むかふをきつと御らんずれば、一町ばかりさきに小坂をかたどりて、小家ひとつぞ見えにける、樽次あれは堂か宮かと往還の人にとはせ給へば、あれこそ此のほどいできたるちや屋にて、もちなとも候へばもちや共申ぞかしとこたふれば、樽次聞召、酒のせうぶをのぞみて出るかどでに、もちやと聞こそ不吉なれと思召、いかにたび人、たとへもちやにてもちや屋にてもあらばあれ、坂にいへを立たれば、さかやとこそはいふべきに、御へんはふかくじんかなと、とがめられ、けうさめがほにてにげにけり、そのまにかの小家もちかくなりぬれば、むまよりおりて、一しゆはかうぞきこえける、

なにしおはゞいざこと問ん茶屋のかゝ　わが思ふ酒はありやなしやと

と口ひき給へば、ちやのかゝもとりあへず、

めには見て手にもとらるゝ樽の内　かんろのごとき酒にぞ有ける

樽次此のへんかにめでゝ、おくのまに入り給へば、芝ざかなにてうしをそへて參らする、是れはふなか何ぞとの給へば、ちやのかゝとりあへず、

しな川にのぼれはくだるふな人の
　　ふなにはあらねどしばしのめ君
かやうに申つゝ、いろ〳〵のめいしゆを、遊君にしやくとらせてぞ出しける、もとより此の上らう、しな川のはまそだちなれば、品々にしほのあるはだうり也、はだへはしろうして、ふるしら雪のごとくなれば、誰もよりそはゞきえぬべし、その立ふるまふ有さまは、楊柳の風になびくがことくにて、　かいだう一ばんの花なれど、わがまゝにならねば、あら二九の十八ばかりと見へけるが、赤地のたんざくを持參して、まことや一じゆのかげにやどる事も、　他生のえんときく時は、するぶまつ山のわすれがたみに、はづかしながらも一筆と、すゞりをそへて參らする、樽次につことうちわらひ、やさしくもきこゆる人のことのはや、とても筆をそむるならば、御みのなをものせぬべし、何とか申すと有ければ、かずならぬしづが身は、さして申べき名も候らはず、木の丸殿にもあらばこそ、なのりもせめとて、うちかたぶける有さまは、しがからさきのひとつ松、たゞつれなう見えしかば、樽次はいとゞあこがれて、風はふかねどくずのはの、うらめしき人のふせいかな、むかし齋藤べつとうさねもりこそ、なのれ〳〵とせむれ共、つゐになのらぬと聞てあり、今そこにもなのり給はぬは、　もし實盛がゆかりにてもましますか、　しからばびんのかみのはくはつたるべきに、くろきこそふしんなれとの給へば、さすが上らうも岩木ならねば、はやうちしほれたるふせいにて、いまは何をかつゝむべき、そもみづからと申は、此のしな川にながれをたつるものなれば、　かみよりくだる人もいなかよりのぼれるも、　やなぎはみどり花はくれなゐの、いろ〳〵にてうあいして、たゞいとおしきとのみ有しかば、すなはちおいとゝ申となのりけり、樽次聞召、さればこそさいせんより、よし有ふせいとは見て有をとて、すみすりながし筆をそめ、なり平のあづま下り思ひ出て、
　　いとゞしく過行くかたのこひしきに
　　　　うら山しくもとまるふでかな
と小野にてはなけれども、　道風りうにさつとかゝれければ、かのおいともへんか申さんとて、
　　いとによる物ならなくにわかれぢの
　　　　心ぼそくもおもほゆるかな

是れはきのつらゆきがよみし歌なれど、ついでよければはいまぞ思ひでの、しな川のしな〳〵に情をかけてもりこぼせば、樽次もうちとけて、天にあらばひよ鳥、地にあらばれんがくくわんとちぎりつゝ、心も次第にみだれがみの、なが〳〵しくものむさけに、やうやくじこくもうつり、ゆふ日にしにかたぶけり、其の時樽次、けふはなんどきぞとの給へば、かのおいとうぐひすごゑにて、まだわれに何にてもくれむつのまへと、そせうがほに聞ゆれば、一ぼくもすゝみ出、もはやこゝもとをまかり申の時といさむれば、樽次はなごりのたもとをふりちぎり、門外さして出給へば、あるじもともにはしり出、一ぼくにつかみ付て、なんぢらはのみにげするか、おあしをいだせとせめにける、樽次御らんじて、何よりもやすさうなるしよまうなり、もゝまでもくりあげ見せよかしとのたまへば、いやそのあしにては候はず、けふいろ〳〵をめされける、其かはりを給はれとぞ申ける、たるつぐはあんにさういしたる事なれ共、さはがぬ體にもてなし、いかにあるじ聞給へ、そもみづからと申すは、江戸大つかの者なるが、大しがはらへいそぎて行く道なれば、こゝらへ立よるべきとは思ひよらず、たゞかりそめに出たれば、おあしとやらんも用意せず、何心なくとをりしに、忝もあのさかばやしのお立あるを、みづから一め見るよりも、はやこひとなり、心もそらにあこがれて、ゆかんとすれど道見えず、もすそに針はつけね共、杉たてるかどと見てしより、やがておくにもいり酒の、樽のかず〳〵れんぼして、心もそゞろにうき立、じこくのうつるもわきまへず、長居する鶯ひきめにあふとは是とかや、さりながら、やがてかへらん道なれば、其の折ふし立ちよりて、酒のかはりを參らすべし、御はうしに待給へと、色々わびぬれど、なびくけしきに見へざれば、かほどつれなきあるじには、しんで後に思ひしらせん、あのさかつぼにとんで入り、心のまゝにのみじにし、五體をあかくしてあら猩々神と變じ、のぼりくだりの上戸たちに、我らがための本尊と、おがまれん事のうれしやと、思ひきつて候ひしが、まてしばしわが心、ひとゝせ歌道とやらんをけいこしたるとおぼえたり、こしおれなりとも一しゆよみ、あるじが心をやはらげばやとおぼしめし、大江のちさとがうたを思ひ出て、

酒のめば錢に物こそかなしけれ

我身ひとりの上戸にはあらねど

ときこゆればあるじもへんかをぞ申ける、

ほの〴〵とあかしのかほのどろ坊に

しんしゆのまるゝ錢おしぞ思ふ

かやうにつぶやきければ、たとへ何ともよまばよめ、にぐるをさいはひと、駒引よせ打のつて、いかに馬かたもきけ、人と生れてよむべきものはうた也、扨もただ今のていたらく、虎の尾はふまね共あやうかりし處に、一しゆのうたにて毒蛇の口をのがれし事、歌道のゐとくにあらずや、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、おとこ女の中をもやはらぐるは歌也と、紀のつらゆきが古今の序にもかき置しふでのあと、今こそ思ひしられたれ、扨もたゞ今よみしうた、みづからが作意にてよもあらじ、たねん頼みをかけ申、ゆしまの天神われによませたまふかや、あらありがたやとかたりつゝ、さしも物うき道なれど、此ものがたりになぐさみて、ゆけばやう〳〵むさしなる、川さきをゆんでに見て、みなみ河原忠呑がやどにつき給ふ、

五、在々の水鳥等南河原へはせきたる事 附底深住所へ使者を立らるゝ事

さるほどに樽次公、昨朝大塚を御立これ有、其の日のくれがたに付給ふと、ふうぶん有ければ、ざい〳〵の水鳥等、すいづゝ取てわきばさみ、我さきにとはせ參る人々には、まづ一ばんに鎌倉の甚鐵坊常赤、赤坂毛藏坊鉢呑、武州わらびの宿に半齋坊數呑、かはさきに小倉又兵衞忠酔、多麻郡菅村の住人佐保田の某酔久、小石川に佐藤權兵衞むねあか、ひらつかに來見坊たるもち、江戸ふな町に鈴木半兵衞飲勝、おなじくあさ草になごや半之丞もりやす、木下杢兵衞の尉飯嫌、とび坂に三浦新之丞樽明、あざぶに佐々木五郎兵衞すけ呑、同彌三左衞門酒丸、八わうじに松井金兵衞夜久、あるじの齋藤傳左衞門忠呑、都合十五人、其外村村谷々よりはせくはゝる雜兵等、庭前にみち〳〵て、木の下岩のかげ、人ならずといふ事なし、樽次の給ふやう、さらば明朝卯のこくにうつ立、辰の刻に手合すべし、さりながらまづ大しがはらへ使者をたて、底深がしよぞんをきかんとて、赤坂の毛藏坊を召れ、なんぢ大しがはらへはせゆき、樽次是れまでよせて有り、明朝はさうてんにおしかけ、せうぶをけつすべし、も

し一種一荷持參し、あやまりなきむね白狀せば、今度はしやめんたるべしといひかけ、ちとおびやかして見よとの給へば、承るとてけさう坊、駿馬にぶち打て、時をうつさず大しがはらにつきしかば、かれが宿所につつと入り、大をんじやうにてこれ〳〵御使に愚僧がきたつて候とおめきける、あはれなるかな底深は、年つもつて六十九、其のうへ大病にはおかさる、たけきこゝろもよはりはて、題目となへてゐたりしが、此ころにおどろき、郎等に手をひかれながらたいめんし、扨もめづらしの御出や、さ候へばそれがし所存をかたつてきかせ申すべし、近年人の取沙汰には、大つかにこそ地黃坊といふ者がすみて、よな〳〵忍び出て、人を呑みころすといへる風聞有しか共、世の中のそらごとにやと思ひおり侍りしに、それがしがいとこに山下作內と申す者、去年極月江戶赤坂へ打こえ、大血をはき戶板にかゝれてかへりしを、是はいかにととへば地黃坊の所行とこたふ、そのうへ又同名三郎兵衞と申者、此の春めぐろへ參り、ある谷合にて樽次によせ合せ、是れも同じやうに血をはき存命不定にてかへりしを、是はときけば樽次のわざなりといふ、其の外樽次に參會するほどのもの、いづれぶじにてかへるものなし、その時底深思ふやう、よし〳〵その樽次もおに神にてはよもあらじ、此翁が大樽ひつさげ出るほどならば、血をはかせぬ事はよもあらじ、扨こそかれらがちじよくをもすゝがんと、馬にくらをかせ候所に、某しゆうんやつきたりけん、にはかにふうどくしゆといふものもゝに出たれば、羽ぬけ鳥とはこれとかや、たつもたゝれぬ風情にて、やまふのゆかによりかゝりぬるこそ無念なれ、それさへあらめかへつてさかよせになりぬる事、てうでうもつていこんなれ、しかるに明朝これまで御こしあるべきよし、ねがふところのさいはひなり、とても病死せんよりは、酒のかたきとのみじにし、名を後代にあげんとて、ちんずるけしきはなかりけり、けざう坊はぐわんらいぬばやき法師にて、いや〳〵長居せばあしかりなんと、いそぎたちかへり、そこふかがしよぞん有のまゝに披露すれば、おりふしなみ居たる侍たちは、かれが病中こそはみかたの吉事なれ、こよひにもをしかけ給へと、いさみすゝんで申けれども、樽次は一かうすゝみ給はず、しばらく思案しての給

ひけるは、窮鼠かへつてねこをかむといふ事有り、おもひ切たるそこふか、老人といひ大病をうけ、のみじにせんといふこそはだうりなれ、か丶るくせ者にわたりあはゞ、たとへせうぶにはのみかつとも、みかたはおほくないそんすべし、たゞ此のたびは理を非にまげて、かれがほんぷくをまつよりほかの事あらじ、いづれも此のむねをぞんぢせよとぞの給ひける、むかしもさるためし有り、和田くすの木二千ぎにて、攝州天わうじに出張の時に、うつの宮七百きにてよせくるを、わだはこれをつたへき丶、くすのきにむかつていせん隅田高橋が五千ぎにてよせけるをだに、をしちらし候に、こんど宇都の宮がわづか七百きにてよせきたる風聞あり、いささかよせにして、一騎ものこさずうちとるべしと、いさみか丶つて申けれぱ、くすのきしばらくしあんじて、いや〳〵今度のいくさは大事なり、せんど大ぜいをだに、をしちらし候あとへ、わづか七百騎にてよせくるは、一騎もいきてかへらんとおもふものはよもあらじ、かく思ひきつたるがうてきにわたりあはゞ、たとへいくさにはかつともみかたは過半うたるべし、さればいくさは今度ばかりにかぎるべからず、しかるにそくばくのにんじゆうたれなば、かさねてのかつせんいかゞせん、くすの木にをいては、はかりごとをめぐらし、かれをむなしくかへさんとて、さ丶へたるぢんばをすこしひきしりぞき、にげたるやうに見せければ、あんのごとくうつのみやは、わだくすのきがひきしりぞきたるをきぼにして、ひといくさもせず、京都をさして引にける、さればうつのみやがこぜいをゝそれて、いくさをせざるはくすのきがぐんぼう、今そこふかゞしゆもつをゝそれてか丶らざるは樽次か酒法、かれこれ時代はかはれ共、はかりごとはわりふをあはせたるがごとくなり、

水鳥記卷之上終

水鳥記卷之中

六、五ヶ條の制札たてらるゝ事

翌日にもなれば、はせ參る人々をあつめ、池上がほんぷくせざらんうちは、たとへ年月ををくる共、此の地にとうりうすべし、めん／＼もそのかくごあれとぞの給ひける、その比あるじの忠吞は茶屋をたてけるが、俄かにさかばやしをおつ立、樽次公にまみへ、忠吞こそうらに酒のみやをもちて候と申せば、たるつぐうなづき給ひ、その日のむまのこくに入せ給へば、人々集りつゝ、終日のしゆえんをはじめらる、その日もくれぬれば、かまくらのぢんてつばうを召れ、樽次がしばしなりともとうりうせんに、をきてなふてはかなふまじ、これ／＼五ヶ條のをもむきを、せいさつに立らるべしとの給へば、承るとてたいしゆつす、中にもけざうばうは、きこゆるぶんしやにて、かうこそはかきたりけれ、

一、すでに酒ばやしたて候うへは、出入せらるゝめん／＼、今日よりして御酒のみやと申さるべし、もしあやまつて、ちや屋と申やからこれ有るにをいては、そのくわたいとして、下戶には酒をしゐ、上戶にはかへつてふるまふまじき事、

一、此の庭前にをいて、みだりに痰をはくべからず、但さけはかれ候儀は、くるしからざる事、

一、樽次公輿にせうじておどられ候きざみ、上戶のれき／＼は、地うたひのやくたり、あをぐみの下戶らは、しらすになみゐて、げたいなくほめ申さるべき事、

一、此の御酒の宮に、あひつめらるゝめん／＼、たがひに酌をとつて、おほくのまるべし、酒はすごすをもつてなぐさみとす、もしすごさずんば、あになんの益かあらんや、

一、樽次老は、りよしゆくのうち、女人けつかいの御たしなみ有といへ共、ようがんびれいの御かたにをいては、ひそかに御たいめんあるべき事、

右五ヶ條の趣かたく可²相守¹者也　年號月日、奉行鎌倉甚鐵坊常赤、木下杢兵衞尉飯嫌等、在判して立給へば、みな人嚴密のをきてとかんじけり、

七、樽次藥師堂へ願書をこめ給ふ事

光陰矢のごとくとやらん、うつりかはるは月日にて、きのふとすぎ、けふとをくるほどに、いつのまにかは、八月中じゆんに成りにけり、かく月日のたつにしたがひて、そこふかもいやましにおとろへゆけば、一門はきもをけし、本道外科かずをつくしてまねきよせ、華佗扁鵲が術をつくせども、そのしるしあらざれば、いまは今生のえんつき、めいど黄泉にをもむかんとするこそあはれなれ、樽次此のよしきゝ給ひて、あるじを召れて、いかにたゞのみ、今度そこふか、老人といひ大病といひ、一かたならぬくるしみに、あみのうちなる魚とかや、のがれがたきと聞て有、しからば疫病の神にてかたきとつたるとやらんなれば、樽次が本意にあらず、いかにもして、そこふかが命をいけがみにするはかりごとこそ、きかまほしけれとの給へば、忠呑うけたまはり、されば昔より今にいたるまで、ぼんぷの及ばぬねがひをば、佛神にいのるならひ有り、そのしようこをもろこしにたづぬれは、周の武王やまふにふして、すでにほうぎよし給はんとせし時、周公旦天にいのりしかば、武王の病たちまちにいへけり、ましてわがてうは神國なり、などかは利生なかるべき、神にせいぐわんし給はゞ、一定ほんぷくつかまつるべう候と申ければ、樽次げにもと思召、あたりなる藥師堂に、一通の願書を持參し給ふ、その文にいはく、

歸命頂禮夫藥師如來者東方淨瑠璃世界本主也衆生願爲㆓圓滿㆒誓給偉哉爲㆓其德㆒矣所㆓以盡㆑誠也樽次潛依㆑有㆓所願㆒奉㆑捧㆓愚書㆒旨趣者非㆓他事㆒于㆑玆有㆓池上太郎右衞門尉底深者㆒聞㆓其行跡㆒常枕㆑麹藉㆑糟提㆑盞招㆑友傾㆑樽飮㆑之惟如㆑吸㆓鱣鯨之大海㆒故威勢日盛而近鄕之水鳥等盡被㆓强臥㆒畢加㆑之密盜㆓經文㆒稱㆓唯我獨酒㆒剩掠㆓樽次酒法㆒恣醉狂倩惟是佛法酒法之兩敵也我俚生㆓此家㆒不㆑强㆓臥彼㆒者天下之嘲難㆑遁是非㆓我恥辱㆒而何乎故與㆑彼爲㆑決㆓勝負㆒揚㆑策馳㆓來於當地㆒之處底深俄然被㆑犯㆓大病㆒依㆑傾㆓枕老後之病床㆒樽次掩㆑憤延引可㆑謂㆓無念㆒也悲哉進欲㆑企㆓亂酒㆒彼病火急嘆哉退欲㆑待㆓後日㆒彼命不定若今般不㆓參會㆒何時散㆓遺恨㆒乎樽次一期之浮沈在㆑焉嗚呼伏希施㆓靈佛之藥力㆒忽令㆑爲㆓本復㆒然者即時押掛强臥事不㆑可㆑廻㆓咽本㆒也再拜、

慶安元年八月十日

藥師御寶前

大塚地黄坊樽次敬白

とかきしたゝめて、佛前に持參し、たからかによみあげ給へば、丁寧にこと葉をつくし、玉をつらねたるぶんしやう也とて、きく人しん〴〵の思ひをなす所に、地震おびたゞしくゆりぬれば、やくし十二神たちも、一度にどつとうなづき給ふ、そのときたるつぐ、扨はそこふかゞ命も、まんざいらくといはひつゝ、下向し給ふぞたのもしき、

八、底深ほんぶく附さかろんの事

さてもかのそこふかが、しゆもつといつぱ、一夜がうちにこつずいよりゆしゆつしたる事なれば、いたむといふ事かぎりなし、しかるに此のほど、樽次のぐわんしよ、佛意にやかなひけん、さしも大なる風どくしゆ、たちまちにやぶれて、へんじがうちにへいゆするこそふしぎなれ、さてこそ底深も、よみぢがへりと、よろこぶ事かぎりなし、樽次此のよしつたへ聞給ひ、しよぐわんじやうじゆと、やくしのかたをふしおがみ、此の事時日をうつしてかなふまじ、はやうつ立候べし、こよひ大しがはらにつきなば、定て銚子のかけひきたるべしとて、ながえをそろへけつこうしたまへば、ざい〳〵の水鳥等よりあひて、そも〳〵われらは、いまだながえをたんれんせず、いかゞはせんとひやうぢやうす、鈴木半兵衞のみかつすゝみ出て、今度のてうしには、あとさきに口をつけんと申す、樽次あとさきのくちとはなんぞとの給へば、のみかつ、つねのてうしは、つがんと思へばつぎ、とめんと思へばとめ、ゆんでへもめてへもまはしやすう候が、ながえはさやうのとき、きつとおしまはすが大事で候へば、あとさきに口をつけ、我かたへもつぎやすきやうにし候はゞやと申ければ、樽次まづかど出のあしさよ、亂酒はすごさじと思ふだに、あはひよければ、過すはつねのならひ、ましてさやうにつぎまうけせんに、なじかはよはざるべき、御へんたちは、あとさき千口も萬口も付け給へ、樽次はもとのまゝにてあらんとの給へば、のみかつ聞て、それよき大酒と申は、むかふへもおさへ、あとへもさし、うけはづしのたつしやなるをもつて、よき大酒くむとは申、さやうに一ぱうのみするをば、ゐのしゝ上戸とてよきにはせずと申、樽次、ゐのしゝかのしゝはしらず、らんしゆは只ひらのみにのんでも、よはぬぞ心地はよきとの給へば、のみ

かつ、さい三のもんだうに、めんぼくやなかりけん、天せい此の御坊は、げこぶりするとつぶやけば、樽次大きにはらをたて、なんぢはげこのものかな、手なみのほどをみせんとて、ながえに手をかけ、すでにさしちがへんとし給へば、樽次には飯嫌ぢんてつら取りつき奉り、呑勝には半齋坊等つかみついて、まへには底深といへる大てきを持ながら、同士のみし給はん事、もつたいなしといさめ申により、無事にこそはなりたりけれ、

九、鎌倉甚鐵坊先懸附さめやすが事

其後樽次、さぶらひたちを召れ、けふもはやひつじのこくと覺えたり、是れより三十町の道をへて、大しがはらにつくならば、ほどなく日もくれなんず、しからばをのづから、よるのせうぶになりぬべし、夜分のかけあひは用ある物ぞ、たんれんの人あらば、さけをこのめとの給へば、かまくらのぢんてつばうすゝみ出て、我らこそ眞言そだちの事なれば、じやくねんの比より、日まち月まち二十三夜などゝて、しよだんなをかけまはり、よるばかりたべならふて候へば、夜分のはたらきに、ついにけがとつたる事候はず、たとへつよからん敵にても、一方のみやぶつて參らせんといふまゝに、まつさきがけてすゝみければ、つゞいて樽次も出給ふ、けざう坊はおさへのやくにて、あとにこそのつたりけれ、其の外の人々も、樽次をしゆごし奉りて、南がはらをうち過、たんぼをまつくだりにのり給ふ、樽次、きのふまでもさぶらひ十五騎、大將ともに十六騎と聞えしが、けふ侍十六き大將共に十七きの、ゆらいをくはしく尋ぬれば、ちかきころ天も心よくはれしかば、樽次あるじを召れ、それ山にあそぶとかきてゆさんとよむぞかし、是れほどまぢかき山に、あそばぬ事や有るべきとて、大勢うちつれ、山々をはいくわいし給ふ、比しも八月中旬の事なれば、ところどころはもみぢして、木々のこずへも、酒にゑいるかとうたがはる、あらおもしろのけふのたのしみや、まことに一こく千金のじせつなりと、おしみ給へども、はや日もくれなんとすれば、いざや人々、天下たいへいこくどあんをんの御代なれば、道くらからぬそのさきに、鳥はふるすに、我はやどにかへらんと、みねよりふもとにをりさせまたふ所に、物こそひとつ見えにけれ、こはいかにと御らんずれば、すがたは人に

て、木のえだにあしをひつかけ、まつさかさまになりながら、いまやうをうたふてぞゐたりける、そのとき樽次、すこしもさはぎ給はず、されば異國にも東坡といへる人、赤壁山にあそびしとき、くろきつるどうじにへんじてこと葉をかはしけるとかや、今樽次も、此の山中にて、かゝるしれものにあふこそふしぎなれ、いかさま是れは、みづからをたぶらかさんとて、きつねかむじなのわざと覺えたり、さあらば一句さづけてくれんとて、すいづゝ取てなげつけ、なんぢ元來上戸生、急々酒々と、かのせつ生せきのもんをさづけ給へば、はや木のえだ二つにさけて、ぬしは下へぞおちたりける、其の時樽次、なんぢいかなるへんげのものぞ、有のまゝに申せとあれば、さればそれがし、まつたくへんげのものにて候はず、此のふもとにすまゐする、山がの者にて候が、いかなる佛神のはうべんにや、よにたぐひなき、上戸と生れては候へども、朝三のたすけもなきしづの身にて、酒のあたへもあらざれば、世人はみなゑゝれ共、我ひとりさむることのかなしさに、きのふ此の山に入り、杵といふものをつくり、けふ川さきの市にたち、きねをかはりに、酒のふで候へども、やどへかへらぬそのさきに、はやさめて候へば、あまりねんなふぞんじ、もしさかさまになりてふらめかば、かしらへ血さがつて上氣し、ゑふたるこゝちやせんと、さとは人めもしげければ、此の山に入り、此のていたらくをなす所に、思ひもよらぬ人々に、見え申こそはづかしけれとて、うちかたぶいてぞ居たりける、樽次その外の人々も、あつぱれ上戸の手本やとかんじつゝ、ながすなみだの雨はたゞ、ふるもろはくのごとく也、其後樽次、御へんのけみやうはとあれば、此のふもとに居住して、あるときは山にのぼつて木を切り、さとへおりては田をつくり、此二つのわざにて、よすがをゝくる者なれば、木をも田をもすてじとて、すなはち喜太郎と申也とあれば、あらゆゝしの名の付やうや、さてじつみやうはとの給へば、もとより山がの者にて、けみやうばかりありのみの、實名はなしとこたふ、げに是れはさぞあるらん、されば名のりを一つとらせんと、まづごへんは何ほどのふでも、さむることのやすければ、さめやすとなのれとて、則ちすいづゝを三々九度ふるまひ給へば、是ほどのふでも、やがてさめやすといふぐれの、いづく共な

く見えざりしが、けふ樽次の御かど出と、風のたよりにきゝしかば、御みかた申さんとはせくはゝるほどに、扨こそ十七騎にはなり給ふ、

十、底深亂舞附いなりたくせんの事

そこふかは、樽次のをしかけ給ふをばしらずして、此のほどのつかれをなぐさまんと、一門をまねき、らんぶをしてぞ居たりける、すでにらんぶもなかばのころ、其座にしやくとりける十四五のわらは、にはかに狂氣して、二三間づゝとびあがり〳〵しければ、人々きもをけし、いかさま是は、ものゝけのつきたるにやと、目をすまし見居たる所に、ゐんのごとく口ばしりて申やう、我をばいかなる者と思ふらん、けふははつかなれ共、われはとうかの大明神にて有ぞ、さても樽次は、みな〳〵十六騎を引ぐし、たゞ今こゝもとへいそぐ也、こよひこゝは、しゆらの座となりて、なんぢら一々ざうふをはき、うきめにあはんずるをば、ぼんぷのかなしさは、しらずしてらんぶのたはぶれこそふかくなれ、うぢ子ふびんなれば、しらせんために來るなり、今ははやかへる也とて、五たいよりあせをながしてぞ、しづまりける、

十一、底深與力をまねく事附名主四郎兵衛松原へ向事

まことにうぢ神のつげあらたなれば、底深大きにおどろき、いそぎ與力をまねきければ、はせきたる人々には、名主の四郎兵衛つねひろ、藪下拗解由左衛門尉早呑、竹野小太郎たゞ呑、同彌太郎數成、米倉八左衛門はきつぐ、底深惣領に長吉底成、次男百助底平、田中内德坊呑久、朝腹九郎左衛門桶呑、またを九二郎常佐、そこふかしやていに池上七左衛門そこやす、同左太郎忠成、かの吐血せし山下佐内請安、池上三郎兵衛強成、これらをさきとして、こゝかしこより、大勢はせよれば、そこふかいそぎたいめんし申けるは、某じやくねんの比より、おほくの人をしゐふせし、其のむくひたちまちに、そこふかゞ身にきたつて、こよひかぎりとなりて候ぞや、それをいかにと申すに、大塚地黃坊樽次といへる、きこゆる大將にて、つゞく御坊たちには、かまくらの甚鐵坊常赤、ひらつかのらいけん坊樽持、赤坂けざう坊鉢のみ、わらひの半齋坊しけのみ、其の外いひきらひ酒丸などゝいへるあぶれ人、かずをつくしてよせたまふよし、たゞ今あらたなる御

つげの有けるぞや、扨こそおの〳〵をもまねき申とさ候ころに、さうそくの御出、しうちやく申して候、身もつかへば、某としはよつて、此のほどの大病に、とやう、のみじにと思ひきつれて候へば、こよひは一ぢやう、のみじにと思ひきつて候、われむなしくなるならば、あの兄弟をさきにたて、ちゝがかたきなれば、ほんまうとげさせ給へと有りしかば、座中の人々も、たもとをかほにあてぬはなかりけり、かゝりし所に、惣領の長吉底成は、其の比十一さいにて有しが、すゝみ出申けるは、昔が今にいたるまで、小をもつて大にかち、よはきをもつてつよきをうつに、はかりごとにしくはなしと見えて候へば、もつぱらちりやくをめぐらし給ふべし、まづそれがしぞんじ候は、是れより八町ほど出れば、ほそ川ながれ候、異國の韓信が背水のぢんをまなび、かのほそ川をうしろにあて、前なる小松原に、大勢かくれゐるならば、二さうをさとる樽次も、是をば夢にもしらずして、なに心なくとをり給ふところを、松原よりやなしりをそろへ、一度にどつとかゝるほどならば、いかなる樽次も、一たん引給はぬ事はよもあらじと、たゞ手にとるやうに申ければ、そこふかうちうなづき、せんだんはふたばよりもかうばしとは是なるべし、わどのはいまだ幼少の身として、ちゝがちりやくにはばつくんまして有、さらばさつそくうつたち給へと、そこふかもざしきをたちぬれば、長吉はしりより、ちちがたもとにとりつきて、今思ひいでたる事の候、たるつぐはすきまかぞへときいて有、もしわき道にかかつて、留守をねらはれ給はゞあしかりなん、たゞそこふかは此所にまし〳〵て、まつばらへは、それがしはせむき候はんとあれば、そこふか聞て、これもいはれたり、さてまつばらへはたれにてもさしむけ、御へんも此のところにまし〳〵て、ちゝをみつぎて給はるべし、いまだとしにもたらぬわどのを、へんじ也ともはなし申べきか、ぎせちなう候とて、今までよひしそこふかも、たゞさめ〴〵と見えければ、長吉も今はちからなし、さらばみやうだいをさしむけんとて、名ぬしの四郎兵衞をまねき、いかに名ぬしどの、御へんこそ度々のせうぶにも、つゐにふかくをとらぬ人ときいて候へば、今度まつばらの大しやうにたのみ申なり、もとよりてきによつて、てんくわすることなれども、たるつぐはぶさうの大しゆにて、てき大勢なれ

ば、なをもつて、いさみかゝるこはものときいて有、あらかじめそのかくごし給へと下知すれば、名ぬし聞て、御こゝろやすくおぼしめせ、たとへ餘人はにげちり、此のつねひろにをひては、てきにうしろをばみせ候まじ、そのうへたるつぐも、たゞみのうへにてこそ、くちをばきゝ給ふらめ、野はらのかけあひをば、いつたんれんし給ふべきなれば、それがしはせむかつて、まつばらへ引こみ〳〵、いち〳〵よこにねせなんものをとて、ざしきをずんとたちぬれば、あつぱれしそんずまじきけいきかなと、みなたのもしくぞ思はれける、

水鳥記卷之中終

水鳥記卷之下

十二、樽次まつばらにつき給ふ事　附平塚のらいけん坊もの見の事

さるほどに名主四郎兵衞は、松原にもつきしかば、こゝやかしこにかくれつゝ、樽次の御とをりを、今やをそしとまち居たり、是はさてをき樽次は、へんじもはやくとおぼせ共、せつしよをかまへたるなんじよにて、あるひはふかだをこぐ時も有り、ほそ道をたどる所も有り、九折なるたに坂を、のぼりくだらせ給ふほどに、やうやくさるのなかばに、かの松ばらにつき給ふ、こゝらこそ用心あるべき所ぞと、むかふをきつと御らんじけるが、あらふしぎや、こゝなる松原より、虎狼やかんのさはきたつのみならず、そらをとぶてうるいまで、羽をしげく打ちて、つらをみだしける事のふしぎさよ、げに心得たり、そこふかは老こうといひ、はかりごとの上手ときいてあるなれば、たるつぐが何心なくとをる所を、よこあひにかゝれとて、松ばらにくさをふせたると覺えたり、たれかある、見て參

れとの給へば、平塚のらいけん坊、ぐそうが見て參らんといふまゝに、すこしくぼき所よりはひより、したくのていを一め見て、いそぎ立ちかへり、何とはしらず、やなじりをみがきたてたる水鳥等、五十きほど柴居をかためて候と申けり、

十三、松原手合の事附樽明かうみやうの事

樽次きこし召、さてこそゆゝしき大事はいできたれ、敵は大勢なれば、ひらがかりにかゝつてはかなふまじ、めん〳〵はたつみのかたに、しくれたるやぶのうちをかたどり、せいの多少を見せずして、くるまがゝりといふものに、まんまるになつてかけ入り給へ、かまへてはじめてのはたあはせにひけとつて、たるつぐをうらみ給ふなと下知をなし、みづからは、てきのうしろよりかゝらん、折から秋の野なれば、きゝやうかるかやをみなへし、其外いろ〳〵のちぐさの中を、かきわけ〳〵しのびいり、一もとすゝきの有りける、そのもとに立かくれてぞおはしける、さるほどにやぶの手の人々、おめきさけんでかゝりければ、松ばらの大ぜい、あはてさはぐ事かぎりなし、され共はせむかひ、ひつくみさしちがひ、のんずさいつひまなくぞ見えにける、樽次、今こそはじぶんはよきと、すゝきのもとよりほに出て、はやみだれあひ給へば、前後よりとりこめられ、かなふまじとや思ひけん、大しがはらさしてにげてゆく、かくにげ行其の中に名ぬし四郎兵衞そこひろは、大しがはらにていひすてし、ことばのすゑもはづかしければとて、たゞ一騎とつてかへし、にげんずるけしきはなかりけり、たるつぐどのかたよりも、はくはつまじりのおのこ一騎すゝみ出、あなやさしや、みなにげさふらふ其の中に、たゞ一騎かへしあはせ給ふは、いかなる人にてましますぞ、なのれきかんとあれば、まづさいふわどのはたぞ、是は樽次殿かたに三うら新之丞たるあけなり、名ぬしきいて、扨はたがひによきあひて、たゞしわどのをさくるにてはなけれ共、ぞんずるむねがあるなれば、なのる事は有まじ、よれくまんといふまゝに、はやをしならぶと見えしが、名ぬしはらんぶにはしつかれたり、古酒のちからもうせはてゝ、三うらがしたになる所を、おさへて盃をうばひとり、樽次の御前に參り申やう、三うらこそきいのくせものとくんで大盞とつて候へ、じやうごかと見れば、つゞく樽もなし、又下戸

かと思へば、黒漆の大盞をもつたり、名のれ〳〵とせむれども、つゐになのらず、こゑはしほからごゑにて候と申、樽次どの、あつばれ名ぬしの四郎兵衞にてやあるらん、しからばさかづきの朱いろたるべきに、くろきこそふしぎなれ、たゞのみは見しりたるらんとて、めされしかば、たゞのみ參り、たゞ一めみて、あなむざんや、名ぬしの四郎兵衞にて候ひけるぞや、名ぬしつね〳〵申せしは、六十にあまつてらんぶをせばわかとのばらにあらそひて、酒をかけんもおとなげなし、又らうむしやとて、人々にあなづられんもくち惜かるべし、さかづきをすみにそめ、わかやぎ、のみじにつかまつるべきよし、つね〳〵申候ひしが、まことにそめて候、あらはせて御らん候へと、申もあへずさかづきをもち、御まへをたつてあたりなる、ほそみぞ川のきしにのぞみて、やなぎのうちもみなになる、ゑうきては酒心中のかみにあかり、こゝろきへてはなをはくたいのさかづきを、あらひて見れば、すみはながれおちて、もとのしゆ色になりにけり、げに名をおしむさけのみは、たれもかくこそ有べけれ、やあらやさしやとて、みなかんざけをぞのまれける、また名ぬしがそこひろとなのる事、わたくしならぬのぞみなり、名ぬし大しがはらをいでしとき、そこふかに申やう、こきやうにはにしをさかなにのむ、といへるほんもん有、名ぬし生國はゑつちうのものにて候ひしが、きんねん御酒につけられて、むさしの川さきにきよぢうつかまつり候ひき、此たびまつばらにまかりくだつて候はゞ、さだめてのみじにつかまつるべし、上戸の思ひいでこれにすぎじ、御めんあれとのぞみしかば、そこふかの底の字をゆるし給はりぬ、しかれば古歌にも、もろはくをのみつゝゆけばもみぢして、色に出ると人や見るらん、とよみしも此のほんもんのこゝろなり、

十四、樽次大しがはらへつけいりの事 附ちんてつばうなのりの事

樽次は、いけがみがにぐるせいに、おつつがふて大しがはらにをしよせ給ふ、其の日のしやうぞく、いつにすぐれてはなやか也、はだにとつてはきぬにかみこを引ちがへ、ふかやなの上と下とをはねぬき、おけがはどうとなづけつゝ、しらあやにてはちまきし、かすげなる馬に白くらをいて打のり、そこふかゞ門前に

つつたちあがり、大をんじやうにて、そも〳〵是までよせきたるものをば、いかなるすいきやうしやとかおもふらん、忝くも晉のりうはくりんがばつそんに、ろくゐの大酒官大塚の地黄坊樽次とは我事なり、底深はなきか、けんざんせんと、なのり給ひし御こつがら、あつぱれ大酒とぞ見えにける、そこふかもよかりけん、心得たりといふまゝに、ひろ敷までおどり出、えんの板も酒よ〳〵ふみならし、此のおきなこそ當地の大蛇丸、いけがみ太郎右衞門尉そこふかとはわが事也、間ぢかきところまで馬上のていこそびろうなれ、はや〳〵をりべせよ、せうぶをはじめんとぞ申ける、かゝりし所へ、樽次かたより年の比五十ばかりなる大にうだう一騎すゝみ出、名のるやうこそおかしけれ、そも〳〵こゝもとへ、あらはれ出たる法師こそ、かまくらのぢんてつ坊と申ちしきにて候、じたいそれがしは、かまくらの山里、いきむらと申所に寺をたて、眞言のひみつをとなへしかば、たつとき御僧とて、しよだんなにちそうせられ候ひしが、あるときとなりのには鳥とび來り、餌をひろふて居たりける、おりふし小僧らも見えざれば、天のあたふる所と、とつておさへねぢころし、ぶちやうほうながらもれうりし、日比のまうねんをはらしけるに、天にまなこかべに耳あるうき世にて、かのあるじはやくも聞つけ、かけり入りて申やう、そこなるわ入道、御みの心はつねづねあらいその、こぞうらがあたまもうつせがい、日だにくるれば、何やらかほ〳〵といふからす貝、かやうの貝もやぶるときく、また大酒のみてをんじゆかい、けふには鳥をころして、せつしやうかいまでおかしぬれば、こと〴〵く五かいをやぶるにあらずや、せんだいみもんの惡僧なれば、上へ申していかやうにもと思へ共、かねてなじみし事なればとて、命ばかりはいき村の、寺をばつゐにをひ出され、せんかたなみだにむせびつゝ、家をかぞへてはちをひらきしに、惡事千里を走るとやらん、かまくら中にかくれなければ、是れこそかのぢんてつ坊よ、ころもをはげといふ者こそあれ、一ぱんのたすけもあらざれば、すでにかつみやうに及びしとき、いかなる佛神のはからひにや、あのぢわう坊にさんくわいし、醫道のでしとなつて世をわたり、重恩をかうぶつたるものなれば、御さきを仕らんため、はせきたつて候ぞや、見れば二かい

三かいをあげ、ようじんきびしく見えて候へども、五かいをだにやぶつたる入道が、ましてその二かいや三かいをやぶらんに、何のしさい有べきと、きしよくばうて申ければ、扨もしゆせうなる御ものがたりと、あなたこなたの人々、一どにどつとわらひければ、だうみやにてはなけれども、わにぐちになつてぞひかへける、

十五、甚鐵坊一二のたるをのみやぶる事附さめやすしゐふせらるゝ事

やゝあつて、池上かたよりも、としの比四十ばかりなる、ひげくろのおのこ一人まかり出、是こそあさはらにもよくくらふやつとて、すなはち朝腹九郎左衞門と、忝くも御代官に、あだなつけられ申たるものにて候、わぎみ法師ながら、まつさきにすゝみ給ふやさしさよ、すいさんながらも、中ざしひとつ參らせんといふまゝに、よしのうるしにて、ためぬりにぬつたる、大さん取り出し、うへから下まで、ひとつになれと引うけ、しばしたもつてぞ見えにける、ぢんてつおもふやう、いやいやきやつめに、どうなかをとをされかなふまじ、さしよりて手づめのせうぶにいたさんと、もとよりはやわざのたつしや、しばしといふよりはやくとんで入り、むかふさまにむずとひつくみ、ながえをおつ取りなをし、かれがどうなかとをれをれとさしふする、是をはじめとし、てもとにすゝむつはものを、さしうけ引うけ、北から見るめ西からひくめ、くもでかくなは十もんじ、やつめさかなといふものに、さんざんにこそはしゐふする、もとより五かいやぶりのぢんてつ坊、はや一二の樽をも、をしやぶつてぞ見えにける、そこふか是れを見るよりも、まづ此の御坊にひつくまんと思ひしが、いやいやはむしやどもにめをばかけまじ、いかにもして樽次にと思ひしかば、まつさきにすゝみ出、大をんじやうにて、よひよりも度々けんざんすといへども、いまだせうぶなし、しよたいめんのしるしに、すいさん申さんといふまゝに、鷹の羽をゑがひたる大中わんの大盞とり出し、ゐいやつとひつかけ、見えければ、たるつぐも、のがれがたしとおぼしけるところに、うしろの方より、としごろはたちあまりのおのこすゝみ出、是れこそ山がのぢう人、喜太郎さめやすと申者なり、たるつぐの御みやうだいに、はせむかつて候と申せば、そこふか

聞て、たれにてもあひてはきらふまじといふまゝに、手もとをはなつてとばせぬれば、あやまたず、のどぶえより どうなかさしてつつといり、いたみもろはくなればこらへずして、ゆん手のかたへたをれふし、せんごもしらではきゐたり、ことかりそめとはおもへども、あなたにはおけのみ、はんしはんしやうのていなれば、こなたにはさめやす、ぞんめいふぢやうと見えければ、たがひにあはれとおぼしけるか、しばしなりともやすめとて、あひびきにこそひかれけれ、

十六、近鄕のもの共そこふかにかせいする事

附樽次をりべおとしの事

すでにじこくうつり行けば、樽次八々を召され、一騎當千のさめやすも、かくなり行く事のふびんさよ、これ以てわがちじよくと覺えたり、めん〳〵ふんこつをつくし、くわいけいの恥をすゝいでたべとあれば、たれもかうこそぞんずるとて、大勢どつときばをならしてぞかゝりける、そこふか此のよし見るよりも、てきははやさめはだになつてよせくるぞ、そこをやぶらるなと下知すれば、うけ給はると申て、一きものこらずすゝみ出、こゝをせんどゝもみあひける、犬居目禮古佛の座などゝいへるしゆえんの道、たがひにしつたる事なれば、はぼねをならし、したつゞみをうつて、おつゝまくつゝのかけあひに、いけがみがたのにぐるときも有、たるつぐがたのおはるゝおりも有り、兩方おめきさけのむこゑ、是ぞまことにしゆらだうに、おちこちのたちはもしらぬじせつなるべし、かゝりし所に、かつ手へさしむけられしけざうぼう、五たいもみなゐかうなり、たじり〳〵とたゞ醉ひ、あらくるしや飯ぎらひよ、君はいづくにおはします、たるつぐ御覽じて、ゐれはゐか坂どのか、これへ〳〵との給へば、やがて御まへにかしこまり、さてもそこふかは、兩度までのもみあひに、一二の樽もやぶられ、今ははや小びぜんらばかりにて候へば、もはやかつてはつゞき候まじ、此の事申さんため、ひそかに參じて候と申せば、たるつぐうなづき、しんべうなりとぞの給ひける、是は扨をき、きんがうの水鳥ら、たうかのみやにはせあつまりて、ひやうぢやうしけるは、大つかのぢわう坊と、當地の大じやくわん、ごかくのせりあひとは申せども、やゝもすれば、そこふか、ひきいろに見ゆると聞て有、いざ〳〵後詰して參らせん

と、大せいはせくはゝりければ、いけがみこれにちからを得、あら手を入かへ、そくじにしゐふせんとす、たるつぐは、いつもかはらぬ十六騎、はやなかばはゑいふし、のこる人々も大かた、うすちやおもゆのていなれば、今こそみづからがさしいづべき時節なれと、大せいの中にかけいり給へば、これこそ大しやうよ、あますまじといふまゝに、まん中におつとりこめ、ながえをそろへてさしかゝる、されどもたるつぐ、玉になれたる鳳凰の、おどろくけしきはましまさず、おつかけすかさずくるさかづきに、ひらりとまはり、さしふせねぢふせ、手もとにすゝむやつばらを、六七きしゐふせ、めぐり〳〵て今こゝに、そこふかにくまんとたくみ給ひしに、何とかし給ひけん、をりべをひとつとりおとし給ふ、おりふしむかふはひきくして、あなたのかたへころび行、され共これをばかたきにわたさじと、はるかのばつ座におりくだり、とらん〳〵とし給へば、かたきはこれを見るよりも、ながえにひつかけて、ゑいやつとあらそへば、みかたはこゑをそろへて、たゞすてさせ給へ〳〵と申けれど、つゐにをりべをとりかへし、につことわらふてかへり給ふ、其時いひきらひ申やう、あら口おしの御ふるまひやな、南がはらにて、かずのみが申しもこれにてこそ候へ、たとへ千ばい入のをりべなり共、御さかなにはかへ給ふべきかと、なみだをながし申せば、いやとよさかづきをおしむにあらず、樽次座與にさかづき取てわたくしなし、然ば此の盃をかたきにとられ、樽次は小蛇なりといはれんは、無念のしだいなるべし、よしそれゆへにつがれんは力なし、樽次が酒運のきはめと思ふべしとかたり給へば、いひきらひ、扨其の外の人までも、みなかんなべをぞとられける、

十七、樽次さめやすをたづねさせ給ふ事　附さめやすうたよむ事

そのゝち、赤坂のけざう坊を召れ、さめやすはやはんの比、そこふかにわたりあひ、はんしはんしやうとは見えて有けれども、かけあひのさいちうなれば、ことばをかくる事もなし、いかゞおぼつかなし、たづね參れと有ければ、いひきらひもこれをきゝ、けふは人の身の上、あすはわが身のうへぞかし、いざやさめやすをみつがんと、けざうばうもろともに、尋ね行くこそあはれなれ、かたきみかたはしらねども、こゝかしこ

に大せいゑひふしたるは、たゞさんをみだせるごとく也、此の内に醒安やおはする、喜太郎やあると、しづかによふてぞとをりける、むざんやなさめやすは、黄はぶたへにてかしらをつゝみ、小屏風をかたどり、前後もしらでゐたりしが、よばはるこゑをきゝしより今こそ目がさめやすとこたふ、二人の人々はしりより、あたりなる戶いたにのせて、さきをいひきらひかきぬれば、あとをばけざう坊ひかへつゝ、たるつぐの御まへにすへてをく、かくはかへりきたれども、わるざけのわざと見えて、五たいものこらずあかふ成たり、體もいたづらになり、ぬしもむなしくよはりけるよと、たるつぐなげき給ふ、其の時けざうばう、かれが手とりて、こゝちはなにとあるぞ、まくらもとはかたじけなくもたるつぐこう、あとはいひきらひ、ゆん手のかたは佐保田どの、かく申すはあか坂のけざう坊なりとすゝむれど、とかうのへんじもなければ、かれにちからをつけんとて、あらゝかなるこゑをあげ、あらゆひがひなのありさまや、たとへごとにてはなけれども、三うらの新之丞は、まつばらの手あはせに、名ぬし四郎兵衞をくみふせ、こくしつの大さんをぶんどりしてこそ、三浦のたるあけとはいはれ給ふぞかし、それほどにこそおはせず共、かほどの酒に、やみ〳〵とよはり給ふくちおしさよと申せば、さめやす聞て、何と申ぞけざう坊、かのたるあけにさめやすが、をとるべきにてあらねども、いけがみどのゝ大さんは、いなかまでもかくれなし、はゞひろふそこふかく、ものゝじやうずが、木うすにつくつたるたいさんにて、たゞなかをとをされ、なんぼうくるしいと思ふぞよ、またさめやすにてあればこそ、御まへにてかくものをば申せとて、たゞよはりによはりしが、

我しなばさかやの庭の桶の下
　われて雫のもりやせんもし

とはよみけれ共、せんごもしらぬふせいなり、

十八、そこふか降參の事

かやうにみなよはりゆけば、こよひのせうぶはいかがあらんと、たるつぐもいさむこゝろはし給はず、其のころいけがみがたに、田中のないとく坊のみひさとて、大さんとつてのつはもの、きんがうにかくれなき、さやく僧のありけるが、こんども一ばんにはせくはゝり、數度の手がら、ならぶものなかりしが、たび

かさなればよはりけるにや、そこふかにむかつて申やう、たるつぐはきゝしにまさる大しゆにて、いまだちつともよはり給はず、そのうへ、いひきらひ、さけ丸などゝいへるくせもの、かたわきにひかへ見えて候ぞかし、しかるにみかたは、大ぜいなりとは申せども、へろ〳〵上戸のはむしやにて、かの人々に、たてあはんずるものはなし、あまつさへそこ深も、何とか申それがしも、よひよりすどのせりあひに、はげしくこみつけられ、今はぜんごをばうじて、ゆみもなきうつぼばかりつけたるていなれば、もはや御すけ申事もなりがたし、此の時節をうかゞひ、たるつぐおこりいで給ひなば、そこふかの御いのちもあやうく、このないとく坊も、つゐにはないそん坊になるはひつぢやうなり、たゞとく〳〵かうさんし給へとて、小がひなとつてひつたつれば、ちからなくそこふかも、たるつぐの御前にひざまづき、今よりのちは、御もんぐわいにこまをつなぎ申さんとありしかば、樽次大きにうちわらひ、さてはそこふかどのも、今はそこあさになりけるよとあざむかれける、そのころいかなるものゝわざにてか有けん、一しゆらく〳〵しよをぞたてにける、

池上にすゝめる大じやと聞ぬれど
　酒呑む口は小蛇なりけり

扨たるつぐは、今こそほんまうとげぬとて、かんこくのせきにあらねども、鳥をかぎりに大しがはらをたち出て、みなみがはらにがいぢんし給ふ、きのふまでもけふまでも、おに神といはれしそこふかも、わづか三時のうちに、せりかち給ふぞおそろしき、

十九、たるつぐ大塚に歸宅の事

あくれば樽次、さぶらひたちを召れ、今度勝利を得し事、御へんたちいつにすぐれてすゝみ給ふゆへぞかし、かつうはたるつぐ、酒うんにかなふとおぼえたり、もはやめん〳〵も歸宅して、此のほどのつかれをさましたまへと有りければ、をの〳〵よろこび、ざいざいしよ〳〵へぞかへられける、樽次はそれよりも、ついでよければとて、すけ村に立よらせ給へば、かのふうふ參りむかひ、君ならではといろ〳〵珍物取そろへ、さま〴〵にもてなせば、あるじの情にほだされて、こゝにも數日をおくりたまふ、すでに九月上じゆ

んにも成しかば、今は大塚にかへらんとものし給へば、ともかくも尊慮にまかせ候とて、大ぐろといふ馬に、しろくらをいてひつ立たり、たるつぐ引よせうちのり給へば、馬はきこふるめいばにて、たゞいなづまのごとくなれば、さてはけふはむまのこくばかりに、大つかにつきなんと、よろこび給ふところに、此の道中にかくれなければ、たるつぐの御かへりを、さまたげ申さんと、しゆく〴〵のあぶれもの共、ようがいかまへ、うんがのごとくまちゐたり、されども樽次、ものゝかずともし給はす、しゐふせ〳〵、とをり給ふはどこ〳〵ぞ、すけすかほのぼつと、きたみいづみせたがへ、めぐろしぼやなどゝいふ、なんじよ〴〵をうちすぎて、あを山しゆくにつき給へば、秋の日のならひとて、ほどなくくれわたり、いぬのこくばかりに成りにける、此の宿の人々も、酒ばやしおつ立、まちぬるていには見えけれど、折からそらもかきくもり、目ざすともしらぬやみの夜なれば、とをり給ふをしらずして、とがむるものもなかりけり、こゝに樽次おぼすやう、たゞ今こゝもとを、あんないなしにとをるならば、宿の者にをそれて、夜にげにしたりなんどと後

日のひはん、家のきずとぞんずれば、なのるべしと思召し、とあるきど口にこま引きすへ、大をんじやうにて、大つかに地黃坊すみけるとは、かねて聞ても有らん、今はめにも見よ、今度いけがみにうちかち、其上道中のあぶれもの共、こと〴〵くおつぷせ、たゞ今こゝもとをとをる也、われと思はん人々は、出よくまんとよばゝり給へば、しゆくのものどもこれをきゝ、ぐにんなつのむし、とんで火に入るとは是とかや、にがすまじといふまゝに、たいまつおつ取り、うへを下へとぞさはぎける、中にもさいかし原の、弟六弟八とておとゝひ有けるが、たるつぐを手取にせんと、まつさきかけてはしりよる、樽つぐ御らんじて、きやつばらはおこのもの、ちかふよせてはかなふまじ、のみすてにしてくれんとて、れいの大さんとつて引うけ、しばしたもつてとばせ給へば、あやまたず、まつさきにすんだる、弟六がのどふえやぶつて、つつとぬけ、うしろにひかへたる、弟八がどうなかにこそとまりけれ、いづれもいたみなれば、ゆん手めてへたをれふし、ぜんごもしらで見えにける、宿の者どもこれをみて、かなふまじといふまゝに、村々へさつと引きにけ

る、その間にたるつぐは、こまにふちをすゝめつゝ、大塚さしてかへりたまへば、此のゐせいにやをそれけん、きせんなんによをしなべて、日々夜々に參りつゝ、いねうかつごうするほどに、たるにたる、やなにやなかさなりて、はんじやうし給ふ、くわほうのほどこそめでたけれ、

そも〳〵此のそうしを思ひたちぬる事、ちかくの山里にわれをしる人ありて、くすしなどに行かよひ侍る折々に、しゆえんにあそべる友だちをひとりふたりいざなひて、かのさと人と敵みかたをわかち、あさゆふあらそひのみしを、いかなるつてにや、さる玉だれのうちに聞えしかば、そのたはぶれのしな〴〵を、きかまほしくおぼすよしきゝしかど、人づてならでいふよしのなければ、かずならぬ身とおもふこゝろをたねとして、よしあしのことの葉をもしほぐさにかきあつめ侍れば、なにはものがたりとも人のいふべきかは、

三月吉日

水鳥記卷之下終

松會開板

あだ物がたり序

平　爲　春

此上下の物がたりは、予がいにしへこゝろざす事ありて、人やりならぬ道にいでゝ、野べ山邊とゆくりもなくたどりゆくに、ころは春まつ月のはじめなれば、夕風はげしく、そらかきくもり、袂もさへまさりぬれば、ある山里に草のまくらをむすび、夜もあけがたにしきすてんとせしに、ゆきこぼすがごとふりいでゝ、けふことにやまず、さらぬだに旅泊は、物がなしきならひなるにといひつゝ、日をゝくるに、宿のあるじのゆかりとて、老饒ひたる人ありしが、我年月をかさね、聞傳へし物がたりどもあれば、をちかた人をなぐさめんとていで侍り、此の翁のよはひをおもふに、かのうら島が玉くしげ、あけてくやしかりし、身のゆくゑもかくやありけん、さて四方やまの物がたりしけるが、國ぶりとや言のしなもかはり、おもしろかりければ、けふも〳〵ときゝしに、やまとしまねよりはじめて、こまもろこししらぎくだらの事までものこるまじく、すべらきの代々をかさねてかたりしよつぎのおきなも、これには過じとおぼゆ、耳なれぬ事のみいひしなかに、わきてあやしきは、さる國のかたはらにて、諸鳥どもの中に、かゝるめづらしき事ありつるとかたり出し侍べり、まことしからずおもひつれど、神代には有情非情、みなものをいひかはし、又人のよとなりても、雪山の鳥は夜明造栖となき、鹿苑のしかは國王にちかづき、諸鹿のいのちをたすけんことをうつたへ、多舌魚は漁父にかたつて、あまたのうろくづをころし、春日のほとりにすむなる蟻と蛸は、たがひに我なのいはれをたづね、妙色の蛇は、獵師にあふて、こころさるゝ時にのぞみて、我に大力あり、なんじを害する事いとやすけれど、一日の戒をたもつゆへにゆるすといへり、これのみならず、鳥けだものの言をかはし、歌をよみつるためしおほし、ことさらいもせのなかの、ちぎりふかきことは、人倫にかはらざれば、うたがふべきにもあらずと、しばふる人のことばを、のこさずかきとゞめ、年月はうちすてゝをきつれど、我もとしたけよはひかたぶきぬれば、この世のながらへ、ほどもあらじとおもへば、寵愛の童女のてすさびにも、またはなからんあとのかたみにもなさば

やと、こゝろざして、卯月五月の雨のつれ〴〵に、しるしをきつることぐさを、かきあらため侍べり、始終寓言のごとくなれば、なづけてあだ物がたりとやせん、まことに水のあはれなることはりなり、須磨のあま人にはあらねど、さへづりしおきながことに、したがふ鳥のあとなれば、たゞしからであやまりのみならん、後見ん人の添削を、くはへたまはん事をねがふばかりなり、

あだ物がたり上卷

平　爲春　作焉

ときはいつにかありけん、ある國のかたはらに、けうとき山のしげき中より、ながれ出でたるたに水あり、野澤におちあひて、すゑは入海につゞけり、こゝかしこみなと田などもありけれど、今はかへすとも見へず、けふりは山舍のかくれあらはせども、人のかよひはまれに、物しづかなる所なれば、あたりの鳥どもあつまりて、春の日のつれ〴〵に、つばさをならべて、物がたりをぞはじめける、その中に鵯といへる小鳥あり、野寺山寺の螢雪の窓のまへ、又は法問論議のとぼそぢかき、木ずゑにすみなれ、儒釋道の文のことはりをも、あらましおぼへ、又は風雅の道にもたづさはり、もとよりかしこく舌とき鳥にて、すゝみ出でゝいひけるは、何とやらんいまめかしき申條にて候へども、此世のあだなる事は、屠所の羊の無常の道をあゆみ、電光朝露のごとく、朝菌は晦朔をしらざるにことならず、朝がほの夕べをまたず、ひをむしの一ときを

期せざるににたり、惠心僧都のながめにも「後の世ときけばとをきにゝたれどもしらずやけふもその日なるらん、といへるを思へば、誰とても無常をのがるゝ事なし、ことに我等などは、わかき色力のつよからぬものなれば、ひはといふ名の字をさへ、よはき鳥とかけり、このひはといふ名には、無常をわするゝことなし、そのゆへは、きのふの日はくれ、けさの日はのぼり、ひるの日はめぐり、夕日はおち、あすの日はけふにことならじと觀ずればなり、未來のためをおもへば、よき名をもちたるゆへ、刹那生滅の理にもとづきぬと、よろこぶはかり也、遲速はあれど、ひとりものがるゝ道ならねば、たかきもいやしきも、たへ〴〵にしたがひ、この世にあらんうちは、えならぬあそびをももよほし、心をもなぐさむべき事なりといへば、むれゐたる諸鳥ども、げにもと思へるおもゝちにて、かの右馬頭があま夜の物語の時、中將うなづきしありさまにて、ものもいはず、時刻うつりゆけば、その時ものしりがほなる小雀、あまたの中をおどり出て、ひはのことばをぞなんじける、

さて〳〵此世のあだなる事につき、色々の御物がたり、耳をおどろかす計なり、ふるなの辯をからずば、まなぶにかたかるべし、さりさがら、我等無才ぐあんの身ながら、內裏仙洞、又は四道の儒者出身のみなりと、大學寮のあたり、其の外諸寺の勸學院の軒端などをすみかとすれは、內外典にわたり、智者碩德の物がたりをも、少々聞きおぼへ侍れば、うたがひはさとりのもととやらんいふを、たのみて申計なり、萬の事に惣別の二あり、今日諸鳥を御すゝめ、しな〴〵別すれば、本說本歌敎內敎外にわたり、惣すれば、無常をすゝめてたのしみをきはめよといふ事也、此儀さらにしんじがたし、三藏敎にはもつぱら無常の觀をあかして、後世をいさめ、無相の空にいたらしむ、いざとよ無常をすゝめ、貪欲をおこせといふ事はとなんずれば、その時ひはゝ、おどろきたるけしきにて、座をたちなをり、すこしも我まんのこゝろもなく、御ふしんの條尤きこへ侍り、但大論幷に摩訶止觀にも、欲のつりばりをもつて、機をすくふとのべて、どんよくすなはち道のもとなりといへり、さて又人の世にも、もろこしのいにしへ、かんたんの旅亭のあいやどりにて、ろせいがこゝろに貪欲のあるを、呂翁さとりて、名利

をはなれさせんがために、持たるふくろの内よりも、一の枕をとり出し、是を枕にしていねたらば、ねがふ事かなふべしといへり、盧生をしへにまかせてふしたれば、黄粱一炊のあひだみつる夢のうちに、五十年の榮花をきはめて夢さめぬ、其時ろせい、貪欲の念をひるがへして、人間百年の樂しみも、今みつる夢にことならずとさとりて、即時に名利をはなる、かやうの先蹤もあれば、たのしみつきなば、後はぼだいに、心ももとづかんかと思ふなりといへば、もとより智惠かしこき雀なれば、すなはち尤と、こゝろをおなじうし、ありがたき善知識なりとほめて、さらばめづらしきあそびをもとめばやといへば、かさねてひはのこたへけるは、雪月花のもてあそび、詩歌管絃などは、よのつねのことなり、是より北にあたりて一の山あり、木だちゆへありて、ゆほびかなるところに、てりうそぎみとて、毛いろもかはり、此世にはにげなき程のひめ宮おはします、かたちをほめんにことばたらず、さへづり給ふ御こゑなどは、頻伽かい子にありて、こゑ衆鳥にすぐれたりといはれし鳥も、はぢらひぬべく聞ゆ、品を申さんには、天てる大かみの御すゑなれば、照の字をいみなにて、てりうそ姫とぞ申しける、たつ田姫といはんにもつきなからず、七夕の手にもおとるまじく、中にも琴ひき給ふ事、世にたぐひなし、いにしへの花陽夫人のつまをと、伯牙絃をたちしげんのね、としかげがあすらよりつたへし琴のひゞきも、けをされんやうにおぼゆ、あしがきのまぢかきひゞきをきかんは、おほけなき事なり、たゞ心々にしたがひ、一首の歌を參らせ、御返事をも見給へかしといへど、歌にたへざるかたはうけひかざるけしきを見て、又ひはのいひけるは、古今のじよに、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりけるといへり、花に鳴くうぐひすは、此座にゐ給へば言をのこし侍り、水に住む蛙とは、昔し壹岐守紀良貞といふ人、住吉にまふで、わすれ草つめる木陰に美女一人たてり、良貞けさうしければ、かさねて爰にきたまへ、あひ見んとちぎりて、かたみにたちかへりぬ、又の年おとこゆけど、ありし女もみへず、おりしも砂のうへを、かはづの前わたりするあとを見れば「住吉の浦のみるめもわすれねば、かりにも人に又とはれぬる、といふ歌のもじあり、此時、さてはありし女も蛙にてありつらん

と、こふる心もやみけるとなん、かやうのためしを思へば、心の淺深ありて、難波津の道のよしあしはありとも、歌よまぬかたはあらじ、姫君の睦じくし給ふ、山がら、こがら、日がら、しゞうから、などいへるごたちのうちを、中のつかひとたのみ、いすかのつぼね、ましこ、かやぐき、などいへる、御そば近き衆、此外ちいさき衆もあまたあれば、それまで云つたへたまふべくや、又この君はげいのうにくもりなく侍れば、したしみ給ふとりぐ〵までも、よのつねのかたならず、まことににるを友とするのことはり也、ましてかき御方なれば、めんく〵の由緒をも、ほにいで、いひつたへ給はじといへば、おのく〵此儀いみじしとて、すみかく〵にかへり、しなぐ〵の歌をぞおくりける、中にもあとりは、そさうにけやけき方にて、なにの思惟もなくまづよめり、

猶子鳥

君をおもひこがれぬる身をむべしこそ
　火にくばれるといひつたへけれ

とよみて、山がらのごたちを賴てやりけれど、うそ姫何とかおぼしけん、とりあげもし給はず、

雲雀

物おもふ床にはふせどあだし名は
　たちて雲井のひばりとぞなる

とよみて、せみもほたるも、我身のうへといひて、日がらの小君を、たのみてぞやりける、君をはじめたてまつり、をのく〵見給ひよき歌なりと思へるけしきなり、

瑠璃

うそ姫のたから物とはならずして
　金銀瑠璃の名をくたすかな

と書て、四十からのふるごたちへ見せければ、やがて姫君の御まへにて、ましこ、かやぐき、などもほのみて、狂歌なれどおかしき歌なりと、さゝめきけり、

尾長鳥

君ゆへにこゝろ見だれて玉のをの
　ながきちぎりを結びこめばや

と書きつらねて、山がらしてぞをくりける、姫も面白さうに見給ひしかど、かへしはなし、

目白

めはしろくなをなるとても願くは

君をおひてにをしもあはゞや
とて、さのみよそめをつゝまぬふせひなるを、つかひの日がら、取かくしてもてゆきけれど、あらおそろしやと、の給ひたる斗なり、

鶯

梅に宿り櫻になるゝあさゆふも
君をこひつゝなくばかりなり

とよみて、我身のむかし、いやしからぬ事をも、ことに出て、

鶯はいなかのたにのすなれども
だみたるねをばなかぬなりける

と歌人ものたまへど、我はものを思へば、聲のいろさへかはる許なりといひて、四十からのおもとにぞわたしける、姫君例のうけ引し給はず、使の云けるは、是はいにしへ、孝謙天皇の御代に、大和の國尊天寺に住む僧の、最愛のうつくしき童子ありしが、ほどなくみまかりて後、三年の春、童子、鶯となりて軒ばの梅にきたり、初陽毎朝來不相還本栖となきぬ、是れを文字にうつして見れば「はつ春の朝ごとにはきたれども、あはでぞかへるもとのすみかに、と云歌也、かの童子の再誕にてましませば、先祖もなみならず、古人も、鶯の聲に誘引せられて花の下にきたると云、又は花中の鶯舌は花ならずしてかんばしゝ、などとほめたまへり、かゝる御かたに返しなくてはといへば、姫君「梅にこひ櫻にわれをしたひなば、花より後はわすれもやせん、との給へり、

佛法僧

かくいふは岩木なれども、われは未來の菩果の身をあんずれば、佛道の心がけのみにて、歌などよみたる事はなし、知をばしれるとし、知らざるをばしらずとせよ、これしれるなりと儒書にもあれば、歌のことはしらぬよし、ありのまゝにいひて、姫君へは、つかひの口上にのみたのまんかとあんずれば、佛神のめぐみにや、ふとこゝろに、三十文字あまりのことの葉、うかぶをさいはいと書付て、使にぞわたしける、

三法のみなを唱へし御りしやうに
まづ思ふことかなへたまへや

とよめるを、いすかのつぼねみて、口つきのなをからぬやうに、心もさがなくていひけるは、此鳥はほうけづきて、君のせなとは賴がたし、されども四諦の名ば

かりさへづる鸚鵡、なを天に生ずといへり、いはんや三歸をとなへば、いか許ありがたく思ひしに、さては後の世を此世にねがひかへて、いろをこのめるや、南無三法惡心やといひて、わらはれけり、

鳴

君が身にかさもあれかしあかつきの

鳴の羽ねがきもゝ夜かゝまし

とて、歌のことばしらざりければ、鳴たつさはのあさきやうなれど、おもふ心はふか田よりふかしと語りて、よしあしは使のいひなしならんといひて、わたしけるを、みな〳〵聞て、あかつきの鳴のはねがき百はがきとよめる、古今の歌の俤なれば、なみ〳〵のとりにはあらじ、たゞしよきかきてにはありとも、君の身にかさあらせん事は、ものかなしき事なりといひて、うち置給ひぬ、

烏

君があたり躍りまはりてあはゞやと

こゑなきからすこともはづかし

といひて、我ながら口惜きは、鵲は吉語をつたへて、いづくんぞしづかなる事をえんやと、古人のいひしごとく、人の上の吉事をばしりて、むら〳〵里々をなきどよめども、我身のうへの善惡をしらず、此思ふ事叶ひなば、いちはやくしらせ給へと、山がらを以ていひけるを、姫君聞給ひ、此鳥の物いふ事、まことしからず、古き歌にも「からすといふ大をそ鳥のまさてにも、きまさぬ人をころくとぞなく、といひて僞のゝみ有鳥なりとの給ひけり、さて使のいひけるは、妄語綺語惡口兩舌は、欲界の衆生のならひ、とがにてとがならず、又いにしへを思ふに、六國のことかとよ、夷國より五天の鳥來り、二の翅のあひだに黑き玉を持ちて、日の光をくらまかす、此玉を取て、後重寶とす、秦の始皇の渡角烏玉玉鉾のみつのたからのその一つなり、此玉をうば玉と、歌人もいひならはせり、これらもからすのふしぎなり、其上烏に反哺の孝ありとて、親に孝行をなし、道を道とする鳥なり、あさがらす友からす、夏がらす村がらす、こもちがらす二つがらす、夜がらすうかれがらす、此外にもあまたしなある中に、これは妻をえらび給ひて、いまだやもめがらすにてましませば、みこゝろをかるべきにもあらず、まづ一筆の御かへしをばたび給へといへど、すがたの

餘りくろみ過て、こち〳〵敷とや、きらひ給へり、

駒鳥

空をとぶ我はこま鳥君をのせて
足なみはやくたちかへらばや

鵯

夜もすがら君をこひぬるひとりねに
身のひへ鳥ときらはれやせん

とよみて、われながらいやしき身なれば、なさけの道をたのむばかりなりと、つかひのきげんをとりてぞつたへける、

鵄

おきもせずねもせぬ床の明がたは
とびたつばかりものおもふなり

とよみて、我は此體にても先祖いやしからず、第六天の魔王の末孫なりと、くわしくかたりて、ふかく山がらをたのみてつたへけれど、すがたのふつゝかなりとやきらひ給へり、鵄此よしをとくにさとり、山がらをよび付、目をいからかし、したゝかにはらをたちていひけるは、よの小鳥のかたへさへ、一度の返歌はありしに、我をばあなづり給ふや、重て此歌をまいらするに、又かへしなき物ならば、うそ姫をはじめて、みな〳〵をも、はからふ旨ありとて、

くちおしややがてまどうへ引おとし
うさもつらさも思ひしらせん

といひてぞわたしける、山がらことのほかおどろき、いそぎ姫君へまいり、やうすをのこさずかたり、此鳥は魔王の御末なれば、あさはかにしたまひては大事なるべし、大論には四種の魔をあげ、罵意經には五種の魔あり、楞嚴經とやらんには、悲魔狂魔憶魔知足魔常憂愁魔好喜樂魔空魔欲魔とゝき給ひ、日本にも、あたごの山の太郎坊、ひらのゝみねの二郎坊、するがの國の富士太郎、大山の伯耆坊、白峯の相摸坊、ひこさんの豊前坊、飯綱の三郎などいひて、國々山々嶺々に魔類のおほき事、さばいなす神のごとく、此鵄のきにちがひたまはゞ、いかやうなる天魔波旬のしやうげかあらんと、おどしければ、うそ姫はあきれはてゝ、歌の思案もなき體なれば、いすかのつぼね、ふるひふるひぞよみける「魔道へはひきなおとしそ引おとし、うそ姫君といもせともなれ、といひやりければ、すこしはきげんなをりけるとなん、

鶉

あひ見ずばうづら衣をふか草の
　　野べのさくらの色に染めまし
と口ずさびて「野とならばうづらとなりてなきおらん、かりにだにやは君はこざらん、とはきけど、君にとはるゝ事もなきと、うらみてぞおくりける、

火燒

いつかさて祝言をしてうそ姬の
　　食のひたきとせめてならばや
と口ずさびて、われながらよからぬ名をもちて、むねのおもひをさへ燒そへぬると、ひとりごちければ、姬君も聞たまひて、哀と思へるみけしきなり、

喚子鳥

よぶこ鳥よべどもこぬはかよひぢの
　　中になこそのせきや有りけん
とかきしたゝめ、つかひに持せ、こがらのやどへぞやり給ふ、やがて見せ參らせければ、姬君、これは和歌の三鳥とやらんいひて、なだかき方にて、おとにはきけど目には見ずとの給へば、いすかましこかやぐきも、おなじやうにぞいらへける、こがらは御つかひなれど、直に御文をとらざれば、いかやうのみかたちともしらず、たゞし世の中のとなへには、かほ鳥とも山鳩ともつゝ鳥とも、又は猿ともいひ、鹿ともいへり、いづれを正說と云べきにもあらず、萬葉に「朝霧にしとゞにぬれてよぶこ鳥、御船山より鳴わたる見ゆ、古今には「遠近のたづきもしらぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥哉、などよめるとはきけど、さらにはかりがたき事、たゞよぶこ鳥といふ鳥こそあるらめと思ひ給はゞ、むづかしからじといへば、姬君も、きやくしんにやおぼしけん、かへしはなし、

鵁鶄（かしとり）

君をしも旅にやらばや行みちの
　　宿かし鳥となりてとはれん
とはよめど、つたへんたよりもなし、我はさのみ物をばしらざれど、諸鳥の口まねをする事にえてたれば、ゆふやみの道たど〱しき折から行て、つかひの山がらこがらの口まねをして、此歌を直に姬君に參らすべし、但し古しへを思つゞくるに、孟嘗君が千狐の裘をもちしに、秦の照王のこひ給へば、おしみて齊の國へにげさるに、夜ふかくしてかんこくのせきあか

ず、伴なひ行く三千の人の中に、鷄の口まねするものありて、あかつきをつげければ、即關の戸あきて、さはりなく本意をとげけるときけば、我もこれをまなぶべし、たゞし夫にはかはりて、ゆふまぐれに山がらのねははかるとも、君にあふ坂の關をばゆるさで、そこつなるとのいのものなどに、うちたゝかれなば、にがくしきありさまならんと、思ひわづらひたるけしきなり、

鵯（つゝどり）

うそ姫をよそに見せじと筒に入れて
　　おなさけをのむさかづきもがな

とよみて「これも又さすがに物ぞ哀なる、かた山かげのつゝ鳥のこゑ、と歌人ものたまひしときけば、あはれみ給ふやうにといひて、使を頼み侍り、

神鳥（しと）

雨とふる涙にしとゞぬるゝ日も
　　胸のおもひはきゆるともなし

と口ずさびて、事すくなにてやりけるも、又おかし、

雀

われはたゞすゞめなれどもうそ姫と

いはひするめの名にもかへばやといへば、使も此鳥の事をば聞及て、姫君にかたりけるは、勸學院の雀は蒙求をさへづるとて、才智世にすぐれ給ひぬ、なをさら歌よみ給ふ事は、和國の風俗なればたどり給はず、此御歌も六種のしなたかく、ことえりをもしたまはんずれど、君の御返歌もむづかしく思ひ給はぬやうにと、狂歌ていなるもこよなき事なり、又はいにしへ實方の中將、奥州にてみまかりしに、其こんはくも雀と化して、内裏へかへり給へり、かたくいはれ有る御方なりといへば、ましこかやくきおなじことばに、よのとわざとよ勸學院の事は、むかし大内裏のとき、公家の學匠たちあつまりて、談義せらるゝ所なり、其下部の人の名をすゞめとはいふ也、又諸寺にも勸學院は有べし、まことの雀の蒙求をさへづるといふ事、しんじがたしといはれて、使はあまりにほめ過して、むづかしきめにあひぬる事よ、たとひ此なんをばいひわけたりとも、さはりとなりて、歌のかへしなくては、ほいなきことなり、いかゞせんとあんじたるばかりなり、

鶫（つぐみ）

我は歌よむ事もしらず、えんなるかたにも心ゆかざれど、このたびこのかずにいらずば、猥藉物とて、とりどりににくまれんもかなしければ、歌をば友鳥をたのみて、

おほけなき君とはしれどおもひつく
　みのおとろへをなにとかはせん

とよませて、わが歌のやうにしてぞやりける、心にもそまぬこひぢにたどるも、又おかし、

伯勞鳥（もず）

いにしへのもずのくさぐきあだなれど
　あだなるせめてちぎりばかりも

とよめりければ、うそ君此歌の心わきまへがたしとの給へば、使のいひけるは、これはいにしへ、さる人の野なかにて、ひとりの美女にあひてなまめきければ、女のいはく、あれなるもずのいたるくさぐきのとをりにわが家有り、かさねてとひ給へと、ちぎりてわかれぬ、又の年ゆきてみれど、草ぐきもなしいゑもなし、女もなくてむなしくかへり侍りぬ、これによりて草ぐきをば、あだなるちぎりによみならはせり、たゞしそれは、直にことばをもかはしつるまゝ、せめてそのちぎり程なりともと、おもひあまりたることの葉も哀ふかし、此外もずの草ぐきとは、時鳥のくつでのかはりに、草ぐきに虫などさしてをくをいふと、いろいろのせつ有、とかくいはれある鳥なりとほめければ、おのおのの給ふは、くつでのいはれは、もずのためにはよからぬ事なり、又伯勞饒舌なれども代にとはれずと、詩人もいひ置く、よろづの鳥の口まねなどをばすれど、みちにたつことをばいはざる故、人にもとはるゝ事なきと聞きつたへり、あまり口きゝにて、心もおさおさしからじとそしり給へば、使もおもなげにてたちぬ、

鶺鴒

世にしられればおもなき事なれど、我はついに歌といふものよみたるためしもなし、よまずば諸鳥にいやしめられんもくちおし、されどもおりふし人家へたちいで、かきほのすきま、ついぢのくづれをかよひぢとなしてあるけば、世の中の物語などは聞おぼへ侍り、此國は和國の風俗とて、伊弉諸伊弉册尊、あまのうきはしのもとにて、いひかはし給ひしことの葉よりおこり、素盞のおのみこと、出雲國簸の川上のおろ

ちをたいらげ給ひてのち、八雲たついづも八重がきとやらん、いふ歌をよみ給ふときけば、和光はおなじ御事なれば、三千七百三十よしやの神々も、歌をばよみ給ふべし、いづれの神をかたのみ奉り、歌を一首よむやうに祈らばやとあんじけるが、我は惣別みぞかはのほとりをこのめば、日本の俗語には、溝に三年住といひならはし、名の字をさへたがへて、溝三歳とかくときけば、定て水神も我をばよき友とやおぼすらん、よそまでもなし、此水主のかみにいのらんとて、水中に石のあらはれて、たかきところをしやだんとさだめ、竹のおち葉を榊ばとなぞらへ、さゞれ石まの波をしらゆふと觀念して、あまたゝびぬかづきければ、くたびれやしけん、すこしねぶりぬれば、まぼろしのやうに、

こひのやみてらしたまゐやてらさずは
神のゆかりの名をやくたさん

と示現し給へば、なのめならずよろこび、わすれぬさきにとて、まづかきとゞめ、みづからもちゆき、時の奏者に見せたてまつれば、よのつねの飛脚などのやうにこそ思ひつれ、さて珍しき艶書のおくりやうかなと、わらはれけり、

鵤(いかるが)

にくからでそら腹たつをいかるがと
思ひても又なびきもやせん

とつゞけて、われながらすがたも、よからぬとやおもひけん「かたちこそみやまがくれのくち木なれ、こゝろは花になさばなりなん、といひながら、つかひのきげんをとりてぞやりける、

燕

をかばやと我いゐつくるかべぶしん
ぬるまも君をわすれやはする

とよみてやりけるを、をの〳〵見たまひ、これはこの國の鳥にもあらず、他國よりかよひ、たびのすまひなれば、つばめは居舍なくしてけいしいそがはしゝと、詩人もの給へり、家もなくて、あやなのたはふれ事やと、わらはれければ、つかひのやまがらの云、つばめは社日をしりて辭してさるとて、日本には二八月の戊戌戊申の日、神へ五穀の成じゆくをいのり、もろこしにては、兩親のれいこんをまつる日なり、この社日をしりて往行する故、神の鳥といへば、神慮のおそれ

もあり、そのうへ、とこよの國よりかよひたまへば、なをはづかしきことなれば、御返しばかりはしたまへといさめけれど、御心ゆかざれば、せめて御かたの返歌なりとももとて、山がら「ぬるかべのひぬまにあはばせばしとも、我ゆふがほのやどをかさまし、とかきて、たよりをまちてぞやりける、いかゞ思ひたまふらん六かし、

鳩

我身はいやしけれど、かたじけなくも八幡の御使者として、男山に住みなれ、わきて人にもあがめらるれば、よそのきげんをとらんとはおもはねど、戀路のならひにて、中だちのきをとり、あらましうそ姫へかこちけれど、いなせもなきは、くちおしと思ひながら、

我をなみの男山とやおぼしめす
　おなさけなしや弓矢八幡

とやりけるを、うそ姫見給ひ、たび〳〵の御心ざしかたじけなけれど、此鳥の心たのみがたし、そのゆへは雨鳩婦をよび、せい鳩婦をおふとて、雨の時はつまをよび、はるゝ時はをひやらひたまふときけば、むづかしきいもせの中ならんときらひたまへり、使のこがら、御言ばさる事なれど、八幡の御ちかひに、他の國より我國、他の人よりは我人とあれば、いか許鳩をば大切におぼしめさんに、おろそかにし給ふこと、まづ神慮もおそろしきなり、其上此鳥は鷹より心たけくまします、その故は、いにしへ出羽國平賀、內裏へ鷹を奉り、其鷹のおやを、あとにして鷲がとりころしけるを、かの鷹都にてしりつゝ、すなはちはなれて、八幡山へゆき、鳩をつれだちて出羽へくだり、ほどなく親のかたきをとり、又都へたちかへりければ、鳩やの鷹とぞめされける、此心を「いではなるひらがのみたか立かへり、親のためにはわしもとる也、とよめり、此たかも、鳩の力をたのまずば、かなひがたき事也、これ程たけき鳥の、きにちがひたまはん事、おそろしくといへば、姫君をはじめ奉り、みな〳〵あんじわづらひたるけしきなり、

雉

うそ姫のけん〳〵とするふりならで
　ほろりと情けかくる日もがな

と詠じてぞおくりける、例の見る事をもきらひ給へり、いすかのつぼねは、いにしへ今の事をも聞おぼへ

ければ、いさめをなして、これは神代に、天上より天稚彦のもとへ、名なしの雉とて、御使にくだりし、其鳥のすゑ〴〵にてましませば、いやしめ給ふべきにもあらず、女には三役とて、さかんなる時はおとこにしたがふ事その一つ也、いかんとしていづれのとりどりをもきらひ給ふやといへば、姫君、中々になれぬむかしのまゝならばといひ置しごとく、たがひにみもしみえもして後、えにしあさはかにてすてられるは、いかばかりくやしからましとの給へば、又つぼね云けるは、御こゝろざしのほど、まことの賢女にてまします、貞女と云も兩夫にこそまみへざらめ、いづれにてもひとりへはなびき給ふべき事也、其上婦に七去ありとて、すてらるゝに七つの品あり、それも今のみこゝろのなだやかなる上にゝなをたしなみ給はゞさはりはあらじといさめけれど、うちひそみてゐ給へり、

鶸(ひは)

偖いつ比、みな〴〵まとゐし給ひし時、はかなき口にまかせ申せし事を、いしうやおもはれけん、とり〴〵にうそ君へ歌をおくりたまへど、返しもなきやうにきゝ侍り、われ又おなじやうにては、くちおしき事なれば、ふりをかへてかこちよらば、かへしも有べし、そのゆへは、いにしへ伊勢の齋宮にて、さかづきのさじきに、かち人のわたれどぬれぬえにしあれば、と書きていだし給へば、又あふ坂の關はこえなん、とつゐまつのすみして、歌のすゑをかきつけられし、そのおもかげをしたひ、發句を一つまいらせば、わきの句のなき事はあらじとて、山がらを使にて、發句を書きてをくられければ、すなはちもち行きてこれ〴〵見給へとて、ひらきていひけるは、智恵かしこくまし〴〵て、歌を參らせば、各なみに御返歌あらじ、前句ならば、つけ給はぬ事はあらじとの、御はからひと見へたれば、ぜひともわきの句し給へといひぞしけれども、うちそばみはぢらひてゐ給へり、つぼねをはじめ、使のことはりげにもとやおもはれけん、さらば姫君わきをし給へ、御そばにゐ侍るもの共も、よしあしはしらねど、一句づゝは付て見んといひて、おの〴〵あんじ給ひける、おましのけはひしづかにて、まことに春めきけり、

見よやみんひはいつごろぞ花ざかり　鶸

うそむく月を春の夜のとも　鶯(うそ)

長閑なるつぼねの簾まきあげて　鵤局(いすかのつぼね)

露もかすめる庭のかやぐき　鵽(かくき)

雨はふりましこのはねもぬれまさり　増子(まこ)

とつらねて、かきをき給へり、ひがらこがら四十から

などは、えんきゝしておもしろさうにてゐたりける、

中に山がらは使なりければ、是をとりてひはに見せ

ければ、よろこびて吟じけるが、俄にけしきかはり、

そもじは此句どもをば、何と見給ひたるや、世の中の

連歌といへるも、大かたは祈念にし侍り、此句どもに

て君と我が中をうらなひみるに、いづれも大不吉の

句なり、先わきの御句に、日を春の夜の友とあそばす

は、我をば月花の友にはいやとの御心也、又つぼね第

三の句に、簾を卷あげてといへり、月をばすだれを上

て見るとも、戸をば指かためて我をばよせじと云心

也、又四句めに露もかすめりといへり、此頃の物思ひ

の涙の露に、めもかすみてかなしきに、庭のかやぐき

にまで、泪の露のをくやうにとや、あまりなる事也、

又五句めのぬれまさりの句も、ふりましごとをなを

もいひそへ、よきやうになれど、涙の雨のふりまさる

體にきこゆれば、是もあはぬ戀のこゝろにて、いまい

ましき句どもなり、とかく我をばみうちの衆までき

らひて、のろひ給ふと見へて、あさまし〳〵と云て、

あしずりをしてなきけるも、又哀ふかし、

　鴷(けらつゝき)

名にしおふかひこそなけれ君にあふ

　　たくみはならぬたくみどり哉

とて、さのみ物もいはず、思ひ入たる體にて、使をた

のめば、例のいすかのつぼね、口さがなくて、此鳥は、

よとともにひまもなく、こゝかしこの木をつゝきな

らし、名をさへたくみ鳥といへば、鳥の中のはんじや

うなり、木のみちのたくみは、よからぬわざなりとい

やしめ給へば、使の日がらのいはく、さやうにかろし

め給ふべきにもあらず、百官の內にも、內匠頭相當從

五位上大夫諸道五位等これににんずといへり、木工

頭は直に鉞(をの)をも取るやくなり、これは內裏の御作事

などをたくみて、そうもんする官なりとほめけれど、

御氣にやいらざりけん、かへしはなし、

　鵰

おもへどもへだてらるれば君が方に

よるとなくなるかひやなからんと詠じて、我先祖、胡國よりたまづさつたへしより此のかた、文の使にはなれど、やる事をばしらず、たゞしゝめじが原とさへおもひたまはゞ、よの中にあらんかぎりはたのみ奉らんと云てぞつたへける、日がらもち行て、君に見せたてまつれど、御けしきよからねば、禮義たゞしくましまます御かたに、御かへしなくてはいかゞとすゝめければど、いなせもなければ、つかひ「たまづさのかへしのあらばをそしとも、よき日がら見てとりもつたへんと、詠じて我歌としり給ふやふにとや、名をもよみそへてやりつゝ、いかゞおぼすらんとあんじたりけり、

君をこひておとろへぬれば山鳥のおろの鏡は見るもはづかし

とよめるを、四十から取傳て、見せ參らせければ、皆皆の申給へる、此鳥とのえにしよからぬ事也、夜は妻と山の尾を隔てやどり、おりふしをのが尾をまるくなし、妻のかたを見やりて、妻のおもかげの見へける時鳴くを、山鳥のおろのかゞ見と云ふときけば、うとうと敷いもせの中にて、いやなる事也といひすさびぬ、さて使のこたへけるは、いもとせの中のしたしからぬ鳥は、定てたがひの心もち有べし、さありとてなみ〳〵の鳥には有べからず、そのいはれは、六國に鸞といふ鳥有り、此事を或書に雉ににたり、見則天下安とかけり、此鸞、鏡を見て鳴舞事たへなり、是によつて鏡を鸞鏡といへり、又太政官のから名を鸞臺といへるは、此鳥のごとく我身を鑒て、まつりごとを天下にふる舞給ふべきとの事也、山鳥又雉ににたり、これも鏡を見て鳴し故事あれば、唐にての鸞、我朝にて山鳥なれば、おろかにおもひ給ふべからずといふを、いすかはものもいはず聞てい給へり、此つぼねはくちつきのかたはなるゆへか、そうべつ、かゞみを見る事をきらひ給へり、我きにあはぬ事をいふとやおぼしけん、俄にけしきかはり、四十からをにらみて、そも鏡とは何事ぞ、鏡を見たとて俤のよくなるにもあらず、さひ〳〵くもれば、とがんとするもむづかしゝ、水かゞみなどは、のまんとてよれば向はでもかなはぬ鏡なり、又はつ春のかゞみのもちなどは、しよくもつなればきらふべきにもあらず、此外のかゞみはい

らぬものなり、なんぞや山田山畑のあたりにつもるちりあくたの、其中をくゞりまはる山鳥がぶんとして、いらぬかゞみとのたはぶれ事やと云てしかられけり、其時四十から、はらたゞしくなりて、われはいすかのつぼねにあしくいはれんすじめもなし、そのうへ名より年たけて、いそぢにをよび、よそのきゝもあしきやうにのゝしられ、ざ敷をたゝんもおもなければとて、ゐなをりけしきをかへていひけるは、さてさて只今御物語のこさずうけたまはり侍れば、姫君の御つぼねには、にあはざるこゝろをもち給へり、ただしかゞみのいはれをしりたまはぬときこへたり、しらざる事をばならひ、一字はむもんのしとなれと云事あれば、あらましをしへ參らすべし、まづかゞみの名は、まるかゞみあさかゞみなどいひて、和漢ともにもてあそべり、又五月のかゞみは百錬鏡とて、船中にていたるかゞみなり、このこゝろを「えにつなぐ舟のなかにてむかしたれ、みがく五月のかゞみなりけん、とよみしもいはれある事なり、なゝつごのかゞみは、くだらの人のみことに奉りしかゞみなり、野守のかゞみは、むかし雄略天皇の御かりし給ひし時より、ことおこりて、野にある水を、はしたかの野もりのかが見と云り、又徐君が鏡は人の心のうちをてらせば、世の人こぞりてほしがりければ、わか持とぐる事ならじとや、つかのしたへうづめるを、野守のかゞみといふとも、又野をまもる鬼の持たる鏡あり、これも人の心のうちをてらし、いみじきたからなれば、さる國王ありて此かゞみをめすに、鬼のおしみければ、野をやきはらはんとし給ひし時、ちからなくして奉りしを、のもりのかゞみといふ共、又秦始皇即位のころ、深夜に一の鬼來て、一つのかゞみを奉りて、わたり三尺なり、これは病人のまへにたつれば、六腑五臓みなこと〳〵くあらはれ、やまふのありどころをしれり、是をのもり鏡と云とも、此外せつ〳〵あれど、いづれにてもおもんずる物にて、かろしむる物にはあらず、これのみならず神代に、素盞のおのみこと出雲國へおはしましけるに、手摩乳脚摩乳といへる夫婦の者、一人の姫をもてり、いなだ姫となづく、此姫を八岐の大蛇ありて、今夜のまれんとかなしむ、其時素盞烏のみこと、此の姫を我にえさせば、大蛇をたいぢすべしとふかく約束ありて、程なく大蛇を平げ給ひて、稻

田姫と夫妻のけいやくし給ひし時、わだり八寸めぐり二尺四寸のかゞみを聟ひきで物にまいらせけるを、素盞烏のみこと、天照太神へ奉り給ふ、懿德天皇の御代の時、人皇へゆづり給ひて、今の内侍所の御かがみこれなり、其後崇神天皇の御宇にいあらためて、始の古き鏡をば、天照太神へかへしまいらせられ、あたらしきを今のないしどころにおさめ給へり、此外八咫鏡とて、天照太神の鑄させ給ひたる鏡二つあり、はじめいさせ給ふちいさきは、紀伊國ひさきの宮といはゝれ給ふ、後の御かゞみは伊勢の國蓋見（フタミ）が浦におはしまして、いづれもこの國のまぼりの神となり給ふ、かゝればおとこ女によらず、此日本にすめるいきとしいけるものゝたから物は、かゞみにきはまれり、又生をうくる物のおやをもたぬはなし「人の子はおやににるてふなるものを、戀しき時はかゞみをぞ見る、と古人もいひしに、かゝみをいやといはゞ、なじておやのおもかげをもみ侍らんや、不孝のつみもあさまし、此外かゞみのたからなる事おほし、日をかさねていふともつきざる事なりといへば、いすかはくちのひずみたる事いひいだし、はぢをかきたるとおもふも又おかし、姫君は此物語こまかに聞給ひ、げにもとやおもはれけん「山鳥のおろの鏡のくもらずば、かげやうつるとむかひてもみん、と書きていだされたりければ、四十からは、たうざのめんぼくほどこしてぞたちける、

鶺鴒

我を君いもせの中の中だちと
　　しらでなびかぬとはうらめし

とよめるを、使持ゆきてみせ奉り、此鳥は神代より別ていはれのある事也、名も一にあらず、庭たゝき、いしだゝき、いなおほせ鳥などいひて、いにしへの歌人のせつも、いろ／＼にみえたり「さらぬだに霜がれはつる草の葉を、まづうちはらふ庭たゝきかな「あふことをいなおほせ鳥のをしへずは、人を戀路にまどはざらまし、など名はかはりてよみたれど、鳥は一つと見へたり、又「我門にいなほせ鳥のなくなべに、けさ吹風にかりは來にけり、ともよめる、これは古今の歌なれば、ことばにのせがたき事なりといへば、何とかおぼしけん、姫君とりあへず「しらざりき妹兄（いもせ）の中の中だちと、まづまろび逢世々のためしは、との給ふ

を、使のこがら、此よしかたりければ、返歌のことはり、げにもとやおもひけん、庭も石もたゝかず、物もいはず、ふくだみてゐたるも又やさし、

時鳥

かこちよれど君にあはねば歸らんに
　しかじとのみもなくばかりなり

とくちずさび給ひけるを、山がら使にて、取つたへければ、姫君み給ひ、歌の心はかりがたしとあれば、使のいひけるは、このころたまづさ短册をまいらせらるゝ方、かずをしらず、そのなかにこれほどしなたかき、御かたはありがたし、そのゆへは、むかししよくの國のみかど、御名を杜宇と申奉つる、蜀のみやこを出て旅にてみまかり給ひ、其御魂魄時鳥に化し給ふ、鳥となりても國やこひしくましく〳〵けん、不如歸となきて、旅人までを、我方へかへらんにはしかじとすすめ給ふ、又は郭國といふ國の王、他國にて遠行し給ひ、くはつかう〳〵とも、不如歸々々々とも鳴給ふと云說もあり、今の歌にかこちよれど君にあはねばとよめるも、此の故事なるべし、又四手の田長となづくと「いくばくの田をつくればか時鳥、しでのたおさをあさな〳〵よぶ、」とよめり、此歌せつ〳〵おぼし、しかれども四手の山より、卯月さ月に來りて農をすゝめて、過時不熟となくが、ほとゝぎすときこゆ、それゆへ四手の田おさと云とかける物あり、さもありぬべき事也、又此鳥死出の山よりきたるといふいはれを、いにしへよりいひつたへたるとあれど、しげゝればのこし侍り、又此鳥を玉むかひ鳥、ときの鳥、田うた鳥、田おさ鳥、さなく鳥、うなひこ鳥、たち花鳥、もゝ聲鳥、しげ鳥、夜たく鳥、たそがれ鳥、いもせ鳥、たまか鳥、うつた鳥、めづら鳥、さくも鳥、ゆふかげ鳥など、いろ〳〵に名をもあらため、詩歌ともにもてあそべり、あるひは、一聲山鳥曙雲外とつくり、又、行やらで山路くらしつ時鳥と云、又「一聲ときかずばいでじほとゝぎす、いく夜あかしのとまりなりとも、などとながめをのこされ侍れば、大かたの鳥にはあらず、御かへしたまはらばやといへば、姫君「まてしばししでのたおさを呼たてば、身はさ乙女となりてつかへん、とかきていだされければ、山がらうけとりて、此返事を見給はゞ、さぞ時鳥のよろこびたまはん、此比よからぬとりぐ〳〵の使になり、むだあるきのみして、

くるみをひとつ見ることもなく、ゆふがほの宿のうちもまづしかりしに、おもひの外に、又たぐひなき御方樣の中だちとなり、もずにとられたまひし、くつでののこりもあらば、定て御ほうびにたまはりやせん、もどりうつとも、あしもつばさもかろからん、うれしうれしと、ひとりごちしてぞゆきける、

雞

難面しとしのび車のめぐりあひて
　君に別れのとりとならまし

とよめるを、日がら取りつたへて、姫君にみせ參らすと、何とやらん御きにいらぬをもゝちにて、たれもわがこゝろを、はからひていへかしとの御けしきなれど、いすかの局は、いつぞや四十からに、はしたなくいわれし後は、心をくれやしけん、こと葉すくなゝりければ、ましこすゝみいでゝいひけるは、しのび車の歌の作者、御きにいらぬもことはりなり、此とりにはよからぬことあまたあり、そのゆへは、先人家をすみかとすれば、庭のかたはら馬屋のあたりなどをたゝずみあるけば、手あしの不淨なる事これ一、又當世の武士の道具のはやり物とて、持鑓の鳥毛さや、馬のよろひなどゝて、くび毛尾羽をぬきとられ、みぐるしき體これ二、又東君の春もなかば過行、巳の日のはらひの時にもあたれば、家々の小者中間などのをひまはり、いだきまはりて、庭鳥あはせとて、ひめもそいためにあふ事これ三、又人家に住むとはいへど、所せきかまどの邊りに、とやをしむれば、椎柴河或海、諸鳥の住所ともをなじからで、人の住家をへつらひまはり、我家とてももたず、借屋の體にて、君といもせの望み、おほけなき事と、さかしらをいへば、使の日がら至極の道理をきゝて、こたへんやうもなけれど、一言もいはねばたのまれしかひもなく、又鷄に當座のはぢをあたへんもさすがなり、又姫君の御心になきことをもとりそへ、ましこがいひたるもくちおしとおもへるけしきにて、唯今の御物語、すきもなき事なり、さりながら、萬の事一やうにはあらず、まづ心をしづめて聞給へ、そもじをはじめ、我身などやうのものをば、世の中の人ちさうし給ふ事されなり、庭鳥をば、國々家々にかひ給へば、よき鳥と見へたりこれ一、又木綿付鳥の事は、世の中さはがしき時、內裏より、鷄にゆふを付て關々にいたらしめて、まつりをし

給へば、結句に鷄のほまれとなるなりこれ二、又孟嘗君がかんこくのせきにて、鳥のそらねをはかり、其時のがいをのがれしも、鷄の德なりこれ三、又常世の鳥といへり、是は日神天の岩戸にこもらせ給ひし時、八百萬神たち神樂をもよをして、出し奉らんとせし時、龍宮の庭鳥をもとめて、夜は明たりと云ふしるしになかせけるとなん、このころなれ給ふ諸鳥のうちに、いづれか日神などの御そばちかく參りたる鳥ましますや、かやうの事を思へば、庭鳥のほまれたぐひなき事なりこれ四、また庭とり、木綿付どり、庭つ鳥、八こゑのとり、くだかけどり、しばとり、とこよどり、などいふて、あまたの名をもち給へり、これもにはとりの威光なり、ほとけの御うへにも、十號圓滿とて、とをの御名有をたつとき事とすこれ五、又詩人なども、鷄既鳴忠臣のあしたをまつといふ、又正月一日より六日までを、六ちくの日といひ、七日を人日といひ、八日を穀日といへり、この日のうちに、別していはひの一日をば鷄日とて、庭とりの日と定め給ふこと、かの鳥の威光にあらずやこれ六、此外官職令にも口には鷄舌香をふくみ、手に蘭をにぎるといふ事をあらはせり、此香は一木に衆香をぐするとて、もろ〳〵のにほひをぐそくせり、庭とりの舌又もろ〳〵の德をそなへたるゆへ、にはとりの舌にたとへて鷄舌香といふなり、かやうに大國小國にをしわたりて、ほまれある鳥を、あさ〳〵とそしり給ふこと、君の御そばにはにげなきなりといへば、はづかしくや思ひけん、狂言のやうにもてなし、よき日がら見て、あざわらつてぞたれける、

鶴

まめやかに我思ひつるこゝろをば

千とせのゝちも君にしらせん

となんよみて書つけ、我身の所生のいやしからぬ事をもほめかして、山がらのごたちへぞわたしける、其の後姫君に見せ奉れど、返しえしたまはず、時に山がら、これはいやしめ給ふべき御かたならず、いにしへ仙術を得たるひちやうばうも、つるの羽がひにやどをかり、佛入滅の靈地をも、鶴林とてつるのかたちをかたどれり、かやうのいはれをおもへば、妹兄のちぎりはなくとも、一筆のむくひはあらんと、そゝのかせば、げにもとや思はれけん、姫君「まめやかに我身を

おもひつるの住所、待としきかばたづねてもみん、と御筆をそめ給へば、使まづよろこびけるとなん、

鴇

物おもふ時々かほに波よれど

よらぬは君のあたりなりけり

と詠じて使にむかひ、年もはや五十年をこゆるおいの波の、よるべもあらぬすて小船、さしてたのまんたよりだに、なき身とならんゆくすへを、かけても尋給ふ世もがなと、いひとゞめ侍りぬ、此はなやかなる言のつゞき、くち木に花の咲たらんためしもかくやと、使のかたりければ、君も哀と思ひ給へり、

千鳥

片時も君にはそはでいたづらに

あやな八千代の友ちどり哉

とよみて書きつらね、思ひかねいもがりゆけば冬のよのと、貫之がながめしを、我身のうへになさばやといひて、日がらのめのわらはをたのみまいらせけれど、何とかしけんかへしはなし、

都鳥

名をきかば君も嫌はじいざなひて

角田河原に住む身ともがな

と口ずさびて、いにしへの事をもあらましかたり、あまのかるもに住虫の思ひといひて、文をば四十からのふるごたちへぞわたしける、もて行きて、よきつゐでに見せたてまつり、此都鳥といへる御名、世にたぐひなき事也、龍宮城喜見城といへるは、人道の外なれば、いみじき事言にあらはしがたし、人皇の始め、神武天皇大和の橿原に都し給ひしより以來、こゝかしこに都を移し給ふ事三十度にあまり、四十度にをよべり、紅塵紫陌の粧ひ、いづれもおろかならず、かゝる目出度都そだちにてましませば、ろうせらるゝ御かたにはあらず、御返しなくてはといへば、姫君「東路の角田河原の川水の、すむともすまじ都ならずは、との給へば、さぞみやこ鳥のちからおとし給はんとぞいひける、

水鶏

君我をよせじとねやの戸をたてば

たゝき明けてもあはんとぞ思ふ

となんよみて、短冊に書つけつゝ使に見せければ、こちたしとやおもひけん、とりおとしたるやうにして

ぞかへりける、傳へんたよりもなくて、道行きぶりに例のとぼそをたゝきて、なげいれけれど、そのかひもなきにや、

鵲(かさゝぎ)

名にしおふ笠やみの毛もわが物と
　雨もいとはず忍びゆかまし

とかけるを、うけ取て見せ參らすれど、御きにあはぬていなれば、使の申けるは、是はいにしへ、遊子伯陽と云へる人、烏鵲の二つをかひ給ひし、其うちなり、後夫妻の人天にのぼり、牽牛織女の二星となり、天の河を隔て住給ふ、常は水けがれ有とて、此河のわたりをゆるしたまはず、七月七日は、帝釋善法堂へ行幸し給ふ日にて、水あび給ふ事なれば、二星のわたりをゆるし給へり、其時むかしのちなみをわすれず、此鳥來て、翅をならべて橋となしてぞわたしける、わかれの時、七夕血の泪をながしたまへば、翅もみぢの色にまがふゆへ、烏鵲紅葉の橋とは云ひならはせり、かやうに心ざしふかき方なりとほめけれど、雨にぬれじの蓑笠は、なげのなさけとやおぼしけん、

鴡(みさご)

たへやらず洲さきによするしら浪の
　たちてみ居てみ君ぞこひしき

となんかけるを、使もて行て、此鳥はよとゝも妹にとをざかり、洲さきにのみ住みつゝ、契りもまれにて、色にふけらぬ鳥なれば、后姫の心これに順ずべし、などかける文もありと聞きつたへしに、かやうにふりはへて、かこちより給ふとは、おいらかなる御心ざしなりといひけれど、何とかしけんかへしはなし、

翡翠(かはせう)

山川のゐく非にすみてとる魚を
　くふも味なや物おもふ身は

聞つるとりの心は、おくれにけりとはゝゐみてぞよみける「朝夕にとりぬる魚のなまぐさく、なま心なる君はたのまじ、とぞいひやりける、

鷺

君にこゝろゆる木の森にすむ鷺と
　なりても獨ぬるぞくやしき

と書て、我身の位のほどをも、ことにいでゝ中のつかひをたのみ給ふ、やがてとりつたへて、見せまいらすれど、なごやかなる御ことばさへなければ、使のいは

く、是は延喜の御門より、五位の位をたまはり、鳥類畜類の座上にてましますうへは、餘の事はいひたつるもくだ〳〵し、御返しなくては空おそろしき事といへば、姫君「われに心ゆる木の森の鷺ならば、あふみとならん時をしもまて、とばかりいひ捨給へり、

鵠

君を思ふ心ふか田におりたてば

くゞ井足とてきらはれやせん

とかきつゞけて、ことすく〳〵なにてぞやりける、使取次て、此鳥は鵠とも白鳥とも、又は天鵝とも名のり給へり、雪は鵝毛にゝて飛で散亂すと作りて、詩人も雪月花の內の花にたとへ給へる程の鳥なれば、御返歌もあれかしといへど、姫君何とやらん、なやみ給ふやうに見へければ、かさねてといひてやみぬ、

鴛

われならでよそに契らば劔ばの

きれん限りはうらみてもみん

と詠じて、使をまちてをくらんとしけるを、あたりはなれぬともどちなれば、まがも此よしをしりて、鴛どりをふかくうらみ、さらば我もこしおれ歌なりとも、まいらせんとて、

鴨

我思ひかなひたまへと名にしおふ

かもの社にいのりぬるかな

とよみて、をくれてはくやしとや、をし鳥のたのみたる使の、こがらきたるをさいはいと、一どにぞやりける、使もちからにをよばず、二つの短冊を一どにもてゆきて、見せ參らすれば、姫君此比は御心も例ならずましませば、何ともの給はず、かほ打あかめてゐ給へり、使のいひけるは、此鳥々、いづれもかろしめ給ふべからず、鴛鳥はわきて契りふかければ、これにあへなんとや、鴛鴦の衾とて、世の中にももちひ侍り、いもせとなり給はゞ、これにましたる事はあらじ、又、「池水にをしのつるぎばそばだてゝ、妻あらそひのけしきはげしも、と古人もの給へば、ねたみふかき鳥と見へたり、此鳥の心やはらがずは、よその𛀁にしも定めがたし、又眞鴨もいやしめ給ふべきにあらず、歌道にもあじがも、すゞがも、まがも、あを鳥、かものうけも、うきねの鳥、又、鴨のは色は、春の山の色にたとへなどして、さま〴〵にながめをのこされ侍り、なをさ

ら此かた〴〵は、けやけきほまれあり、其ゆへは淨土の三部經、觀無量壽經のうちに、鳧鴈鴛鴦皆說妙法とて、をしかも丶妙法をとくとの給へば、いみじき事也、ひとり〴〵に御かへしなくてはといへば、姫君のたまひけるは、こがらにはよと丶もなるれば、こ丶ろをのこすべきにもあらず、これにつけていにしへをおもふに、津の國いく田といふところに、うなひをとめのをきつきといふあり、これはむかし津の國あしやの里に、うなひをとめといふ女あり、それを二人のおとこありてあらそひけり、一人をばちぬおとこといひ、一人をばさ丶だおとことといひける、男の心ざしいづれもひとしければ、女思ひわづらひてじがひしてうせぬ、二人の男もまた自殺しければ、これをはふむるとて、女のつかをば中につき、二人の男のつかをば兩につきけり、これをうなひおとめのおきつきといへり、おきつきはつかの名也、此心を萬葉に「いにしへのさ丶だおのこの妻どひし、うなひ乙女のおきつきそこれ、とよめり又花山院の作らせ給ふ大和物語とやらんには、生田川にうかべる水鳥をい給へ、矢のあたりたらんかたへなびかんといひければ、二人のおとこうれしき事に思ひ、水鳥を一どにい侍るに、心ざしの淺深やなかりけん、二人の矢ともにあたりしかば、女せんかたなくて水にしづめば、おとこもともにしづみ、一人は手をとり、一人はあしをとらへてしにけるとなん、つかのつきやうなどもこまかにのせ給へり、此事世にあまねくしる事なれば、こまかにいはんはむくつけき事也、今こがらのつたへし文は、此物語のおもかげなれば、何とも思ひわきがたき事なり、返歌をば、をの〳〵の中にてし給へとて、おましをたち給ぬ、使もことはりとやおもひけん、ものもいはで過ぬ、

鵜

君にしもはなれて沖の島津鳥
　うき身を水になげてしなばや

とかき付て、汐干に見へぬおきの石も、身のうへなりと斗いひてわたしければ、使取つたへて君に見せ奉り、打見たるうはべよりも、心はやさしかりつるとかたれば、さては御かへしなくてはいかゞとて、かやぐきそばにてぞよみける「聞くもはたかなしかりける水底に、しづむほどなる君がおもひを、といひてやり

けり、いかゞ思ひ給ふらん、きかまほしき事也とぞいひける、

鷗

つれなしとおもひはすてじ沖の海の

ふかきかぎりはかこちても見ん

とよみて、我思ひのほどをば君もしりたまはじ、よきやうにこと葉をかざり申なし給へと、一すぢにぞ頼ける、こがらゝ持行て見せ参らすれど、姫君はみこゝろよからねば何ともの給はず、かやぐき此鳥は、あさゆふすなどりにばかりなれて、身もけがらはしくきたなしといへり、使此いらへきこへずば、ふかくたのまれしかひもなしとや思ひけん、すなどりするとてかろしめ給ふや、よくはしらねど神代のことかとよ、御あにの火闌降命(ホノスセリノミコト)は、をのづから海の幸まします、おとの彦火々出見尊(ヒコホホデミノミコト)は、をのづから山の幸まします、或ときたがひにさちがへし給ひて、すそりのみことのつりばりを、おとゝのみことにかしたまひ、ほゝでみのみことの弓箭を、あにのみことへかしたまひ、たがひに狩漁し給ふに、いづれもさちを得給はず、其時すそりのみこと、ゆみやをかへし給ひ、ほゝでみのみことへかしたまひし、つりばりをこひ給ふが、魚にとられてうしなひ給へば、ちからなくてあたらしきつりばりを、一箕にもりてかへし給へど、むかしのつりばりならずばとらじとこい給へば、せんかたおはしまさずや、鹽土のおきなをたのみ、海神(わだつみ)のみやこにいたり、豐玉姫とちぎりをこめ、海神をたのみ給へば、大小の魚をあつめてつりばりの事をとひ給へど、いづれもしらず、たゞし赤女の口にやまひありといへり、其時赤女の魚をよび、口をさぐりて、かのうしなひ給ひし針を取いだして、みこへ奉り給ふ、其後ほゝでみのみことたちかへり、御兄の火闌降命へつりばりをかへし給ひぬときけば、かゝる神々の御うへにさへかりすなどりをし給ふに、此のとりきたなしといふ事はしらず、又山谷の詩にも、中に白鷗の閑我ににたるありと、賢人の心のしづかなるにたとへたまへば、なみの鳥にはあらず、御返歌たまはらんといへど、なにとかおぼしけん、かさねての事とて返しえし給はず、使は我とがとやうらみられんと、あんじをりけり、

鳰(にほ)

しらせばや泪の雨のふるたびに

沖中川もまさるばかりを

と口ずさびて、我すむほり江の水よりもふかく、使を頼みてやりける、姫君見給ひ、これは「にほどりの沖中川はたへぬとも、君にかたらふことつきめやは、とよみたりし歌を、本歌にて詠じけるや、心の花のいろのゆかしやとばかりにて、打置給ふ、使のこがら、ただはすてがたければ、狂歌なりともとて、たのまれしことかなはねば、使する身をこがらしの、風にちらばやといひやりつゝ、いかゞおもひたまふやらんと、ひとりごちけり、夫より後は、諸鳥共も、うそ姫のあまりにつれなかりしを、おぞましくやありけん、をとづれも日にそひてまれになり行き、のべわびしきに、君やよひの初めつかたより、わらはやみのやうになやみ給へるが、いまだよからぬや、しらがさねの日もちかづけど、夜かへし給はんけはひもなし、これは此比かよひし玉づさたんざくの、まさりをろかもなく、おいらかなりし御心ざし、いづれをとりいづれをすつべきにもあらずと、それをなげき給ふならんとはおもへど、日をましおとろへ給へば、みな〳〵おどろきて、いかゞせんといひしが、わらはやみにはきねんにしくはあらじといひて、さらばいのりの師をたづねよとて、あまたのとり〳〵をいだしやりける、中にわきて、やまがらはかしこかりければ、やがてきゝいだしつぼねにかたりけるは、これよりあはいほどへて、山中のおくまれるに、梟法師とて、やそぢにあまれる持律持戒にて、有髪の大德にの驗者のやうにきゝ侍りしといへば、をの〳〵よろこび、片時もはやくしやうじ奉り、御枕加持もあるやうにとの給へば、山がら即時にゆきて案内をこひ、夜たかをそうじやにて、しか〴〵のよし直に申侍り、

老僧はきげんよささうにて聞給ひ、此姫君の御うはさを、よそながらつたへうけ給はり、内々御めにかゝりたきと、つゐでを相待時節なれば、やがてまいらんとて、御同宿には夜たか木兎小僧の蝙蝠までひきぐし、夕陽のにしにかたぶくをまちて、山々みね〳〵木のま〳〵の木がくれをつたひ、餘のとりにふかくしのびてぞまいられける、此よし君にしらせたてまつれば、たれこめて春のゆくゑもしらぬ比なれば、すがたの花もうつろひはてゝ、又ちり積りたるとこのあたりを、打つけならんかたにまみへんや、いづれもげ

にもとや思ひけん、おましにちりたるてうどめく物など、とりをきぬるおりふし、月もおぼろなれば、みかたちも明らかには見へじと、御枕もとへしやうずれば、此老僧もとよりくらき所はえて物にて、月のひかりもつよけれど、わざとたどるふりをして、御そばへより、俄のことなれば、御祈念の道具も持參せざれど、愚僧ほどの碩學のうへには、苦になる事にもあらず、前後左右にたてる深山木を、胎藏界七百餘尊、金剛界五百餘尊とあがめ、谷水のおちくるひゞきを、鈴錫杖のをとゝ定め、風のさゝらのさら〳〵とをとするを、いらたか數珠と觀念し、眞言の秘術をいだし、一いのりいのらんとの給へば、みな〳〵たのもしく思ひ、いのりにはりう〳〵ありて、いろ〳〵ならひありとはきけど、つねのいのりのごとくならば、さだめて手執錫杖當願衆生設大施會とよみはじめ給ひて、三世諸佛執持錫杖とよみおさめ給ふならん、又呪には不動釋迦文殊普賢地藏彌勒藥師觀音勢至阿彌陀阿閦大日虚空藏等の十三佛の呪をくり、殊更これは疾病なれば、藥師の御呪、おんころ〳〵せんだりまとうぎそわかとも、となへ給ふらんと、をの〳〵耳をすまし聽聞すれば、さはなくして、何經ともきこへず、らちもなき事を口にまかせ、たからかによみいだされければ、きゝゐたる諸の鳥ども、これはいかなる事ぞやと、あやしくもおかしくもおもひけり、さりながらかぢにゆだんやなかりけん、とらおほかみのほゆるやうなる聲をいだし、姫君の御かほをまぼりつめて、あせをながし、なみだをながしてぞ祈られける、此御いのりのしるしにや、すこしまどろみ給ひて後、御身のあつしさもをこたりければ、つきそひぬるとりど〳〵のうちによろこばぬものはなし、かゝれば時刻もうつり、夜もはやうしみつばかりになりけれど、何とかしけん此老僧、ほれ〴〵となつて御そばをたちかねてゐ給へるを、山がらは智恵かしこくて、此法師のつらつき、まなこざしをはやう見とり、これは姫君にこゝろみだれたりとさとり、我身いかばかり持律持戒の人の驗者とほめつるに、そのかひもなく、かかるみぐるしきなりを見せ給ふやと、はやくたちより、手をとつて引たてけり、御經によみくたびれ給ひたるや、夜明なば山がらすのおほきところにて、わらひたてられ、いかばかりう

きめにかゐひたまはん、さう〳〵ふる寺へかへり給へといへば、其時法師は、ゆふやみは道たど〳〵し月まちてと、云かたもなくてと、ひとりごといひつゝ、なみだながら小僧にてをひかれ、自坊へかへり其ままうちふし給へり、さて又うそ姫のみうちのしゆには、つぼねましこかやぐきこま鳥、これよりしもつかたには、かはらひは、かしらだか、みやまこの外、又したしみ給ふ御かたには、日がらこがら四十からなどさしつどひ、山がらにむかひて、此たび御いのりにまいられし、大とくのかほつきめもとは、何とやらんやうゐりげなる事也と、とり〴〵にわらはれけり、山がらはひいきなれば、かほかたぶけてぞゐたりける、姫君は何にもかまひたまはず、わらはやみのをこたりぬるをよろこび給ひ、こゝちよげにたちいで、筑波根にはあらねど、このもかのもをながめやり、み山は餘寒はげしければ、卯月なかばになるまでも、葉まじりに花の咲殘り、あをぢのにしきをさらすかと見給ひ、なにとなくみこゝろにうかべば「古郷へきてもかへらでゆく春の、花のにしきをなど殘すらんと、くちすさび給ひぬ、とり〴〵の何かとの給ふおもひや、我身にもつもり、又いかなるめにもあはんかと、こゝろぼそげにおぼしつゞくるに、山かげなれば日もはやくかくれ、那寺のかねのゆふべをいそぐこゑも聞ゆれば、なを物のあはれもまさり、なみだもろなる御けしきにて、ねやへぞいらせ給ひける、さて又山寺の大とくは、四五日は水をだにもめさず、なにかとものをあんじたるていにて、うちふしゐ給ひしが、ふとおきなをり、よたかみゝづくかふむりなどを、わがとこぢかくよび給ひて、今あたらしくいふべき事にはあらねど、年月をしへつるがくもんのかひには、主師親の三とくのふかき事、又かう〳〵をなすといふ事をば、さだめておぼへてこそあるらめ、これにつきいにしへをおもふに、證空といひししゆつけ、三井寺の智興法師につかはる、智興やまひあり、醫師のちからもをよばず、安部晴明陰陽のいのりをなしていはく、法師のやまひぢしがたし、もしいのちにかはるものあらば、いのりかへむといひけれど、かはらんといふ弟子なかりしに、證空あまたの中に一人すゝみいでゝ、法師のためにいのちをすてん事、いとやすきことなりと晴明にいひければ、すなはちいのりかへけるにや、智

與の違例たちどころにいへて、即時に證空やまひのとこにふしけりといひつたへり、かやうに師匠のためには、命をさへすつるためしあり、主君への忠臣はかぎりなき事なればいふにをよばず、又これは親のかう〳〵なれど、主師親はおなじ事なれば、かたりてきかするなり、いにしへの廿四孝などににたるかうかうは、いまの世にもまれにはあるべければ、あまりにほむるまでもなし、在五中將のいにしへ、もゝとせに一とせたらぬ、つくもがみなる女ありしが、子三人をよびて、まことならぬゆめがたりをしければ、三郎なりける子なん、よき御おとこぞいでこんとあはせて、はゝのねがひをかなへけるとなん、これこそ愚僧がきにいりたる三國一のかう〳〵なり、此三郎殿のこゝろのやうなる、弟子をひとりもちて、物をもゆづりたきばかりなり、我又しきたへの枕の上のまぼろしに、うぢ神の御じげんをかうむりたり、其神託にいはく、このところにありとし有ほどの諸鳥どものこらず、うそ姫とやらんが方へ、玉づさ短册をおくりけるに、如何としてわれひとりのぞかれ、そのかずにはいらざりけるや、但し出家の戒法をやぶらじとや、ありがたき事なれど、佛道しゆぎやうは餘國のならひ、此くには神國たり「こひしくは來てもみよかしちはやぶる、神のいさむる道ならなくに、とよみしもことはりなり、天の浮橋にて女神男神となり給ひし事あれば、神の制する道にはあらず、いそぎ諸鳥のかずに入べし、氏子のはぢは、氏神のはぢなりといかり給ひて、しやだんのとびらあらゝかにひきたて、神はいらせ給ひぬ、

此儀神勅にまかせずは、いかなるくせちかいできこん、いかに〳〵との給へば、でしども此大德はいつも妄語をこのみたまへば、いまの神託もそら事ならんとはおもへど、しゝやうのことばなれば、まことさうにしてぞきゝゐたる、その中に小僧のかうむりは、まだ年もゆかざれば、なにのえんりよもなくいひけるは、せんどはや御まくらかぢのおりふし、老僧の御たましゐはめいどへも參たるかとおもひ、いかばかりかなしかりつるに、いまだながらへ給ひ、かゝる事御たのみはめでたき事なり、神の御つげはなしとも、此小僧めがあしたゆきまで、御文づかひにさゝれまいらせんと、おもひまうけたるに、なを神慮ならばいな

れば、大德われ又御佛の御よはひにひとしければ、年のたのみもなし、秋のすゑまでまたん事、心のうちのながき月は、いかばかりといひてなき給ひ、なみだのつゆの玉のをの、あふ事なくてたへはてなば、くやしからんとくどかれけるも、哀ふかし、

みがたきことなりといへば、老僧なのめならずよろこび、人のおやのするの子にやしなはれたるこゝちして、我一世にたくはへたるもの、又てらの什物いげ一もつものこさず、小僧にあたふべし〳〵と、ひとりごといひながら、文こまかに書きしたゝめて、よしあしは小僧がさいかくにあらんといひてぞわたされける、ひるはよそめもしげしとて、たそがれ時をまちえて、姬君の御かたへまいり、山がらをたのめば、こゝろにへだてはなけれど、大德の御いのりし給ひし時に、にげなきふりを見せ給ひしこと、きのふけふの事にて、みな〳〵おぼへたまへるに、又つかひにならんこと、おもはゆき事なり、姬君も例にたがひ侍りし後は、いまだ御心もよからねば、九夏三伏の比をばすぐし、白藏の天にもうつりゆき、長月なかばにもならば、木々の木葉もうつろひ、のべの草葉もうらがれ、むしのねもよはりゆかば、ものゝあはれもまさりなん、かゝる折からをよすがにて、かこちよりたまふべし、その時はましこをかたらひ、御ふみをも取つたへんといひてぞかへしける、小僧たちかへり、かくのたまひつれば、ちからなく、むなしくかへりぬるとかた

あだ物がたり上卷終

あだ物がたり下巻

平　爲春　作焉

去ほどに、ひまゆく駒も足なみはやければ、夏もはやすぎの窓の、月もさやけき秋にもなりゆくまゝに、いにし春のころ、とり〴〵、うそ姫へたまづさたんざくおくりしこと、箸鷹の中へもれきこへければ、兄鷹をはじめ兒鴾隼雀鷂鵟鷂まで、木しげき山べにあつまり内談しけるは、さて世の中に名をよばるゝほどの諸鳥ども、いづれもうそ姫とやらんへ、玉づさたんざくをやりて、返歌を見てなぐさめつるときゝいだし、うらやましき事なり、われらは諸鳥をしよくもつとする事なれば、うそやまがらのやうなる小鳥などを、なにとはからはんもやすけれど、かゝるいもせのみちに、えびすごゝろは後の世までのあざけりなるべし、いざや歌を一首づゝよみてまいらせんに、ひとり〴〵とをくりなば、目かずかさなるべし、そのうちわりなきさはりなどありては、ほいなき事なれば、一どにかきやりて、こゝろ〴〵のほどをもしらせまいらすべしとて、おなじところへあつまりてぞよめる、

兄鷹

升かきの羽はとぶとてもなにかせん
　君こめやまにゆくとなければ

零鳥

我中はこもつちごへの一もぢり
　もぢれやすらんあふ事もなし

兒鴾

峇をしも越てはまりの鳥ならば
　ほこ羽つきてもあはまし物を

鵟

うそ姫も翅のあらば羽くらべの
　鷹ともなりてちぎりそめまし

隼

あまたにて獨の君をこひぬれば
　ころとりにしもならで悔しき

鷂

あはぬまはせめて野守の鏡にも
　うつして見せよ君がおもかげ

と、めん〴〵にたんざくをかき、四十からをよびたま

へば、何事かとおもひ、ふるへわなゝきてまいりけれ
ば、きづかひはさる事なれど、べちの事にもあらず、
この歌どもをうそ姫へとゞけ、返歌とりてまいらせ
よとあれば、やすき御やうにてましますす、やがてたち
かへり御返事申あげんと、いふかいはずにてはしり
出けるが、何にやらんうしろめたければ、かへりみが
ちにて姫君へまいり、かくこそありけれといひて、歌
ども見せ奉れば、あるかぎりおどろきさはぎて、此比
君のいかなるめにもあはんかと、かなしみ給ひし御
心のうらの、ちがはざることよといひて、かなしみけ
り、さてしもまた、うちすてゝをくべきにしもあらね
ば、御かへしゝ給はんかといへば、姫君歌よむ事はな
るべけれど、玉づさたんざくなどをとりかはし、した
しみよらば、いかなるうきめにかあはんとの給ひつ
つ、よゝとなき給へば、四十からきゝて、これも又御
ことはりなり、年月むつまじくし給ひしむくひには、
我又いま一たびいのちをすてゝ、鷹のすみかにいた
り、はからわんとてたちゆけば、姫君をはじめをの
をのたのもしくぞおもはれける、かくて歌よみし鷹
どもは、返歌をそしとはらたちがほにてまちかねけ
るところへ、四十からゆきけるが、われはおもふ心あ
れば、まことならぬわづらひのていをすべしとて、つ
ばさをたれ身をいためるふりにてぞゆきける、兄鷹
を上座にて、つぎ〳〵にならびゐけるが、小鷹のなか
にていひけるは、この比はだんがう事のみにてひま
なければ、よきとりをもとりてしよくせず、よき折ふ
し四十からくると見へたり、使のしやうあしくば、か
へすまじといふを、四十からはきけどきかぬふりに
て、いかにもうらぶれたるていをして、まぢかくよれ
ば、何としてをそくはきたれると、兄鷹兒鷂隼とり
どりにとひ給ひけり、ないくとくにまいらんと、こ
ころいられはしけれど、四十年をすぐして、雨露霜雪
をしのぎしそのつもりにや、又は老らくのよはりや
ら、かたみすくみかさなどもあまたありて、行歩心に
まかせざればをそなはり侍りぬといへば、兄鷹をは
じめいづれもあはれと思へり、さしばはさしいでた
るくちのさがなさにて、さてはやまひどりなり、食せ
ばどくになるべしと、こゞゑにぞいひける、そのゝち
又歌の返歌はいかにととひ給へば、むかし惟喬のみ
このの給ひけるは、かた野をかりてあまの川のほと

りにいたるをだいにて、歌よみてさかづきはさせとのたまふければ、かのむまのかみよみたてまつりける「かりくらし七夕づめにやどからん、あまのがはらにわれはきにけり、みこ歌をかへすゞずし給てかへしえし給はず、紀のありつね御ともにつかうまつれり、それが返しといせ物がたりにかきのせり、これはしぜんに御返事いできかねたるにや、又はゑひ給ひたるゆへにや、されども七夕づめのことの葉、名歌なるゆへ、みこの御返しなきといひつたへり、

此物がたりのごとく、をの〳〵様の御歌ども、きもをつぶすばかりの名歌なれば、にはかには御かへしもなりがたきよし申給へり、さて〳〵右のゑい歌どもの、御ことばつゞき、御さくいのはたらきたる事、ほめたてまつるも、くはんたいにてそらおそろしければ、御ゆるしもあらんところをのこさず口にまかせ申侍べり、ますがきの御うた、ますがきの羽とは、かりばの鳥は身をもければ、こなたの嶺よりたにへおちいりて、のためかたに、むかいのみねへゆくを、たかはすぐにとびわたりてとり給ふ事なるべし、君こめ山にゆかねば、ますがきのはもせんなきとや、もつともの御心なり、上の五もじのえんをすてたまはで、かたの丶別所のこめ山をそへ給ふ事、きもにめいじておもしろき御歌なり、みねこえての御うた、ほこ羽つくとは、かりばのとりの、みねをたゝきこゆるとき、たかはかしこくましませば、ほこをたてたるごとくにそらへとびあがり、とりのはまりを見給ふことなるべし、そのごとく君がはまりならば、うしなはじとの御心にや、これ又ふかく思入たる名歌也、きみもひとりの御歌、ころどりとは、あまたのかりを、はやぶさは二つ三つにて、めん〳〵に一つづゝとり給ふ事なるべし、此君はひとり、かこち給ふかたはあまたなれば、ころどりにもならぬとなげき給ふや、はらにあぢはひたる御歌にて、あはれのふかき名歌也、我なかはの御歌に、もつちこへとは、しづがもつなるこもつちにて、物をあめるがごとく、ちがいてあはぬこひのこゝろにや、もつとも秀逸なる名歌なり、うそ姫の御歌、羽くらべとは、二月なかばの頃、あまたのたかの山へあつまり給ひ、わがえんとおぼしめすおたかを、めたかのおひまはり、羽のはやきをつまとさだめ給ふ事なるべし、そのごとく姫君と羽くらべありたき

との御心ねがひ、これ又思ひあまりたる名歌なり、あはぬまの御歌、のもりのかゞみとは、むかし、鷹のみかげのうつりて見へつるとて、野なる水を野もりのかゞみといへり、あはぬまは、せめて水にうつる御かげなりとみ給ひたきとや、まことに君をこふるこゝろに、水のあさからぬほどもあらはれたる名歌なり、柿本のいにしへ、ほの〴〵とあかしのといひしことのはも、此御さくいどもには、しまがくれゆかまじ、又わかのうらにしほみちくればと、ながめしとき、此御歌どもいでなば、山邊赤人もあかゞほになりてはぢたまふべし、又櫻ちるに木の下風とよみし貫之が歌も、此名歌どもの中にまじはらば、空にしられぬ雪ときへぬべし、ありわらのなりひらは、その心あまりてこと葉たらず、しぼめる花の色なくてにほひ殘れるがごとしとは、古今のじよのことばなり、おの〳〵樣の御歌は、花のいろはにほひにおとらず、にほひ又いろにおくれざるがごとくにて、こゝろもことばもえならず、帝釋の羅綱の光りあひたるがこゝちし侍り、殊に六首の御歌ども、まさりおとりもなく、梅に櫻の咲つゞき、うぐひすの音にほとゝぎすのこゑをそへ、十四十五の月の光りならべて見るとも、かくやあらん、ことさら御さくいのはたらきたる事を思へば、きもたましゐもきへぬべく、身のけもよだち、おにが城へ入たる心ちして、めのまはるほどかんにたへたる御歌どもなり、姬君をはじめ、つきそふめのわらはにいたるまで、おなじやうにほめまいらするよし、口はきゝたり、さもありげにし、かたりなせば、たかどもおびたゞしくほめたてられ、まことゝやおもひけん、たけき心もくるしからず、いつまでもまつべし、はやかへれとてぞかへされける、兄鷹はあとにて、さて〳〵四十からは、ものもしりたり口もきゝたり、心もやさし、あのやうなる鳥などには、あらきはかぜをもあつべからずと、小鷹どもにをしへをき、わがすみかへぞかへり給ふ、又かの大德は、彌勒の御出世、五十六億七千萬歲のあかつきをまつこゝちして、長月にもなれば、小僧をむつましげに、ちか〴〵とひきよせ、なんぢがいひしことばのすぢ、ゆめほどもちがへじといまゝでまちつるを、佛弟子にはにあひたる心とやおもふらん、さて又いつぞやの神託を、むなしくなさんもさすがなれば、つかひにゆきてたべ給

へとて、文のうちもくろみすぎておくに、
しらせばやつよき祈のしるしとて
身がわりに身のなやむすがたを

とかきて、山がらのかねごと、ちがはぬやうにいひなせとて、わたし給ふに、小僧うけとりて、すぎにし春のこゝろむなしくかへりしも、不成就日にあたりてまいりたるゆへかとおぼゆるなり、おなじくは日をえらびてやり給へかしといへば、大德けふは九月九日ならん、重陽にていはひの日なり、とくゆけとの給へば、小僧がいはく、さてはよからぬ日なり、かずの半は陽、丁は陰なり、九月九日は、はんのかずかさなるゆへ重陽といへり、いもせの道は、陰陽和合してこそよけれ、これはいまくしき日なりと申せば、大德もつともことはりなりといひて、さらはこよみを見むとあれど、人家たへたるさんちうなれば、もとめんたよりもなしとぞ、でしどもいひける、小僧はかしこくて、さはべにくだり、蓂を一もとたづねいだし、これにて日のいくかをも、又はせんあくをも見給ふべくやといへり、大德はこの事しり給はで、なにごとぞやちとおしへてくれよとありければ、小僧これはいにしへ丁林といふもの、こよみをつくりはじめ、せけんへひろめしなり、かのしよをのち棺にいれてうづむ、そのところに蓂莢草おひ出せり、時に其子あやしみつゝ、ほりいだしてよみ侍り、これによつてこよみとはいひはじめしとなり、堯帝のみよに、このくさ毎月朔日にはしやうず、ないし十五日にいたつて十五ようしやうず、十六日いご、毎日一はづゝおつ、月になれば一はおちずして、晦朔をしるといへり、蓂莢草はいまのなづなのことゝきけば、たづねてまいらするなり、大德の學力をもつて、ふんべつしたまへといへば、小僧がことはりもつともなれど、愚僧事はこのとしにいたるまで、月をかさね日をかさね、内外典におしわたつてよみかさねし書籍ども、山のごとくにして、胸中曠々としたれば、すこしばかりの古事本説なる事もおそくなるべし、とかく小僧がはからいしだいとの給へば、小僧かしこまつて申けるは、とても御つかひにまいりたけれど、この事かなはずはをれものとやおぼしめされんと、日をえらぶばかりなり、けふは、やうのかずかさなりて、よからぬ日とはおもひ

つれど、又六ケの日どりにて、これをかんがうるに、九月九日は半の月にはんの日、佛誕生日にあたるをもへば、くはいにん抔あらば大學匠の御子なれば、佛にてましますべきもしらず、その先表にて佛誕生日にあたるといへば、老僧は大方ならぬきげんにて、ゑみをふくみよだれをながされけるところに、木兎はみゝにきゝおぼへたる事ありとて、はひ出ていひけるは、小僧は八相の化儀をしらずや、佛は兜率天に生じ給ひ、四種をもつてにんげんをくはんじ其こゑ下天詫胎出胎出家降魔成道轉法輪入涅槃とて儀式さだまれり、にんげんの四姓のうちにも、刹利婆羅門の二姓にばかりうまれたまふ、いかんとして鳥類などの中へ、佛のうまれ給ふべきやとなんじければ、小僧もことばすくなになりけり、大德はしかと聞しり給はねど、小僧がかほつきを見てともにぶきげんになり給ひ、だうりはともあれ、はやくつかひにゆくかたがかちならん、とく〳〵とあれば、小僧ははらたちげに、物もいはず文うけとりてゆけば、老僧はよにたのもしそうに見おくり給ふ、ほどなく山がらのすむ夕がほのやどにいたり、是はすぎにし春のころの御文なり、おもとのおしへにまかせ、いまゝでまちつるとて、わたしければ、やくそくのごとく、ましこをかたらひ、見せたてまつれば、姫君はむくつけき事なりとばかりの給へり、例のくちさがなきつぼねは、小僧をよび出し、さて〳〵これは大德の御文か、一にはいにしへもまれなるよはひに、十年あまりがほどもすぎ給ひて、にげなき事なり、二には破戒のとが、三には諸鳥の中へきこへ、わらはれたまはん事もかなし、なにとて佛弟子の御みとして、こゝろのおにゝはつかはれ給ふや、たゞしいつぞやの御ねんのふせも、いまだまいらせねば、せめてこのかへしばかりはしたまへといへば、姫君、

身がはりになややまばなやめなやむとて　なやみをやむることをしらねば

とかきていだされければ、小ぞうほのみて、つぼねきき給へ、よくしんのやうなれど、いまだいのりの御れいなきさへあるに、この御うたあまりにろうしたることはりなれば、ろうそうにみせまいらするまでもおそし、まづ我返歌をせんとて、

身肉も手足もふせになすことを

しらでや法の師におしむらん

とよめば、局さてはわが身も口にまかせんとて、

妻子をもふせにはなせどのりの師の

つまにせよとのをしへやはある

といはれて、又小ぞう、こゝにてもこと葉すくなにて、あふさきるさにはらもたちけるにや、とかくわがばうずのふぎやうぎゆへ、かゝるおもなきめにもあふと、ひとりごといひてゆきつゝ、我歌よみし事、つぼねが返歌のていをも、こまかにかたりければ、小僧でなくては、たれやのものか、かやうに名歌をやす〳〵とよまんや、つぼねが歌もよけれど、小僧がうたにははる〴〵おとれり、かならずよみをくれたりとおもふべからず、かゝることはあさはかにすみたるは、よからぬ事なり、今一度行て、つぼねがいひし事どももいひわけし、しゝやうのはぢにならぬやうにしてたびたまへとて、小僧がかうもつのしよくもつなどをとゝのへてもてなしたまひ、なをきげんを取て、歌をばよみ置ぬるとて、

見そめつるおもひをおにとしがでらの

むかしこひしき身ともなるかな

とはかきたれど、われ又ろうもうにて、こまかなる文さい〳〵かくこともならねば、文は小僧が口のうちに有べしといひて、わたされければ、しゝやうへの孝行とやおもひけん、又たちかへり、このたびは口上のみなればとて、すぐにひめぎみへまいり、短册を見せまいらせけり、又つぼねの給ひし事申きかせ侍れば、大德一々に御へんじ申されし、そのひとつには、かゝること老そうににげなきとや、むかしわがてうにしがでらの上人とて、行學世にすぐれ、九品の蓮臺にむまれんとの道心、たぐひもなく、御としつもりてやそぢにあまり、かほに四かいのなみをたゝみ、まゆに八字の霜をたれ給ひしも、きやうごくのみやすどころの、しがの花見のかへるさを見たてまつり、おぼへずこゝろをまよはし、

初春のはつねのけふのたまばゝき

てにとるからにゆらぐ玉の緒

とよみ給へば、みやすどころ「極樂のたまのうてなのはちす葉に、われをいざなへゆらぐたまのを、といひかはし給ふ事あれば、いまはじめて我ばかり、あくしんをくはだつるにもあらず、二には破戒のとがとや、

これ又きやうせつを見給はぬゆへなり、すでに日月燈明佛は、八人のわうじをもち給へり、大通智勝佛は十六人、今日の釋迦ほとけにも、羅睺羅尊者とて一人ましますゝ、かゝる妙覺極果のほとけの御うゑにさへある事也、たゞしこれらはしゆつけし給はぬ先の事なれども、それは上代にて、上根上智のじせつ、これはまつだいにて、下こん下ちの時分なれば、これほどのちがいめはあるべし、又羅什三藏は、權實二經を翻釋し給ひしほどの聖人にてましませど、誓願のすぢありとはきけど、一往は破戒の名を得給へり、そのうへ戀にはくしのたふれといふ事あるをもしり給はずや、三には諸鳥にわらはれんもかなしとや、是又つぼねの御身のいたみになる事にもあらずとて、大德「諸鳥ども我をわらはゞ我も又、口をもちたるおもひでをせん、ときやうかなどよみてわらひ給ひしと、大德もの給はぬ事までいひて、あるひはうらみ、あるひはきげんをとりて、こと葉に花をさかせ、心にみをあらせてかたり、何とぞ此事をすむやうにとやおもひけん、折ふし心にうかべるとて、

師匠さへ君がなさけをかうむりとならばうれしく名をもかへまし

これはきやうかながら、心持ある歌なれば、返歌し給へといへど、局心中には、白氏文集とやらんには、梟松桂の枝になき、狐蘭菊の叢にかくると書て、物すごきたとへにいへり、又或文には、父母をしよくし不孝の鳥なりといへば、とかくいやなるあひてなりと思ひ、まづ〳〵かへり給へ、姬君の御心もやはらぐやうにいひなし、いまの返歌をも、あとよりまいらせんといへば、とかくよしあしは御つぼねの御まへにあらんとくどきつゝ、古でらへぞかへりける、大德は小僧が物がたりきゝたまひて、過し春の比は、山がらのいさめにつきて、長月までなが〳〵しき秋をまち、今又つぼねがさうをまたん事、心いられのする事也との給へば、夜たかすゝみ出ていひけるは、いつともなくひかりのかげをゝくり、物を思ひたまはんより、もし御心もなぐさむやと、うらかたを聞たまひてはいかがあらんと申侍れば、大德のきげんなをりて、左樣のものしりはいづくにあるぞ、はやくゆきてきゝたき事なりとて、もはや出たゝんとすゝまれければ、しばし樣子を聞給へ、此深山をさし過ば、山のほとりに兎

の算の博士とて、安倍仲麿が末孫安倍泰成にもおとるまじきやうの、うらないしやありと聞侍しといへば、老僧こゝちよげに、一刻もいそぎつゝゆきて、御うら一つきかばや、翅をもちたるはかゝる時のようなりとて、弟子どもひきぐし、たゞ一とびにぞとびゆき給ふ、折ふし博士は他行なれば、かへりぬるをまちとりて、大德の云く、只今これへ參る事、別の儀にもあらず、身上のうらをたのみいりたき斗なり、たゞし御うらはいづれのりうにてましますや、博士のいはく、官位令に、賀茂の保憲天文道をもつて弟子の安倍晴明につたふと云、又三善家は算術をならふといへり、か程の安倍三善家、又は卜部氏などのりうにもあらず、我は月中の兎なり、これによつて月を玉兎となづく、詩人も綠樹陰沈んで魚樹にのぼり、淸波月落ちて兎波を走ると作り、これらのことばをおもふにも、月宮殿にすむべきものなれど、前世の宿緣やありけん、せんぞの時あまくだり、わが世にいたるまでこの國にとゞまり、卜占をことわざとし、世をわたりはべり、今時せけんにはやる、八卦のしよなどもこゝにあれど、これらはあさき事なり、わがうらはよそにかはりて、當意卽妙のふんべつなれば、かきものもいらずといへり、大德、さては世にたぐひなき事也、さらば御うら一つきかんとあれば、其時博士八卦のしよをてすさびになして、ものもいはず、しばらくありて、いひけるは、大德の調子をもつてかんがうるに、これはふかく身にうれいのつもりたるうらにあたり給へり、いかやうなるうれいにてましますぞととへば、大德は、年にあはぬ事とや、こたへかねてゐ給へり、小僧はやくさとりて、みゝもとへより、しかじかのなげきとかたり侍り、

博士きゝて、そのぎならば叶がたき御うらなり、先刻他行せし事は、我がともどちの中にようのことありて、うそのすみたまふ山の木がくれをゆきかへりしに、おりふし琴引き給ふひゞききこへて、あまりにたへなりしかば、たちとゞまりきゝ侍りしに、時をたがへじとや呂のしらべにてひき給ひし、これは秋の調子にて金なり、大德のものいひ給ふこゑは律なり、是は春のてうしにて木なり、金尅木と相尅すれば、思ふ事かなひがたき御うらなり、かゝる事の成就不じやうじゆは、たがひのむねにてのくふうべんべつなり、

殊にうそ姫のむねのけいろをみるに、くれなひにて火體赤色なり、大德のむねのけはいろはしろくして金體白色なれば、火剋金とこれ又相剋せり、こゑは口のわざなれど、根本は心のなすところなり、毛いろは身のわざなり、色心ともに相剋し給へば、ふきつの御うらなり、相剋にも相生にも善惡あれど、これはきらふところのうらにあたり給へり、かやうのうらは、せけんにはまれにて、わがいゑにある事也、そのうゑ姫君はうらわかみ、ねよげにみゆるわか草にて、いまだしげりもしらぬころにてまします、大德は大あらぎのもりの下草にもすぎたるよはひなり、ことに出家の御みなれば、一つとして君のきに入給ふ事なし、これらが何よりもつての相剋なり、忠言耳にさかふのことわりなれば、さだめてへたうらとやおぼしめさん、かくうらなひたてまつりても、なをわりなきあふせをねがひたまはゞ、前後はありとも、たがひにこの世をゆめとなして、もろともにわたりがはのあふせはありとも、今生のえにしはかたき御うらなりといへば、老僧は翅をかほにをしあて、あゆむともなくとぶともおぼへず、自坊へかへり、又れいの思ひの床にひれふし給ふ、かくてまたかの春の山かげは、秋もすぎ神無月にもなれば、ふりみふらずみ、さだめなきしぐれの雪もたちまよひ、物のあはれもまさり、さびしきおりなれば、又あたりの鳥どもあつまりていひけるは、さて〳〵すぎにしきさらぎやよひの頃、うそ姫へをの〳〵たまづさ短册をおくり給ひしに、返事のあるもあり、又なきもありつれど、まめやかにこゝろのとけたるかたはなし、うらみにはおもへど、又あなたにもだふりあり、そのゆへはひはのすゝめにより、歌をかよはし、返歌をみてなぐさみにもせんとのもよほしにて、ふりはへてわがゝたよりおもひよりたる方はなきとみへ侍り、世に四知といふ事あり、たゞ二人してしりたる事さへ、ひろまはるならひあり、いはんやしよてうの中の事なれば、もれきこへて我をろうするとおもひ給ひて、なげのなさけだになきとおもへば、つゆばかりのうらみもなしと、とり〳〵口口にかたりおはりて、又是より北にあたりてものすごきみ山あり、それは梟法師とて行學兼備の老僧ましますが、いつぞやうそ姫のわらはやみのとき、御枕かぢにまいられけるが、前世のしゆく業にてやあり

けん、ふいに心をまよはし給ひ、すでに存命不定のよし、風のたよりにきゝ侍り、かようのあやまちはよそのことゝもおもはず、そのうへしゆつけの御身なれば、とひたてまつりてもあしき事にてはあらじ、いざや此うちに心ざしあらんかたをば、つれだちてまいらんとて、みやまがらすあんないじやにて、をくれさきだちて、ほどなく山寺へゆきつゝ、此よしをぞいひける、

小僧は、なにたる御やうぞやとていでければ、み山がらす、たゞいまをの／＼のとぶらひ給ふ事、べちの事にもあらず、大徳の御なやみそのかくれなければ、御見まいのためばかりなりといへば、小僧ねやちかくまいり、しか／＼の由かたりければ、大とく、かゝる違例をしられたてまつるもめんぼくなけれど、御心ざしかたじけなければ、ふしながらもとてたいめんし給ふ、みな／＼あとやまくらにたちより、さて御わづらひはいかゞおはしますぞ、くすしにかゝり給ふや、きねんはし給ひたるや、佛神へりうぐはんなどかけたまひたるやと、ねんごろにとひ給へど、老そうははづかしくや有けん、又なやみやつよかりけんいらへもし給はねば、とり／＼にの給ふやうは、大徳のみけしきは、思ひしよりかよはく見へ給へり、今こゝにあつまりたる諸鳥どもの中に、經陀羅尼をじゆし、祈念などすべきかたもなし、さありとてたゞかへらんはきよくもなし、さあらば法華藥王品の金言、病即消滅不老不死といふきやうもんの字を、かんむりにをき、歌を一しゆづゝよみ、此ところの氏神のしやだんに、おさめたてまつらば、ちからをも入れずしてあめつちをうごかし、めに見へぬおに神をもあはれと思はせ、おとこおんなのなかをもやわらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なりと、古今にものせたまへば、さだめて神も納受し給ひ、大徳のやまひもなをり、ねがいもかなはんとて、をの／＼一首づゝよみ給へり、

山鳥

人しれぬみやまがくれの草も木も
　　てる日のめぐみうけざらんやは

時鳥

山ふかみ時雨のそむるもみぢ葉や
　　むねにたくひのいろをみすらん

瑠璃

うきこともうれしきこともさだめなき
　世のことはりとおもひなぐさめ

鶸

そことなきみ山がくれのすみかにも
　とひくるものやうき世なるらん

鳩

雲まよふみ山の水はすみぬれど
　すまぬこゝろのにごりもやうき

火燒

せめてさは世のならひとてうき事の
　あり共かずの尠なくも有るかな

鶍

うき身ぞと恨なはてぞたれとても
　此の世にものをおもはぬはなし

鵥

目をとめてみよやみもせんうき事も
　わするばかりの木々のいろ〳〵

駒鳥

月かげはさやかなれどももの思ふ
　こゝろのくまやさはりなるらん

尾長鳥

古でらや道ゆきぶりにとふとても
　のちのむまれのえにしならまし

目白

來世にてやすかりぬべきのりの師の
　なやみのあるはこのよばかりか

獦子鳥

有漏のみをはなれぬほどはくるしみの
　ある世としらばものもおもはじ

鵄

ふしておもひおきてうらむる心をば
　むすぶのかみもしらざらんやは

鳥

しとねをもこゆるなみだの川水に
　あふせのあらんときをしもまて

かやうにとり〴〵に、くちずさびつゝかき付給ひ、日もおちかたになれば、いとま申とてたゝれければ、大德は病中にて、おくりにこそまいらざらめ、せめてこしおれ歌なりと詠じて、あまたの御うたの返歌とも、

又とひ給ふ御れいとも、こゝろざゝんとて、

袖ぬらすこひぢとはるゝむくひには

四手のやま邊のみちしるべせん

と書きて、あとよりおひつきていひやりければ、をのをの吟じ給ひ、れいならぬうちには、きどくなるゑいかなりとほめつゝ、よき事おもひたちて、のちの世のつとめをし侍るといひあへり、なを日かずかさなれば、老僧はおきもせずねもせで、よるをあかす枕のうへにて、身のことをくはんじ、さて〱ひさしくながらへしゆへ、かゝるうきめにもあふことよと、小僧ばかりをちかづけかたり給へば、まことに尊意のごとく、莊子とやらんに、男子おほき則ば懼おほし、富則ば事おほし、いのちながき則は辱おほしとかけり、申はくはんたいなれど、此ことばのうち、するゑは老僧のいまの御すがたなり、論語にも老て死ざるは是賊をするなりとあるもようならずといへば、小僧がいさめもつともなれど、生死のみちは、自分のてづくりにもならずといひて、

わが思かなはゞしなんかなはずば

しぬもしなれじもしあふやとて

との給へば、小僧をそれながら御返事申さんとて、

しにもせず猶ながらへて逢見ずば

はぢよりうゑのはぢぞかなしき

とよみければ、大德はいはんこと葉もなくて、ころものそでもしぼるばかりになき給ふ、木兎は耳とき鳥なれば、はじめよりおはりまでこまかに聞けるが、きかぬふりをして、坊主はなにとてなみだにむせひ給ふやといへば、べちのしさいにもあらず、愚僧が破戒のしよぞんをもちたるゆへ、小僧にはじゝめらるゝ事、こうくわいしてもかへらぬ事なりとの給へば、木兎のいひけるは、主師親をいさむるも世のならひなれど、それはまへかどのことなり、ひめぎみへの艶書をも小僧がもちあるきて、事のかなはぬとて今のいさめは、賊後の弓なり、そのうへかゝる色欲のまよひは、大德の御身ばかりにもかぎらず、毘婆沙論とやらんに、優陀延王宮女をあまたひきいて、鬱毒波陀山にあそびたまひしに、五百の仙人こくうをかけりしが、このところをすぐるとて、いろを見こゑをきゝて、愛念をおこし、神足をうしなひ、山林の中へおつること、まことにつばさなき鳥のごとしといへり、又波

羅奈國の一角仙人は、扇陀女に心をまどはし、和州の久米の仙人は、深山に入り仙術をまなび、一旦そらにあがつてとびけるが、婦人のあしをもつてころもをふみあらふを見て、たちまち染心を生じて、そらよりおつと元亨釋書にのせり、此ことはりをば、なにとふんべつしたるやといへば、小僧はものもいはず、大とくはきをとりなをし、木兎を世にたのもしげにおもひて、さていかゞすべきとあれば、いせんのはかせのうらなひばかりにてはおぼつかなし、よくはしらぬ事なれど、うらにはしなぐ\ありといへり、かめのうら、くしのうら、つじうら、かどうら、時のうら、ゆふげとふうら、はいうら、みちゆきうら、みちうら、あしうら、石うら、心のうら、うたうら、などいふあり、又山すげうら、これは山すげのはをむすびあはせて、又そのするをかんなぎにむすばせて、うらのふことありといへり、龜のかうのうらは、卜部氏のもの、はかの木をもつて龜のかうをやきて、うらなふことあり、かたぬくうら、是はしかのかたの骨をやきて、これもはわかの木にてうらなふといへり「むさしのにうらべかたやきまさてにも、祈らぬ君が名うらにいでけり、などよめり、又天照太神岩戸にこもり給ひしとき、天香來山の庵のかたのほねをぬきて、はわかの木にてやきて、太神のいで給はん事をうらなひしとなり、此外いろ〳〵のせつあれど、しげゝればのこし侍り、かやうにうらはいろ〳〵あれど、むづかしくにはかにならぬ事はせんもなし、やそのちまたに夕占とふとあれば、われは日くれてすゞめいろ時にもならば、人のかよふ辻にゐて、人のこと葉をきゝて、うらなはゞやといひければ、老僧はともかくもはからひしだひとの給へり、ほどなくそのときにもなれば、木兎つじにいでゝ、一もとの木ずゑの葉がくれに、しのびいて、人のとをるをまちけるに、あるじまうけのをはりにや、いゑぢにかへると見へて、わかきどち五人つれだちてゆきけるが、酒にやゑひけん、竹にむまるゝ鶯の、竹生島まうでいそがんと、うたひてぞとをりける、木兎みゝをすましてきゝけるが、これはいみじきことはりなりと思ひ、いそぎたちかへり、めづらかなる御うら、きゝいだし侍りとかたりければ、大德まづこゝちよそうにて、竹生島といふうたひをば、なにとこゝろへて、よきうらと思ふやとあれば、木兎の

いはく、竹にむまるゝうぐひすとは、竹生島といはんぢよのこと葉ばかりなれば、べちのこゝろはなし、唯竹生島へまうでんといふことなり、これは御ねがひかなはんとの瑞相なり、いかんとなれば、ある經の文に、閻浮提のうちに湖あり、其なかに金輪際よりおひいでたる水精輪の山あり、天女すむ所となり、即此山の事なりといひつたへ侍れば、御ねがひのこんげん、たゞしくみちたらんさとしなるべし、此御山に一たびさんけいのともがらには、一さいのねがひをかなへ給ふといへり、そのうゑ辨財天はによたいにてまします、うそひめ又天照太神の御ゆかりにて、てんによの御すゑにてましませば、大德の御ねがひをかなへたまはんとの御うら、うたがひなき事なりといへば、老僧はかほの波もたちかへり、まゆのしもゝとくるばかりに、こゝろものばりてうちわらひ、さてこれほどの事なるに、いぜんのうさぎ博士のうらかたは、なにとてはづれたるやとの給へば、小僧は師匠にうらみはなけれど、いぜん木兎にいひつめられしむくひなくてはとおもひ、夜たかは又、はかせのひいきなればよびいだし、きゝてになしていひけるは、兎はかせのうら、何とてちがひたるとの給ふや、それは木兎がうらのあたりたる時の事なり、いまよりはちとはやきあたりはづれのさだめなるべし、われらの心には、大不吉の辻のうらと覺侍べり、まづあるじまうけのをはり、酒に醉たるものゝうたひといへり、酒は人の本心をみだすを正意とせり、法華經のたとへにも、醉酒而臥とて、酒にゑひふしたるゆへ、無價の寶珠をころものうらにかけたるをもしらで、他國をまよひあるき、衣食をもとめしとあり、ゑいなきゑひのくごとなどいひて、醉中のこと葉はみなあだごとなれば、うらなひのたねになるべからず、又さけのまぬものゝことばにして、うらなひみるにもよからぬことなり、そのゆへは、物のかずにてかんがうるに、大德の御うらかたは、木兎ひとりにて一とくのすいなり、うそ姫のかたにすれば、五人はいつきのつちにて、剋辻をとをりしものは他人なれば、たしよにましますどいふ事は、その詞をのこさずうらなひて、ぜんあくもさだむべき事なり、わがきにあはぬこと葉をば、ひろいすてゝ、きにあひたること葉ばかりを取て、うら

のふ事はわたくしごとなるべし、竹に生るゝといふこと葉はまづ不吉なり、いにしへ竹とりのおきなとゆふもの夫婦ありしが、竹のなかにいとひかる竹のあるを、あやしみて見れば、竹のよの中に、三寸許りなる人のうつくしくてありしを、いゑにもちきたり、おゝしたてければ、あたりもかゞやくひめとなり給ふ、御なをなよ竹のかくや姫とぞなづけたてまつり、あまたの人、この姫をえんとしけれど、つゐにかなはず、後はみかどよりけさうし給へど、我此國のものにもあらざれば、したがひたてまつらずとて、てんへのぼらんとしければ、内裏よりものゝふをつかはし、ゆみやなぐゐにてとゞめ給へどかなはず、つゐに八月十五夜の月のさやけきに、天上よりむかひくだりて、くもゐはるかにのぼり給へり、このかゞやくひめぎみてん女にて、人のねがひをかなへたまはず、てりうそ姫又、てんによの御すゑなれば、おなじ御心なりとしらせんためのうたひなるべし、竹にむまるゝとは、かくやひめのことゝきこへ侍り、うぐひすといふことは、これもよからぬ事なり、詩人のことばにも、鶯いまだいでず遺賢谷にありとて、賢人のあしき代をいとひ、たにゝひきこもりたるに、うぐひすをたとへ給へり、うそ姫やそぢにあまる老僧とそひたまはゞ、あしき世なるべし、それをきらひて、わがすみかにひきこもり、いであひ給ふまじきとの占なり、竹生島までいやなり、いのらんねがひのあればこそ、竹生島まではるぐ〵とはまうでぬれ、これもならぬこひのうらなり、とかくうぐひすといふじのいりたるにてしりぬ、うぐひすはひとく〵となくと、古歌にもあれど、つねのものゝみゝには、法華經となくときこへり、只老僧の姫君ぐるひを思ひとゞまり、大日經金剛頂經などのはづればかりよまんより、法華經をもおり〵はよみ給ひ、後世のつとめをなし給へといふつげなるべし、さて〵木兎は、みゝもちたるかいもなしといはれて、おやまりたるていにて、さだめて小僧こそ、よきうらしりたるらめ、うらなはせたまへといひてぞ立ぬ、大德ははじめのきげんとはちがひ、さやかなる月日に、にはかに雲のたちおほひ、むらさめなどのしたるけしきにて、雨眼のひかりもくもり、ねぶりめになり、涙の雨をふらし、ひめもそうちふし給ひしが、又はいをきつゝ、とかくでしどもをたのめ

ば、むづかしきいひ事のみありて、思ふ事はかなはず、此のうへは自身一占うかゞひて、心をもさだむべし、俊頼の歌に「神風や三つの柏にことゝひてたつをま袖につゝみてぞくる、これは伊勢太神宮にて、三葉がしはをとりてなぐるに、たてば思ふことかなひ、たたぬはかなはぬなり、たつを袖につゝみてよろこぶなり、この國は神國なれば、いざやこのうらをして見ん、太神宮へは遠國にて參らずとも、神慮をおもふ心のまことさへあらば、うちとのみやもこゝにおなじことなるべしとて、かしはをとりよせて、なげて見給へば、此葉しばらくたちたり、さてこそ木兎がうら、まさしきことなりとほめ給へば、小僧はらやたちけん、とび出ていひけるは、此かしはうら、ひたすらにはあらず、いろ〳〵のせつあり、續古今の歌に、

思ひあまりみつのかしはにとふことのしづむにうくはなみだなりけり

とよめり、これはかしはを水にうかべて、しづめばかなはず、うかべばかなふとしることなり、二いろながら吉事ならば、木兎がうらにもならんといへば、さらばとて、みたにゝくだり、てあらひくちすゝぎて、神慮をねんじ、ながれのきよみどころへ、柏のはをうかぶれば、うかびはせてぞしづみける、小僧は我うらあたりたるとや、きげんよさうにて、見給ひたるやといへば、一どにてはさだめがたしとて、又よのかしは葉をうかぶれば、なを水底ふかくぞなりにける、大德も木兎もこと葉なくて立かへり、小僧はなにともいはゞいへ、うらかたのよしあしは、いまだおちつかず、今一度ふみをまいらせて、その御かへしによりなんとて、たゝふがみのところせきまでかきつゞけて、おくに、

さらぬだに五のさはりおもき身の我こひしなばかろからんやは

とよみて、此たびは木兎にやり給ふ、もちゆきて、かやぐきに此よしかくといひければ、姬君も此ごろなやみ給ひけれど、大德の御心ざしあまりにあはれなれば、つぼねのきげんあしからんはしらねど、うかゞふてみんとて、たまづさうけとり、御ねやちかくまいり「色みへでうつろふものは世の中の、人の心の花にぞありける、とはきけど、かの御いのりの師の心のはなは、いまだうつろひもゆかずはべりとて、文をまい

らせければ、あはれとやおぼしけん、又御身のわづらはしきに、此世をゆめともなさば、のちの世のたよりにもとやおぼされけん、なみだぐみ給ひ、あなたよりのたゝふがみのかたつかたに、姫君、

こいしなば我ものこらぬみつせがは
まよふ淵せのせぶみをたのまん

と書き付給へり、かやぐきとりつたへて、わたしければ、木兎なのめならずよろこび、いそぎもちてかへりしが、みゝより目やきかざりけん、みちにてとりをとしたるをもみつけず、てらへかへりおどろきけれど、とりにかへらんも、山々嶺々谷々の、木ずゑやこのま木の下を、しのぎつゝこしみちなれば、たづねんたよりもなくて、ばうぜんとしてゐたりけるを、大徳いかにくとゝひ給へば、木兎のいはく、御かへし給はりあまりのうれしさに、道をいそぎまいるとて、とりをとし侍り、たゞし御返歌をば、そらに覺へぬるとて、

こひしなば我ものこらぬみつせ川
まよふ淵せの瀬ぶみたのまん

とかきつけ給ひ、よのことはりはなかりつるといへば、大德きげんよさうにて、これは二世までちぎり給はんとの御心、いちじるき御うたなり、木兎がよろこびつるもことはりなりとの給へば、小僧がいひけるは、まことにめでたき御返歌のことはり也、一世二世のちぎりのことはいざとよ、いつぞや算はかせのことばに、たがひに此世をゆめとなして、もろともにわたりがはのあふせはありとも、今生のえにしはかたき御うらなりといひしに、よくにかよひたる御歌なり、わたりがはみつせがは、いづれも三途の川のことにやといへば、老僧、とかく小僧はかたきが弟子となりたるや、あたりにをればはらもたつとて、てらのおくなる枯木のうつほへぞとぢこもり給ふ、さるほどに、木兎がとりをとしたるたゝふがみは、たにかせはげしくて、おのへにふきあげ、つゐに鵰のすむなる山にとゞまれば、是を見つけ給ひ、うらめづらしきたゝふがみかなとて、兄鷹兒鷂雀鷂鶍までよび出し、このたゝふがみのいで所はいづくならんや、しらずば、すいりやうになりともいひてみよとあれば、みなくく大事のいらへとやおもひけん、よくくくあんをめぐらしやがて申あげんとて、角鷹のまへをたち、みなひとゝころへあつまりていひけるは、此たゝふがみは、

梟坊主がしはざなるべし、又いつぞやわれらの中にて、うたなどをくりしも、つゐにはもれきこへなん、いざやこのつゐでに、はなしのやうにこなたよりかたりいださば、ふかきとがめはあらじと、かたみにこころをさだめ、しばらくありて角鷹のまへヽいで、ただいまのかき物のいでどころ、しかとおもひさだめたるかたもなし、たゞし雀鴟がかしこきものにて、心あてのとをりきこしめさるべしといへば、ゑつさいすヽみ出て、べちにうしろめたきかたもおぼへ侍らず、たヽふがみに大德とかきつけあり、これよりはるばるとたにみねをへだてヽ、山のおくに、梟法師とて有驗智德の老僧あり、さりながら戒行はちとゆるがせなるやうにきヽしおひだ、これにてや侍らん、すぎにし春のころ、をとにきこゆるうそ姫のかたへ、諸鳥どものこらず歌をよみかはし、なぐさみぬるよしきこへしかば、われ〳〵などもよりあひ、歌をつかはしはんべり、返歌あらば御みヽえもたてんとせしかど、うそひめれいならざるよしきこへしが、そのゆへかいまだかへしもなし、かヽることをかの老僧うらやましく思ひ、歌をまいらするに、その返歌をつかひのとりをとしぬると、おもふばかりなりといへば、角鷹それほどならば、われも一首よみそへんものをといひてわらはれけり、いざさらば老僧のすみかへをしよせ、ことのしさいをたづねんとて、まづ御さきへはひたかをつかはしたまふ、ほどなくてらにいたり、角鷹よりの御つかひといひければ、小僧をしかりうつほ木へひきこもられしはらだちごヽろも、いづくへかゆきけん、おどろきさはぎ肝をけし、とるものもとりあへず、まづたち出て、なにたる御用ぞととひ給へば、鶍のいはく、べちの事にもあらず、おとし文のありしを、鵰のましまし山へ風のつたへ侍り、そのうちに大德と云ふなのあれば、そのいはれをとひ給はんとて、角鷹こヽもとへましませば、御ともには兄鷹兒鴾をはじめ、みな〳〵まいらるヽといへば、さらばてらの內をもきよめんと、いつはりをいひてうちにいり、でしどもをよびあつめ、木兎があほうなるおとしぶみゆゑ、此ごろのたはぶれごとみな〳〵あらはれ、鵰をはじめ、をの〳〵これへよせ給ふべきぶんなり、さだめて破戒の僧とて、せつがいにやをよびなん、にげてもにげとぐべからず、ちからのおよぶほどは、い

ひわけをもしてみん、まづしゆつけの威儀をぐそくし、なるほどたうときふりをせよ、とし月のたしなみは、かゝる時のようなりとて、うつほ木の中より木の葉にてつゞりたる衣をとりいだし、弟子どもにきせ、我はこけごろもに、つたかづらにてしたるけさをくびにかけ、いかにもたつとげなるふりにてゐ給へり、ほどなく鵰をはじめ、いづれもおはしましければ、大德は同宿ひきつれ、てらをへだてゝむかひにぞ出給ふ、やがてゝらの軒ばの松の下へに、鵰ゐ給へば、御とものしゆ、又大德もにはにしこうし給へり、さてろうそうは年にもにおはず、其上しゆつけの身にて、好色の文のとりかはし、殊に小僧又は木兎などを、使にあるかせし事かくれなければ、破戒のつみのがれがたし、たゞしいはん事もあらば、ありのまゝに申上たまへと、兄鷹兄鷂くちぐにとひ給へど、大德はきもはつぶしつ、年はよりつまりたり、忙然として老のなみだをかきたてたる斗にて、ものもいはず、小僧此ごろは木兎におもひかへられ、しからるゝの身なれど、こゝはいのちをすてゝ、しゝやうのをんをほうせんとおもひ、にはのなかばへはひいでゝいひけるは、ばうずは老耄にて御あいさつもなるべからず、つねづねの所存だてぎやうぎも、われらえんていぞむじつるまゝ、をそれながら御へんたうを申上侍り、まづおとし文に、大德の二字これあるをあやしみ給ふなり、人倫は申にをよばず、禽獸にいたるまで、學力のある法師を、大とこといふ事めづらしからず、日本は小國なりとはいへど、六十餘州といへり、そのうちの人畜にいかばかりかあらん、たとひ梟大とこと書きたりとも、又國々山々に何程か、梟の大とことよばるゝも有るべければ、我師匠にばかりかぎるべからず、又木兎と小僧が使にあるきたるとの給ふや、世の中に木兎のおほき事、目連の神通にてかぞへ給ふとも、かぎりあるべからず、ことに我ごとくなるかうむりの、小僧になりたるもおほかるべし、いづくの國いづこの山の木兎かかうむりのあるきたるを、われらとばかりさだめ給ふは、道理にそむき侍らんや、これによつてむかしをおもふに、かゝる有驗智德の僧侶には、非理のなんあるもの也、そのゆへは唐の一行阿闍梨は、楊貴妃と名をたち給ふ、あとかたなき事なれど、そのうたがひによつて果羅國へながされ給へ

り、此國へ行には三のみちあり、輪地道幽地道暗穴道これなり、中に暗穴道は、重科のものをつかはすみちなり、一行も大犯の人とて、このみちをやり給ふ、七日七夜がうちは月日のひかりをも見ず、冥々として人もなく、森々として山ふかし、まことにあはれなるありさまにてましく〳〵けれど、無實のつみと天道もあはれみ給ひて、九曜のかたちをげんしつゝ、一行をまぼり給ふ、時に一行右のゆびをくひきり、左のたもとに九曜のかたちをうつし給ふ、是を眞言の本尊九曜の曼陀羅といふなり、上代末代と時刻はかはれど、我師大德も眞言の學匠にてましませば、かゝるなんはあるべき事なり、むかしの權者のあとをおひ、大德また無實のなんにあひ給ふ、未來はなを一行阿闍梨の、佛果のあとをおひ給はんと思へば、我がしゝやうながらたのもしさもいやまさり、なげきの中のよろこびなりと、辯說はたゝふたり、ことばのいろをかざり、われもなみだをもよほし、ありがたげにかたりなせば、鴟兄鷹以下何も嗔恚のほのほをけし、道念をおこし、小僧物がたりさへありがたきに、大德老耄ならでかたり給はゞ、さぞ殊勝にあらん、かゝる物しりの

艶書などかきたまはんや、うたがひたてまつるも、未來のさはりなるべしとてかへられけるが、立かへり、聊爾なる事いひつる物かな、大德ゆるし給へと禮拜してぞたち給ふ、老僧はおそろしきゆめのさめたるこゝちして、兩の手をあはせ小僧をおがみ、此の比かたきのやうに思ひて、いけんをもきかざりつるゆへ、すでに命をとられんとせしに、古事本說をいひ出し、鴟の心をやはらげ、われをたすけぬる事をおもへば、敵のなかのみかたなり、木兎は我不行儀をもいさめざりければ、かはゆく思ひつれど、けつく文をとりをとし、わがいのちをうしなはんとせし事は、みかたのなかのかたきなりといひて、又さめ〴〵となき給ふ、此事うそ姬へは、いづかたよりしらせたてまつりけん、御いのりにまいらせし老僧は、木兎がおとしつるたゝふがみゆへ、もろ〳〵の鷹どもにせめられ、からきいのちをたすかり給ふときゝ給ひ、わが身のゆゑとやおぼしけん、なを違例もおもくなり給へば、つぼねをはじめ、むつましくし給ふかぎりは、あとやまくらにさしつどひ、なくよりほかの事はなし、そのなかにやまがらのいひけるは、いつぞや心のおさ〳〵し

からぬ、いのりのしのあんないせしよりこのかた、さやうのことにはこりはて侍り、せめてまづよからぬくすしになりと、かけまいらせたくおもふはいかにといへば、その〳〵これはよきはからひなり、そのくすしはいづかたにあらんやといへど、しりたるかたもなし、かやぐきのいひけるは、これより一さとほどへだゝり、外山(とやま)のすそ山畑のほとりにすむなる、土龍(うごろもち)とゆふものこそ、かたのごとくのくすしにて、あたりにすめるとりけだものゝ、てうほうなりときゝ侍しといへば、つぼね、これほどのことはあらじとて、かしらだかをつかひにやり給ふ、いそぎゆきつゝたづねけれど、土のそこふかく住給へば、いひつたへんやうもなし、まことやらん土龍は、朝まだき又は暮ふかくなれば、土ひとへしたまでいで給ふときくなれば、そのころをまたんとてゐたりけるに、ほどなく日もいり、うすゞみのゆふべにもなれば、あんのごとく土をうがち給ふ、かしらだかそろ〳〵とより、ちと物申さんといひけれは、土龍なにの御用ぞとて、土よりうへへ出給へば、かゝるわづらひあるよしかたり侍り、我は醫者と申ほどの事にはあらざれど、これまで御使もだしがたければ、くすりなど用意つかまつり、醫書をもたせ、明日參上申べしとてぞかへされける、使はつばさをはやめてたちかへり、いしやの返事をいひければ、夜のあくるをおそしとまち給ふ、土龍はうちのものひきぐし、あさみやくとらんとや、早朝よりきたり、案内をこひければ、まづかしらだかむかひに出けり、此ほかいづれも出あひ、すこしもはやく脈をみせまいらせんとて、姫君の御ねやへいざなひければ、ちか〴〵と御そばへより、左右みやくをねんごろにこゝろみ、顏色をみてたちのき、しばらくありて、御わづらひはなにとも見とゞけ侍らねば、われらの療治にはかなひがたきよしいへり、時に四十からこころにおもふやう、此醫者のていをみるに、さのみものしりたる樣子にもあらねば、君へくすりまいらせん事おぼつかなし、醫道のことをたづね、そのうゑのことなるべしとおもひ、わがみはしらぬ事なれど、御脈のかたちをなにとこゝろみ給ひて、療治なりがたきとはの給ふや、みやくのさはうをもあらましかたり給へといへば、これはおもひもよらぬことをとひ給ふとは思へど、すこしもいらへずは耻辱なるべし、

我もいにしへ、典薬寮あるひは醫博士等のにはの土中にすみなれ、醫論講釋のたび〳〵、脈の名などをばところ〴〵きゝおぼへ侍れば、かたらばやとおもひ、療治かなひがたきと申すとて、御脈とりおぼへたるにもあらず、年月あまたのわづらひを見侍りしたんれんばかりなり、そのうゑ脈をとりしりたりとは申がたき事なるべし、

それみやくは、脈論もあまたにて、ならひ又かぎりなき事なり、あるひは三部の脈、三部九候の脈、四季の脈、五臟賊邪の脈、男女反脈、生死定脈、又は七表八裏九道七死の脈などいひて、しゆ〴〵の脈あり、此外はしげければりやくし侍り、かくのごとく名ばかりはきけど、いかやうなるかたちともしらず、又浮雲にむかふがことし、きはをしる事なしとはいへり、たゞ四脈を祖とすると、醫林正宗とやらんいへるものにありときけば、われらごときの麁學の者に、にあひたるちか道と思ひて心がくれ共、それさへいまだしかとおぼへ侍らず、これは浮沈遲數の四なり、たゞいまの御みやく、沈にしてちからなければ、きをわづらひたまふと見へたり、わづらひにはしなおほしといへども、内因外因不内外因と云より外はなきやうにきこへ侍り、君の御煩は七情よりおこり、中にもつよく物を思ひ給ふ御脈なり、其ゆへは思者則脈結すとあり、又沈極則伏、濇弱はぢしがたしと、古人の云しににたる御脈なれば、かなひ難きと申斗なりといへば、四十からをはじめ、皆々此物語を聞て、是はきどくなる事かな、まこと土泥の中より、いろかたへなるはちすのはなのさきいで、不浄なるつちのなかより、こがねのいでたるおもひをなし、御びやうしやうも御みやくも、御つもりにはちがひ侍らず、御藥まいらせたまへと、つぼねをはじめいづれもいへば、醫師の云、さやうにしきりにのたまへば、いなみがたき事なり、さらば調合仕らんとて、供のものをちかづけ、ねずみのかはにてぬいたるふくろを、一つとりよせ、そのなかよもをとり出しけるが、いづれにもかきつけあり、つぼねも四十からも、なにぐすりをかあはせぬらんと、うしろめたく思ひ、かきつけをねんごろにみて、これは和名にてましますや、此まへきゝつるくすりどもの名とはちがへり、なにとしたる事ぞといへば、われら

のいゑには、和名をもちいきたれり、たゞしくすりの寒熱能毒はおなじ事なり、

いま世間にては、此加乃爾介久左をば人參、平介良をば白朮、末豆保土をば茯苓、阿末岐をば甘草、和禮毛加宇をば木香、美久利をば香附子と云とはきけど、よくはしり侍らず、又この蚯干はみゝずのかげぼしなり、御むしのこゝろあれば、そのおさへにいれ侍り、これは別て家傳のひやくなり、本草綱目とやらんにも、長虫をころすといひ、又くはひちうをさるとのせ給へりと、つたへうけたまはりぬといひつゝ、一包調合してせんじやうはつねのごとくなりとて、つぼねにわたし、さらばとてざをたちければ、みな〳〵をくりにいで、御藥をばまたかさねて、とりにまいらせんとてぞかへしける、その後、鵰はたかどもをよびいだし、うそ姫への文の事、かの梟坊主はしらざるがまことさうなり、さありとてうちをくべきにあらず、鵰つかひにゆきて、みやづかひをもするやうにいひなすべし、けふは日がらよからねば、あすゆけとての給ひけり、鷺はきくよりはやく、うへ見ぬ鷺のすみ給ふところへゆき、かゝるもよほしこそ侍れといひければ、さやうのと、いまゝできかざりけるこそくちおしけれ、をくれてはあしかりなん、文もうたもいるべからず、鵰と我ちからくらべにすべし、よのものまでもなし、鷲すぐに使にゆくべし、とく〳〵との給へど、けふは日がらあしゝとて、夜のあくるをまちかね、あさまだきよりゆく、なにとかしたりけん鵰も鷲もおなじ時に出あい、つぼねましこをよび出し、鷲鵰よりの御使なり、よからぬいもせのさだめあらんより、御みやづかひにいで給へとの仰なりと、雨のつかひおなじやうにいへば、しばらくまち給へ、そのよし申さんとてうちへいり、こまかにかたりければ、なやみのなかばにてはあり、きゝもあへずたへいり給ふを、おもてに水そゝぎなどして、いきいで給へるを、いろ〳〵なぐさめまいらせ、わが身などはかろふむねあれば、此れいならぬみかたちを、御つかひに見へ給へとて、鷲鵰を御とこぢかくしやうじあげ、つぼねましこいひけるは、此違例のやうすくはしく御申給へ、すくすくしくなり給はゞ、そもじさまたちの御ようをなにゝてもかなへまいらせんといへば、さしばひたか、此こと葉はきゝ所とやおもひけん、きげんよさうに

て、二ところの御まへをば、われ〳〵にまかせ給へとてたちゆけば、みな〳〵よろこびあへり、かくて使どもみちにてだんがうしけるは、此の事かたみのいどみにならば、よからぬことなり、とかくわづらひのおもきやうに、いひなさばよからんとて、鷲鴟のまへへいでゝいひけるは、仰せのとほりつぼねをもつて申つれば、わづらひなかばにて、御返事申さんやうもなし、いつわりなきしるしには、とこのうゑながらまみへ参らすべし、こなたへいらせ給へとありしとき、ゑんりよにはおもひしかど、もしまことならぬわづらひもやとうしろめだうて、ねやぢかくよりてみ侍りしが、おき給ふこともならず、にほひやかにうつくしげなるかたちの、いたふをもやせて、ことにいでゝきこへやらず、あるかなきかのけわひ、きりつぼのかういの、かぎりとてわかるゝみちのかなしきにと、ながめ給ひしも思ひいでられ、李夫人の、甘泉殿のゆかにふしけんいにしへも、かくやありつらんと、なみだをつばさにつゝみてたちつると、たけきあすらきじんのこゝろも、やわらぐやうにもかたりなしぬ、鷲鴟もあはれとやおもはれけん、さてはきのよからんほどは、まつべしとぞの給ひける、さて又姫君のあとやまくらに、したしきかぎりはさしつどひ、おなじやうにいひけるは、二ところよりの御使、此たびばかりにはかぎらじ、御身すくよかになり給はゞ、したがひ給はんや、よのとり〴〵とはちがひたる事なれば、まだきより御こゝろをもおとしつけ給へとぞいひける、姫君はなやみたまへば、ちからなくて、いへばえにいはねばさはがれてと詠せしも、いまわがみの上なり、さて〳〵みな〳〵は、何とてためしなき事をばの給ふや、おなじ日おなじ時に御つかひたちて、御こころざしのまさりをとりもなきやうなるに、いづかたへしたがひたてまつらんや、むかしもかゝるためしあり、櫻子といひける女ありしを、二人のおのこせつにおもひ、て命をすてゝあらそひければ、女のおもひけるは、昔より一女のみとして、二門にゆくことなし、又おとこのこゝろもやはらぎがたければ、しかじ、身をうしなはんにはとおもひ、はやしにわけ入て木にくびをかけてみまかり侍りぬ、二人の男是をみて、なげきけるが、思ひのなみだをおさへて、「はるさればかさしにせんと思しに、櫻の花はちりに

けるかも、「いもが名にかけたる櫻花さかば、つねにやこひんいやとしのはに、とひとり〴〵歌よみなどして、したひけれど、そのかいもなきといひつたへり、此歌どもは、萬葉とやらんにのりけるにや、又いつぞやのいのりの師の、いかばかり心をつくし給へど、よし〳〵しきことばをさへかはし侍はで、世に時めきぬる御かたなりとて、したがひぬるもみちにそむかんや、貞女兩夫にさへまみへずとやらんきくに、これは三ところよりおなじやうなる御心ざしなり、又いにしへやまとの國のことかとよ、縵兒といひし女を、三人のおのこありて、こゝろ〴〵にをろかもなく、いひよりければ、女のおもへらく、一女の身はきへやすき事露の如し、三雄の心ざしはやはらぎがたき事石のごとしといひて、つゐにみゝなしの池にゆきて身をなげてはかなくなり侍り、三男かなしみにたへずして「みゝなしの池しうらめしわきもこが、きつくかくれば水も火とならん「あしびきの山かづらのこけふゆくと、我につげせばかへりこましを「足引の山かづらのこけふのごと、何れのくまをみつゝきにせん、とこゝろ〴〵に歌よみしたひけれど、そのしるしもなかりつるとなん、これも又萬葉の歌にや、わが身のうへも此むかし物がたりにかはらざれば、いまいたづき事はなしとも、いのちながゝらんやはとて、よゝとなき給へば、つぼねをはじめいづれも、いかなる御心たがひもいできやせんと、あはれもまさりてつばさをぞぬらしける、かくて月日もかさなれば、三冬もするゑになり、日もくれ夜にもなりゆけば、物のけしきもあはれにさむさもましぬれど、姫君はねやへもいらせたまはず、はしぢかくゐ給ひて、おもふ事いはでぞたゞにやみぬべき、と歌人のいひしことの葉まで、今身のうへになりぬとはおもひ給へど、ましこはたのもしきこゝろなれば、いひあはせばやとおぼしめし、しのびにちかづけ給ひ、いまはの時まても、ほにいでじとはおもひつれども、わこせはわきて、心やすければしらせ侍り、さて〳〵わが身のこしかたゆくするゑをおもひつゞくるに、一かたならぬ世のうさなり、此身さへ露とも霜ともきへはてなば、よそのうらみをもおはじ、おしみてもおしみとぐべき命ならねば、じがいをもせばやとおもひしかど、女性には餘りに心づよくにげなきわざなりと、なからん

跡のとなへをはゞかり、ねがはくは此ころのなやみのよわりにて、とにもかくにもならばやとおもひしかど、いまだ定業やきたらざりけん、わが命のたへざりける事よ、一日々々とのびゆきて、いかなるむくつけき目にかあはん、あひての後は千たびもゝたびくゆると、そのかいもあらじ、此うへはせんかたなければ、世のそしりをはゞかるべきにもあらず、とてもおもひたちたる事なれば、此夜のあけぬまに、てづから我身をむなしくなさんとはおもへど、じがいをばなにとするものやらん、しらざることなれば、とやせんかくやあらましと、こゝろ一つをさだめかねぬるとかたり給ふうちに、じこくもうつりゆき、やう〳〵ゐまちの月もいでぬれば、いにしへ人のすさまじきためしにいひけんも、ことはりなる光かなとくちずさび、此の世の月を見ることも、今ばかりとや思ひ給へば、御こゝろぼそさもいやましにて、なげき給ふことのみあり、さてよの中の心のまゝなりせば、あはれみふかくおふしたて給ひし、たらちねをさきだてたてまつり、御あとをこそとぶらいまいらせんに、さはなくて、さかさまになげきをかけまいらせん事、かなしともいふばかりなし、父母恩重經とやらんには、懐胎守護恩、臨産受苦恩、生子忘憂恩、嚥苦吐甘恩、廻乾就濕恩、乳哺養育恩、洗濯不淨恩、遠行憶念恩、爲造惡業恩、究竟怜愍恩と、說き給ひたるときゝしに、此十恩をもわすれたるやうになりゆけば、三世の諸佛、又は六道能化の地藏薩埵、閻魔大王も不孝のものとて、さぞにくみたまはんと、つみふかくおぼゆれど、思ひとどまるべき道にもあらねば、此事ちゝはゝにもしらせたてまつり、今生の御いとまごいをも申さんとは思へど、たれやのものか、まのあたりにて我が子のじがいするを見て、のこらんとおもふおやのあらん、ある經には父母常念子とゝき給ひ、古人も「人のおやの心はやみにあらねども、子を思ふみちにまよひぬるかな「さとちかく山路のすゑになりにけり、のがひの牛の子をおもふこゑ「子を思ふやけのゝきゞす立かへり、けむりのうちに音をのみぞなく、とよめることはりをおもへば、しらせたてまつる事もならず、そのづから不孝のやうになりゆくかなしさなど、いひをきつるとしらせまいらすべし、さて又局にはしらせたけれど、これもかぞいろにかはらぬ事なれば、われ

をさきだてんとはおもはじ、いさむることもあらんに、そむかんは後の世までのさはりなるべければ、おもひとゞまりぬ、わが身こゝろにへだてなきとをり、よきやうにはからひ給へ、此三のたんじやくをば、なからんあとにて、二ところの御かたと、いのりの師に見せたてまつれとて「つゐにかつゐはでたへぬる玉のをの、ながきうらみを君ものこすな、とかきてをきたまひて、ねやをしのびやかに出給へば、ましこもつづきていでけるが、とゞめまいらせんかとは思へど、とまりたまふべきみけしきならねば、かなはぬ事いひいだし、後の世のさはりになしてはいかゞと、おもひとゞまりていひけるは、わが身もをくれず御ともと申たけれど、今の給ひし御ことの葉、又は御さいごのやうすをも、みなく\にかたりきかせ侍らざらんも、ほいなきことなれば、夜あけなばのこし給ふ御みづぐきをも、つぼねにわたし、御あとよりをひつきたてまつらん、六道のちまたにてまち給へ、いづかたへなりともおはしまさん方へ、つきそひまいらせんといへば、それまでもなし、心ざしふかくてわれをわすれずは、あとにて後世をもとひてたび給へとばかりにて、はるく\とそらをながめやり給へば、月もはやにしの山のはにおちゆくを御らんじて、わが心がくるまひ、さはりのなきさきに、一時もはやくゆかばやとおもひ給ふ、御こゝろのうちぞあはれなる、かやうに西方浄土もおなじかたにやと、うら山しくおもひたまひ、さはりのなきさきに、一時もはやくゆかばやとおもひ給ふ、御こゝろのうちぞあはれなる、かやうに世をはやうなさんとおもはゞ、後の世のつとめをもせんものをと、くゆるといへどかひもなし、たとひ又浄土をねがひたりとも、往生する程の善根をなすことはならじ、そのゆへは三部經のうち、阿彌陀經とやらんには、舍利弗不可以少善根福德因緣得生彼國とて、すこしのぜん根にては、彌陀のみくにへうまるべからずとのべ給へり、そのうゑ彼國と此國とのあひだに、華鬘國とて五欲のたのしみおほき國あり、安養世界へ往生せんとする人、此國をかならずとをるとて、十人に八人は快樂に着してこゝにとゞまり、終に惡道におつると見へたり、これらはみな浄土をねがひたる善人のうへにて、往生のなりがたぎ事どもなり、わがみはいまだ年もゆかざれば、未來のことをしらず、花をながめ月にたはぶれて、あかしくらしければ、少善根にてもなしたるためしなければ、浄土へむ

まれんことおぼつかなし、たゞしさいごの念力によつて、などか彌陀のみくにへ生れざらん、觀經とやらんには、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とのべ給ひ、又雙觀經十八の願には、欲生我國乃至十念若不生者不取正覺とゝき給ふときけば、我いまの一念十念によつて、彌陀如來六十萬億那由多恒河沙の御身をつゞめ、丈六のみかたちを現じ眼前に來迎し給ひ、やす〳〵と九品の蓮臺にいたらしめ給へと、高聲にの給ひ、念佛十遍許となへ、なむとなふる聲のうちより、つたかづらにくびをかけつゝ、あしたの露とぞきへ給ふ、かくて夜もやう〳〵明ゆけば、御ねやのうちにては、いづかたへゆき給ふと、おどろきさはぐこゑしければ、ましこむなしきからをば、あとにのこしをきつゝたちいでゝ、姬君のいひをき給ひしことのは、さいごの御ありさまのこさずかたり、たんじやくとりいだし、つぼねにわたしければ、あきれはてけれど、もしもいきいで給ふこともやと、いそぎゆきてみけれど、はや御はだへもひへはて給へば、せんかたもなくて、なく〳〵よりほかの事はなし、かゝるまぎれに、ましこもいづちへかいにけん見へざりければ、たづねんとするところに、一くだりの文あり、とりてみれば、さて〳〵かやうになりぬる事、年月君のむつましくし給ひつれば、をくれてひとりのこらんもかなし、かた時もはやく御ともにとおもひつれど、のこし給ふ御ことのは、又はいまはの時のあはれをも、そのにかたりまいらせんためばかりにて、しばらくのこりつる也、黃泉の旅のそらにて、まちびさしうやおぼすらんといそげば、こまかならずと書とゞめ侍り、君のなり給ひしやうに、つたかづらにもかゝりたるかと、木ずゑ木のまをのみたづねければ、さはなくして、じがひし給ひし木がくれに、いは井の水のありしに、身をなげてぞみまかり侍りぬ、つぼねをはじめなきたる斗にて、時うつりゆけば、たがつぐるともなく、われさきにとり〳〵にとぶらひ給ひければ、後には鷲鵰も鷹どもを引ぐしていで給ふ、梟法師もでしどもつれだちてぞ參られける、その〳〵うそ姬のつたにかゝり給ひしけはい、ましこが水におぼれしありさまを見て、なみだをながさぬかたはなし、むかし唐の楊貴妃、安祿山が世をうばはんとせし時、馬嵬が原にてむなしくなりしおもかげもかくやあらん、さ

ればいにしへの詩人のこと葉にも、平生のがんしよくは病中に變ず、芳體眠れるがことし新死の姿、といひ、歌人も「わが思ふ身はみなのべにちりはてゝ、あさぢがもとのちりとこそなれ、となかめをのこし、これのみならず、朝には紅顔ありて世路にほこれども、暮には白骨となりて郊原にくちぬ、ともいひ、又、「すゑの露もとの雫や世の中の、をくれさきだつためしなるらん、ともよめり、かゝる詩歌どもをも、今ひめぎみにつけて、はじめてきゝたるやうにおどろくばかりなり、これのみならず「ひきよせてむすべは草のいほりにて、とくればもとの野はらなりけり「水は水火はもとの火にかへりけり、思ひし事よすはされぱこそ、などゝもよめり、ひきよするとは、さきの世の業煩惱が、地水火風の四大をよせて、此身をつくれども、とくればもとの野はらになると、始終をよめるが、後のうたはとけて地水火風の四大が、もとへかへりたる事ばかりをよめると見へたりと、たがゝたりいだすともなく、あまたの中にていひかはし、旦生暮滅の世のなかなりと、鳥々のなげきあさからず、なみだはあめとふりぬれば、谷々のみかさもまさるばかりなり、さてまたつぼねは、三のたんじやくとりいだし、三ところへまいらせ、かくなり給ふことも、みなみなさまのみこゝろざし、わきがたきゆへなりといへば、大德は、いつぞや鵬のせんさくし給ひし時、いかばかりいつはりをいひて、かくしつるにあらはれにけりと、かほのいろをちがへ、地へもにえいるばかりにおもはれけれど、かいもなし、短册をひらきたまへば、

つゐにかくあはでたへぬる玉の緒の
　　ながきうらみも君ものこすな

とばかりにて、よのことばはなし、三つながらおなじ歌なり、其時鵰は老僧をにらみ給ひ、そこなばうずは不妄語戒をやぶれり、いせんとひし時はいかばかりたうときふりをし、ゆめにもしらぬやうにぢしつるが、此たんじやくはいかにとの給へば、めいわくにやありけん、君のわかれやかなしかりけん、大泪をながしなきたるばかりにて物もいはず、鷲も鵰もいたみのときにあらずは、あ破戒の坊主を、はつとにもおこなはんものをといひあへり、さてしもあるべき事ならねば、なくなくひめぎみをもましこをも、おなじ

けぶりとなしはてゝ、さて御骨をば、いづこの御てらへおさめたてまつらんと、つぼねいひけれど、諸鳥どもは鷲鴟にをそれて何ともいはず、老僧は物ごりやなかりけん、出家のやくとや、又わかしうのみなもとやおもひけん、御骨をば高野へおさめ給へかしと、こゝゑにてぞいひける、局はかゝる後生の事は、御出家の御はからひよからんと、たからかにいへど、鷲は此よしきゝ給ひ、いまこゝにしゆつけはなし、そこな坊主はかたちはにたればも、心は大俗にもをとれり、いかんとなれば、智者大師の御しやくに、無住無着名眞出家とあるにかはりて、好色のしうぢやくふかきそうなれば、後生の引導まことしからず、そのうゑ高野は大師の寺なり、末來のためならば、佛菩薩の御寺よからん、天竺にての靈鷲山を、唐土我朝へうつし來り、或は天台山、或は比叡山と號せり、又天の靈山とび來りて、此比叡山になり給ふともいひつたへり、これによつていまに此山を鷲のみ山とも、四明のほらともよび侍れば、此御てらにましたる、骨のおさめどころはありがたしとの給ふ、鵄は佛道のことはしらざれど、これはもつとものぎなりとこたへたまへば、いづれは此はからひにますはあらじとぞいひける、つぼねをはじめつきそひし物どもは、さらばひえの山とやらんへゆきて、きみの御あとをもとぶらはんとて、なみだながらにたちいづれば、諸鳥共もをくりにいでけるが、ひえの山までゆきたりとも、たゞかへりてはせんもなし、此世の無常なることは、過にしはるのころ、鶉の物がたりにてきゝつれども、さほどにはおもはざりしが、いま姫君ましこの露ときえにしを、まのあたりに見侍れば、たれとても此よの無常をのがるゝ事なきと、おもひさだめたれば、いかなる智識をかたづねいだし、說法をもてうもんし、ながくぶつだうしゆぎやうをなし、姫君のあとをとぶらひ、又は自身の得脫をもいのらばやといひてとゞまりはべり、そのなかに鵄の給ひけるは、かゝる發心修行は、そのときのびぬれば、魔のしやうげありとかや、よそをたつねは時刻もうつりゆかん、いつぞや梟坊主にものとひしとき、小僧の蝙蝠いでゝ、師匠のしらぬことまでかたりしは、物しりときこへたり、まづかれがものがたりばかりも、きゝたらばよからんとあれば、あまたの中より、鶉と雀すゝみいでゝ、ひとつくちに

いひけるは、此の御諚もつともなり、佛法も十宗八宗とわかれたれば、宗々のたてばをもあらまし御たづね、みな〳〵にもきかせきゝたまひ、佛種從緣起なれば、めん〳〵のえにしありて、こゝろおもむくしうしうにしたがひ、ごしやうをもねがいたるがよからんと、ゆふよりはやく小僧を、しゝやうよりうへに請待すれば、梟法師ははらだちがほにて、それまではすいさんなり、我がしたにをき給へといへば、鷲鵰は同音に、さて俗坊主はせつぽうのさはうをばしらぬか、天帝は畜をはいして師とすといふ事あり、でしなりとも、いかでせつぱうしやを下座にはをくべきと、いかられければ、老僧は我しれたる事おもひたちしゆへ、たび〳〵しかられけれ、めんぼくなければにげんとおもへど、後のたゝりもをそろしと、たび〳〵はぢにあふ物かな、いつぞや小僧が命ながきものははぢおほしといひしも、いま思ひあはするばかりなりと、ひとりごちけり、さて小僧はたかきところへしやうせられ、われらはいまだがくもんもきはまらず、そのうゑ聖教の一さつも持參つかまつらず、なを眞言はみつしうにて、せつばうなどする事はなけれど、いなみ申さんは、御聽衆のなかに、おそろしき御かたもまじり給へば、ぎよいにしたがひ、天台の判釋にまかせ、そらにおぼへたるとをりばかりも、ところ〴〵御聽聞にそなへたてまづらんといひてぞ、かうざへあがりける、

夫釋尊は、五天竺のうち、中てんぢくにて、淨ぼん王をちゝとし、摩耶夫人をはゝとし、出世し給ひてのち、世間の有爲無常をくはんじ、夜半にわうぐうを出、檀特山といふやまにいり、十九にて出家し、三十の御年、菩提樹のもとにて成道し給へり、とき給ふところのほうもんは、衆生のこんじやう萬差なれば、せつけうも又まち〳〵なり、されども五時八敎のほかはあるべからず、五時とは華嚴時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時なり、八敎とは化儀の頓敎、肝敎、不定敎、祕密敎の四けうと、化法の三藏敎、通敎、別敎、圓敎の四けうと、あはせて八敎なり、五時の內先第一のけごんきやうは、三七日別圓の二けうを、法惠功德林等の四菩薩に命じて、小をからずして、直に大乘をとかせ給ふゆへ、化儀の四けうのうちにては頓敎なり、此外阿含、方等、般若等のきやうにて、小大と次第



し給ふことは、漸經といひ、得益の不定なるを不定敎といひ、秘密の說を秘密敎といふ也、今の經の內、別經のこゝろは即中なり、第二阿含敎は、十二年のせつなり、三藏の一敎をとき給ふ、此敎のこゝろは麁細の色みな無常なり、心又ねん／＼むじやうなり、色心ともに無常にして、空々なりとあかす也、第三の方等經は、十六年のせつなり、藏通別圓の四けうをときたまふ、通經のこゝろは、これも虛無のくうなれば、三藏敎のごとく色心を折破して、くうするにはあらず、六道賴緣のしよほうのたうたいを、もとよりくうなりとくはんじて、しばらくも實有をたてざるなり、藏別圓のこゝろは、さきに云ふがごとし、第四の般若經は十四年のせつなり、通別圓の三けうをとき給ふ、此三けうのこゝろもさきに云ふがごとし、これまでの四けうの內に、けぎけほうの八敎こもれり、第五の法華經は、八ヶ年のせつなり、純圓一實のみをとき給ひ、八敎超過のえんけうなり、涅槃經は一日一夜のせつなり、四けうをとき給ふ、追說の四けうといへり、法華いせんの四敎を法花に開會す、かさねてのせつなるゆへ追說といへり、追泯のゆへに同醍醐味にて法華一たいなり、又十宗のこと、修行の理は宗々の深意にて、他家よりはからふべきにもあらず、しうしの名のたてどころばかりにも、御聽聞にそなへたてまつらん、まづ華嚴宗といへるは、けごんきやうをえきやうとして、しうしのなとし、五經をたてゝ、しよ經しよしうをせつし修行をなせば、尤よきしうていなり、倶舍宗は四阿含經によつて倶舍論をもつぱらとし、宗號をたつる也、成實宗、これも阿含經によつて、成實論をたのみ宗名とするなり、律宗又阿含經をえきやうとして、四分律五分律をむねとして、しうしのなをあらはし、戒法をもつぱらとする也、法相宗は方等部よりいでゝ、解深密經の三性のほつそう、瑜伽論のへんのほつそうのぎをむねとして、宗號をあらはすなり、眞言宗は陀羅尼咒をほんとせり、又は惣持ともいへり、この宗も方等部よりいでゝ大日經蘇悉地經金剛頂經の三部を依經とせり、宗名をば六波羅密經をもつてたつるなり、もろこしにては玄宗皇帝開元四年のころ、わがてうにては平城天皇のみよのころ、べつして御もちひのしうしなり、わがしうていなりとて、ほむるにはあらねど、餘しうにはくらべがた

し、經意深遠なるうへ、なをみつしうなれば、ことばにあらはしがたし、禪宗、これも方等部より出で丶、楞伽經金剛經首楞嚴經の三きやうによつて、くうりをくはんじて、禪定をもつぱらとするゆへ、ぜんしうといふなり、妙樂大師の御しやくに、楞伽七卷多在藏通とあれば、たんくうのりなるべし、あるいは以心傳心といひ、あるひは敎外別傳不立文字などいひて、くはんしんをかんようにすると見へたり、唐土本朝においてきせんともにもちいきたりし丶うしなり、淨土宗、これ又方等部よりいで丶、觀經雙觀經阿彌陀經の三經と往生論によつて、かの國にむまれん事をねがふ、即身成佛は上こんのきののぞむところなり、まつせげこんのわれらは、まづじやうどにさへむまるれば、のちはじやうぶつもならんと、彌陀のほんぐはんをたのみ、欣求淨土のぎやうをなして、宗名をもたつるなり、わがてう後鳥羽のゐんのみよより、いまにいたるまで、はんじやうのしうていなり、三論宗は般若經によつて、中論百論十二門論をむねとして、わがしうの名とするなり、ほんてうには推古天皇の御宇、または孝德天皇のみよのとき、ひろまりししうしなり、これまでの九しうは、釋迦如來四十餘年があひだときたまひし、きやうげうをえきやうとして、たてたるしうしなりとかたりおはつて、小僧こ丶ろにおもふやう、此うゑはのち八ヶ年とき給ひし、妙法蓮華經よりいでたるしうしの事をとくべし、但これは鷲鵰の尊敬し給ふしうていなり、おろそかにいひなして、御きにちがはゞ、今日のせつぽうはみなむになり、又のちのとがめもおそろし、そのうへ此經は經王なれば、かろしむる事もならず、こ丶ろのおよぶ程は、經のくどくの深き事をもいはんとおもひ、抑、天台宗といへるは、無量義經法華經普賢經のさんきやうを正依經とし、涅槃經を傍依經とせり、能弘の人によらばてんだいしうといひ、所弘のきやうによらば、法華宗又は佛立宗と云ふ也、いかんとなれば、一のまきはうべんほんに、是妙法諸佛之秘要、又四のまきほつしほんに、藥王此經是諸佛秘要之藏ともとき給ひたればなり、又おなじほんに藥王の十喩とて、十のたとへをもつて、妙法蓮華經をほめ給へり、まづ一さいの川をあげて諸經にたとへ、此經のくどくの深大なることを大海にたとへ、又一さいの山をあげて諸經にたと

へ、此經をば須彌山のごとしとゝき給ひ、一切の星をあげて諸經にたとへ、此經をば月天子のごとしとの給ひ、又日天子の能諸の闇をのぞくがごとく、此經ものべ給へり、此ほかのたとへはしげゝればのこし侍り、これらのきやうもんをもつておもへば、法華經は諸經のなかの頂上なり、經王なり、第一なり、そのうゑ又まへのきやうもんのするに、是經典を受持することあらんものも、亦かくのごとし、一切の衆生の中におひて亦第一なりと、受持の人までもほめ給へり、かやうに所持の經をほめ能持の人をほめ給ひても、成佛せし證人なくては、うたがはしき事なるに、二のまき譬喩品にて、舍利弗華光如來授記品にて、迦葉光明如來須菩提名相如來迦旃延閻浮那提金剛如來目蓮多摩羅跋栴檀香如來と、授起し給ひしよりなき事なり、又五のまきにきたり、五逆の提婆は天王如來となり、龍女は成佛して無垢世界にいたり、此外橋曇彌耶輸陀羅女等の、女人の成佛もかずをしらず、かくのごとく女人惡人二乘闡提によらず、十界皆成佛道の御經をたもち給へば、たのもしき御しうなりとほめければ、聽衆の諸鳥ども、しゆせうなることかなと、かんるいをもよほしけり、鷲鵰は我たつとぶところの御經、又はしうしをも世にありがたく說ければ、喜悅のまゆをひらき、此粟散國にはにげなきほどの大學しやうなりとぞほめられけり、さて又かゝる佛道しゆぎやうは、時刻うつりてはなりがたき事なり、まづ御小僧のもち給ふ、御ずゝばかりも頂戴して、さてたのむところの御てらは、こゝろ〳〵ならんとの給ひつゝ鷲鵰かうざぢかくより給へば、諸鳥どもわれをとらじとすゝみ出てぞいたゞきける、さて受戒すぐれば、小僧もかうざをおり給へり、老僧はめんぼくやなかりけん、又おそろしくやありけん、ふるひ〳〵座をたち、小僧つれだち古でらへとてぞかへり給ふ、諸鳥どもは、此かたちにてのてらまいりは、よそめもはゞかりあれば、人間のすがたをまなびてまいらんとて、こゝろもはおなじいろなれど、こゝろはおなじからぬ、てら〳〵へぞまいりける、

かくの年月かさなれど、佛道修行のけぢめなく、うそ姬の菩提をとぶらひ、自身の得道をもいのりけり、此根源をおもふに、執愛戀慕のみちよりおこり、まこと

なるかな善惡不二といひ、迷悟不二といひ、邪正一如といひ、凡聖一如といひ、煩惱即菩提といひ、生死即涅槃といひけるも、ことはりといまおもひあたるばかりなり、但不二のこゝろは、べちのすぢもあるべき事なり、いよ〳〵諸鳥ども修行成就して、遲速はありけれど、つゐに無常のあらしにさそはれ、本覺眞如のみやこにたちかへり、同證佛果のねがひをみてけるとぞきこへし、ことさらふしぎなりし事は、とり〴〵の過去のえにしやふかゝりけん、現在にてのかねごとにやありつらん、いづれもおなじとりべのにはうぶりつゝ、はかじるしの松をうへ、そとばなどあまたたてをきけれど、とし月かさなれば露霜にふりまさり、そこはかとなきありさまにて、たれとぶらふともなく、風ぼう〳〵としたるのらのけしき、かなしともいふばかりなし、かやうのことをや、いにしへの歌人も「かきつけしその名ははやくきへ果て、たれともしらぬふるそとばかな、とながめをのこされしも、かやうのことはりにや、まことに有爲轉變のあだなるありさまのまへにて、あはれなりし事どもなり、

寛永十七庚辰年二月吉辰
御池通俵屋町
松屋六兵衛開板

あだ物がたり下卷終

うすゆき物語上

都のほとりふかくさの里に、そのべの衞門とてやさしきおとこすみけり、あるときききよみづへ參り御寺のほとりに、しばらくやすらひし所に、いづくともなくこしきたれり、いかなる人ぞと御名きかまほしき折ふし、御こしよりおりさせ給ふ御すがたをみれば、御とし十六七と見えしが、したにはしろきひとへ物、上にはからあやをいろ〳〵に、その身もるりにそめなせる、かたをくだりにながむれば、春のあしたとおぼしくて、はつねをつぐるうぐひすの、かきね〳〵きつたひて、みのりのこゑをとく時は、四方の山々かすむらん、さて又ひだりみぎの袖ごとに、ふぢ山ぶきのさきみだれ、をとづれわたるほとゝぎす、なくねにこひやまさるらん、なつもやう〳〵すぎゆけば、露こそすそはぬらすなる、ちくさの花の色々に、あきもよさむになるをりは、よはるかこゑもとをざかる、むしのねまでも一しほに、ものあはれなる有さまを、心つくしてそめつらん、こしをくだりには、思ひ心をつくしなる、はかたの松にふる雪の、つゐにきゆべき世の中に、いつかは君とうちとけて、かたりつくさんことのはの、世の有さまをそめにける、みなすいしやうのじゆずをもち、たゝずみ給ふ御姿、ようがんびれいにて、かすみにゝほふはるのはな、風にみだるゝあをやぎの、いとはる風にしたがふふぜい、むかしをきゝつたへしも、かんのりふじんやうきひ、をのゝこまちのわかざかり、によさんのみやのたちすがたも、これにはいかでまさるべき、むかしをとるにためしなし、たとひゑにはうつすとも、ふでにはいかでつくすべき、一め見しより其後は、しづ心なき戀となり、あさからぬ身にあこがれて、うきふし繁きかはたけの、君をみしよりくもきりの、むねのけぶりはたちのぼり、ふじよりまさる思ひねの、あけゆくそらやあしたか山、そぞろに人はうきしまか、何とて君を見そのうら、たえぬ思ひをするがなる、うつの山べのうつゝにも、君にあはねばかいもなし、天にあこがれ地にふし、りうていこがれけれども、しる人もあらざれば、此よしかくといひやるべきやうもなし、あまりのかなしさに、いそぎたきにをり、げにやかくにもきよ水の、ながれを

くみてこりをかき、きねん申けるやうは、てんぢくにほしの宮、もろこしにきさらぎ、わがてうにいづものさいはらさいの神、むすぶのかみの御引合もましませと、きせい申、それよりも又くわんをんの御まへに參り、あふぎひらいてまへにおき、たとへばもろこしには、ほうといひしもの戀ぢに身をやつし、あさな夕なになげきしに、くわんをんあはれとおぼしめし、かの女ばうにげんじつゝ、つゐにその戀かなへ給ふとかや、たゞいまのみづからが、思ひをかなへてたび給へとて、色々きせい申おりふし、君の召れたる下女、あたりをとをりける、ひとへにくわむぜをんの御りしやうとよろこび、下女をちかづけ、何となき物がたりなど語り、其後御身のほうかうし給ふ御かたさまの御なは、いかにたれ人にてましますととひければ、ちゝはさいさきいづみどのと申、君の御なはうすゆき、御とし十七になりたまふとかたりければ、おとこ返して、御やどはいづくととふ、一條殿の御內と申ける、おとこいよ／＼おもひにたえかね、さま／＼にたのみければ、くわんをんの御引合にや、又は中だちの人心やさしくてやありけん、なんなくたのまれけり、



おとこあまりのうれしさに、とある木かげにたちより、すゞりにむかひ、そゞろにすみをすり、筆のたてどもわきまへず、かくこそかひておくりけれ、これをたよりに、そのゝちたびく文をつかはしける、そのふみのことばに、

みしよりも、御面影のたちそひて、心はうき雲の、身は中ぞらになるかみの、ねにはきゝつゝうき人と、そはぬおもひにあし引の、山河おほくへだゝりて、あゆみもとをきみちのくの、ちがのうらはにあらねども、みるめばかりのこひゆへに、しほたれ衣いとゞさへ、かはくまもなき有さまを、君よりほかにいづくにか、ほしえさすべき人もなし、とはおもへども、

ほさじやそでのくちはつるまで
なみだこそ戀しき人のかた見なれ

と、よみおくあとをつれぐと、かやうの事に思ひなし、むなしく月日をおぐるまの、やるかたもなく心うし、いづれの道にも御返事、かしくとかきとゞめ、松かはやうにひきむすび、かの女ばうにわたしける、

女の返し

御ふみを見申候へば、われにこゝろをつくしなる、ありそのうみのはまちどり、ふみたがへにてもや候はん、色々の御たはぶれ、よそめも御はもじにて候、わが身かみの木にて、御たゝりもいかゞ、おそろしやおそろしや、かしく、

おとこ

御みづぐきのうつくしきながれの御返し、おほせ御もつともに候、さりながら、三がいをてらし給ふ月だにも、かつらをのこはありながら、くもぢにしのぶならひあり、又中ごろのことなるに、よこやまどのと申公家あり、ゑいざんのちごみぬこひにあくがれ、かずかずかきおくりよみつゞける、そのふみかずかぎりなければ、いもせの中のはしとなり、しのばん事をわびたるに、有夜よこやま殿御るすなり、わこのよろこびかぎりなし、やがて忍び入り給ひ、一つ御ざにてかたりなぐさみ、ひよくれんりのかたらひあさからず、少まどろみ給ひしに、よこ山どの御かへりある、御ちご十五御だい十四にて候へば、いづれもおとらせ給はぬ御かた二人ふし給ふ、物に能々たとふれば、秋ののにちくさの、みだれあひたるふせひなり、よこ山どのつくぐとみ給ふ、御ちごも夢さめて、よこやまど

のを御覧じて、取あへず一しゆ、

けふきそめまだはだなれぬから衣

あかつかぬまにあらはれにけり

御だい

たまさかに花をもとめし今宵しも

あらくなふきそよこやまのかぜ

よこやま

梅さくら二木のはなのなげきには

おもはぬわれをあらしとやみる

かやうにゐいじてのち、御ちごをゐいざんへをくり給ひし、なさけあるよこ山なれば、かくの如く、たとへぬしあるはなゝりとも、木かげの一ゐだおるは、つねのならひなり、

ゐだゝかきはなのこずゑもおればをる

およばぬこひもなるとこそきけ

おもひにはいかなるはなのさくやらん

身になりてこそおもひしらるれ

とてもかなはぬ戀ぢにて候はゞ、うきよにながらへ、身をやつさせ候はんよりも、露のまもかみの木さまの御ばちに、御けころし候ひてくだされ候へかし、うらめしや〳〵、

女返し

いろ〳〵のふみ見まいらせ候へば、とり〴〵の御ひき事おもしろく候、さりながら、一日が其うちに、千たび百たび給はり候ても、この心にて候、わがぬしさまの此一しゆをよみおき給へば、いかでむなしく候はんや、御分別候ひてくだされ候へ、

なびくなよわがしめしのゝをみなへし

あらぬかたよりかぜはふくとも

かずつもるふみはちつかになりぬとも、心ざしこもりをるやはたものゝ、みちのくのにしきゞにはたがひ候まじ、さつと御やめ候て、かさねて御むようごむよう、

おとこ

さて〳〵御心づよき御返し、いよ〳〵おもひはますかゞみ、見ゑんすがたも今ははや、かげろふとなりはて、みのをはりをばなにとするがなる、たごのうらなみよるひるとなく、なきあかしたるはまちどり、つれなききみをこふるとて、いやしきしづがふせやにも、いとゞなみだのたますだれ、もりくる風のにほひよ

り、手がひのとらの引づなの、ながきおもひにならのはの、其かしは木のをよびなき、こひぢもよしなしやとおもへば、猶もふかくさの四位のせうしやうも、こまちに心をかけおひの、くもぢはる〳〵一條の、くさもたもとも露しげく、九十九夜までかよへども、つゐになびかぬつれなさに、さてこそ少將もいとゞ思ひにたえかね、ふかきうらみにしなのなる、あさまのけぶりときへにけり、そのをんねんつきそひて、をのゝこまちとよばれしも、花のすがたをひきかへて、ちりにまじはるきやう女となる、

古歌に

こひしなんいのちのほどはおしからで
むくはんきみのためぞかなしき

われらの心中、この心にて御ざ候へども、一ねん五百しやう、けんねんむりやうごう、しやう〳〵世々のあひだに、ふかきうらみのつきずして、ぼんなふのいぬとなり、あまたのぢごくをおひめぐり、ゐんぐわの程をば達すと申候へば、身のうへもとをからず、こんじやうはさてをきぬ、後世のみちをもきみゆへ、ぢごくにおちんうらめしや、よき御かへりごと、ざつとすみだがはのわたしぶね、かなしきうき身もこがれやむべし、かしく、

女返し

かずしげり、くろみすぎたる御筆のゆくゑ、たび〳〵おくり給ふ、さりながらとてもかなはざる御ことに、たがひにあだなたち候ては、いかゞにて候まゝ、御かへり事も夢のうきはしと思ひ候へ共、うき世をわたるならひ、又は色々のおほせ、むなしく御返しを申さでは、又後のよのむくひにも、くちやゆびなきじやしんになるとうけ給はり候まゝ、筆にまかせ申まゐらせ候、

古歌に

わがおもふ人をおもはぬむくひにや
いましのぶみのわれをおもはぬ

かやうのふかきうたも御ざ候まゝ、御身のうへを御うらみ候へかし、むかしもさるためしあり、しが寺の上人は八十三のとし、京極のみやす所を戀ひ奉りて、大内山にたゝずみ給ふ、きさきあはれにおぼしめし、みすまぢかくめされつゝ、るりをのべたる御てばかりをさし出し給ふ、上人すみのおれのやうなる御手

ばかりにて、きさきの御手をとり、ひたひにをしあてて一しゆ、

いざさらばまことの道のしるべして
われをいざなへゆらぐたまのを

とあそばしたると申候まゝ、われらのとりのあと御はもじながら、ひとつことにおぼしめしなぞらへ、かさねてたまはるまじく候、かべにみゝ、いしのものいふうきよのならひ、たがひの身のうへおそろしや、かしく、

おとこ

しらぎくの花、めづらしき色もかはらぬ、かねよりかたきいましめのふみ、みるよりこひも一しほにおもくなり申候、夢のうきはしとは、なか〳〵たえせよとの御事にや、さりとては我ら心中はみたらし河ほどに御入候へども、しぢのつまがきにて候へば、此人やらんよめる、

日にちたびおもひやるとはよもしらじ
かよふこゝろのものをいはねば

なか比こさいせうのつぼねは、院につかへ給ひしを、かどわきのへいざいせうのりもり御子に、ゐちぜんの三位ちうじやうみちもり、一めみそめしよりもこひとなり、うたをよみこされしに、たび〳〵文を返し給ふ、

わが戀はほそたにがはのまろ木ばし
ふみかへされてぬるゝそでかな

とよみてをくりけり、心づよきこさいしやうも、あはれとやおぼしけん、返歌に、

たゞたのめほそたにがはのまろ木ばし
ふみかへしてはをちざらめやは

とあそばし、やがてなびきそめさせ給ふ、かやうの御事も御いり候ものを、あはれとおぼしめし候はゞ、秋の田かりそめぶしの御なさけまち申候、

女返し

さい〳〵、こよみもどきの、御かへり事も申まじく候へども、つての人あながちに申候まゝ、ひらき見參らせ候へば、みたらし河と候は、戀ゆへ神にいのるとの御事候や、しぢのつまがきとは、人にしらせずとのおほせかや、御ことはりはきゝわけ申せども、戀のつるぎにて候、中ごろもけむれいもんゐんの御とき、よこぶえとてあり、そのころこまつどのゝ御うちに、三

條の齋藤さへもんが子に、たきぐちとてあり、こまつどの丶御つかひに女院へ參り、めんろうにやすらひて、もの申さんといひけるに、よこぶえさくらがさねのきぬに、くれなゐのはかまふみく丶み、みすをしのけて出たるそのすがた、ようがんびれいにて、かすみにこもる八重ざくら、いまをさかりとさきにほふはるのふぜいして、心もことばもをよびがたし、やうきひもこれにはいかでまさるべきとおもひければ、たき口ふみとりいだして奉るつゐでに、

あきのたのかりそめぶしのよなりとも
きみがまくらをみるよしもがな

よこぶえ、かほうちゐかめてうけ取、女院の御返事をよの人していたしける、このうたをたよりにて、たびたび文をかよはし、やがてなびきにけり、あるとき二人のおや、此よしき丶つたへ、たき口をせつかんしければ、さがの丶おくはうりん寺といふところに、あんじつをむすびてとぢこもりける、其後よこぶえこれを聞きて、たづねゆきければ、人なき所とておともせず、よこぶえ恨みて一しゆ、

あづさゆみそりて心のつよければ
いるまでもなくかへりこそすれ

とゑいじてなく〳〵かへりぬ、たき口物のひまより見おくりて返歌に、

あづさゆみそるをうらみとおもふなよ
まことのみちにいるぞわが身は

又よこぶえ

あはれなりいまをかぎりのみちにして
さきだつものはなみだなりけり

よこぶえ、うらめしきあんじつをみすて丶かへりけり、それよりちどりがふちへゆき、身をなげむなしくなりぬ、たき口このよし聞よりも、おどろきさはぎゆきみれば、むなしきしがいばかり、なく〳〵しがいをとりあげて、むじやうのけぶりとなしにける、たき口がいまのうきなげき、すこうぐしがなみだも、これにはいかでまさるべき、それよりすぐにかうやさんに上り、ぼだいをよく〳〵とぶらひける、かやうにひとり契り候へば、いのちうせ候てもなりがたき物を、御おもひきり候へ、

おとこ

いつも〳〵、たにのみづのごとくなる御ふみ、いよ

いよたえかね申候、こひのつるぎとは、さつと思ひきり候へとや、さて／＼これほどに心づよく候はゞ、中中はじめより御返事もなく候てこそ、露の命もはやくきえ候はんものを、たえ／＼の御ふみ、いよ／＼身をしるあめにふしゝづみ候、

つらからばたゞ一すぢにつらからで
　　なさけのまじるいつはりぞうき

そもじさまのやうなる人の、いにしへもありつればこそ、たれ人かよみおきけん、おほせのごとく思ひきり候はんずれども、この心や、

心づよき君にはなをもたのみあり
　　あをやぎよりもゆきおれのまつ

げにやおもふ事かなはねばこそうき世なれとしれ共、さすがなを、思ひかへせばあづさゆみ、いかに心づよく候とも、いのちをかぎりに、ひきて見るべし、かしく、

女返し

又候や御筆のながれ、ながめいり參らせ候、さては谷の水のごとくとは、身づからそこの心とけやらずとの御うらみ候や、色々の御たとへ聞わけ申せども、初めより申參らするごとく、ひとり候ては又なびき申さん事おかしく候、つたへきくいこくにも、そもじさまのやうなるむりごとをおほせかけらるゝ、御かどおはします、そのしんかにかんはくといふものあり、そのつまをていぢよといふ、ならびなきびじんなり、御かど聞しめしおよび、おさへてくもの上のまじはりをなさせ給へども、ていぢよつゐにちよくめいにしたがひ申さゞるにより、かんはくがことをわすれずして、かやうにふるまふかとおぼしめし、かんはくがみゝはなをたちて、ていぢよにみせ給ふ、いよ／＼なげきかなしみて、なをしもうちとけず、みかどゑいらんありて、しよせんかんはくあるゆへにこそうちとけねとて、かんはくをちひろのそこにしづめ給ふ、そのときていぢよあんをめぐらして、かんはくがしづみしいけのほとりにて、かのなきあとをよく／＼とぶらひ給はゞ、そのゝちはともかくもとそうもんす、みかどおほきによろこび給ひ、かのいけのほとりにて、しゆ／＼のぶがくをそうしつゝ、かのつゐせんをなし給ふひまをうかゞひ、ていぢよは水の中にとび入り、後の世までもちぎりたるとうけ給はる、まこと

なるかな、けんじん二くんにつかへず、ていぢよ兩夫にまみゑずと申候、もろこしわがてう、道はるゞへだゝり候とも、心の程はおとるまじ、とてもかなはぬうきみなれば、ふつとおもひ御きり候へ、

よの中は月にむらくもはなにかぜ

おもふにわかれおもはぬにそふ

このうたの心にて御おもひきり候へ、かしく、

おとこ

御返じながらまた申あげ候、ことにいこくまでの御ひき事、さることにては候へども、さやうの御事はためしおほく御ざ候、わがてうにもとばのゐんのきさき、あるとき花ぞの山に御出ある、さ藤兵衛のりきよも御うちにありし人なれば、御ともにいでにけり、かなたこなたとやすらひ給ふところに、てふといふむし三つゝれて、はなにもつれとびけるを、きさき御らんじて、あれはなにといへるむしぞととひ給ふ、御つぼねあれはてふにて候と申さるゝ、きさききこしめして、あれははんなりとの給ふ、色々もんだいなかばに、のりきよ出てかくなん、

ひとつをもちどりといへる鳥あれば

三つありとてもてふはてふなり

と申ければ、きさき一しほ御かんありけり、そののちこれをたよりとして、たびゝたまづさをくりけり、そのかずかさなれば御返事あり、このよにもまたあのよにもかなふまじ、三よすぎて天に花さき地にみなりて、そのゝち西方みだのじやうどにて、らいかうをまてとぞかきてくださるゝ、さしも歌人たりしのりきよも、ぜんごをわきまへず、このよにも又あのよにもかなふまじとのおほせと心得、命もあやうく見へにける、きさきはのりきよがさいごと聞しめし、事のしさいをこまやかにとはせ給へば、ありのまゝに申、あらあさましや、歌人といはれしのりきよが心えぬか、このよとはこよひの事、あのよとはあすのよの事、三よすぎてとは、三日のよすぎて四日のよといふとなり、天にはなさきてとは、ほしいづる事、ちにみのなるとは、露をちてといふ心なり、さいはうみだのじやうどとは、これよりにしのかたにたち給ふあみだゞうにての事なりとをしへ給ふ、さてその後、かねごとせし夜にもなりければ、だうにゆきまち申せども、御出でもなく夜もはやあけがたに、のりきよすこしま

どろみけり、君御出であり、のりきよがそでをひかへて、
われならばとりなくまでも待べきに
おもはねばこそきみはまどろめ
のりきよもとりあへず、
よひはまち夜中はうらみあかつきは
ゆめにやみんとまどろみぞする
とたがひにたはぶれ、そのよはあさからず御ちぎりをこめ給ふ、君はしう、おつとは下人なりしかど、なさけのみちはかくの如し、いせ物がたりにいはく、
あふな〳〵思ひはすべしなぞへなく
たかきいやしきくるしかりけり
なさけにはいやしき袖はなき物を
もらさでやどれありあけの月
女返し
このごろはいかに御なさけなやなふ、かしく、
さい〳〵の御ふみ見參らせ候、さては又とばのゐんのききさきのたとへをうけ給はり候、かのさ藤兵衛のりきよはしのゝめの別に、かさねてはいかにといふとき、きさききこしめし、それはあこぎとの給ふ、のりきよ又そのあこぎをしらずして、諸國しゆぎやうに出しとき、その名を西行とかへ、あこぎをしらんそのために、おほくのくにをめぐるとかや、いづくにてかしづのをが、うしをひきてとをりしに、道のほとりのいな葉をはみて、とをる事たび〳〵におよべり、彼うしのぬし、あこぎなるうしかなとて、さん〴〵にうちにける、西行なゝめによろこびて、いそぎたちよりしさいをとひければ、
いせのくにあこぎがうらにひくあみも
たびかさなればあらはれぞする
と古人いひつたへたれば申つるなりとこたへける、そのごとくそもじさまのせつ〳〵の文、あこぎにて候、たびかさならばあらはれやせん、いくたびおほせ候てもさきの御返事のこと、ていぢよにはおとるまじく候、かさねて御ふみたまはるまじく候、
おとこ
御筆のくろみを申候へば、たび〳〵ふみをしむじ候へば、あこぎとおほせられ候、なにとてさやう御あやまりなされ候や、きさきは一夜の御なさけありてこそ、あこぎとはおほせ候へ、とてもいにしへの身を御

ひきかけ候はゞ、そもじさまもせめて露のまなりとも御なびきなされてこそ、其うへにてはあこぎともおほせられ候へ、そもじさまほどなる、御心づよき人さまはあるまじく候、さはありとも、

おもひにはいしにたつ矢もあるものを
　などわがこひのとをらざるべき

つゝゐづゝわが身つるべのなはならば
　ふかくくみけんきみのこゝろを

御はづかしながら、筆にまかせ申あげ候、さて〳〵戀には人のしなぬものにて候や、あまり御こゝろづよきうらめしさ、心中のほど御すいりやうなさるべく候、くずのうらかせ、かしく、

女返し

御ふみ見參らせ申せば、くずのうらかせと御とめ有は、みづからを御うらみとの御事にや、たとへくずのおもて風にてもあれ、御心にしたがひ申事なりがたく候、いにしへもさがのてんわうの御とき、左大臣きんみつの御子に、ゆりわか大じんとてましまます、むくりこと〴〵くほうきして、日のもとにせめいる、ゆりわか大じんうけたまはり、おほくのゆみとり八萬ぞうのふねにのり、ちゝらがおきにて三年三月たゝかひ、つゐに大じんうちかち給ひて、きてうなさるゝおりふし、げんかいがしまにあがり、日ごろのつかれをやすめ給ふ、大りきのくせやらん、ねいりてさうなくをき給はず、夜日三日ぞふし給ふ、物のひまに、しんかのべつぷきやうだい、むほんをたくみて、大臣をばしまにすておき參らせ、わが身はふねにうちのり、ほどなくきてうして、やがてさんだい仕り、大臣うちじにの由申上ければ、御かどあはれにおぼしめす、しかりといへども天下太平なるを御かんあつて、このたびのくわんしやうに、つくしを一ゑんにくだされけり、まことにゑいぐわにほこりしが、だいじんの御だいに心をかけ、かずのたまづさをくりしかども、みだい露ほども御なびき給はず、其後だいじん御きてうありて、三年後にまくらひとへにをんなのかゞみなるものを、くもり候てはわがぬしさまに、二たびおもてをみせ申さん事なりがたく御入候、かしく、

おとこ

さても〳〵心づよき御返し、いまにはじめずおぼへ申候、さては大じんのながね御たとへ、一しほみゝに

とまり申なり、われらもそのごとく、そもじさまとながねいたしたく候、中ごろもさる人女院さまに心をかけ參らせ、玉づさをさゝげければ、うつくしき御筆のながれにて、うすようのはしに、くれなゐの一はな心とやらん御かたへとばかり、あそばされてぞくだされける、おとこなにともこの心をしらず、ある人のみて、これこそよきかへり事なれ、

古歌に

くれなゐの一はなごゝろうすくとも
ひたすらくらすなをしたてずば

この心なりと申せば、よろこぶ事かぎりなし、其のちやがてなびかせ給ひけり、まことにくもの上なる御所さまも、おとせばおつるうきよのならひ、あまりつれなのふりにて候、とにかくにいやとはうちすて候へども、又なみだにむせび候まゝ、おもひきりしもいつはりの身や、

女返し

かさねゞゝの御ふみ見參らせ候、さ候へば雲のうへなる御所さまの御事仰られ候、それはくもの上人なればこそ御おちありける、われらがやうなるいやしきくもの下人は、をちん事はさてをきて、ころび申事も中々わきまへざるなり、そのうへわが身のことは、わがぬしさまとは、たがひにふりわけがみのころよりも、ひとつところにてなれまいらせて候、わがかたつくるくろがみをば、この君ならであぐる人もなく候、またそもじさまへうちなびき候はんこそ、おかしく御入候、わが身のごとくきのありつねがむすめと、ざいご中將なりひらとの御ちぎりもよそならず、いせ物がたりにも、

つゝゐづゝ井筒にかけしまろがたけ
おひにけらしないも見ざるまに

と、むかしおとこのよみければ、その時女

くらべこしふりわけがみもかた過ぬ
きみならずしてたれかあぐべき

と、たがひによみけるとなん侍り、それのみならず、わがぬしさまとわがみも、

われならでしたひもとくなあさがほの
夕かげまたぬはなにはありとも

ふたりしてむすびしひもをひとりして
あひみるまではとかじとぞおもふ

このごとくのかねごと候まゝ、なびき候事なるまじく候、かしく、

うすゆき物語上終

うすゆきもの語下

おとこ

おし返し〱申上候、さ候へば、ありはらのなりひらの御事承はり候、いにしへもたちばなのせうしやうやすまさの子に、たうめい法しとて、ゑいざんにならびなきがくしやうあり、だいりに御きたうのありしとき、心をきそふ風ふきて、つぼねのみすのひまよりも、いづみしきぶをみそめしかば、しづこゝろなき戀となり、がくもん心にそまず、ゑいざんよりしのびくだり、かうじうりに身をかへて、みそめしつぼねのむかひにて、かうじをうりければ、うちより下女をいだして、二十ばかりうり給へといひければ、たうめいはうたをよみてぞかぞへける、

一とやひとりまろねのそでまくら
　たもとしぼらぬあかつきもなし
二とやふたへびやうぶのうちにして
　こひしきひとをいつかみてまし
三とかや見てもこゝろのなぐさまで

などうきひとをわすれざらまし
四とかや夜ぶかにきみをかへすとも
まくらかたしくそでのつゆけき
五とやいつやいまやとまつほどに
身はかげろふとなるぞかなしき
六とかやむかひの野べになくしかも
つまゆへにこそなきあかしけれ
七とやなき名のたつもつらからじ
きみもろともにたつとおもへば
八とかややよひの月のひかりをば
おもはぬきみのやどにとゞめん
九つやこゝにありけるひとゆへに
よにもこゝろをつくしけるかな
十とかやとやをはなれしあらたかを
いつかわが手にひきすへてみん
十一や一どまことのあるならば
いかにことのはうれしからまし
十二かやにくしと人のおもふらん
かなはぬことにこゝろつくせば
十三やさのみなさけはふりすてぞ

なさけはひとのためとあらねば
十四かやしなでいのちもおしからじ
きみゆへすつるいのちなりけり
十五とや後世のさはりとなりやせん
このよはかなくあはではてなば
十六やろくぢのほどをめぐるとも
きみにこゝろをつけてこそゆけ
十七や七度まふでしたび／＼も
きみにあふかといのりこそすれ
十八やはせをにおけるつゆのまも
おもふひとにはそはですぎなん
十九やくるゝ夜ごとにおもふには
たゞいたづらにくちやはてなん
廿とやにくしとひとはおもふまじ
かずならぬ身にひとをこふれば
とよみければ、かの女これをきゝ、あながちかうじをよくとるべきにあらねども、うたのあまりおもしろさに今一つとありしに、
廿一や一夜のなさけこめんとて
おほくことのはつくしけるかな

これはふかきうちへといひすてゝ出にけり、みすのうちよりこれを聞給ひ、忍びてやどをみよとて人をそへにけり、さてしきぶはあき人のこゝろあはれとおもひ、そのよたうめいがやどへゆきて、戸をほとほとゝたゝきて、

いでてほせこよひばかりの月かげに
ふり〳〵ぬらすこひのたもとを

このしきぶ歌のこゝろは、一年いせが源氏を戀て、

きみこふるなみだのあめに袖ぬれて
ほさんとすればまたはぬれ〳〵

とよみしうたのこゝろをおもひ出てよめる、たうめいやがて返歌に、

いでずともなさけのあらば影さして
こゝろをてらせやまのはの月

と、たがひにその夜はちぎりたまふとうけたまはる、かやうのたとへこなたにも御入り候ものを、うらめしや、

女返事

御ふみを見參らせ候へば、とり〴〵の御たはぶれ、我に心をくれなゐの、こがるゝなど〻承はり候、われらがやうなるしづのめの、こひもうすいもしら玉の、なにぞと人のとひし時、露とこたへぬうき身にて候、なか〳〵文にてこゝろを御くだき候ても、いらざる事にて候、むかしもたかうじの御時、こうのもろなをといふしんか、ゑんやはんぐわんといふ人の女房、三ごく一のびじんたるよしをきゝおよびて、吉田のけんこうに文かゝせ、ぢじうといふ女ばうして、いくたびおくりけれども、さらになびきやらず、もろなをおほきにはらをたて、ものゝやうにたゝぬものは手かきなり、そのけんこうよすべからずとぞいかりける、そのゝちやくし寺の次郎左衛門ふと參りたるをかたはらへちかづけ、こゝに文をやれども手にだにとらず、つれなきをんなのあるをば、いかゞすべきといひければ、やくし寺聞き、心の下ひもむすびとめ候とも、とかばなどかとけざるべき、たゞいくたびも文して御申あれといひければ、さらばなんぢかけとてかゝせけり、もとより色ごのみのをのこなれば、ことばにおよばぬ山のはまで、一ようのうちにぞかきつらねける、此ふみをみてはいかなるけん女なりとも、たちまち心まよひぬべし、されどもこの女、さよ衣とばかり

いひすてゝうちへいりぬ、ぢじうまかりかへり、かくとなんかたりければ、むさしのかみおほきによろこび、又やくし寺をよびよせ、かの女ばうのさよ衣とばかり聞へしは、きぬこそてをとゝのへよとにや、その儀ならば百物百なりともつかはさんとぞ申ける、やくし寺聞て、いや〳〵その儀にては候はず、しんこきん十かいの内に云く、

さなきだにおもきがうへのさよごろも
わがつまならぬつまなかさねそ

この心にて候、人めばかりをつゝむものなりと申けり、もろなを大きにかんじ、御へんはゆみやの道までにてもなく、うたのみちにもよく心えたる人なり、それぞれひきで物せよとありしかば、よろひ物のぐたちかたなかずをつくしてつみにけり、そのゝちぢじうをして、さま〴〵かきくどきけれども、つゐになびかず、侍從あまりせめられて、せんかたなさにゐなかへにげくだりぬ、このうへはちからなし、ゑんやをほろぼしてのち、かの女ばうとやす〳〵とちぎらんとしあんして、あるときたかうじの御前に參り、ゑんやこそむほんのくはだてあるよし申上ければ、たかうじおどろきおぼしめし、いそぎいてついばつせしむべしとせんぎあり、おりしもゑんやは在京してゐたりしが、このよしほのかにきゝ、とてもかなはぬみちに行つまりぬ、いざさらばわが國にくだりて、はたをあげんとて、たかがりなどに出る體にもてなし、やまざきごへにゝげくだり、女ばうをば、物まふでする體にみせ、たんばぢさしておとしけり、こゝにはんぐわんのしやてい、身のなんをのがれんとや思ひけん、むさしのかみしゆくしよにきたりて、あににて候者こそ、夕べはうきへくだりて候とぞつげにけり、もろなを將軍の御所へ參り、さしも申たるもの、御さたゆるがしに候ひつるゆへに、はんぐわんはやおちて候、いそぎうつてをつかはされ候へと申されて、山なゐづのかみぶしにおほせつけられ、夜を日についではせくだる、程なく道にておつゝきしか共、はんぐわんが手のものども、こゝをせんどゝふせぎたゝかひけるひまに、おちのびぬ、山名道にすこしのとうりうもなく、はうきの國へ打入、ゑんやはんぐわんたかさだむほんのくはだてあるによつて、うつてをくださるる所なり、うつもからめても參らせたらんともがら

は、ひしよくぼん下をいはず、御ほうびあるべきよしと、ふだをかひてたてにけり、さる程に、ゑんや國人をかたらふといへども、いつしか心がはりして、そのめいにしたがはず、とやせましかくやせましと、あんじゐたるところに、女ばうにつけてたんばぢへおとしたりしもの一人はしりきて、とのはなにをまちてかくておはしますやらん、御だいははやみちにてうつておつつきければ、とあるいゑに火をかけ、御だいわか君もろともに、一體のけぶりとならせ給ふ、それがしも御ともと申べかりしを、このこと申さんために、これまでまゐりて候、いで〳〵しでの山の御さき仕り候べしと、いひもあへず、はらかききつてしにゝけり、はんぐわん、こはわれらをいさむるぢがひなれとて、同はらきつてつゐにむなしくなりにけり、かやうにむりなる人なれば、わりなき中をもむなしくして、我身もかなはぬことにうき身をやつしたまふなり、古歌に

おもへどもぬしあるそのゝくれたけは
　一よのふしもねられざりけり

おとこ

あけてもくれてもおなじ事の御返し、思ひにふしゝづみ申候、なりひらはうこんのばゞの日ほりのひ、むかひにたてるくるまに、女のかほばせしたすだれよりほのかにみえければ、中將見給ひて、

みずもあらず見もせぬ人のこひしくば
　あやなくけふやながめくらさん

女

しるしらぬなにかあやなくわきていはん
　おもひのみこそしるべなりけれ

とよみてやがてなびき給ふ、いせ物語にも見へ申候、そのうへこまちもいにしへの身をこうくわひして、せき寺にて、

いひすつることのはまでもなさけあれ
　たゞいたづらにくちはつる身を

とよみおき候、さりながら我らのやうなる世になしものゝ申上候には、御なびきなきも理りや、

あさましやおとこはわろしのふはなし
　人にすぐれてすりきりはして

身のうへ御はづかしく候、とはおもへども、あまりつれなきもことにより候、いしのまくらやかたく候、

女返し

めづらしからざる御文、たび〳〵人めもいかゞにて候、なりひらうこんのばゞにてのありさま御中なされ候、此程はいかほどの御たはぶれをうけ給けり、ことおかしき御返事さぞ〳〵御わらひぐさとなり候はん、もとよりもわかき身にて候まゝ、うちなびきたくは候へども、こゝに一つのたとへあり、太じやう大じん清盛の御子、ほん三位中將しげひらは、一のたにゝてかはごゑの小太郎にいけどられ、九のえの中をひきわたし、それよりかまくらにわたす、よりとも聞しめし、御かんなゝめならず、さりながら、てうてきの中にもひとしほふびんにおぼしめし、そのころせんじゆのまへとて、手ごしのてうがむすめ、十六になりみめいつくしき女ばうの御そばにありしを、いたはり申せとてつかはさるゝ、まことになさけだい一の女なり、さびしき雨中のつれ〴〵にもことをひき、びはをたんじてなぐさむれば、おちくるなみだやしげひらの、つらき中にもなぐさむは、野やまおろしのおとまでも、せんじゆが一きよくにひきよすることゝちして、おもひはすこしぞはなれける、いにしへもたれ人か、

ことのねにみねのまつかぜかよふらし
　いづれのをよりしらべそめけん

といひしもいまさらおもひ出て、いとゞむかしをおぼしめし出させ給ふ、しかれどもしげひら東國へ御げかうのとき、ほうねん上人を師とたのみ、五かいをたもち給へば、しんじつの御なさけもなかりける、ほどなくしげひら、又みやこへとありしかば、ものゝふしゆごし出給ふ、せんじゆなごりをおしみつゝ、なげきぞまさる思ひがは、涙の露の玉すだれ、かけぬなさけの中々に、なるゝぞうらみ成とかや、しげひら都に上り、しゆとの手に渡り、木津川のほとりにてちうせられ給ふ、せんじゆきゝつたへて、

あづさゆみいるかひなしやいまははや
　二世のためにはそりてかへらん

とよみて、十六にてかみをおろし、二たびおつとのはだをふれずと申候まゝ、まことに一夜のなさけをもかけず、御ことば申なれたるばかりにも、けん女はかくのごとく、さればうたにも、

くもの家にあれたるこまはつなぐとも

ふたみちかくるひとはたのまじ
この心はづかしく候まゝ、いくたびおほせ候とも、まくらつくべきとの御返しは、なか〳〵申まじく候、おぼしめし御きり候へ、
おとこ
いつとても御心づよき御ふみ、いよ〳〵おもひはますらをが、やたけ心に君をおもへども、かほどのおもひとよもしらじ、さるにてもそもじさまを、みづからがおもふ心は、しゆみひきしさうかい山となる、せかいの水もうせはてゝ、こくうの風もふきやまん、この事をしやくそんもよくあかぼんなふとゝき給ふ、人間にむまれきて、この心なき人もなし、さてまた君の御すがた、はるのはなとや秋の月、なをしも物にたとふるに、によさんの宮のたちすがた、おぼろ月よのなひしのかみ、こうきでんのほそどの、やうきひりふじんれんせうじやう、せいしのまへに十郎御ぜん、しまわうひめまつらさよひめそとをりひめ、ときは御前みなづる女、をのゝこまちや天女のひめ、たへまの中将あやめのまへ、吉しやうてん女まやぶにん、まこものまへにせむじゆのまへ、しづか御前ほしのみや、いづみしきぶこがうのつぼね、大いそのとらきやうだい、うつろいやすきはなの色、むらさきしきぶ佛御ぜん、ぶんごのくになるまのゝちやうじやのひとりひめ、たまよのひめをはじめとし、もろこしてんぢくわがてうに、びじんおほしと申せども、いかで君にはまさるべき、それのみならずげんじにも、六十でうの女ばうたちの、そのかず〳〵にもまさり、草ばのすゑの露夢のまも、わすれん事はあらいその、いかなるなみのよる〳〵も、かとめにたちあかし、みまくほしき君かなと、身をうらみ世をかこち、涙をともにして、にしきゞにはあらねども、夜はすでにあけゝれば、すご〳〵とたちかへりぬ、承はり候へば、花に三しゆのやく有て、さうもくと申せども、くわじつのときをたがへず、いはんやこれは人として、なさけあらぬはなきものを、たゞ是とてもみな人の、わかきときのならひにて候まゝ、御なびき候へ、
女返し
あしびきの山鳥のをのしだりをの、なが〳〵しき御たとへ、いつも〳〵うけ給はり候、いくたびさやうに仰られ候ともかたく候、一年きそのよしなかは、頼朝

の御だいくわんとして、へいけをさいかいにおつくだし、天下心のまゝなるゆへに、われまたみやこをしらんとしけるを、よりともきこしめし、蒲のくわんじやのりより、九郎くわんじやよしつねを大將として、木曾つゐたうのためにさしのぼせ給ふ、よしなか都にこらへずして、あふみぢさしておち給ふ、あはづがはらにてさんぐ〵にせめたゝかふ、其ころ木曾殿の御うちにともへとてさひあひの女あり、馬によくのり、こゝろごうにしてちからつよし、いつもせんぢやうへつれ給ふ、このたびもあはづがはらにて、はんくわいをもそねむほどのふるまひなり、きそどのの給ふやう、たのもしきともへかな、みらひにてもまたちぎるべし、とくく〵おちよとおほせければ、こは口おしき御でうかな、たとへ女なりとも男子にはをとるまじ、御さいごの御ともこそうれしけれとて、おつべきけしきはなし、きそどの御覽じて心ざしはさる事なれども、弓とりのさいごにをんなをつれたりと、後日のさたも口をしかるべし、はやく〵をちよとかんるいをながしの給へば、此うへはおほせをそむくにあらずとて、三町ばかりひきのき、つゐにそこにて

うたれぬ、心ある女なればかくのごとし、いづれのみちにも心はおなじ事ぞかし、

月のわにやゑむらくもはかゝるとも
かつらをのこのあればくもらじ

おとこ

しづがをだまきにて御入候へども、あまりにたえかね候まゝ又申あげ候、いつもく〵たゝかひにては、ながく〵しく候まゝ、とりあつめうたにて、

みちのくのちびきのいしとわがこひを
になはゞおふこなかやたえなん
たへもせずむねにたく火もいつはりか
たもとしぼらぬあかつきもなし
なみたがはそでのしがらみくちはてゝ
よどむかたなきこひをするかな
なかく〵にきみのおもかげみそめずば
ものはおもはじかずならぬ身に
きみゆへにおもひあかしの身をつくし
ゆめにもきみをみぬよなりけり
はづかしやうき世にもれぬならひとて
身はかずならでひとぞこひしき

わが戀はせんぼんのまつもかれはてヽ
おほうみやまとなるよりもなを
こひくれてこのよきへなばあくるひは
なみだぞねやのあるじならまし
わがこひはいしのまくらもくちぬべし
つれなききみをこふるなみだに
わがこひはまつをしぐれのそめかねて
まくずがはらにかぜさはぐなり
まことに〳〵とりあつめ、この十しゆおかしく候へども申あげ候、はづかしながらわれも一しゆ、
こひごろもみるめばかりにしほたれて
ほしてえさせよくちはつるそで
女なにともことばなくて、
われも日をいとふうきみのうすゆきに
ぬれしたもとをいかでほすべき
おとこあやまりてまた一しゆ、
たづねかねしらぬ山ぢをまよふ身に
きみがありかをそことしらせよ
とかきて參らせければ、御返しに、たにかげのうすゆき、このよのうちはなるまじくとおほせくださるヽ、おとここれをみて、このよのうちにならじとは、みらいの事と心え、いよ〳〵たえかね、今をかぎりと見えけるに、ある人のみて、一入よき御返事なり、古歌に、
たにかげにふるうす雪もはる日にて
ひとしれずこそとくるものかな
たにかげのうすゆきならば、こよひのうちにはとけがたし、あすは人しれずとけ給はむとの、御かへり事なりといひければ、おとこあまりうれしさに、
うすゆきのこヽろとけにしかすが野を
いかでわすれん世々はふるとも
かくよみておくりければ、程なくそのよは、あまのかるもにあらねども、うらかせにうちなびき給ふ、げにやおもへばひがしやま、にごらぬちかひはきよ水の、ながれもつきずあらしふく、をとはのたきの水なれや、かやうにおちあひ申さんとは、夢にもさらにわきまへずと、はじめおはりの物がたりなどし、ゑんわうのふすまのしたに、ひよくれんりのちぎりをこめ給ふ、なつの中ばの事なれば、まくらならぶるひまもなく、八こゑのとりもつげわたる、おとこあまりのかなしさに、

なつのよのうつゝともなきたまくらに
八こゑのとりのなくぞかなしき
をんな、いせ物がたりのうたなりしが、つゐでよしとやおもひけん、
夜もあけばきつにはめなんくだかけの
まだきになきてせなをやりつる
おとこまた
あきのたのかりそめぶしになれそめて
いまはなごりのおしききみかな
女また
あふときはかたりつくすとおもへども
わかれになればのこることのは
かくいひてたちわかれし、おとこいふやうは、のゝすゑやまのおくまでもちぎりたまはんに、よく〳〵人めをつゝみてかよひ給へと、やくそくしてこそかえされける、これひとへにくわんをんの御りしやうとよろこびける、そのあした、おとこ文つかはす、すぎしよは、とし月のうき思ひの數、御ものがたり申承はり、御うれしさいつのよにかはわすれ申べき、くをんこうの間もかずならずして、なか〳〵いまはばうぜんとして、夢かうつゝかまぼろしとも、さらにわきまへず候、ひとへに七夕のちぎりとぞんずる御事に候まゝ、これ〳〵さやうにおぼしめし候て、くださるべく候、
なか〳〵になれてくやしきにゐまくら
いまはおもひのたねとこそなれ
あひみての後のこゝろにくらぶれば
むかしはものをおもはざりけり
いとゞおもひはますかゞみ、御おもかげの身にそひて、むねのけぶりは、ふじやあさまはものゝかずならず候、
女返し
おほせのごとく過し世は、なれ〳〵しき御ことのは、さて〳〵御はもじさにて候、誠にたねんなく御いもじさ、中々かりそめぶりにみへ參らせ、今さら思ひのたねとなり參らせ候、たなばたのちぎりとはあふよの數すくなく共、ふたばの松のちよかけて、たがひにへだてなくかはらぬ色との御事にや、ともかくも此うへはちからなし、二人のおやのみ給はぬやうにとはぢ入參らせ候、はだへをなにとなふ、御みのたはぶ

れにうちなびき、うつゝなうなよたけのふせいにて、ふしみだれ參らせ候、くれ〳〵御はもじにて候、御いもじとも御ゆもじとも、さらになにの心もしり候はぬわが身に、そもじさまの御たはぶれにより、思ひのたねとなり、今さらなかだちをうらみ入ばかりにて御いり候、うらめしのうき世やな、そはぬむかしはおもひあり、あふてのいまはいよ〳〵ふかき、おもびぐさの御はもじながら、

なか〳〵になれてくやしきにゐまくら
　ゆふな〳〵におもひますかな
わするなよほどは雲ゐに成ぬとも
　そらゆく月のめぐりあふまで

どなたもおなじ御こゝろにて候、御げんもじのとき申まいらせ候べく候、かしく、

人めをつゝみしのびけるほどに、さつきのころよりも、よはにまぎれてかよひければ、むかしは物をと覺へて其の年もくれ二月初つかたまでもかよひ侍りしに、男のよしある人あふみの國しがのさとにすみしが、風のこゝちしてやみたるに、それへおとづれゆかんとて、その夜はきみの所へゆき、しのゝめのわかれにしがへゆくよしかたりける、女きゝなにとやらん名ごりおしげにて、やがて御かへりましませと、なみだと共にたちわかれしに、をんなおとこのそでをひかへ、かくこそよみけれ、

月出ばそなたのそらをながむべし
　かたぶかばまたおもへみやこぢ

おとこ

やみの夜はおもひたえなんうらめしや
　月なきとてもわれはわすれじ

かくいひてたちわかれし、たがひのこゝろのうち、をしはかられてあはれなり、

おとこもしがの里に、廿日になるまで日をおくりけり、その跡にうす雪なにとしてか、やまふのゆかにふし、今をかぎりとみゆる、二人のおやさま〴〵にいたはりしかども、らうしやうふでうのよのならひ、むじやうの風にさそはれて、うす雪むなしくきえ給ふ、其後おとこしがよりかへり、此こと夢にもしらず、君の所へゆきければ、下女出てかくなんと語りけるにこそ、男前後をわきまへず、しばしはきへ入給ひける、やゝありてこゑをあげ、わつとさけぶあはれさは、な

にゝたとへんかたもなし、しばしありてなみだのひまより、

行とききはまたもあふみとおもひしが

いまからさきはきみにゐはづか

其後かたみなど取出して參らせければ、いとゞ思ひはまさりけり、げにやいにしへまつかぜむらさめ、ゆきひら中納言にわかれしとき、かたみのたてゑぼしかり衣を、みるたびにうらみしもことはりかな、

かたみこそ今はあだなれこれなくば

わするゝひまもあらましものを

むざんやこの君、去年の五月の比は、きよ水まうでのおりふし、見そめしよりしづが心をつくしぶね、こがれしことも今はゝや、みないつはりとならざかや、此かたみを見る事なにのむくひかと、身をいだきふしまろび、にしにむかひて手をあはせ、さき立給ふ薄雪と、此よのゑんはうすくとも、來世にてはかならず、一つはちすのえんとなし給へ、なむあみだ佛ととなへ、すでにじがいとみへし時、折ふしありあふ人々、こしやたもとにとり付て、さてなにゆへ御しうたんぞと尋ねければ、はじめよりの有さまをくはしくかたりけるに、げにことはりや、いもせの中程わりなき事はよもあらじと、たもとしぼらぬ人はなし、さりながら、ゑしやぢやうりのならひなれば、なげきてもかへるみちにはあらず、能々あとゝひ給へとよ、とぶらひ給はゞさいごのともにはまさるべし、古歌に

あふはなをわかれのはなとおもへたゞ

あはずばなどかなごりおしとは

と申事の御入候と色々にけうくん申ければ、今はなげきてもかなふまじ、落花ゑだにかへらず、はきようふたゝびてらさず、これをせんちしきとさだめ、それよりすぐにたつとき寺にゆき、みどりのかみをそりおろし廿一と申に、れんしやうほうしとなをかえて、おはらのおくにこもりしを、かんせぬ人こそなかりけれ、

むかしきよもりの御むすめ、けんれいもんゐんは、一もんにをくれしより、出家になりこの所におはしましける、ほうわうみゆきなりし事、今さら思ひやられて哀れなり、或ときほうし心に思ふやう、後のよまでもうす雪の、しるしをいざやとゞめんと、かうやの山を心ざし、おはらのさとを立出て、うす雪すみし都を

ば涙ながらに見をくりて、道すがらの名所には、とばをとをればいにしへの、猶なつかしき戀づかや、しかのねまでもなきそへて、もみぢ色づく秋の山、西をはるかにながむれば、みだのちかひぞありがたき、すゑもたのみのにしのをか、よどの川より舟にのり、あとをみかへりながむれば　ひがしにつゞく山々は、清水こばたいなり山、猶も思ひのふかくさや、ふしみをしてもなげくなり、くだりかねたる道なれや、八わたの山をふしおがみ、頼みをかけてはしもとや、うらみもおほきくずのさと、いそぐにほどなくいし山につき、それよりくがにあがりつゝ、天王寺住吉ふしおがみ、かはちいづみもこゝよりは、さかひのはまをうち過て、東をはるかにながむれば、くものたへまの二上がだけ、心しづかにふしおがみ、あしにまかせてゆく程に、ねごろ小川をうち過ぎて、かうやの山にぞ着にける、こゝにしばらくとうりうし、院々たに〴〵おがみめぐるに、きゝしよりなをたつとく、八ようのみねそらにそびへて、千佛のさく雲にさゝげたり、むろのとぼそこけとぢて、さんゑのあかつきに月をこす、あるひはせつほうしゆえの庭もあり、あるひは念佛さんまいのみぎりも有り、ひきやうのさんこちにおち、しるしにうへたる一ちうの松、くわいろくのよゑんほのかにさつて、のきをこがせる御ゑい堂、かうの煙まどを出て、心ぼそきれいのこゑ、霧にこもりて物さびし、こゝはむかしたき口入道がすみたりし、あんじつの跡と尋ねみれば、ふるきいたまにこけむして、あれてももらぬよるの月、かれはいにしへ、西行ほうしがむすびおきし、柴のいほりのなごりとて立よれば、はらはぬ庭に花ちりて、ふむに跡なきあしたの雪、さまざまのれいぢやう、所々のゆうかんをみ給ふに、のがれぬべくは、かくこそあらまほしけれとの給ひし、これもり卿の心のうち、げにもと思ひしられたり、猶しもおくのゐんに參り、かなたこなたをみるに付けて、いとゞ涙ぞまさりける、さてそとばをかきて立てをきける、

ありがたやいまぞそとばをかきつばた

はる〴〵きぬるしるしなりけり

かやうにゑいじ、さま〴〵につゐせんをなしけり、かかるれいちにとうりうして、なをもうき身のけがれをもそゝぎたくは思へ共、又ふる里のなつかしさに、

なく〳〵都に上り、うす雪の御はか所へたちよれば、なみだにむせぶくさむらに、たてしそとばはもじくちて、とめゆくみちはすゑもなく、風のわたるばかりなり、

またこゝにめぐりかへりぬふるさとの
うすゆきともにきえはてぬべし

その後ひがし山に、かんさうあんといふ、しはのいほりをむすびける、たま〳〵ことゝふ物とては、みねに木づたふさるのこゑ、のきもる月のさし入りて、物さびしげなる.おりからも、心をさそふ松の風、のきのたま水おとすごく、かうのけぶりはいにしへの、そらだき物とおもひ出、たけのはしらにしばのかき、風をふせがんやどにあらず、かくてれんしやう、道心けんごにして廿六と申には、わうじやうをぞとげ給ふ、ありがたかりしためし也、

うすゆきもの語下 終

うす雲物がたり上

それなかむかしの事なるに、はりまの國むろつといふ所に、かなをかといふちやうじや有、そのいにしへをたづぬるに、其所のあみひきなりしが、おひたる二人のおやぞもち侍る、所々のしよさなれば、せひなくあみを引き釣をたれ、よのいとなみとして親をはごくみけれ共、あるひはなみかぜのよきおりからは、うをなどもあまたとれぬれば、其日のいとなみあまるとてうみにかへしける、あまたのうをの中にて、どれをかわきてとゞむべき、かたうらみのあればとてみなかへして、又よのかたにてあみをひき、すこしかゝるをひきあげて、その日のいとなみとせり、かほどの心ざし有人なれば、なんぷうのあしき日などは、いとなみにつかれければ、せんかたなくつりざほをもち、はまべにいでながむれば、なみいとつよくうちて、うみづらもさだかならねば、つりをたれぬべきやうもなし、りうじんもあはれみ給へば、たちまちいそべに、あまたのうを共とびはねあがりければ、それをひろひてかへり、おやのいとなみをつとめける、せいじんなれば、おやかう〱のみちは、もろこしの二十四かうと申とも、是にはいかでまさるべきと、ほとりの人もさたしあへり、ある時ちゝのいはく、我れ此ほどは、れいならず心ちなやみ、むねくるしく、いかにもしていきたるくまをもとめ、其きもをしよくさせよと仰ける、かなをかうけ給はり、かしこまつたるとは申せ共、とし比うらべにこそすみなれて、うをとるあんないこそ覺へぬれど、山に入てくまなどをもとめん事かたし、さあればとていなと申せば、ちゝのめいにそむく、たとへ山に行、やこうにふくせられんにても、おやのねがひをかなへんとおぼしめし、つりざほをつえにつき、みやまにぞわけいりける、折しもあらしはげしくして、木のはもしぐれのごとくふきおちて、よにすさまじくぞ侍りける、またかなをかの女ばう、つら〱思ひけるは、まことに二世とかねたるわがつまも、親かう〱のためにこそ、がゝたるせいざんには行かせたまへ、定めてしゝおうかめもおほき所なれば、よもやいきてかへらせ給ふまじ、我またあとにながらへ有てもせんなしとて、あとをしたいし

んざんにぞ尋ね行給ふ、折しも夕ぐれの事なれば、くもまをわけて出る月も、ほのかにかげぞみへ給ふ、いづちをそれとしるべもなく、みねにあがりたにゝおり、爰かしこを尋ね給へど、人のかよはぬ山なれば、たま〳〵ことゝふ物とては、おぼつかなくもよぶこ鳥、たにゝをとするしかのねならではをともせず、ただばうぜんとあきれたゝずむ折ふしに、いづちともなく、うすぐも一むらにまひさがり、其内より年のよはひ八じゆんばかりなるらうじん出給ひ、女ばうにむかつてのたまふは、なんぢやさしくもつまにかう有もの也、なんぢがつまは親かう〳〵の者なれば、天もあはれみ給ふ也、すなはち此玉をあたへ給ふ、有がたく思ふべし、此玉と申すは、じやつこうのみやこ、きけんじやうにおさまりたる、まんぼうのふぎよくといふ玉也、此玉にむかひて何にても、いのるにかなはずといふ事なし、され共なんぢふうふは、ぜんぜのかいぎやうつたなきゆへに、子といふじそなはらず、され共ぶつじん三ぼうもあはれみ給へば、によしを一人さづけ給ふぞ、なんぢがつまも、此谷のあなたに有ぞかし、いそぎともなひやどにかへり、いよ〳〵親かう〳〵をつもり、天をあふぎ申べし、我をたれとか思ふらん、是こそつねにねんじたる、むろの明神我ぞかし、家もさかへて其後に、みやこのかもへさんけいせよ、かさねてりしやうゑさせんと、けすがやうにうせ給ふ、女ばうゆめの心ちして、こは有りがたき御事と、こくうを三どらいはいしつゝ、彼の玉を手にもちて、をしへにまかせて、谷のあなたに行見れば、あんのごとくかなをかは、くまとるやうをしらざれば、つりざほをつえにつき、あきれはてゝゐる所を、女ばうは見つけ參らせ、一がんのかめのたまさかに、ふぼくにあへる心ちして、なふいかにかなをか殿、あとをしたひて來りし所に、めでたき事こそおはしませと、有しくだいをかたり給へば、こは有がたき御事とて、いよ〳〵天たうをふしおがみ、ふうふもろ共打つれて、我屋にかへり給ひつゝ、ちゝに此由の給へば、御よろこびはかぎりなし、たからの玉の事なれば、さけのいづみもわきさかへ、よねは一りうまけばまんばいとなり、程なく長者となり給ふ、月日にせきもりすえざれば、あたる十月と申すには、御さんのひもをとき給ふ、をしへすこしもたがはずして、玉のやうなるひめ



ぎみ也、御よろこびはあさからず、彼山にてうすぐも御身にかゝり、くはいにんならせ給へば、すなはち御なを、うす雲のまへとぞ申ける、おちやめのとをあまたそへ、いつきかしづき給ひつゝ、御てうあひはかぎりなし、かくて月日をふる程に、ほどなく十五さいになり給ふ、折しも五月の事なれば、さみだれすこしふりければ、心さびしく思召、花みのていに出給ひ、うす雲どのをなぐさめんと、あまたの女ばうたちを召れつゝ、くはんげんさせてなぐさみ給ふ、さてかなをか殿の給ふは、いつぞや彼山にてらう人の仰には、家もさかへて有ならば、みやこのかもへさんけい申せと有つるをわすれて、年をふることこそもつたいなや、いそぎみやこにのぼらんと、御舟をかざりたて、みだひ所やうすぐもゝ、かなをか殿ももろ共に、供人あまためしつれて、みやこをさしてのぼり給ふ、なにはのうらよりあがらせ給ひ、それより御こしに召れつゝ、かもにさんけいなされける、折ふしかもの日をりの日にてましませば、くげ天上人も袖をつらね、しもべの者にいたるまで、さゝめかしてぞさんけい有、其比みやこにかくれなき、たけひの大なごん有ずみの御子に、さくらのみやと申て、世にかくれなきびじんの宮おはします、御年十九に成給ふ御すがたを見たてまつれば、たをやかなりしあをやぎの、えだにさくらの花さきて、むめがにほひをもたせたり共、か程まではよもあらじ、やうがんびれいの御かたち、中々ふでにもをよばれず、きせんぐんじゆの人々も、立かへりつゝながめては、心ちまよはぬ人もなし、かのうす雲のまへも、御まへに参り給ひ、行すゑこしかたの事までも、ふかくいのらせ給ひつゝ、立歸らんとし給ふと、さくらの宮の參り給ふと、きざはしにて行あはせ給ひしが、さくらの宮を御らんじて、はや御心もうてうてんと成給ひ、くもの上人とは見參らせおはすれ共、さすが女郎の事なれば、色にいづるもはづかしく、そのまゝ打過給ひける、又さくらの宮はうす雲を御らんじて、いか成人のひめきみぞやと、御心をつさせ給ひ、御なゆかしく思召、みうちのものをさしつかはし、其なをとはせ給へば、はるかいなかの人なるよしこたへける、ひめ君はつかひの來りしをよにうれしく思召、下女をちかづけとはせ給へば、有りのまゝにぞ申ける、さて又都にてはいか成る人ぞとゝ

ひ給へば、天上人にかくれなき、さくらの宮とぞ申ける、ひめ君は聞召、いよ〳〵思ひの種となり、あけぬくれじと思ひくらさせ給へ共、げにまゝならぬ世のならひなれば、せんかたなくも、こきやうに歸らせ給ひ、ひと間所にとりこもり、さくらの宮の御事のみぞ、思ひくらさせ給ひける、あはれさて此君の、水ぐきなり共みるならば、か程にうき身はやつれじもの、さて世の中に神や佛の有るならば、思ひにしづむ身の程を、つゆ程つげて給はれと、すこしまどろみ給へ共、うつゝにも君の御すがたのみぞ見へ給ふ、かくて日かずをおくり給へば、いよ〳〵御心ちおもげに見へ給ふ、爰に又姫君の御めのとに、いざよひのつぼねと申て有しが、御まくらもとへ參りて申やう、いかにまふさんひめ君さま、わらはつく〳〵見參らせ申に、つねならぬ御わづらひとこそぞんじ候へ、いか成御事なればにや、さ程までは御つゝみまし〳〵候ぞや、かたらせ給へと申ける、ひめ君はきこし召、さては色に出けるかや、はづかしながらかたるべし、いつぞや都へのぼりし時、かものやしろのきざはしにて、さくらの宮とやらんを、一め見しよりわすれかね、かくまであこがれ申也、もし我むなしく成ならば、都へつたへてたび給へと、又うちふさせ給ひける、いざよひ此由うけ給はり、をろかなりとよ姫君さま、さ程にやすき事共を、思ひわづらひ給ふぞや、人をこふもこはるるも、世のつねのならひ也、けふよりしてはみづからに御まかせ候へや、よきにかなへてまゐらせんと申ける、ひめ君よろこび給ひつゝ、あらたのもしやいざよひ、ともかくも賴み申と仰ける、それよりもいざよひは、はゝうへさまへ參りつゝ、なふいかにおみだひさま、ひめ君さまの御心ち、今一たび都にのぼり給ひて、かもの明神を深くいのらせ給ひなば、御ほんぷくうたがひあらじと、ふしぎの御むさうましますが、いかゞあらんとまことしやかに申ける、はゝうへ此由きこしめし、あら有がたの御事やな、あのひめと申は、此所の明神のさづけ給ひし申子也、四十にあまりたまさかに、まふけたるひとり子なれば、よにたいせつに思ひしに、此程のわづらひには、色々くすりをつくせ共、そのかひさらにましまさねば、神にいのり佛にきせいをかけ申、都のかもの明神と此所のうぢ神とは、一たいぶんしんの御かみなれば、日々夜々のり

うぐはん、かぞへていはんやうもなし、はやくも御りしやう有つるよな、か程迄めでたき事あらじ、まづ此たびは御身ともなひのぼり給へ、かさねてりうぐはんじやうじゆの御れいに、みづからふうふはのぼるべしと仰ける、いざよひなのめによろこび、はやひめ君の御とも申、御舟に召れつゝ、じつさうむろの大かいを、こがれていづるこひぢのたび、其なはまだきたかさごの、雲の上人思ひそめ、おのへのかねともろ共に、ねをなきそめてこまつばら、よはほの〴〵とあかしがた、彼人丸のすまれしも、いつしか今はしろたちて、石がきの本となりにけり、たがふでそめてうつしをき、むかしを今のながめなる、なみにくちせぬゐじまのいそ、ともちどりよぶこゑだにも、我をとふかとおぼつかなや、あはぢ島山ながむれば、とまりさだめぬあまをぶね、我ごとくしもこがれて世をやわたるらん、彼行平の中なごん、みとせは爰にすまのうら、其なばかりは在はらの、こせきに松やのこるらん、あとなつかしく舟よせて、いそべにあがりてながむれば、もしほたれぬとわびけんも、今身の上にしられたり、心あらん人々は、わざともわびてこそすむべけれ、一のたにやてつかいがみね、いにしへ源平のやあはせも、こゝの事にやおはすらんと、むかしを思ひいでゝ一しゆ、

へいけむしやさびたるこてのてつかひが
みねをおとすはくらうはんぐはん

まことにあれはてしだいりのあと、いそべを見ればあつもりの御せきたう、わか木のさくら、かなたこなたをながむれば、いざよひのつぼねくさむらに、かいつくもふてゐ給ふを、下女立よりて、何し給ふとゝひければ、いざよひとりあへず一しゆ、

なにするとゝふ人あらばすまのうらに
しとをたれつゝあるとこたへよ

とさまかくさま、いひあざける所に、舟人は來り、日も山のはにかたぶけば、はや〳〵舟に召れよといへば、我さきにと、あはてふためきとりのつて、浪ぢはるかにこがれ行、さかて川をも跡になし、うらやましくぞおもほゆる、いくたこやのゝ里人は、おりながらみるぬの引の、たきつ心をせきかねて、我もすへにあはんとぞ、わだのみさきをこぎ過て、むこ山おろしふくはらや、あしやの里にとぶほたる、思ひにもゆるも

身の上と、思ひやられてあはれなり、すゞめのまつばらみかげのもり、いつか我きみ見つのはま、あはずば何となるをのおき、めてをはるかに見わたせば、かすみに見ゆるすみよしの、きしのひめまついくよをも、君もろ共にへぬらんや、なにはの事のよしあしも、しらぬたびぢにまよひきて、ふくしまよりも川ぶねに、のりうつらせ給ひつゝ、さらしなの、月もろ共に舟だして、江口の君のふなあそび、今見るやうにおもほゆれ、袖になみよるなぎさのゐん、うどのゝあしのほどへても、歸らん事はかたのゝはら、ゆんではひらかた一の宮、こひぢにまよふしづの身を、せきどのゐんとふしおがみ、すゑをはるかに見わたせば、みねには玉の木をならべ、ふもとにりんかをつらね、ゑんじのばんしやうのこゑきこゆをや、たからでらとなんいひけん、めてをみればしん〳〵たる山有、いくらのはとかおりゐて、しらさぎ山のこしをめぐるは、さながら山のおびかとうたがはる、あやしやとゝがむれば、舟人のいはく、あれこそおとこ山いはしみづ、八まんぐうとおしゆれば、とりあへずつらねける、
たのもしやあたへてたばせたからでら

まぼらせたまへゆみや八まん
といひつゝもみねにあがりて見れば、まことにゑんぽのきはんほのみえて、さんじのせいらんまのまへ也、ふもとにへいさのらくがん有り、ぎよそんのせきせう打見へて、淀のかりこも雪ふれば、こう天のぼせつもかくやらん、にはにうつろふ月かげは、是ぞまことにとうていの、あきの月共いつゝべし、にはかにしぐれふりくれば、舟人いかつて舟にのす、とまもるしづくのふなよばひ、せうしやうのよるの雨とはかくやらん、はつけいこゝにうつすかと、ながめもあかぬ川せ舟、ふしみの里よりあがりつゝ、こばたの山をよそにみて、思ひはなをもふかくさや、いなりの山のうすもみぢ、こいぞちりなんうらめしや、日かずやうやうほどふれば、花の都に着き給ふ、五條あたりにやどをかり、しばしやすらい給ひける、あるじの女ばう立出でゝ、よきにいたはり申ける、さよふけがたに、いざよひ申されけるやうは、なふいかにあるじさま、都にもめづらしき事もおはせずや、かたらせ給へ我々は、はるかいなかのものなれば、きかまほしやと申ける、女ばう此よしきくよりも、さしてかはりし事もさ

ふらはず、こゝに天上人に、たけひの大なごんありず
みの御子に、さくらの宮と申て、よにかくれなきびじ
んのきんだちおはします、めみざるしづのめさへ、
をとにきゝしを思ひのたねと仕る、ましてたいめん
有る人は、きゆる心ちもいたすとかや、即ちわらはみ
どり子より、もりそだて參らせたる、めのとにておは
するが、いかゞ有けん此の比は、心づくしのまれ人と
やらんを、かものまふでに御らんじて、御心をなやみ
給ふとは、風のたよりきゝつれども、たゞ色ふかき宮
さまにて、わらはにさへふかくつゝませ給へば、たれ
かはそれとしる者もさふらはず、あはれさやうの事
の有ならば、我身を五じよくのちりとなし參らせ申
共、思ひははらさせ申さんにと、あけくれ思ひくらせ
しは、むねくるはしき事共やと、しほ〳〵とかたり給
へば、いざよひつく〴〵ときゝゐけるが、まことに物
思ふとは、我身ひとつのやうに思ひしが、くは色かは
る濱のまつかぜとやらん、たれしもみやづかへせし
ものは、思ひのたゆるひまもなし、さりながら此ある
じは、ひめ君さまの思ひ人、さくらの宮の御めのとに
ておはすとや、一じゆのかげのやどり、一河のながれ
をくむ事も、みなこれたしやうのゑんといひながら、
ましてや是はうぢがみの、御ひきあはせと覺へたり、
せひともあるじを頼むべし、まづたうざのゐんぶつ
として、御小袖を三かさね、鳥目千疋あひそへて、あ
るじにぞつかはしける、あるじの女ばうあをやぎは、
かたじけなしとてよろこびける、其時いざよひ申さ
るゝは、なふいかにあをやぎどの、さき程の御物がた
り、我身の上に思ひやられていたはしや、わらはもあ
の姫君のめのとなるが、まことにきうか三ぶくの夏の
日は、松のこずゑを吹風までも、しづがかたへとまね
きよせ、又さむき冬のよは、ふすまをかさねひざをく
み、きしまのかいこをあたゝむるも、是程こそと思ひ
つれ、我としふる事わきまへず、たゞひめ君の御せい
じん、さゝがにの絲引のばすやうに待わびて、か程め
でたくならせ給ふ、され共過し五月の比、かもの明神
に御りうぐはんましまして、御一門ともなひ、かもに
さんけいなされしが、折しもかもの日をりの日にて
おはすれば、きせんぐんじゆかずをしらず、その中に
も、さきほど御身のかたらせ給ひし、さくらのみやと
きざはしにて、はたと行あひ給ひしが、ひめ君も御心

をうつさせ給ひしが、宮もいかゞ思召されけん、たがひに見かへりみをくりて、御なつかしげに見へ給ふ、其後宮の御かたより、しもべ一人はせ來り、ひめ君の御なをうかゞひかへりしが、それよりもひめ君は、こきやうにかへらせ給へば、をのづから程へだゝりぬれば、をとづれもましまさず、いたはしやひめ君は、さくらのみやの御事のみ、あけぬくれじとおもひわづらひ給ひしは、見るめも御いとをしくおもひ、はゝうへさまに御いつはりを申あげ、是まで御とも申せしが、さいはひ其はうさまにめぐりあふ事は、天のあたへとおぼへたり、ぜひ共たのみ申なり、玉づさひとつさくらのみやさまへ、參らせて給はれと、そこはかとなくたのまれける、あをやぎ此よしきくよりも、それこそやすき御事也、はやくもあそばし給へと有、いざよひはよにうれしく思ひ、ひめ君にかくと申せば、御よろこびはあさからず、すゞりれうしにうちむかひ、もみぢがさねのうすやう一かさねに、ふでのたてやうじんじやうに、たまづさひとつしたゝめ、あをやぎにぞわたし給ふ、

うす雲物がたり上終

うす雲物がたり下

あをやぎ御ふみうけとり、さくらのみやの御所をさして參りける、みやは此よしきこし召、あなめづらしやいかにとある、あをやぎやがての給ふは、此ほどのかぜの御心ちは、いかゞあそばしさふらふぞや、つねならぬ御わづらひ、御心がらと思ひ參らせ候ぞや、わらはになどか御つゝみさふらふ、まことにおさなき御ときより、御いとをしく思ひそだて參らせしかひもなく、わらはに御心をへだて給ふうらめしさよ、今みづからが所に、はるかいなかのひめ君に、御やどを參らせしが、御かたちのうつくしさは、たとへてゐにはうつす共、ふでにはいかでをよぶまじ、昔しはかんのりふじんか、ぐしぎみや やうきひ、我てうにてはあんじゆ せんじゆ、てるて さよひめ 上るり ひめ、をのゝこまちと申せしも、をとにのみきくばかり、此君ほどはよもあらじ、御かたちよりも御心のまさり、やさかたなりし御事は、むかしが今にいたるまで、たぐひあらじと存ずるが、爰にあはれのさふらふは、過

にしさつきの比、かもまふでの折ふしに、いかなる天上人とやらんの御らん有しが、そのおもかげをわすれかね、はる〴〵こがれのぼらせ給へ共、行衛もしらぬこひの道、御いとをしくさふらふぞや、もしもさやうのとりさたが、御所のうちにて有ならば、此文とゞけてくれよとて、御玉づさはあづかりしが、まづかは◎マヽやうのじんじやうさよと、こと葉に花をさかせつゝ、げに有さふにかたりける、さくらの宮はきこしめし、それはふびんの物がたりや、其たまづさを見せ給へ、あをやぎうれしくさしいだせば、やがてひらいて見給へば、ひごろ戀しく思召、ひめ君の御しゆせきとうち見えて、ふでのたてよのうつくしさよと、やがてはいけんあそばしける、

うす雲どの御ふみ

御心ざしのほどもさつしかね候へ共、よろしきたよりをもとめまいらせをよろこび、御はもじさもかへりみず、一ふでさゝげまひらせ候、まことに過し比は、あからさまなる所にて、よそながら見參らせ、御なさけ有げなる御すがた、一め見しよりわすれかね、思ひのとこにふししづみ、身はうき雲のさだめなく、そらなるかみのをとにさへ、きく由もなきたより故、もにすむ蟲の我からと、ねをこそなきて有明の、つれなくよをぞあかし潟、身をつくしなる我袖は、ほす日をいつと白波に、こがれてのぼるつくし舟、あひぞめ川のふちせにも、身をいれし◎マヽと思へ共、せめてはしづが思ひねを、君に露程しらせつゝ、もしや情はありそ海の、はまのまさごのかず〳〵も、御懷しく思ひて一首、

おもひそめいつかみやこのやへ櫻
　けふこゝのへにほにひおこせよ

さりとては御はもじさつもりて、せきもなく候へ共、つらき思ひにうかされて、露の間もわすれがたく候へば、御わらひぐさのたねとなるも、御なぐさみにもなれかしと、よそのあざけりをもかへりみず、思ふ心をたよりにて、すゞりに向ひふでにまかせ、よしなき事のみうつしまいらせ、あはれと思召、御なさけの御返事まちまいらせ候、めでたくかしことあそばしける、やさかたの御心やと思召けれ共、世のそしりをや思召けん、本のごとくにしたゝめ、文かへさんとし給へば、あをやぎ申されけるやうは、御文を御らん有て、をしかへし給はん事、人のあざけりいかゞしや、いか

やうにも御心にまかせたる、御返事あれかしと申されければ、もつともげにもと思召、れうしにむかひ筆をそめさせ給ひける、

みや御かへし

まれ人の御しめし、うどんげの心ちして、とるても遅しとはいし候、こなたも御なつかしさは、御つたへにあまり候へ共、まゝならぬよのならひ、よそのそしりもいかゞにおはしまし候へば、思ひながら御げんなりがたく、一しほ思ひの色をかさね候、とかく山鳥の、おのなが〳〵しく申候へば、いよ〳〵心もみだれ、いなものに候まゝ、中々にそめぬしらぢのおりふし、おぼしめしきらせ候べく候、

なにあふとうきな高間のうすぐもゝ
きへてはおなじけぶりなりけり

御文をしたゝめ、あをやぎにわたし給へば、よろこび御前をたち我やにかへり、ひめ君に參らすれば、うらしま太郎が七世のまごにあふ心ちして、まづひらいて見給へば、又

うす雲返事

ときはのまつのいつとても、かはらぬ ことのはながら、又ぞやをしかへし候、まことにしづのめのとやかくと、申候もみやうがをそろしく、御とりあげも有まじきやうに、思ひ候所に、思ひの外やさかたなる御ことばのすゑ、身にあまり有がたく思ひ候、さりながらうへつかたの御身にて、しづのめに御なさけ下されん事、世のそしりもいかゞと思召さふらふ事、御尤なれ共、いにしへやうめい天皇は、ぶんごの國まのゝ長じやの姫をこひ、御なをさんろと付せ給ひ、つくしのはてまでくだりつゝ、うしかひわつぱに身をやつし給へ共、ぶつじんくもらせ給はねば、つゐに御なもかくれなし、ふさゞきの大臣は、さんしうしどのうらにすむ、あまのはらにやどり給ふ、かたじけなくも日月は、にはたづみにうつりて、くはうゐんをまし給ふぞかし、情にへだてのなき物を、つたなの君の仰かや、それのみならず中比の事かとよ、はるかみちのくではの國、をのゝよしひろのむすめに、すゝきのまへと申せしは、小町のためにはいとこ也しが、すがたかちよにすぐれ、なを心なんまさりければ、よに人、ゐんきんによらずさたしあへり、其比大橋大なごんまさしげの御子に、四ゐの中將ま

さみちとて、御年五々のくればかりなる御きんだち、さるしさい有て、出羽に流され給ひけるが、しいかくはんげんよにすぐれ、御かたちのうつくしさは、春ののにぼたんしやくやくふぢ山ぶき、をのれ〳〵にさきみだれ、色をあらそひぬる共、か程まではよもあらじとなん、ある時此君花ぞのに出給ふを、彼ひめ君は御らんじて、はやくも思ひのたねと也、御心のくるしさも日々にまさりぬれば、つゝみかねておはせしが、とてもきゆべき露の身の、たつなもいかでをしからじと、よろしきたよりをもとめ、日にもゝたびも玉づさをかよはせ給へど、君のごとく心づよき人さまにて、しか〴〵返事もましまさず、ひめ君あまり物うさに、有よのやはんばかりに御へやを忍び出、彼君のおはします、あみどのほとりにたゝずみ、うきつらかりし思ひねを、くどき歎かせ給へば、中將殿の給ふは、あふせさこそ有もやせめ、さりながらみづからは、一かたならぬるにんの身、人のそしりも有る物を、わらはつらしとおぼすなよと、あけさせ給はん由もなし、ひめぎみいよ〳〵あこがれて、なふいかに都のとの、さのみ人にはつらかりそ、空をかくるつばさ、地をはしるけだ物までも、いもせのあはれはしるぞかし、されも共淺ましき賤のめなれば、かさねてとかふ申がたし、此よに命の有るうちは、此あみどのほとりを君の御ねまと思ひなし、草をまくらに露をきて、しのゝめもひらくならば、すご〳〵と立かへりもやせんと、御くどきましませば、中將殿きこしめし、かくやさかたなる御かたを、むげにかへし參らするも心うるさし、よしあすはゑんぶのちり共ならばなれと、つまどををしあけ給へば、ひめ君ゆめの心ちして、内にいらせ給ひつゝ、かりそめながら二世までの、御契りとならせ給ふ、かゝる情も有る物を、いはんや君はめでたき身にてましませば、いかゞはくるしかるべきぞや、かほどになげきを申ても、御あはれみのましまさずば、猶も思ひはふかくさの、せうしやうの跡をしたひ、雨のよも凮のよもいとはゞこそ、もゝよちよもかよひ、命おはりて後の世は、ぼんなふの犬と成て、六だう四じやうにて、しうしんははらし申べし、ぬれぬさきこそ露をいとふならひ有、念力いはをとをすとかや、いかゞ仰の給ふ共、二世をかけて思ふ上は、とかく御なさけの御返事まち〳〵、めでたくかしこ、

宮は此文御らんじて、あら物うの我身やな、思ひはいづれか、おとるべきにはあらね共、よそのそしりうたてさよと、又すゞりにむかひ御返事あそばしける、

みや御返事

又ぞやこよみまさりの御水ぐき、なかめ入り〳〵へば、色々の御ひき事、今身の上にしらま弓、よにゐるかひもあらぬよと、いやましのたねをもとめり〳〵、さなしとて、などかつらくは思ふべきぞや、まゝならぬうき身程、ましてけいぼの事なれば、うきなもいとどたつべき身の、何とかなりはて申さんぞや、さあればとて、情もしらぬ返事を参らせんも心うし、さりながらもろ共に、かゝる思ひもたねと也、命はきへはて申とも、なは後の世までくちぬもの、たゞ思召わけ給ひ、思ひとゞまり給ふべし、たがひのふみも、ちづかにかさなり参らせては、きのどくさままさり候まゝ、もはやふつと返事申まじく候まゝ、御うらみ有まじく候かしこ

ひめ君此文御らんじて、つれなの君の仰かな、たとへいかゞおはする共、さよふけがたになり行ば、しのばばやと思召、日のくるゝをぞ待給ふ、山寺の花やちらする入あひの、かねのひゞきと共にしのび出、めのとのいざよひともなひ、さくらの宮のおはします、つまどのわきにしのび給ふ、折しも人をとしづまれば、つまどをほと〳〵とをとづれ給ふ、内より宮さまの給ふは、たぞや此さよふけて、つまどのわきにをとするは、まだ里なれぬうぐひすの、はつねまさりの御こゑや、おぼつかなしととがめ給ふ、ひめぎみはとりあへず、一しゆのうたにかくばかりぞゑいじ給ふ、

あらしふくみむろのおくの山ざくら
ひとよのはなをたのみきにけり

さくらのみや御かへし

しほがまのけぶりもおなじうす雲も
きえてのゝちはとにもかくにも

かやうによみ給ひて、ひらに歸らせ給へや、とてもかなはぬ物ゆへに、よのあざけりの有物をと、心つよくの給へば、ひめ君あまりのものうさに、又おしかへしの給ふは、なふ情なや思ひ人、さのみつらくはの給ひそ、日かげをまたぬあさがほだに、露に一やのやどをかす、げに心なきあしのはも、だるまそんじやにやどらする、かぢおの山にてほうねんは、はとのつえにや

どり給ふ、かゝるひじやうのさうもくだに、情の道はしる物を、せかいをてらす月だにも、雲間にしのぶならひとて、かつらおのこは有とかや、かさねてはともかくも、ひらにこよひは、つまどをあけさせ給へと仰ければ、宮は此由きこし召、あら物うやな、かゝるべしと思ひなは、はじめより返事をもせまじきものを、と、世を怨み身をかこち、あんじくらさせ給ひしが、心よはくてかなはじと、なふいかにひめ君、何と仰さふらふ共かなふまじきとて、又一しゆかくなん、

たまのをのながきおもひぞうらめしや
さくらのはなのちりはてはせで

うす雲かへし

はれまなきみねのうす雲いとまなく
さそふあらしにきえよたまのを

かやうにへんかをあそばして、又つまどををとづれ、女の身としてよもすがら、か程になげき参らせしに、つらくもかへさせ給ふぞや、とてもあけさせ給はずば、かへりて何のせんもなし、とても我身はむもれ木の、花さく事もあらばこそ、是れぞぼだいのたねならめ、心をにしに参らせんと、まもり刀にてをかけ、たけとひとしきくろがみを、すでにきらんとし給ふを、いざよひゆめ共わきまへず、はしりかゝりいだき付、なふうらめしやひめぎみさま、おさなき時よりもりそだて、一筋ぬくるかみをだに、よにうたてしく思ひしに、さやうにならせ給ひなは、國もとにましまする、ちゝは何と成り給はん、なさけなの宮さまやと、又ひめ君にいだき付、もだへこがれ給ひける、宮は此由きこし召、あらうらめしの我身やな、よのあざけりを思へば、われゆへひめをうしなふなり、又姫をあはれみ、ひよくのかたらひ有るならば、うきなの程もつらからん、とやせんかくやあらんと、思ひのとこにふしたまふ、おりふしふしぎやな、かぜもふかぬにまくらもとに、あをひのは一まひふきおちて有り、とりてみれは歌のもじすはれり、

うす雲の日かげにさかふさくらばな
あまてる神のむすぶゑんかな

ありがたの御うたや、此ひめを見そめ参らせしも、かものみやす所なり、又あをひはかものみやうじんの、御てうあひ、これぞうたがひもなきみやうじんの、御つげなりとよろこび、はやくもつまどをひらけば、ひ

め君ゆめの心ちして、よにうれしくおぼしめし、うちにいらせ給ふ、たがひにつもりしおもひのほど、かたりなぐさみ給ひ、ひよくれんりの御かたらひ、あさからずこそ見へ給ふ、其比かものやしろには、よのまにしらはの矢な丶すぢぞた丶せ給ふ、しや人ふしぎに思召、みかどへそうもん有ければ、くぎやう天上人あつまりて、をの〳〵せんぎまち〳〵なり、はかせをめしてうらなはせとのせんじにまかせ、やがてはかせにつかひたつ、其比あべのやすよしとて、めいよのはかせ有しが、やがてさんだい仕る、かみよりのせんじ也、きうに一さん仕れ、かしこまつて承り、やがてかんがへ申ける、しばらく有て申やう、是こそめでたき御事なれ、是よりさいこくはりまの國、むろのつといふ所に、かなをかといふ長じや有、是を召のぼせられ、みやこのしゆごになし給はゞ、御代はちよまんざいも、めでたくおさまり申さんとの御つげにてさふらふと、手にとるやうにうらなひける、みかどゑいぶんまし〳〵て、さらばちよくしをたてよとのせんじ也、うけ給はつてちよくしたつ、かなをか殿ちよくしの御供つかまつり、やがてさんだいなされければ、みやこのしゆごをぞ下されける、時のめんぼく世のきこへ、有がたしと御前をたち、すぐにたけひの大なごんの御所にいり給ひ、むことしうとのけんざん有り、かさねてのちよくぢやうには、さくらの宮はかなをかゝむこなるよし、此たびの御よろこびに、中なごんにぞなされける、有がたかりけるしだいなり、是と申もかなをか殿、おやかう〳〵なるゆへ、まご子のすゑにいたるまで、ゑいぐはの家とさかへ給ふ、此人々の御ゐせい、めでたかりけるしだいなり、

うす雲物がたり下 終

他我身のうへ

孔なき笛に太平のうたを吹けば、耳よりほかに其音遠く、指ならざるを以て無何有の月を指せば、ひかりかげを忘れたり、山を山といふとも、そもまたせしむるものはたぞ、

他我身のうへ目錄

第一

目錄終

他我身のうへ第一

(一)諸宗ともに、後生をふかくねがひ願するものは、必ず世の事に付ては心ねまがりて、人のよき事はそねみ、あしき事はよくもてはやすものなり、是大聖釋迦のながれをくむとも見えざるを、不審に思ひ侍りて、此ごろ此事をあさき智をもつて了簡し侍るに、今時世にある人の、後生ねがひといへる人は、其心實に後生ねがひにはあらじ、其ねがひやうのをこりは、あるひは寵愛の妻や子にはなれ、大かた後世ねがふ事なれば、人の愁をあしき人こそ、其外世の事にたより聞ては、餘所にも此愁あり、我ひとりの身ばかりかくつらきめにはあはじなどいひて、餘所の愁を我愁の友とす、うへには深く世の愁をなげくに似たれ共、底には我方人と思ひて、おいとしぼうやお笑止やなど、口にまかせていひなす、すべてよからぬ事なり、餘所の愁を聞て、我愁の友として心をなぐさめんよりは、しかじ我愁を、これ則前世の宿業のはつる所、菩提の種なりとかへりみて、それぐの法を修行せんには、又其身のほどに付つゝ、時を得てしたりがほなる人は、彼せばき心をもちて、我こそ才覺よくて萬事たよりもよし、家もさかへ一族もひろまれば、此の上には後世をねがはばやと思ひて、殊勝にもなき僧をあがまへ、あそこの寺參りこゝの堂供養などいひて、あなたこなたとさゞめきありくこそ、誠の名聞とはいふべけれ、此の名聞の心ふかきによりて、たとひよき出家にても、貧なる寺の住寺をばあがまへず、同じ寺の同行のうちにても、そんじやうそれは、何程の寄しんをせられしほどに、我もいかめしき奉加につきてんと、我慢をおこす心より、人をそねみ、ほむらをもやす、是心實の後の世のためとはみえず、誠に後世を大切に思はんとならば、先一番に我慢をやめ、次に慈悲を專とすべし、たとひ我まんをやめたりとも、慈悲の心うすくしては、後世をねがふといふべからず、又慈悲ありとも、我まんをさきとしては、中々佛の御心に叶ひがたし、此二つを心に會得し、扨其上に我身の程をしる人を、愚也共いへ、我は誠の佛道者と謂はん、

(二)若き人のひが耳に、儒道をかすり聞きにきゝ、禪の法語など、よき師匠なしにみれば、心かきやぶりに

なりて、萬事物ぐるはし、又歌草子など見ば、好色にうつらぬやうに、心をもちてみるべし、これ歌書の本意なりけらし、

(三)藝能にかぎらず、物の師匠をするもの、弟子にわたくしをいひなれし心を、外のものにむかひていへる、心得ぬわざなり、

(四)人のよき事を、ことの外によろこぶ顔するもの多けれども、大かた心には何とも思はぬ物也、そのいはれは、よき事は多く人の、かたり傳へぬにてしるべし、又あしき事は、一たんうたてがるかほをしても、千里の外まで、人にかたり傳ふるは、そこ心にうれしがる程にはなけれども、ちとおもしろがる心なる故にや、いとはづかし、

(五)富貴なるといへるばかりにて、何の德もなく智惠もなき人にこびへつらふ人を、そばよりみて事の外にわらひて、猶其の人より諂ふものあり、猶みぐるし、かくいへるものも、又々へつらふ、とかく富貴なる人に諂ふは、世のならひなれば、へつらはぬ樣にても、多くは諂ふものなり、よく／＼心をつくしてへつらふべからず、見ぐるしきものなり、又へつらはじとて、我意をふるまひ無禮をする事なかれ、へつらはぬと不禮と、人の取まぎらすもの也、

(六)くわんすのふた／＼と、茶の湯などするとて、にえわたる人、よろしき道具など多く求むれども、かなのかけものをさへ、得よまぬ人の數奇の道は、とかくよき茶をのみ、樂たてをふるまひ、一たんの利口に、道外たるじぎなど云ふ物とのみ心得て、あけくれ利休にもをとらじと、ひげくひそらしたる、いと惡し、

(七)世話に、論語よみの論語よまずと、いふ事をいひならはせり、此の事誠にわらべらしき言葉なれども、ふかき道理あり、いにしへの學問をせし人は、道のため德心のために功をつめば、後には自然に天子にもきこしめし、諸侯よりもめし出され、國の守護をも仰られし者也、今の代の儒者なりとて、世に鳴ものヽ元來をみれば、其おや先づ宗領には、それ／＼の家をもつがせ、二男には隱居の跡をもとらすべし、此外の子を學問をもさせて、ゆく／＼は、世をわたるたづきともさせんなど、思ゐてなす程に、やう／＼大學を讀みならふ比より、はや弟子をもとり講釋をもして、人にきかせてんと思ふ心より、とやかくやする內に、

法體をして、異風なる名をいくつもつき、とかくあたま丸きものは、人に物を貰ふものなりと心得て、あそこへもこゝへも、心なき事のみ云かけ、扨なまじゐに書を見る故に、口はかしこくて、我にあはぬ者なれば、假令よき人にても、おもしろきたとへを云て、あしさまに云なし、又惡きものにても、我と相腹中なる者なれば、利屈なる引事を取付て、雲井までもほめあげ、我淫亂なる事をも、是即天地和合の道理、人倫の根本など、言葉に花をさかせて云ぬくれば、當座は誠にかしこげに、孔子の孫のやうにも見ゆれども、又しりぞきて、側よりよく其わたくしを見れば、口と身の行ひ、雲泥はるかにちがふ人のみ多ければ、論語よみの論語讀まずと云ふも尤なるべし、

(八)世にすこしも、德心の爲に文字をならひ、道理をも聞くものを見て、文盲なる人なま物しりとてそしる者あり、是大いにひが事なり、誠に一文は無文の師なれば、われよきものしりにならんまでは、なま物知りたる人を、師としうやまふべし、やつがれ若年のころ、ある人と友なひて、人の家ひろめに能しに、まことに殘る所もなき普請にて、かしこのくまぐ〲まで、心をつくして住居たるを、かたはらへよりて、こゝこそ物好たらね、かしこゝそ世智辨なる好なれと嘲られしが、其あざけりし人のすみか、誠にむぐらの宿とも云ふべかりしは、今のなま物知りとて、そしりし人によく似たりしか、

(九)いぬの年のよるやうに、何の修行もなく、うかうかと年よりたる人を、とこわきになをして、敬ひ云へることのおかしげなるをも、人がもどきいはぬを、我齡ひたけたるより、かくあると思はずして、萬事分別もよき故に、人のあがまゆると思ひ取りて、ひた云ひに物いひちらす人は、いとおし、

(十)わかき人のすこしの智惠、又は藝能夢ばかり仕覺たる人の、老たる人の藝能なきを笑ふたぐひの人、いとにくし、

(十一)我が分際より、言葉をもひらめに人につかひ、身のふるまひも、其ほどを忘れたる人こそ、勝れてをろかなるとはいふべけれ、もし我身を、人にうやまはれんとのはかりごとならば、まづ人をたつとみ、言葉にも禮儀たゞしくつかふものならば、いかで人、われに無禮をせんや、たとへば友の中にて、似たるものを

二つ求めたらんに、其うちに、少しよしあしきあらんときに、まづ其方目に入りたらんを取給ふべしと、仁義をするに、いかでか先の人、心なくまんがちによきをとらん、又先よりも、先其方とこそ申べけれ、さて互に禮をつくしてわけたらんうへは、たとひ我取りしまさりて、人のとられしをとりたりとも、人も我をうらみず我もよろこび、又我をとり人まさりたりとも、互にへだてもなかるべし、もし此の禮儀もなく、たがひに爭ひわかつものならば、人にをとりたるをとりたらば、いかばかり腹も立ぬべし、又我がまさりたるをとりて、人にほいなく思はせんも益なし、とかく朋友の交にも、我身を後にし言葉ひくうして、一生くらす人をこそ、德のいたりたる人共いふべけれ、あながち當座のさしあひなどよく云ふとて、心實なき人はうらやましからず、

(十二)我身のほどをわすれ、人に無禮をなすものこそ、必又へつらうまじきものにへつらひ、おぢまじきものに、深くおそるゝものなれ、これあだことに、金銀を多くついやす人、すべき義理順儀をもなさず、やぶさかなるまじき事に、客なるがごとし、

(十三)法體をして、めづらしき字を求め、耳にたつ法名つく事、此ごろおほくある事なり、たゞよびよき名よかるべし、名は人によりてたつとし、人は名によりてたかゝらず、樊噲の辨慶のといへる名は、今聞きても兵(つはもの)らしく聞ゆれども、もし樊噲辨慶が手柄なくば、樊噲も辨慶も、おそろしき名とは聞まじ、又ほとけといへる名も、さしてたうとき名にはあらねども、慈悲のほどをよく人しれば、聞くよりはやたうとし、もし又ほとけと云へる名を、木履か草履かにつけて、むかしよりをきたらましかば、聞きにくかるべし、

(十四)萬にさかしき人も、なれにしつまにをくれし折は、同じけぶりにも立のぼりなんと、なげきあへれども、ほだしとなりぬるみどり子さへありて、つれなく日をおくりけるうちに、やう／＼忘ごろなる友にいざなはれ、心ならず後の妻などむかへて、年月をふるうちに、又子と云ふものひとりふたりまうけて、とやかくや寵愛する内に、せん腹の子やう／＼人となりて、もはや家をもわたし世をもつがすべき折にも、其心露もつかず、かへりて後の子に、家財をもとらせたき心に、いつとなくうつりかはれり、其おこる所を

おしはかるに、はじめの妻の子た、にくまんと思ふ夫はあるべからず、たとへば井の水をくまんに、前なるつるべをさげんと思ふ心はなけれども、むかひなるつるべを引きあげんと思ふうちに、心ならず前のつるべ下るがごとし、其のすき間をうかゞひ、かのさかしき繼母、言葉をたくみにして、いろ〳〵身になりがほに、ざん言をさしはさめば、其色におぼれ、宗領をわきとし、後の子を正意に立てんとするにより、本より彼舜のごとき子もまれなれば、子のかたよりもわかげにて、すこし述懷の心出來て、ひとへに夢の世とうつりかはることをなげき、一日ぐらしなどに心を持ちて、親にも露禮儀ををこたりなどするときに、猶かの繼母、前うしろにて、なき事を取つけかたれば、其父これをまことに思ひ、理不盡に親子の道をきりなどする事は、大かたは後のつまより、多くおこるもの也、又ちゝはやく死なんとするときに、形見などをとらせ、我死したらん後にも、よく後家とげよ、我子にも、繼母なりとて惡くばしするな、など云ひおくもいとむづかしと、長物がたりをすれば、又かたへなる人利口げに、それも其の人の心にこそより侍らん、そこ〳〵の人はまゝしうても、よく侍るもありといふは、定めて後の妻の心よきを持たらん人なめりと、推し量らるゝが、まづ十が八つ九つまで惡しき者なれば、多分につきたるかた心にくし、されどもむかへて、其子のためにも我ためにもよくば、またむかへ侍るべし、一がいには云ふべからず、

(十五)世に長者二代なしといへる事は、いまだ書物にては見侍らねども、大かたはたがはぬもの也、まづこゝにひとりの長者あらんに、多くの子をもち、それぞれに藝能をつけ、朝夕に能の諷のとさゞめきあへれども、おや生がいのうちはさる物とて、とかくはごくみてつゝがなく侍れども、本より電光朝露のきえやすきことはりなれば、親やう〳〵、此世の緣のつきんとする時に、なく〳〵跡やまくらに引きよせて、唯今死ぬる命よりも、我子どもに別れん事をなげゝども、時刻至ればはかなくなりて後、それ〳〵にゆづりをとらせ侍るに、たとへば千金のかさねたる富なるを、五人の子共にわかちとらすれば、其の子は五か一の分限なるを、今まで親の此の世にありしときのごとく、能ぞはやしぞとさゞめきあへる内に、家へ出入

る、おちめのとの、わがやしなひ君は、鼓こそよくあそばされ、諷こそ器用なれとほめそやせば、其の家職をわすれ、春は花見、秋は月見といふうち、やう〱其の身まづしくなり行くまゝに、後には身おとろへ家やぶれて、あまつさへ云ふまじき兄は、弟に不足を云へば、弟は兄にうらみを思ふ、親むなしくなりし後は、藝をもたしなまず、朝夕身をおさめ、家をとゝのほる工夫のみよかるべし、親存生のうちに、子を思ふ事のふかさに、人として藝のなきは、ちくるいにかはる事なしと思ひ、それ〲に藝をつくるといへども、文盲なれば、彼あだなる藝にのみ心をつひやさするゆへに、身のほどをわするゝとみへたり、同じ藝をまなばせんとならば、彼大聖孔子の門にあそばせて、おのれをおさめ、人をおさむる道をきかせたきものなり、此道をあぢはふものならば、たとひ天命不幸にして、身のたよりあしくとも、彼あかずむさぼる人の、萬金を家にかさねたるものよりは、心はきよくして、一簞の食も、しば〱むなしくとも、彼あさましき心の人の大牢の美味に、日々に萬錢をついやすよりは、たのしみはるかにまさるべし、千金の金をつむといへども、一日の學にしかずと、高野の大師の仰せられし、まことにさも有りぬべし、

(十六)よろづすぐれて上手のなせる藝を、其道を心得ぬ人のほめたるは、聞きにくきものなり、其の藝をする人も、何かは其のしらぬ人のほまれをよろこばん、まして智恵ふかき人の公事の分やうなどを、おろかなる身にて我心にまかせて、何のぎりかの道理にあたるなどのとりさた、いと聞がたし、いはんや儒佛の道理をや、

(十七)圍碁雙六に、たび〲手をみて、後にかちてよろこぶこそ心得られね、又手をみせじといふも、にくきものなり、すべてかゝるたはぶれに、長き夜日をくらし、心つくす人は、大かたおろかなる人の上にある事なり、

(十八)人のおほくあつまりたる中に、そこ〱の里には、ふしぎなる事どもありなど、おもしろくかたり出るは、聞く者たれもそらごとたりとはしりながら、其物がたりの、さも有ぬべき次第を興じけるを、かたへよりさし出、さいまくりて、そのこときはめてそらごとならん、何の經には何といへる本文あり、かの文

にはかく云へる言葉ありなど、道理しりがほにいひちらしたる、いとにくし、又年おひたる人の、血氣ぶり力だては、咄にも其人いかばかりとおしはかられて、心おとりせらるゝものなり、

(十九)鄕に入て鄕にしたがへといふ事は、いまだ文にては見侍らねども、是に能く相似たる事は、禮記等にいと多し、しかれどもまことの侫人は、おのれが利口をもとゝして、賢人の言葉をかり、人は人たり我は我たり、もし我はつるときに、たれかは身にかはるものあるべきとて、人のそしりをもかへりみず、人の事のみあしきさまにいひなすものあれども、かやうの口こはき、人くらひ馬のたぐひには、じきに云聞かせる人もまれなれば、一生我身ほどよろしきはなしと思ひて、あやまりを重る者あり、佛四つの恩をときたまふうちには、衆生の恩あり、もし我は我、人は人たるといふことならば、さまでの恩といへるまでは有まじき事なれども、たとへばあみを大空にはり、鳥を求めんに、鳥のかゝれるあみの目は、わづかにひとつかふたつに過ねども、目ひとつふたつ、ないし十二十あるあみにて、鳥をとらん事を求めんには、いつまで求むるとも、鳥かゝるまじきごとく、我一人にて世をわたるといへる事は、有まじき事なり、

(二十)むかししたしかりし人、今うとくなりなどするは、うき世の有さま也、又我まづしかりし時の友には、今いかなるうらみありとも、猶ねんごろにおもふべし、人の心は、大かたうつろひ安きものなり、かのうきときつるゝ友もがなと、いひし事こそまことなれ、女にそへる中にも、離別する法五つあり、一には父母にしたがはぬ女、二つにはいたづらなる女、三つには物ねたみする女、四には口さがなき女、五にはぬすびとげなる女、此外にあしき病ある女と、又うまずとをさるといへる事あれども、それは事によりこなふべし、また我心にかなはざれども、離別せざる女三あり、一には我親のやみいたみによくつかへし女、二には我貧なるときにむかへて、共に家のうちをもおこなひおさめたる女、三には其女の父母兄弟も今はなくて、たよりなき女、是むかしより傳る法なるを、此ごろは人の心、ことやうになりもてゆき、右七つの去べき事ある女をも、いろにおぼれて一生そひ、又三つのさるまじきものある女をも、我少しの腹立

にて、つらき別をする人あり、かく傳へかたるも、心いたましき事なりや、又長くつるゝつまにも、我かまど將軍をふるまひ、思ひをもやさするものあり、又わづかに、ひとり二人相つかふ下人にも、無理のみ云かけ、つよくせたげて、ともにほむらをもやす人あり、これ人をせたぐるに似たれども、つひには、我身のはらたつる所いかばかりぞや、ふるき世の式にも、下人の無禮、見入り聞きいるべからずとこそ聞へけれ、又陶淵明は、我子のかたへ下人をおくるとて、これも人の子なれば、よくいたはりはごくむべしと、いひやりしとかや、有がたき心ざしなり、

(廿一)日本は神國にて、かたく四足を食する事を、神の御いましめとて、ふかく其制法を守る事、其おこりは未聞侍らねども、神道は、慈悲をもつて專とする事なれば、すこしも大なるものゝ命をとる事を、あはれみたまふなるにや、それはよし何ともあれ、此のあしはらの國にすまふものは、天照太神の御掟をそむきてはあしかるべきなり、しかあれども此ごろの人は、おのれが利口をのみ專として、神は人をあはれみ給へば、たとひ四足のものなりとも、くすりに用るに何の憚りあらん、しからば、くすり食にする分はいむまじ、其上唐には、牛鹿などをもつて神をまつる事、めづらしからずなどいひて、おのれが食するのみにあらず、人にもすゝめ侍る事、大きなるあやまりなり、儒者の法は何ともあれ、それも國の風俗をそむけとは、孔子孟子の敎にもあるまじ、唐の風の聞きそこなひを行はん人は、からへわたり給べし、一日も此地にゐ給ふうちは、御無用なりとかたり侍りしかば、かたへなる人のいはく、昔もさる古德の、わづらひ日々におもりて、今はのかぎりとみへしとき、名醫來りていはく、此病にさらにほどこすべきくすりもなし、乍去鹿をきこしめしたらんには、もしもやいゆる事もありなん、されども御出家の事なれば、いかゞと憚り申侍りしとき、古德の曰く、今我心にふかくおもひかけし大願あり、命は露ちりほどもおしきにはあらねども、此大願の修行を、もし此生にはたさずんば、永く苦海に沉むべければ、たとひ佛神の御いましめの、四足をおかしてなりとも、一旦の命をたすかるべきとて、彼醫者のあたへし鹿をくひ、忽本復して彼大願をとげしも、あやまりになるべきやいなや、答て曰、

あやまりになるまじ、かへつて佛果のたねとならん、問て曰、然ば今の世にも、唯今命はつべきもの、其藥食の力によりて、二たびもとの身になりて、後世をもねがひ神道をも聞くとて、此事をせば誤になるまじや、答て曰、あやまりになるべし、是智者の惡は、惡ともに善、愚者の善は、善ともに惡といへるものなり、そのむかしの古德は、其病よくなりて後、一大事因緣の修行より外をなさねば、其藥力みな佛果のたねとなりし也、今の凡人の藥食といへるは、たとへば、病よくなれば、朝には名利につかはれ、夕にはあらぬ行末のよしなき物思ひに、惡業を作るより外なければ、其藥力みな無間の種となる也、問て曰、しからば藥種に醫者の用るも、又のむ人もあやまりならんや、答て曰とがとならじ、先藥種に用る分は、大かた其病人にそれとしらせず、又しりて否といへども、わづかの事なれば、其藥種ゆへに、多くの生ものをころさず、それをさへに、千金方をゑらみし人も、おほくの生ものを藥種に用しゆへに、仙人の果を得がたきよし侍りき、されども藥種に用る分は、大かた口に味ひてむまきと思ふこゝろなくて、誠の養生なるべければ、神も佛もとがめはあるまじ、彼藥食とて、あつものにしてたぶる人は、口にかなふを正意として、藥になるもならぬも二だんにする故に、神慮にたがふ事うたがひなし、其いはれは、よの養生はつゝしまずして、藥食の方にのみ心をひかする人は、大かたは其藥力をもつて、或は淫亂の樂事とせんとのみ心かげて、善を修せんためにする人はまれなり、みだりに辯口をもつて正理をみだるべからず、

(廿二)すべてこのごろ、佛の御つかひとて、大寺にすはり知行をとり、又は人を敎化して、布施物をうくる出家も、或は女をかくしをき、又は魚鳥をほしゐまにくうといへる事を、內々耳には聞侍りしかど、終にまのあたり、かゝる事をみざりしに、ある所にて法師どもあまたあつまり、かほよき女房にたはぶれ、魚鳥をさかなとして、酒ゑんに長じ侍るを、そこはかとなく行かゝり見侍りて、興さめて歸り、又の日其法師學匠なれば、いかばかりよき理りも有なんと、たづね侍りて、すべて出家となり、法衣を身に着しても、女房に立まじりさかもりなどしても、外に佛になるやうや有ると問侍りしに、其法師萬のたとへを、よき

口にまかせていひて、其上、別法和尙は、のどは是海道なりとさとり、それのみならず、蜆子といひし祖師は、ゑびをつりて食物とし侍る、小乘の上にこそ、人我のへだてもあるべけれ、もし大乘の眼より見る時は、煩惱即菩提なれば、魚即大根也とぞ答へられ侍りし、其時やつれがすでに其、別法蜆子と今のなまぐさ坊主とは、其器はるかにへだゝるべし、是鵜のまねからす也、とても大乘に入て、煩惱即菩提即大根と見る見解ならば、同じ見やうにて、菩提を即煩惱の如くに好み、大根即魚と味はまほしきものなりと申べきと思ひしかど、いや〳〵かゝる口かしこき、不得心坊主にと思ひて、尤さもありぬべしと、笑にしてまかり出侍りぬ、誠なるかな孔子の、其知には可㆑及其愚不㆑可㆑及とのたまひし事、われも其さとりだてなる出家のいへるやうには申めり、只外よりは、物ぐるはしくみゆるほどなる淸僧の愚なるには、たれもをよびがたからん、

(廿三)女煩肉食をせぬを、出家の至極と思ひて、學文もつとめねば、本より智もなく德もなき法師の、うき世の僧俗を無下に云ひくたし、剰へ佛道をさへ、おのれが心にまかせて、旦那をたぶらかし、いかなる罪をつくりても、懺悔の文をとなふれば滅し、ふかき煩惱も、此の妙法蓮華經にては菩提となり、又おもき悪業をなしても、一念彌陀佛即滅無量罪ととなふると、忽阿彌陀如來の來迎あそばし、其念佛の行者と心をあはせ、すくひとらせ給ふなど、何の所見もなく謂聞かすれば、能佛道をひろむるには似たれども、却て衆生に悪をすゝむるに同じ、女煩肉食をせぬとて、貴き出家とやは云べき、學文ありとて、德の至れるとやは云べき、只欲心のなきこそ、貴き知者とも云べけれ、大藏經五百四十函も、慾心をはらひ、物に執着ののこらぬやうにぞ、しめし給ふなるべけれ、されば荘周は是を枯木死灰と云ひ、法花經に佛此夜滅渡し給ふ事は、如㆓薪盡火滅㆒と解給ふ、執着の露ちりほども殘らぬを示し給ふとかや、欲と云字の心甚廣し、欲と云文字は、ねがひとも又ものおもふことありともよませたり、さりとて喜怒哀樂愛悪欲の七情は、聖賢の上にもあるなれば、いかで佛も是を制し給はん、されども右七つのもの、其節分よりすこしも過るを以て欲といひて、欲の字下に心をそへ、慾とかきし字也、たとへ

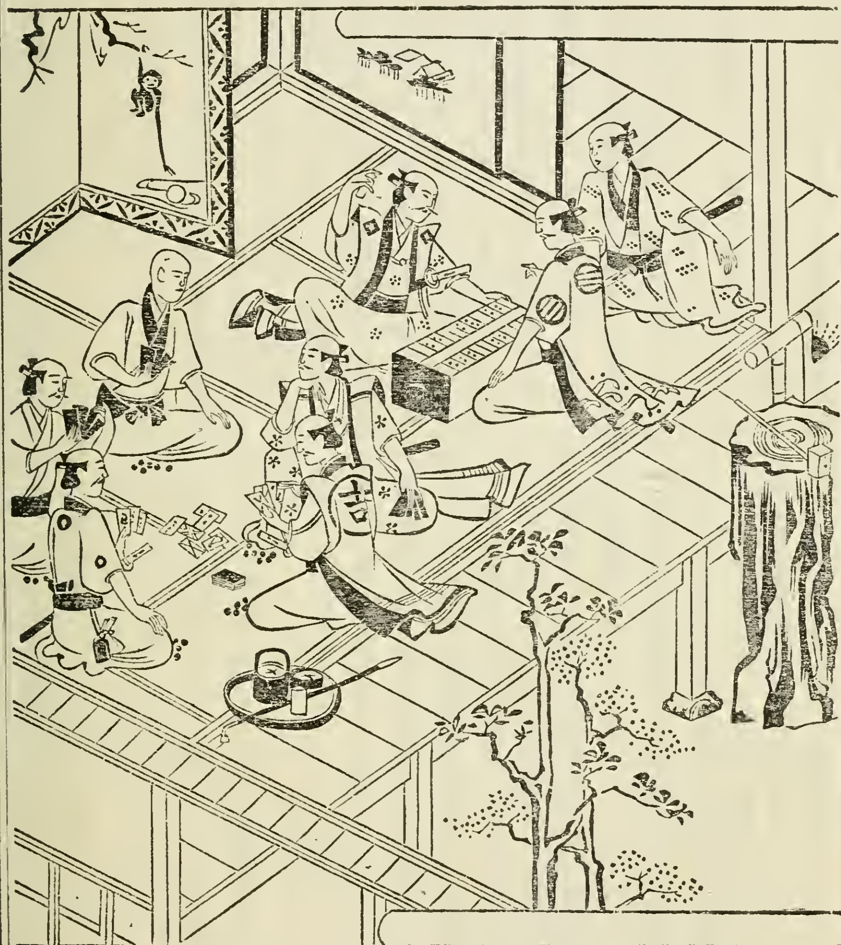
ば、衣服の上をもつてこれをいふべきに、衣服の用は二、一にはあらしをふせがんため、又一にはあらしをふせぐと云のみにても、　禮儀たゝざれば、僧は袈裟衣、公家は束帶、俗は上下もちなばたりなん、其二つを調しうへに、或は衣紋をつくろひ、好色の中だちとせんと思はんこそ、衣服のうへの慾也、其の外居所調度にも、此心なるべしとかたりしかば、かたへなる人問て曰、好色のかたへ、心ひかるゝを慾といはゞ、既に女煩肉食せぬ僧には、欲あるまじや、答曰、我こそ女煩肉食をせぬをよきと思ふ心、即欲心也、これ我身に愛の節分に過たる也、出家となりて此二つをつゝしむは、つねの事にて、さして殊勝にもなき事也、然らばいかなるをか無慾といはん、答曰、法師のうへにて是をいはゞ、多くの衆生を濟度しても、我こそ衆生を濟度したりとおもはぬこそ、無慾とは云ふべけれ、是即老子の爲而不レ特、功成而不レ居、顏回の無レ伐レ善と、のたまひし所なり、曰善をなして無心なるが無慾か、曰是なり、曰いかなるをか無心といふ、曰たとへば大海を舟にてわたらんときに、　おきよりも又舟一艘流れ來て、我のりたる舟にあたるべきに、其舟に人のりていたらんときは、其舟人をとがめ、たがひに腹をもたてつべし、又其舟に人なきときは、我ふね其流來れる舟ゆへに、せう〳〵そこねたりとも、其ふねにうらみは有まじ、舟の損ずる所は同じ事なれども、餘所より來る舟に、人のあるとなきとにより、腹もたつとたゝぬと有るがごとく、萬端こなたよりあしき心ねあるゆへに、人ともあらそふ也、此のつながぬ舟の心なき心をもつて、人にまじはらば、少々人の耳にあたる事を謂たりとも、人とがむまじ、いはんや此無心をもつて、人を敎化して、佛果にいたらんにおいてをや、何の慾といふ事のあるべき、

他我身のうへ第一　終

他我身のうへ第二

（一）ある福人の子、博奕をこのみて、あけくれ打しに、其從者つよくいさめ申侍りしかば、我は唯見物をするばかり也、かゝるいたづらなるわざは、夢にもなさず、心をさへそのかたへうつさずんば、見物ばかりは、くるしうもあるまじと申されしかば、又重ていはく、見物ばかりは猶よからぬ事なり、是世話に、いたうもなきはらをさぐらるゝと、いふものなりといさめしは、誠に此世話は、本よりいやしき語なれども、すこぶる聖賢の道にもかなふべし、瓜田不レ容レ履、李下不レ正レ冠といへる古詩あり、此心は、いかにおのれが正直にて、瓜をとる心なきといへども、瓜ばたけへそこともなくはいりなば、餘所よりは正しく瓜をとると見るべし、又李下不正冠といふ事は、是もくだものにほしき心なきとても、なりものゝ木の下にては、かうぶりなをさぬ古法なり、もし其くだものを取かと、人にうたがはれまじといふしめし也、さはいへど又、あまり賢者ぶりなるは、かへり猶道にあたらぬ事也、いかなるをか賢人だてといふ、たとへば一人の女御を、傍輩二人して本國へ御供して下るべきに、其女御のおやのかたより用ありて、俄に其一人をめしよせられんに、我一人は御主の命に應じて、都へかへり申さん、其方一人よく御供をして、本國へかへり給へといはんとき、今までも女御の御供を、男の身としてする事、ちと心にはゞかり思ひ侍りしかども、其方と二人なれば別儀もあらじと、世上よりも思ふべしと思ひて侍りしが、今より我一人しては、餘所の見る目もいかばかり、おとなげなしなど頭をふりて、其の都よりよびに來る男をもかへさず、女御の本國下りも事調らぬやうに云人こそ、あまり賢人ぶりてあしきとはいふべけれ、是も瓜田不レ入レ履と、おもむきはちがはねども、中庸をえざる事は同じ、唯中庸のみ得がたき事也、

（二）さして學文者とも見へぬ人も、物の談合か、あつかひかに立まじりては、とかく物は中庸がよろしきといひあへるは、いかなる合點にかとおぼつかなく思ふに、其の人の心には中庸と云へるは、不レ偏之謂レ中、過不及なきをも、又執ニ其兩端一用ニ其中於民一と



もある本文の心を見あやまりて、とかく物の眞中を、中と覺へしと見えたり、たとへば四人道づれとなりて、道すがらの物がたりに、これよりむかひの山までの道遠さを、一人は七里と云、又一人は八里、又一人は九里あるべしと、たがひに我目がねの程を、よきとあらそひて、其事につき、かけろくをせんときに、其方も七里のかたへなりとも、又は八里九里のかたへなりとも、心にまかせてくみし給へといはんときに、何のわきまへもなく、三人各別々に七里八里九里と、あらそふなれば、われは其の中をとらんとて、八里といふにくみせんといふがごとくなるを、その中をとるといふものなりと思ふは、誤なるべし、聖人の中といへるは、たとへば百人集りて、物の理をあらそはん時に、九十九人は同じ心にて、さてのこり壹人は、九十九人の云へる事にたがひたりとも、能分別をして、其理の當然を能味ひ、たとひ一人のかたなりとも、よき道理を持たらん方へつく事を、其中をとるとの給へり、又調度の上を以てこれをいはゞ、書物のとぢめのかたわざにある、是即書物のとぢめの中なり、とかく眞中と心得るは、ひが事なり、さて庸といへるは、庸は天下の定理也と、朱文公の注せられし也、庸といへる文字は、つねとよませたり、定理といへるは、世話に云定規の事なり、たとへば番巧のうへにて是をいはゞ、木はのこぎりをもつてきり、板はかんなを以てけづる事、此定規が正意となる也、されば定規は番巧のつね也、さて人の心の定規とは、何をすべきなれば、誠の一つ也、此誠といふ字、いひやすきに似て、いひつくしがたし、是即中庸の一大事也、中庸を能會得せずんば、誠の字合點ゆくまじ、知仁勇の三つのものは、いたりてなしがたけれ共、能くするものこれあらん、中庸はよくすべからずと、古人も仰せられしなれば、今我等が口のはにかくべき事にもあらねども、若年のむかし、中庸を露ほど文字よみせしかば、今に其の一兩句を其かたばかり覺へたり、其本文によりて、一萬が一つほど申べし、まづ朱子の序に、中庸何爲而作也、子思子憂ニ道學之失ニ其傳一而作之云云、さて中庸のおこりは、いにしへの聖人、かの天よりあたへられしすぐなる心に、人欲のわたくしを一塵もまじえずして、至極の道理をたてたまひし道統の傳也、是即儒者の血脉也、彼大堯、舜に天下を讓り給しときに、

允執㆓厥中㆒と敎へられし也、さて又舜の、禹王に天下を讓られし時、人心惟危道心惟微也、惟精惟一允㆓執其中㆒と敎へられし也、右に堯の仰られし、允執㆓厥中㆒といへる一言にて、天下萬物の至極の道理、ことぐくそなはりし上に、又舜の人心惟危道心惟微、惟精惟一せよとそへ給し三言にて、堯の仰られし心、いよいよ明かにして、萬々世の手本となりし也、たやすく申べき事にもあらねども、次にいさゝかかたり侍るべし、朱文公これを論ぜられしは、天、人にあたふるに、仁義禮智の性をもつてせずといふ事なければ、上聖人より下愚人にいたるまでも、虛靈知覺（虛靈は心の體知覺は心の明也即人々の佛心也）は同じ事なるべければ、舜の仰らるゝ樣に、人心惟危道心惟微なりと、心の上に二色はあるまじきなれども、或は生㆓於形氣之私㆒、或は原㆓於性命之正㆒とのたがひあれば、其知覺同じからざる所也、此の形氣之私といへるは、物に體してこれをいはゞ、耳目鼻口四肢のごとし、あながちわたくしあるに極りたるものにてはなけれ共、人の心と云へるは、猶海を渡る舟のごとし、道の心といへるは舵なり、若此人心の舟に、道の心を舵とせざれば、舟のなみにたゞよふごとく、其人の心の惡におもむくと、いへる說もあり、又性命の正とは、聖人の心なれば、別に其巨細を師として、善をえらみ惡をしりぞくる道をしる、惟精也、惟一にといへるは、其をよく身に行ふ事也、さて又本經の發端に、天命之謂㆑性、率㆑性之謂㆑道、脩㆑道之謂㆑敎と云云、天の命ずるとは、我生をうくると、天よりよき道理のそなはるものをあたへ給ふを、それを性といふ、性といふは、即此道理のかたまりたるなり、率㆑性之謂㆑道といへるは、そのよく道理にまかせ、萬端をこなふときは即道なり、脩㆑道之謂㆑敎と云へるは、其能道を民百姓までにしらせて、おこなはしむるを敎といふなり、おさむるとは、佛道にいへる修行の修の字也、其の道をよく修行するを、おさむるといふなり、さて又道也者不㆑可㆓須臾離㆒也、可㆑離非㆑道也、是故君子戒㆓愼乎其所㆒㆑不㆑睹、恐㆓懼乎所㆒㆑不㆑聞云云、道はしばらくも離るべからず、はなるべきは道にあらずといへるは、道は則海道のごとしといへる說もあり、これも一時もはなれては、叶まじき心にや、又是を鳥の上にていはゞ、飛（◎マ）は鳥の道也、此飛事をしばらくもせずは、鳥とはいはまじきにや、このゆへに君子

といひて、道を能くおこなふ人は、其人のみざる所をも、我心にふかくいましめ、つよくつゝしみ、人の聞ざる所をも、よくおぢおそれて、ひとり我部屋のうちにゐるときにも、人のみてはづかしき事はせぬやうに、つねにあそばす也、司馬溫公といひし人は、人にかたられぬほどの事をば何にてもせまじと、つねに御たしなみありしと也、これひとりをつゝしむといふものなるべし、又王密と云ひし者、楊震といひし人に金ををくりしに、楊震王密にいひしは、我は其の方の心を能くしりしに、其方はなぜに我心をしらぬもののやうに、かく金を我にうけよと仰られしと云ひければ、王密が曰く、今宵は日もくれてたれも外にしる人もなし、ひらに御うけ候へとしひ侍りしかば、楊震が曰く、天知地知吾知子知といひしかば、王密ことばなくて、顔に紅葉をちらして出けるとかや、是を世話にも、天しる地しる我しる人しると申とかや、是も人のみず聞かざる所をつゝしめるたとへ也、中庸の書の事は、一生かたるともつきまじければ、まづこれまでにてさしをき申めり、

(三)君にとがなやうらみはせまじ、やぶれ車でわがわるひといへるは、かりそめにうたひし小歌の唱歌なれ共、これ自然に「あまのかるもにすむ虫の我からと、ねをこそなかめ世をばうらみじ、といへる本歌の心にも通ふべし、またものぼりていはゞ、射有ㇾ似ㇾ乎君子ㇾ失ㇾ諸正鵠ㇾ反ㇾ求ㇾ諸其身ㇾと、孔子のたまひしにも通ふべし、此心は、正鵠といへるは、鵠といへる鳥を布に繪にかきて、これをまとにして弓をゐる事なり、君子に似たる事ありと云へるは、たとへば弓をゐる時ばかりは、まとをゐはづしたるときも、いかやうなるひが〳〵しきものも、まとのたてやうが、あしきなどは思はずして、我が弓の手前があしきにとか、又はねらひやうのたらぬにかと、我身をうらみて、身にかへしさうしもとむるとかや、是もとかく人をうらむるな、萬事我あしきゆへに、人は我にあしきと思へとのしめしなるにや、古歌にも「我よきに人のあしきのあらばこそ、人のあしきは我あしきなり、といへるもさもありぬべし、世の中にいのちほど、いたりて大切なるものはあらじ、されども、孔子も釋迦も御入滅なさるれば、せんかたなき事なり、又はぢほどつらき物はなし、其はぢといへるは、大かた人のあたゆる

はまれなり、みな我となすはぢなるべし、
○我かしこげに人の事のみはかりて、剰へふでにさへかきつらぬれども、其身はおさまらぬと人にいはるゝ事、
○人に用らるゝ事もなき身にて、いはれざる公儀だてをする事
○身のくらゐみぢかくて、上々に立まじりこびへつらふ事
○我しらぬ藝能の座敷へまかり出、人に其事を所望せられて、とがもせぬたゝみのへりむしる事、
○をよばざる事をのみのぞみかけて、その望終にとげぬのみならず、其人にあひて重て言葉なき事、
○諸道を心得たるかほして、其跡先首尾せずして、人にうしろゆびさゝるゝ事、
○身に過ぎたる武勇だてのみ常に云ひて、喧嘩口論のとき、人よりさきにしりぞき侍る事、
○雪のかしらをいたゞき、若年の人に立まじり、うとまるゝ事、
○常に無慾なる體にて、物のそぶりにて慾ふかき事、
○せばき心より、云ふまじき不足を人に云聞かせ、其人に道理にせめられて、かへりて詫言をする事、
○我あしきかたちをもちて、かたちよき人に立まじはる事、
○身のほど過ぎたる約束をして、後日に其言葉ちがふ事、
○一文不通にて、文字こそしらずとも、ものゝ道理はたれにかははぢんなどいふ人あれども、不レ深ニ斯道ニ有レ至レ焉者不と古人云ひおき侍れば、文字なき人のいひし事は、利口げに聞へても、いかばかりと人におもはれ、又はいはれする事、
○文字の心をもよくしらずして、かたことまじりに物をこはし、ねんのいりたるふるまひと云てあるべきを、人の丁寧といふを、何やらんおもしろさうなる言葉とおもひ、ていぜんなる御ふるまひなどいふかた言、數をしらぬ事、
○かながきの書をもみぬ人の、佛道は本より不立文字なれば、一文字ひかずとも、工夫にてさとるべきなどいひちらし、人に心おとりせらるゝ事、
○何にても其なす藝の大事こそ我しりたれ、秘傳こそ傳りたれといへども、其藝の常の事さへ人なみ

にならぬ事、
○よくもなき我子を、そこ〳〵のよき人もほめ給ひしなど、まことしからぬ事を人に云聞かする事、
○愚なる身を持ながら、其にぎはしきに付て、さかしき人の時にあはぬに、よろづうしろみだてに云聞かする事、
○金銀を人にかり、かへすべき覺へもなき事、
○我こそにぎはしけれ、誰にかしたがはん、人のものをもかるきじきなどいふ人も、又時節にてまづしくなりなどして、人にむかしの事を云出さるゝ事、
○朋友は財を通ずるとて、むかしよりたからをも借もならひかすも習なるといふ事をしらずして、人に物をかりし人などを、むざとわらふ事、
○秘密すまじき事を、大事がましく云ひなす事、
○下戶上戶ともに酒のあいさつを上手ぶりて、我心もみだるゝばかりたべ、我いみじき事などいひ、其外あらそひなどいたして、めいぼくうしなふ事、
此外にまだおかしきこともありつれど、みなわすれつ、
(四)やけどには、くりの木のかはをくろやきにして、ごまのあぶらにてつけたるよし、やひ火のあたりたるには、も草をせんじのみたるよし、又井のつるべの水あかもよし、
○ねずみにくはれたるには、きりの木を火にくべ、すみとして、それをあぶらにて付けたるよし、
○手あしによらず、覺へもなきにはれ、又あからみたるには、あかきにしがらをやきて、すにて付たるよし、にしがらは物をちらす物也、
○打きず、又あし手によらずくぢかしたるや、高き所よりおちたるには、楊梅皮をさめにておろし、こんやののりにてねりて付けたるよし、
○高き所より落たるには、山椒の目をすりて付けたるもよし、又しぶをのみたるもよし、
○のんどにほねのたちたるには、龍骨をけづりのみたるよし、象牙はつねの事也、
○山桝にむせたるには、たゝみをねぶりたるよし、其外何にても胸のわるきやうにして、からゑづきを出すれば、のどにつたまりて其まゝよし、
○すこしきりたるきづには、ふるきくさりなわをもみて付けたるよし、

右九个條は醫師のなきときの事也、

（五）ある人、世の中になにをか樂と定申べき、先帝王の御位は、中々云べきもをそれあり、又大名衆の御事も、なれてしらねば云ひがたし、たゞねがはしきは、町人のたのしきをこそ、一の樂とぞかたりしに、又かたへなる人それも尤なれども、我はたゞ貧富にはよらず、唯身の達者なるを樂と思ふ也、千金萬金かさねても、其の身病者にては益あらじとかたりしに、又かたへなる人、樂はたゞ貧の上にこそ有るなれ、たから多ければ、身をまもるにまどしとこそ古人もいはれし、たゞ隱遁する人こそ、うらやましき樂とかたりしに、又かたへなる人、各のさきよりのたまふは、樂に能く似て樂ならず、富めるを樂と思ひて願ふとも、本より天命さだまれば、俄に富も求めえじ、我身を達者とねがふとも生れ付て病者なるもの、いかで達者にもなるべき、又隱遁をねがふとも、とてもうき世もそむきがたければ、みづからねがふ所にははんべらずとかたりければ、のこり三人のいはく、さて其方は、何を樂と思ひ給ふぞととひければ、我がねがはしく思ふは心の樂也、古人も、心はなどかかしこきよりかしこきにもうつらざらんと、仰られしとかたりしかば、各是に歸服して、さて心の樂と仰らるゝは、心に二色ありやととへば、其人かたり申されしは、まづ萬事心持ゆへ、おもしろくもうたてくもある物也、とても樂こそねがひなば、ねがふてかなふ樂をこそ、よきねがひとも申べし、さて心にかなふ樂と云ふは、まづ四季を以て是をいはゞ、物の心もなく、たる事しらぬ人は、先元日の空よりも、京中ともによき春の、めでたき正月のといひわたれば、彼心のあしき人は、我は壹つも年のよるがうたでき春と云ひさます、さて春もやう〳〵二三月の頃にもなりぬれば、春のけしきほどあしきものはなし、氣がまう〳〵としてかしらがうつといひ、夏は、ひるははいにせゝられ、よるはのみかにくはるゝとて身をもやす、又秋風そよふけば、別しておのれが壹人してかゝゆるやうにおもひてもかなはぬものゆへ、いねにあたりて、もし世の中あしからんかとてきもをけし、冬は彼こたつのはたに鍋ゐて、めをといさかいに身をもやす、花時鳥月雪も、花よりだんごといひちらし、時鳥は昔より、命に替へても聞きたきと、人は仰せられしかど、此鳥は

どやくにたゝぬものはなし、先料理にもつかはれず、たまく｀なきぬる聲だにも、ひるねのゆめを打破る、聲を聞くさへうらめしや、又秋の月とて、人々のもてはやさせられしも、別して四季に替はる事なし、すべて月ほど益のなきものはあらじ、手ぬぐひひとつほすとても、ひるこそ物はよくひれ、夜はかへりて、ほしたるものもしめりあふ、雪は、まだふらぬさきより頭痛のおこるに、あまつさへ二日も三日も道もかはかず、又候や春まで、長だうとふるこそにくけれと、かゝる四季の上々の景物さへ云ひくたすれば、このほかのものは、えもいはぬ事なるべし、さて心に樂をしりたる人の、四季をもてあそびたのしみとする事、あらく｀かたり申べし、

よひの年は、雪もはげしくふる里も、けさのんどりと春たつと、云ばかりにやみよしのゝ、山もかすむとながめにし、其ゆうげんの道までも、思ひやりつゝそれぞれの、うちいはひこそめでたけれ、門松がけのわか水は、命ながゐのひしやくにて、しやんとくみあげたまりやせぬ、あられがまにもこし入て、大ぶくたつるなりかゝり、もてる茶杓の一ふしの、鼻歌うたふ其聲も、千代萬代とよばふなる、みかさの山にたつ雲の、天津そらまでをしはかる、今日の儀式の小朝拜、院の拜禮氷のためし、星をとなふるくすり子の、年のよはいは若ゑびす、又毘沙門の功德經、日うら白の連歌師や、俳諧師まで三つものを、句作る顏はしきしまの、かざりわらべの玉毬打、ぶりく｀ふりしさは姬に、けさう文をもやりぬれば、返事やあると松の內、たうどにたつる大竹の、はつとら參りふくわかし、つな引わこは太郎月、二郎もよれるぼうひきは、せちぶるまひに事はじめ、はま弓もてるものゝふの、にんく｀いはふ具足餠、やりの名をえし梅がえの、ほこをよこたへ詩を賦せし、むかしの事を思ひ出て、ふくむゑびらにかぢはらも、一えだおりてさしすせそ、太刀つてとをもはきぬれば、軍梅花とも申すべし、陶淵明の愛をせし、かの柳ごし柳がみ、柳絮といへる名にめでゝ、見る人の目も糸となる、春のしらべの琴のねに、鶯ぶえのその聲は、高さごなれや春はやし、つてん天下もめで太鼓、うちとの文をてらしみる、窓の雪さへ打とけて、田も畔もなき春の野に、さまよひゆけばあち東風も、ふきのたうをもくみたてゝ、菩提をいのるあまの

りや、佛のわかれらかんだち、あらかんなしとなくこゑの、空にもきこえかへるなり、やけの丶きゞす時なると、三たびかぎにし孔子祭、莊子にかきし野馬と、つれだち四方に鵬々と、たつや逍遙ゆふがすみ、朧月夜にしくものは、ないしと聞ば若草の、妻もこもれる我もまた、こもちとつれて野遊の、よめがはぎ又つくづくし、ふできなりとも人はいへ、我一曲のくせまひも、胡蝶にたりさかづきを、思ふひとにとさいたづま、さぞなゆかりもなつかしき、若むらさきのさわらびを、手ごとにつみてかへす田や、なわしろ水にふるあめは、諸木の花のちゝはゝと、いふよりめぐむちござくら、文殊もかくや普賢像、ならのみやげの八重ざくら、けふ九重ににほひくる、馬にくらをけくらまなる、あらしにまへる花のなみ、うづざくらとも謂つべし、楊家にねむる女御の、かほにもたぐふ海棠花、ははにはゞかる事ありて、文にもかゝぬから人の、このみしものを今日は猶、川邊にいでゝこの水に、うれへをわすれながいきを、せん術なれやもゝの酒、しりもちやまたえもぎもち、つきてもいはふさしもぐさ、しめぢがはらにすへぬれば、むねのけぶりもはるの日

の、長きといへどくれゆきて、今日の名におふころもがへ、雲のけしきも青すだれ、かけてもたのむ神まつり、思ひ出ればかのほとけ、生れ給し其時に、天のうへ又天がした、たうときものは我のみと、いはれしもげにふかみぐさ、卯月ばかりのわかゝへで、花紅葉にもおとらぬと、いふやよしだの何がしの、つれ〴〵なりし窓の戸に、まもり本尊かけたとや、ぐぜひのふねのほとゝぎす、卯花くたし梅の雨、好文木履あいをなし、山にのぼればともしがり、かのこの色はきるものの、名にたち花の袖香爐、むかし〳〵とかたりぬる、尉とうばらが花よめも、田うたをうたひさなへとる、丹波の國の御百姓、あたご參りにひかれぬる、袖のくす玉かけぬるは、けふの祝儀の菖蒲酒、あやめもしらずたべえひて、物ごしまでもきをい馬、右近の馬場のひおりの日、下すだれよりみずもあらず、みもせぬ人を戀しがり、うつし心もうき草の、花香もゆかしこひめゆり、かざす扇もやさかなる、神のみほこを氏子ども、引くやぎをんのゑいやゑい、おちごをおくる風薫る、泉もむすぶ大房や、しりがいかくるはね馬の、瀬わけてふるやゆふだちん、雲の峯より出る月は、篁に

ぞうつりきて、はや鈴鹿せもうろ〳〵と、たつや八十瀬の川の浪、行衞も遠きおや子より、ちかきは秋のとなりにて、みなづきはらへ又おかし、今朝立秋に一はちる、ふねの梶の葉初あらし、殘るあつさもはれぬれば、扇と露とおきこくら、紅葉のはしを鵲(かさゝぎ)の、わたすを待てる七夕に、願の糸のより〳〵の、思ふ心の年々を、ふるき小袖やとくびこん、むねのうちなるふみ月を、かすいにしへとなりし身は、玉まつりするうらんぼん、さだめはなしやありのみと、うき世を歎きほろほろと、うるみそはぎの露泪、うむにたのみはあさぎぬの、おどりかたびら染なせる、色もたへなる伊勢小町、歌のさまさへをうなにて、たゞよは〳〵とふることぞ、世々に其名をあげ燈籠、大津に近き逢坂の、關ずまひこそみものなれ、霧はれわたる秋の野の、くさの袂や花すゝき、ほにいでまねく女郎花、俗はよはひて女郎とし、出家をもつるさが野にや、ほころびぬらしふぢばかま、つゞりさせてふきり〴〵す、鈴蟲松蟲くつわむし、こまつなぎにぞとまるらし、もにすむ虫のねになきて、世をも怨みじ葛のはの、色づく程の蔦もみぢ、かたるといつか月ぐさの、庵(いほり)をむすび秋の田を、守る僧都のうさつらさ、ひたとなるこを引聲に、驚かさるゝ鹿のねや、鴫のくねがきもゝはがき、君が來ぬ夜は我ぞかず、かきほにとまるかまきりの、をのが力を頼みにて、立車に向ふ心ねの、我慢をすてゝ世をいとふ、鶉衣ははださむと、あたゝめ酒はあちこちの、在郷祭りはおりにふれ、今日重陽のきくあはせ、田みのゝ里やひろ澤の、月の葛(かつら)の花咲て、ひかりをちらす長き夜の、露や時雨に袖ぬるゝ、思ひ草また忍ぶぐさ、まさきのかつらくる冬の、月夜に霜はふるぶすま、木のは衣もとりかさね、冬籠りする爐のすきの、かけものにする達磨忌や、東福寺には開山忌、夷講する商人の、算用酒のそろばんに、つもる白雪雪の下、水仙花もや開くらん、神樂もとめ子庭火まで、たくをかうぶるくにたみに、豐の明りの豐年の、のざきの使はや立ちて、殊勝なりける佛名に、つみも殘らず流行く、こよみのすゑの年忘れ、孫や子供もよび集め、春のまうけにつく餅の、千石萬石萬歳と、いはへる國ぞ久しかるらん、

他我身のうへ第二終

他我身のうへ第三

(一)たのしき庄やどの、一番子をまうけられ、朝夕これをかしづかれけるに、ちやうちかぶりの程も過ぎ、はや十六七にもなりにける、されども此太郎八、うちねずみにてありしかば、庄やどのこれをなげき、ある人に我一人の子をもちたりいへども、此子うちねずみにて、我うちより外をしらざれば、いかにもして人づきあひをもさせ、公儀をもみならはしたく思へども、何ともせんかたなきと談合すれば、其談合人のいはく、其はやすき事なれ、乍レ去すこし銀子の入る事なりと申されければ、庄やどののたまはく、是は其方共覺ぬ事仰らるゝものかな、我身代にては、銀子など大分入申とてもくるしからず、ましてすこしの事ならば、唯今なり共といはれけり、乍レ去大事の太郎八なれば、精のつき申か、じゆつなきことならばなるまじ、何事にて候哉、覺束なきとぞいはれける、其時談合人、いや左樣には候はず、いかにも氣ののび、心おも白き事にて候と申されければ、又庄やのたまはく、とかく覺つかなし、其事をありのまゝにかたり給へと、責られければ、談合人傾城ぐるひとて、おとな心のつく事にて候とかたられければ、尤可レ然とてまづ小判百兩談合人にわたし、日夜に傾城ぐるひを、しならはせけるほどに、はやとりなりもよくなりて、うすき小袖の一つまへ、しめぬる帶もりゝしくて、こうたさみせん立すがた、云ものごしもいろありて、花時鳥月雪の、うつりかはれる折々の、あつきさむさの指合も、人にあふての取あはせ、ふるなのべんともいひつべし、此時庄やよろこびて、あのそんじやうそれは、つねに才覺なる人なりと思へば、かやうの事まですする、談合の甲斐ありとて、其談合人に小判十兩、これはあなづりがましけれども、それがしが存ずる子細あればとて、をくりけるこそたゞならね、さて其後此一番子の太郎八、談合人にもかくれつゝ、ふかきあみがさ引かぶり、はながみ折て顏にあて、日々にあげやとやらんへ通ふほどに、あげくのはてには、庄やが錢箱そろ〳〵と、銀虚火動の證をやみければ、庄やもこれを聞付けて、ことのほかにきもをつぶし、いろ〳〵いけんをしたれども、太郎八少も聞いれず、ひた物かよ

ひに通ひつゝ、これにのみ身をやつせば、あるもの來て、左樣にけいせいぐるひにかゝるものも、内に又おもしろき事あれば、其かたうすくなる也とかたれば、是こそ一だんの分別とて、追付えんへんを聞立て、女房をよびとらせつれども、この太郎八一さい其にもちなまざれば、あひやけの中もわるくなりて、つゐに其女房も、三下り半でらちをあけ、猶々此事つのりければ、一門集りて、いろ〳〵おどいつすかいつ、いけんをすれば、太郎八一てつを出し、青道心をぞおこしける、其とき庄や大きになげき、我年よりて一人の子を道心者となしては、いきてのせんもなし、所せん此道心をさまし、もとの太郎八になるならば、一个月になんどまては、傾城ぐるひはゆるすべしとて、たびたび寺へ人をつかひ、又本の太郎八とぞなしにけり、さてまた太郎八、はじめのほどは親とやくそくのごとく、一个月になんどといへるかぎりを、よくまもりけるが、もとよりもえぐゐには、火のつきよきならひなれば、太鼓持とやらんにたきつけられ、月になんどといふきりはなかりけり、此ときはや、庄やのなにがしはむなしくなりて、庄や後家ばかりになりにけり、後家此庄やにわかれけるは、うき世のならひなれば、日數ますほど、わすれぐさも生じけるが、たゞ太郎八がわるぐるひこそ、うたでわざなれとて、いろ〳〵に談合して、かやうの事はともだちならでは、えいひおほせじとて、太郎八がねんごろなる友達五六人に、いけんをたのみける、さて太郎八をよびよせて、太郎八どのもよく聞給へ、其方がぬかりたる人なれば、かくも申さねども、萬事がてんのゆきたる人なれば申なり、おやじも今ははてられて、おふくろ一人になり給ふ身に、何とてかゝる儀に心をつくし、又金銀をついやし給ふぞ、ひらにとまり給へと申されける、其とき太郎八が曰、各の被レ仰るも、それがしをかはゆきとおぼしめしての事なれば、我申分も聞給へ、いかにいかほど其方たちの仰られても、かのものが心中は、あるときはなまづめをはなし、又あるときはきしやうもんを、たまづさにそへてをくりけるを、もしもいつはる事もやとそんじ、それがし四五日もまいらねば、はやわづらふけしきなり、これをみすて侍ることは、命はてるとてもなり申まじ、ぜひはゝ人の御意にそむかば、ぜんせのやくそくとおもひ、此家をからかさ

一本にて罷出て、諸國を修行せんと云ひければ、いけんの者どもはらをたて、座をやぶらんとせしときに、それがし下座に侍りしが、みな人々は御ふくりうと見へ給ふが、我は太郎八どの丶云ひ分も、あまりあしきとはぞんじ候はず、人にはそれ〴〵のすきたる道あり、それがしが若年のときは、事の外のすまひずきにて、一日に百人づ丶とつてはうりさふらう也、それにて今はかくひんになり、此やぶれがみ子の體なりといひければ、一座の衆、右のすまひの日に、百人づつなげたると、はなし給ふもうそらしく、又今はひんになりたると仰らる丶も、すまひとりたるとて貧になりたるとは、一圓あとさきしゆびし候はずと申されける、其ときそれがし申けるは、御不しんはもつともなり、乍レ去、其すまひにかちしには、一の口傳候と申けり、口傳はととへば、其事に候、我等がおやもうとくにありしあとを、をの〳〵御存知のごとく、我一人してとりたれば、一日にぜにを一貫文づ丶もち出て、百人にあたへ、我とすまいをとるならば、かならずまけよと、やくそくしてとりたる間、大八町の男をも、かたてにてとりてなげ、六尺二分の法師をも、ゆびひとつにて突たをしけると、あざやかにかたりしかば、其時かの太郎八いふやうは、御手前のごとく人にぜにをやりて、すまひにかちたるぶんにては、おもしろくもおかしくもなきとて、利根げに申せしかば、其時それがし、たとひちんをかきてなりとも、かちたることそうれしけれといひければ、太郎八、我も其方にすまひにまけ、日々にぜにをもらひたきといひしとき、それがしいふやうは、其方は我が人にちんをかき、すまひにかちたるをも笑ひ給ふが、其方の多くの金銀をとらせ、けいせいの心中よきとて、おやの氣にそむくは、我すまひにちんをかきしと、ちがひめはどこにあるとおどけしに、太郎八理につまり、此のほどよくがてん參りたりとて、ひごろ傾城のをこせし、文玉章をもやきてすて、今までのひが事せしをくやみ、は丶に孝をつくして、ち丶の跡をとぶらひ、すゑはんじやうとぞなりけるとかや、人にいけんをするとも、あたまくだしにせんよりは、道理をつめていたしやうあるべき事か、

(二)わかきもの丶ふるまひ、其外齋（とき）ひじにゆき、我上

客にてもなきに、一つ〳〵何は出來たり、何はめづらしきなど、膳部をほめたる聞きにくし、つねにさうめされかうめされと、いふほどのあいさつなる友の所へ、ふるまひにゆきたるときばかり、御ふるまひ出來させられました、御亭さまも、少御膳をひかへさせられませいなど、ばかいんぎんにいふやうなる事は、大かた、此中茶せんをにぎりならひ、はちたゝきほどくちたゝくものゝいふ事也、

(三)ある數奇者の曰、鞠ばかり益なき物はあらじ、昔よりかしこき人の、九損一德といへれ共、我は十損無德と思ふ也、まづ雪雨のふるときや、又風吹にもならず、老てならず、あさならず、夜ならず、其外の損はあげていひがたし、鞠にすねはぎのつよきは、からうすふみにはおとりたり、又其とくといへるは、さそくのきくといへるにや、いとおかし、鞠をけいこせぬものも、みぞへふみかぶり、ほりへはまりて、死したるためしいとまれならん、もとより、なま兵法大きずのもとてなれば、まりをける人こそ、さもあるまじきことに、ひん〳〵とぬきあしをし、とき〳〵ほねをたがへなどするといはれければ、鞠けるひとの是を聞き、某をこゝにをきながら、こは曲もなき仰られやうかな、そも鞠といへる、經說にも其おこりあると申侍れども、それはだん義がましく候へば、態と申も侍らず、もしいやしき藝にてあるならば、御公家さまにもさせらるゝはいかに、其方のこのみ給ふ數奇の道こそ、打みは花車にみゆれ共、そこ心はすこしも道にかなひ候はず、先心にはよきと思はぬ道具をほむる、是けいはくの第一也、又たま〳〵人がよき道具をもてば、うりさうなるものなれば、やすくかいとらんと思ひ、又うりさうもなき友達の中にては、いかにも云まはして、代物がへにかへとりて我寶とし、又上々へさしあげんとの心ざし、みなよくしんのけいこなりといへりしかば、其とき彼數奇者のいはく、茶の德といへる先、祖師にも茶をこのみしもあれども、是も談義がましく候へば申まじ、いかなるくらゐたかき人のむしろにも、此茶ゆへにこそ、我等ごときが罷出づれといはれしかば、又まりける人、それはかのすい茶の事か、又我きに入ぬ人のわけをねぶるはいかにといはれしに、又かたへなる人、我等が思ひより侍るは、各仰らるゝとは各別なり、何にてもよろしき道を、壹つ

不得たらんうへには、鞠をこのむとも、きらふとも、すきをするとも、又わらふとも、尤なるべし、いかに公家のなさるゝ、風流なまりをよくけるとも、人のところより來る文の返事に、態一筆令啓上候とかき、又たとひ大名わざのすきを、上手になりたりとも、此方よりやる文に、如仰とかきなどするごとくにては、おもしろからず、彼御公家樣は、唐の事をもあきらめ、大和の事をもよくなされての上に、あそばすなり、又大名の御すきも其通りなり、しかるを今、すきとまりとばかりけいこあるは、是れ孔子の、はじかみをすてずしてくらふとのたまひしとて、はじかみをのみつねにこのみて、學文もせずして、孔子のながれをくむといへると同じ事也、兩方の論は無益といはれしは、誠に道外事のやうなれ共、志二於道一、據二於德一、依二於仁一、游二於藝一と孔子のの給ひしにも通ふべし、志者心之所レ之謂と註せられし也、志とは、我心東へゆかんと思ふ、即東への志なり、道とは人たるものゝなさずしてかなはぬ道也、據二於德一、據とは執守と註せられて、我せんと思ふ事に、めを付てゐるやうなる事也、德とは云は、即行レ道而得二於心一者也と註せられし也、心に其道理を得て、身におこなふ事也、商ひに德のあるといへるも、此德にすこし心かよふ也、依二於仁一、依と云は、不レ違の謂と註せられし也、依とは其仁の道理に、我心おなじものになりたるときの事也、又仁は五常のつかさ也、五常の事はいつにても心しづかにかたり申べし、游二於藝一、游と云は、玩物適情之謂と註せられし也、道德仁の三つのものは、人間のなさいでかなはぬ理なり、されども次第あるにより、志と云、據と云、依と云、藝にばかりあそぶといへるは、あまりすぐれでも、又よき程にてもかんにんなれば也、世話にも、物にあまりせいをださぬ事を、なぐさみがてらとも、又あそびわざともいへる也、さればにや、此事どもをこのみて興ずる人なりとても、君子といはれぬにてもなし、又せぬとてわるき人ともいひがたしと、いへるやうなる註もあり、されども本文の藝といへるは、禮樂射御書數の六藝の事也、今のまりやすきやなどのごとくに、わが慰みばかりにて、天下國家の用に立たぬ事にてはなく、世の用にしかと立つ事なり、藝とをし出ていへる、此六つなり、しかるを今は、さるがくやつゞみ打をも、藝者といへるは、

いかなる事候や、出所しらず、それはたゞ役者といふべし、

(四)女ともみへず、おとこなりけりと諷へるを、さる人のいはく、女とも見へつ、男なりけりといふを、かなにあやまりたるといへり、されどもたゞなりひらは、これ程うつくしき姿ならば、女とみえん事なるが、女とも見へず、いかにも男なりけりといふ心なるべし、古歌に、木にもあらず草にもあらず竹のよのといへるも、木にもあらず、草にもあらずといひて、竹のよのといふは、重言のやうなれども、これも歌の一體也、後漢の帝につかへたてまつると名のりて、さしに、つたへ聞白居易とうたふはあやまり也、白居易は唐朝のものなれば、後漢の時よりはるかに後の者也、うたひのあやまりはこれにかぎらず、

(五)世話に、賣言葉に買言葉、けんによなければむねさはがずとあるは、おかしげなる事なれども、能く理に叶し事也、古語於レ我善者我亦善レ之、於レ我惡者我亦惡レ之、我既於レ人無二惡人一、能於レ我有レ惡哉、上の句の心は、別に理りにもをよばず、さて我すでにといふ下の句心は、本より我すこしも、人に惡き心をもたねば、人も我にわるいぢはあるまじきとの心也、彼今の世の氣のまはりたるものは、我ことをそしるかと思ひて、立聞きなどをする者に、我心さへよくもちたらば、人も我ことはそしるまじきとのしめし也、けんによなければむねさはがずと、いふによくかなへり、

(六)はなしの義勢、言葉のしなに、あたごの、八まんのと、人もこのまぬ誓言たつるこそ、其の人の心いかばかりとおしはかられて、心おとりせらるゝものなれ、其外商のまけしほに、猶おそれある、日天三寶なども、ちかふものあり、かふものも、まことしからず思へば、隨分と勸請せる、日天も耻かき給ふべし、起請文と云事は、もろこしに盟誓をたてゝ、牛馬の血をすゝり、其詞を記して土にうづみ、約する處若そむかば、此牛のごとくきりほふらるゝ罪にあたらんと、諸神にちかふ、周禮春秋傳等に委くしるせり、日本にしては、天照太神素盞烏尊とちかひましませば、神代にもありけるにや、初は盟誓といひしを、人の代の末にいたりて、白川鳥羽の御時も起請文と云事あるよし、貞永式目起請のうらがきにありと云云、又日本紀に、誓約の字をうけひとよめり、起請の字、この訓によりて

うけをたつるといふにや、猶おぼつかなしと、つれづれ草の抄に道春のかゝれし也、此の請をたつるとよむといふ義は、世話の手がたなどに、何がし請人とかくやうに、神佛をうけにたつるにや、又せいごんに、みしやれがつたいといへる、昔から人のちかひに、山礪河帶とちかひしを、末の世に、かのあしき病のかつたいに、とりまぎらはしたるにや、此心は、山は礪石ほどになり、河は帶ほどになるとも、今のやくそくはちがへまじきとの心也、古歌に「君をおきてあだし心をわれもたば、末の松山波もこへなん、とよみしに、松山になみはこへぬものなれば、若我あだし心をもたば、山にも波はこゆべきと、なき事をたとへたるもの也と、さる有職の仰られし也、又或人、外記の常忠に、火起請はいかゞと尋られければ、常忠、火をつかみてやけまじきならば、水をつかませよ、水にてやけんと答へたり、火は必燒くべし、燒けぬ不思議あらんと也、此時火起請の事暫くやみぬ、異國に、罪人の實否を糺さんとて、象にかゝしむる類なるべしとあり、惣じて、きしやうせいもんをとりあつかふは、よからぬ事なり、起請誓言は、大かた若衆ぐるひ、又女房ぐるひするものゝする事也、それほどうさんにおもふ若衆女房ならば、中をきるべし、又此方よりこのみもせぬを、あちよりかきておこしなば、過分なり、それほどにおぼしめしなば、これにをよび申さじとて、かへしたるがしかるべし、しかじ、きしやうせいごんなしに、心中をみて、よろづうたがはぬよきには、大かた、ものうたがひはあしき事也、

(七)ある人、たうとき上人にあひて、一言以治㆓天下㆒といへる事は、いかなる事なると問はれしに、上人、其方に今たれ人ぞ、天下を治むる事をあつらへ侍るか、たゞしとひおきにめされ候やと、いはれて何とも言葉なくしてかへり、又の日參りあいて、一言以不㆑尤㆑人不㆑恨㆑身といへる事さふらはゞ、をしへ給れといひければ、上人のいはく、なれども何とせうといふ事を、能く會得し給へとおほせられしかば、其なれども何とせうといへる事は、いかなる御事にて候やと、かさねてたづね申されしに、上人のいはく、先其方の身にていはゞ、今まで人のためにあしき事はせず、とき〴〵善根をこそしたるに、かく物ごとにたよりあしき事は、不思議なれども何とせう、是れもせん

せのやくそくとおもひ、人の子としては我は、おやに能く孝行をつくせども、おやはかへりて我をにくみ給ふ、餘所のおやはあしき子をさへ重寶せらるゝに、我は本意なき事なれども何とせう、孝は子たるもののなさずしてかなはぬもの也、又は我孝のたらぬにやと、いよ〳〵孝をつくし、又臣下としては、我は君に忠をよくつくせども、君の御氣に入らぬは、無念なれども何とせう、まだ牢人せぬ分がうれしきと思ひ、夫婦の中にては、我はよくおつとにつかへども、おつとはわれをおもはず、あまさへ、手かけぐるひなどせられて、るすがちなるは、むねの火のきゆるまもなきことなれども何とせう、まださられぬをうれしきと、おもふやうなる事也、また友だちのなかにては、我よく念ごろに思へども、さきよりはさもなきは、とゞかぬ事なれども何とせう、一旦友となるうへはと思ひ、まじはりをながくするやうなる事也、これよりふかきをしへもあるべき事なれども何とせう、我があさき智惠なれば、ふかき事は本よりしらずと、仰られしと也、此心は萬事にわたるべし、

（八）世話に、人に酒をしいるとて、其の方もおやの子也、うりのつるになすびはならぬといふ事あれば、いかにしてもつりがよい程に、一つはまいれといふ、尤此義にもかなひ侍れども、其もと因果の道理をせめし者ならん、古人曰、若人作二不善一得二顯名一者、人不レ害天必誅レ之、種レ瓜得レ瓜種レ豆得レ豆、天網恢々疎而不レ漏、深耕淺種尙有二天災一、利レ己損レ人豈無二果報一、此心は、若爰に一人の人あらんに、萬事惡事をいとなみ、賢人をうとまんに、それも當家の御氣に入て、權柄をふる人か、又さもなくても仕合よきものは、とがにもおこなはれず、されども天必誅レ之とて、天よりとがを責めらるゝ也、種レ瓜得レ瓜種レ豆得レ豆とは、惡をなせば惡がむくひ、善をなせば善がむくふといふ心也、天網恢々疎而不レ漏、世話に、天のあみがきさりては、のがれられぬといふと、同じ心也、此天のあみは、恢々としてをろそかなるとは、一つ〴〵天に其事をあたりまなこに、とがめらるゝとはなけれども、どこともなしに善人をめぐみ、惡人を見すて給ふと云ふ心也、深耕淺種尙有二天災一、利レ己損レ人豈無二報果一とは、縦ば農人がつくりをするに、なるほどふかくほりて、其上にもよくこやしなどを入れてつくるさへ、

天災とて、水損火損があるほどに、ましておのればかりよきやうにして、人の損のゆくをも、又人のために あしき事をもかへりみずば、なぜに天の災があるまじき事はと也、これも毒はすこしにても祟り、藥はきかぬ事もあるといひて、人によく毒絕をさするやうなる心也、世話にはよき人をおしなべ、果報者といへれども、果報といへるは、善惡のうへにある事也、果といふ字ははつるとよみて、善惡ともに其事のおはる所、報はむくひといひて、其たねの後にあらはるゝ所也、たれもしりたる事也、

（九）馬鹿氣なる町人、子を壹人もたれしが、たしなむ藝あまたあるべきに、かくし藝なりとて、其子に兵法をならはせらるゝほどに、やう〳〵おもてを習ひあぐるほどに、いつともなく陽氣ものになりて、あそこの喧嘩、こゝの辻ぎりの手がらとて、まことしからぬ事のみ、物がたりに出して、きるものにも、よのつねのかたこもんはつけず、下がへにはきねにつるなどかけちらし、かたさきには南無妙法蓮華經などはねまはり、大わきざしのをとしざし、こびんすりさげかき頭巾、日のてりわるにも鋏子杖、たま〳〵つかふ言葉さへ、關東兵のごとく也、此ありさま他人の目にあまり、おやの耳へも入りしかば、きもをつぶし、元より馬鹿氣なるおやなれば、弓や八まんさやうの儀は、ゆめにもしり申さないといかり、はや親と子のきうりをきり申さんと、どしめきけれども、一門あつまりさうはなき事、又一たんも二たんも、いけんをもしてみんとて、其者をよびよせ、右の段々いろ〳〵いけんせられしに、おの〳〵はおもしろき事を仰らるゝもの哉、それがし喧嘩はいたしさふらはず、若左樣の事申ものさふらはゞ、我に御引合あるべしといかりければ、それはともあれ、まづ其方のなりふりがはすはなるにより、またむかひにも血の多きものありて、喧嘩をしかけたらましかばいかにといへば、其事にてさふらふ、兵法のおきてにて、むかひよりたとひ無理をしかけ候ても、三度まではかんにんいたし、四度にもをよび申すときは、此手にてあひてをいため、此ひねりにて人をとりてはうるなどいへば、異見せる人のいはく、人も手のあるものなれば、自由にそうもなるまじとあれば、何どきなりとも、各に御造作をかけ申たる時御申候へと、ちりはいもつかぬやうにいへ

ば、いけんも今ははやゝぶれさうなるときに、末座に侍る人の、只今おもしろきばくちを見侍りしが、わらべどし三人集りて打ちたるが、三人ながらみな、我もと錢を引てうちたりしといへば、喧嘩ずきする人、三人ながら本を引きたらば、のこりにばくちうつせに有るまじきといへば、其事なり、今の世には人々に、我まけぬやうの兵法を習て、喧嘩ずきする者さへあるものをといはれしに、能く我身の上を得心して、けんくはずきをとまりけるとぞ、凡て物の勝負をこのむもの、我こそかたんとめん〳〵におもひてするは、三人ながら本を引てうつといへるばくちに同じ事なるべし、

（十）これも町人に、兵法に朝夕心をつくす者あり、其人にあひて、本より兵は逆器なりといへる事もあり、また大きづのもとひともいへれば、其かたはいらざるものと云へば、其人の曰く、其方のやうなふぐりしきとはちがうたり、男といへるものは、若何どきによらず大事にあはんときに、命をたすかる此兵法が、惡きかといへりしかば、予が曰、其事也、我里につねに大なるひやうたんを、くびに壹つ兩わきに貳つ、くゝりつけてゐるものありとかたりしかば、其兵法者のいはく、それはつねによろづにつけて、身のとりまはしもむづかしからんといはれしかば、其の事なり、若何どきによらず、大水の出たらんときは、此ひやうたんにて命をたすからんと、いへりしとかたりしかば、やがて其むねをさとりて、兵法をすて、あけくれ學文をして、後には人をもしめすものしりになりしと也、これは一ねんのきざす所、大事なりといふ心也、

（十一）とかく人は、身をひげするものなりと思取り、よく物いふものゝ、我等がやうなるむくちなるといひ、又くぎのうらをもかへすほどなる、ものにねんを入る身をもちて、我等がやうなるあどのなきものもなどいふは、ひげせぬよりはにくし、みなかしこだてする人の身の上にある事也、ひげをも人のにくまぬほどにしてありぬべし、

（十二）はじめのそゝめき後のどやめき、一寸の虫に五分のたましゐといへる事いひならはせり、此事萬事にわたるといひながら、こゝに、一人のむすめをえんにつけんに、はじめは何の合點もなく、むこの家のたのしきに目を付て、其おとこのさかしおろか、人物

こつがらをも吟味なくて、おめでた説のみいひちらして、そこともなくえんにつくる、然るときに、其女心に、十のものが五つほど氣にいらぬおのこなれば、是非にをよばずして、ふしやうぶしやうながらそふうちに、縁はおかしきものなれば、そろ〳〵おつとの兎口がえくぼにみへて、なじむものとみへたり、されども、十が十ながら、こゝろにかなはぬおとこなれば、彼一寸のむしに五分のたましゐといへる事あれば、心にはゆめにもそふべくもおもはねど、さすがにむすめの子なれば、それと言葉にはえうち出ず、はじめは風のこゝちのやうにして、うならふならとあかしくらす程に、どこともなく、何さまはどうやらん、おいろがあしうならせられましたなど、いひ出すほどこそあれ、あのいしやの此いしやのと、かけまはれども、もとよりいしやのしるべき病にもあらねば、せんやくをもるほどむねもつかへ、やう〳〵やせもつくほどに、ちゝはゝこれにきもをつぶし、あそこの願、こゝのうらかたのと、ひしめけども、少もしるしもなく、今はあのけしきにては、命もあやうく見え侍るとき、又どこともなく、何さまは大かた、との御が御氣にまいらぬものさうにみゆると云出せば、おちやこしもとをして、四方山のおかしきはなしにまぎらはし、とひおとせば、あんのごとく、男にくみといへる病證なり、此よしを二おや聞き、始めは事の外にはらをたて、四方の聞へも口おしや、なに山椒つぶほどなる身として、左樣のことこそ只ならね、よしやとかく、我子をひとりもたぬさきとおもへばよきものをとて、九寸五分などひねくりまはし、さしころしてすてんなど義勢をすれども、もとより匹婦のこゝろざしをも、うばうべからざるならひなれば、此事を病にさへするほどに、思ひこみたる事なれば、すこしもひるむ體もなければ、又出入のものが、さうあそばしたるものにてはなし、えんといふものは、かゝるならひなるものなり、そんじやうそこのむすめごも、おやの御のえんにつけさせられしとのとはそはせられいで、のちによきおとこでもあるか、そこ〳〵の何がしといへる不人物なるものに、一期そはせ給ふなど、そらごとを取りつけ、ついせうをいへば、さすがわが子のかはゆさに、さらばともかくもして、いとまの狀をもらふ談合をせよなどいふとき、かしこきむこなれ

ば、其風ふれをきゝ、やがて我かたよりさりたるやうにもてなし、らちをあくるもあり、又ものなれぬ男なれば、我をきらいしは、弓や八まん口をしきなどのゝしれども、とても命もすてられぬものなれば、無念をはらすほどにもなく、のみもきらず、かみもきらず、我も女房をもゝたずして、年月をおくるこそうたでけれ、大かたかゝる事は、町人の上にある事なり、此おこりは、むすめにもよくがてんさせぬよりおこる事なり、とかくえんにつけんと思はゞ、先まへかどに心やすきものをして、とはせたきもの也とかたりしかば、かたへなる人、それは尤道理に似たる仰せられやうなれども、かへりて人のむすめたるものに、わる心つくるにゝたり、なんでう人の子として、おやの命にそむく事はあるまじといはれければ、又いはく、尤それもさる事なれ共、人としてものをぬすむ道はなきとて、ぬす人の用心をせぬ事もならぬならひなれば、おやの命をそむくものはあらじとて、かゝる事をいふまじきにもあらず、戀をば人にならふ物かはなれば、おとこにくみするほどなるいたづらものが、なんでう我等がいましめ申とも聞きいるべきかは、またた左様の事をせぬむすめならば、今かく申とも、これにならひておとこにくみはせまじ、たゞこれは人のおやたるものに、よめをとるとも、むすめをえんに付るとも、後にくやみのなきやうにとの物がたり也、さていかゞして、えんにつくべきとならば、其むすめもよくがてんせしうへには、只今其方をえんに付るうへは、若むかひの氣にちがひなば、二たび我家へかへらんとおもふべからずと、いひ聞かするはつねの事也、さて心やすきものをもつて云ひふくめんには、

第一　しうとしうとめを、我二おやのごとくあがまへ、孝行をつくすべき事、

第二　亭主を誠に御主のごとくに思ふべき事、

第三　すこしもりんきがましき事を、ゆく〳〵にも思ふまじき事、

第四　他所のおのこにむかひては、したしきうときともに、心づかひ有るべき事、

第五　夜るあるかば、すこしのまといふとも、火をともすべき事、

第六　あさねせまじき事、ならびにひるね、

第七　物がたりせまじき事、さはいへど、しうとしう

とめの物とひかけたらんには、其事ばかりいらへすべき事

第八　おやざとのよき事すこしもかたるまじ、ましてあしき事をや、

第九　亭主、内とのもの、または他所のものに付てはらたつことあらば、よろしくいひなだむべき事、

第十　身のもちやうは、すこしも人の目にたゝぬやうに、つまはづれはなるほど花車にたしなむべき事、

此外にいろ〳〵、こまかなる事もあるべけれども、右十个條さへ、心にかけたらましかば、其外は又ひとりも思ひつくべし、

(十三)むこいりの座敷にて、其の作法よくしりがほなるむこ、見るからおとまし、たゞはづかしきかほなる、しかるべき、もとよりよめは、猶をめぬかほしたるはいかゞと、親里迄思ひやられていとにくしと、或人の云はれしは、論語禮與₂其奢₁也寧儉、喪與₂其易₁也寧戚云云、禮とは萬事の作法禮物其外衣服等のしなまで皆禮也、たとへば千石とりほどのさぶらひには何ほどの役義、また町人ならば、いかほどの分限には、いか程の風體がよきといへるやうなる事也、與₂其奢₁也寧儉、儉とは儉約とて、少其かつかうよりしはきかた也、禮の本意とは其分々のかつかうより、おごりたるも又おとりたる事もなきをいへり、されども二つどりには、おごらんよりはしはきかたがましと也、たとへばかものくらべ馬をみん時に、らちのうちがよき中なるべけれども、そこへはつてもなきにより、ゆかれぬときに、はるかにとをきかたからみたる分にては、少其事がよくみへぬばかりにて、けがはあるまじきと也、それをらちよりそとへ出過ぎたれば、けがもある也、とても中道にかなはずは、其うちにては、萬事うちめなるかたよきとのをしへなり、喪與₂其易₁也寧戚とは、喪といへるは喪禮の事、または服のあいだの事也、其子たるものは、能萬事其儀式をわきまへたるよりも、親のわかれをいたみ、かなしきが身にあまり、取まぎらはしたるが道なり、といへるにかなひ侍れば、其人心にくゝなりてとひよれば、いとやんごとなき人のすゑなりき、

(十四)女のよくものかくは、かへりてかのかたの中

だちともなる也、又えかゝぬもうるさし、
(十五)しうとの氣に、あながちいらんとする、むこも見ぐるし、又くじがましきも、うたてし、入りむこといふ名は、聞くからおかし、
(十六)わかきおんなの、たび／＼神佛まいりするは、其そへる人の心もおしはかるゝもの也、ことに人の目にたつ風情は、猶興さむるものなり、とかくをんなは、おやのうちより外はしらぬなどいへる、心にくし、又當世のはやり言葉などつかふ女は、猶にくし、若衆も秀句など云出たるにくし、よく物いはんよりは、たゞうつぶしがちなるに、わざとならぬ袖の香などしたる、いつまでもわすられぬ物なり、
(十七)後家になりし身の、寺參りなどいひて、うなぎわたなどかうぶり、ぬめりあるくは、たれがためのかたちづくりにやと、なまぐさし、
(十八)人のうちへ來りて、しりめのみつかひて、ことに女など見まはすもの、にくし、

他我身のうへ第三　終

他我身のうへ第四

(一)たがひに、人にもえかたらぬ中の、ちぎりありし人の名を、まをへだて、そこはかとなく人のいひ出し侍るこそ、聞耳もたつわざなれ、又ふかく心にかゝる人のうはさは、こと人のあしうなりともかたり出すは、かたり出ぬにはまさりて、うれしきものか、たまさかにあひ侍りし人の、そこ／＼の神のさうじん、ほとけのさうじんなどいへるも、あしうは思はずながらも、いとうるさし、又我なりと、さすがにえいひ出ずして、我によくにたるものこそ、そなたゆへに物はおもへなど、云ひわたり侍るに、人の言葉にも、いとなさけありて、たれなれば、數ならぬ身になどいへるに、今はなにをかくしてん、はづかしながらとばかりいひより侍る心、いとたぐひなからましや、又後朝の文などをくりしかへり事に、心あることのは一首よみ聞へたるも、いとはづかし、いつよりはあいみることもなかりきなど、ゆびをるも心ぐるし、ひとりともし火のもとに、つれ／＼なる折ふしに、思ふ人のとひ

來りて、よのはかなき事もおかしき事も、うらなくいひかはしたるに、またこと人のおそひ來りて、長言したるいとにくし、又きぬ〴〵に、彼千夜をかさぬともと言葉殘りて鳥やなかなんど有しも、身の上となるこそおかしけれ、又我のみとかよふあたりに、人の文、人のとひよりしけはいみへたるも、うしろめたし、はじめて人に云わたり侍るときに、とかくのいらえもなさず、たゞつらきといふべくもあらず、又いはぬべくもあらぬを、心をつくして、とやかくやかたらひよれば、みづからはかのさよごろもなんど聞るは、つみふかきわざながら、もし其人もなくもがなと、むねつぶるゝわざなめり、露ばかりかこてる事ありて、又うらみはつべきにもあらざれども、音づれもなく月をわたりたるに、人のかたより、さすがにそれとはいひ出でずして、よのわざによせて、文などおこせたるは、はじめてあひしよりなをうれし、又かくまでうらむべき事ぐさならねど、小わきざしやうのものひねくりまはし、おどしたるにおそるゝもうれし、又みづからも思ひきりつ、同じ道になんなどいへるも、猶情ふかし、久敷へだゝりて、せめてやは、人のこしたりけん文なりともみて、なぐさみぐさにもせんと思ふに、おきどころわすれたるも、やるかたなし、かくかたくりつゞくれば、むかし物がたりめきたれど、ゆめばかりはかなきものはあらじ、さはいへどまた、うとまれぬものなり、なき身となりし人をさへみたるもうれし、されどもよろしきゆめこそ見はてぬ習なれ、あしきゆめのはやくさめたるも又うれし、おもふ人ふたりもちて、あなたこなたにかこたる人も、いとむづかしげ也、名のみ雲井に聞わたり、玉章などかよはせて、心をつくしてかたらひよりたる人の、けはいさもなきこそ、興さむるわざなりや、ひさしくへだゝりてとひよる女の、はゞかることとありてそれとなきも、ほいなきわざ也、思へども、こなたより打出すべき言の葉もなきに、若衆のさかづきもて來るを、何をもてかは此ものをほすべきとも覺へず、などかこつれば、かほあかめに、一ふしうたひたるを聞たるこそ、命ながきかひなりと、はぢおほきもわすらるゝわざなり、又しめやかにかたる夕ぐれ、何となく其折にふれたる、ふるごとなど口ずさみて、下の句はわすれつなどいふを、たやすくこれにやはなど、打ずしたるこそい

みじけれ、又こよひこそ來る夜なめりと、門に立に、月ははや山の端に出ぬるこそ、猶むねさはがるれ、又あふまじき人にあひて、此事たれにもいはまじなど、くちがためしたるも、興つきぬわざなり、すべて此道しらぬものは、物のあはれをもしらず、又此道のあるじがましきは、いとうたてきものなり、しらずやはあらん、何としてましと語も、いとかたはらいたき、

(二)我寺の御坊さまに、すゝめいれられて、他宗は皆ひが事なりと思ふ人こそ、いなかめきたれ、されども我せばき心には、たとへば何の經には、いかほどの利益をとかせられたれども、我法のごとくふかき利益はなし、その證據は、其法語にかくあり、どの御書にかく有と、我一宗の法の書物のみ月よ星よとながめゐて、ひたすらに思ひこむは、一端佛法をふかく信ずるににたれども、かへりて其の法に着するついへ、いかばかりならん、これかの萬法の茫々然として、大海にながるゝ舟の、とりつく島もなきやうなる全體を、しらぬゆへなるべし、八宗九宗、そのしな〴〵にわかれ、それ〴〵の法をたつる方便の術を、人のかたちに用をなす、手足眼にたとへんに、鞠をけるときは、手も兩眼もあしの臣下にして、足其君たる事を得たり、又月をながめ、花をもてあそぶ折ふしは、足手みなまなこの臣にして、目その手足の君たる事を得たり、又手のうへにていふときもかくのごとし、佛法にも淨土をとくときは、餘經みな淨土のやつこにて、淨土君たる事を得たり、其外法華眞言禪法相の法も、其法をひろむるときは、其法君の位を得て、餘法みな臣下の官也、されば君ばかりにては、君といへる名もあるまじ、これを萬法一如とやいふべからん、其一如はなにものぞ、かの心といへるものなるべし、心はもとよりかたちもなく、とぎたてぬるかゞ見のごとし、其おもてむなしく、もとよりかたちなきゆへに、よろづのかたちうつりゆくなり、もしかゞみにさだまれるかたちのあらましかば、よろづうつりゆく事はあるまじきよしを、いにしへ人も仰られしとかや、かのおろかなるものゝ、一法に着して、他法を邪なりと心得るものを、經文には、もろ〳〵のめしいたるものゝあつまりて、大象をさぐるにたとへたり、たま〳〵かの象の鼻をさぐるものは、象といへるものは、箕のごとくなるものといひ、又もゝをさぐりたるものは、はし

らのごとくなるものなりといひ、尾をさぐるものは、はゞきのごとくなりと、いひあらそふとかやみへたり、これかの大象の全體をよく見ぬゆへなり、大象はまことにかたちあれば、我みずといふとも、又見しりたるものにたづねてもしるべし、かの心といへるものは、たれにたづねてか見るべく、たれにとふてかしるべき、いはゆる我よくみるは、目をもつてみるにあらず、よくきくは、耳をもつてきくにあらず、いかなるものにたづね、いかなるものをみん、求むるものをもつて、求むるものを求むは、はなはだ求めがたし、我目をもつて、我目を見るがごとし、いづれや見るめといふらん、いづれをか見ぬといふべき、ちゝこひしははこひし、

(三)我身つみて、人のいたさしれといへる事、云ひならはせり、此事を古歌に、

身をつめばいるもおしまじ秋の月
　山のあなたの人もこそまて

此心は、我月のみたきやうに、やまのあなたの人も、さぞみたからんほどに、さのみ月の入るをも惜むまじきと也、猶ものぼりていはゞ、恕の字にあたり侍るべし、恕といへるは、推ㇾ己之謂ㇾ恕而已と、朱文公は仰られし也、己をおすとは、おのれが身のうへにある事をもつて、他人の上をおしはかる心也、世話にをしずいといふは重言なり、推量とかきてをしはかるとよむ也、又恕の字の心を、如心とも注したり、これはこゝろのごとくといふ心なり、これも我心のごとくに、他人にもあたるべきとなり、又程子の説に、施二諸己一而不ㇾ願、亦勿ㇾ施二於人一とあそばされしなり、此心も我いやに思ふ事を、人にもすべからずと也、たとへば見物の場などにても、我前に人の立て居て、其能かぶきの見へぬを、わがいやに思ふならば、其心をおしはかり、我うしろにゐる人も我のびあがり、又大あみ笠などかぶりたるは、いかばかりいやならんと思ひて、其心を付けよと也、又こゝに忠恕仁恕などいふ事もあれども、まづかたり侍らぬは、此恕の心をだに能くせば、自然に忠恕仁恕のさかひにもいたるべし、恕の字の心は、しるのかたきにあらず、おこなふのかたきなるべし、つとめよや〳〵、

(四)友とする人に、少文字をもよみならひ給へ、わかきときは、あだなる事にて、永き月日をくるものなれ

ど、老て孫子に立まじり、かたことまじりの道外のみいはんも、おこがましければ、其折ふしのかたうどになど、すゝめあへれば、まづ大かたの人、其道心にかからぬにはあらねども、それ〴〵に家のいとなみつとめあへる身にて、其いとまなしなどいひ侍るは、尤さもありぬべきことながら、大きなる不覺なり、それ人と生れて、いつをかいとまありといひ、又いつをかいとまなしといはん、其すゝむる人も、心實に露のいとまもなからん人には、もじをならへともいひかけぬものなり、其の人大かた、あだなるわざにおほくのひまをついやし、おほくの金銀をついやすをみて、かたりよるとみえたり、此事物がたりめきたれど、今の世にある人、みな〴〵かくのごとし、又すぐれてかしこだてするしれものは、道は文字のうへにはあらず、心にこそあるなれ、六祖はからうすふみのごとくなるやからなれども、六祖といはれしなど、はなをつまらしのゝしりまはり、いとみぐるし、わがすぐれておろかなるのみにもあらず、わるいぢおほき身をもちて、古今無雙の六祖に、我身を引合せいふ事を、外よりは物ぐるはしく見る事をさえ、かへり見ざるほどのおろかなる身をもちて、さとりだては無用なり、ゆめ〳〵なるまじ、まづ一文字なりとも讀習給ふべし、誠に文字は道をのするうつはものとこそ、古人ものたまひしとかや、

(五)人の情は、もとより正直なる物なれども、大かたはかたちより後に、わるいぢつき侍りて、其道を見る事もくらきとみえたり、とかく我慢ほどうたてきものはあらじ、たとへばこゝに他國に人あり、萬にさかしくして、よき才覺にて立身をもし、または國主の御こゝろにもよくいりたるなど、其しなをげに〴〵しくかたり出んに、たれか其術を感ぜざらん、しかれ共其物がたりの一巻相すみて後に、其人こそ其方のつねににくみ給ひしまゝ子なり、まことに、にくみ子世に出たりといはゞ、其右に物がたりを感ぜし人、其時又いはんには、尤左様の事も行末とげねばしれぬものなり、ほまれはそしりのもとなりなどいひて、そろそろ其事をそしりがまへにいひなすべし、其物がたりは壹人にて、そのそしると感ずるとはなんぞ貳つなる、これ我をもつて人にまじはる故なり、いにしへの人は、人を以て言葉をすてず、言葉を以て人をすて

ずと、のたまひしとかや、陽虎曰爲レ富不レ仁、爲レ仁不レ富と、この心は、陽虎は仁をすればとまざるほどに、仁をすることなかれと、富のために云ひしを、孟子は富をすれば不レ仁と、仁のために仰られしとかや、今此の草子を見たらん人、もし萬に一つも感ずる事あらば、我名を後に聞とも、人をもつて言葉をすつる事なく、われをまゝ子にする事なふして、あやまりをただせと、のちの君子をまつもの也、

(十八)我里にこびたる人あり、此世界の地形のはてをしりたるものなし、されども其の事をよくあきらめたる人あらば、千里をとをしとせずして、尋ぬ求めんと、つねにかなしみ、つねによろこぶ人あり、去折ふし、又例の世界のはての物語り出でければ、やつがれがいはく、むかし天地ひらけはじまるときに、よろづの神佛あつまり給ひて、いきとしいけるものに、それぞれのくひぶんをさづけ給ふときに、蚓にはつちをあたへ給ふを、あるみゝずがいはく、いづれものいきものは、二色三色乃至百色千色のえじきあり、われのみつち一色にては、つちをくひはたして、のちにはなにかはくふべきと、思ひ死に死にしとかや、これとほくおもんぱかりをめぐらする事のよきをしれども、つちの身をおふるまで食つくしがたき事をしらず、今なんぢがいへる事も、心を萬里がほかにめぐらする事のたくみなる事をしれども、世界のはてを、夜ひる工夫し出しても、身に益なき事をしらず、佛經卅三天須彌之四州九山八海五百千萬億那由他阿僧祇三千大千世界と說せらるれども、末には此もろもろの世界は、思維校計もつてよくしる所にあらずとかや結し給ふ、又四維東西南北上下天地不可思量とかや、又六合之外聖人存而不レ論とも、文にもみへたりとなじりしかば、又いはく、生きとしいけるものに、死せざるものやあるべきといはれしに、かたへなる人、勿論生をひとたびうけたるものゝ、死せるみちの定まる事、天地も一たび生じたるものなれば、なんぞめつせぬ道理のあるべきといはれしかば、かの例の工夫者、かうべをかたぶけ、しばし案じゐて、よき事うけ給はりたるもの哉、いつまで工夫をいたしてなりとも、此事さとり侍らんといはれしかば、又かたへなる人のいはれしは、むかし我となりにおかしき人あり、さるさびしき夕まぐれに、こよりを一筋ひねり、それを何となく

たゝみのうへに、ますぐに立られければ、其まゝたほれにける、此こよりたほれ侍る道理あれば、又立てゐる道理もあるべしとて、ひたものに立て見られ侍れども、たほるゝばかりにて立事はなし、後には心つかれて、ものがさそひ侍るとや、これも其道理をよく見がほにて、今日身にゐきなき思ひすごしなるべし、なんぢが天地のめつするときの工夫、なんぞこれにことならん、又いはく、生死一致の道理もありやといへば、かたへなる人の云く、なんぞあるまじきや、ものゝ長きあればみぢかき有り、高きあればひきゝ有り、もし高きといへる事なからましかば、ひきゝといふあひ手もあるまじ、これ一致なる所にあらずやとかたれば、又かたへなる人のいはく、勿論死生亦大矣、而不レ得ニ與レ之變一といへる事もあれども、我等が見解いまだ其位にゆめばかりもいたり侍らねば、みだりに語り侍らずといはれし、

(七)ある人、俳諧の發句すべき樣を、たづねられ侍りしに、予が曰く、發句のいたしやうは、いさゝか習も有なると古人も仰られしかど、先初心のうちは、世上に出たる俳諧の書を、能見覺えて、其時をしるをもつて、一つの習といたし候也、其時をしるといへるは、先世に人のもてはやせし、それ〳〵の集の、何の集の時代の作意は何、かの集の時代の句のしたてやうは何と、能く見はからひ、其内にならぬ迄も、句の手のあたらしう聞ゆるやうに習ふべき也、問て曰、すでに世に出たる集を手本とせよと仰らるれ共、今の世の集には、集一つには、非言の書二つも三つもあれば、いづれを正とし、いづれを邪とせん、答曰、尤よきふしんなり、されども其の內に、山の井などいへる書には、いまだ非言もなく、よき書かと覺侍る、此書の作者は、大和物語の抄などもせられたる事、人のよくしりて、世に用る事なり、問曰、されども此作者の句に、山里やいつも正月門の松とあるを、去人難ぜしは、もし此句を、山里やいつもむ月の門の松、とよみさふらはゞ、連歌たるべしと、答曰、これこそいはれぬ非言也、まづ此發句は、いつも正月といへる世話にて、したてたる句也、其上其時に中すといへる事あり、たとへば柄の字は、えともつかともよめども、長刀にてはえとよみ、太刀刀にてはつかとよむ、古來のよみくせ也、又五文字に徒然さやとあらんとき、俳諧の懷紙な

らば、とぜんさやとよむべし、又連歌の懷紙にあらばさびしさやとよむをこそ、其道を心得たる人ともいふべけれ、此俳諧の書に正月と有を、いかに非言がしたきとて、む月とよむさへあるに、又のゝ字を入れて非言するこそ、かへすぐ道の魔障也、これ古人のふかくにくむ所也、たとひ非言ありとも、むざと心得もなく、あしきとは定め給ふな、今の世の非言は、さまでの難もあるまじき句をも、人をそしり、我をたてんとて、なんずるとみへたり、さればにや難のあるべき句にも、難のなきもあり、問曰、此俳諧をよくし覺て、何の德かある、答曰、此さかひのふかき理りにいたりて、人孝出弟の道におもむき、心を化し、衆をあはれみ、惡をこらし善をすゝむる一助なり、まざぐとますがやうなり玉まつり、といへるは、いやしき民の言葉を以て、かの如在の敬をつらね侍るは、遠をおふの事にあらずや、俳諧のうたは、古今集に出たれば、御覽あるべし、さて此俳諧の兩字を、滑稽の心と仰られし御かたも有、此滑稽の兩字を、まはりがしこしとよませたり、長々敷候へども、其の一つ二つかたり侍らん、むかし秦の國に優旃といひしものあり、つねにおかしき俳諧のやうなる事をいひて、しかも聖人の道にかなへり、此時に、始皇もとよりおごりをこのむ人なれば、苑囿とて日本にてこれをいはゞ、大きなる庭籠のやうなるものを、何里四方にも作り、其中へもろもろの鳥けだものをはなちをき、狩場のなぐさみ所にせんと催し給ふとき、群臣此事を惡事とは知ながら、其威におそれて、あへていさむる者もなかりけるに、彼滑稽者の優旃に此事をかたられければ、優旃がいはく、一段によき御分別也、我等も內々かくこそ思ひより侍れ、若他國より、何どきによらずせめ來らんときに、此そのゝ口をひらき、かの鹿やかもしゝを出し、朝敵を四角八方へおひちらさせんといひければ、此事やがてやみにけり、又二世のときに、おごるべき事に事をかき、城郭をうるしにてぬらんといひしとき、もろぐの臣下共無用なりとはおもひながら、口をつぐみていたりしに、又此優旃是こそ可然御てだてかな、もしかたき來りて城へのぼり申さんときに、此うるしにてすべり申さんを、かけ出ぐたやすく敵をほろぼすべし、乍去其城郭を、いれ申ほどのうるし風呂が有まじきと言ければ、笑になりて此事も

やみ、民もをだやかになりにけり、又魏の文侯といへる人、群臣をめして、一々次第にならべをき、我は仁君かまたさもなきかと、一人々々にとはれしに、いづれも君は仁君なりとへつらひける、さて翟璜といへるものが番にあたりて、又仁君かととはれしに、翟璜がいはく仁君にあらず、其ゆへは中山といへる所を討取りしは、正しく君の弟の御手がらなるを、弟を中山へ封せずして、君の宗領の知行所とせられし、これをもつて仁君にてはなきとしると申上るに、文侯大に御腹立ありて、翟璜を座をおつ立て、扨其つぎは、任座といへる者の番也、時に又仁君かととはれしに、任座こたへて曰、いかにも君は仁君也、むかしより其君仁君なるときには、臣下にかならず、正直ものあると申し傳へたり、さきの翟璜がいへる事いかにしても正直なり、これにて君を仁君なりとしり侍べると、あみもやぶらず、うをもらさずに申せしに、文侯氣色なをりて、又翟璜を召かへし、官位にのぼせ給ひしとかや、又趙の惠王といへる人、燕のくにをうたんとはかられしときに、蘇代といへるもの惠王の御前に出て、昨日それがし、易水といへる濱ばたを通りしに、

おもしろき事を見申候、大なるはまぐり、海より出て口をあき、日なたぼこりを仕居たるときに、又鷸といへる鳥とび來り、此蚌を見付けよろこび走りよりて、其はまぐりの身をくはんと、はしをいれけるに、はまぐりやがてかひをとぢければ、きつがはしつまり、何ともなんぎに及びしかば、其とき鷸が云く、けふも雨ふらず、又あすも雨ふらずば、此はまにほしごろしのはまぐりあらんといひて、はまぐりをたばかりしかば、又はまぐりがいはく、今日出ず、明日不レ出ば、此はまに死たる鷸あらんと、つめ問答をするうちに、獵師來りて、はまぐりも鷸も、ふたつながら取し也と語しかば、惠王此心をさとりて、燕の國と我が國たゝかひなば、他國より二國ながらとらんとて、其の軍の談合やみにけるとかや、是みなおかしき事を以て、大道に引入れし事ども也、元より大和うたは、人の心をたねなれば、心におもふ事即みなうた也と、仰せられしやうに、かりそめに云出る物がたりにても、おかしき事にて儒佛の道へも引入るは、皆俳諧の德なるべし、あながちに十七字十四字につらねて、一巡箱をかたげさせ、あなたこなたの會々と、ひぢをはり頭をふる

きつねのやうに、世の數奇ものをたぶらかすばかりにては、俳諧師とは云ふべし、俳諧の道者とはいふべからず、

(八)世話に、陰陽師と辻風には出あはぬが秘密、又あふもふしぎ、あはぬもふしぎといへる事、たれも口なれてよくいへども、其の道理にかなふものまれなり、いかにとなれば、我身も息災に、其家にもなに事もなき時は、たれも御子かんなぎのたぐひ、其外判はんじ、五音のうらなひなどいへるものに、たぶらかさるるものまれなり、されども有爲轉變の世の中なれば、あるはなれにしつまがわづらふか、あるは寵愛の子にはなるゝ折ふしか、または金銀其外貨財など、不慮にぬすまるゝときには、かのつねにいひし利口とちがひて、あそこの辻うら、こゝのうらかたのなどいひて、あしをそらにまどふ事也、もしつねに此理をよくわきまへしらば、いかでかやうの時も迷はん、誠哉孔子曰、歳寒然後知二松柏之後凋一也、此心はもろ〳〵の草木も、春夏の中は、別に松やかしはのみどりなる色とちがふ事もなけれども、かの秋の末よりやう〳〵霜下り露おちて、そらのけしきも冬だつころより、よの草木は色かはり、葉落つれども、此まつやかしはゝ色をもかえぬを、かの迷ふ人も迷はぬ人も、何事も身にうき事のなき内には、同じやうに我他非是と口を聞き侍れども、かんじんの迷惑するときか、命もはてんとするとき、さとれる人とまよふ人のあるを、雪霜にあひて、こと〴〵くしぼむ草と、又雪霜にもきかともせぬ、松や柏にたとへ給ひしとかや、ことにおろかなる人こそ、今日はなき人のいく七日にあたるなど涙ぐみて、御子とやらんいふものをよびよせて、あの世の道をしるべなど賴まんといふより、何とは知らねども、みるよりはやぞゞがみもたつばかりなる、はしたなき女來りて、こと〴〵しく弓のつるうちそゝてとて、さま〴〵のうそがましき事どもを、まことしみ多く、かたことまじりに云ちらし、其亡者のことづのかし、かけまくもかたじけなき、神佛のおほんなくもかなしくも、あはれげに云聞ゆれば、げにもまのあたり、神か佛の現じたまひて、のたまふやうに思ひ取て、一座ともにこゝろもおしますなきしみつく、此迷ひのはなはだしきを、かの嚊子見ぬかほにて、よく見置て、亡者の云分にかこつけ、おのれが身によくが

ましき事をいふときは、御子の云事にても、少しも誠と聞いれず、されば今まで亡者の事づてとて、うそがましき事どもにても、おのれが身のめんぼくになる事なれば、御子とはだをあはせてこゝろをたつる、それほど今まで神のやうに思ひし御子のいへる事も、すこしおのれが身にそんのゆく事なれば、少しもまことにせねば、御子のいへる事をもふかく信ずる事と、信せぬ事とあれば、其うそを取つくろふ御子よりも、聞く者の心、猶ぬす人なり、さればにや能登守源順の和名鈔の部立にも、乞盗類に巫覡をいれられし也、世にすむもの、此道のまよひをさらずんばあるべからず、吉備大臣の庭訓に、莫レ用二詐巫一と仰られしも此心なるべし、右聖人の周易の占、天文の暦數をつかさどる陰陽の博士の事をいふにはあらず、又吉備大臣の庭訓にも、非レ不レ知二巫占一と仰られしは、かのまことの易のうらの事なるべし、又あふもふしぎあはぬもふしぎといへる事に似たる事も有り、語り申侍らん、むかし鄭の國に季咸といへる神變なる巫あり、人のひんぷ長いき若じにの事まで、まへかたより其いつのいつと、月日までも云おくに、すこしもたがふ事これなし、鄭の國の人上下ともにおそれぬものもなかりけり、さて列子といへる仙人も、これにあひて歸服し、さてかへりて我師匠壺子といへる仙人にかたりていはく、我今まで先生の道をもつて至極の道と思ひしに、又方々をあるき侍れば、めづらしき不可思議の道あり、其時壺子がいはく、今までなんぢに我道をかたるといへ共、眞の道理をしめさず、しかるに我道をなんぢ傳りたると思ふはひが事也、たとへば道を鳥の上をもつていはゞ、なんぢに傳へしは女鳥ばかり也、未道のおとりを聞かせざれば、いかんぞ其道の玉子を得んや、さらば其相人をともなひてわが相を見すべしと、さて其あくる日、列子相人の季咸を伴ひ來りて、壺子を相さすれば、相人やがて壺子を一目みて、列子とつれて其座を立ていはく、笑止なる御事哉、其方の御師匠の壺子どのは、十日の中に死に給ふべし、列子此事を聞くよりも、とる物もとりあへず、なく〳〵壺子に此事をかたる、壺子あざわらひ、さきに吾地文をしめすとて、いきたる身にて死たるやうなる術をなしたり、又あすもともなひ來りて見るべしといひしかば、列子又かの相人をともなひ來り、壺

子を相せしめしかば、相人列子にいはく、さても〳〵よき事かな、其方の先生はきのふまで十日の内に死せる相ありしが、けふは其相なきと、列子此事をきくより色をなをし、かくの次第と壺子にかたりしに、壺子又我けふは天壤といへる觀をしめす、又明日伴て來るべしといひしかば、其時又列子、明日相人を伴ひて壺子を相せしに、相人が曰、汝が先生其相ひとしからず、我何とも相し定むべきやうなしとかたりしかば、此事を列子壺子にかたりしに、されば今日は大仲莫勝といへる觀をしめしたりとかたりしとかや、かくもろこしにも斯るためしも侍れば、相人の云へる事もあふもふしぎ又たがはするもふしぎ也、乍レ去大かたは相人のいへる事や、うらかたはあはぬもの也、されども佛神の奇特あるまじといへるには、ゆめゆめあらず、

(九)理のこうじたるは非の一倍、といへる事云ならはせる、此事うちきぎには、理はいかほどもこうじたらん然るべきに、理もこうじたるはあしきとあれば、善をもあまりなしたる、惡きといふやうに聞ゆれども、さにはあらず、理も其理のたけよりすぎたるは、かへりて非とおなじ事なりといふ心なり、たとへばこゝにひとりの病人あらんに、いろ〳〵醫術をつくすと雖ども驗なきとき、山ぶしに此病本服の祈禱をあつらへんに、山ぶしはじめはまづ大病の義なれば、客僧が祈禱はいかゞあるべしと辭退せんときに、重て是非にと賴まんに、山ぶしがいはんは、尤此病も忽平愈する秘法あり、されども此道をそれがし師匠よりつたはり侍るときに、我一代に唯一度らでは行ひ侍るまじきよしを、かた〴〵かため申侍るゆへに、たやすく行ふ事にあらず、いつにても大名の仰にしたがふか、また公家殿上人の身のうへより、御たのみなさるゝならば、大きなる望みをも調へ、我師匠のあとをも弔はんと存ずる也とかたれば、其時病人並一門是を聞き、尤其もさる事にては候へども、いづれも御慈悲は同じ事たるべし、今度の病人がうへを御たすけなされ給れ、もし此病本服いたしたるにおゐては、乍二慮外一病人が身體を半分、御はつほに上申さんとかたく約束をし、山ぶしにきねんをたのみけるに、病忽本服して後に、この山ぶしに大分の禮物をつかひけれども、さすがに身體半分まではつかはぬときに、山

ぶし此約束をたがへたる事を、御公義へ申てあがりたらんときに、天が下にても、山ぶしが道理とはいへども、かく公事にするまでにはあるまじきと、山ぶしをにくみ申べし、もし公事にも出ずは、山ぶしをにくむものはあるまじき也、萬事に此心あるべし、一家一國をおさむるにも此心おほし、今の世にも都がたには、左樣のひが／＼敷法度はゆめにもなし、されども遠國には其國の守の御ふれとて、あるひはきるものに牛ゑりさす事を法度にし、又市町のうりものかい物にも、わたくしなる定めをかき、うはまへをとり、旅人のさまたげをなす、若右のふれながしを忘れたるか、またはそむきたる馬鹿ものあれば、其まゝ打すてにいたし、又一身體をも取上げらるゝ事のみ多し、是も其國にすむ民として、國の守の法度をそむきたるは、一たんのひが事のやうなれ共、牛ゑりなどかけたるとて、さして命をとるほどのとがにてはあるべからず、たゞ過錢などとりたるもよかるべし、我法度を、是れほどの事さへそむくものならば、何をもそむくべしと仰らるゝは、理りににたれども、よく天道よりみれば、其法度ともにわたくし也、これかごをぬすむものは命をとられ、國をぬすむものは諸侯となる也、わきより見るときは、其とがより刑のすぎたれば也、天の目よりはまた、其國の守もとが人ならん、孔子曰好レ勇疾レ貧亂也、人而不仁疾之已甚亂也、此心はゆうをこのみて、我まづしき事をきらふものは、かへすべきあてもなきに、おとこは氣でする、うちきにてはかなはじなどいひ、人のもの多くかりすぎ、又もはなはだしきは、山野にたゝずみ、山立强盜をするたぐひなり、人而不仁疾之已甚亂也といへるは、本文の心は、惡しきものをもあまりつよくにくみ過るは、かへりてみだりがはしきと也、小人に遠くならんとて、其小人の事をあしういひにくみなどすれば、かへりて其小人我にあだをなすもの也、たゞ我身をつゝしみ、うや／＼しうすれば、自然に小人とは遠くなるもの也と、古人も仰られしとかや、このごろは天下太平なるにより、世間に事の外儒者なども出來て、國々にみな三百石五百石の知行を取てゐる人も多きと見えたれども、若わるう御いけん申ては、我牢人にならんかと、口をとぢらるゝと見へたり、たれも其身になりては云ひにくき者なれども、儒者といふからは、くにの

法度のかたくなゝるを、いさめではかなはぬ事なり、されどもまた、儒者に國をまかせぬか、めに見ぬ事なればつよくは云ひがたし、若くにもとてもおさめもせぬ身ならば、儒者とはいはじ、たゞものしりといふてありなまし、

他我身のうへ第四 終

他我身のうへ第五

(一)世話に短氣は未練、又は短氣は損氣、やせ馬の道いそぎといへる事あり、此事萬にわたるべし、まづ商人のうへにてこの事をいはゞ、其賣物を我ほんねよりもはるかにやすく人の求んときに、其人を與なくいひはぐらかしていなせ侍るは、一端氣もみぢかく、物にらちのあきたるやうに見ゆれども、これかへりて未練也、又損氣也、たゞいや左樣にうるゝ物にてはなしといひてよかるべし、おのれこそそれを朝夕あきなへば、よくねだんをしりたれ、さきの人はたまさかの事なれば、いかで我ごとくしり侍らん、又ものをねぎるはつねの事なるべし、又武家のうへにてこれをいはゞ、おのれが一朝の言葉とがめにて、身をはたし命をうしなひ、百年の憂を父母にのこし、主君に事をかゝする事、かへすがへすも未練なり又そんき也、されども當座に其存分もはたすべき義なるを、さはなくて人のかげにて、たんきはみれん又そんき也とぬけ句をいふは、かへりてたんきにて、未練なより、は

るかにおとるべし、此二つの間をわきまへ侍る事はむづかしかるべし、たゞ有道についてたゞすべき事なり、むかし淮陰といへる所に韓信といへるものあり、つねにこのみて劔をよこたへゐたりしに、其里の子どもくみして韓信をとらへ、せびらかしけるは、おのれよく武邊だてをするなれば、何ときなりとも死なんとおもはん、其つるぎにて我々をさしころすべし、又いのちおしくば、我々がまたぐらをくゞるへしとぞのりにける、其時韓信心に、一かたなにさし殺さんとは思へ共、終には身をもたて、先祖の名をもあげんと思ふ身の、かゝる小事を心にかけてはいかゞと思ひ、さしうつぶきて、またぐらをくゞりければ、本より燕雀何知二鴻鵠志一なれば、皆々一どきにこゑをそろへて、さてもつたなき韓信やとて、のゝしりけるこそはかなけれ、さて韓信後に漢の高祖につかへて、天下をおさめし功により、楚國のあるじとなりて、其むかし我をなぶりし子共を、皆我さぶらひとなしていはく、むかし其方達の我にはぢをあたへ給ふときに、さしころし死なんは何よりやすかりつれども、我心に大きなる望あれば、つらきはぢをもしのびしなり、もし其ときに命をすつるものならば、死したるあとに、さして名ものこるまじきが、堪忍をいたしたればこそ、今楚國のあるじとはなりたるとはぢしめけるとかや、其外程嬰杵臼が事などかゝるためし數をしらず、又やせ馬道いそぐとは、孟子の、すゝむ事すみやかなるものは、しりぞく事もすみやかなり、と仰せられし類也、又老子經曰大器晩成、此心も大きなるうつはものは、五日や十日には出來ぬもの也、又一日に一つも二つも人のするうつはものは、其やくにたつ所もせばきと也、又うへ木なども正木やもゝの木は、一月の内にも二尺も三尺ものぶれども、つゐにはしらともなりたるを見ず、又くすの木などは、七年に一寸づゝのぶるといへども、きはめて大木ありて、引ものともなるがごとし、

(二)さるおかしき人、今日貧乏神にまいりあひたるが、正しく貧乏神は、子を五人持給ふと覺へたりとかたりしかば、かたへなる人、そのうたでき神のすがたはいかなるぞとゝへば、されば其事也、其神のすがたはよく人にゝたり、其子どもの名、まづ惣領を借上太郎、遊山の次郎、博奕の三郎、朝寢の四郎、慳貪五郎と

かたられし也、
(三)ひんの盜に戀のうたといへる事あり、これふかき心のあるべき事なり、もし此心をよく上にをしひろめ給はゞ、猶々堯舜の御代ともなりぬべし、孟子曰無₂恒産₁而有₂恒心₁者、惟士爲ㇾ能、若ㇾ民則無₂恒産₁、因無₂恒心₁、恒の産とはすぎはいの事也、此心は唯士のみよくすとは、學問をもよくしたるものは、たとひ身すぎなきとても、ぬすみなど、其外不義なる事はせぬと也、されども世に學問などをよくしたるものはまれなれば、世上ともにまづしくなりゆけば、民は不義をなし、つみにおちいるといふなるべし、其上君の身おごり給ふ事あれば、たみは猶々迷惑する也、こゝに少ゆきちがふたる事あり、上におごりをこのみ給ふほど、民にも商事もあるべきなれば、富貴すべき事なれども、猶貧苦におちいる子細あり、ゆへいかなれば、たとへば上に百兩がかいものをたみにとゝのへ給へば、上には百兩のついへなれば、下には百兩のまうけなるべきやうなれども、下には其利はわづかに五兩か十兩かなり、又其百兩の金の出所はといへば、民の運上の銀子にあがり、又は百姓に税をつよくかけ給ふより、くらもとにあつまる銀也、されば上をまなぶ下なれば、下々までおごりをとゝのへ、妻子をかくしをき、あだなる事にさゞめきあるくゆへに、政所に借錢公事の、訴訟の目安のといひて、さはがしく侍ると見えたり、此物がたりは當時の事にあらず、
(四)他人はくひより、親はなきよりといへる世話有、此事打ぎきには、ねんごろにして、他人はふるまひなどさいく仕る時は、ねんごろにして、其ふるまひ音信なども遠のくときには、必ず不念比になり、又おや子はつねにはゆきゝもなけれども、誠のかなしき時には、なきよるといへる事也、此の義も大かたたがひ侍らねども、此言葉をよく味はふときは、他人とかきては、うとき人とよみ、親といふ字はしたしきとよめば、親疎の親にして、おや子の義理ばかりにては侍らじ、其上君子敬而無ㇾ失、與ㇾ人恭而有ㇾ禮、四海之内皆兄弟の如くたらんといへる事もあれば、いかに他人なりとも、親しき人はしんたるべし、又おやこたりとも、うとき人は他人なるべし、兄弟は他人のはじまりといへる世話をよく心得、他人のはじまりにならぬやうにいたすべき事也、兄弟はほね身をわけしものなれば、いかほど

もしたしかるべきを、他人のはじまりといへるは、あしき義理のやうなれ共、はじまりといふ字に、ふかき心有り、はじまりとは未だ他人にてはなけれ共、わるうすれば、是より他人になり始るといふ心也、其他人とわかれぬる所をたづぬるに、われ人わらべのときは、たがひにあく心もなけれども、やう〳〵成人をしてえんにもつけ、よめをもむかへなどするときより、むすめの子はわが兄弟より、心もいまだ見とげぬおつとをかたげ、一文にてもおやのゆづりをおほくうけたがるさへあるを、又鍬だけある子共さへ、二三人も出來ぬれば、此子どもになにがなとらせたくおもふより、あらぬ公事たくみなどするよりして、かの他人のはじまりといへることにもなりゆく世のほどこそあさましけれ、又たとひ我近きおやこたりといへども、ひんなるものはたのしきかたよりはみぬかほをしつ、又は道行づれにもなり侍らぬやうにするによりて、又ひんなるものもはらをたて、つゐに他人のはじまりとなる事世に多し、されどもおや〳〵の年忌か、又はわづらひかうれへなどある折ふしに、たまたまよりてはしんはなきよりなるとて、をんにきせがましく、たのしきかたよりいひ聞ゆれども、是をしんはなきよりとはいふべからず、つねにしたしみて、たがひの用要にも立などするをこそ、誠の親とはいふべけれ、かのたま〳〵よりくるは、をのれ人にわるくいはれまじきためなれば、なきよりにてもしんにても侍らじ、つねに來たりつけぬたのしきおや子の人多くつれ來るは、かへりてものゝ談合の邪魔にもなるもの也、心實ならぬおや子は、おなじくはゆかずともありぬべし、右のしな〴〵わかれ侍るといへ共、其本は我といふものを大將にして、心をもつによりて、さま〴〵不足も口舌も出來侍る也、それがしが亡母壽法がむかしがたりに、無我といふ字を、さるたうとき人は多くかきて、屋の内にこゝかしこにはりつけておき侍ると、うけ給はるとかたられ侍りしを、常に小耳にはさみて居侍りしに、此頃螢のしりのひと下りをも學び侍るに、至人は不已といへる文字をみて、猶々かの亡母がむかし語ゆかしくなり侍き、又大學の新注には、人已合一といへる論も侍るよし也、其外佛書に此類あげてしるすべからず、彼六波羅密の戒行も、無我の二字には過ざるべし、今世にふる雨の

數をかぞふる人はありとも、此無我の地位によくいたるものあるべからず、されども無我の道にも、大有小有、短有長有るべければ、一生無我を行ふ事こそなまじけれ、一時にても無我を行ひ、又僞ながらも無る我を行ふ人は、佛の御心に近かるべし、神佛にいのりてなりとも此心になりたきもの也、もし無我をおこなひすましたるものならば、とらおゝかみも害をなすべからず、たとひ害をくはふるとも、無我の見解なれば害と思はず、されども、わが無我なりとておそろしきものに近づくは、はや無我あらず、とかく此事萬々萬が一つも身にならぬことなれば、云ふもそらおそろし、

(五)或人問て曰、つれ〲草に盛親僧都の行跡、餘の人にかはりたる曲ものたりといへども、皆人其德にめでてゆるしたりといへるは、まことにしかりや、また其理のみにして、事のいまだほかへあらはれざる事なるにや、答て曰、何ぞ此事のみを疑はん、今の世にも此類あまた有り、むかし大ざかの御代のときに、金剛太夫といへる猿樂に、鼻にきず有る者有りしに、然れども能の大名人なれば、すめんなる能にも其きずをはゞからず舞臺へ出侍るに、見物の諸人其能に見入て、彼はなに疵有る事を忘れたり、まことにかくをかしき猿樂わざにさへ、其道の至極にいたりぬれば人、其きず有る事をも忘れたり、いはんや彼玄妙の道德いたらん者にをいてをや、なにの小細のふるまひにはゞかりあらんや、あへて其物につきて、其物をついやしそこなふ、家にねずみ、身にしらみ、國にぬす人などいへる内に、君子に仁義あり、僧に法ありといへるは、兼好あやまりたるや、又いかなる心なるかとふ、答て曰、此段も此草子の一條目にして、むづかしき段也、されども此段の心は、其君子たる者、あるひは善にほこり、又其道にかゝはりて、人の適を適として、おのれが適を適とせざるを、いましめたる心ならん、僧に法ありといへるも、又しかならん、また其君子だて、名僧がほするもの、其の法と仁義とをかりて、心に思ひもせぬ事を、身にしゐつとむる事をいへりとも云れども、此草子の本旨にあらず、師說に云、たゞなにとなく、僧にかゝはる法有、君子にかゝはる仁義ありといへる心を、下にもちて見るべしと、又此だんに小人に財有りといへる事も、聖賢は道に安ん

ずる事をたのしむ故に、たからをもてあそびて、心をたのしむる事をまたず、小人は此樂ゆめ〳〵なきにより、たからをもちて身をたのしむるより他なければ、たからは第一の重寶たるべきを、それをもかへりて、其の物につきて其ものをつゐやし、そこなふうちへ入侍るにて、をしはかり給ふべし、今の世に博學多才にて賢人がほする儒佛の老翁も、たからを求め得たるときは、其のほどにすぎてよろこび、人にへつらひ、大名のもとあるは大寺にすはりては、いつまでもうぢ〳〵と、生ぐさきにつきたるありのごとくにして、かねて身をしづかにする事をしらず、又たからをうしなひつる時は、其ほどに過ていかりかなしみあへれば、なんぞ小人にことならんや、一たん書にむかひて見臺のちりをうちはらひ、褊裰の袖をつばなかし、ちと聲をはなへ入れ、あるは高座に登り、錢もちくびなるころものゑりを引なをし、多くの聽衆を目の下に見こなし、扇拍子を取り、高聲にたからをいやしみ、道をたうとむごとくに說ながすは、きく人もよろしく思ひ侍るによりて、小人の財寶の身にわざはひをまねく中立となるといへる人あまた有、我等がひが耳やらん、大方の人の、此草子をよみきこゆるにも、前後の註釋にも、小人のたからをあつむるは、かへりて其身にわざはひ有といへるばかりにて、賢人なればたからをあつめても、くるしからぬやうにのみ聞へて、かねて、賢人はたからをあつめぬもの也、といへる事の侍らぬやうに聞なしたるは、我わるかたぎにや、され共草子の本意は、むかしよりかしこき人に、とめるはまれなりといへるにて、一部の大意をくみ給ふべし、又君子に仁義ありといへるも、もとはかの漆園の老仙のあとをしたひてかき侍る筆法なれば、莊子の新註に此書の字義は、あへて論語孟子の字心をもち見るべからず、其字義にては通じがたし、又莊子一部字心をもつて見るべしとのをしへなれば、莊子を味ふ人ならずんば、此の段の文章の本意さとしがたからんか、後の段に、信をもまもらじ禮義をも思はじといへるにても、了簡あるべき事どもなり、あに貪奸、菩提に志すものに、筈をちがへ、人に不禮をなせとをしへんや、かねて四十にたらぬほどにてしなんこそ、目やすかるべけれといひ、又すべて人は、無智無能なるべきものなりといふも、其ためにする

所ありていへる事也、東坡居士の人生識レ字憂患始といへるも、其心にいきどほる所ありての反說也、世話にも此心有り、たとへばもの丶ふの臆病なるものをはげますとては、其心よりはいつこうに、はらをきりて死せよなどいひ、又戀ぢのたはぶれにも、それほどつれなくおはしまさんよりは、ころさしませよなどかこつも、あながち思ふ人に、ころされん事をこのむにてはなし、たゞ餘りつれなきをうらみんといへる事也、此類此草子にかずをしらず、かまへて〳〵、言葉をもつて心を害し給ふべからず、あへて名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるこそをろかなれといふ段の本意、又可不可は一條也、いかなるをか善といひといふ事をとふ、答て曰、此段此草紙の建立の所、かねて莊子の大事、天下に此ことはりなくてはかなひ侍らぬ所也、乍レ去此事、卒爾に言葉をもつていひのべらる丶事にあらず、いたりてむづかしき事也、凡俗の身にしては、ゆめばかりもいらうべき義にあらず、もし此段の心をよく會得したるものならば、此をはりにいへる、八つになりし年父に問ていはく、佛はいかなる物か候らんと、とはれし心も大かた通じ侍るべし、此の段は儒にして論語中庸、もし佛家よりこれをいはゞ、善惡不二不思善不思惡邪正一如有無一致の理もかよふべし、され共、善惡不二といへるとても、善あれば惡あり、惡あれば善あり、わづかに善といへる名のあるも、はや惡といへるものがあれば、あくのはじまる所などいひてかの莽莽蕩々として、わざはひをまねくやからの、どうやらん無のけんへ落る、かきやぶりさうなる義には、ゆめゆめ侍らず、こ丶にまぎれ道具おほくあるところなり、よく〳〵つ丶しみ給ふべし、善は善、惡は惡と、きつかりと事の上に立て、さて其上に、不思善不思惡の道理の手の下しがたき所有て、又々理のいちじるき所は、世話にいへる愚癡またき人といふほど、立義なる所あるべき事ならん、されども其理りは、只今は餘人も多く有などしては、中々さはがしくしてのべがたし、もし此ことを心實に聞かんとおぼしめし給りて、すこしもわるいぢなきならば、わがひが心にまかせて、丸きうつはものにけたのふたなれども、可不可一條抄といへる、かんながき傳はりたるものを御見にいれ、よもすがら談合をいたし侍るべし、かく申とて

も、別に秘所もなき事を、ふかゞらせんとていふにもあらず、又我其事を露ばかりもわきまへて申にも、ゆめ〳〵さふらはじ、たゞあはれ〳〵、道に望みふかき人と談合をいたし、たがひに道にもすゝみ、かの帝郷のほとりにも遊ばまほしさにいへる也、若此心を身に能く得たる人あらば、日々に日本國中の神々を勸請いたし申とも、人敢て、御子々々敷ともいふべからず、一文不通なりとも、文盲なりともいふべからず、天をかけりたりとも、通力ありともいふべからず、一時がうちに萬錢をついやすとも、おごりともいふべからず、あかはだかにてありとも、不禮ともいふべからず、大ごゑをあげ元日よりなきさけぶとも、いまいま敷と隣里よりもいふべからず、萬鐘の祿を辭したりとも、賢なりともいふべからず、貪泉をめぐるとも、むさぼるともいふべからず、ほむともすゝむべからず、そしるともしりぞくべからず、分に過ぎたるいひすごし、はづかしや〳〵、あなかしこ〳〵、

(六八)其道になれぬ人の、物をほむるほど、かたはらいたき事はなし、又我々が身の程を、かんつかたの人のさぞおぼしめされん事こそはづかしけれ、去人學問のきようなる人をほめんとて、そんじやうそれは内典外傳のこらずたてよこ十もんじに讀て、其講釋をせらるゝなんどかたられし、むかしより儒佛の書共に、たてよこ十もんじに讀む書物はまれならん、たまたま詩文などに謎立のやうなる事あれども、をしなべての事にあらず、其義理をよくみるを褒美して、縱横に理を云ふを、たてさまよこさまによむといへるを、聞ちやつりていふとみへたり、又算術の上につきても、何の里の何之衞門は算用の大名人にして、五人や六人によませて、一どきにおきて、高をいくらとしめらるゝなど、神のやうにいひなせども、これもひが事也、やつがれ若年の折ふし、吉田休庵老人がとぼそをたゝひて、九々の一句をもよびならひ侍りての物語に、世間にいへる右のはなし仕出し、我等體は此事あるまじく思へども、又道の至極に至りては五人六人に、同音によませてもつもる算ありやととひ侍しに、休庵のいへらく、たゞ算はをそきもくるしからず、一さんにてちがひ目なきをたうとみ申也、はやきさん曲らしき算は、算用の實義にあらずとことはられしこそ、天下に名を得て、道のあるじともなり侍る

人也と、いと有がたく思侍りし、又出家法師なども、我ひいきなるまゝに、人のまことにもせぬ神變なる事共を、とりつけて人にほめあぐるものも有、これはかへりて人に、其出家の威光をあげんとて下るもの也、かの苗をたすけますしれものと、ひとしきにや、さはいへど、佛神の不思儀をあるまじきといふには、ゆめ〳〵侍らず、むかしより佛神の御事は、神明不測とて又かくべつなる事也、すこしもなしぎを出し侍らず、あふぎたうとむべし、ことに有がたきは、いせ祇園清水北野あたごどの、

(七)去しれもの、人の仕合よき事を、事のほかうらまれ、其人の名をつぎて、我子どもまでを其人の子どもの名にせられければ、町中にてまぎらはしくて、おかしき者に侍りしを、かたへなる人のいはく、其方のいかにたれどのゝまねをせられたりとも、すこしもあやかり給ふべからず、却りてあしくこそさふらふべけれ、ゆへいかなれば、我里に大きなる森有、さるかしこき人、六月の折ふし朝がけに其森の、にしばらにすゞみゐて、やう〳〵四つ過にかへられければ、又かたへなるおろかなる人のいはく、今日は事のほかのあつさにて、たれもたへがたきに、其方はあせをもかき給はぬはふしぎ也ととはれしに、其人のいはく、其森のにしばらにいまゝですゞみ侍るとかたられければ、其時しれ人、よき分別なりと思ひて、ひるすぎより森のにしばらへまかり出、すゞみ侍れども、すゞしき事はさておき、ゆふべの日にさへられ、反りてくわくらんを仕り出し、長きわづらひとなり侍りし也、是夏日には森のかげにすゞむ事のよろしき事を、見ならへども、其日かげに朝暮のある事をしらざる人なりとかたられ侍りしは、ときにとりてのよろしきたとへなりとて、いと興にいり侍き、

(八)正吉正介同じく手をやぶりて、抱臼子にくすりを求侍りしに、抱臼子曰、汝等なんぞ同じく云合せしごとくに、手をやぶりたるとゝへば、正吉がいはく、鳥籠をつくり侍るとてあやまちたると、正介がいはく、佛をきざみかくあやまちたると、抱臼子兩人にくすりをあたへて、兩人さつて後、天にあふひで長くうそぶきて、物あんじすがた也、抱臼子が亡婦のいひしは、子なにをか案ずるや、抱臼子かうべをふりてこたへず、妻の曰く、子なんぞ言葉なきにいたる、其とき

抱臼子かたづをのんで嘆じて曰、嗚呼汝がしる所にあらず、正吉正介同じく手をやぶりて、しかも手をやぶりし術は善惡にあらずや、妻のいはく、しなじなにいとなみあへる、世をわたるたつきは同じ心にや、抱臼又こたへずして、かうべをふりていろをおこす、妻の曰く、なんぞ我いへる事のあやまちたるか、子が不豫の色あるは、抱臼子が曰く、しかんばあらず、なんぢなんぞやいやしき、妻しばしありていへらく、八宗九宗其しなじなにわかれて、人を誇り我をたつるも、本意はかのたうとき所へまいりてん、おもふのみなるとうらおもてなるや、抱臼子がいはく可なり、もつてかたるべしとて、もたひとり出、かはるがはるにくみて、ひざをいるゝに安き事をたのしみ、聲々に朗詠し、ひんがししらみになるをもしらず、有りしむかしを思出れば、今もかみ子の袖をぬらし侍りしとかたられつる、

(九)よろづに世なれたるかほする人こそ、うたで思ふ所なくみゆれ、かりそめにいひ出せる物がたりにも、ゆふべはそこそこへをしかけ、酒などたうべたりなどかしこげにいふも、いと聞にくし、さはいへどやんごとなき御かたの不時にきたられ侍るこそ、身にもあまりてかたじけなきものにて、彼車のくさびぬきしためしも思ひめぐらされ侍る、又したしき友のとひよりて、うらなくかたりあへるこそ、年もわかやぎ侍るものなれ、凡て人は、言葉づかひにて、其ねざしのよしあしも、大かたはおしはかられ、我が里の人は心もやさしくて、ことばづかひなどもあまり俗ならね、又となりの里の人は、あるひはぞくにちかきと、または足恭にしてはだこそゆるされ侍らねと、かたり出でければ、かたへなる人、されどもまじはる中は、いかにも心安きこそよけれなど、いはれしに、やつがれが曰、されどもことばのひらめなるのみをさして、心易きまじはりとはいふまじ、もしまたこと葉のひらめなるを、心やすきまじはりといはゞ、日本國の馬かた舟おさやうのものは、あからさまにまじはるにも、うしろひもよりしたしみとおなじものゝやうに、どうせいかうせいなど、心やすげに云ひよるかとみれば、やゝもすればのりあひ、かまびすきわざのみつかうまつり出して、後には、山ざとのさはぎともなり侍るこそ、いとつたなきわざなれ、むかしより友

どちのまじはりには、たからをもつて人にかすも有、あるは義によつて、死をもつて人にゆるすもあれど、つゐに言葉をひらめにつかへなどいへる事は、やまともろこしの つたへの文にも、いまだきゝこそ侍らね、又たま〳〵に俳諧の連歌など、あなたこなたより來る卷物の中の言葉にも、ぞくなる言葉のみあるは、其人にいまだむかひ侍らぬさきより、あらかじめ其鄕の風俗までをしはかられ侍る、これにて思ひしりぬ、やつがれなども今すこしえらんでよろしき里にもをりなば、かくこれほどに口をしき身にてはあるまじきと、ひとりなみだをこぼし侍れど、いかなる宿世にや、其よすがもなき身なれば、力もなし、かまへてわかき衆など、かりにもあしき風になれ給ふなよ、

(十)匹如身なる遁世者のむかし物がたりに、それがしがわかざかりのみぎりは、山立强盜を以て世を渡る、たつぎともせしいたづらものなりしが、すこし思ひしる所ありて、かゝる苔のたもとに身をやつし、からかさ一本の身體になり、あめが下をさして定むる所もなく、時雨とつれて巡り侍りき、其むかし山立せし折ふし、多くの餘力を催し、夏山のみねもこぶかきみどりのはやしの物かげに、やすらひ侍る夕まぐれに、坂の下よりひとりおの子の上り侍りしを、すはや上上の事こそ出來けれと思ひ、のこる者共にもきつとめくばせして、此ものゝ體をみをくり侍りしに、風いとはげしくふき侍るに、すげ笠のひもをわざとむすばして、上の方へあげたりしに、いかさまにも此ものは心得たるものなりと、與風心おかれて、口をしながら過し侍りしとかたられけると、かたりあへれば、わが友正春といへる人のいへらく、昔し我等の所へ參られし田舍人、思ひよる事ありてひえの山へのぼられしに、なにとかしたりけん、道にふみ迷ひて、其所にいたりぬれば、日もやう〳〵くれがたになり侍れども、京へかへらで叶ひ侍らぬ用所もあれば、日くれて侍りしに、用心の爲にとてそのほとりのやぶに近づき、手ごろなる竹を其長一間ばかりにきりて、中わきざしを其たけのさきによくからめつけ、長刀のやうにしなし、それをうちかたげてかへり侍りしに、案の如くうばがふところとやらんいふ所に、山だち多く待居けれども、此長刀をかまへしていをみて、あへて近づく山立は一人もなかりけるとぞかたられけ

る、すこしの心づかひにて、去がたきわにのくちをのがれけるこそたゞならね、旅などするものは、此心をもちたらんしかるべきわざにぞ、

他我身のうへ第五 終

他我身のうへ第六

(一)いはぬ所有り、いふ所有り、雨をきゝて下知をなせと云事有り、聊しらずんばあるべからず、いはぬ所有といへるは、たとへばそこ〳〵に九十になり給ふ老人のはてられしといふ事は、もはや八十になりたる人のまへにてはいふまじきことなり、さなきだに年よりたる身は、萬事あぢきなくむかしこひしうして、袖をしぼるにひまもなきに、まして此物がたりなどし出れば、もはや我よはひも今すこしなりと思はしてんも、これ老をやすんずる道にあらざれば也、又六十になる人のまへにては、九十になりし人の死をかたるべし、其ゆへは、まだ我よはひも卅年有とおもはせて、たのしみをあらせん一、又は養生だによくしづかに身とりをき侍れば、長いきの術も有と思ふうちに、心もゆたやかになりたまふ一つ也、また老人のまへにて、廿廿二三になりたるものゝしにたる事はかたり出ても、しかるべし、其故は里に杖つき、くににつえつくよはひなる人は、廿ばかりのころは、はる

かに過こしむかしなれば、かへりて心にもかけざるべし、かねては老少不定のさかひなる事をしらしめて、念佛の一へんもつぶやかせ、又心ある身には、いとまある身となり、一大事因緣をもはげませ、花のちり、月のかたぶくをみても、心を無何有の鄕に遊ばしめん爲なれば也、此事よろづの物がたりのうへにわたるべし、されども今の世には、年はや六十七十にもなりかゝりたる人のしに給ふをば、おめでた事の、又はあやかり者のなど、なべての人の云ひふらしたる事なれば、我ひとりとがめんもことやう也、其云出せる人こそつれなけれ、さはいへど生れつきわゝ歟、年よりたるおうななどこそ、いとにくきものなれ、よめなどに、ひが〳〵敷事のみあまたいひかけ、我子にさへいたづがはしく思はすることそ、むくつけきわざなれ、我國のみかくさがしきかと思へば、こまもろこしの文にもむねのうちに、外のもの入來りてさはがしきたとへには、婦姑勃磎すとて、家のうちに婦姑の中あしく、物の情にもとり、かたづまりたるやうのことにいひ傳へ侍れば、もろこしにも、婦しうとめの中はあしきものときこえたり、此しうとめをいかなるものぞとたづね侍れば、かのむかししうとめにせたげられし、よめのふるびたる也、いとおかしきわざにや、すべておうなの心はかゝるものにや、又おうなのとくは列女傳にあまたしるし侍るを、ことに此ごろ、我先生の女もじにやはらげ給へば、たれももとめて見るべきなり、また雨をきゝて下知をなせといへる事を、つるのあしにて候へ共、あら〳〵かたり申侍らん、或山寺の小僧なく〳〵旦那の方へ來たり、さてもさてもみづからは、うらめしき目にあひてさふらふものかな、今までの御なじみにはぐくみ給へと申ける、且那其ゆへをとへば、師匠の事にて候へば、かたるまじきとは存候へども、又かたり申さでは、中々そのことはりも聞え侍らねば、かたり申候べし、今度それがしは寺をおひ出され侍る、とがのみなもとを聞わけても給れかし、其とがの一つにいはく、香盤もりしとが、二つにいはく、持佛堂のほこりをはらひ申候とが、三つにいはく、火事まいらんとする折ふしにこゑたてしとがよりほかに、ほとけも照覽あれかし、身に覺へ、露もなくさぶらふとぞかたりける、だんなのいはく、それはみなしかるべきわざにして、とがといい

ふには侍らじとて、小僧と道々師匠をそしり〳〵、山寺へぞ參られける、さて師匠のまへにゆき、今度の小僧があやまりの義、御腹立いかにもかんにんして可レ給候、乍レ去小僧がかたる三个條、さしてとがとも申がたし、また別にとがもさふらふやらんといはれければ、師匠のいはく、これよりとがのなにかはさふらふべき、まづ香盤にて六時のつとめのきざみをしり侍るを、抹香つかみくべし一つ、たうとみ申持佛堂のほとりをはらひ申せと申付さふらへば、くりをはき申候はゝきにてはらひ申候一つ、四五里もへだてたる火事に、こゝもとより火出たるごとくのゝしりたる一つ、とかたられければ、旦那はじめは小僧がを道理と思はれけれども、また師匠の云分をきけば、其事はひとつなれども、其理非は天地雲泥のちがひあれば、あきれながら、やう〳〵わびごとをいたし、もとのやうに寺へ入れてぞかへられける、浮世の人の中のあしきをも、我ひいきなるかたの云分ばかりきゝて、すぐなる人をあしくおもひくらす有さまも、みなかくの如し、あつかひなどせんものは、兩方を能くきかではかなひがたかるべきか、かのかどをさぐりし心、たれもあるべきわざにや、

(二)ある人のいひしは、世にかしこだてする人、すましたがほする人ばかりにくきはなし、此たぐひの人は、上朝(かみてう)にありては、國の禮義をはぶき、下民(しもたみ)にまじはりては、それ〴〵の法をないがしろにする事也、あるひは下々のまつり、佛事などの儀式等をも、何はおごり、何はついへなどとかしこげに云ひまはせば、又十人が五人も、此かたに心をよせ侍るこそ、いたましきわざなり、すべて物毎についへ〳〵といひもて行ば、すべて佛神のまつりも皆ついへなり、もろこしには、地に香ばしき酒をそゝぎ神をむかへ、又芻狗とてわらにてけしのを作り、まつりのそなへとなしても、其後は、はこにもおさめず、道のかたはらにも捨をくたぐひ、日のもとにては禁中の年中御まつり、下々在々所々の神まつりいづれか、ついへにあらざるや、又七月の玉まつりのそなへは、まつり過ぎぬれば、あるは川へながし、またはをくり火とほこらかすも、猶ついへの上のついへなり、されども其ついゆる所が、まつりなりほどこし也、和漢共にまつりのそなへものは、下々にくだされて、朝廷にすこしもとゞめ

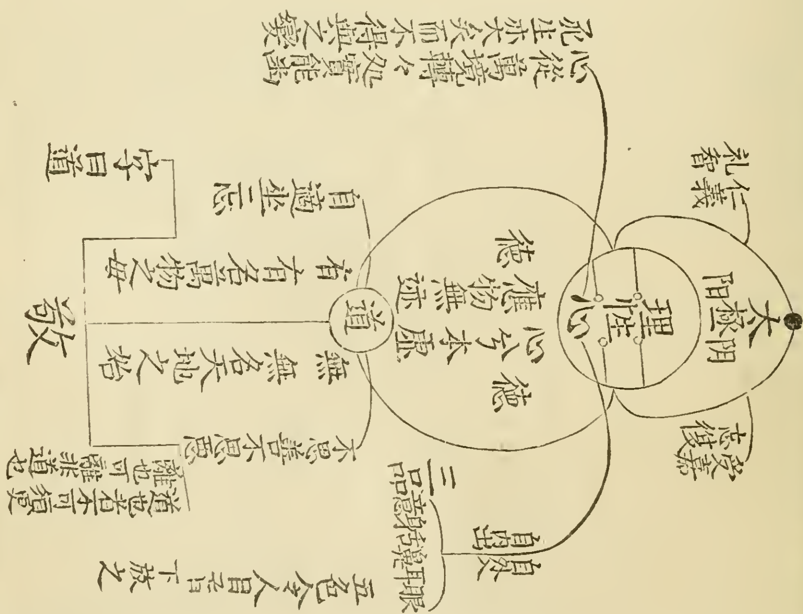
給はぬにてしるべし、神をまつるにも大唐には王族公卿大夫士庶人にいたるまで、それ〳〵のまつり奉る神と、まつり奉らぬ神とあると侍れど、あしびきの大和には、上天子より、下士民一切の草木國土に至る迄、天照太神の御めぐみを、かうぶらぬものはなければ、なべて此社をたうとみまつり申事也、されども其神をまつるに心持はあるべき事也、其心持とは、先我身のほどをしりていのり侍るべき也、もとより神は非禮をうけたまはずと、からの文にも見へ侍るなり、いかなるをか禮にあらぬいのりといふならば、かの季氏が泰山にやま祭せしは、一旦神をふかくいのるに似たれども、泰山のまつりは天子の御まつりなるを、季氏が大夫の身としてなしたるなれば、是孔子のふかくにくむ所にして、罪を聖門にうけ、そしりを後世にとる所也、よこしまなるまつりとは、人をのらう類なるべし、此やからは神のうけ給はぬばかりにはあるべからず、かへりて我身におひかぶりなんこそかなしけれ、おごりとはいかなるをかいふべき、其しなに當りては金銀を多くついやすも、さしておごりとはいふべからず、たゞせまじき事をするがおごりたるべき也、世話に、おごりては餅のかはをむくといふにてもしるべし、又葬禮の儀式も其しな〳〵にある事なれども、かの龍をほふりならひしたぐひなれば、今さしをき侍る、され共其心ざしはしらずんばあるべからず、むかし子游問二喪具一、孔子曰、稱二家之有亡一、子游曰有無惡乎齊、孔子曰、有毋レ過レ禮、苟亡矣斂二首足形一、人豈有二非レ之者一哉云云、此心は子游、孔子に喪禮の儀式をとひ侍りしに、孔子の仰られしは、其家の財のあるとなきとに叶ひて宜しきほどにせよと仰せられしを、子游重てとふていはく、人に貧富あればなにとしてか、其喪禮の儀式をひとしうはかり侍らんとたづねしに、孔子また仰られしは、たとひいかほどたのしきものといふとも、其くらゐより外の禮に過たるはせぬ事也、又ひんなる身といへども、其死人のかしらやあしなどのさながら見へぬほどにはせねばかなはぬと仰られし也、此の二つの心をもちてせば、たれか笑そしるものあらんとなり、もとより禮といふ字は人事之宜則と、先哲の注せられしも、宜則とは宜きのりと和訓すれば、是即中庸也、むかし黔婁といふ賢人死せしを、曾西といふものとぶらひに

まかりしに、まことにまづしき體にして、かばねをまどのもとにをきて、其に衾を一重かづけ侍りしに、誠に世話に事たらはぬことをかたぎぬよぎにするといへるやうに、かしらをかくせばあしあらはれ、あしをおほへばかしら見へ侍るを、曾西此ふすまをすみちがへにせば、あしもかしらもともにかくるべきと云たりしかば、黔婁が妻なみだをながしていはく、我夫は存生のときも道をたゞしく、心をすぐにもち、萬事たゞしくして、事足はぬ事をこのまれ侍りしあひだ、定めて苔の下にても、右のとをりなるべければとて、つゐにふすまをすみちがへにはせざりける、こゝろのうちこそすゞしけれ、これはあし手をさへろくろくにかくしあへざれども、世々の貧者の手本に、もろこし人も傳へ侍りき、又むかしより老いたるものは、人におくるに力をもつてせず、ひんなるものは人におくるにたからをもつてせずといふ事有、此心をくむときは、同じ佛神に信をとるにも、取やうのあるべき事也、病者なるもの老たるものなどは、あらき願などはたてまじき事なり、乍ㇾ去今は法印の僧都のといふもの、世にはいくわいして、神變を手にとるごとくにいひきかせ、よはき病者にも御符などとて、水にてのませなどすれば、かへりて病もおもくなれば、きづもなき佛神に御きづを付くる者なるべし、とかく佛道も神道も、其願や行やさゝげものよりは、信心が本たるべきものならんか、また喪禮などは、心のいたる所大事也、禮儀は有職者にもとひ侍れば、にたり、にたるにもなるものならんが、心はつねに机にもたれかゝらずんば、得がたからんか、乍ㇾ去もたれかゝりやうあしければ、充棟汗牛の書に眼をさらすといへ共、かへりてこゝろがひがみ侍るものなり、これ知恵いでゝ僞有りと、常に我李老君の眉をひそめ給ふ所也、たとへば名(めい)のものゝかたなほど、身をまもるによろしきものはなけれ共、もち所あしければ、其かたなのきるゝにしたがひて、手をきるもの也、昔より儒者佛者の論綿々として、はつる事もなき事也、それを今の世の小僧、又文字よみをするわこたちも聞習ひて、あたまに口あればいふにはゞからず、佛者よりはまづ儒者は三世の道理なければ、天命とのみ心得て、かねて因果の理にうきとそしり、儒者よりは佛者は、父をすて母をすてゝも菩提の道にならばおもむけとい

ふは、まづ五倫のわきまへざる所なりなど、其外いろいろの辯をなして、そしりおふこそ曲ものなれ、若佛者たち儒道をそしり度思しめしさふらはゞ、儒道をひとこなしに仕るやうを、をしへ申べし、其こなしやうはまづ、孔子ほど下人倫をあかし、上天理に達し、民を當世にすくひ、法を萬代にのこしてからに、さてきのふまでは孔子の道、右のくだんにいたしたれども、けふよりは何としても儒者は三世をしらぬによりて、佛道者になると仰られば、たれもみな其人の儒道をそしる事まことにすべし、そしるべき道さへ、露ほど、えをこなはひで、口ばかりにては、うそらしく思也、又儒者達も佛道を云ひけしたく思はれ候はゞ、彼大聖釋迦のやうに、結構なる王位、又宮室をも捨るほど無欲になり、一切衆生をめぐむ事を、子のごとくに思ひて後に、きのふまで佛道をこれほどにひろめて候へ共、なにと存候ても、佛道は五倫をみだるついへあれば、とかく今日より儒道を行ふと仰られ候はば、尤其云分も立こそ侍るべけれ、それがしが存じたる中にも、儒を專ら我うけもちのやうに、云聞かする人の有りしが、其物の本ばこには、一つ〳〵にあたごのふだをおし給ふにて、口にちがひたる行やと心おとりせられ侍る、是あたごの札のをしたるをあしきと云にはあらず、たゞ口と身とのちがひ侍るをいへるまで也、此ついでに病者などを佛神にいのると、いのらぬとのちがひめ、定業非業の事もゆめばかり語り申たく侍れども、わるうしては人の聞きまがはすところなれば、不調法なる云ひやうよりは、云はぬはいふにましてんと、まづ差置侍る、又今の御代は佛法はんじやうなれば、色々に宗旨もわかれ侍りて、自他是非の談義も多ければ、其旦那のいまだあくちもきれぬ衆の、我宗體の玉はみがき申さずして、辻小路にやすらひても、人の法に石うちこむたぐひは、法王にうつたへても、はつとにしたきものにや、乍レ去それも佛ゑんとなり申べきにや、又何の所見もなき僧法師の、そこの神の眞體、なにの佛かの佛とのめき〳〵も、めにしみ侍るもの也、すべて神は神とし、佛は佛としての信心しかるべきにや、此事むかしより、いとむづかしとつたへ侍る、さて又たうとき人のなぞ〳〵に、はづかしきものとかけられしを、御弟子達色々に思ひをめぐらし、からの、大和の、引(ひく)の山のふる事をもつて、

とき給へれども、つゐに其むねにかなひ侍らざりしを、終にとく人なくて、上人にあげられ侍れば、よくしんなき人ととかれしは、うけ給はり事にこそ、

(三)人の心はしらいとの、そめなす所まち〳〵にて、はかりがたきとはいひながら、又其はしにつきては、をのづからしりやすき所もありてん、やつがれ、此草子をなかばがきつかうまつりて、去人に餘所の作者の名をかりて見せ侍りしに、はじめ終りみていはれしは、よき事はよけれども、かやうの事つくるものこそ、其身はかならず、おこなひがあしきものなりといはれしかば、尤仰らるゝ通りにて、うき世はくらす物なりとこたへしかば、勝にのりて、其事を利口げにいはれしかば、やつがれ申侍りしは、其方の仰らるゝ事こそ賢きにゝて、身にうとき事はあらじと申侍りしかば、かの人のいはれしはいかなる事ぞや、少も覺えなきといはれしかば、やつがれがいはく、はや唯今の言葉、即一圓らちあき侍らぬ事なり、此草子を少もよき道理と思ひしり給はゞ、この作者といまだしる人にてもなきさきに、其行ひのあしからん事をあんじをきせんよりは、しかじ今までの御身のあやまちを



思ひしり、このたびよくあらたむるにはゞかりなからんにはといひしかば、尤申たりとて、我をゝられ侍しが、なをもいたりてあく心なるものは、ものゝ道理きくほどさかめにいるものなり、まことに下愚のうつるべからずともいひつべし、此の次にむかし多く人のあつまりて、色々の物がたりの次に、心の沙汰などいろ〳〵人のかたりしに、又そばなる人、なにやらん其道理はしかと覺え侍らねども、ちんぷんかんといはれししかたばなし、ゆめばかり覺え侍れば、其しかたを少まねして、こゝにしるし侍るべし、

(四)よく物をわきまへたるものも、時によりてあやまちはまゝ有る事也、又無方なる者も、ときにあひてはしたりがほなる事も有、二人ともにしあつる事も、またあやまつ時もあるを、とかくものはさだまらぬものなりなど、ひたすらに思取りて、はや牛も淀、をそうじも淀など、またはものしりの口にも、甘草はあまからんず、苦參はにがからんなどいひて、ものを同じやうにいひおとしたがる人こそ、ことやうなり、其たがひめは道にいたりて、廣大無窮なる事なれ共、まづ近くたとへをとりていはんに、こゝに膳部にたとへんに、其膳部我みぬときに、いかほどぶさたありとも、別にちんどくはいれまじければ、みぬがほとけなりとて、心よく味はんよりは、またよく其膳部こしらゆるをみて、なるほどきれいに萬事申付て、たべたるはまたはるかうへなり、豆がらをたくさへよく觀念をしたるうへからは、向上の工夫有り、まして少なりとも心得て、月花をみんにおいてをや、鳥なき里にこほもりといふことあり、何にても其道をしらぬ所には、ものはいひたきまゝなるものなり、たとひ其中に少々かしこきものありといへども、其かしこきもともにあはせてしらぬうちなれば、終にわけもなき法など信じこみて、物ぐるはしきもの有り、昔去人いなかへ金いろを音信にせられしに、此在所にはいまだ金色といへるものをえしらず侍りしにより、一在所一座にあつまり、此ものをなにゝならんとせんぎまち〳〵に及びけれ共、もとより名たるべき名もしり侍らねば、たゞ恍惚とおもぼれたり、其中にすこしかしこき人ありて、我等こそえしらずとも、寺の長老様は一切經をも常にそらんじ給ふときゝ侍れば、長老樣にたづね申侍るべきといふに、事きはまりてはや

御寺へつかひをたつる、長老使者に式臺して、はや在所へぞおもむかる、其席になりぬれば、一座各かうべを地につけ、先十念など給はりて、さて其後に件のかないろを取出し、これをみやこがたより音信にえ申侍るが、いかなる道具にてあるやらん、いまだ名をだにえしり侍らねば、貴僧にうかゞひ侍るとぞ申侍る、其時長老二つ三つ小うなづきして、これをの〳〵のえしり給はぬこそ尤なり、京には二三ケ年以前より、六角堂の辻風とておそろしきから風ふきて、此中も大佛のつりがねをも吹ちらし侍れば、洛中ともに其風をふせぎ侍らんために、神々へ立願などせしに、ある靈神の御夢想に、此頭巾をあたへ給ふ、其名を即ち神變奇特の頭巾とぞ申されける、其時又里人一同にふしんをなしてとふていはく、勿論頭巾はさる事にても候はんづれども、此上にそりはしのやうなるもの御座候はいかに、とこそなじりける、又長老のいはく、さればこそそれほどつよき風なれば、此頭巾をも取てゆくゆへに、そのためのひかへのほうあてなりとぞのべられける、又かたへなる人のいはく、勿論それもさる事なるべけれども、此くちばしのやうなるものに、口へあなのあき候はいかに、とこそとはれける、長老又いはく、これは人の物がたりをきく爲の、耳のあなのみちなりとぞいはれける、（易）又去かしこき人さしいで、さやうならば兩方にこそあるべきといはれしに、長老の曰く、其事也、兩方にありてはよねるときに、まくらにつかへ侍るゆへ、さてかた〳〵にあるといはれければ、一在所のもの感心して、かゝるめづらしきものを地下におさめをき侍らば、後のきこへもあしかりなんと、重々に箱をさして、長老をさきにたて國の守へぞ上にける、扨國のかみの廣間へつめかけ侍りけれ共、國のかみは御るすにて、しばしまちし間に、忠節の者なればとて御膳を給りけるに、くだんの神變奇特の頭巾に、汁を次て出ければ、一在所きもをけし、すべきそせう、しやうもなくなりて、在所へこそはもどりけれ、心のうちこそあはれなれ、これ今のよの人の分別がほする、在々所々のとしよりも、又たぶらかさるゝみちありて、生ぼとけにもならう〳〵とする人も、かのむかしの在所へかへりなば、廣間にありてかないろを見たるときのありさまにこそ、よくにるべくもあらんとぞ、おしはかり侍

る也、・

(五)しめやかにふるよひの雨に、おふとの油ちらめくほかげに、ひとり過ごこし方のうれしさもつらさも、いまのさびしさにとりそへ、又長き行末のかなしさ迄思ひおくれば、袖は猶かはきあへるいとまもなく、すがたなきもの丶事のみ、思ひがちにてかきくらしたる折ふし、嵐ならでは、露をとなふものあらじと思ふに、つま戸をたゝきそゝのかす聲なん聞ゆ、あやしがりて立出てたぞとゝへば、かの年頃とひ來らざりし人なり、いかにぞやつねにだに、をとづるゝ事もなきぬしの、そぼちては、かどたがへにやありなんなどくねるも、聞いれず、先戸ざしあけてんなどしのびやかにいへば、いざなひているも、にくからぬものから、わざとならぬ袖の香も、いとなまめかし、さてもろともに、こしかたのはかなさをも、うらなくいひ聞え、こよひさびしさに、何をもてあるじとせんなどいへば、わり子やうのものもて來れりとて、いとうつくしきさかづきとりもてよる、下部もはしためけるものも、其のつかふ人がらにや、いとしみ〳〵となつかし、昔よりかしこき人は、身に餘るうきふしをさへ、此さゝのはやしにわすれ侍るとかや、いひ傳へたり、まして袖につゝみ得ぬ折ふしなれば、物語りにつくるとも、筆かぎりあるものなれば、つくしてんや、そらもやう〳〵雲ちぎれ、はや月は山のはに出ぬれば、水はながれて石出にける、庭のまがきにおりのこしたる菊などの、露にそぼちきらめきあへるも、都こひしきわざにやはあらぬ、やつがれもこよひの月のおかしさに、そこはかとなく朗詠しあへれば、かたへなるきんのこと、手まさぐりてあはするも、うらむるがごとくしたう如くして、餘所に聞くともなみだぐむべし、月もやう〳〵にしになりゆけば、いざ下ひもゝときなましなどかたりあひて、すきまのかぜもいとふばかりに、千とせを契ると見しは、ゆめにてやぶれぬとかたり侍りき、なんぞこれのみ夢ならん、また大きなるゆめといふものありぬべきなれども、此大きなるゆめをしらぬといふも、又々夢なる事をしらずとて、年ごろ聞きふりにし物語りどもを、洛陽散人山岡元隣抱甕齋といへるさしかけにして、みぢかきふでにまかすれば、かたへなるわらはべのいひけらく、それそもたが身のうへなるべき、したりがほいと見

ぐるしといなべば、本より外を求むべきにもあらねば、誰が身のうへと名づけ侍るものならし、

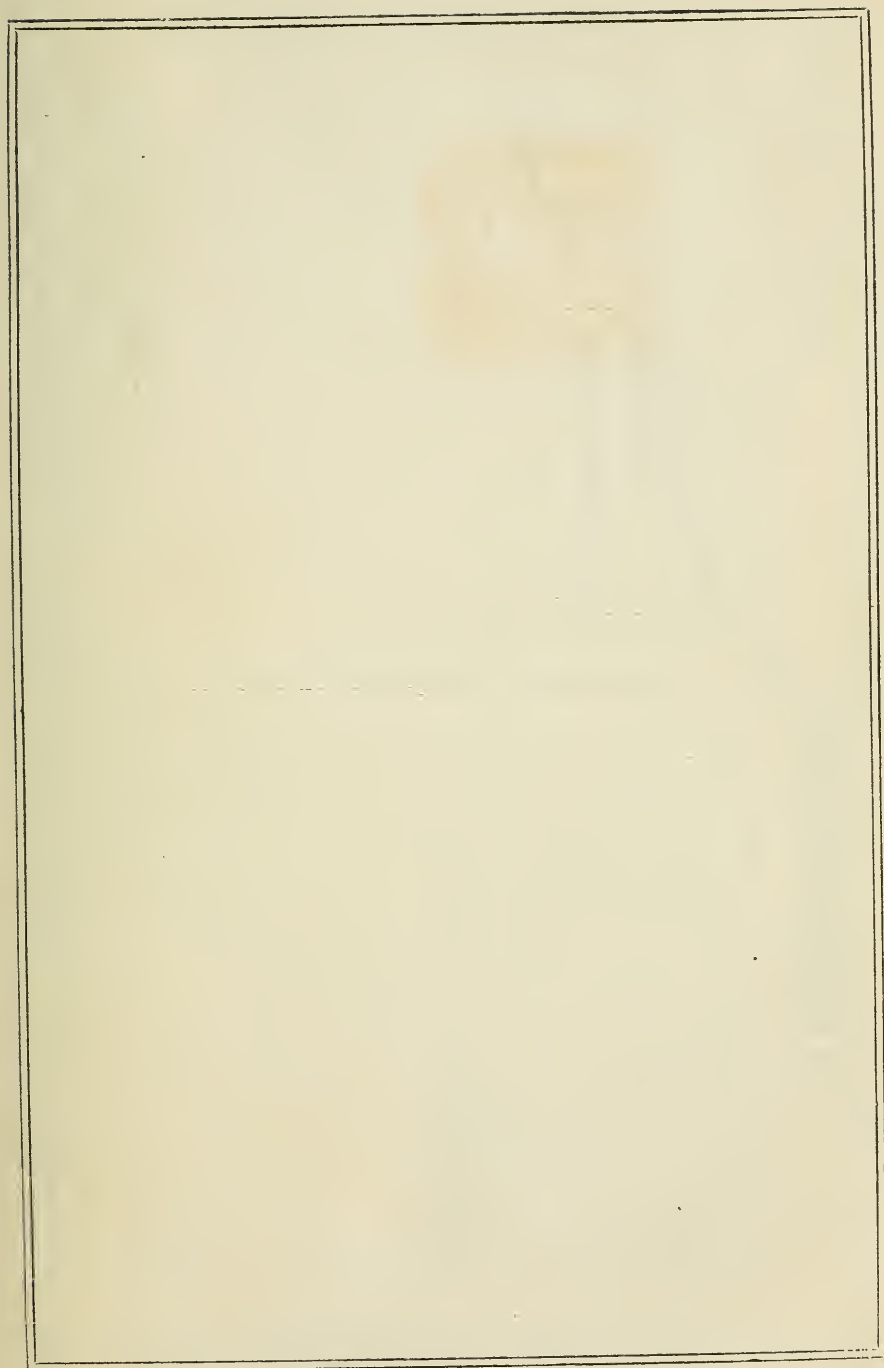
明曆貳年そんじやうその日

他我身のうへ第六 終

明曆三年丁酉正月吉日
寺町通圓福寺前之町
秋田屋平左衛門板行

近世文藝叢書第三 終

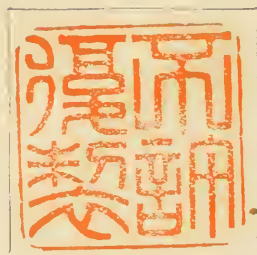
神戸龍治
文傳正興 校



明治四十三年九月廿五日印刷
明治四十三年九月三十日發行

（近世文藝叢書第三奥附）

非賣品



編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
早川純三郎

印刷者　東京市神田區蠟燭町八番地
武木信賢

印刷所　東京市神田區三河町三丁目四番地
武木印刷所